



# 日本漢文史

籍叢刊

第二輯

編年體

十四



上海交通大學出版社  
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第2輯, 編年體 / 孫錦泉, 周斌,  
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-10689-6

I. ①日… II. ①孫… ②周… ③粟… III. 日本—  
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—編年體 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2013)第 286686 號

日本漢文史籍叢刊 第二輯 編年體

主 編 孫錦泉 周 斌 粟品孝

副主編 陳小法 黎春林

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:1408 字數:28160 千字

2014 年 1 月第 1 版 2014 年 1 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-10689-6/K311-55

定價:35700.00 圓(全四十二冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 姜津津 陳建華

營銷編輯 陳 鑫

裝幀設計 陳燕靜

## 第二輯目錄

### 第一冊目錄（總第20冊）

日本書紀（卷一—卷三十、跋）……………

日本書紀通證（序、例言、總目、卷一—卷七）……………

### 第二冊目錄（總第21冊）

日本書紀通證（卷八—卷三十五）……………

日本書紀纂疏（序、卷一—卷二）……………

書紀集解（序、總論、卷一）……………

### 第三冊目錄（總第22冊）

書紀集解（卷二—卷三十）……………

釋日本紀（目錄、卷一—卷十一）……………

### 第四冊目錄（總第23冊）

釋日本紀（續（卷十二—卷二十八、跋）……………

續日本紀（目錄、卷一—卷二十八）……………

### 第五冊目錄（總第24冊）

續日本紀（續（卷二十九—卷四十、跋）……………

續日本紀考證（序、卷一—卷十二）……………

日本後紀（卷五、卷八、卷十二）……………

### 第六冊目錄（總第25冊）

日本後紀（續（卷十三、卷十四、卷十七、卷二十、卷二十一、卷二十二、卷二十四）……………

續日本後紀（序、卷一—卷二十、跋）……………

續日本後紀纂詁（序、凡例、卷一—卷十四）……………

第七冊目錄  
(總第26冊)

續日本後紀纂註	續（卷十五—卷二十）	.....	一
日本文德天皇實錄	（序、卷一—卷十）	.....	六九
日本三代實錄	（目錄、卷一—卷三十二）	.....	一八五

第八冊目錄  
(總第27冊)

日本三代實錄	續(卷三十三—卷五十、跋)	一九
日本紀略	(凡例、卷一—卷十四)	四九
日本逸史	(序、目錄、卷一—卷十)	四五

第九冊目錄  
(總第28冊)

日本逸史	續(卷十一—卷四十、考異)	.....	一
先代舊事本紀	(序、卷一—卷十)	.....	三六七
扶桑略記	(卷一—卷二)	.....	五〇七

第十冊目錄  
(總第29冊)

扶桑略記 (卷三—卷三十) ..... 三七三  
本朝世紀 (承平五年—安和元年) ..... 三七三

第十一冊目錄（總第30冊）

本朝世紀 續（寛和二年—久安四年）

第十二冊目錄  
(總第31冊)

本朝世紀 續 (久安五年—仁平三年) ..... 一  
 新刊吾妻鏡 (序、卷一—卷九) ..... 三〇七

第十三冊目錄（總第32冊）

新刊吾妻鏡 續（卷十一—卷四十四、卷四十五佚、卷四十六）

第十四冊目錄  
(總第33冊)

新刊吾妻鏡	續 (卷四十七—卷五十二、跋)	一二七
百練抄	(存卷四—卷十七)	四〇一
愚管記	(緒言、卷一—卷六)	四〇一



第十五冊目錄（總第34冊）

愚管記 續（卷七—卷二十六）

本朝通鑑（序、凡例、引用書目、目錄、卷一—卷九）

第十六冊目錄（總第35冊）

本朝通鑑 續（卷十一—卷三十）

第十七冊目錄（總第36冊）

本朝通鑑 續（卷三十一—卷四十九）

第十八冊目錄（總第37冊）

本朝通鑑 續（卷五十—卷六十六）

第十九冊目錄（總第38冊）

本朝通鑑 續（卷六十七—卷八十一、附錄一—三）

第二十冊目錄（總第39冊）

本朝通鑑 續（前編卷之上—卷之下、跋）

皇朝編年史（緒言、目錄、引用書目、卷一—卷三十四）

第二十一冊目錄（總第40冊）

皇朝編年史 續（卷三十五—卷七十三）

第二十二冊目錄（總第41冊）

皇朝編年史 續（卷七十四—卷九十八）

續史愚鈔（目次、序、卷一—卷二）

第二十三冊目錄（總第42冊）

續史愚鈔 續（卷三—卷二十）

第二十四冊目錄（總第43冊）

續史愚鈔 續（卷二十一—卷三十五）

第二十五冊目錄（總第44冊）

續史愚鈔 續（卷三十六—卷五十三）

第二十六冊目錄（總第45冊）

續史愚鈔 續 (卷五十四—卷七十一) ..... 一

### 第二十七冊目錄 (總第46冊)

續史愚鈔 續 (卷七十一—卷九十八、索引) ..... 一

國史纂要 (序、例言、目次、卷一—卷三) ..... 四三五

### 第二十八冊目錄 (總第47冊)

國史纂要 續 (卷四—卷十三) ..... 一

倭史後編 (序、卷一—卷三) ..... 二四五

烈祖成績 (序、凡例、目錄、引用書目、卷一—卷十三) ..... 二八一

### 第二十九冊目錄 (總第48冊)

烈祖成績 續 (卷十四—卷二十、跋) ..... 一

逸史 (自序、進牋、舊序、題辭、系表、參考書目、釋言、目錄、卷一—卷十二) ..... 一一九

昭代記 (卷一—卷七) ..... 四〇一

### 第三十冊目錄 (總第49冊)

昭代記 續 (卷八—卷十、跋) ..... 一

府朝事略 (序、書、自叙、引用書目、目錄、卷一—卷十二) ..... 五五

野史纂略 (序、徵引書目、卷一—卷五) ..... 三三九

大日本維新史 (序、凡例、卷上—卷下) ..... 四四七

明治新史 (序、卷一) ..... 四九七

### 第三十一冊目錄 (總第50冊)

明治新史 續 (卷二—卷八) ..... 一

皇朝小史 (例言、卷一—卷十) ..... 二六五

皇朝史略 (卷一—卷十) ..... 三九七

### 第三十二冊目錄 (總第51冊)

皇朝史略 續 (卷十一—卷十二) ..... 一

續皇朝史略 (序、卷一—卷五、跋) ..... 三五

續續皇朝史略 (序、參證書目、凡例、卷一—卷七、跋) ..... 一一九

國史略 (序、卷一—卷五) ..... 二七五  
續國史略 (序、例言、卷一—卷五、跋) ..... 四四五

第三十三冊目錄 (總第52冊)

續國史略後編 (序、例言、引用書目、卷一—卷五、跋) ..... 一  
續國史略三編 (序、例言、卷一—卷三、跋) ..... 一二一  
大日本史略 (序、繼續表、歷朝一覽、武家一覽、卷一—卷二) ..... 二一一  
國史略 (序、附圖、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七、跋) ..... 二八一

第三十四冊目錄 (總第53冊)

新國史略 (序、凡例、目錄、卷一—卷三) ..... 一

新國史略後編

國史略初編 (序、例言、卷一—卷五、跋) ..... 一〇七

國史略二編 (序、例言、卷一—卷五、跋) ..... 一三九

國史略三編 (序、例言、卷一—卷二) ..... 三四七

第三十五冊目錄 (總第54冊)

國史略三編 續 (卷三—卷五、跋) ..... 四六九

漢文近世史略初編 (序、例言、引用書目、卷一—卷三) ..... 九九

漢文內國史略 (附圖、序、凡例、目錄、系圖、卷一—卷五、跋) ..... 一七七

漢文日本略史 (引、凡例、目錄、卷一—卷三) ..... 三二三

萬國記注國史略 (序、凡例、引用書目、目次、卷一—卷三) ..... 四〇一

第三十六冊目錄 (總第55冊)

萬國記注國史略 續 (卷四—卷七) ..... 一

新撰國史略 (序、例言、目次、卷一—卷六) ..... 一五七

日本略史 (序、凡例、皇統表、卷一—卷三、跋) ..... 四二五

第三十七冊目錄 (總第56冊)

日本政記 (目次、卷一—卷十六) ..... 一

日本政記劄記正誤 ..... 二七一

日本政記摘注	(叙、例言、卷上—卷下、補、跋)	二九五
續日本政記	(序、凡例、引用書目、卷一—卷十)	三三三
第三十八冊目錄 (總第57冊)		
續日本政記	續(卷十一—卷十二)	一
近世日本政記	(序、例言、卷一—卷五)	四三
明治新撰日本政記	(序、例言、目次、系譜、卷一—卷九)	一七七
第三十九冊目錄 (總第58冊)		
明治新撰日本政記	續(卷十一—卷十二、跋)	一
江戶政記	(題、緒言、引用書目、系統表、職司表、卷一—卷六)	一二七
國史綱鑑	(序、義例、目次、卷一—卷十七)	二七三
第四十冊目錄 (總第59冊)		
國史綱鑑	續(卷十八—卷二十)	一
本朝通紀	(序、凡例、目錄、引書、前編卷一—卷二十五、後編卷一—卷十六)	五一
第四十一冊目錄 (總第60冊)		
本朝通紀	續(後編卷十七—卷三十)	一
霸略	(序、略例、卷一—卷三)	一五七
日本通史	(題字、序、凡例、目次、卷一—卷三十、附錄一、附錄二、跋)	一九三
第四十二冊目錄 (總第61冊)		
國史紀事本末	(題辭、序、目錄、卷一—卷四十、後序)	一
附錄		
日本紀年表		五三五
日本幕府將軍表		五四一

第十四冊目錄(總第33冊)

新刊吾妻鏡

續(卷四十七—卷五十二、跋)

百練抄

(存卷四—卷十七)

愚管記

(緒言、卷一—卷六)

一  
一一七  
四〇一

新刊吾妻鏡卷第四十七

康元二年丁巳

三月十四日，爲正嘉元年

正月大

一日 丁亥晴 堯飯相州御沙汰 御劔或藏前司

朝直 御調度 尾張前司時章

御行騰 出羽前司行義

一御馬 陸奥六郎義政工藤二郎左衛門尉高光

二御馬 下野四郎景經 長門三郎朝景

三御馬 城六郎顯盛 大曾祢上總三郎義泰

四御馬 武藤右近將監賴村同次郎兵衛尉盛時

五御馬 長井太郎時秀 平新左衛門尉盛時

堯飯以後將軍家御馬相州禪室亭 御行始相州禪室亭

東鑑四十七

供奉人下布衣

武藏守朝直

遠江前司時直

尾張左近大夫將監公時

前太宰少貳爲祐

秋田城介泰盛

和泉前司行方

佐々木壹岐前司泰經

上總介長泰

六位

陸奥七郎業時

武藏四郎時仲

一

尾張前司時章

刑部少輔教時

出羽前司行義

下野前司泰經

內藏權頭親家

大隅前司忠經

周防前司忠經

武藤少卿景賴

陸奥三郎時村

遠江太郎清時

東鑑四十七

二日 戊子晴 堯飯奥州禪門 御劔尾張前司時

章 御調度下野前司泰經

御行騰秋田城介泰盛

一御馬 遠江太郎清時 同次郎時通

二御馬 遠江七郎時基 備前三郎長賴

三御馬 肥後次郎左衛門尉 同三郎左衛門尉

四御馬 肥後上野太郎左衛門尉景經

同三郎景氏

五御馬 陸奥七郎業時 原田藤内左衛門尉

三日 己丑霽 堯飯右近大夫將監入道 御劔遠江前司

時直 御調度式部大夫時弘 權少貳景賴

長井太郎時秀

駿河藏人次郎經親

式部太郎左衛門尉光政武藤次郎兵衛尉賴泰

薩摩七郎左衛門尉祐能

小野寺新左衛門尉行通

錄田二郎兵衛尉行俊 武藤右近將監兼賴

錄田三郎左衛門尉義長

御引出物如例御劔刑部少輔教時 砂金右近大

夫將監公時

一御馬 陸奥七郎業時 安東藤内

二御馬 陸奥三郎時村 安保左衛門太郎

三御馬 相摸三郎時利 南條新左衛門尉

二

一御馬 武藏五郎時忠本間木上左衛門尉佐久  
二御馬 越後又太郎 肥田次郎左衛門尉  
三御馬 遠江次郎時道 出羽左衛門三郎  
四御馬 刑部少輔次郎 同三郎  
五御馬 相摸八郎時隆 山内左衛門四郎  
十三日 巳亥霽 酉刻 前伊豆守從五位下  
源朝臣賴定率年七十九  
廿五日 辛亥晴 伊賀散位從五位下藤原朝臣  
光宗法師法名光西率年八十

二月大

二日 戊午 將軍家御聚鶴置八幡宮先有御櫻  
親朝臣衣冠 能清朝臣候倍膳仲家為役送資茂

東鑑四十七

三

勤同手長其後寄御車於寢殿南面土御門中納言  
顯方卿候御簾御出自西唐門

行列

先前駈六人衣冠下  
赤塚藏人資茂

押立藏人資能 能登右近藏人仲家  
近江前司季實

備中右近大夫將監忠義 能登右近大夫重教

次殿上人七人東帶下  
一條侍從定氏

二條侍從雅有 六角侍從家基  
近衛少將公敦

紙屋河兵衛佐顯名 中御門侍從宗世朝臣

一條少將能清朝臣

次公卿四人直衣束帶相  
刑部卿宗教 前兵衛督教定  
仁和寺三位顯氏卿 土御門中納言顯方卿

次御車

梶原上野三郎景氏 隱岐二郎左衛門尉時清  
武藤次郎兵衛尉賴泰小野寺新左衛門尉行通  
太宰肥後左衛門三郎為成  
周防三郎左衛門尉忠行  
善次郎左衛門尉康有肥後六郎右衛門尉時景  
鎌田三郎左衛門尉義長 平賀新三郎雅時  
鎌田二郎兵衛尉行俊  
以上著直垂帶劍候御車左右

東鑑四十七

四

御劔役

刑部少輔教時

御調度

彌二郎左衛門尉親盛

次御後

五位十人布衣  
相摸式部大夫時弘 尾張右近大夫將監公時

少輔左近大夫將監佐房 備後前司康持

長門前司時朝 秋田城介泰盛

伊賀前司時家 縫殿頭師連

周防前司忠經 太宰少貳景賴

六位十三人布衣  
六位十三人布衣



陸奥六郎義政

武藏四郎時仲

長井太郎時秀

隱岐三郎左衛門尉行氏

肥後次郎左衛門尉為時

紀伊次郎左衛門尉為經

武藤右近將監賴賴

建立御車於赤橋下黃門候御簾重教獻御掛宗世

朝臣候御省兼領黃門取御裾尾下官御奉幣也

仁和寺三丁位進御幣

次御案上官御經供養有御聽聞

導師前馳人々取御布施政所寄人等為手

長也事訖還御

六日 壬戌晴 將軍家二所御精進始

十日 丙寅霽 二所奉幣御使者遠江守時直朝

臣進發

十四日 庚午天晴 遠江守自二所歸案

廿六日 壬午天晴 風靜今日午二點相州禪室

若公御名正於御所被加首服與州并御家人各下

著西侍於二棟御所有其儀到東障子設御座

若公著童裝束被著武州座下時尅將軍

家出御土御門中納言直方出二棟南面妻戶

踞廊根妻戶間向若公告召之由若公被案御前武

州被奉扶持之次賜御裝束御烏帽子退下於中御

同七郎葉時

遠江七郎時基

遠江太郎清時

善右衛門尉康長

濫谷左衛門尉武重

五

東鑑四十七

六

所西對渡廊立屏風被著所賜之御衣侍候持御

雜具先秋田城介泰盛持案烏帽子置進御前

子搦御簾進入之次壹岐前司泰經取打於亂簀太

率權少貳景賴役掛坏置掛箱已上作法如先次與

州起侍座經廊西緣被候切妻戶庇武州者為理髮

役被候簾中其外人々廊西南座列此上棟次武州

進理髮次新冠候御座前給御加冠次新冠三拜

次本役人等參進撤雜具武州出於簾中加于庭上

次黃門出自二棟南面上同西面御簾三箇間次進

物御劔武藏前司朝直御調度尾張前司時章御鑑

刑部少輔教時左近大夫將監公時御夫下野前司

泰經御行騰和泉前司行方

一御馬陸奥六郎義政

二御馬原田藤內左衛門尉宗經

三御馬相摸三郎時利南條新左衛門尉賴貞

次新冠給御劔自殿退出武州更堂上扶持之便被

著侍座次人々歸著同座有三獻儀次新冠御前共座武州已下加初

次預書下御名字時宗黃門給之被授武州

三月小

二日 戊子晴 相摸太郎殿始令參御所給故被

奉御馬置掛

十八日 甲辰 細雨降改元詔書到著去十四日  
改康元二年為正嘉元年

閏三月大

二日 丁巳晴 今日評議之時更被結番引付人  
數自來月朔以此來可行之由被定下云

一番 二日 十一日  
武藏前司朝直 出羽前司行義 縫殿頭師連  
清左衛門尉滿定 對馬左衛門尉仲康  
皆吉大炊助文章 水原兵衛尉孝宣

二番 七日 十六日  
尾張前司時章 筑前々司行泰  
衆河前司教隆 丹後守頼景

東鑑四十七  
長井太即時秀 明石左近大夫兼經  
進士次郎藏人 對馬左衛門二郎

三番 十二日 廿七日  
越後守實時 刑部少輔教時  
常陸入道行日 上総介長泰

大田民部大夫康宗 江民部大夫弘基  
長田兵衛太即廣雅 大藏四郎則忠

四番 二日 廿二日  
和泉前司行方 前太事少貳為佐  
那波左近大夫將監政茂 對馬前司倫長

山城前司俊平 甲斐前司家國  
山名中務大夫俊長 雜賀太即尚持

五番 七日 廿七日

秋田城介泰盛 伊勢入道行願

武藤少將景頼 信濃判官入道行一

中山城前司盛時 佐藤右京進

山名進二郎行忠 齊頭二朝俊

四月小

七日 壬辰晴 下野前司泰經於御所前申行御  
翰會之由申之

九月 甲午晴 申越御所御翰也露拂已後將軍  
家御布衣令立御下野前司泰經付煙鞠於雞冠木  
技進之行忠入道付之但内々被解之内藏權頭親  
家置之源中納言布衣難波刑部卿布衣上鞠一足

東鑑四十七  
中務權大輔教時同遠江七郎時基目内藏權頭親  
家同出羽前司行義同下野前司泰經

此外  
二條三位布衣遠江太即清時歌麿鎌田次郎兵衛  
尉行俊布衣行忠入道惟持里香數三古落中薩摩  
七郎左衛門尉祐能申計

仁和寺三位能清朝臣 範忠朝臣 範方等候見  
證抑今日二條三古著燭白地職而宗教朝臣難中  
云於此色者日來不用之如承元式者著有文燭草  
也頗不甘心云

十四日 巳亥晴 大慈寺殿敗壞此間被加修理  
以奉行藤肥前々司肥前松葉次郎助宗法師行願

等案會彼寺有供養日時沙汰可為六月十四日但為御聽聞有御出者可御亦違之由陰陽師等勘申之

十五日 庚子 相州禪室為果日來宿願以新寫紺紙金字大般若經一部被奉送皇大神宮云願文清書者禪室扶風疵令終功給緯依異于他也被付祭主隆通卿云

敬白 奉書寫紺紙金字大般若經一部六百卷

夫當五十鈴河上號有宗祠之弄勝代稱之磯最於八萬寶藏中號有教門之卓躋佛名之波若吾朝百王之元祖也欽戴甚自隆周之清廟三世諸佛之智

東鑑四十七

九

母也恢弘起自吾廣之貞觀是以肅敬是以攝莫於是弟子往年被冒病黑爾時綸發願念忽得除愈遂得安全者早寫即有空甚深之妙理奉貢一陰一陽不測之靈威宿霧涉歲雖非餘氣之快霽底露不空可謂一念之潛通是以華夏靜謐之時枝幹相應之佳景處任誠素敬致啟白六色第五之禁可惶付詞部以勸道儀諸經第一之說不妄驚神祀以期勝利弟子者義勇雖缺治略雖疎踈萌長鯨出海表瘡寮所念者波瀾之求罷仲仁風於寰中造次所羨者技條之不鳴年來在報國之忠今已遂道世之志清淨在身雖狀機務於來門之後縹緲奇眼只馳信心於栢城之邊彼杭州刺史之縵宿痾也偏善善因於無

壽之樂邦零陵太守之慕前事也送疑明信於不虞氏之尊廟愚魯所跋已越舊聞况畢妙典之為寶偶也每字皆管麗水之波色真諦之飭金書也遺文出於五源之風吟其金字六百軸云有壯麗之餘此縉襟三十人云合歌頌之聲緯是鄭重福不唐指仲願二所太神受服若華以增法樂伏乞三品太王仍莫者祭以保仙齡凡厥擁護國家者神之明德也我願廼在之富饒民黎者經之慧力也我願又在之云神云經盡納受素念無適無其必圓滿宿望然則百年無恙年々常遇有年之年庶事有成事々只閑無事之事都鄙懽樂子孫繁昌乃至功德之餘幽顯普利敬白

東鑑四十七

十

正嘉元年二月十五日 弟子沙彌道崇敬白

十六日 辛丑陰月蝕 不正見御祈

五月小

一日 乙卯陰 卯起日蝕不正見 丑寅 御祈

十八日 壬申陰 子起大地震 被下之

馳而茂朝臣兄弟七人連署助申惡動之旨庶賢申

吉功之由仍無沙汰被閣云

廿二日 丙子 安房又太即加小侍番帳目來者

為非番所令著到也

六月小

一日 甲申晴 御所旬御勤也為一條侍從定氏奉行催人々將軍家直衣令立御土御門中納言

刑部卿同上朝 前讀岐守忠時朝臣同

二條少將雅有朝臣同

小野寺新左衛門尉布衣申計三百

露拂

式部大夫右馬助 中務權少輔布衣

佐渡五郎左衛門尉 武藤左衛門尉布衣

三村左衛門尉同 鎌田三郎左衛門尉同

同次郎兵衛尉 幸嶋左衛門尉同

此外

左衛門尉行景

藤三位基朝 宗世等朝臣 太宰權少貳

周防前司已下數輩俟見證

東鑑四十七

十四日 丁酉 齋 太慈寺供養兼日雖被就今日

休未終修理之功延引云又德有一星令始行御新

等云

廿三日 丙午晴 已尅將軍家為御納原入御相

模太即殿山内泉亭御遊宴未尅小雨灑而彌催涼

風

將軍家

御騎馬

城四郎左衛門尉時盛式部太即左衛門尉光政

隱岐二郎左衛門尉時清

周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能

和泉三郎左衛門尉行章

武藤左衛門尉賴泰 善次郎左衛門尉康有

武藤左近將監兼賴 鎌田三郎左衛門尉義長

同次郎兵衛尉行俊 土肥四郎實經

以上候御駕左右

御後騎馬

刑部少輔教時 内藤權頭親家

遠江右馬助清時 尾張左近大夫將監公時

陸奥六郎義政 武藏左近大夫將監時仲

陸奥三郎時村 同七郎兼時

武藏五郎時忠 遠江七郎時基

秋田城介泰盛 遠江次郎時通

東鑑四十七

十二

和泉前司行方 武藤少卿景賴

丹後守賴景

加賀法印定清始行祈雨法云

廿四日 丁未 將軍家御逗留取明寺殿有御翰

會將軍家令立御人數

土御門中納言顯方 兵衛佐忠時

二條侍從雅有上朝 侍從定氏

刑部少輔政教 右馬助清時

左近大夫將監時仲

相州禪室以下見證數輩云

廿五日 戊申晴 將軍家還御

廿八日 辛亥 放生會隨兵以下被迴散狀云

七月大

一日 癸丑天晴 日中小雨 灑炎旱之間 加賀法

印奉祈雨事 昨自滿七箇日云

五日 丁巳 甘雨下自去二日 若官別當僧正被

修祈雨法云

八日 庚申天晴 以和泉前司行方為御使被遣

御馬御劍等於若宮別當坊奉仕祈雨法之後自五

日雨下同六七日甚雨也

十日 壬戌陰 六波羅飛脚衆著去五日承明門

院前御之由申之而任後三條院御時陽明門院之

例 上皇可為五箇日御服云

十二日 甲子陰 內藏權頭親家為使節上洛依

女院御事也

十三日 乙丑晴 入夜雨降於前濱鳥居邊任寬

高例被行風伯祭天文博士為親朝臣奉仕之

御使是立左衛門大夫布衣祭文草給祈廣範清書

左大臣法中嚴慧是為天下豐稔御祈禱也

八月小

一日 癸未晴 戊戌大地震

十二日 甲午陰 夕小雨降南風太慈寺供養之

間事肥前々司三井左衛門尉松葉入道等奉御相

伴陰陽師向勸奉行常陸入道行月家相談之時

晴茂廣賢以平文元等各以別紙勘申可有御方違

之由但以平申云日來太犯土備為寺家沙汰之由

東鑑四十七

十三

上者依御聽聞之儀有御方違太以不甘心云而至

供養者專為御沙汰無方違而有御出事尤可有其

憚之由衆儀給定云

十四日 丙申 對馬守氏信可為于明日放生會

御衆官供奉人數之由被仰出仍可相催之旨行方

傳仰於越州云

十五日 丁酉晴 夕雨降鶴置放生會將軍家御

出已下如例先陣隨兵

河越次郎經重 後藤壹岐左衛門尉基賴

城四郎左衛門尉時盛和泉三郎左衛門尉行章

出羽三郎左衛門尉行重

常陸次郎兵衛尉行雄

長井太郎時季

陸奥七郎葉時

次前駟

次御車

伊勢次郎左衛門尉行經

隱岐次郎左衛門尉時清

梶原上野三郎景氏 土肥四郎實經

肥後六郎左衛門尉時景 善次郎左衛門尉康有

大曾祢太郎長賴 肥後三郎為成

善左衛門尉次郎盛村 大須賀左衛門四郎

大曾祢上総三郎義泰 平賀新三郎維時

小泉左衛門四郎賴行 鎌田次郎兵衛尉行俊

東鑑四十七

十四



肥後四郎左衛門尉行定

以上直垂帶劔候御軍左右

御劔役人

武藏守朝直

御調度

武藤左衛門尉頼泰

次御後

五位下布衣

遠江前司時直

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

尾張左近大夫將監公時

武藏左近大夫將監時仲

民部大輔時隆

秋田城介泰盛

下野前司泰經

東鑑四十七

十五

長門前司時朝

和泉前司行方

日向守祐泰

上総前司長經

太宰權少貳景頼

對馬守氏信

石見守宗朝

六位下布衣

三浦式部太郎左衛門尉光政

上野太郎左衛門尉景經

薩摩七郎左衛門尉祐能

三村新左衛門尉時親

善右衛門尉康長

御並手長 武藤右近將監兼頼

後陣隨兵

武藏五郎時忠

駿河五郎通時

宇都官下野四郎景經

武石三郎左衛門尉朝胤

澁谷左衛門尉武重 足立太郎左衛門尉直

上野十郎朝村 周防四郎兵衛尉泰朝

千葉七郎太郎師時 大須賀新左衛門尉朝氏

御座迴廊之間相摸守政村武藏守長時武藏前司

朝直大隅前司親食下野前司泰經前太宰少貳為

依備後前司康持梶原上野前司景俊等被候其所

十六日 戊戌 甚雨將軍家御出鶴里未斜聊属

晴之間流騎馬等無為所被遂行之也

十七日 己亥晴 夕雨降有評議太慈寺供養之

間可有御方建御本所可為寢明寺之由被定之除

陽道申之太慈寺者自最明寺相當東方不可然云

仍日出前相伴輩登山山上紅方角可申左右之旨被

仰清左衛門尉満定安東左衛門尉光成等及晚内

藏指頭親家自京都歸來

十八日 庚子晴 未起満定光成并晴茂為親廣

竄已下陰陽師等參評定各申也今朝未明先登西

御門山于時發月在西日出東彼是紅方角自取明

寺指大慈寺相當辰戌最明寺永福寺相當卯酉次

到金谷山御所與前尾州時章名越亭見之南北

也先年辰方之由申之彼度不窮見數有沙汰

宣岐前司泰經藥師堂谷山莊可宜之由被定之

廿一日 癸卯霽 大慈寺供養曼荼羅供大阿闍

梨等事有評議人之意見雖不同任建長之例

東鑑四十七 十六

僧正賴兼安祥寺僧正良瑜若宮別當僧正隆辨於  
殿法印良基

大臣法印

家等也四人以

孔子廟可被定語彼書六部被遣本願聖靈右大臣  
家法華堂別當之許候修七箇日護摩之修可執進  
一合之由被仰下清左衛門尉為奉行次而文章事  
茂範朝臣可為其役之處經範卿服暇中而教  
其入仕先見令除服可書進敷之由雖申之了息秀  
才廣範既遂大業畢可被仰被朝臣之旨同被定之

廿三日 乙巳晴 戊戌大地震有音神社佛閣一

宇山崩人屋顛倒其地皆悉破壞所之

東鑑四十七

十七

地裂水漏出中下馬橋邊地裂破自其中火災出  
色青云今日大慈寺供養御布施事可致沙汰之由  
被下御教書於御家人等也

廿五日 丁未 雨降地震小動五六度為筑前次

御下御持僧并陰陽道之輩亦於長壽院可有造營  
之由同被仰太行事經數日師連壹岐前司基政備  
後市司康持等也又被定營雜堂本堂院前之殿  
明寺禪室御沙汰彌勒堂前武州五佛堂與州禪門

三事塔相州

廿八日 庚戌晴 法華堂之內合取進之披  
覽之趣二位僧正賴兼名字也仍自其聖以和泉前

司行丁六等權少貳等賴等可為太慈寺供養  
難供太阿閭梨相伴手詣衆八口可察勤之由被遣  
觸僧正云

九月大

四日 乙卯 小雨降申剋地震去月廿三日太動  
以後至今小動不休止依之為親朝臣奉任天地災  
變御使伊賀前司朝行云

十六日 丁卯晴 勝長壽院事始可為十九日之  
由被下御教書經殿頭前連為御使帶陰陽道勘文  
而當院別當宰相法印最信宿坊相觸造營問事一  
事以上可為寺家沙汰云其後寺奉行三位律師良  
明師阿閭梨禪信等衆與州禪門相州前武州等御

東鑑四十七

十八

亭諸堂支度事等申入之

十八日 巳巳晴 造營無魔障之樣可致祈念由  
被下御教書

供僧等仍自今日至造畢之期

供今日本尊開白加賀法印

勝長壽院造營事始

對馬前司倫長衆入

基政依病病申障諸堂雜掌

安東藤左衛門尉光成工藤三郎左衛門光泰已上

左衛門尉景經相州  
大之時越太工已下而布衣時衆上終始事終給祿

募匠等祿物事沙



物戊冠於勝長壽院行大土公祭明如牛一晴茂朝臣奉行之給銀劔一腰對馬前司倫長奉行之

廿四日 乙亥晴 依地震御所南方東方筑地壤

也來之月一日大慈寺供養以前即被筑地否有其

妙法召陰陽師被問方忌事其間彼輩有條之相論

為執廣寅等申云南御遊年方度之外無憚東大將

軍遊行之間被修補無憚本文先例分明也云晴賢

晴茂晴憲以平文元等申云是已大破也自根可榮

上之間可為大犯土不論大少可有憚云亦進光榮

有行泰親等朝臣勘文泰親者保元造內裏之時築

垣大將軍遊行之間可被修理之由載之而以平申

不被用往代之例近來可憚之旨有口傳云與州

東鑑四十七

十九

前武州出羽前司等有評議被止修復儀

廿日 辛巳 自寅尅雨降終日不休止未尅將軍

家入御壹岐前司泰經藥師堂谷山莊是明日大慈

寺供養可有御出之問為御方違也及晚相州禪室

為寫修理之觸渡御大慈寺常陸入道行日已下奉

行人等衆會西西南面河堰用相之問禪室仲云寺

若修治雖無怒在之儀河堰用相頗無念云則令歸

然要行日不及歸單留寺門塞止行河水召寄檜材

木此木行日招聚百餘人匠等改相河堰以檜造畢

供養可為明日之間取松明成其功也

十月大

一日 壬午晴 卯刻將軍家自泰經家還御令

大慈寺供養也當寺本堂丈六堂新阿彌陀堂釋迦

堂三重塔鐘樓等悉被加修理莊嚴之義殆軼古跡

曼荼羅供大阿闍梨三位僧正賴兼職衆三十口御

願文草給新廣範清書左大臣法印嚴惠御諷誦文

事采河前司教隆真人下布刑部權少輔政茂東

等未明參寺門奉行之庭上池南河自釋迦堂向至

丈六堂向東西行引慢當南門內開慢門又西者釋

迦堂西角至池河東者自丈六堂角至他河各南北

行引慢各慢中央開慢門今日供養堂塔皆為慢中

又當佛前東間池河立御誦經幢自慢門并池橋上

至佛前階際敷延道堂中每門懸彩幡華鬘備佛供

東鑑四十七

二十

燈明佛前西間為大阿闍梨座高臺東間以東北

折為大阿闍梨手讀衆座北間以東折為自餘衆

座又三井流為大阿闍梨之時不立散花札不敷堂

童子座云仍今日守其式西廊內備御聽聞所

三近習女房少々兼衆候然而御息所未御坐之間

不及被出几帳帷東廊內備執權御聽聞所丈六堂

西廊內敷御布施取公卿殿上人座公卿殿上人

中間廊設諸大夫坐紫錦已尅

將軍家御東帶御帶如

御出供奉人行列

先陣隨兵 二行

武田五郎三郎政經

小笠原十郎行

長井、太即時秀

遠江、次即時通

武藏、五即時忠

陸奥、七即葉時

遠江、七即時基

御車

隱岐、次即左衛門、尉時清善次即左衛門、尉康省

山、內三即左衛門、尉通兼

肥後、六即右衛門、尉時景

大見、肥後、四即兵衛、尉行定

小泉、左衛門、四即賴行

筑前、五即行重

善左衛門、次即盛村

各著直垂帶、列步御車、左右

御調度

武藤、次即左衛門、尉賴泰

御後、布衣

武藏、前司朝直

中務權、太輔家氏

刑部、少輔教時

武藏、左近、太夫將監時仲

秋田、城介泰盛

民部權、太輔時隆

丹後、守賴景

下、三即經經

三、三即長賴

新、三即時村

陸奥、六即義政

東鑑四十七

二十一

太宰肥後、三即為成

梶原上野、三即景氏

平賀新三、三即惟時

御、尾張、前司時章

越後、守實時

下野、前司泰經

相摸、式部、太夫時廣

越後、右馬、助時親

遠江、右馬、助清時

出羽、前司長村

和泉前司行方

上總、介長泰

石見、前司能行

周防、守忠經

備後、前司康持

式部、太即左衛門、尉光政

武、石三即左衛門、尉朝龜

鎌田三即左衛門、尉義長、鎌田次即兵衛、尉行俊

後陣、隨兵

三浦遠江、三即左衛門、尉泰盛

千葉、介賴宿

上野、五即左衛門、尉重光

遠江十即左衛門、尉賴連、常陸、次即兵衛、尉行雄

河越、次即經重

風早、太即常康

路次之儀、永福寺供養之時、於右太將家、法華堂前

三位、中將家被稅御駕、供奉人雖令下馬、今度不可

有其禮之由、兼日被定之次、到寺南門、稅御車、下御

右近、太夫佐房、役御榻土御門、中納言花山院、宰相

中將并殿上人等、豫參候寺門之外、是公卿殿上人

騎馬可供奉之由、雖有沙汰公卿、騎馬供奉親王、先

規不分明之間、被止其儀、於殿上人者、雖不可有其

難、為此儀者、公卿乘車可、扈從而關東之儀、御車之

外、依不被聽之、皆被止威儀、供奉仍如此、云云、右、御、

東鑑四十七

二十二

御用儀不吉次先陣隨兵入門外若池西河漸入御  
之後後陣隨兵又列于同東池南河次經池橋并從  
道及本堂廊東階等入御簾中此間黃門參進賜御  
御筵供奉五位六位祇候御聽聞所南庭御床次公  
卿殿上人經筵道若堂前座前之近衛司從等亂位  
階可在諸大夫上之由論之而今可任位次之中  
近衛將等自攝是則政茂為奉行之間於法會不可  
成違亂之故歟如位次者佐房少輔公數少將政  
茂判部少輔公連侍從雅有侍從也大夫判官泰清  
朱紋上野判官廣經白鶴警衛寺門下一點太阿閣  
梨三位僧正賴兼到南門外橋下之際遣手與丁士  
人等令後乘之到楊門之際執經越中前司賴業長

東鑑四十七

二十三

門前司時朝執蓋小山太郎左衛門尉等役又在  
掌中職衆悉行向庭道突鐘打鉢頌讚

職衆

寺幸相 法印權大僧都清尊

寺宮內卿 法印權大僧都房源

寺大輔 法印權大僧都尊遍

寺土佐 權少僧都實性

寺大夫 權少僧都聖尊

山伊豫 權少僧都性圓

權少僧都重賢

權律師經嚴

寺治部卿 權律師賴承

權少僧都長尊

權少僧都兼伊

權少僧都增慶

權律師長性

權律師隆禪

權律師慶尊

大法師定西

大法師靜禪

阿闍梨賴宴

大法師圓海

太阿闍梨賴珍

大法師良慶

太法師性舜

阿闍梨兼朝

太阿闍梨上堂御誦經鐘并法用訖之後被引御布

施於太阿闍梨錦被物并加布施御劍度取之

太阿闍梨御布施

阿闍梨尊榮

大法師賴圓

大法師定範

內供奉辨盛

阿闍梨真知

大法師賴珍

大法師快舜

大法師常照

東鑑四十七

二十四

法服一具在草橫被一帖水精念珠一連在銀上童

裝束二具童裝束四具被物九重錦裏

物一具精好縮世定白綾世定色々綾世定顯文

紗世定唐綾世定段計帳世定端織筋世定端紫染物三十

端紫村濃三十端縮村三十端染付三十端卷縮

三十疋估縮三十疋地白綾三十端淺黃染綾三十

段色皮三十枚世定白布三十段藍摺世定段

香三百兩綿三百兩御馬十疋供米北石御加布施

銀劍一腰入錦袋砂金百兩

御布施取

土御門中納言顯方卿

花山院宰相中將後雅

仁和寺三位顯長卿

二條三位教定卿

刑部卿 宗教卿

一條前少將能清朝臣

一條中將能基朝臣

中御門少將實承朝臣

中御門中將公寬朝臣

坊城少將公敦

六條侍從公連

二條侍從雅有

少輔左近大夫佐房

刑部少輔政茂

駿河新大夫俊定

前近江守季實

押立藏人大夫資能

伊達左衛門藏人親長

長井判官代泰茂

職眾御布施口別青峽一萬走八木十果

御調誦物與布百端

次撤御布施等常例被牽御馬之後可撤之歟然而

依別仰如此云次被牽御馬入陽門引立堂前上童

東鑑四十七

二十五

等請取之

御馬十疋 置

一鹿毛 前武州進

引手 肥後次郎左衛門尉為時

同三郎左衛門尉 同三郎左衛門尉進

二河原毛 相州釋室御進 隼足親三郎進

引手 隱岐三郎左衛門尉行景 同四郎行景

三鹿毛 武州進 武州進

引手 一宮善左衛門尉康長

善五郎左衛門尉康家 奧州御進 賴相州進

四鹿毛 引手 周防三郎左衛門尉忠行

五黑驥

同四郎左衛門尉忠泰

引手 薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎祐廣

六栗毛 城介進 武州進

引手 大須賀新左衛門尉朝氏

同四郎

七栗毛 足利三郎進 武州進

引手 筑前次郎左衛門尉行賴

同五郎行重

八鹿毛 前武州進 武州進

引手 大曾祢上總左衛門尉長經

同二郎左衛門尉義泰

九黑 筑前入道進 長井大郎進

引手 土肥次郎兵衛尉朝平

同四郎實經

十栗毛 長井大郎進 武州進

引手 塩谷周防四郎兵衛尉泰朝同五郎親時

還御及薄暮之間自塔過之邊取松明

十三日 甲午天晴 入夜雷電霹靂及終夜曉甲

斐太郎時參大曾祢上總前司長泰等為使節上洛

依山門圍城寺西門確執事也遠江十郎左衛門尉

賴連為內々御使進發如法揚鞭定進於兩人殿

二番

左 伊豫五郎

右 小野四郎

三番

左 荒作三郎

右 平次郎

四番

左 平土郎

右 安藤三郎

五番

左 荻園彌太郎

右 四郎太郎

十六日

丁酉晴

月蝕正見

四分御祈松殿法印

良基此間筑地修理無方忌之沙汰何様次第哉之

由將軍家直被尋仰御身固當番陰陽師為親而先

先無如然御沙汰之旨申之又仰云不可依先例於

東鑑四十七

二十七

京都此沙汰早可注進丈數為廿七丈之內者離

柳內御所可移御云仍為親南面者無憚東方廿七

丈之內可移御西對之由勘申之云

廿六日

丁未晴

前備後守從五位上三善朝臣

康持率云年五十一

十一月

八日

己未

大地震如去八月廿三月

廿二日

癸酉晴

丑尅若宮大路燒失藤次左衛

門入道家朱火花山院新中納言陸與七郎下野前

司內藏權頭式部大夫入道舊宅壹岐前司伊豆太

郎左衛門尉前縫殿頭文元等亭悉以至田樂辻

子火止

十三日

甲戌晴

酉尅後守實時朝臣息男於

相州禪室御亭元服號越後四郎時方理髮并後守

額景加冠相摸太郎七歲

廿四日

乙亥明半

平月御的射等被著定之越

後守被下奉書云

十二月大

六日

丙戌天晴

甲斐太郎天曾祢上総介等自

京都歸衆依山門園城寺等事去月為使節所令上

也

十二日

壬辰天晴

武藏國司子息官王聊病患

十六日

丙申

評定明春三嶋伊豆管根御衆請

事有沙汰仍任例為供奉注進人數可進覽之旨被

東鑑四十七

二十八

小侍所和泉前司行方傳仰云

十七日

丁酉

遠江十郎左衛門尉賴連自京都

歸衆先日兩使以前雖令入洛彼出京下向以後承

御返事仍衆著遲引云

十八日

戊戌

二所御衆詣供奉惣人數記陸奥

掃部助付和泉前司行方令進覽之處件人數者悉

可加催促之由云仍以之用散狀所被仰也先々就

御點催其衆今度儀似被始例云

廿三日

癸卯晴

立春御方違二棟御所西端自

御痕所相當坤方云

廿四日

甲辰天晴

當衆人數之中或可然之仁

其要樞之輩始被結番麻衆此事以仙洞之儀波



模關東之條煩可有其憚歟之由被仰合于和州禪  
室就被答申之篇以內藏權頭親家遠江十郎左衛  
門尉賴連等爲御使內々被窺觀慮所有勅許亦侍  
之參昇可爲何樣哉之趣同申之於其境至被嫌思  
食侍者人數定不足歟之旨被仰下之云緋已嚴重  
之間以近衛將以下等爲番頭故添御震筆令書御  
簡御折紙所被用唐紙也此間有珍事賴連爲使節  
可被載名字於番頭脇不然若無所望由頻訴申之  
有沙汰被聞之次伺見衆結番事雖被定置之此一  
兩年其衆自然解緩之間今日更被撰爲厚族被定  
之云

東鑑四十七

二十九

廟御所。一日一夜結番事

一番 子午

一條 少將

上野 三郎

陸奥 六郎

出羽 次郎 左衛門尉

壹岐 三郎 右衛門尉

二番 丑未

阿野 少將

武藏 五郎

薩摩 七郎 左衛門尉

小野寺新 左衛門尉

相摸式部 太夫

大隅修理 亮

備前 三郎

筑前 三郎 左衛門尉

城五郎

相摸 三郎

後藤壹岐 前司

式部 太郎 左衛門尉

城四郎 左衛門尉

三番 寅申  
鎭田 三郎 左衛門尉

中御門 少將

遠江 七郎

刑部權太輔

和泉 三郎 左衛門尉

出羽 七郎

四 卯酉

公泉 少將

新相摸 三郎

安和 三郎

壹岐新 左衛門尉

東鑑四十七

城六郎

五番 辰戌

二條侍從

內藏權頭

武藏 左衛門尉

周防 五郎 左衛門尉

武藤本近 將監

六番 巳亥

刑部 少輔

遠江 七郎

上野 太郎 左衛門尉

肥後 三郎 左衛門尉

一官次郎 左衛門尉

尾張 左近 太夫將監

新田 三河 前司

出羽 三郎 左衛門尉

常陸 兵衛尉

平賀新 二郎

越後 右馬助

武藏 八郎

佐渡 五郎 左衛門尉

加藤右衛門尉

三十

大泉 九郎

陸奥 七郎

前采女 正

隱岐 二郎 左衛門尉

上総 三郎 右衛門尉

土肥 四郎

武藏 本近 太夫將監

秋田 城介

伊勢 次郎 左衛門尉

駿河 藏人 次郎

下野四郎 大曾孫左衛門太郎  
右守結番次第第二日一夜無懈怠可勤仕之狀依仰所定如件

正嘉元年十二月日

伺見衆結番事

一番子午

城四郎左衛門尉

塩谷周防四郎兵衛尉

二番丑未

隱岐三郎左衛門尉

太宰肥後三郎

東鑑四十七

三番寅申

小山七郎左衛門尉

士肥四郎

四番卯酉

城六郎

薩摩七郎

五番辰戌

後藤壹岐左衛門尉

狩野左衛門四郎

六番巳亥

幸嶋小二郎左衛門尉

牧左衛門二郎

右守結番次第無懈怠可勤仕之狀依仰所定如件

正嘉元年十二月日

廿九日 己酉 那波刑部少輔周防五郎左衛門尉善次郎左衛門尉平賀新三郎等被加三所御金

請供奉散狀記先度依書漏也云今日被結番御金

子番云

定

御格子上下結番事次第一

一番

刑部少輔敦時 武藏左近大夫將監時仲

備前三郎長頼 內藏權頭親家

城六郎顯盛 大隅修理亮久時

東鑑四十七

三十二

筑前二郎左衛門尉行頼

出羽二郎左衛門尉行有

隱岐三郎左衛門尉行氏

一宮二郎左衛門尉康有

二番

相摸式部大夫時廣 武藏五郎時忠

駿河左近大夫 伊勢二郎左衛門尉行經

和泉二郎左衛門尉行章

城中六郎左衛門尉時業

出雲二郎左衛門尉時光

梶原上野三郎景氏

對馬太郎頼氏

鎌田三郎左衛門尉義長



三番

尾張左近大夫將監公時 駿河五郎通時

能登左近藏入仲家 下野四郎景經

壹岐新左衛門尉基賴院前 三郎左衛門尉行實

出羽三郎左衛門尉行實

式部太郎左衛門尉光政

大須賀新左衛門尉朝氏 平賀新三郎維時

四番

遠江右馬助清時 武藏八郎賴直

長井判官代泰元 城五郎重景

隱岐二郎左衛門尉時清常陸二郎兵衛尉行雄

上總三郎左衛門尉義泰 加藤左衛門尉景經

東鑑四十七

三十三

薩摩七郎左衛門尉祐能 大泉九郎長氏

五番

越後右馬助時親 遠江二郎時通

小山出羽四郎時朝 義作兵衛藏入長教

壹岐三郎左衛門尉賴經

遠江十郎左衛門尉賴連

武石四郎左衛門尉賴氏

肥後新左衛門尉景茂

小野寺新左衛門尉行通 土肥四郎實經

六番

陸奥六郎義政 同七郎業時

足利三郎賴氏 佐渡五郎左衛門尉基隆

上野五郎兵衛尉重光 氏家左衛門尉經朝

武藤次郎左衛門尉賴泰

周防五郎左衛門尉忠景

山内三郎左衛門尉通光

鎌田次郎兵衛尉行俊

右寺次第各無懈怠可參勤之狀依仰所定如件

正嘉元年 十二月日

新刊吾妻鏡卷第四十七

東鑑四十七

三十四

新刊再妻鑑卷第四十八

正嘉二年 戊午

正月大

一日 辛亥天晴 堤飯相州澤室御沙汰 兩國司

被候大祀其外著座于庭上東西

西座

武藏前司

尾張前司

遠江前司

越後守

刑部少輔

陸奥六郎

越後四郎

陸奥七郎

出羽前司

下野前司

那波刑部權少輔

和泉前司

東鑑四十八

長門前司

丹後守

江石見前司

秋田城介

長井太郎

筑前次郎左衛門尉

彈正忠

對馬前司

後藤壹岐前司

上野介

日向守

佐々木對馬守

武藏少卿

大田馬部大夫

清左衛門尉

蕃左衛門尉

城五郎左衛門尉

同六郎

城彌九郎

肥後次郎左衛門尉

同三郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉

出羽三郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

下野四郎

常陸次郎兵衛尉

筑前四郎左衛門尉

武藏左近將監

武藤次郎左衛門尉

上野太郎左衛門尉

波多野出雲右衛門尉

後藤四郎左衛門尉

長門守

大曾祿左衛門七郎

山内三郎左衛門尉

東鑑四十八

土肥四郎

對馬三郎

東座

中務太輔

相摸式部大夫

遠江七郎

相摸三郎

尾張左近大夫將監

民部權大輔

遠江次郎

武藏五郎

武藏八郎

式部太郎左衛門尉

武石左衛門尉

肥後三郎左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

澁谷太郎左衛門尉

筑前五郎左衛門尉

後藤臺岐新左衛門尉

加藤右衛門尉

長又太郎左衛門尉

上総介

伊賀式部兵衛次郎

佐渡五郎左衛門尉

二 梶原上野三郎

宇都宮石見守

越後右馬助

駿河五郎

武藏左近大夫將監

遠江右馬助

上総三郎

備前三郎

越後又三郎

遠江修理亮三郎

新田參河前司

小輔左近大夫  
島山上野三郎  
嶋津大隅前司  
嶋津大隅前司  
藤肥前之司  
石見前司  
河内式部太夫  
白河出雲權守  
那須二郎  
少輔小止助太即  
安藝左近藏人  
長片判官代

小山出羽前司  
越中前司  
桑河前司  
近江前司  
周防守  
周防修理亮  
備中判官代  
押立左近太夫  
表作左近太夫  
赤塚藏人  
宗掃部助  
和泉三郎左衛門尉

東鑑四十八

三

東鑑四十八

得河左近大夫  
皆吉太炊助  
大隅式部太夫  
信濃藏人  
宗民部大夫  
後藤四郎左衛門尉  
紀伊次郎左衛門尉  
進三郎左衛門尉  
豐後新左衛門尉  
紀伊三郎左衛門尉  
平里左衛門尉  
善次郎左衛門尉

駿河藏人次郎  
大隅修理亮  
大隅太炊助  
安藝掃部太夫  
佐藤民部太夫  
鎌田左衛門尉  
薩摩七郎左衛門尉  
萩野新左衛門尉  
周防三郎左衛門尉  
善五郎左衛門尉  
藤肥前三郎左衛門尉  
大隅式部丞

東鑑四十八

四

東鑑四十八

遠江太炊助三郎  
後藤彌四郎左衛門尉  
隱岐次郎左衛門尉  
鎌田三郎左衛門尉  
津戶新民部丞  
鎌田新左衛門尉  
和泉二郎左衛門尉  
那須左衛門尉  
大隅四郎  
河内太即  
出雲三郎  
加治中務左衛門尉

周防四郎左衛門尉  
大須賀新左衛門尉  
大田四郎左衛門尉  
長田左衛門尉  
周防五郎左衛門尉  
鎌田次郎兵衛尉  
萩原右衛門尉  
齊藤右馬允  
大須賀四郎  
周防五郎  
肥後四郎兵衛尉  
藤田新左衛門尉

齊藤五郎左衛門尉  
豐前四郎左衛門尉  
葛西又太即  
大多和新左衛門尉  
河野右衛門四郎  
金子平左衛門尉  
阿保左衛門三郎  
阿保左衛門四郎  
平賀彌四郎  
豐前八郎左衛門尉  
越前五郎  
豐前宮内左衛門太即

宇間左衛門尉  
平賀新三郎  
得野五郎左衛門尉  
小泉五郎  
阿保次郎左衛門尉  
河内左衛門太即  
高水左近三郎  
黑澤太即兵衛尉  
藤六郎  
山内兵衛三郎  
雅樂左衛門太即  
大泉九郎

大氣新左衛門尉 備中右近大夫

和泉七郎左衛門尉 長門二郎

時尅將軍家出御 御東常 土御門中納言上 堀藤御

武藏前司朝直 御弓筋尾張前司時章

御行騰者 越後守實時

一御馬 遠江七郎時基 工藤次郎左衛門尉 高光

二御馬 陸奥七郎業時 南條新左衛門尉

三御馬 新相摸三郎時村 安東刑部左衛門尉

四御馬 城四郎左衛門尉 時盛 同五郎重景

五御馬 出羽三郎左衛門尉 行資 同七郎行賴

二日 壬子齋 為御行給供奉仰小侍所書注昨日著庭人數申下御點和泉前司行方奉行之今日

東鑑四十八

堀藤奧州禪門沙汰御簾土御門黃門

御行騰者 尾張前司時章 御調度 下野前司泰經

一御馬 新相摸三郎時村

式部太郎左衛門尉 光政

二御馬 武藏五郎時忠 同八郎賴直

三御馬 肥後次郎左衛門尉 為時

同三郎左衛門尉

四御馬 堀原太郎左衛門尉 景經

同三郎景氏

五御馬 陸奥七郎業時 原田藤内左衛門尉

堀飯之後將軍家御行給相州禪室御亭

供奉人 布衣下着

五位 武藏前司朝直 持御 尾張前司時章

遠江前司時直 越後守實時 刑部少輔教時

越後右馬助時親

尾張左近大夫將監公時 遠江右馬助清時

武藏左近大夫將監時仲 中務權太輔家氏

秋田城介泰盛 出羽前司行義

下野前司泰經 後藤壹岐前司基政

和泉前司行方 桑河前司賴氏

上総前司長泰 內藏權頭賴家

武藏少卿景賴 丹後守賴景

東鑑四十八

六位

相摸三郎時利 遠江七郎時基

備前三郎長賴 陸奥七郎業時

足利上総三郎滿氏 長井太郎時秀

出羽次郎左衛門尉 行有

式部太郎左衛門尉 光政

佐渡五郎左衛門尉 基隆

周防五郎左衛門尉 忠景

隱岐次郎左衛門尉 時清

武藏次郎左衛門尉 賴泰

和泉三郎左衛門尉 行章

薩摩七郎左衛門尉祐能  
常陸次郎左衛門尉行雄

一官次郎左衛門尉康有

加藤左衛門尉景經

鎌田三郎左衛門尉義長

御遊以後被獻御引出物役人

御釧 刑部少輔敦時 砂金

羽 秋田城介泰盛

一御馬 相摸三郎時利

工藤三郎左衛門尉光泰

二御馬 備前三郎長賴

工藤次郎左衛門尉高光

東鑑四十八

三御馬 筑前次郎左衛門尉行賴同五郎行重

及晚勝長壽院惣門四足上棟也元無門始被建之

縫殿頭師連向其所大工着布衣賜御馬御衣等今

日爲天火日之由雖有嫌申之輩亦有宥申之族被

遂之云

三日 癸丑天晴 埃飯相州御沙汰

昨御釧越後守實時

御調度 左近大夫將監公時

御行膳沓 和泉前司行方

一御馬 陸奥七郎業時 稻津左衛門尉

二御馬 備前三郎長時 廣河五郎左衛門尉

三御馬 越後四郎時方

四御馬 伊賀三郎左衛門尉實清  
式部太郎左衛門尉光政

伊賀左衛門三郎朝安

五御馬 新相摸三郎時村

糟屋左衛門三郎行村

六日 丙辰 御的始射事內之被定人數雖何

箇度撰舊勞可被用之旨有相州彈定嚴命而知久

右衛門五郎者雖爲多年勤仕射手當時在信濃國

仍今度被漏風記之虞諷方兵衛入道蓮佛今引之

間定可蒙上之由就舉申被書載云蓮佛去比遣飛

脚於彼國云

射手風記

東鑑四十八

滋谷左衛門太郎 橫路左衛門次郎

平新左衛門尉 本間彌四郎左衛門尉

諏方四郎兵衛尉 工藤彌三郎

周枳兵衛門四郎 橫溝彌七

知久右衛門五郎 萱間左衛門二郎

置本新左衛門尉 小嶋彌次郎

七日 丁巳 來十日依可有御奉幣于鶴里八幡

宮爲供奉人進覽埃飯間著到申下御點所被相

其衆也

雖載彼著到漏御點人々

武藏五郎 上總三郎

越後又太郎 出羽七郎

那波刑部少輔

對馬守

攝津大隅前司

梶原上野介

上総太即左衛門尉

長門三郎

周防三郎左衛門尉

長井判官代

梶原上野三郎

同七郎左衛門尉

同十郎

東鑑四十八

肥後次郎左衛門尉

善右衛門尉

筑前四郎左衛門尉本自故

紀伊次郎左衛門尉

内藤豐後三郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

平賀新三郎

善兵衛太即

澁谷左衛門尉

出雲權守

後藤四郎左衛門尉

阿波左衛門次郎

江石見前司

周防守

縫殿頭

石見守

越中四郎左衛門尉

大隅修理亮

同五郎左衛門尉

備中右近大夫

和泉六郎左衛門尉

薩摩九郎

大須賀新左衛門尉

九

同三郎左衛門尉

善五郎左衛門尉

同五郎

山内三郎左衛門尉

太宰肥後左衛門三郎

將野五郎左衛門尉

土肥左衛門尉

内藤肥後三郎左衛門尉

長又太即左衛門尉

大多和左衛門尉

此内後日又少之有御點云

八日 戊午天晴

被行評定始相州武州人々出仕給其後有心經會將軍家御出二棟御所

十日 庚申天晴

將軍家御發鶴吧官御出行列

前駐八人下

赤塚左近藏人資茂

押立左近大夫資能

差作左近大夫泰朝

備中右近大夫將監景氏

少輔左近大夫將監佐房

次殿上人下

尾張侍從清時

次 堀小路兵衛佐忠時

中御門中將公寬朝臣

刑部卿宗教

仁和寺三位賴氏

土御門中納言顯方

次御車

周防五郎左衛門尉忠景

隱岐次郎左衛門尉晴清

山内三郎左衛門尉通康

土肥四郎實經

肥後三郎左衛門尉

備中判官代定忠

安藝掃部大夫親定

近江前司季實

薩摩十郎公貞

將野左衛門四郎景茂

大泉九郎長氏

坊城少將公敦

一條中將能基朝臣

二條三位教定

花山院宰相中將長持

二條侍從雅有

東鑑四十八

十



新三郎維時以上直帶

武藏前司朝直

御調度

武藤次郎左衛門尉賴泰

御後

五位下布衣

相摸式部大夫時廣

刑部少輔數時

越後右馬助

尾張左近大夫將監公時

武藏左近大夫將監時仲

民部權大輔時隆

中務權大輔家氏

出羽前司行義

小山出羽前司長村

桑河前司賴氏

東鑑四十八

十一

和泉前司行方

長門前司時朝

內藏權頭親家

後藤壹岐前司基政

日向前司祐泰

丹後守賴景

上總前司長泰

太宰少貳景賴

六位同前

相摸三郎時利

陸奥七郎兼時

備前三郎長賴

遠江七郎時基

佐渡五郎左衛門尉基隆

下野四郎景經

長井太郎時秀

出羽次郎左衛門尉行有

梶原太郎左衛門尉景經

式部太郎左衛門尉光政

壹岐新左衛門尉基賴

薩摩左衛門尉祐能

二宮次郎左衛門尉康有 加藤右衛門尉景經

伊勢次郎左衛門尉行經

鎌田三郎左衛門尉義長

同次郎兵衛尉行俊

武藤左近將監兼賴

此外

遠江次郎

官寺藏人

以上兩人雖不被催推案云

十一日 辛酉 被撰定御的始射手已上十三人

二五度也而藤澤左近將監時親與本新兵衛尉

重方被番之處重方遲案之間以橫溝七郎五郎忠

光為時親合手重方自後之五度射之

一番

東鑑四十八

十二

二宮彌次郎時元

知久左衛門五郎信貞

二番

小笠原彦次郎政氏

橫路左衛門次郎長重

三番

平新左衛門三郎賴經

加久帳小次郎

四番

周枳兵衛四郎賴泰

小嶋彌次郎家範

五番

多賀谷彌五郎重茂

橫溝彌七郎

六番

藤澤左近將監時親

橫溝七郎忠光

七番

藤澤左近將監時親

橫溝七郎忠光



置本新兵衛尉重方員外郎五度不引之

十五日 乙丑 於御弓場有御弓始射手十人

五度射之而山城三郎左衛門尉近忠者兼日不被

仰之間被撰定之時雖小承臨期被召加之今年依

小可然射手也為弓箭而目云

一番

二宮彌次郎時光十 橫路左衛門次郎長重

二番

山城三郎左衛門尉近忠

知久左衛門五郎信真

三番

藤澤左近將監時親多賀谷弥五郎重茂

東鑑四十八

十三

四番

周枳兵衛四郎賴泰十 橫溝彌七忠景

五番

置本新兵衛尉重方 小嶋彌次郎家範

十七日 丁卯霽 丑越秋田城介泰盛其繩宅失

火南風頻扇越藥師堂後山到壽福寺惣門佛殿庫

裏方丈已下堀内不殘一字餘炎新清水寺靈堂并

其邊民屋若宮寶藏同別當坊等燒火

廿日 庚午天晴 勝長壽院御塔改本在所以東

山麓為其所

廿一日 辛未天晴 勝長壽院諸堂居礎云

廿二日 壬申 若宮御影堂并雪下別當坊等上

庚

廿四日 甲戌 勝長壽院四足脇門造畢自明日

廿五日為二月節之間被終急速營作云

廿七日 丁丑 殊御祈被奉御劍於二所太神宮

豐前彈正忠奉行之

二月大

八日 戊子 若宮御影御正體等連御云

十三日 癸巳天晴陰 不定今日奉為故中武州

十三年御追福於最明寺被始行七箇日五種行相

州禪室為法主殊令致丁寧給云

十八日 戊戌天晴 勝長壽院諸堂塔婆柱立也

武藏前司朝直朝臣被監臨云

東鑑四十八

十四

十九日 己亥霽 最明寺五種行今日結願導師

信承法印被供養普賢菩薩像并法華經二部内一

部者灑聖靈遺札為真文料紙第一卷者法主手自

書寫給之已下七卷者課習弘誓院亞相室手跡之

筆故以被終其功是則云法主云聖靈令好彼風情

給之故也唱導言語詳而委述其旨趣結緣細素皆

喉咽云

清和天皇崩御之後東御息所御戀慕悲歎之餘

灑朝夕所被進之數百合 勅書被書寫若干大

小乘經橋贈納言廣相草御願文載同心契戀蓮

花偈匪石詞入鏤字門云句云薄墨色紙經始例

於此時古今雖事異其志已相同乎

廿五日 乙巳霽 將軍家二所御精進始為浴潮  
御申赴御濱出御水干土御門大納言水干武州相  
摸太郎殿武藏前司朝直左近大夫將監公時陸奥  
七郎業時修理亮久時攝津權守等供奉  
廿八日 戊申天晴 將軍家御濱出御中御堀今日  
有評議將軍家明年可有御上洛事也仍可存知其  
旨之由觸仰諸國御家人等云

三月小

一日 辛亥天晴 辰赴將軍家二所御進發初度  
著淨衣入々行列和泉前司行方為奉行隨兵行列  
平三郎左衛門尉盛時奉行之  
行列

東鑑四十八

十五

先陣隨兵十二騎懸總轡

三田小太郎跡子息 葛西四郎太郎

大胡太郎跡

太胡掃部助太郎

小林二郎跡子息

小林小三郎

木村五郎跡子息

木村四郎左衛門尉

佐貫左衛門尉跡子息

安藝大炊助

肥前七郎

向田小太郎

香山三郎左衛門尉

瀧口左衛門尉

千葉太郎左衛門尉

天野左衛門尉

次御引馬

三走

次御弓袋差 著腰卷

九嶋弥太郎久經

次御甲著 伊豆藤三郎保經

次御曾持

門居彌四郎行

次御小具足持

彌三郎守近

次御調度懸

又鶴九

次御油

次御先達

權少僧都善道

東鑑四十八

十六

以上騎馬

次御駕 御律衣

周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能

加藤左衛門尉景經

山内三郎左衛門尉近康

肥後四郎左衛門尉行定

鎌田三郎左衛門尉義長

滋谷太郎兵衛尉

土肥四郎實經

狩野四郎景茂

以上步行

武藤左衛門尉賴素

肥後三郎左衛門尉急成

小河新左衛門尉

同新左衛門尉

鎌田次郎兵衛尉行俊

平賀新三郎維時

御後騎廷鞞

土御門中納言頭方卿

武藏前司朝直中務權大輔家氏

防與七郎葉時相並

越前守時廣備前三郎長賴相並

內藏權頭親家太宰少貳景賴

桑河前司賴氏相並

筑前次郎左衛門尉行賴安藝左近大夫親經

肥後次郎左衛門尉為時相並

阿曾沼小次郎光經伊勢次郎左衛門尉行經

山內藤內左衛門尉道重

善五郎左衛門尉康家相並

東鑑四十八

十七

采女正忠茂朝臣

前陰陽太兄晴茂朝臣

桑河前司教隆大隅修理亮久時相並

次小侍所司

平里左衛門尉實俊

次

武藏守長時相模太郎相並

次侍所司

平三郎左衛門尉盛時

次後陣隨兵十二騎相並

行方大膳行方中務五郎  
眞壁孫四郎

豐嶋兵衛門尉豐嶋四郎太郎  
內匠藏人太郎

大河戶兵衛太郎伊勢三郎伊北小太郎

國分彦五郎品河右馬允

多比郎小次郎鬼窪又太郎

求野次郎太郎自身忍小太郎

三日 癸丑 鶴置法會舞樂如例無奉幣御使

六日 丙辰 甚南北風烈吹亥冠將軍家自二所

還御十日 庚申天晴 鶴置三月會釋童等依召桑御

所於鞠御蠶施舞曲

十九日 己巳 於鶴置寶前被修諸神供云

廿日 庚午 終日甚雨有評定將軍家明年依可

有御上洛供奉人以下事被經群儀且致用意且為

東鑑四十八

十八

令相觸子細於御家人筆所被下御教書於諸國守

護人也其書樣

明年正月可有御上洛存其旨可被相觸其國御

家人等且土民依此役不可逃散若有其金者早

可令糾返狀依仰執達如件

正嘉二年三月廿八日

武藏守  
相模守

某殿

今日相當前武州禪室御後室第三年遠忌於建長

寺被供養一切經導師道隆禪師也相州禪室相州

武州已下結縁人々滿堂上

廿三日 癸酉霽 故武州經時十三年佛事被供

春佐々目谷塔婆導師壽福寺長老悲願房朗譽

四月大

十九日 戊戌天晴 未起勝長壽院三重塔一切經藏等上棟將軍家密々入御房朝女土御門中納言豫被候前武州等追被衆入出羽前司下野前司秋田城介已下衆會入濟々焉工等姉列居本堂前大工給御馬三疋置御衣三衣等引頭辨長等給一疋置一領及薄暮還御  
廿一日 庚子天晴 京都飛脚到着申云去十七日卯起奉振日吉神輿三基於縫殿陣口警固之輩鏢諸門之間取御正體投入築垣內是圍城寺戒壇事依可有勅許也

東鑑四十八

十九

廿二日 辛丑 申刻地震  
廿五日 甲辰 小雨灑勝長壽院塔上九輪今日相摸三郎時利十一歲嫁小山出羽前司長村娘  
廿六日 乙巳霽 勝長壽院并諸堂等舉棟入五月節之間而々取松明沙汰之及曉更終其功前武州被監臨

五月小

二日 辛亥天晴 於評定所被召陰陽道之輩勝長壽院供養日可有御出如去年太慈寺供養之時可有御方違否被尋仲之以平申不可有之由晴茂爲親國經晴憲晴宗申可有御方違之旨廣資泰房申云去年太白方與太將軍方計會今度太將軍方

許也此方者有供養之例可有御氣色云亦將軍依可有御上洛於六波羅可被新造御所之由有其沙汰被召勘文晴茂爲親晴憲令連署勘申之

東鑑四十八

二十

五日 甲寅 甚雨御方違事被經沙汰陰陽道兼日取方角勘申之間來廿九日可有入御尾張前司名越山庄新善光之由被定之則被觸仰其旨於前尾州云亦勝長壽院供養之儀可爲曼茶羅供大阿闍梨事任以前兩寺供養之例以採被定之安禪寺僧正良瑜若官別當僧正隆辨日光法印尊家松册法印良基在太臣法印嚴惠被出此五人交名納五合兩被遣于右大將家法花堂別當事範僧都修七固日護魔之後可取進一合之由被仰含而所取進之良基法印也仍遣御使可爲曼陀羅供御導師之由被仰之  
六日 乙卯 去一日日吉神輿歸坐本社之由云  
八日 丁巳霽 尾張前司山庄被新造檜皮葺屋已下數字五月管作之例雖無之將軍家依可有入御終其功云今日遠江七郎時基頓病已他界之由風聞之間名越邊物念但少時復本云  
九日 戊午天晴 將軍家依可有御上洛任先規六波羅可被建御所之由治定被充諸國地頭御家人等今日被施行之  
十日 己未 鎌倉中并國々雜人沙汰事被定法是可仰付丰人并在所地頭事也其事書樣

一錄倉中并國々雜人沙汰事

奉行人奉書三箇度不叙用者可被成御教書又被狀雖及三箇度不事行者於引付尋明子細事實者可注申所領之由可被成御教書次難治事同於引付可有其沙汰矣

十四日 癸亥天晴 去十日事書為令守旨自相

州御方被送遣問注所政所云寂阿奉行之又鶴置寶藏造畢之間今日被奉納神寶云

廿八日 丁丑天晴 勝長壽院五佛堂本尊等奉渡新造堂中則始行法云

廿九日 戊寅霽 將軍家御方達尼張前司山莊刑部少輔教時越後守實時民部大輔時隆已下數

章供奉

六月大

一日 己卯 小雨降將軍家還御之後和泉前司

行方進勝長壽院供養日供奉人散狀於武州云被奉御所之處猶可催加人數之由被仰下之間被相觸其旨於越後守云

二日 庚辰霽 越後守依武州之命持參四日供

奉人加増散狀於御所以土御門黃門同申人數用捨并行列事之處於用捨者被計下之至行列者可

為武州計之由被仰下越州歸案東亭申此由而猶可同申之旨依被命越州又雖披露此趣御返事同

前仍相州武州越州定行列進入之但為御所御計

之由可召仰供奉人等之趣武州密々被仰云  
三日 辛巳 上野三郎國氏被差定明日御出陣  
其之處依所勞身之申障云

四日 壬午天晴 風靜今日勝長壽院供養也是  
茶羅供太阿闍梨松殿法印良基

織聚三十占

權大僧都定宗

權少僧都寬位

權少僧都聖尊

權少僧都定憲

權少僧都慈曉

權少僧都淨禪

權少僧都印教

權律師尋快

權律師成遍

權律師賴承

權律師良明

權律師靜宴

權律師圓審

權律師禪遍

權律師定寶

權律師信成

權律師賴承

權律師良顯

權律師定撰

權律師慶專

法宗信

已講能海

阿闍梨專審

阿闍梨行秀

阿闍梨禪信

阿闍梨源尊

大法師定宜

阿闍梨源重

大法師圓全

大法師定顯

御願文右京權大夫茂範朝臣清書左大臣法印

嚴惠法會奉行參河前司教隆下獄刑部權少輔政

茂東常參拂曉院內饗會場已討將軍家渡御

東鑑四十八

二十二



御前供奉人

行列

先陣隨兵

武田五郎三郎政經

長井太郎時秀

新相摸三郎時村

陸奥七郎業時

遠江七郎時基

御軍

隱岐次郎左衛門尉時清

周防五郎左衛門尉忠景

肥後四郎左衛門尉行定

東鑑四十八

二十三

山内三郎左衛門尉通廣

平賀新三郎惟時

大曾祢左衛門尉長賴

大泉九郎長氏

已上著直垂帶劔候御車左右

御調度

武藤左衛門尉頼泰

御後

越後守實時

刑部少輔敦時

民部大輔時隆

出羽前司時行

小笠原六郎三郎時直

備前三郎長賴

武藏五郎時忠

相摸三郎時純

陸奥六郎義政

肥後右衛門尉為成

善左衛門次郎盛村

持野左衛門四郎景茂

中務權大輔家氏

左近大夫將監公時

下野前司泰經

秋田城介泰盛

石見前司能行

壹岐前司基政

信濃守泰清

石見守宗朝

小野寺新左衛門尉行通

筑前四郎左衛門尉行佐

式部太郎左衛門尉光政

山内藤内左衛門尉通重

紀伊次郎左衛門尉為經

鎌田次郎兵衛尉行俊

後陣隨兵

城四郎左衛門尉時盛

東鑑四十八

二十四

相馬五郎左衛門尉胤村

淡路又四郎左衛門尉宗泰

武石三郎左衛門尉朝胤

常陸次郎兵衛尉行雄

長江八郎四郎景秀

到政所前式部太郎左衛門尉光政落馬仍不及仕

奉歸私又筑前左衛門尉行佐背行列圖連左

鎌田兵衛尉行俊而引下打馬次於勝長壽院大門

稅御車下御土御門中納言襄御簾花山院宰相中

將候御傍中務權大輔家氏役御攝兵衛尉行俊

左近大夫將監公時進御查手長小野寺新左衛門尉行通黃門取

和泉前司行方

對馬守氏信

周防守忠經

修理亮久時

阿曾沼小次郎光經

肥後左衛門尉政氏

加藤右衛門尉持景

千葉七郎太郎師時

相馬七郎太郎師時

千葉七郎太郎師時

千葉七郎太郎師時

千葉七郎太郎師時

千葉七郎太郎師時





司次郎基廣

五日 癸未霽 筑前四郎左衛門尉行佐山內藤  
內左衛門尉通重等被止出仕是昨御出路次供奉  
之間并被定下之旨依有監吹事也

九日 丁亥 來十一日依可有入御最明寺殿今  
日所被催供奉人也尾張左近大夫將監自六四日  
小野寺新左衛門尉治兩人許申障其外進奉

記之後駿河右近大夫若相右也如此供奉散狀可  
達覽之由知泉前司行方內之觸申越後守之處以  
不被加之云

十一日 己丑天晴 未起將軍家八御山內最明

東鑑四十八

二十七

寺御亭

供奉人

土御門中納言

相模太郎

刑部少輔敦時

陸奥六郎義政

新相模三郎時村

武藏五郎時忠

和泉前司行方

後藤臺政前司基政

武藤少卿景賴

以上諸而

花山院宰相中將

越後守時弘

相模三郎時利

同七郎葉持

遠江七郎時基

桑田前司賴氏

秋田城介泰盛

內藏權頭親家

城四郎左衛門尉時盛

信濃次郎左衛門尉時清

上総三郎左衛門尉義泰

周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能

肥後三郎左衛門尉為成

鎌田三郎左衛門尉義長

常陸次郎兵衛尉行雄

鎌田次郎兵衛尉行俊

以上步行

十二日 庚寅陰 夕雨降於山內有遠笠懸刑部

少輔敦時相模三郎時利新相模時村武藏五郎時

東鑑四十八

二十八

忠已下十騎馳之

十三日 辛卯 雨降已起屬晴今日於最明寺有

競馬

十四日 壬辰天晴 申起將軍家自山內還御

十七日 乙未 來八月鶴里放生會御參官供奉

人事為申下御點昨日自小侍所如例注趣人數

付武藤少卿景賴之處稱所勞返遣小侍所間今日

被付進武州早可申沙汰之旨領狀云其記書樣

相模太郎

武藏前司

同五郎

同左近大夫將監

同六郎顯盛

大曾祢左衛門太郎

武藤右近將監兼賴

大泉九郎長氏

同三郎

同左近大夫將監

尾張前司

遠江前司

同右馬助

陸奥六郎

新相模三郎

刑部少輔

足利上總三郎

備前三郎

駿河四郎

越後又太郎

三浦遠江新左衛門尉

那波刑部少輔

式部太郎左衛門尉

前太宰少貳

越後守

同七郎

中務權太輔

遠江七郎

越前七郎

越後右馬助

同五郎

民部權太輔

三浦介六郎左衛門尉

長井判官代

同兵衛次郎

小山出羽前司

東鑑四十八

二十九

島山上野前司

出羽前司

同七郎

秋田城介

同四郎左衛門尉

和泉前司

上總介

同三郎左衛門尉

同四郎

式部六郎左衛門尉

武藤少卿

越中前司

同三郎

同三郎左衛門尉

丹後守

同三郎

同六郎

同三郎左衛門尉

同太郎左衛門尉

下野前司

尾張權守

伊東六郎左衛門次郎

同次郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

伊賀前司

後藤壹岐前司

大隅前司

日向守

同三郎左衛門尉

對馬守

新田桑河前司

同太郎左衛門尉

江石見前司

同三郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

千葉介

石見守

同新左衛門尉

同修理亮

周防守

同五郎左衛門尉

內藏權頭

梶原上野前司

同三郎左衛門尉

長門前司

信濃守

同四郎左衛門尉

攝津大隅前司

東鑑四十八

三十

縫殿頭

風早太郎

阿曾沼小太郎

上野五郎左衛門尉

河越次郎

相馬次郎兵衛尉

後藤次郎左衛門尉

武藤右近將監

淡路又四郎

伊東八郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

同三郎

武石三郎左衛門尉

太宰次郎左衛門尉

千葉七郎太郎

小田左衛門尉

大曾權左衛門太郎

同五郎左衛門尉

土肥左衛門四郎

鎌田次郎兵衛尉

出羽彌藤次左衛門尉

小野寺新左衛門尉

足立太郎左衛門尉

天野肥後新左衛門尉

田中右衛門尉 茂木左衛門尉

常陸太郎左衛門尉 同八郎左衛門尉

同修理亮 佐々木孫四郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉 同九郎

伊勢次郎左衛門尉 同藤肥後六郎左衛門尉

大須賀新左衛門尉 同四郎

堀屋周防兵衛尉 善左衛門尉

同五郎左衛門尉 得野五郎左衛門尉

武田五郎三郎 小笠原六郎三郎

十八日 丙申 武州申下供奉人御點被遣越後

守之許牧野太郎兵衛尉為中使云右御點布衣左

長照隨兵短點帶劔云

東鑑四十八

三十一

十九日 丁酉 放生會供奉人事始被催云

廿四日 壬寅 近自寒氣如冬天

七月小

四日 辛亥 善六左衛門次郎可載加于放生會

供奉人散狀之旨被仰下行方為奉行今日將

軍家令始百日御鞠給人數

土御門中納言 顯方卿 花山院宰相中將長雅

刑部卿宗數卿 前兵衛佐忠時朝臣

刑部少輔敦時 右馬助清時

上野五郎兵衛尉廣經 同十郎朝村

賢寂申計云

今日評定差各字入質券所領事其

所知行之仁可致其償與之由被定云泉又太郎君

人義信與安房四郎賴經相論下野國朽本卿事賴

經以彼卿依入質券已被付給人畢然者任傍例如

一倍之定於百貴文錢者早可沙汰凌義信云

十一日 戊午 相摸太郎殿聊違例之間被修祈

禱等云

十五日 壬戌 御所當座御歌合云

十八日 乙丑 相摸太郎殿不例無殊事云

廿二日 己巳 日向守祐泰漏今度供奉人數訖

是去年十月大慈寺供養之時依運衆不供奉今年

六月勝長壽院供養日者又補所勞不衆如此間自

然相漏與殊周章申越後守之趣就御點相催許也

東鑑四十八

三十二

非私計之由返答

廿三日 庚午 祐泰所勞平減之上者可供奉歟

之由達行方之間御供奉事承畢可存其旨之由載

返狀送其狀於越州此上者申可供奉之由越州重

云此狀全非恩許所見者祐泰重越遣內藏權頭親

家云投返狀又遣其狀於越州之處問答如前云去

年御堂供養違衆今年又所勞依如不慮事定被處

懈緩之故不被催歟之由頻數申之云

廿四日 辛未 相馬孫五郎左衛門尉能村辭申

今度供奉事是若病相侵每事有煩之上募于來九

月九日定役流鑄馬可勤仕放生會流鑄馬之由俄

後仰下之聞臨期奔營計會云

廿九日 丙子 祐泰供奉猶周章云。

八月大

一日 丁丑 暴風烈吹甚雨如渡昏黑天頗快晴

諸國田園悉以損亡云。

五日 辛巳 甚雨六波羅御所御移徙事有評議

陰陽道進日時勘文晴茂為親晴憲等連署

六日 壬午 日向司祐泰可加布衣人數之旨

被仰下之間武藤少卿景賴達奉書於越州云

八日 甲申 官寺藏人政負者為前駙預催促之

改加布衣人數之由頻所望仍今日於武州御方

及其沙汰人數為不足者被加之條何事有哉不然

東鑑四十八

三十三

者強難被召具之由云而進奉之輩治定分已披露

之上者不足御許容云

十五日 辛卯雨降 鸛置放生會將軍家御衆宮

供奉人行列

先陣隨兵

武田三郎政經

千葉介賴胤

大隅修理亮久時

武藏五郎時忠

相模三郎時利

周防五郎左衛門尉忠景

式部兵衛次郎光長

小笠原三郎政直  
相馬孫五郎左衛門尉胤村  
常陸次郎兵衛尉行雄  
備前三郎長賴  
新相模三郎時村

上総三郎左衛門尉義泰 城六郎顯盛

内藤肥後六郎左衛門尉時景

土肥四郎定經 一官次郎左衛門尉康有

肥後四郎左衛門尉為成

狩野左衛門四郎景茂 大泉九郎長氏

平賀四郎泰定

以上帶劍車垂依御車左右

御叙役人

武藏守朝直

御調度

武藏次郎左衛門尉景泰

御後

東鑑四十八

三十四

五位

遠江前司時直

越前守時弘

尾張左近大夫將監公時

武藏左近大夫將監時仲

中務權太輔家氏

壹岐前司基政

内藏權頭親家

周防前司忠經

信濃前司泰清

六位 布衣下拵

陸奥七郎業時

佐渡五郎左衛門尉基隆

越後守定時  
刑部少輔敦時

下野前司泰經  
和泉前司行方  
縫殿頭師連

上野前司長泰  
日向前司祐泰



式部太郎左衛門尉光政  
梶原太郎左衛門尉景經  
小野寺新左衛門尉行通  
臺岐新左衛門尉基賴  
上總太郎左衛門尉長經  
城四郎左衛門尉時盛  
肥後次郎左衛門尉為時  
鎌田三郎左衛門尉義長  
御手長 武藤右近將監賴村  
鎌田次郎兵衛尉行俊  
後陣隨兵

東鑑四十八

民部權太輔時隆

三浦介六郎賴盛

足立太郎左衛門尉直元

下野四郎景經

薩摩七郎左衛門尉祐能

上野五郎兵衛尉重光

阿曾沼小次郎光經

大須賀新左衛門尉朝氏

伊東八郎左衛門尉祐光

於迴廊藤中覽樂相州武藏前司朝直大隅  
前司親貞江石見前司能行上野前司宗俊等候御  
前云

十六日 壬辰

雨降將軍家御祭鶴置宮寺馬場

流鋪馬以下儀如例事終還御相州禪室自御棧敷  
令還給之後及康燭之期伊具四郎入道歸山内宅  
之處於建長寺前被射殺訖著蓑笠令騎馬之人相

具下部一人馳過伊具左方自田舍桑鎌倉之人  
之由伊具所從等存之落馬之後知中矢之旨云塗  
毒於其鐵云

十七日 癸巳天晴

依伊具殺害之嫌疑勇諷方

刑部左衛門入道所被召預對馬前司氏信也平内  
左衛門尉俊輔入道孫 康賴牧左衛門入道等同意

令露顯云是昨日件兩人會合于諷方終日傾敷塚  
疑閑談而諷方同知伊具歸宅之期白地起當座馳

出路次射殺之後又如元及酒宴云今日被相尋之  
處差昨自會眾為證人依論申子細又被問兩人各

一旦承伏云此殺害事人推察不可單之處以諷方  
舊領被付伊具之間確執未止歟其上云箭束云射

東鑑四十八

三十一

樣已指馬頗越普通所為依之嫌疑御沙汰出求云

十八日 甲午天晴 諷方刑部左衛門入道被召  
置之雖被加推問敢不承伏所本執仍召取所從男

之主人已令獻白狀畢爭可論申哉之由奉行入雖  
盡問答件男云丰人者兼而願亂問之耻辱仍申歟

於上蘭之身著更不痛其恥任實正所論申也但主  
人白狀之上不及重御問歟云

十九日 乙未陰

今月七日御立坊當帝御弟之

由今日自京都被申之

廿日 丙申 陸奥出羽兩國諸郡夜討強盜蜂起  
事依其聞仰而之地頭可相鎮之旨所被成遣御



教書也其詞云

近日出羽陸奥國夜討強盜蜂起間往還之輩有其煩之由風聞尤不便是偏郡卿地頭等竟無宿建直羣令結番殊可令警固也且龍蓋惡黨之所不可見聞隱之旨可被召進沙汰人等起請文依仰執達如件

正嘉二年八月廿日

武藏守 相摸守

某殿

廿八日 甲辰天晴 戊刻瑩惑犯南斗第五星同時太流星餘四丈自乾至巽今日評定將軍家御上

東鑑四十八

三十七

洛延引云是依諸國損土民間有愁之故也

九月小

二日 戊申 終日終夜雨降暴風殊甚今日諏方刑部左衛門入道所被暴罪也此丰從失以遂不進分明白狀爰相州禪室被迴賢慮以無人之時情入誣方一人於御所直被仰含曰被殺害事被疑思食之上所從高太即承伏勿論之間難進斬刑之旨評議畢然而忽以命不可終其身之條殊以不便也仕實正可申之就其詞加斟酌欲相扶之云于時諏方且喜抑後果宿意之由申之禪室御仁慧雖相同于夏為泣罪之志所犯既究之間不被行之者依難於天下之非違令糾斷給云又平内左衛門尉於子

衛門入道等流刑就中俊職為公人與此巨惡之條殊背物義之間被配流硯黃鳴云治承比者祖父康賴流此嶋正嘉今又孫子俊職配同所寔是可謂一業所感歟

廿一日 丁卯 諸國惡黨依有蜂起之聞殊可被竭警巡誠之類日來被經群議畢今日被下御教書於諸國守護人其詞云

國之惡黨警固事

右國之惡黨令蜂起企夜討強盜山賊海賊之由有其聞狼嗥之甚不可不誠不可見隱聞隱之由度々被仰下畢早可加警固也於實犯之族者可令召進其身且雖為權門勢家之領背守護人下

東鑑四十八

三十八

知於拘惜惡黨者注申可被行其科也以此旨配廻其國中可令致沙汰之狀依仰執達如件

正嘉二年九月廿一日

武藏守 相摸守

某殿

廿九日 乙亥 於御所惜九月盡有當座和歌御會云

十月大

十二日 丁亥天晴 今自評議被仰出曰自嘉祿元年至仁治三年御成敗事准三代將軍并二位家御成敗不可及致沙汰云  
十六日 辛卯 朝晴已冠以後甚雨洪水屋宅

失入溺死午刻屬晴子刻月蝕不正見

十一月大

十九日 甲子天晴 將軍家百官蹴鞠御會被結

願花山院宰相中將相州布衣武州同刑部少輔教

時越前守時弘右馬助清時遠江次郎時通已下數

輩發候昨可被遂此儀之趣一昨日御風氣之間為

餘慎延引也

十二月小

九日 甲申 於鶴岡八幡宮被修諸神供養音樂

云

十日 乙酉 主從敵對事自今以後者不論理非

不可有御沙汰之旨被定之

東鑑四十八

三十九

十二日 丁亥 寅刻雷鳴

十六日 辛卯天晴 寅刻地震已時雷鳴及數度

十九日 甲午 諸方番帳等被加清書依為歲末

也於廂御簡者隨例仲秋田城介於御所令清書之

廿日 乙未 將軍家聊御惱云

廿一日 丙申天晴 御惱平愈云

新刊吾妻鏡卷第四十八

新刊吾妻鏡卷第四十九

正元二年庚申 四月十三日 鳥文應元年

正月大

一日 巳巳晴 挽飯相州澤室 兩國司評定  
以下人々著布衣出仕列候庭上之儀如恒

武藏前司

尾張前司

相摸太即

新相摸三郎

相摸三郎

遠江前司

陸奥左近大夫將監

越後守

彈正少弼

武藏左近大夫將監

尾張左近大夫將監

遠江右馬助

刑部少輔

越前少司

東鑑四十九

越後四郎

武藏五郎

遠江七郎

備前三郎

駿河四郎

越後又太即

駿河五郎

新田三河前司

長井宮内權大夫

秋田城介

中務權少輔

武藤少卿

木工權頭

和泉前司

那波刑部少輔

小山出羽前司

後藤壹岐前司

伊賀前司

長井判官代

日向前司

安藝右近大夫

鳴津大隅前司

上總前司

周防前司

終興頭

後藤壹岐新左衛門尉

甲斐守 上総三郎左衛門尉

周防三郎左衛門尉

城四郎左衛門尉

筑前次郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

城六郎

周防六郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

城弥九郎

筑前四郎左衛門尉

式部太即左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

大隅藏人

常陸次郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

上野太即左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

善右衛門尉

和泉六郎左衛門尉

善次郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

東鑑四十九

和泉七郎左衛門尉

薩摩十郎

土肥四郎

内藤肥後三郎左衛門尉

將野五郎左衛門尉

伊東次郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

將野四郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

肥後新左衛門尉

大曾弥太即左衛門尉

信濃三郎左衛門尉

將野帶力左衛門尉

加藤左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

長内左衛門尉

大泉九郎

鎌田次郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

善五郎左衛門尉

駿河右近大夫

平賀四郎左衛門尉

出羽前司行義申時赴將軍家出羽前司右衛門  
督參進上御簾御銀武藏前司朝直御調度尾張前  
司時意御行騰省越後守實時  
一御馬 遠江七郎時基工藤次郎左衛門尉高光  
二御馬 武藏五郎時忠 安東新左衛門尉  
三御馬 出羽七郎左衛門尉行賴 同九郎宗行  
四御馬 城四郎左衛門尉時盛 同六郎顯盛  
五御馬 伊勢次郎左衛門尉行經  
同三郎左衛門尉賴經  
其後覽吉書武州令持參給今日有御行始之體仍  
任例進覽庭上座著倒就御點催供奉人其間事以  
上工藤三郎右衛門尉光泰奉行之平里左衛門尉

東鑑四十九

實俊依有故障也未刻御出御車綱廂

御劍役人

武藏前司朝直

御後

五位

相摸太即時直  
遠江前司時直  
越前々司時廣  
遠江右馬助清時 武藏左近大夫將監時仲  
陸奥左近大夫將監義政  
相摸三郎時利  
新相摸三郎時村  
尾張前司時章  
越後守實時  
刑部少輔教時  
彈正少弼業時  
遠江七郎時基  
越後四郎時方

參河前司賴氏  
宮内權大夫時秀  
小山出羽前司長村  
木土權頭顯家  
武藏少卿景賴  
甲斐守為成  
秋田城介泰盛  
和泉前司行方  
後藤壹岐前司基政  
日向前司祐泰  
上総前司長泰

東鑑四十九

薩摩七郎左衛門尉祐能

一宮次郎左衛門尉康有

鏡前次郎左衛門尉行賴

小野寺新左衛門尉行通

加藤左衛門尉景經

土肥四郎左衛門尉實經

出羽三郎左衛門尉行藤

常陸次郎左衛門尉

餘田三郎左衛門尉義長

鎌田次郎左衛門尉行俊

御引出物如例御劍刑部少輔教時砂金左近大夫

將監義政羽官内權太輔時秀

武藤左近將監賴村

一御馬 新相摸三郎時村 安倍次郎左衛門尉  
二御馬 筑前三郎左衛門尉行實

同四郎左衛門尉行光

三御馬 相摸三郎時輔 南條新左衛門尉

二日 庚午晴 筑飯奥州御膳門御膳左衛門督 御

尾張前司時章 御調度越前司時廣 御行

騰沓秋田城介泰盛

一御馬 新相摸三郎時村

二御馬 備前三郎長賴

三御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎左衛門尉祐廣

四御馬 信濃次郎左衛門尉時清

東鑑四十九

五

五御馬 周防五郎左衛門尉忠景

三日 辛未晴 筑飯相州御膳門御膳右金吾

御劍越後守實時御調度左近大夫將監公時御行

騰和泉前司行方

一御馬 遠江七郎時基 糟屋左衛門三郎行村

二御馬 式部太郎左衛門尉光政同右衛門次郎

三御馬 出羽九郎宗行 同次郎兵衛尉行藤

四御馬 城六郎顯盛 同九郎長景

五御馬 新相摸三郎時村

式部次郎左衛門尉光長

九日 丁丑晴 被行評定始

十日 戊寅晴 京都飛脚到著申云今月四日園

城寺三摩耶形壇事被宣下之處同日吉神祇園三基北野二基京極寺一基已上九基神興入洛奉振并陳頭二基者奉振院御所云

十一日 卯晴 將軍家御衆鸛置

御車

後藤壹岐左衛門尉基賴 加藤左衛門尉景經

城六郎顯盛 筑前四郎左衛門尉行佐

信濃判官次郎左衛門尉行宗

肥後新左衛門尉景氏

侍野四郎左衛門尉 伊東次郎左衛門尉盛時

薩摩九郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉賴經

小野寺新左衛門尉行通

東鑑四十九

六

一宮次郎左衛門尉康有

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀三郎左衛門尉維時

以上帶劍直垂候御車左右

御劍役人布衣

武藏前司朝直

御調度布衣武藤左衛門尉賴泰

御後

五位 布衣

尾張前司時章

越後守實時

遠江前司時直  
越前前司時廣

越後右馬助時親	刑部少輔教時
遠江右馬助清時	尾張左近大夫將監公時
武藏左近大夫將監時仲	民部大夫時隆
彈正少弼素時	陸奥左近大夫將監義政
小出羽前司長村	宮内權大夫時秀
木工權頭親家	秋田城介泰盛
參河前司賴氏	和泉前司行方
後藤臺岐前司基政	周防前司忠經
伊賀前司時家	上總前司長泰
甲斐守為時	日向前司祐泰
太宰少貳景賴	
六位下布衣	
東鑑四十九	七
相摸太郎	同四郎宗政
同三郎利時	遠江七郎時基
越後四郎時方	新相摸三郎時村
備前三郎長賴	武藏五郎時忠
式部太郎左衛門尉光政	城四郎左衛門尉時盛
遠江十郎左衛門尉賴連	
隱岐三郎左衛門尉行景	
伊勢次郎左衛門尉行經	
筑前三郎左衛門尉行實	
薩摩七郎左衛門尉祐能	
土屋七郎左衛門尉行賴	
和泉三郎左衛門尉行章	

善太郎左衛門尉康長	十二日 庚辰 於濱有御的射手之試被撰定其
射手十三人 一五度射之	射手
一番	早河次郎太郎
二番	濫谷左衛門太郎
三番	平嶋彌五郎
四番	畠本新兵衛太郎
五番	佐貫七郎
六番	藤澤左衛門五郎
七番	藤澤左近將監
八番	海野矢四郎
九番	桑原平内
十番	工藤弥三郎
十一番	本間彌四郎左衛門尉
十二番	本間左衛門次郎
十三番	工藤八郎
射	射
九	九
八	八
九	九
六	六
八	八
八	八
十	十
八	八
七	七
九	九
三	三
東鑑四十九	八



十四日 壬午晴 寅刻雷鳴今日有御月始一五度也

射手十二人

一番

早河次郎太郎祐泰

澁谷左衛門太郎朝重

二番

平嶋彌五郎助經

置本新兵衛尉重方

三番

佐貫七郎廣胤

藤澤左衛門五郎光朝

四番

藤澤左近將監時親

海野彌四郎助氏

五番

桑原平内盛時

工藤彌三郎清光

六番

本間彌四郎左衛門尉忠時

栢間左衛門次郎季忠

七日

戊子 今日於御所中被定早晝番其内

於壯士者歌道蹴鞠管絃右筆弓馬野曲以下都以

世一藝之輩於時依可有御要被結番定去比御要

之時無人之間殊以此御沙汰出來仍仰小侍況於  
藝能輩目六度々被仰合相州禪門治定云工藤三  
郎右衛門尉光泰奉行之城四郎左衛門尉為清書

一番午晝番事次第不同

相摸太郎

尾張左近大夫將監公時

足利上總三郎

同六郎顯盛

遠江十郎左衛門尉賴連

筑前五郎左衛門尉行重

武藤左衛門尉賴泰

信濃五郎左衛門尉行宗

二番

越前々司時廣

武藏五郎時忠

出羽大夫判官行有

淡路又四郎左衛門尉宗泰

式部太郎左衛門尉光政

隱岐三郎左衛門尉行景

大須賀新左衛門尉朝氏

佐貫七郎廣胤

大泉九郎氏廣

江戶七郎太郎長光

三番

陸奥左近大夫將監義政

相摸三郎時輔

小山出羽前司長村

備前三郎長賴

大隅修理亮久時

上野大夫判官廣經

城四郎左衛門尉時盛周防五郎左衛門尉忠景

寺嶋小次郎時村

筑前次郎左衛門尉行賴

出羽七郎左衛門尉行賴

一宮次郎左衛門尉康有

本間彌四郎左衛門尉忠時

四番

新相摸三郎時村

越後右馬助時親

宮内六郎時秀

木工權頭親家

日向前司祐泰

城弥四郎長景

東鑑四十九

十一

大曾禰太郎左衛門尉長經

上野十郎朝村

加藤左衛門尉景經

武石四郎左衛門尉長

阿曾沼小次郎光經

波多野小次郎宣經

小野寺新左衛門尉行通

王番

刑部少輔敦時

遠江七郎時基

新田三河前司賴氏

縫殿頭師連

義作兵衛藏人家教

城五郎左衛門尉重景

河越次郎經重

筑前四郎左衛門尉行佐

甲斐三郎左衛門尉為成

土肥四郎實經

善五郎左衛門尉康家樺野四郎左衛門尉景氏

二宮彌次郎時元

六番

越後守實時

同四郎顯時

後藤壹岐前司基政

武藤少卿景賴

上総前司長泰

佐渡五郎左衛門尉基隆

壹岐新左衛門尉基賴伊勢三郎左衛門尉賴經

薩摩七郎左衛門尉祐能肥後新左衛門尉景氏

鎌田次郎兵衛尉行俊

盛谷三郎太郎重村

早河次郎太郎祐泰

右守次第各可令參勤之狀依仰所定如件

正元二年正月日

廿三日 辛酉

可禁遏殺罪輩之由有其沙汰被

定事書云

東鑑四十九

十二

一六齋日并二季彼岸殺生事

右魚鱉之類禽獸之彙重命逾山岳身同人倫因茲

罪業之甚無過殺生是以佛教之禁戒惟重聖代格

式炳焉也然則件日々早禁魚經於江海宜停停獵

於山野也自今以後固守此制一切可隨停止若猶

背禁遏有違犯輩者至御家人者令注進交名於凡

下輩者可加罪科之由可被仰諸國之守護并地頭

等但至有限神社之祭者非制禁之限矣

廿六日 壬辰晴

園城寺衆徒使者案著申云今

月四日當寺三摩耶戒壇事被宣下之處同十四日

山徒院衆時訴申之同廿日被召返云刺可燒拂寺

門之由山僧蜂起緯已為朝家勝事一寺滅亡

北九日 乙未 去廿二日神輿歸坐同廿三日三井寺眾徒分散云

二月小

二日 庚子晴 將軍家御方違渡御二棟御所是

可被修理御所之故也今日小侍御簡有新加衆和泉前司行方傳仲越州仍令平置左衛門尉工藤

三郎右衛門與沙汰之

二番 伊賀左衛門四郎

同六郎

四番 美作兵衛藏人

五番 木工權頭

三日 辛丑晴 依山門蜂起園城寺定有火災

可擊固彼寺之由可相觸大番衆之旨被仲遣六波

東鑑四十九

十三

四日 壬寅 出羽判官次郎兵衛尉加小侍御簡

衆 五日 癸卯晴 酉刻故屋禪定殿下兼經公御

息女御年爲家明寺禪家御猶子御下著則入御山

內是是可令備御息所給云

十日 戊申晴 於家明寺御亭將軍家御吉事有

其沙汰陰陽師晴賢晴茂宣賢文元依召衆入各以

別紙奉日時勘文今月十四日壬子次吉三月廿一

日戊子上吉云

十四日 壬子晴 將軍家入御最明寺御亭戊戌

將軍御前有御除服之儀天文將士爲親朝臣勤御

前兵衛佐忠晴朝臣依陪膳木工頭親家爲役之

十八日 丙辰晴 將軍家爲覽櫻花御出求福寺

廿日 戊午 兩御所結番更被書改行方書之定

兩御所結番事

一番至五日

一條中將

尾張左近太夫將監

武藏八郎

佐渡五郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

東鑑四十九

十四

二番至六日

阿野少將

武藏左近太夫將監

和泉前司

下野四郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

三番至十一日

中御門少將

陸奥左近太夫將監

秋田城介

武藤右近將監

越後守

新相模三郎

武藤少將

出羽三郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

一官次郎左衛門尉

治部權大輔

備前三郎

駿河左近大夫

常陸次郎左衛門尉

後藤臺岐左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

宮内權大輔

越前少司

駿河次郎

陸奥七郎左衛門尉

出羽七郎左衛門尉  
城彌九郎

伊勢四郎左衛門尉  
大曾彌太郎左衛門尉

四番至十六日

彈正少弼

讀岐守

武藏五郎

相摸三郎

出羽大夫判官

後藤壹岐前司

信濃次郎左衛門尉

武藏左近將監

和泉三郎左衛門尉

錄田次郎左衛門尉

將野四郎左衛門尉

五番至九日

中御門新少將

民部權大輔

遠江七郎

足利上總三郎

東鑑四十九

十五

新田泰河前司

兵衛判官代

式部太郎左衛門尉

大隅修理亮

筑前三郎左衛門尉

義作兵衛藏人

壹岐三郎左衛門尉

大泉九郎

六番至十六日

二條少將

刑部少輔

遠江右馬助

越後四郎

木工權頭

圖書頭

城六郎

周防五郎左衛門尉

加藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上總三郎左衛門尉

土肥四郎

右守結番次第主前日夜無解急可令勤仕之狀所

定如件

正元二年二月日

一日 戊辰天晴 若官別當僧正 隆辨自京都歸

榮是依國城寺三摩耶戒壇事去年九月十四日上

沿今年正月四日就令奏達之勅許而山徒及強訴

之間同廿日被召返官府同廿一日寺門衆徒僧正

山朝法印淨有忠尊以下僧經三十余輩衆會金堂

疑爭議同廿三日退散云

十四日 辛巳晴 日色赤將軍家中已御移為親

朝臣奉仕之薩摩七郎左衛門尉祐能為御使

十五日 壬午 日色赤但天陰紅霞厚之故也入

夜臘月殊晴四條院御在位之時石清水行幸日有

東鑑四十九

十六

此異云

十六日 癸未 為世上無為御祈禱於御所被始

行太般若御讀經云

十八日 乙酉天晴 於鶴置八幡宮被修仁王會

廿一日 戊子天晴 風靜戌越御息所入御先寄

御輿於東御亭相摸太檜皮寢殿妻戶東御方被衆

儲相州武州被候之次自同西門出門出御雜色二

人取松明前行町大路南行入御所東門中納言在

北庭將軍家於東侍密々御見面土御門中納言在

山院中納言一條少將雅有朝臣彈正少弼葉時木

工權頭親家相摸三郎時利越後四郎時方前陰陽

少名晴宗朝臣等候其所寄御輿於中御所南渡廊

西向妻戸内東御方一條局同前  
島從

相州 五色二人着直垂者

武州 並同相

武藏前司朝直 着直垂者二人 尾張前司時章

左近大夫將監義政 相並上 相摸太郎殿 相並

人着直垂者五人 相摸四郎 相並

此外

大曾禰太郎左衛門尉長賴

梶原太郎左衛門尉景經

對馬四郎左衛門尉宗經 岩間平左衛門尉信重

筑前四郎左衛門尉行佐

錄田圖書左衛門尉信俊

東鑑四十九

十七

伊勢次郎左衛門尉行經

信濃次郎左衛門尉行宗

上総三郎左衛門尉義泰 大隅四郎左衛門尉

以上十人着直垂列步御輿左右

此外越後守實時就催促進奉之處依妻室病惱臨

期申障女坊東御方兵衛佐局周防局自開路被案

進御膳東御方被候陪膳別當局兵衛佐局周防局

爲役退吉時將軍家 御直土御門黃門役御劍相

摸太郎殿獻御沓給御傳母獲御衾取御沓令退出

給

廿二日 巳丑晴 將軍家入御中御所但依爲密

儀不及御儲等之沙汰

廿五日 壬辰晴 卯一點地震陰陽道之輩付勘  
文於和泉前司行方

廿七日 甲午晴 將軍家御吉事有露顯之義相

州以下人々布被案候未越入御中御處 御頭之

有進物御劍武州砂金 銀兩並 相摸太郎殿南庭

相摸四郎又女房一條局分砂金 三十 秋田城介

泰盛持參別當局南庭三宮內權太輔時秀役之此

外賜風流 御簾 於女房之中又被下細櫃二合 納

於刀自等其後將軍家還御寢殿

廿八日 乙未晴 和泉前司行方持參御息所御

服月充注文於御所將軍家覽之

正月分

東鑑四十九

十八

御小褂 御二階 御表著 御二階 重御衣上 二

御簾 御單 紅御袴 三御小袖 三御衣

二御衣 二御小袖二具 薄御衣 白御衣

御裳 色々御小袖五具 御夜衣 御明衣二

今木二具 御櫛一束 御櫛拂 御拂

御疊紙 御眉墨 御眉造 御赭

御白粉 御護

二月 二御衣 二御小袖色々 御小袖五 御裳

三月 二月

四月

御掛 二階 合御衣五 唐織御衣



更衣御單合御衣 合二御小袖 合御小袖三  
紅御袴 御裳三

五月 御小褂二階藏物 御單 御總重五重唐  
上二階藏物 御小袖單重 紅御袴 二生御衣  
合御小袖二 御帷五 御裳三 生御衣

七月 御小褂二階藏物 御單重二階藏物九 御小  
袖單重 紅御袴 生御衣 御帷七 御裳三  
御明衣二 今木二具

九月 御小褂二階藏物 生七御衣上二階藏物九 御  
單生二御小袖入御袴 紅御袴 二生御衣

御小袖五 御裳三  
以上七箇月可為與州禪門御沙汰

六月 御單重 生御小袖 白御袴 生御衣  
御帷七 御裳二

八月 二生御衣 御單 生御小袖 白御袴 生御  
衣 合御小袖三 御帷二 御裳二 御明

十月 御小褂三階藏物 八御衣上二階 御單二

御小袖 紅御袴 三御衣 薄御衣 二御  
小袖 紅宿衣 色々御小袖五 御裳二

十一月 二御衣 二御小袖 色々御小袖五 御裳三  
十二月 月十一月

以上五箇月相州禪門御沙汰也  
四月大

一日 戊戌 將軍家御吉事已後依可有入御于  
入道陸奥守宗供奉人事有其沙汰如例召惣人數  
記被下御照雖被載其記今度漏御照入々  
速任右馬助 越後右馬助  
駿河四郎 同五郎

武藏五郎 同八郎  
那波刑部少輔 上総介  
周防守 梶原上野前司  
伊賀前司 甲斐守  
長井判官代 城弥九郎  
壹岐新左衛門尉 大隅修理亮  
筑前三郎 同四郎  
和泉六郎左衛門尉 同七郎左衛門尉  
伊勢三郎左衛門尉 信濃判官次郎左衛門尉  
式部次郎左衛門尉 武藤左近將監  
伊賀式部八郎左衛門尉 小野寺新左衛門尉  
伊東次郎左衛門尉 土肥四郎



肥後新左衛門尉  
同十郎左衛門尉  
後藤次郎左衛門尉  
陰岐三郎左衛門尉  
得野五郎左衛門尉  
筑前三郎左衛門尉  
式部太郎左衛門尉  
鎌田三郎左衛門尉

薩摩九郎左衛門尉  
大泉九郎  
相馬五郎左衛門尉  
平賀三郎左衛門尉  
同四郎左衛門尉  
元自故障有レ事  
服暇日數相殘之由申上  
有少大可憐之由被仰出  
難無沙汰身式部木郎左  
衛門尉替可供奉之由  
然仰下

追加

信濃前司

駿河次郎

駿河左近太夫

東鑑四十九

二十一

二十一

二日 己亥 御出事明日也而式部太郎左衛門尉  
尉外舅於若狹國他界事違期之後達遠聞之間勤  
日數禁忌之殘日不幾之趣有此御出事仍始者雖  
被仰可有憚之間今日有沙汰被問鶴里別當不  
可憐由之間可被召具者次以鎌田三郎左衛門尉  
可為光政替之由雖被仰本人出仕之上不及子細

三日 庚子晴 入御于入道陸奥守亭御息所御  
同車供奉布衣

土御門中納言 翼方增

二條三位 教定卿

前兵衛佐忠時朝臣

花山院中納言 長兼卿

中御門少將宗世朝臣

二條少將雅有朝臣

武藏前司朝直 俊朝卿

越後守實時

左近太夫將監公時

新相摸三郎時村

越後四郎顯時

和泉前司行方

宮内權太輔時秀

出羽前司長村

木工權頭親家

太宰少貳景賴

對馬前司氏信

遠江前司時直

刑部少輔教時

彈正少弼業時

左近太夫將監時連

相摸三郎時利

遠江七郎時遠

秋田城介泰盛

中務權少輔守教

豐岐前司基政

參河前司賴氏

縫殿頭師連

日向前司祐泰

東鑑四十九

二十二

此藤左衛門尉賴泰 下野四郎左衛門尉景經

式部太郎左衛門尉光政

常陸次郎左衛門尉行清

出羽七郎左衛門尉行賴

信濃次郎左衛門尉時清

周防五郎左衛門尉起景

上野三郎左衛門尉義長

遠江十郎左衛門尉賴連

伊勢次郎左衛門尉行經

大曾禰太郎左衛門尉祐能加藤左衛門尉景經

薩摩七郎左衛門尉長賴

小野寺四郎左衛門尉道清

鎌田次郎左衛門尉義長  
鎌田次郎左衛門尉行俊

相州 武州 前尾州

雖載供物散狀稱有所役不候路次

相摸太郎殿同四郎等豫被參候御所兼被在御衣  
加等於出居輕御衣一具御衣指貫小袖十具七御  
衣一具生御單御小袖紅御袴御小袖十具懸  
御盃酒之後奉御引出物御敷尾張前司時章利金  
越後守實時南庭秋田城介泰盛

一御馬 新相摸三郎時村

式部太郎左衛門尉

二御馬 武藏五郎時忠

淺羽左衛門次郎

三御馬

相摸太郎殿  
波多野出雲次郎左衛門尉

東鑑四十九

二十三

御息所御方進風流兼

女房中綱百正公卿御

殿上人馬五六位香行騰也

六日 壬寅晴 自去年冬之比時行流布之間可  
被祈請之由被仰于諸寺云

十七日 甲寅晴 六波羅飛脚參著申云去十二  
日丑越院御所燒失云又山徒以血奉塗神輿之由

同所注進也

十八日 乙卯晴 小臺所恪勤侍五人司令著到

之由云工藤三郎左衛門尉光泰平臣左衛門尉實

俊等奉行之和泉前司行方武藤少卿景賴依傳仰

也

格勤

村照藤五太郎

村照弥五郎

入野平太

同藤四郎

龜谷源次郎

今日改元詔書到來去十三日改正元二年為文應  
元年文章博士在章撰進云依御即位也

十九日 丙辰陰

為武藤少卿景賴奉行可被始

行御祈禱之由有其沙汰之處八專有憚之由陰陽  
道依勘中被閉之云

廿二日 巳未晴

於政所被行改元吉書亦御祈

禱事陰陽道雖申子細殊被急思食重被經評定今

日始行松殿法印左大臣法印等奉仕之今日將軍

家御惱之間及戊刻於御所南庭被修千手法次始

行不斷千手陀羅尼若官別當僧正辨率八口伴僧

奉仕之

東鑑四十九

二十四

廿四日 辛酉

御惱事令復本御開食御膳云

廿六日 癸亥

將軍家御惱事去夜女房尼左衛

門督局有夢想一人僧告申云依嚴重御病不可入

幕中云仍今朝彼局語申夢中之間被尋右京權太

夫茂範朝臣之趣將軍御居所者相幕府法驗炳焉

之由申之

廿九日 丙寅

丑越鎌倉中太燒亡自長樂寺前

至龜谷人屋云

卅日 丁卯天晴

今日評議員物事輒不及沙汰

之趣雖被定置羗弱之輩數申之旨依被開食及如

先々可有其沙汰云云訖訖事不叙用三箇度者可  
注進所帶之旨可成下御教書云

五月小

四日 辛未 故武州禪門御成敗事不及改沙汰  
之間被裁式目畢而同時重可有沙汰之由有所見  
之輩者不拘此文可有其沙汰仁治三年以後給御  
教書遂問答之疑者非沙汰之限今日被定之

十日 丁丑晴 秋田城介入道覺智第三年進福  
松下禪尼為施主被修之願文草右京權大夫茂範  
朝臣清書本曼茶羅供大阿闍梨日光別當法印草

家  
十三日 庚辰晴 子尅將軍家御惱

東鑑四十九

二十五

十六日 癸未 雨降御惱御祈被行鬼氣并御夢  
祭等

十八日 乙酉 雨降將軍家御惱令復本御

六月大

一日 丁酉 疾風暴雨洪水河邊人屋大底流失  
山崩人多為骸骨被狀死

四日 庚子 就捨斷事今日有被定之條且被仰  
遣六波羅也所謂

一 國々守護人召進犯科人事

右召進關東無謂任被定置之旨可被沙汰之由  
可令相觸守護人但寄事於左右守護人致非據  
沙汰之由訴申之時者可令成敗矣

一 可召關東犯科人事

右於訖重科張本者任先例可召進之至輕罪者  
於六波羅可有尋沙汰矣

一 放免事

右於殺害人者自來十箇年以後隨所犯輕重雖  
被免之於今度者諸國即饒之人民病死過法之  
間以別御計不謂年記無殊子細之輩者至當年  
所犯者被放免畢焉

五日 辛丑 雨降被行止雨御祈安祥寺僧正良  
瑜修一字金輪法今日被勒放生會供奉人散狀云

七日 癸卯 雨降未尅屬晴自去月十六日霖雨  
不休今日適迎晴是偏法驗之所致歟

東鑑四十九

二十六

十二日 戊申 為人處疾疫對治可致祈禱之由  
今日被仰諸國守護人云其御教書云

諸國寺社大般若經轉讀事

為國土安穩療病對治於諸國寺社可被轉讀大  
般若經取勝仁王經等也早仰其國寺社之住持  
致精誠可轉讀之由可令相觸地頭等也只於地  
行所者同可令下知之狀依仰執達如件

文應元年六月十二日

武藏守  
相摸守

某殿

十六日 壬子 放生會御案官供奉人惣記自小  
侍被猷武州是可令計沙汰給之由也而任例被仰

可推覽御所之旨返還之云

十八日 甲寅 被付供奉人記於和泉前司行方

而有被仰出條之所謂云

可有御息所御參宮事

相摸太郎

同三郎

元著 可為隨兵云

可為彼御方御共者

武藏前司

為供奉人數雖有御合點可參族廻廊者

佐々木壹岐前司

雖有御點今度不可催者

小山出羽次郎

雖無御點可催加隨兵者

東鑑四十九

二十七

十九日 乙卯晴 於濱島若邊天文博士為親朝

臣奉仕風伯祭御使安藝右近大夫重親今度依御

氣色被用舊祭文云

廿二日 戊午 相摸四郎可著布衣同三郎如元

可為隨兵之由云

廿五日 辛酉晴 西越京都飛脚參著自去十五

日一院令煩應御之由申之

廿六日 壬戌晴 為和泉前司行方奉行以來開

院御惱事被行御占本月廿六日七日御城

之由勘申之其後薩摩七郎左衛門尉祐能為使節

上洛依院御惱也

廿日 丙寅晴 木土權頭親家為使上洛猶被申

御惱事之故也

七月小

二日 戊辰晴 京都飛脚到來院御不豫御城之

由申之御駭者左大臣法印近衛右府御息云

四日 庚午晴 入夜雷雨今日三浦式部大郎左

衛門尉光政為使節上洛御惱御城事依被賀申也

六日 壬申為和泉前司行方奉行有被尋問于越

後守實時相摸太郎主等事是去年被相催隨兵之

時大須賀新左衛門尉朝氏阿曾沼小次郎光經各

自由不察而怒以光經者著進子息五郎朝氏者立

弟五郎左衛門尉信泰於代官此事計容誰人計哉

者實時朝臣等申云以詞令申者傳者若無委細披

露歟退載狀可令言上者則歟狀付工藤三郎右衛

門尉光泰先披覽于相州禪室之處被計仰云載狀

之條頗以似嚴重歟只以光泰實後等之詞屬行方

謝申之條可宜歟者被狀云

去年八月放生會御社參供奉人間被仰下兩條

一 阿曾沼小次郎隨兵役以子息令勤仕申事

右所勞之由押紙于迴文之間言上子細之處以光

泰實後度々有御尋子細可令勤仕之由被仰下訖

更非自由之計候

一 大須賀新左衛門尉同五郎左衛門尉等間事

右於大須賀新左衛門尉者被下隨兵御點歟間催

候之處所勞之由押紙于迴文之間注申此旨候

東鑑四十九

二十八

之觀現所勞之間御免訖於五郎左衛門尉者本  
自被下直垂御點候之間勤仕訖此兩人事同非私  
計候以前兩條如此之由覺語候但胸臆申狀不定  
御信用候歟然而如此事先不及御書下候之間  
或引勘愚記或任御點註文言上子細以此趣可令  
披露給候恐惶謹言

七月六日

平時宗

越後守實時

進上 和泉前司殿

七日 癸酉 朝氏光經等間事行方聞光泰實後  
口狀披露云無殊事與越州等書狀隨禪室嚴命留  
中申云

東鑑四十九

二十九

八日 甲戌 放生會供奉直垂著事為有御點撰  
可然之輩可注進之旨去月十六日被仰下之間小  
侍所令清撰之一昨日進覽之間今日有御點為令  
催促被返之云

十日 丙子

錄倉中僧訴可鎮狼藉之旨被下御  
執書云

十三日

己丑

小侍番帳更清書之雖被仰下  
城前司盛時依申所勞之由佐藤民部大夫行轉又

奉仲所豫筆也是以和泉三郎左衛門尉行章被下  
兩條箱於小侍所願與小侍每其番自一番不參差  
為同日之樣令結番之可書改之由依被仰下如此  
且清書仁以前兩人可然之旨為相州禪室御討

廿四日 庚寅晴 京都飛脚衆著去十五日以後  
院御應御更發之由申之

廿五日 辛卯晴 依御惱事信濃次郎左衛門尉  
行宗為使節上洛今日薩摩七郎左衛門尉自京都

歸案又小侍番帳事有共沙汰於書樣雖為次第不  
同之儀何無所思哉聊立次第可書改之內被仰下

和泉前司行方武藤少卿景賴等為奉行也是日  
結番之體不云官位不論嫡庶且依宿老且既勤

廿六日 壬辰陰 京都飛脚又到來去廿一日  
御之由申之

廿九日 乙未晴 中御所番衆者可著到于兩御  
所之旨和泉前司行方奉行相觸工藤三郎右衛門

尉光泰平里左衛門尉實俊云午刻京都飛脚到著  
院御應病去廿一日平復御驗者道性僧正云今日

御息所入御相州禪室御亭  
供奉人

越前司 刑部少輔教時  
尾張本近 太夫將監公時 新相摸三郎時計

相摸三郎時輔 陸奥左近 太夫將監義政  
壹岐前司基政 和泉前司行方

出羽太夫判官行方 式部太郎左衛門尉光政  
城四郎左衛門尉賴泰

東鑑四十九

三十



大曾彌太郎左衛門尉長賴  
武藤左衛門尉時盛 上總太郎左衛門尉長經  
和泉三郎左衛門尉行章  
常陸次郎左衛門尉行清

八月大

二日 丁酉晴 式部太郎左衛門尉自京都歸來

五日 庚子晴 申尅甚雨大風人屋多以破損成

冠風休地震

六日 辛丑 相摸三郎外祖父率之間輕服

七日 壬寅晴 將軍家煩赤痢病御仍為相摸太  
府殿沙汰被行如法泰山府君祭為親朝臣奉仕之

東鑑四十九

三十一

御使狩野四郎左衛門尉

八日 癸卯晴 依御惱以七日碩德被修七座法  
安祥寺僧正松殿法印勝長壽院法印左大臣法印

已下也

十二日 丁未晴 依御惱事為相摸太郎殿御沙  
汰一日中被造立藥師像將軍家供養道師尊家法

印又被始行藥師法今日有被仲遣于六波羅事其

御教書云

問註以後追進狀事不進證文之外於誰陳者不  
及沙汰之由被定畢而進覽問問註其書之時  
每度被制進追狀之條違傍例非無沙汰之煩於  
自今以後者證文之外不可副進新陳之狀若令

備進簡要證文者遂覆問可令副進彼證文之狀  
依仲執達如件

文應元年八月十二日

武藏守  
相摸守

陸奥左近大夫將監殿

十五日 庚戌晴 鸛置於生會將軍家無御參官  
赤痢病御惱不輕之故也武州為御使被神拜舍第

左近大夫將監義政并相摸四郎和泉前司行方太  
宰權少貳景賴壹岐前司基政總殿頭師連上總前

司長泰等衆迴廊

十六日 辛亥陰 武州參官同昨將軍家雖無御  
出馬場之儀檢數等如例大夫判官行有大夫判官

東鑑四十九

三十二

廣經大夫判官行氏等警固馬場

十七日 壬子晴 依將軍家御惱於御鞠重天文  
博士為親朝臣勒如法泰山府君祭鞍置馬一匹鎧

弓箭等為相摸大郎殿御沙汰被奉之御雙紙箱入  
自御所被出之

廿日 乙卯晴 將軍家御惱聊令屬藏御

廿五日 庚申 依可有二所御參詣供奉人等有  
其沙汰且書於先日御點人數可令進之由被仲小

侍所行方傳達之云宗像六郎子息童形意無御  
調度懸司供奉之由被定云

廿六日 辛酉 雨降將軍家御除服為親朝臣刻

勤御被陪膳讀岐前司忠時朝臣布衣役送近江前



司季實

九月小

五日 庚午晴 辰 尙將軍家御沐浴御驗者醫陰之輩等豫祿於鞠御壺有其儀權侍醫長世前隈陽大兄晴茂朝臣各賜御衣一領御劍一腰坊門三位清基卿取御衣給兩人薩摩七郎左衛門尉祐能引御馬置鞍亦被召彼兩人於中御所給御衣次召爲親朝臣以女房別當局給銀劍一腰松殿法印良基依無用意早出之間被送御衣御劍御馬一疋於件宿坊和泉前司行方爲御使又於御所被修北斗法七箇日若宮別當僧正奉仕之

十月小

東鑑四十九

三十三

八日 壬寅 小早河服三郎被召加小侍番帳武藤少卿景賴傳仰云

十五日 己酉 相州政村息女願邪氣今夕殊惱亂爲比企判官女譖岐局靈崇之由及自詫云件局爲大禮頂有大角如火炎常受苦當時在比企谷土中之由發言聞之人堅身毛云

廿二日 丙辰晴 貢馬御覽相州武州已下出仕如例

十一月大

八日 辛未 深栖兵庫助孫平嶋藏人太郎重求入小侍番帳和泉前司行方奉仰觸小侍云

十日 癸酉 明年御的始射手事被差定之相模

大郎殿越後守等被下奉書

十一日 甲戌 二所御衆詣事求十九日可被始之仍供奉人間事可被催促之趣和泉前司行方奉仰觸申越州并相模太郎殿而卿相雲客事者就爲御所奉行沙汰任例可令行方催促之處加于小侍奉行事申可被催由之條聊宿德令也已昔兩人所存之間忽被返遣彼公卿等散狀於行方云其狀云二所御衆詣供奉人間事仰給之趣不得其意候之間所給之註文等返進候恐々謹言

十一月十二日

時宗

和泉前司殿御返事

實時

十六日 己卯晴 亥 尙雷鳴數聲

東鑑四十九

三十四

十八日 辛巳 二所御衆詣精進事明日者延引可爲廿一日之由給定仍武州被觸仰其趣於小侍

所周東兵衛五郎爲御使又求廿一日御息所爲御見物始御演出之體密々可令出于小山出羽前司若宮大路家御除二所供奉人可差進仰宜供奉人由武州同令下知給云

十九日 壬午 來廿一日爲今給精進潮御演出

事御所中御精進御息所明日可出他所給事兩條有共沙汰供奉人各可爲直垂折烏帽子之由被相觸且所被下御教書也今夕二所御衆詣之間步行供奉人等事於御前有御沙汰新右衛門督花山院中納言後藤壹岐前司武藤少卿等候其砌云

廿日 癸未 御物詣供奉之間、領狀、輩之中、一兩輩有申障事所謂

後藤次郎左衛門尉只今輕服、事出來之由申

上總三郎左衛門尉所勞之由申

廿一日 甲申 將軍家依司令給二所御精進御中御所入御陸奥入道奉入

相模太郎同四郎重政

同三郎時利同七郎宗頼

越前々司時廣尾張左近大夫將監公時

遠江右馬助清時陸奥左近大夫將監義政

彈正少弼業時越後四郎時方

木工權頭親家壹岐前司基政

上總前司長泰武藤少卿景頼

出羽大夫判官行有式部太郎左衛門尉光政

城四郎影盛和泉三郎左衛門尉行章

速江十郎左衛門尉頼連

佐々木對馬太郎左衛門尉頼氏各列歩、御

新相模三郎時村速江七郎時基、以上御

宮内權大輔時秀秋田城介泰盛

對馬前司氏信加賀守行頼

丹後守頼景城四郎左衛門尉時盛

同弥九郎長景申越御出、列騎馬、供奉、卿相雲客皆著水干、其外

武州相模太郎殿以下、若直垂、還御之時、若公私、澤

衣云

廿四日 丁亥天晴 將軍家中朝御演出

廿六日 己丑晴 玄番頭舟波長世去十五日叙

位四位上仍今日持桑彼除書出於御所是去八月

將軍家御憐施醫療之賞也其由有

廿七日 庚寅晴 卯刻將軍家御桑鶴里宮辰刻

次御先達

伊豫法眼教尊

次御駕

後藤壹岐左衛門尉基賴

薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉忠景

上總太郎左衛門尉長經

甲斐五郎左衛門尉為定

大須賀五郎左衛門尉信泰

武石新左衛門尉長胤

隱岐三郎左衛門尉行氏

同四郎左衛門尉行廣

伊東次郎左衛門尉盛時

東鑑四十九

三十七

佐渡左衛門太郎基秀

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀四郎左衛門尉泰實

葛西又太郎定廣

鎌田次郎左衛門尉行俊

大泉九郎長氏

次御親役人 已上步行 儀馬左五

太宰少貳景賴

次御後

新右衛門督顯方

讚岐守忠時朝臣

二條少將雅有朝臣

花山院中納言長推  
中御門新少將實隆朝臣

陸奥左近大夫將監義政 彈正少弼業時

越前々司時廣 尾張左近大夫將監公時

相摸四郎宗政 越後四郎時方

武藏五郎時忠 壹岐前司基政

木工權頭親家 刑部權少輔政茂

伊賀前司時家 周防前司忠經

上總前司長泰 出羽大夫判官行方

隱岐大夫判官行氏 甲斐守為成

千葉介賴胤

圖書頭忠茂朝臣 權天文博士為親朝臣

玄番頭長世朝臣

安藝右近大夫親經 能登右近藏入仲家

東鑑四十九

三十八

上野三郎國家 阿曾沼小次郎光經

大須賀新左衛門尉朝氏

鎌田圖書左衛門尉信俊

進三郎左衛門尉宗長

後陳隨兵十騎

今日相州 被頭寫一日經是息女惱邪氣依比

金判官能負女子靈託為資彼苦患也入夜有供養

之儀請若宮別當僧正為唱導說法寂中件姬若惱

亂出舌紙唇動身延足偏似蛇身之令出現為聽聞

靈氣來臨之由云僧正令加持之後惘然而止言如

眠而復本云

北八日 辛卯晴 御奉幣宮根御山泉徒等湖上

舟延年垂髮翻迴雪之袖盡歌舞之曲

廿九日 壬辰陰 夜半令詣三嶋社御之奉幣時

天云

卅日 癸巳 雨降御祭伊豆山

十二月小

一日 甲午 雨降已赴御奉幣伊豆山則御下向

御夜宿上肥鄉當所御所駟駒等極美盡善甚南源

佐之間為御休息御逗留上肥鄉

二日 乙未陰 御止宿酒勾驛相摸國御家人群

衆此所

三日 甲辰晴 將軍家還御于鎌倉御所御奉幣

無為

東鑑四十九

三十九

十六日 己酉 明年正月御弓始射手等事被差

定之處稱所勞申障之輩相交之間今日於小侍所

相摸太即殿越後守等經談合自由對捍不可然內

調之時企案上可申子細之旨被下御教書示又武

州長時頻病辛苦云

十七日 庚戌 梶原上野六郎被加小侍番帳武

藤少卿景賴傳仰於小侍所云

十八日 辛亥晴 依將軍家御願被供養八萬四

千基塔導師尊家法印

廿日 癸丑陰 酉刻御所東侍陀羅尼衆休所為

飛入御慎之由陰陽道等勘申之

廿一日 甲寅晴 入道右大辨光俊朝臣

自京都下著當世歌仙也

廿三日 丙辰 小雨降右大辨禪門始出仕和歌

與行盛也

廿四日 丁巳 寅赴武州病患屬減氣汗太降云

廿五日 戊午 京上所役事有其沙汰今日被定

法云

一京上役事付大番役

諸國御家人悉之錢貨之夫駟該巨多用途於貧

民等致可法謹責於諸庄之間百姓等及伴際不

安堵由遍有其聞然則於大番役者自今以後改

別錢參百丈此上五町別官賦一疋人夫二人可

該催之於此外者一向可令停止也令定下負數

東鑑四十九

四十

以後於日來沙汰所之者就此負數不可加增也

一 地頭補任所々內御家人大番役事

先々御家人役勤仕之輩者可為守護催促也

又將軍家明日依可有御方違供奉人事如例以御

惡被催之武藏前司尾張前司越後守等者兼可候

御備御所之旨被觸仰訖武州者日來勞越州者心

神聊有違亂之事旨言上云

廿六日 己未晴 依去廿日為惟被行百怪祭令

將軍家御方違于相摸太即殿御幸中御所

御同車八葉

供奉人

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

彈正少弼業時

同七郎宗賴

越後四郎時方

宮内權太輔時秀

壹岐前司基政

和泉前司信方

武藤少卿景賴

隱岐大夫判官行宗

城六郎顯盛

薩摩七郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

以上立烏帽子五垂

相摸三郎時輔

新相摸三郎時村

武藏五郎時忠

秋田城介泰盛

木工權頭親家

上総前司長泰

出羽大夫判官行有

式部太郎左衛門尉光政

信濃次郎左衛門尉時清

加藤左衛門尉景經

東鑑五十

四十一

廿七日 庚申晴 松殿法印良基去八月將軍家

御憐之時御祈賞今月十六日任權僧正聞書今日

到來為賞則參賀御所土御門中納言為申次

廿九日 壬戌 明春正月朔可有御行始供奉人

事可相催之由武藤少卿傳仰於小侍所而為院飯

出仕人々於御所庭上兼取座藉所差並札也仍光

泰實俊行向其所就札所見註交名進上申下御點

相觸其旨云

新刊吾妻鏡卷第五十

文應二年辛酉 二月廿日 弘長元年

正月大

一日 癸亥霽

垢飯相州禪室

兩國司以下著布

衣出仕先候東西侍次申出御時尅之後相分于座

上東西著座

西座

武藏前司

遠江前司

刑部少輔

秋田城介

和泉前司

尾張前司

越後守

治部權太輔

佐々木壹政前司

那波刑部少輔

縫殿頭

後藤臺收前司

伊賀前司

周防前司

武藤少卿

甲斐守

太田新民部大夫

式部太即左衛門尉

長左衛門尉

加地七郎右衛門尉

常陸次郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

宮内權太輔

對馬前司

日向前司

上総前司

加賀前司

上野介

伊豆太即左衛門尉

佐藤民部大夫

善五郎左衛門尉

長内左衛門尉

城四郎左衛門尉

武藤右近將監

筑前三郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

城六郎

城彌九郎

上野太即左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

壹政三郎左衛門尉

武藤次郎左衛門尉

上総太即左衛門尉

周防五郎左衛門尉

大曾彌太即左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

善六郎左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

城十郎

越中次郎左衛門尉

遠江十郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉

後藤次郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

肥後三郎右衛門尉

小野寺新左衛門尉

上総三郎右衛門尉

式部左衛門三郎

上総四郎

山田彦次郎

上野六郎

甲斐三郎左衛門尉

東座

越後右馬助

陸奥左近大夫將監

彈正少弼

武藏左近大夫將監

相模三郎

式部次郎左衛門尉

備後太即

武石新左衛門尉

矢部平次馬次郎

善六郎左衛門次郎

隱岐四郎兵衛尉

越前々司

尾張左近大夫將監

新相模三郎

民部權太輔

同七郎



遠江、右馬助  
駿河、四郎  
駿河、五郎  
遠江修理亮三郎  
武藏、八郎  
少輔、左近、大夫  
新田參河前司  
直講  
下總前司  
周防修理亮  
安藝、右近、大夫  
少輔、次郎

遠江七郎  
越後四郎  
武藏五郎  
越後、又、太郎  
同、九郎  
木工、權頭  
助、藏  
大藏、少輔  
中務、少輔  
義濃、兵衛、大夫  
長井、判官、代  
那波、次郎

東鑑五十

三

安藝掃部助  
能登、右近、藏人  
近江、藏人  
皆吉、大炊、助  
大隅、大炊、助  
大隅、藏人  
備後、藥師、九  
紀伊、次郎、左衛門、尉  
伊賀、左衛門、次郎  
周防、三郎、左衛門、尉  
豐後、三郎、左衛門、尉  
大見、肥後、四郎、左衛門、尉

美作、左近、大夫  
兵衛、藏人  
大隅修理亮  
赤塚、藏人  
宗民部、大夫  
進三郎、左衛門、尉  
大和、和、左衛門、尉  
河越、小次郎  
太田、四郎、左衛門、尉  
加治、六郎、左衛門、尉  
鎌田、次郎、左衛門、尉  
伊藤、次郎、左衛門、尉

天對、肥後、新、左衛門、尉  
阿部、左衛門、尉  
大和、新、左衛門、尉  
鎌田、次郎、兵衛、尉  
三村、左衛門、尉  
薩摩、十郎、左衛門、尉  
太學、允  
周防、六郎、左衛門、尉  
香西、又、太郎  
平賀、四郎、右衛門、尉  
佐河、四郎、左衛門、尉  
長雅、樂、左衛門、三郎  
平賀、三郎、左衛門、尉  
野部、五郎、左衛門、尉  
萩原、右衛門、尉  
隱岐、四郎、左衛門、尉  
長右衛門、尉  
清六郎、兵衛、尉  
小何、左衛門、尉  
足立、三郎、右衛門、尉  
阿佐、義、左近、將監  
源太、左衛門、尉  
將野、八郎、左衛門、尉  
小泉、四郎、左衛門、尉

東鑑五十

四

藤田、次郎、左衛門、尉  
對馬、左衛門、次郎  
大須賀、新、左衛門、尉  
大泉、九郎  
稻毛、左近、將監  
將野、左衛門、四郎  
將野、左衛門、六郎  
將軍家出御、南面、土御門、中納言、上御、藤原、御、引、出、物  
如、恒  
實時  
御、行、騰  
御、武藏、前司、朝直  
御、調度  
越後、守  
秋田、城、介、泰盛  
新相模、三郎、時村  
栗飯原、右衛門、尉

二御馬 相摸三郎時輔  
三御馬 越後四郎顯時  
四御馬 城四郎左衛門尉時盛  
諏方四郎兵衛尉  
安東官内左衛門尉

同五郎左衛門尉重景

五御馬 遠江七郎時基  
大倉次郎左衛門尉

未討將軍家御行始相摸禪室亭  
御所御方

武藏前司朝直

彈正少弼葉時

遠江右馬助清時

越後四郎顯時

秋田城介泰盛

刑部少輔敦時

尾張左近大夫將監公時

新相摸三郎時村

相摸七郎宗顯

同六郎顯盛

和泉前司行方

中務權少輔重教

新田參河前司賴氏

後藤壹岐前司基政

日向前司祐泰

周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能

信濃次郎左衛門尉時清

小野寺新左衛門尉行通

武石新左衛門尉長隆

上總太郎左衛門尉長經

隱岐四郎兵衛尉行廉

東鑑五十

五

同三郎左衛門尉行章

木工權頭親家

佐々木壹岐前司泰經

伊賀前司時家

常陸次郎左衛門尉行清

武藤左衛門尉賴泰

加藤左衛門尉景經

甲斐三郎左衛門尉為成  
鎌田次郎左衛門尉行俊  
中御所御方

遠江前司時直

陸奥左近大夫將監義政

相摸三郎時輔

武藏五郎時忠

武藤少卿景賴

周防前司忠經

城四郎左衛門尉時盛

同五郎左衛門尉重景

武前三郎左衛門尉行實

出羽七郎左衛門尉行賴

土肥四郎左衛門尉實經

武藤右近將監時村

上總三郎右衛門尉義泰

大曾禰太郎左衛門尉長賴

鎌田三郎左衛門尉義長

御引出物役人御劔

治部權太輔賴氏

砂金

左近大夫將監義政

左近大夫將監公時

一御馬

武藏五郎時忠

大瀬三郎左衛門尉惟忠

二御馬

常陸左衛門尉行清

和泉三郎左衛門尉行章

薩摩七郎左衛門尉祐能

三御馬

和泉三郎左衛門尉行章

薩摩七郎左衛門尉祐能

東鑑五十

六

還御之後御息所御行初同廣

二日 甲子天晴 境飯奥州津門土御門中納言

上御簾 御劔刑部少輔教時

御調度 左近大夫將監公時

御行騰 太宰權少貳景賴

一御馬 相模三郎時輔

二御馬 工藤三郎右衛門尉光泰

三御馬 武藏五郎時忠 對馬次郎兵衛尉本

四御馬 梶原大郎左衛門尉景經 同五郎景方

周防五郎左衛門尉忠景  
同六郎左衛門尉忠賴

五御馬 出雲次郎左衛門尉時光 同六郎義泰

三日 乙丑陰 境飯相州御沙汰御簾役

黃門候之 御劔 越後守實時 御調度

左近大夫將監公時 御行騰 和泉前司行方

一御馬 遠江七郎時基

式部次郎左衛門尉光長

二御馬 越後四郎顯時 糟屋左衛門三郎行村

三御馬 出羽七郎左衛門尉行賴

同八郎左衛門尉行世

四御馬 城六郎顯盛 同九郎長景

五御馬 新相模三郎時村

伊賀右衛門三郎朝房

來七日可有御茶于鶴屋八幡宮供奉惣人數任例可令注申之旨被仰下行方爲奉行

四日 丙寅 七日供奉事以御點人數召進奉而

最明寺殿公達御事有可被載于如散狀之次第所

謂相模太郎同四郎同三郎同七郎如此是禪室內

之所思也當時書樣頗違御意工藤三郎右衛門尉光泰得其趣告事由於越州云越州報云於今

度狀若人々既進奉訖此上今更不能書改職直

承存之後可改向後體之由云此事不限今日去年

則安東左衛門尉光成告申旨如此云太井越州所

存職武藤少卿一同之間去年冬之比於禪室御前

聊假申寢鼻云凡太郎殿可被著兄之上由被仰

五日 丁卯天晴 將軍家御祈禱如和泉前司行

方奉行之又來九日可有御鞠始之由云而懸一本

枯間爲被仰下可注進交名之旨行方傳仰於平旦

左衛門尉實俊仍住進之其中被下御點訖

刑部少輔 越前々司

遠江守 武藏五郎

秋田城介 出羽大夫判官

仰此人々來九日可有御鞠始懸一本期自以前可

尋進之由被仰下之趣被書下之越州奉云

六日 戊辰霽 子丑兩尅雷鳴三度今日以太多

由左衛門尉可加明日布衣供奉人之由被仰行

方奉行之二

七日 己巳天晴 將軍家御茶鶴里八幡宮

供奉人

公卿

土御門中納言頭方卿

六位二位異姓卿

坊門三位基輔卿

殿上人

一條中將能清朝臣

冷泉少將茂朝臣 中御門少將宗世朝臣

二條少將雅有朝臣

中御門新少將實信朝臣

讀波守師平朝臣 坊城中將公敦朝臣

東鑑五十

唐橋少將具忠

一條侍從公冬

前助

御帽子候 中務權少輔重教

赤塚左近藏人資茂 安藝掃部助大夫親定

布衣

武藏前司 同五郎

尾張前司 同左近大夫將監

遠江前司 同右馬助

越後守 同四郎

相摸太郎 同三郎

同七郎 刑部少輔

治部權大輔 彈正少弼

新相摸三郎

遠江七郎

和泉前司

佐々木壹岐前司

後藤壹岐前司

木工權頭

上総前司

縫殿頭

周防前司

甲斐守

式部太郎左衛門尉

常陸次郎左衛門尉

東鑑五十

武藤右近將監

薩摩七郎左衛門尉

伊豆太郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

善五郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

長次郎右衛門尉

帶廻

出羽七郎左衛門尉

武藤左衛門尉

周防五郎左衛門尉

上総次郎左衛門尉

民部權大輔

那波刑部少輔

官内權大輔

武藤少卿

同次郎左衛門尉

伊賀前司

同三郎左衛門尉

日向前司

同六郎左衛門尉

大隅修理亮

城六郎

信濃次郎左衛門尉

十

大多和左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

出羽八郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

進三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

加藤左衛門尉

同四郎

鎌田三郎左衛門尉

式部次郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

武左衛門左衛門尉

大曾彌太郎左衛門尉

薩摩十郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉

九日 辛未

於前濱有御的始射手之試相摸太

即殿令監臨給工藤三郎右衛門尉光泰候御共奉

行之此外南部次郎小笠原彦次郎等為御共越後

守實時故障子息四郎主相具平置左衛門尉實俊

行向同奉行云射手十二人一五度射之

一番 二官彌次郎

橫地左衛門次郎

東鑑五十

十一

二番

桑原平内

周枳兵衛四郎

三番

澁谷新左衛門尉

望月余一

四番

橫溝彌七

平嶋彌五郎

五番

本間彌四郎左衛門尉

小嶋又次郎

六番

平井又次郎

本曾六郎

射記之後被定仰云今度令勒人數不幾之上各宜

令皆察者

十日

壬申天晴 昨日射手之中桑原平内橫溝

彌七等申障之間有許容以此外射手可為五番由

今日御所御鞠始也廷尉三人列入數所謂出羽

大夫判官行有下指上野大夫判官廣經上老足利

大夫判官家氏等也爰刑部卿傾申云上指雖有避

近之例非吉事尤可有斟酌云而二條少將雅有申

云如平元二年十二月二日雅經卿記者賴時白櫻

東鑑五十

十二

袴上括凡檢非違使上括事非常儀蹴鞠之時無憚

歟後白河院御時納賴和康上括當院御時一蘭判

官重輔同又上括然者有何事哉云是則出羽者就

難波之訓上野足利者隨二條之說云二人長者根

元雖受一流之口傳枝葉勘出兩樣之故實者歟其

邪正人難辨之云

十四日

丙子霽

御的始射手十人二五度射之

今日越後守不出仕相摸太郎殿一所令奉行之給

一番

二官彌次郎時光

橫地左衛門次郎長重

二番

本間彌四郎左衛門尉忠時  
小嶋弥次郎家範

三番

望月余一師重  
周枳兵衛四郎頼泰

四番

平井又次郎有家  
木曾六郎隆俊

五番

瀧谷新左衛門尉朝重  
平島弥五郎助經

東鑑五十

廿五日

丁亥 來月七日御息所依可有御余鶴  
置八幡宮注供奉人數可進覽但於茹田舍人者不  
可書加之由被仰小侍所行方傳之云則注之被進

廿六日

戊子天晴 來月可被始二品御精進仍  
注可令參籠之人數可進覽之由被仰出云且此衆  
可兼御息所御案官供奉

今日和歌御會始題讀師紙屋河二位頭講師中  
御門侍從宗世朝臣也右太辨入道貞親來長

相州武州越前々司時弘左近大夫將監茂政壹段  
前司基政掃部助範元鎌田次郎左衛門尉行俊上

布等構此席

二月六

二日 甲午霽 今年辛酉也仍將軍家被行御祈  
等天地災變宜賢朝臣 天曾地府資俊朝臣七座  
泰山府君晴秀國經泰房晴成以平泰繼文元靈所  
七瀬祭職宗茂氏重氏晴尚親貞晴行維行和泉前  
司行方奉行之

七日

己亥霽 將軍家二所御精進始未刻御息  
所令詰鶴置宮御初度先茂氏從中御所  
勤御被彈正少弼葉時侯信周防五郎左衛門尉  
候役送御澳越前々司役送信濃次郎左衛門尉供  
奉人著淨衣將軍家御精進中參籠人可供奉之由  
某日雖有其定人數不足之間被催加之云

東鑑五十

供奉人

淨衣

武藏前司朝直其侍淨衣立烏帽子同

尾張前司時章其侍淨衣立烏帽子上

同左近大夫將監其侍淨衣立烏帽子上

彈正少弼侍一人淨衣

越前々司侍一人同上

越後四郎顯時相摸三郎時輔侍折烏帽子上

同七郎宗頼侍一人立烏帽子上

遠江七郎時基同上 木立權頭相摸一兩華

和泉前司行方其侍淨衣折烏帽子小舎人童  
同三郎左衛門尉行章 秋田城介具藤色



同六郎顯盛

日向、前司祐泰

同五郎左衛門尉忠景

加賀兵衛大夫親氏 常陸次郎左衛門尉行清

信濃次郎左衛門尉時清

出羽七郎左衛門尉行賴

薩摩七郎兵衛尉祐能

土肥四郎左衛門尉實經

隱岐四郎左衛門尉行長

武石新左衛門尉長胤

十一日 亥卯宵 二所奉幣御使相摸三郎時村

主進發今日鶴置臨時祭也尾張前司時章為奉幣

東鑑五十

十五

御使

十五日 丁未 雨降申冠二所奉幣御使相摸三

郎歸桑今日自走湯山歸著

廿日 壬子天晴 未起春雨屢灑修理替物用途

并境飯役事充課百姓事永停止之以地頭得分可

致沙汰之由被定之

今日於鶴置八幡宮被行仁王會講師宮寺別當僧

正隆辨讀師辨法印審範學頭請僧百口

福寺安祥寺兩僧正并本大臣法印羅惠等僧老僧

衛門藏入右所役等取布施宗民部十郎矢部次郎

太郎等為手長中山城前司盛時奉行之

請僧

左方

新附法印堂

求福寺 權少僧都道繼

大慈寺 長尊釋迦堂

佛足 定慧

佛足 慈曉

求福寺 圓誓

新附法印堂 義伊

自餘略之

佛布施

出羽納百足

東鑑五十

十六

講師

與布百端並安寺

綾被物三重

染絹一端

色車一枚

讀師 同請僧

別布施

綾被物一重

北五日 丁巳

向每度依犯定數為士民及旅人愁之由頻達上聽

之間今日所被仰六波羅也其狀云

右方

法印權大僧都清尊

求福寺 芳源

長尊釋迦堂 聖尊

佛足 長壽院法印弟子俊云

求福寺 遷慶

安祥寺僧正弟子印教

同車賢

綾被物一組與布三匹

白布一段

供米一石

綾黃十端

紙潔物一

海道驛馬御物送夫事御使上下

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

紙潔物一

早馬事

宿々被定置二疋之處雖非急事近年連々下向之輩或三四疋或四五疋申載著帳煩役於路次致狼藉之由有其間尤不便自今以後非殊率爾事之外可任先例之狀依仰執達如件

文應二年二月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

京下御物送夫事

京下御物送夫任雜掌申請無左右依令下知人夫多々之間民之煩尤不便自今以後申請人夫之時令見知御物多少定人數可載長帳也且於

東鑑五十

十七

私物送夫者一向可令停止也兼又夫役害事於左右於路次不可致狼藉之由可被加下知之狀依仰執達如件

文應二年二月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

廿六日 戊午霽 改元詔書案著去廿日改文應二年為弘長元年

廿九日 辛酉天霽 關東御分寺社殊可興行於

神事之由日來有其沙汰今日被始行之

一 諸社神事勸行事

祭豐年不奢兩年不儉是禮典之所定也而近年

神事等或陵夷背古儀或過差忘世貴神慮難測人有何益自今以後恒例祭祀不致陵夷臨時礼莫勿多過差矣

可修造本社事

有封社者任代之府少破之時且加修理若及不破言上子細者隨其左右可有其沙汰之由被定置訖而近年社司欲貪神領利潤無顧社壇之威損壓恒下忍神慮專可謂忘公平自今以後於此制法律者可被補其職矣

可令知法勸行諸堂年中行事等事

右諸堂之勤恒依有限而供僧等優有勸修之名更無神誠信之志被補其職之防雖有法器之備

東鑑五十

十八

擇被補其職之後多用感肅之代官以羸弱之手代勤嚴重之役應太不可然禁忌再現時勞之外用代官事一切可停止兼又供料不法未下相積之由諸堂有訴訟云雜掌云寺務之知行有限之俊者何可逆應輪之清物哉而於引付雖有其沙汰猶以不事行勸殊可有嚴重沙汰之由重而之可被改易其職矣

可令諸堂執務人修造本尊事

右在神社修理可有其沙汰矣

佛事間事

右堂舍供養之人報恩追善家不測淫分矣

產事於供佛布施僧猶不成民庶黎元之煩還可招罪根更非殖善苗偏是住名聞之故歟付冥付顯其何益自今以後修佛事之人只專淨信宜停止過差矣

又關東祇候諸人家室之管作出仕之行糴以下事可令停止過差之由被定之云此外嚴制數箇條也後藤壹岐前司基政小野澤左近大夫入道米蓮等為奉行

放生會棧敷可用儉約事

可停止博奕事

鎌倉中橋修理并在家前々可掃治事

可禁制弄病者孤子死屍於路邊事

東鑑五十

十九

念佛者招寄女人以下事

僧徒畏頭橫行鎌倉中事

駕狩神社供祭外可令停止事

早馬事

有變急々時為聞達也而近代雖非太事以早速為其詮頗為人馬之煩然若自今以後非殊重事之外可止急速儀之由可被仰六波羅矣

長者事

百姓等有其煩一向被止之要鎌倉祇候之御家人等還又可有其愁自今以後充給日食可召仕之矣

五日 丁卯

引付沙汰不事行之由訴人等愁訴

之趣達上聞之間今日有評議向後無懈緩之虞早速可申沙汰也於徒拘持奉行人等者頭人就注申可被處重科之旨被觸仰引付云

十三日 乙亥霽 未尅政所之郭内朱火廢屋公

文所問注屋炎上御倉等皆免災

廿日 壬午雨降 今日評定衆召連署起請常陸

介入道行日依不加判可離其敷次引付衆等進別

紙起請亦新制事今日始施行之引付鎮番被改之

一番 三日 廿二日

武藏前司朝直

縫殿頭師連

清左衛門尉備定

東鑑五十

二十

皆吉大炊助文幸

二番 七日 廿日

尾張前司時章

直講教隆

進士次郎藏人光政

對馬左衛門次郎

三番 三日 十二日

越後守實時

上総前司長泰

江民部大夫以基

佐藤民部次郎業連

四番 七日 廿二日

出羽前司入道々空

伊勢前司入道行願

式部太郎左衛門尉光政

鳴由五郎左衛門尉親茂

筑前々司入道行善

宮内權太輔時秀

明石左近大夫兼經

刑部少輔教時

大田民部大夫康宗

長田左衛門尉廣雅

和泉前司行方

對馬前司倫長

壹岐前司某政

山各中務大夫俊行

廿五日 廿七日

秋田城介盛

伊賀前司時家

隱岐大夫判官行氏

山各進次郎行直

齊藤次朝俊

廿五日 丁亥霽

近習人々之中以歌仙被結番

當番之日可奉五言和歌之由被定下

泉侍從

又持明院少將盛越前之司時廣遠江次郎時

行仁等爲其衆

四月大

廿一日 壬子

依可直入御于奥州禪門極樂寺

序被相催供奉人可直垂立爲帽子之由

廿三日 甲寅

雨相摸太即殿十一歲御嫁女房自其細室御出之時掃部助範元假門

爲此御祈自去廿二日天曹地府祀祖靈氣等

廿四日 乙卯天晴

將軍家御騎馬入御于奥州門極樂寺新造山莊御息所同渡御相州禪門

前太宰權少貳入道蓮佐

刑部權少輔政茂

山城前司俊平

雜賀太即尚持

太宰權少貳景頼

信濃判官入道行

中山城前司盛時

山各進次郎行直

齊藤次朝俊

近習人々之中以歌仙被結番

當番之日可奉五言和歌之由被定下

泉侍從

又持明院少將盛越前之司時廣遠江次郎時

行仁等爲其衆

四月大

廿一日 壬子

依可直入御于奥州禪門極樂寺

序被相催供奉人可直垂立爲帽子之由

廿三日 甲寅

雨相摸太即殿十一歲御嫁女房自其細室御出之時掃部助範元假門

爲此御祈自去廿二日天曹地府祀祖靈氣等

廿四日 乙卯天晴

將軍家御騎馬入御于奥州門極樂寺新造山莊御息所同渡御相州禪門

令候給

供奉人

御所御方騎馬

土御門中納言

足利大夫判官

尾張左近大夫

武藏五郎

和泉前司

佐々木壹岐前司

式部太即左衛門尉

步行

御所遠江右馬助

城六郎

信濃次郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

兼作兵衛藏人

周防五郎右衛門尉

土肥四郎左衛門尉

武石新左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

中御所御方騎馬

御所御方騎馬

刑部少輔

越後右馬助

遠江七郎

相摸太即

借前之司

相摸三郎

秋田城介

中務權少輔

木工權頭

常陸次郎左衛門尉

同九郎

大隅修理亮

武藤左衛門尉

甲斐次郎左衛門尉

大曾禰太即左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

三村新左衛門尉

彈正少弼

新相摸三郎

越後四郎

同九郎

大隅修理亮

武藤左衛門尉

甲斐次郎左衛門尉

大曾禰太即左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

三村新左衛門尉

彈正少弼

宮内權大輔

武藤少卿

加賀守

步行

城五郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

明日依可有御笠懸射事太即殿裡候人并可然

諸家々人等可被催具之由行方景頼奉仰觸申小

侍所云

廿五日

射手

丙辰

於極樂寺御弟有御笠懸

東鑑五十

二十三

相摸三郎

遠江七郎

信濃次郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

小野澤次郎

三浦六郎左衛門尉

次有小笠懸而近代強不翫此藝之間凡無堪能之

人最明手揮室覽之有御自讀於小笠懸藝者太即

尤得其體召之欲令射上下太入興于時太即殿

御座鎌倉御亭仍以車夫被奉請之為城介泰盛奉

行用意御物具等御馬長崎左衛門尉就之御的武

同七郎

城五郎左衛門尉

大隅修理亮

城彌九郎

信濃判官次郎左衛門尉

武石新左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

三河前司

後藤壹岐前司

出羽七郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

小野澤次郎

東鑑五十

二十四

色青黃赤白也

五月小

一日 壬戌

夜半大倉稻荷邊聊物忽彼社壇此

間連々有會合之輩今夜々行衆怪之欲擲取之故

也悉逃散云

五日 丙寅

御所有和歌御會紙屋河二位右大

辨入道越前々司陸奥左近大夫將監後藤壹岐前

司等衆會云

十三日 甲戌 今日晝番之間於廣御所佐々木

壹岐前司泰經與滋谷太郎左衛門尉武重及口論

是泰經以武重有權為大名之由事武重答之云已

亘朝等之詞也於當時全非大名先祖重國



庄司者誠相摸國大名内也然間貴邊先祖作之本  
判官定經于時豐太神牢龍之當初者到重國之門  
得其扶持子孫今爲大名數經泰經云東國太少  
名并並谷庄司重國等皆官平氏莫不蒙彼恩顧當  
家獨不設其權勢弄譜代相傳佐々木庄偏運志於  
源家遷往相摸國尋知育之好得重國以下之助成  
終身命奉逢于右大將軍草創御代抽度々之勲功  
兄弟五人之間令補十七箇國守護職剩而之所令  
任受領檢非違使也昔牢籠更非耻辱還可謂面目  
之然重國以秀義爲母之聞令生隱岐守義清記被  
用軍之上夫非馬牛之類爲人倫之條勿論歟此上  
令過言頗荒凉事歟云列座衆悉傾耳敢不能助言

東鑑五十

二十五

六月大

一日 辛卯 奥州禪門俄病惱彼邊諸人群集今

日於厠被見怪異之後心神惘然云  
三日 癸巳雨降 申刻御所北對西端與塋所東

間海黑鳥海鴨云云又云飛落和泉前司行方即從  
等獲之即被放海邊

六日 丙申霽 爲和泉前司奉行昨鳥怪事於御  
所被行御占晴茂朝臣已下病事火事之由勘申此  
鳥貞應元年四月死寄前濱腰越等同年八月葬  
出現云

七日 丁酉天晴 於御所被行百怪祭三座爲

職宗茂氏等奉仕之政所沙汰也

十日 庚子天晴 將軍家依變異等事有御物忌

但非堅固之儀外宿人衆入也亦有評議如此云

十二日 壬寅 來八月放生會御衆宮供奉人事

自小侍所任例注交各爲申下御點被付武藤少卿

十六日 丙午天晴 奥州禪門違例事去朔月以

後每日晚息發動如癰病仍自同十一日屈請若宮

僧正令加持之勢來廿二日可及減氣之由令下僧

正被申之數輩賢息并縁者祇候人等聞之而々成

奇異之思云

十七日 丁未 供奉人事被下御點又此外

東鑑五十

二十六

隨兵

相摸三郎

直進

城十郎

筑前家即左衛門尉

以前四人事自御前直如此被注下云

十八日 戊申霽 依廣御所修理於北小庭被行

土公祭爲親朝臣奉仕之太宰權少貳景賴奉行之

彼多野出雲次即左衛門尉時光爲御使

廿一日 辛亥 足立太郎左衛門尉可爲放生會

隨兵之由被仰之處當時所勞難治得減者可衆之

由進請文云



廿二日 壬子霽 未赴部方兵衛入道蓮僧平三  
 衛門尉盛時等於龜谷石切谷邊生勇故駿河前司  
 義村之子息大夫律師良賢是依有謀叛之企也駿  
 河八郎入道式部大夫井野本尼若狹前司已下其  
 張本數輩云依之錄倉中騷動入夜近國御家人等  
 馳聚云與州禪門病惱今夕平愈心神復本云  
 廿三日 癸丑晴 相摸禪師嚴齋入城畢  
 廿五日 乙卯 良賢事被仰遣六波羅為鎮都鄙  
 騷動也其御教書云

大夫律師良賢若狹前司依有謀叛之企被召取  
 其身計指無與力之輩候也依此事在京并西國  
 御家人等令衆向者如先々可被止置也隨無殊

東鑑五十

二十七

事之由面々可被相觸者依仰執達如件

弘長元年六月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥本近太夫將監親

今日與州禪門被遣馬并南庭五劍等於若宮僧正  
 坊又室家生衣二南庭三綸三十疋武州劍南庭二  
 等同衣遠之依所勞之平減也

廿七日 丁巳 新相摸三郎時村持放生會隨兵  
 是去廿三日兄阿蘭梨入滅輕服故也依之小侍所

司平旦左衛門尉實俊相觸和泉前司行方間有沙  
 汰兄弟輕服日數為五十日八月十五日者猶日數

內也可有憚否可尋問宮寺者行方相爭先規於館

別當僧正隆辨之處於隨兵者候願庭外之間先  
 例不憚之由報申仍無殊寄

廿九日 己未 阿曾沼小次郎依落馬辭申放生  
 會隨兵云

此日 庚申霽 午赴為飛入自御所臺所東部間  
 且中障子出北遣戶依之為景賴奉行被行御占之  
 處晴茂職宗等御病事之由申之

七月大

二日 壬戌 放生會所役辭退輩事行賴景賴等  
 就執申之有其沙汰

隨兵

駿河五郎

三浦介六郎左衛門尉

東鑑五十

二十八

各勤流鎗馬之間兩役難治之由申之

城九郎

依為城介分流鎗馬射手之由申

阿曾沼小次郎

落馬之由申

於以前兩人者自身非射手者不可有恩許早如元  
 散狀可為隨兵兩役事傍例更無御免者次至長景

者為射手之上者可被免者次光經者依落馬著甲  
 冒事為難治者著布衣可令供奉者各被仰此旨實

依奉行之

三日 癸亥天晴 於御所被修五尊合行法若官  
 別當僧正奉仕之伴僧八口云是聊依有御憚也

九日 巳巳 放生會隨兵被差定之中江戸七  
太即者老子病斗會難著鑑之由依申之有恩許和  
泉六郎左衛門尉並婦昨日ハ日 嬰兒死之由申之  
勿論云景頼為奉行云

十日 庚午天晴 五尊御修法鎮願云又自今  
依可被修別御所為左大臣法印壇所於御所近邊  
被點入々宿所行方承仰相觸平望左衛門尉工藤

三郎右衛門尉等之間兩人點進其所云

十一日 辛未 明日依可有入御山内殿可催供  
奉人之由被仰出云

十二日 壬申雨降 將軍家御馬入御景明寺  
第覽行賴義馬相撲等勝負亦管絃詠歌以下有御

遊宴等云 東鑑五十 二十九

供奉人 足利大夫判官 越前々司  
彈正少弼 尾張左近大夫

相摸三郎 遠江七郎  
武藏五郎 秋田城介

宮内權太輔 後藤壹岐前司  
武藤少卿 式部太即左衛門尉

城六郎 信濃左衛門尉  
薩摩七郎左衛門尉

步行 志保兵衛藏人 城九郎

和泉三郎左衛門尉 出羽七郎左衛門尉

武藤左衛門尉 周防五郎左衛門尉

遠江十郎左衛門尉 上総太即左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉 同四郎兵衛尉

佐々木壹岐三郎左衛門尉 土肥四郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉 肥後四郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉 武石新左衛門尉

鐮田次郎左衛門尉 大泉九郎

中郎所御方 野馬 陸奥左近大夫將監

刑部少輔 遠江左馬助

武藏左近大夫將監 民部權太輔

和泉前司 相摸七郎

佐々木壹岐前司 木土權頭

城四郎左衛門尉 新田參河前司

步行 常陸次郎左衛門尉

同十三日還御之時 大隅修理亮

城五郎左衛門尉 同十郎

周防四郎左衛門尉 上野太即左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉 大曾彌太即左衛門尉

鐮田圖書左衛門尉 小野澤次郎

十三日 癸酉天晴 晚頭將軍家自山内

日工藤三郎右衛門尉光泰依有故障放生會

人祿狀等記。一向被付平岳左衛門尉實俊。又中  
御所御方自今以後依可被給護身爲御驗者休所  
於御所近邊被點人々宿所向後可爲巡役之由被  
仰下之行方爲奉行云  
可被點宿所入々

花山院中納言御免

上総前司

出羽入道

後藤壹政前司

筑前入道

木工權頭

薩摩七郎左衛門尉同

周防五郎左衛門尉同

新田三河前司重長間  
御免

圖書頭御免

尾張前司

秋田城介

常陸入道

和泉前司

東鑑五十

三十一

十四日 甲戌天陰 月蝕不現

十七日 丁丑霽 京都使者來著申云去七日龜

山仙洞御車宿燒亡失火諸人群參打銷之間不及

他所云

十八日 戊寅霽 三位權僧正賴兼入滅七十七

太納言師賴卿孫證通僧都真弟子公實僧正入室

受法對覺朝僧正灌頂願密兼學公家證義 上皇

熊野御幸御導師後上嘉禎元年十二月十八日

韓權大僧都元弘四年五月廿三日叙法印

建長六年十二月卅日住權僧正八年月日補園城

寺別當于時号法性宗

廿二日 壬午天晴 政所門并廳屋等新造事有

其汰沙今日關東近古詠可撰進之由被仰壹岐前  
司基政

廿九日 己丑 武藏前司筑前入道行善常陸入

道行日等放半會之時可參候于廻廊之由可相觸

之旨被仰下云隨兵之中在國輩四人進待退請文

昨日自小侍所付武藤少卿景賴之間今日披露此

外條々有其汰沙云

足利太郎左衛門尉

淡路又四郎左衛門尉

相馬孫五郎左衛門尉

佐竹常陸次郎

以上被關食訖之由云

東鑑五十

三十二

在錄倉人々中申障

尾張前司

治部太輔

上総前司

周防三郎左衛門尉

出羽三郎左衛門尉

以上勞之由申

畠山上野前司

官人事

足利太夫判官家氏

出羽太夫判官行有

以上三人被催促之處行有行氏者已辭職訖蒙在

越前々司

周防守

佐渡五郎左衛門尉

宇都宮五郎左衛門尉

當時所勞得職者可叙  
之由申

隱岐太夫判官行氏

上野太夫判官廣經

國恩許之由、據請文廣經者申領狀家氏者當時在國之間、可被催否、去、於七日、於相州禪室、御所有沙汰、可申評定之由、治定、仍今日、實俊光泰等、披露之處、早、可相催者、則被成下、御教書云云

八月小

一日 辛卯 鎌田次郎左衛門尉善六郎左衛門次郎、可催直垂著之由、云景賴奉

二日 壬辰 伊勢入道行願觸申、小侍所云、愚息賴經、三郎左衛門尉、當時在國之處、被加放生會供奉

東鑑五十

三十三

人、先立鹿食事、可有免許歟云

三日 癸巳 武藏五郎、可為隨兵、越後四郎著布衣、可供奉之由、被仰下云

五日 乙未 小泉四郎左衛門尉、可加直垂裝之由、云出羽藤次郎左衛門尉、被仰可著布衣之旨、之處、日數已迫之間、將衣維用意之由、辭申云、今日申障之輩

城、五郎左衛門尉、始、進奉、今、勞由申

伊東八郎左衛門尉

伯耆四郎左衛門尉

已上二人所勞之由申

七日 丁酉 駿河五郎、辭退隨兵、事始、則勤仕流

騎馬、俊之、間、計會之由、申、後亦稱所勞之由、仍度々被仰之處、如去、六日、請文者、病、難治、之間、加灸之趣也、而當出仕之上者、固辭不可、然、重、可催之由、云、又直垂著中、伊勢、四郎、為父、伊勢、入道、分流、騎馬、射、手、之由、申、之、間、無、左右、有、恩、許、云云

八日 戊戌 布衣供奉人、依、有其、關、可加、越中、五郎左衛門尉、同、六郎左衛門尉、等、之由、被仰出云云

十日 庚子 天晴 駿河五郎、事、去、八日、重催促之處、猶、以、難治、之由、載、請文、仍、有、其、沙汰、故障、之趣、雖、無、其、理、如、當時、若、隨兵、有、數輩、歟、可有、免許、之由、被仰出云云、又尾張守行有隱岐守行氏等者、著布衣、可供奉云云、御身、固、陰陽師、此、間、九人也、今日、被、縮、六番

東鑑五十

三十四

晴茂、晴宗等、重服之間、職宗、茂氏等、為父、名、代、勤仕之、而、募、彼、勞、効、相、并、又、共、被、召、加、以、其、例、為、親、朝、臣、子、息、仲光、又、被、召、加、之、處、範元、申云、父子、可、相、并、者、仲光、者、範元、下、藩、也、不、可、被、超、越、云、為、和、泉、前、司、奉、行、有、評、議、閥、宿、老、之、奉、弱、冠、之、類、父、子、相、並、之、條、不、可、然、之、由、被、仰、出、職宗、茂氏、仲光、等、被、除、其、衆、仍、本、番、衆、晴茂、宣、賢、為、親、晴秀、資、俊、泰、房、等、六、人、也

十二日 壬寅 放生會、隨兵、內、常陸、左衛門尉、尉行、清、一、人、可、候、于、先、陣、最、前、出、羽、七郎左衛門尉、尉行、賴、者、必、可、為、後、陣、之、由、被、定、下、云

十三日 癸卯 為將軍家、御願、被、奉、御、躬、於、諸、社、筑前、次郎左衛門尉、尉行、賴、奉、行、之、次、放、生、會、御、出、之

問事修之有其沙汰先被定供奉人著座之所十五  
日者隨兵者如例伺候西迴廊東方著侍衣之替者  
可為東迴廊前十六日者隨兵者侍門南左右在西  
可著次座席事東者自腋門前迄于東而布衣人  
少之其次先陣隨兵可著西者自迴廊迄西而布衣  
人又少之其次可為後陣隨兵

次宮內權大輔

宇部官石見前司

壹岐三郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

等各依有處食事待申供奉間事為行方景賴等奉  
行內々有其沙汰太自由也放生會以後殊可有其  
沙汰之由云

東鑑五十

三十五

此間事平里左衛門尉實俊一人申沙汰之工藤三  
郎右衛門尉光泰輕服之故也而實俊奉行難仰之  
由越州依被申之自相摸太郎殿被差副平三郎左  
衛門尉之間座席事可存知之旨被仰舍

十四日 甲辰 放生會條々重有其沙汰所謂立

隨兵并布衣供奉人等次第可進覽之旨被仰越後  
守之處任位次於次第者不可及子細不然者無左

右難計申之由以景賴被報申之重仰云不可依位  
次且住家之清花且分嫡庶可立次第也者於御持

佛堂前公卿座越州并武藤少卿等雖相談之非位  
次之第者凡難道行之間猶言上其由此上被止其

義次中御所依可有御參被定供奉人是平三郎

左衛門尉依可奉行下賜其散狀如將軍家御共著  
直垂者可候之可令帶知否有沙汰不可然云次伊  
勢次郎左衛門尉賴經佐々木壹岐四郎左衛門尉  
長經鹿食谷事父壹岐前司泰經伊勢入道行願等  
就愁申之評定次及其沙汰有御免云次小野澤次  
郎山田彦次郎可催加直垂著之由被仰云次供奉  
人等於宮中可著座次第被定之兩方御被敷之前  
除御事戶之外布衣衆可候其下除兩國司著座之  
前東者可為先陣隨兵座西者可為後陣隨兵座云  
十五日 乙巳天晴 鶴里放生會御息所為覽擇  
樂渡御與其後將軍家御出供奉人  
生陣隨兵

東鑑五十

三十六

武田三郎政經

小笠原六郎三郎時直

城六郎顯盛

常陸左衛門尉行清

一人可候前之由雖  
前案已定賜期如此

三浦六郎左衛門尉賴盛

信濃次郎左衛門尉時清 足利上総三郎滿氏

千葉介賴胤 新相摸三郎時村

遠江七郎時基 武藏五郎時忠

御所御方

布衣

相摸太郎

刑部少輔

彈正少弼

尾張左近大夫將監

越後右馬助時親

民部權太輔



相摸三郎

越後四郎

木土權頭

和泉前司

佐々木章岐前司

越中前司頼業

後藤章岐前司

同新左衛門尉

縫殿頭

日向前司

尾張守行省

隱岐守行氏

大隅修理亮

武藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉長經

善五郎左衛門尉康家

伊勢次郎左衛門尉

梶原太郎左衛門尉景經

紀伊次郎左衛門尉為經

紀伊次郎左衛門尉為經

伊勢次郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉為經

伊勢次郎左衛門尉

東鑑五十

三十七

肥後四郎左衛門尉

河内三郎左衛門尉祐氏

三村新左衛門尉時親

足立三郎左衛門尉

長次右衛門尉義連

加地七郎右衛門尉比經

帶劍

式部次郎左衛門尉光長

城十郎時景

武石新左衛門尉

周防六郎左衛門尉忠頼

筑前五郎左衛門尉行重

依々木對馬四郎宗經

出雲次郎左衛門尉時光

足立藤内左衛門三郎政遠

後藤章岐次郎左衛門尉基廣

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

宇佐義三郎兵衛尉祐明

薩摩新左衛門尉祐重

遠山孫太郎景長

甲斐五郎左衛門尉為定

小泉四郎左衛門尉頼行

善六左衛門次郎盛村

後陣隨兵

武藏八郎頼直

駿河五郎通時

遠江十郎左衛門尉頼連

武石三郎左衛門尉朝龍

小野寺新左衛門尉行通

隱岐三郎左衛門尉行景

大曾彌太郎左衛門尉

小田左衛門尉時和

土肥左衛門尉

完戶次郎左衛門尉家氏

河越次郎經重

出羽七郎左衛門尉行頼

中御所御方

布衣

陸奥左近大夫將監

相摸四郎

越前々司

武藏右近大夫將監

遠江右馬助

刑部權少輔

對馬前司

武藤少卿

伊賀前司

周防前司

加賀守

薩摩七郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

出羽彌藤二左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

甲斐次郎左衛門尉

足近三郎右衛門尉

梶原太郎左衛門尉

東鑑五十

三十八



伊勢次郎左衛門尉 肥後四郎左衛門尉  
越中五郎左衛門尉

直垂

出羽八郎左衛門尉 信濃判官次郎左衛門尉  
伊賀次郎右衛門尉 伊東次郎左衛門尉  
梶原三郎左衛門尉 近江三郎左衛門尉  
上総四郎 善五郎左衛門尉  
小野澤次郎

官人

足利大夫判官 上野大夫判官

迴廊參入々々

相摸守政村朝臣 武藏守長時

東鑑五十

三十九

武藏前司朝直

十六日 丙午天晴 御參宮同昨流鏑馬以下如

例

九月大

三日 壬戌霽 辨法印審範長病已危急是依為

顯密之碩學殊所被賞也而今日申一赴相州彈

室為最後御對面入御彼雪下北谷宿坊武田七郎

南部又次郎工藤三郎右衛門尉光泰同木工左衛

門尉等候御共審範於持佛堂奏謁顯密事理之法

門重之雖令問答給及酉時發令歸給之刻禪室重

被仰云最初行攝之願返々有憑云於宗門雖關大

悟御尚以鎮行攝之緣給賢慮尤難量者歟

四日 癸亥天晴 申尅法印權大僧都審範入滅  
年七熱田大官司散位季範曾孫法橋明季吳弟子  
顯密長辨法眼門第最勝講々聽三會已講密宗道  
禪僧正受法公緣僧正灌頂弟子

貞永元年鶴置入幡宮供僧

入夜女房帥局審範臨終正念之由申相州禪室之

趣為哀傷之中御悅之由被感仰云

九日 戊辰天霽 大曾楠次郎左衛門尉盛經入

道家燒亡

十九日 戊寅 御息所為御服藥 明日依可有

出御干山內亭供奉人事故被迴散狀供奉人皆可著

直垂御與寄役人者可用立烏帽子云散狀有三通

一通騎馬一通步行一通御坐于山內殿之程令抵

候可勤仕御格子役以下之人數也又小侍所司工

藤三郎左衛門尉光泰二所參詣之間著到等事暫

可令小野澤次郎時仲奉行之由被定云

廿日 己卯天晴 入夜若宮大路燒亡今夕中御

所入御最明寺御弟為御服藥御藥湯等事暫可有

御座云

供奉人

刑部少輔

相摸二郎

遠江七郎

武藏五郎

新相摸三郎

同七郎

越後四郎

秋田城介

東鑑五十

四十

科前司

武藤少卿

步行

城九郎長影

武藤左衛門尉

周防四郎左衛門尉忠泰

上野太即左衛門尉景經

大曾彌太即左衛門尉長賴

鎌田次郎左衛門尉行俊

武石新左衛門尉長胤

肥後四郎左衛門尉行定

佐々木對馬四郎宗經

宮内權太輔

後藤壹岐前司

出羽七郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉行通

甲斐三郎左衛門尉

東鑑五十

四十一

一官次郎左衛門尉康有

小野澤次郎時仲

十月小

四日 癸巳天晴 將軍家入御最明寺御中御所

自去月有御坐之故也

供奉人

騎馬

土御門中納言

讃岐守忠時朝臣

彈正少弼

越後四郎

武藏五郎時忠

參河前司賴氏

刑部卿 宗教卿

越前之司時廣

武藏左近太夫將監時遠

相摸七郎宗賴

木土權頭親家

和泉前司

佐々木壹岐前司

武藤少卿景賴

上野太夫判官重光

步行

同六郎顯盛

薩摩四郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

遠江十郎左衛門尉賴連

小野寺新左衛門尉道經

甲斐三郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

後藤壹岐前司

尾張守行有

城四郎左衛門尉時盛

同十郎時景

武藤左衛門尉賴泰

義作兵衛藏人家教

隱岐三郎左衛門尉行景

武石新左衛門尉長胤

東鑑五十

四十二

將野四郎左衛門尉景茂

同日及晚兩所還御供奉人被催之

御所御方供奉人

越前之司

彈正少弼

相摸三郎

和泉前司

武藤少卿

上野太夫判官

中御所御共

相摸七郎

刑部少輔

新相摸三郎

武藏五郎

佐々木壹岐前司

木土權頭

陸奥左近太夫將監

武藏左近太夫將監

越後四郎

秋田城介

三河前司

後藤壹岐前司

宮内權太輔

尾張守

五日 甲午天晴

將軍家自山内還御

十九日 壬申

園城寺僧經仙朝僧正以下數輩

列衆評定所依本寺訴訟事也去十三日令下著

廿一日 庚戌天晴

政所廳屋以下屋々事始

廿四日 癸丑

園城寺僧經等歸洛

廿九日 戊午陰

貢馬御覽如例

十一月大

一日 己未天晴

前下野守正五位下藤原朝臣

素經素經年五十九

時在京

二日 庚申天晴

貢馬貢金筆進發京都

三日 辛酉霽

寅一點入道從四位上行陸奥守

平朝臣重時年六十四別業自發病之始抱萬事

一心念佛佳正念取終

六日 甲子霽

寅剋奥州禪門華礼

七日 乙丑天晴

戌刻雷鳴

十一日 己巳 御所之時爲太阿闇梨壇所可被

點召宿所事可被召鞠懸樹事被定并其人數

越前々司

刑部少輔

武藏左近大夫將監

新相摸三郎

秋田城介

上野大夫判官

十二日 甲戌天晴

政所廳屋筆上棟

廿二月 庚辰 押垂齋藤次郎被召加小侍所

帳武藤少卿景賴申沙汰之

廿六日 甲申 明年正月歸弓始事有其沙汰被

差射手等相摸太郎殿越後守殿被下連署奉書

十二月小

三月 辛卯天晴 新造政所始也評定衆等列衆

云

新刊吾妻鏡卷第五十

新刊吾妻鏡卷第五十一

弘長三年癸亥

正月小

一日 壬午陰 境飯相州神室御沙汰 相州以下

著布衣出仕如常申時刻之後各降庭上座列

左馬權頭時宗

武藏前司朝直

越前々司時廣

同七郎宗頼

相摸左近大夫將監時村

中務大輔教時

尾張左近大夫將監公時

陸奥左近大夫將監義宗

武藏式部大輔時房

越後四郎顯時

陸奥十郎忠時

武藏八郎頼直

備前太即宗長

武藏九郎朝貞

那波刑部權少輔政茂

和泉前司

武藤少卿

小山出羽前司

東鑑五十一

刑部少輔時基

彈正少弼兼時

武藏五郎時忠

駿河四郎兼時

駿河五郎通時

遠江四郎政房

官内權大輔時秀

秋田城介

佐々木壹岐前司

後藤壹岐前司

縫殿頭

長門前司

日向前司

佐々木對馬守

宇都宮石見前司

木土權頭

能登藏人

那波五郎

佐渡新左衛門尉

城六郎兵衛尉

城彌九郎

後藤壹岐左衛門尉

長門三郎左衛門尉

越中六郎左衛門尉

遠江三郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

大曾禰太郎

周防五郎左衛門尉

梶原上野太郎左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

加藤左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

甲斐五郎左衛門尉

東鑑五十一

大隅修理亮

大隅大炊助

常陸左衛門尉

筑前五郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

伊勢三郎左衛門尉

武石新左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

內藤肥後六郎左衛門尉

出羽八郎左衛門尉

加賀前司

中務權少輔

畠山上野三郎

駿河右近大夫

義代左衛門大夫

城四郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉

佐々木壹岐三郎左衛門尉

越中次郎左衛門尉

越中五郎左衛門尉

信濃左衛門尉

後藤壹岐次郎左衛門尉

伊賀四郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

周防七郎

天野肥後三郎左衛門尉同肥後四郎左衛門尉

足立右衛門五郎佐々木加地太郎左衛門尉

將軍家出御南面土御門大納言榮進上御簾三箇

間次進物御劔武藏前司朝直御調度中務大輔教

時御行騰皆宮内權大輔時秀

一御馬 武藏五郎時直

里村三郎兵衛尉

狩野四郎左衛門尉  
備後太郎

薩摩七郎左衛門尉

備後次郎

備後三郎

天野肥後三郎左衛門尉

足立右衛門五郎

將軍家出御南面土御門大納言榮進上御簾三箇

間次進物御劔武藏前司朝直御調度中務大輔教

時御行騰皆宮内權大輔時秀

一御馬 武藏五郎時直

東鑑五十一

三

二御馬

三御馬

四御馬

五御馬

未刻將軍家御行始入御相州禪室亭供奉人

御所御方

御劔役

武藏前司朝直

尾張前司時章

左馬權頭

相摸三郎時輔

同五郎時直

城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

佐々木壹岐三郎左衛門尉賴經

同四郎左衛門尉長經

相摸三郎時輔 諏方四郎左衛門尉

未刻將軍家御行始入御相州禪室亭供奉人

御所御方

御劔役

武藏前司朝直

尾張前司時章

左馬權頭

相摸三郎時輔

同九郎長景

同九郎宗行

尉賴經

尉長經

尉

供奉人

御所御方

御劔役

武藏前司朝直

尾張前司時章

左馬權頭

相摸三郎時輔

越後四郎顯時

秋田城介泰盛

和泉前司行方

中務權少輔重教

後藤壹岐前司基政

縫殿頭師連

小野寺四郎左衛門尉

信濃左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

加藤左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

佐々木對馬四郎左衛門尉尉宗經

陸奥十郎忠時

同九郎長景

佐々木壹岐前司顯

越中前司賴業

日向前司祐泰

美作左近藏入宗教

常陸左衛門尉

周防五郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

將野四郎左衛門尉

東鑑五十一

四

大見肥後四郎左衛門尉行定

中御所御方被出御衣

中務權大夫教時

民部權大輔

遠江左馬助清時

刑部權少輔政茂

長門前司

島山上野三郎

城四郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

相摸左近大夫將監

武藏式部大夫

相摸七郎

宮内權大輔時秀

佐々木對馬前司氏信

大隅修理亮

後藤壹岐前司

梶原太郎左衛門尉

武石新左衛門尉

嶋津周防七郎定賢

御引出物御殿尾張前司時章砂金左近大夫將監時村

一御馬 相摸七郎宗頼 平新左衛門尉頼經

二御馬 筑前左衛門尉行實 同五郎左衛門尉行重

二日 癸未天晴 境飯相州御沙汰 御簾土御門大納言御殿尾張前司時章御調度越前々司時康御行騰和泉前司行方

一御馬 相摸左近大夫將監時村 四方田新三郎左衛門尉

二御馬 越後四郎顯時 糟屋左衛門三郎行村 三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

東鑑五十一

五

四御馬 出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

五御馬 越後六郎實政 伊賀右衛門次郎 今日以元日出仕人數爲鶴置御衆供奉被下御點

三日 甲申天晴 境飯武州御沙汰 御簾土御門大納言御殿中務權太輔教時御調度左近大夫將監公時御行騰太宰權少貳景頼

一御馬 相摸七郎宗頼 安東宮内左衛門尉景光

二御馬 梶原太郎左衛門尉景經 同五郎景方

三御馬 甲斐三郎左衛門尉爲成 同五郎左衛門尉爲定

四御馬 上野三郎左衛門尉重義

同左衛門五郎宗光 五御馬 陸奥十郎忠時 牧野太郎兵衛尉

五日 丙戌 鶴置御衆供奉人事相催 七日 戊子天晴將軍家御衆鶴置八幡宮供奉人御車

城彌九郎長景 出羽八郎左衛門尉 後藤壹岐次郎左衛門尉

長門三郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉 梶原三郎左衛門尉

越中次郎左衛門尉 武石新左衛門尉 越中五郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉 伊賀四郎左衛門尉 將野四郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉 薩摩七郎左衛門尉 佐渡新左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉行家 以上十七人著直垂帶御候御車左右

次御後四十九人 布衣 武藏前司朝直 同式部大夫朝房

同五郎時忠 同八郎頼直 越前々司時廣 中務權太輔教時

尾張左近大夫將監 相摸左近大夫將監 氏部權太輔時隆 同四郎宗房

相摸三郎時輔 同七郎宗頼

東鑑五十一

六



刑部少輔時基

遠江右馬助備時

越後四郎顯時

陸奥十郎忠時

那波刑部少輔政茂

宮内權太輔時秀

佐々木壹岐前司泰經

同三郎左衛門尉賴經

越中前司賴業

長門前司時朝

後藤壹岐前司基政

同太即左衛門尉

木工權頭親家

同左衛門藏人家教

縫殿頭師連

宇佐義日向前司祐泰

島山上野三郎

石見前司家朝

常陸左衛門尉

筑後三郎左衛門尉

城六郎兵衛尉

大隅修理亮久時

信濃左衛門尉

周防五郎左衛門尉

東鑑五十一

七

和泉六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

梶原太郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

加藤左衛門尉景經

小野寺新左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

佐々木孫四郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

大見肥後四郎左衛門尉

佐々木加地太郎左衛門尉實經

八日 巳丑 於前濱被撰御的射手左典厩依方

不被出仕十八人一五度射訖退散云

一番 山城三郎左衛門尉

早河次郎太郎

二番 滋谷新左衛門尉

横地左衛門次郎

三番 伊東與一

富士三郎五郎

四番 松岳左衛門四郎

平嶋彌五郎

五番 伊東新左衛門尉

小沼五郎兵衛尉

六番 小嶋彌五郎

滋谷左衛門四郎

七番 柘間左衛門次郎

本間對馬次郎兵衛尉

八番 落合四郎左衛門尉

神林兵衛三郎

九番 早河六郎

下山兵衛太郎

九日 庚寅天晴

來十二日依可有御弓始被催

決定之射手求十二日辰刻以前可參勤者左典厩

日來御不例今日御袍瘡出見及聖權律師降政入

減年光三

十日 辛卯天晴

為和泉前司行方奉行被定旬

東鑑五十一

八

御鞠之奉行皆是所被撰堪能也云

正月 四月 七月 十月

上旬

冷泉中將隆茂朝臣

右馬助清時出羽前司長村

中旬

越前々司時廣

中務權少輔重敦

備中守行有

下旬

足利大夫判官家氏

武藏五郎時忠

下野左衛門尉景經

二月 五月 八月 十一月

上旬

二條少將雅有朝臣

刑部少輔時基

後藤壹岐前司基政

中旬

彈正少弼業時 越後四郎顯時

佐渡大夫判官基隆

下旬

左近大夫將監時村 三河前司賴氏

周防左衛門尉忠景

三月 六月 九月 十二月

上旬

二條侍從基長 相摸三郎時輔

佐々木壹岐前司泰經

中旬

東鑑五十一

九

中務權太輔教時秋田城今泰盛信濃判官時清

下旬

左近大夫將監公時 木工權頭親家

城四郎左衛門尉時盛

十一日 壬辰 明日御弓始射手之中小嶋彌次

即家範依申故障彼合手小沼五郎兵衛尉孝幸同

被止之所被縮五番也而今日工藤一即右衛門尉

光泰計申云就家範之故障被止孝幸為五番者若

猶臨期於故障輩出來者因手不可然若合早河六

郎祐賴於孝幸如元為六番之條可宜數者仍有沙

汰如然云所被加彼兩人也

十二日 癸巳 有御弓始射手十二人二十五度射

一番 山城三郎左衛門尉親忠

早河次郎大郎祐泰

二番 橫地左衛門次郎師重

對馬次郎兵衛尉忠泰

三番 濫谷右衛門次郎清重 伊東與一祐賴

四番 小沼五郎兵衛尉孝幸 早河六郎祐賴

五番 松聖左衛門四郎時家

富士三郎五郎貞時

六番 濫谷新左衛門尉朝重 平嶋彌五郎助

十四日 乙未 自來廿十日依可有御祈為左大

臣法印休所可被點出羽入道々空家之由云

十五日 丙申 兩小常降八夜屬晴丑刻月蝕正

東鑑五十一

十

見八分御祈加賀法印定清

十七日 戊戌 紅霞纏自雲天氣甚晴戌刻乾巽

有如火光色一方光盛之時一方光薄亦相交厚薄

觀者怪之

十八日 己亥陰 乾巽亦光如去夜御祈太阿闢

梨林所事道空家者去北彈正少弼給之畢常陸入

道家者來月二所御案詣御物等沙汰奉行之間今

日被點後藤壹岐前司家云

廿日 辛丑 近日依可有二所御案詣供奉惣人

數如例注進之云

廿三日 甲辰 二所御案詣供奉人等事條々被

經沙汰先日被下御點人數之中多以有申障事等

所謂

武藏前司

越中前司

民部權太輔

中務權太輔

秋田城介

同四郎左衛門尉

佐々木對馬守

縫殿頭

大須賀新左衛門尉

出羽九郎

以上十人雖申所勞之由當出仕之上相扶可

衆之由云

足立左衛門太即

宮内權太輔

佐渡大夫判官

周防五郎左衛門尉

後藤壹岐左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

同五郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

近江左衛門尉

和泉六郎左衛門尉

東鑑五十一

同七郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

大泉九郎

足立左衛門五郎

以上十四人中障之由可尋問其子細之由云

相摸左近大夫將監

信濃判官

大隅修理亮

島山上野三郎

隱岐四郎兵衛尉

小野寺四郎左衛門尉

足立太即左衛門尉

大須賀新左衛門尉在國

以上八人者鹿食云不申暇之條同可尋問之

由云

城六郎兵衛尉

食

子細同前

以上如此

於鹿食事著先被尋問之處不承及禁制事由各

陳謝云

廿五日 丙午

二所御衆諸事延引於今度者先

可被用奉幣御使也先自至進奉供人者悉以可候

御進中之由可相觸之旨被仰小侍武藤少卿景

賴傳仰云

二月大

二日 壬子

小雨降入夜庭上雪白於御所有常

座和歌御會是臨時之儀也然而相州令衆給緯及

曉更

五日 乙卯

自明日依可有御祈為大阿闍梨左

大臣法印休所被點和泉前司行方家云

八日 戊午

天晴申起雨降今日於相州常盤御

東鑑五十一

寺有和歌會一日千首操題被置懸物亭主十八首

右太辨入道真觀百入首前皇后官大進俊嗣朝臣

息五掃部助範元百首證悟法師良心法師以下候

者十七人辰冠始之秉燭以前終篇則披講範元一

人勤其役

九日 己未

天晴昨日千首和歌為合點被送太

拯禪門云

十日 庚申

朝間雨降被千首合點之後於常盤

御亭更被披講今夜以合點負數被定座次第一座

辨入道第二範元第三亭主第四證悟也亭主以範

元下座之儀可若對座之由被稱之處大拯禪門云

以合點負數可守其座次之由治定先訖而非一行

正者頗可為無念歟云其詞未終亭主起座欲被著  
千萬元之座下于時範元又起座逐電之處即令人  
抑之給又任點數分物大探禪門分被置虎皮  
上範元熊皮亭主色草以下推之無點之草其座  
於禪蓋膳撤箸之間無笑而食之滿座莫不顧  
掃部助範元者去正月為上洛中服此御食內  
內被留之懸物之中於旅具者悉以拜領之

三月小

十日 庚寅天晴 故右京北義 御願大倉藥師

堂小來加修造今日被送供養供養道師遠江僧都

公朝

十三日 癸巳 武藤少卿遣奉書於小侍所別

東鑑五十一

十三

云二所御精進自來月廿一日可被始也御共并茶  
籠人々如先度有御僧住可被許進且鳥食自今月  
廿日之比可有僧禁日可被相觸云

十七日 丁酉 最明寺禪室買得信濃國深田卿

今日寄附善光寺所被充置不斷經衆不斷念佛衆

等糧料也簡思食來世值遇云

善光寺金堂不斷經衆結番事

合次第二月

定蓮房律師觀西

蓮明房善西

理乘房寶圓

嚴蓮房聖尊

理父房阿闍梨重實

大貳阿闍梨覺玄

嚴光房證範

覺地房有慈

金蓮房勝實  
蓮淨房覺隆

河內公俊榮  
權別當俊範

右守番帳之旨可令勤仕但彼不斷經用途者水由  
六町在當國水內郡深田鄉內是則不斷經衆之免  
田也然按量彼免由於十二分充人別五段於十二  
人畢敢不可違失矣或讓所職或有關分之時設  
有讓得之證文有競望之仁且依衆議補器量不可  
任相傳不可憚有緣是故吹噓之初撰定其器補職  
之後不怠其役但器量者不論有智高才黨不退精  
勤矣次守過去帳每彼忌日役可奉勤行一時念佛  
三昧仍諸衆守此等趣專調誠心不可懈怠之狀如  
件

東鑑五十一

十四

弘長三年三月十七日

沙彌蓮性在判

十八日 戊戌天晴 亥時名越邊燒亡山王堂在

其中失火云

廿一日 癸丑天晴 入夜雨降今日東御方里亭

有造作沙汰對馬前司氏信為惣奉行

四月大

一日 庚戌 二所御參詣供奉人事以先度進奉

散狀被催之云

三日 壬子 後藤壹岐前司二所供奉申障云

七日 丙辰天晴 入夜密堂邊騷動但則靜謐是

群盜十余人隱居地藏堂之間夜行輩等行向其庭  
生虜故也

十四日 癸亥 二所御參詣供奉人之中申子細之輩事有其沙汰所謂相摸左近大夫將監申

相州服暇之間非無觸穢之憚歟此上供奉如何出羽八郎左衛門尉申

子細同前

近江三郎左衛門尉申

依御點進奉之上可令供奉之條雖勿論不謂垂翅之間打梨定有憚歟者

以上執小侍註進武藤少卿景賴披露之處披聞食訖者相州左親衛并出羽八郎左衛門尉等者有恩許近江三郎左衛門尉者可令供奉者又後藤臺岐前司相摸可令供奉之由云

東鑑五十一

十五

十六日 乙丑天晴 河野四郎通行子息九郎經通入小侍番帳和泉前司傳仰於小侍云東御方

小所宿所上棟也但假敷云

廿一日 庚午天晴 將軍家二所御精進始御賓

出為俗潮御也為御水干御騎馬也月卿雲客又若水干其外供奉人等立為帽子直垂還御之時皆皆

著淨衣行列 御駕有步行用共

御後

土御門太納言

越前々司

遠江右馬助

越後四郎

近衛中將公敦朝臣

民部權大輔

武藏式部大夫

駿河五郎

高山上野三郎

中務權少輔

女醫博士長宣朝臣

武藏守

兩人後騎等相列如雲霞

廿三日

壬申天晴

御濱出如一眺是中御潮也

廿四日

癸酉

被點筑前入道宿所是自來四月一日為御祈太阿闌梨松殿僧正居所也

廿六日

乙亥

雨降將軍家二所御進發

騎馬

土御門太納言

武藏守長時

近衛中將公敦朝臣

相摸四郎宗政

越前々司時廣

同四郎政房

武藏式部大夫朝房

駿河五郎通時

武藤少卿景賴

木工權頭親家

畠山上野三郎國氏

女醫博士長宣朝臣

步行

伊豫四郎左衛門尉景家

上野三郎左衛門尉

近江三郎左衛門尉

佐々木壹岐前司

平里左衛門尉

陰陽少名晴弘

相摸四郎

十六

遠江右馬助清時

民部權大輔時隆

越後四郎顯時

中務權少輔重教

佐々木壹岐前司泰經

後藤臺岐前司基政

表作左衛門藏人宗教

陰陽少名晴弘

土肥四郎左衛門尉

隱岐四郎左衛門尉

周防七郎定賢



是立左衛門五郎還時

內藤肥後六郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

小河木工權頭時仲

小河左近將監

五月小

一日 庚辰天晴

將軍家自二所還御而今日錄

名御所自還御時當大白方可有御憐歎之由雖有

其沙汰猶還御

九日 戊子天晴

掃部助範元自京都歸家達密

奏之望

祖父太監物宜賢朝臣年來於事雖不出

望八十四歲之令見孫子當道之堪能為令繼家業

頻以內舉云當時人數繁多難無其闕宗明朝臣之

流無人之條不便之由殊有其沙汰被宣下云裁人

東鑑五十一

十七

右衛門權佐經業為奉行云

十七日 丙申天晴

驚集于左典廐御亭頃之指

求福寺山飛去被卜筮之處文元晴茂晴宗恭房賴

旁等為口舌光之由占申受武田七郎次郎追彼驚

射殺之持衆入夜依驚惟被行泰山府君百怪白驚

等祭云

十九日 戊戌天晴

寅起地震

廿九日 戊申

自來月一日御所大阿闍梨松殿

法印休所事今度可為前尾州亭之處先日失火之

間被點肥前四郎左衛門尉宅云

六月大 庚戌天晴

東御方小町亭柱立去四月十

六日假棟今日上梁棟也又壹岐前司基政丹波守

賴景為在京上洛

十三日

辛酉

駿河六郎率相州左典廐等御輕

服也

十七日

乙丑陰

自昨日公氣如秋天諸人纏綿

衣

廿三日

辛未

將軍家御上洛事有其沙汰被充

課役於諸國御教書文章一同也西海事者被仰遣

六波羅御教書云

御上洛間百姓等所役事段別百文五町別官賦

一疋夫二人可充行

民之煩但有逃散之輩者相觸在所可令勤其役

之狀依仰執達如件

弘長三年六月廿三日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

廿五日

癸酉天晴

已刻將軍家百首御詠被終

篇昨日未刻被給之則於御前清書掃部助範元候

之

廿六日

甲戌

來八月放生會御寮官供奉惣入

數記為申下御點自小侍所被付和泉前司行方云

越中判官賴基被載此中之處稱病病申歸國之暇

今日於御所有帝範御談義右京權大夫茂範朝

臣三河前司教隆等候之又近衛中將公教朝臣越



前々司時廣榮侯云

廿八日 丙子 放生會御參官供奉人散狀有御

點左點布衣右隨兵左點端者直垂著云被下小侍

之間光泰實俊等廻之云

廿九日 丁丑天晴 小町御亭門上假棟

卅日 戊寅天晴 去廿五日御詠右太辨入道於

御前拜見之奉合點而勝于去年一日百首御歌之

由點者雖申是不通賢慮去年御詠猶宜之由被思

食云

七月小

五日 癸未天晴 將軍家今年中御詠歌數卷之

中抄出三百六十首致清書是為合點可被遣入道

東鑑五十一 十九

民部卿家卿 今日依和泉前司行方孫子率去事

終殿頭師連可奉行御所中雜事云

十日 戊子 小雨洒被立御所門檢門 今日於前

濱被行風伯祭前太監物宜賢朝臣奉仕之

十三日 辛卯 東御方小町新造亭移徙云今日

供奉人條々有其沙汰其中越中判官時業所勞申

是非指煩然而告日申暇之時不知食其實雖有恩

許常伺候之上者故障不可然之由有沙汰被相繼

之趣已歸國云早可遣御教書之由云

此外人々布衣

是立三郎左衛門尉在國

隨兵

足利上總三郎所勞

三浦介

阿波四郎左衛門尉

城四郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

常陸修理亮

淡路四郎左衛門尉

風早太即左衛門尉

已上八人申所勞之由

駿河五郎服

遠江十郎左衛門尉同

至于八月十五日為重服之由申

小田左衛門尉

造鹿嶋社惣奉行也雖供奉有限就余社事奔

勞似緩彼神事可為何樣哉之由也

阿曾沼小次郎

落馬以後進退未合期以子息五郎令勤仕事

如何之由申

伯耆四郎左衛門尉

所勞雖治也以子息五郎清氏令勤仕如何之

由申

江戸七郎太即

老與病計會於今者著甲難叶進退之由申

足立太即左衛門尉

御上洛供奉京都大番兩役之間一事有恩許

者早可蒙勸之由申

直垂著

佐々木對馬太即左衛門尉

同壹岐三郎左衛門尉 平賀二郎左衛門尉

已上三人有憚由申

佐々木對馬四郎勞 遠江五郎左衛門尉

依勞加灸之上鹿食之由申

出羽七郎左衛門尉 大須賀六郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉勞鹿食

以上三人鹿食之由申

鎌田三郎左衛門尉

勤仕大番近曾歸衆之間難治之由申

官人

佐渡大夫判官

當時所勞若得少減者可推衆之由申

信濃判官明勳

東鑑五十一

二十一

十六日 申午陰 右太辨入道真觀歸洛相州以

下諸人有饒送之儀云

十七日 乙未陰 日蝕不正現司天宿曜道等有

相論云

十八日 丙申天晴 將軍家帝範御讀合記

廿日 戊戌 越中判官故生會供奉事依被遣御

教書獻頌狀請文云

廿三日 庚子天晴 將軍家五百首御詠歌付前

右兵衛督教定外爲令點被遣入道民部卿之計範

示清書之

廿七月 甲辰 放生會隨兵今十人可催加之由

被阻下云

北九月 丁未 兩降將軍家御歌自建長五年至

正嘉元年分被修撰號之初心愚草云

八月大

一日 戊申天晴 於御所被下五首御歌題於人

人二條少將雅有朝臣奉行之

四日 辛亥 放生會供奉人中有鹿食憚之由申

軍事違犯嚴制之條不可然之旨殊被仰下之憂有

各陳謝所謂

近江五郎左衛門尉

鹿食禁制事未及之上爲治所勞食服之由申

申

大須賀六郎左衛門尉

東鑑五十一

二十二

所勞不快之間鹿食可然由依醫師申忽忘御

制事畢之由云

信濃次郎左衛門尉

去月上旬之比於或會合之取違于他物誤

食鹿之由申

六日 癸丑 兩降將軍家合勸十首歌於人之御

是素遣法印率去之後有御夢想之告黃泉有其苦

歎之由依被思食驚爲被迴滅罪之謀以彼懷然理

可被書寫經典云御詠被用左兵衛尉行長名字亦

於廣御所有臣範御讀合彈正少卿越前々司掃部

助範元等候御前

七日 甲寅天晴

於御所有五十首歌合衆議判

云云

八日 乙卯 放生會供奉人等事條々有其沙汰  
隨兵先被進奉之中河越次郎經重申障又後日重  
被觸仰之中佐渡太郎左衛門尉鹿食由申此外有  
子細于催促入々

尾張前司

秋田城介

各申所勞之由

陸奥左近大夫將監

伊勢次郎左衛門尉

各申有憚之由

常陸次郎左衛門尉 服服

宮内權太輔

依所勞不快賜鹿食暇之由申

足立三郎左衛門尉 鹿食

佐々木壹岐前司

東鑑五十一

二十三

賜身暇上洛之由申

新田參河前司

小山出羽前司

上野前司

石見前司

同六郎左衛門尉

長門前司

筑前三郎左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

田中左衛門尉

伊豆太郎左衛門尉

肥後次郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

周防四郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

己上十六人 在國

有其沙汰被仰出條々事

布衣

秋田城介

於所勞者初被廻散狀之比事與當出仕之上  
者早可催歟

鎌田圖書左衛門尉

同次郎左衛門尉

既自京都下向云早可催加者

隨兵

阿曾沼小次郎

自身故障令子息勤仕之條何事有哉

上野太郎左衛門尉

輕服云何事字可相尋者

直垂著

鎌田三郎左衛門尉

東鑑五十一

二十四

先度故障之趣者自京都下向之間難治云申

狀之趣太自由也早重可相催者

隱岐四郎兵衛尉

先度加隨兵之處故障云書入直垂著散狀猶

可相催候

信濃次郎左衛門尉

先度故障畢可催具隨兵者

對馬四郎

故障何事畢重可催加者

追相催軍事

隨兵

城六郎兵衛尉

加藤左衛門尉

各進奉

下野四郎

各所勞之由載請文言歟

小野寺新左衛門尉

新在遠江國自留守返上御教書

直垂著

薩摩左衛門尉

出羽十郎

萩原右衛門尉

以上六人進奉

大須賀五郎左衛門尉

九日 丙辰天晴

御歌合衆議判訖有御連歌合

東鑑五十一

二十五

日左近大夫將監義政朝臣移徙于名越亭亦將軍家御上洛事有其沙汰來十月三日御進發必然之聞路次供奉人已下事被定之其記終殿頭師連持衆御所召範元於御前被清書是為模進京都也隨兵

相摸三郎時輔

越前之司時廣

左近大夫將監時村

左近大夫將監公時

足利上總三郎滿氏

梶原太郎左衛門尉景經

伊豆太郎左衛門尉實保

武藏前司子息一人

中務權大輔教時

越後四郎顯時

右馬助清時

上野介廣經

對馬前司氏信

薩摩七郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

常陸左衛門尉行清

三浦介賴盛

大多和左衛門尉義清

加地七郎左衛門尉氏經

和泉三郎左衛門尉行章

遠江三郎左衛門尉泰盛

伊勢次郎左衛門尉行經

出羽彌藤次左衛門尉賴平

遠江十郎左衛門尉賴連

完戶壹岐次郎左衛門尉家氏

東鑑五十一

二十六

武田五郎三郎政直

足立太郎左衛門尉直元

同三郎右衛門尉元氏

長次郎右衛門尉義連

加賀前司行賴

下野四郎左衛門尉景經

武石三郎左衛門尉朝胤

土肥四郎左衛門尉實經

淡路又四郎左衛門尉宗泰

隱岐四郎兵衛尉行長

進三郎左衛門尉宗長

佐々木壹岐三郎左衛門尉賴經

阿曾沼小次郎光經

河越次郎經重

狩野新左衛門尉

加藤左衛門尉景經

海上彌次郎胤景

小田左衛門尉時知

色部右衛門尉

風早太郎左衛門尉康常

常陸修理亮

善太郎左衛門尉康定

小野寺四郎左衛門尉通時

出羽入道子息一人

和泉六郎左衛門尉景村

同七郎左衛門尉景經

一宮次郎左衛門尉康有

出羽三郎右衛門尉肥後新左衛門尉景茂

相馬孫五郎左衛門尉繼村

田中右衛門尉知繼長江四郎左衛門尉

石見次郎左衛門尉出羽前司子息一人

長門三郎左衛門尉朝景

式部太郎左衛門尉光政

東鑑五十一

二十七

中條出羽四郎左衛門尉

善五郎左衛門尉康家

信濃次郎左衛門尉行宗

周防四郎左衛門尉泰朝

平賀三郎左衛門尉惟忠

小野寺次郎左衛門尉

內藤肥後六郎左衛門尉

內藤豐後三郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉行定

小笠原六郎子息一人

得野四郎左衛門尉景茂

筑後四郎左衛門尉景家

長江七郎

武藤左衛門尉賴泰

武田六郎子息一人

土屋新三郎左衛門尉

足立藤內左衛門三郎

天野肥後三郎左衛門尉

宗戶壹岐左衛門太郎

近江三郎左衛門尉賴重

伊賀次郎左衛門尉久房

平左衛門入道子息一人

可著水干入々

相州

武藏前司朝五

越後守實時

彈正少弼業時

長門前司時朝

東鑑五十一

二十八

佐渡太夫判官基隆

信濃判官時清

御路次間方々奉行人事

一御出奉行

和泉前司行方

御物具

對馬前司氏信

土肥四郎左衛門尉實經

御中持

木二權頭親家

長次郎左衛門尉義連

御宿事

遠山六郎

氏家左衛門尉

善太左衛門尉

阿波入道子息一人

武州

尾張前司時章

足利太夫判官家氏

佐々木壹岐前司泰經

武藤少卿景賴

越中判官時業

和泉前司行方

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴

武藤少卿景賴



和泉前司行方 備中守行有

式部太郎左衛門尉光政

御鷹

薩摩七郎左衛門祐能

御笠

加藤左衛門尉景經 侍野四郎左衛門尉景茂

御床子御敷皮

信濃次郎左衛門尉行經

掃部所

伊豆太郎左衛門尉實保

護持僧

醫陰道

東鑑五十一

二十九

已上兩條和泉前司

進物所

壹岐三郎左衛門尉賴經

金殿

梶原太郎左衛門尉景經

砂金井紫漆衣

和泉前司 式部太郎左衛門尉光政

紺紫衣

武藤少卿 伊勢次郎左衛門尉行經

格勤侍

小野寺左近大夫入道光連

御中間

信濃判官時清

御力者

佐渡大夫判官基隆

朝夕 雜色

小侍

小舍人

侍所

國雜色

加賀前司行賴

御棄替事

長門前司時朝

小野寺四郎左衛門尉通時 越中判官時業

東鑑五十一

三十

和泉六郎左衛門尉景村

善五郎左衛門尉康家武石三郎左衛門尉朝胤

阿曾沼小次郎光經

十日 丁巳 御上洛間進物所以下用途事今日

有其沙汰來十月御上洛以前可進濟京都之旨被

仰遣畿内西國等云其御教書被下守護人等

十一月 戊午雨降 申越以後疊震於兩御所解

連歌五十句 掃部助範元 五句 爲執筆

前右兵衛督教定 中務權少輔重教朝臣句

侍從基長 三句 遠江前司時直 五句

右馬權助清時 四句 河内前司親行 七句

武藏五郎時忠 四句 加賀入道親賴 一句

左衛門少尉行佐二句

左衛門尉行俊一句

左衛門尉忠景四句

御句八句云

十二日 己未

小南常酒去夜御連歌大夫判官

基隆泰仲合點云

十三日 庚申

放生會供奉人進奉散狀被取整

沙汰訖其中依有故障重被催促之輩或進奉或猶

申子細於故障者以前以後皆恩許云所謂

隨兵

信濃次郎左衛門尉

先度為直垂人數之時辭退今隨兵催促進奉云

上野太郎左衛門尉

祖母他東日數不幾之由申

東鑑五十一

三十一

直垂著

對馬四郎

故障同前

官人

足利大夫判官進奉

信濃判官

輕康數日已走過進奉

越中判官

先度不獻領狀請文猶申所勞之由

十四日 辛酉

自朝天陰雨降雷鳴數聲則南風

烈雨脚彌甚午尅大風拔樹民屋大略無全所御所

西侍顛倒棟梁折等吹拔之亦由比濱著岸船數十

艘破損漂沒今夕御息所供奉人事進奉惣人數之

中被下御點云是放生會依可有御參宮也予刻前

大宰少貳正五位下藤原朝臣為佐法師蓮祐率八

十三

十五日 壬戌晴

鶴置放生會將軍家御出如例

相州武州左典廐等被使迴廊又彈正少弼業時相

摸三郎時輔越後四郎賴時等參御棧敷云先中御

所御出

供奉人

備中次郎兵衛尉行藤

佐々木壹岐四郎左衛門尉長經

城中八郎秀頼

大泉九郎長氏

萩原右衛門尉定仲

長雅樂左衛門三郎政連

已上六人著直垂帶劔候御車左右

東鑑五十一

三十二

御後十人 布衣下揭

越前々司時廣

刑部少輔時基

中務權少輔重教

日向前司祐泰

縫殿頭師連

遠江四郎政房

加賀前司行頼

長次右衛門尉義連

佐々木孫四郎左衛門尉氏經

加地七郎右衛門尉氏經

次將軍家御出供奉人

先陣隨兵十人

壹岐三郎左衛門尉頼經

加藤左衛門尉景經

筑前四郎左衛門尉行佐

武藤左衛門尉頼泰

伊東八郎左衛門尉祐光

伊勢次郎左衛門尉行經  
出羽三郎左衛門尉行實  
城六郎兵衛尉顯盛  
陸奥十郎忠時  
相摸七郎宗賴

次諸大夫

次殿上人

次公卿

次御車

越中次郎左衛門尉長食  
土肥四郎左衛門尉實經  
隱岐四郎兵衛尉行長  
出羽十郎行朝  
武石新左衛門尉長翁  
近江三郎左衛門尉賴重

東鑑五十一

三十三

一宮次郎左衛門尉康有  
山田三郎左衛門尉通康  
善太郎右衛門尉康定  
薩摩左衛門四郎祐家  
以上十二人著直  
伊東六郎左衛門三郎  
次郎後十五人  
彈正少弼業時  
相摸左近大夫將監時村  
相摸三郎時輔  
木工權頭親家  
越中前司賴業  
備中中行有  
相摸四郎宗政  
遠江右馬助清時  
越後四郎顯時  
和泉前司行方  
對馬前司氏信  
周防五郎左衛門尉忠景

鎌田次郎左衛門尉行俊  
進三郎左衛門尉宗長  
善五郎左衛門尉康家

次後陣隨兵十人

佐介越後四郎時治

畠山上野三郎國氏

大須賀新左衛門尉朝氏

越中五郎左衛門尉泰親

平賀三郎左衛門尉惟時

伯耆左衛門五郎清氏

佐々木對馬太郎左衛門尉賴氏

信濃判官次郎左衛門尉行宗

遠山孫太郎左衛門尉景長

長門左衛門八郎賴秀

東鑑五十一

三十四

官人

佐々木大夫判官家氏  
信濃判官時清

十六日 癸亥天膚快霽御衆官同昨日

取競馬祿人々

越前々司時廣

相摸左近將監時村

相摸三郎時輔

刑部少輔時基

遠江右馬助清時

同四郎政房

越後四郎賴時

廿五日 壬申天晴

御上洛事依大風諸國緣穀

損亡之間為休歇民煩所被延引也仍今日以其旨

被仰遣六波羅御教書二通被遣之一通者可相觸

京畿御家人事一通左親衛分國輩可存知事也其

狀云

御上洛事依大風御延引之由所被仰下也其間雖可被進御使且其旨可被相觸御家人等也依仰執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

來十月御上洛所有御延引也且於御京上役辨濟所之者可令紀返于百姓也早以此趣可被下知攝津若狹國中之狀依仰執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

東鑑五十一

三十五

今日春日部左衛門三郎泰實被召放美濃國指深庄地頭職是當庄沙汰人地頭有非法之由就訴申六波羅雖下召文泰實不應之仍註進其趣之間又此儀即所被仰遣陸奥左近大夫將監許也又法中源權律師覺乘等於相州禪室御亭令信讀大般若經依有御病惱也亥尅廿二日有火事比斗堂邊民居多以災云

北六日 癸酉陰 依去十四日大風諸國損亡百姓愁歎之間以撫民之儀將軍家御上洛延引之間

以遠江十郎左衛門尉賴連為御使被申此由於仙洞云

廿七日 甲戌天晴 申尅以後風雨入夜大風由比浦船船沒彼死人寄河彼是不可勝計又鎮西乃貢運送船六十一艘於伊豆海同時漂潰云

九月大

三日 庚辰天晴 午尅從五位上行刑部權少輔大江朝臣政茂率

十日 丁亥 切錢事有其沙汰近年多以出來之由有其聞自今以後者用切錢事可停止之存此旨普可令下知之由被仰奉典厩等云其狀云

切錢事

右近年多出來之由有其聞於自今以後者用切錢事可停止之存此旨普可令下知之狀依仰執達如件

東鑑五十一

三十六

弘長三年九月十日

武藏守 相摸守

加賀前司殿

十二日 己丑 終夜甚而戌刻雷鳴武藏大路霹靂蹴裂率都婆其上三尺余為雷火燒蹴裂之響聲人屋聞者甚多云今日遠江十郎左衛門尉自京都歸衆

十三日 庚寅天晴 寅刻以後將軍家御惱今朝

諸人舉登山而見去夜雷火燒之率都婆非時雷鳴不輕其慎之由除陽道等進勸文

十四日 辛卯天晴 依御惱晴宗於御所勤仕泰

山府君祭初度星降臨効驗揚焉也

廿六日 癸卯晴 入道陸奧五郎平實泰法名率

十月大

一日 戊申晴 大藏權大輔泰房於御所南庭行天地災變祭是去月十二日大雷御祈禱也

八日 乙卯 和泉前司行方此間湯治之聖俄以煩中風所勞云

十日 丁巳 被行評定六波羅檢斷等事有其沙汰令召出彼短候人佐治入道爲使節於當座被仰云強盜人事無地頭權門領以下所々自守護所隨相觸可被召出之不然者可被追放彼所無其儀者

東鑑五十一

三十七

可捕地頭之由兼可被申本所次自地頭補仕所々不被召出強盜人者可被改易彼地頭職之旨相觸之後可被註申之今日曉景正五位下行石見守大江朝臣能行卒

十四日 辛酉 今日評定出羽前司入道々空始出仕此一兩年依病龍居

十七日 甲子 明年正月御的始射手事有沙汰可參勤之由被卜左典廐一人御奉書越後守重勝故也

廿五日 壬申晴 今夜中御所出御于武州寺御外威太政法印澄圓入滅依御輕服也彼上經者光明峯寺釋閣御息

廿六日 癸酉 雨降故奧州禪門第三年佛事於極樂寺被修之以宗觀房爲導師

廿七日 甲戌天晴 曉雨降今日貢馬御覽

廿八日 乙亥天晴 將軍家五百首御詠民部卿入道融覺加點返上則副一卷狀六義與旨猶可被疑御沈思之由申條々諷諫云

十一月小

二日 己卯天晴 左衛門少尉清原真人滿定頓死年六十九

八日 乙酉 依相州禪室御勞事被加御祈禱等先今日中造立等身十手菩薩之像有供養之儀導師松殿僧正良基也即以伴僧十二人相共被修畫

東鑑五十一

三十八

夜不斷千手陀羅尼僧正斷五穀伴僧有一日三箇度行水云次尊家法印於國殿被修延命護摩次陸奧左近將監義政一日之內造立等身藥師像請尊家法印爲導師被遂供養云又尊海法印帶等身藥師畫像七箇日爲令衆龍于三嶋社今曉進發修三時護摩可信讀大般若經云

九日 丙戌 加賀前司行賴所勞危急之間政所執事筑前三郎左衛門尉行實可致沙汰之由被仰付云

十日 丁亥 前加賀守從五位下藤原朝臣行賴率年米四

十三日 庚寅 最明寺禪室御不例已及危急之



間、尊家法印修法華、護摩松殿僧正於山内亭斷五穀修行法云。

十五日 壬辰 依禪室御祈松殿僧正今日始行、不動護摩又有三時護身云。

十六日 癸巳晴 午刻御息所御著帶御驗者太納言僧正良基香法服件僧醫師玄番頭丹波長世朝臣衣御陰陽權助政茂朝臣帶東宿曜師大夫法眼晴尊等也又尊家參上云太宰少貳景賴奉行之戊尅地震。

十七日 甲午霽 被圖繪供養放光佛是依尊家法印申行至御產之時連日可被奉稱養云。

十九日 丙申 相州禪室御病痢緯已及危急仍

有渡御于寂明寺北亭心閉可令臨終給之由思食立仰尾藤太法名宿屋左衛門尉法名可禁制群衆人之由云。

廿日 丁酉 早且渡御北殿偏及御終焉一念昨日舍嚴命之兩人固守其旨制禁人之群衆之間頗寂寞爲御病者六七許輩袒候之外無人所謂

武田五郎三郎 南部次郎 工藤三郎右衛門尉 宿屋左衛門尉

長崎次郎左衛門尉 星藤太 安東左衛門尉 等也

廿二日 巳亥霽 未刻小町燒亡南風頻吹甚烟掩御所仍御車二領引立南庭儲御出之儀受至前

東鑑五十一 三十九

武州亭前火止戊刻入道正五位下行相摸守平朝臣時賴御法名道崇於最明寺北亭卒去御臨終之儀著衣袈裟上繩床令座禪給聊無動搖之氣頌云

葉鏡高懸三十七年一搥打碎大道坦然

弘長三年十一月廿二日道崇珍重云

平生之間以武略而輔君施仁儀而撫民然間達天意陽人望終焉之刻又手結印口唱頌而現即身成佛瑞相本自權化再來也誰論之哉道俗貴賤成群奉拜之尾張前司時章丹後守賴章太宰權少貳景賴隱岐守行次城四郎左衛門尉時盛等依哀傷難休各除鬢髮其外御家人等出家不遑甄錄皆以被止出仕亦武藏前司朝直朝臣落飾之處武州以彈

正少弼頻被加禁遏之間空素意云

廿三日 庚子天晴 酉尅相州禪室葬禮也今日御息所御產御所以下事被施行之奉行太宰少貳景賴出家之間縫殿頭師連奉之亦御驗者太納言僧正護持僧大貳法印醫師長世朝臣等至去廿二日晚最明寺禪室病憫之間或致祈精或迴醫術仍御產之間事各辭申之云

廿四日 辛丑天晴 將軍家有哀傷十首御詠是依最明寺禪室御事也

廿五日 壬寅 寅尅月犯房第三星相去四房主左右馬寮也左典廐殊可有御慎之由司天輩申之

十二月大

東鑑五十一 四十

九日 乙卯天霽 入夜右少辨經任朝臣為仙洞御使下著依家明寺禪室事也

十日 丙辰天霽 源亞相對面 勅使又秋田城介泰盛同謁申云今日被下御教書於諸國守護人

是依相州禪室御事可遂出家之旨兼以被觸仰之處有違犯輩之由令風聞故也

依相摸入道逝去御事家人等不可令出家之由先日被仰下之處皆御制多以出家云其國御家人中可被注出家輩之狀依仰執達如件

弘長三年十二月十日

某殿

寅刻若官大路燒亡始自咒師勾當辻至于大學辻

東鑑五十一

四十一

子火芳延其中間人家皆以災太宰少貳景賴入道宅在其中云

十一日 丁巳 相州武州等被謁申 勅使今夕被始行御祈之間為大阿闍梨安祥寺僧正休所被

點和泉前司行方家也師連奉行之

十三日 己未天晴 今曉右少辨經任朝臣歸洛在鎌倉僅四箇日云

十六日 壬戌天晴 六波羅陸奥左近大夫將監時茂朝臣歸洛最明寺殿御事案向而不可緩彼物

沙汰由被仰出候間揚鞭云

十七日 癸亥晴 戌刻荏柄社前朱火余炎至塔辻宮內權太輔時秀家被定御產所之處同以免

災

廿四日 庚午天晴 入夜雨降今日評定報等案

相州亭御產所并御方違等事有其沙汰召陰陽師

等被尋面々異見爰渡御々產所日可為來廿四日

之由兼被定之而今晴茂朝臣申云彼日浸日也可

有憚云業昌申云建長六年四月廿四日丙寅沒日也大

宮院入御々產所無憚云且勘申件例之間相論無

為落居次御產所宮內權太輔家燒失之間被點公

時義政兩大夫將監亭之慶晴茂申云當閉坏八座

方有其憚云受三河前司教隆難申云凡大臣家以

下古勘文不入此事云次御方違被用廿九日而業

昌申云往亡日也可有其憚云業昌又申云非常途

東鑑五十一

四十二

御方違為產所之條如何云仍三州令問答晴茂朝臣之處雖申不可有憚之由相州猶許容可憚之意

見給云

廿八日 甲戌天晴 御息所為御方違入御左近

大夫將監公時朝臣名越亭是依被定御產所也

廿九日 乙亥天晴 辰刻御息所自名越還御午

赴六波羅大夫將監室著帷帶若宮僧正加持之給

云

新刊吾妻鏡卷第五十一

新刊 安鏡卷第五十二

文宗二年乙丑

正月大

一日 辛未 日蝕也。然而自去夜雨降，蝕不見。仍

不設御所，被行。境飯，但垂御簾，無出御

越前之司御行。騰雀秋田城介泰盛。

一御馬 陸奥十郎忠時 工藤次郎左衛門尉

二御馬 越後四郎顯時 武藤三郎兵衛尉

三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

四御馬 越前四郎左衛門尉行佐

同五郎左衛門尉行重

東鑑五十二

五御馬 相摸七郎宗賴 工藤三郎左衛門尉

二日 壬申 天晴。境飯。相州御簾前大納言御

劍中務權太輔教時御調度左近大夫將監公時御

行勝備中守行有

一御馬 越後四郎顯時 鷗沼次郎兵衛尉國景

二御馬 式部太郎左衛門尉光政

三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

四御馬 出羽七郎左衛門尉

備中次郎左衛門尉行勝

五御馬 越後六郎實政 戶田兵衛尉茂平

三日 癸酉 天晴。境飯。越後入道御簾前黃門御

越前之司時廣御調度右馬助時親御行。騰相摸

四郎宗房御馬五疋未赴將軍家御行。始左典殿御

字御引出物。如例御劍左近大夫將監茂政。砂金左

近大夫將監時羽左近大夫將監公時

一御馬 相摸四郎宗政 武藤左衛門尉顯泰

二御馬 三浦介顯盛 同七郎

五日 乙亥 亥刻六波羅飛脚下著。依山門園

城寺騷動事也。

六日 丙子 天晴陰。依山門園城寺騷動。去

六波羅使者持書。任朝臣云書并註。是後使任

勢入道行。書狀等可有披露。今年評

評定始以前為忘事之間。不及日次。沙汰。有今日評

定。但人之不著布衣。又無盃。是非評定始之禮。與

近年無如此例。云相州令出仕給尾張入道見西越

守實時出羽入道之空。秋田城介泰盛。越前頭師

連太宰權少貳入道心蓮伊賀入道之園對馬前司

倫長勘解由判官康有等候。其座佐藤氏部次郎業

連執事等。儀畢泰盛心蓮持茶之上。覽之後。召

使者於評議座被下御返事。即時使令歸洛。早

七日 丁丑 天晴。將軍家御簾前八幡宮還御

之後有境飯之儀。〇十二日 壬午 天晴。有弓始

射。手

一番 二宮弥次郎時元 廣地左衛門次郎師直

二番 波多野八郎朝業 早河六郎祐賴

東鑑五十二

三番 松原左衛門次郎時家

相間左衛門次郎行泰

四番 小沼五郎兵衛尉孝三 海野弥六泰信

五番 滋谷左衛門尉朝一 平嶋彌五郎助經

今日被行評定死六 時儀也仍就吉日故

被給之師連泰盛持參

十四日 甲申霽 御所御鞠始之由依有其

備數輩參上之處依風烈人々退出畢

十五日 乙酉天晴 午尅地裏今日御鞠始將軍

家令立御衣御衣土御門大納言布衣二條三位教

定卿布衣同少將雅有朝臣靴衣中務權太輔教

時越前々司時廣右馬助清時木工權頭親家備中

守行有武藤左衛門尉賴泰加藤左衛門尉景經錄

曰次郎左衛門尉行俊內記左衛門尉同兵衛三郎

已上布衣凡十六人也及晚頭被行枕飯

廿日 庚寅 雷雨電光燄天降雹動地也

廿四日 甲午陰 今日枕飯馬數疋賜近習并醫

陰兩道之輩

二月小

二日 壬寅天晴 御息所入御相州亭是依將軍

家二所御精進也

三日 癸卯霽 將軍家二所御精進御濱出土御

門大納言左典亮越前々司越後右馬助以上供養

人數輩也醫師施藥院使忠茂陰陽道少允晴宗等

散召具之

七日 丁未天晴 風靜將軍家二所御進發供

人成端者也其中後陣隨兵一騎於中下馬橋落馬

午尅御息所俄御禮仍人々群參之憂無殊御事云

九日 己酉 丑尅空間前長門守從五位上藤原

朝臣時朝率年六十二

十二日 壬子 終日雨降戊剋將軍家於二所御

結解之詞不可然云

十五日 乙丑 著到事勘申可書之由云師連泰

三月大

一日 庚午 風雨甚戾剋雷鳴

四日 癸酉天晴 今日於御所鞠御童覽童舞是

所被引移昨鶴野法會舞樂也先舞童等相分南北

著座少西為土御門大納言花山院大納言等被候

公卿

從二位 賴民卿

從三位 基綱卿

殿上人

一條中將能基

八條中將信通

八條兵衛佐盛長

六條少將顯名

唐橋少將具忠

六條侍從顯教

太平樂<sub>乙主</sub> 夜叉王 松若 禪王 瑞瑞王

散手<sub>乙主</sub> 陵王 松若

右長保樂 林歌 柏梓 貴德 納藤利

柏梓<sub>萬藏</sub> 納藤利<sub>萬藏</sub> 千手 乙<sub>萬藏</sub> 金昆羅 竹王

貴德<sub>萬藏</sub> 納藤利<sub>萬藏</sub> 幸主 巨主

又右近將監中原光氏迴雪裝賀殿之間給祿物在能基朝臣役之

五日 甲戌 鎌倉中被止散在町屋等被免九箇

所又堀上家前大路造屋同被停止之且可相嗣保之之旨今日可被仲付于地奉行入等小野澤左近大夫入道也

町御免所之事

東鑑五十二

一所大町 一所小町 一所魚町 一所穀町

一所武藏大路下 一所須地賀江橋 一所大倉辻

七日 丙子天晴 御所彼岸御儀法結願御布施

取公卿中門三位<sub>公卿</sub>殿上人九人<sub>或布衣諸大夫</sub>

二人<sub>信濃藏人部助也</sub>御息所自今日七箇日御衆龍

鶴<sub>聖</sub>入夜御出<sub>御衆</sub>女房東御方一條局尼御局并

下齋三人供奉先之為縫敷頭師連奉行被遣指圖

於宮寺令備御局等<sub>云</sub>別當僧正催六十余人匠終

不日之功以熱田三嶋御前橫廊四間為御局以西

二間御寢所并御念誦所以東一間為御出居以東

迴廊與橫廊之中間敷板為萱所以東廊北端為東

御方局以其次一間御湯殿又局後龍軒敷板為下

口并湯殿以白幕五帖曳迴廊北軒為面道云

九月 戊寅天晴 亥起大地震今夜於鶴<sub>聖</sub>若

寶前被行管絃誦別當僧正讀式<sub>入備其後有御神</sub>

系<sub>八</sub>長松若九本拍子<sub>萬藏</sub>未拍子<sub>神王和琴</sub>十手

舞樂<sub>乙</sub>大笛<sub>夜叉王</sub>云

十一日 庚辰天霽於鶴<sub>聖</sub>上宮有法華經供養權

少僧都慈曉道師

十三日 壬午天晴 御息所御衆龍之間御局以

下事致了字沙汰之由召別當僧正有御殿其上賜

南庭三砂金十兩銀劍等<sub>給</sub>頭師連傳云

廿二日 辛卯天晴 南風烈今日從五位下三善

朝臣康家<sub>傳</sub>五十兩

東鑑五十二

六

四月小

廿二日 辛酉天晴 將軍家依御夢想之告於御

所南庭被行泰山府君<sub>三</sub>王殿助業昌朝臣<sub>東常奉</sub>

仕之御都狀廣範草之被下鞍馬一疋御劍一腰<sub>給</sub>

十疋縫殿頭師連為奉行

廿五日 甲子 執柄<sub>傳</sub>可被上表之由云

閏四月小

七日 乙亥天晴 遠江四郎平政房<sub>率</sub>

廿日 戊子 御所無入之由依有其聞先可註進

當番不衆衆可被處罪科之旨左典厩今日被遣御

使於小侍云

廿五日 癸巳天晴 依<sub>殊</sub>御願於御所被始行五



大尊合行法若宮別當僧正奉仕之率伴僧十人

五月小

二日 己亥 去月廿二日 關白 兼賀去十

六日 二條親依被上表也

三日 庚子 天陰 日中 五太尊合行法被結願令

日為故武洲禪門忌景於泉谷新造堂佛事導師若

官僧正隆辨

五日 壬寅 天晴 於御所被始行大般若諸經之

三十人

僧客 權少僧都

兼伊

房譽

景辨

東鑑五十二

七

淨昭

兼辨

盛辨

賢辨

兼朝

房朝

兼朝

信勝

辨譽

房朝

兼朝

信勝

兼朝

信勝

辨譽

房朝

兼朝

信勝

兼朝

信勝

辨譽

房朝

兼朝

信勝

兼朝

信勝

辨譽

房朝

兼朝

信勝

兼朝

信勝

辨譽

房朝

兼朝

信勝

威儀之由可被仰下云仍今自有評議彼子息大藏  
少輔文親大炊助文幸等雖為陰陽師子孫相承  
筆之上七條入道大納言家御時致幕府官仕或勒  
宿直或為格子上下役武州前史禪室最明寺禪室  
二代如此作法可令奉公之由被仰今更難改之但  
於官途者不相兼本道以右筆役計致奉公之輩限  
官位任雅意被任之條不可然蒙御免可任之旨被  
仰出云文親者相兼本道文幸者右筆計也

六月大

三日 己巳 日中 又立故秋田城介義景十三半

之佛事也於無量壽院自朔日至今日或十種供養

或一切經供養也而今迎正日供養多寶塔一基導

師若宮別當僧正隆辨布施被物十重太刀一南庭

五砂金世兩錢百貫文伊勢入道行願武藏少卿入

道心蓮信農判官入道行一以下數輩為結緣詣其

湯說法最中降雨如車軸于時山上所播之聽聞所

屋顛倒諸人希有而出去其中男女二人自山嶺落

路之北半死半生云

十日 丙子 終日降雨甚龜谷并泉谷所々山崩

人馬多土石被狀死其中自土中被掘出者一兩輩

僅存命云

十一日 丁丑 天晴 評定衆被新加所謂前越前

守平時廣中務權太輔平教時宮內權太輔大江時

秀又引付新加衆左近大夫將監平義政彈正少朝平

東鑑五十二

八

葉時左近大夫將監平公時已上備中于藤原行有  
前對馬守源氏左衛門尉藤原行實已上高水右近  
三郎是壹岐五郎左衛門尉為忠辭退之替所  
被召加也

十三日 己卯雨降 午刻屬晴今日為御息所御

產御折於御所被供養放光佛導師尊家法印左近  
大夫將監時村左近大夫將監顯時等取御布施又  
被行七瀬御被

廿三日 己丑 將軍家入御最明寺亭供奉人

騎馬

前太納言

越前々司

中御門少將

中務權大輔

東鑑五十二

九

遠江右馬助

尾張右近大夫將監

相模四郎

縫殿頭

備中守

式部太即左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

步行

武藏五郎宣時

義作左衛門藏人家教

隱岐次郎左衛門尉行景

彈正少弼

越後右近大夫將監

木工權頭

宮内權大輔

信濃大夫判官

常陸左衛門尉

和泉左衛門尉

城六郎兵衛尉

武藏左衛門尉賴泰

同兵衛藏人長政

同四郎兵衛尉行長

肥後四郎左衛門尉行定

甲斐三郎左衛門尉為成

出羽八郎左衛門尉行世

信濃次郎左衛門尉行宗

武石新左衛門尉長賴

筑前五郎左衛門尉行重

美濃大郎左衛門尉康定

加藤左衛門四郎祐光

入江親殿即供三郎左京兆相州越後守實時

田城介泰盛等故參依

四月 庚子 未起於山内御山庄侍二人起

決雌雄相互死畢依之鎌倉中騷動御家人等馳案

十日 丙午天晴 御息所入御之產所左近大夫

將監宗政朝臣亭

十六日 壬子天晴 及晚將軍家入御左京兆小

侍供奉

源太納言

中務權大輔

越後左近大夫將監

義作左衛門藏人

式部太即左衛門尉

城六郎兵衛尉

甲斐三郎左衛門尉

一條中將

彈正少弼

信濃大夫判官

同兵衛藏人

和泉左衛門尉

周防五郎左衛門尉

善太即左衛門尉

伊東余一

加藤三郎

薩摩左衛門四郎

左京兆跪庭上被奉入出居御安座以前供御々鐘  
至于供奉人前皆置希物而三獻之未終之程秋田  
城介泰盛送砂金百兩鞍馬一疋御所入御之由依  
作之稱引進之云又成尉亭主息女有嫁娶之儀被  
渡于相摸左近大夫將監宗政亭於出居有御酒宴  
公自常居所出立訖此間父朝臣遂不被起御前  
之座大名用意時之義談也曉更臨還御之期被進  
御引出物云

十八日 甲寅天晴 前三河守正五位下清原真人  
教隆率于時在京

東鑑五十二

十一

廿三日 己未陰 將軍家入御山内御亭

廿四日 庚申天晴 於山内許相撲并競馬等凡  
遊宴被盡數晚頭還御左典廐被奉御贈物又供奉  
人面々顔之

廿五日 辛酉 法印定親入滅

廿八日 甲子 小雨降御產御祈被行千度被晴

茂 宣賢 葉昌 晴長 晴秀 晴憲 晴宗

泰房 職宗 親定等候之陪膳右近大夫將監時

村 黃前 右馬助清時 被物持候送十人

格勤十人 各白為手長縫殿頭師連備中前司行有

式部太師左衛門尉等奉行

八月大

五日 庚午陰 夕小雨降將軍家自馬場殿入御  
々產所即還御

十三日 戊寅霽 故武州禪門長岡關佛事 被  
修之又為極樂寺奥州禪門後追福被書寫供養

五部大乘經是依左典廐御夢想一日内所被頭寫  
開題也

十五日 庚辰天晴 鸛置放室會將軍家無御出  
又無御奉幣使一事以上官寺被遂行之是依御息

所御懷孕事也

十六日 辛巳天晴 將軍家為覽馬場儀密々入  
御于相州御棧敷左近大夫將監顯時役御飼中務

權大輔教時彈正少弼葉時候御與寄其外十有余

輩供奉今年相州御棧敷數七箇間之外入々棧敷皆  
以停之將軍家無御出儀之上依儉約也流錫馬第

三番射手二三的次中競馬勝負官寺可定申之由  
左京兆被計申之依御憚無御執行神宴之由也同

口取祿等事者為諸大夫之役相撲之祿者神官寺  
取之講讀師等僧布施各被送本坊云戌刻土御門

大納言奉為御息所御平產被行御祈於由比濱葉  
昌朝臣奉仕靈氣祭云

廿五日 庚寅陰 將軍家令煩御痢病御但無程  
御平減云

九月大

一日 丙申陰 日中小雨降今日辰刻御息所有

東鑑五十二

十二

御產氣群衆人々不知其數被行御占或指申申酉  
尅或可爲亥子尅之由申之而頃之無御產氣非常  
時云仍諸人退出縫殿頭師連式部太即左衛門尉  
光政等奉行此間事光政輕服之間行有奉之也亦  
服暇出來而光政輕服日數馳過之間如元所奉行  
也

廿一日 丙辰 晚雨降今日寅刻有御產氣辰尅

姬宮誕生御驗者松殿備正安祥寺僧正尊家法印醫  
師長世朝臣御枝晴茂末常宣賢葉昌晴長

晴秀晴宗泰房衣冠也先陰陽師七人自座上

次第賜列祿各一銀次御驗者三人御衣御馬一疋  
備子人重引之次長世朝臣於公卿御座之傍給御

東鑑五十二

十三

衣八條三位取之陰陽權助晴茂朝臣於同所給御  
衣左近大夫將監公時役之

十月小

二日 丙卯 筑前守從五位上藤原朝臣行泰法  
師行善率年五十五

七日 壬申天晴 於御所有連歌御會三河阿闍  
梨圖勇候執筆役

十四日 巳卯 又有御連歌

十八日 癸未天晴 右大辨入道真觀自京都衆

向兵部太輔範忠朝臣又下著依御產無爲事也但內  
々各依勅撰集事云

十九日 甲申 於御所有御連歌御會若官別當

僧正相具百種懸物於上凡日來連々應召云

廿五日 庚寅 朝雨午尅爲晴今日最明寺禪室

第三年御佛事於山內被脩之導師道隆禪師十一  
明辨云

廿六日 辛卯天晴 貢馬御覽左京北相州以下

即騎之而引手等無左右放之馬騰及度而合田  
雖落重采之打迴御前之間高騰廿余度近年無如  
此龍蹄云

十一月大

十三日 丁未天晴 京都御使兵部太輔範忠朝  
臣歸洛去比下向是被賀申御產無爲事又勅撰事

十一月大

十六日 庚戌明年正月御弓始射手等被差定之  
相摸左近大夫將監彈正少弼等被下連署奉書云

東鑑五十二

十四

十七日 辛亥陰降牙霰常 今日御息所并若宮  
姬官自御產所備御還御

十九日 癸丑 去八日僧事聞書到若若官別當  
僧正轉大僧正依御祈禱也以其除書自御所被

遣官寺即被相副一首御詠云鎌田次郎左衛門尉  
行俊爲御使云

廿日 甲寅 信濃國善光寺事且爲被鎮寺辻惡

黨且爲警固被定置奉行人所謂和田石見入道佛  
阿原宮內左衛門入道西蓮盛寺左衛門入道光阿

詠方部四郎左衛門入道定心等也而相交負外雜務致不調沙汰之由訴訟出來之間今日及評議自今以後可令停止彼奉行人等之旨被仰出且此子細所被觸仰當國守護人陸奥孫四郎也

十二月大

五日 巳巳天晴 入夜於左京地事有當座歌合右太辨入道以下好士等群集云

十四日 戊寅霽 今曉彗星見東方爰掃部助範元最前令察御所客星出見之由申之次晴茂朝臣彗星之由奏申其後國繼晴平晴成獻彗星勘文十六日 庚辰天晴 將軍家出御于庇御所召司天等數輩被事變異事土御門太納言左近大夫

東鑑五十二

十五

將監公時伊勢入道行願信濃判官入道行一以下入之多以候箕子司天等任位次申之十三日陰雲之由一同申之晴隆十四日曉有近大日之至數返雖窺見客星彗星不見之由申之範元申晴耀之由旨而猶伺見可申子細之趣被仰下太宰權少貳入道心蓮奉行之二

十八日 壬午天晴 卯刻彗星出見長二尺余今日於小侍所明年正月御的始射手以下事等有其沙汰射手有故障等不可有免許由及群儀云相摸卒近太夫將監彈正少弼等奉行之二

廿七日 辛卯霽 今夕彗星見西方有室宿皆氣余色白

文永三年 丙寅

正月大

一日 乙未天霽 風靜境飯沙汰御簾前太納言御劔越前々司時廣御調度左馬助清時御行騰秋田城介泰盛御馬五疋皆黑彗星見西辟八度二日 丙申天晴 境飯御簾前太納言御劔左近大夫將監公時御調度左近大夫將監顯時御行騰備中守行有御馬五疋境飯以後將軍家御行始相州御亭御引出物如例御劔左近大夫將監時村砂金左近大夫將監公時羽左近大夫將監顯時御馬二疋三日 丁酉天晴境飯御簾前太納言

東鑑五十二

十六

御劔右馬助清時御調度刑部少輔時基御行騰對馬前司氏信御馬五疋

七日 辛丑天晴 依々自法印權大僧都守海入

十一日 乙巳 自去夜雪降午赴屬霽今日有御弓始射手

一番 伊東刑部左衛門尉 盛谷新左衛門尉

二番 橫地左衛門次郎 小沼五郎兵衛尉

三番 早河次郎太郎 相間左衛門次郎

四番 海野弥六 堤又四郎

五番 山城三郎左衛門尉 平嶋弥五郎

今朝相州被衆鷄里八幡宮



十二日 丙午天晴變雲御祈金剛童子法大僧正  
隆辨如法尊皇王法安祥寺僧正天地災變祭業昌  
御使伊達藏人大夫屬星祭國繼御使池伊賀前司  
十三日 丁未霽 未起雨降酉刻屬晴依將軍家  
改調事本日御鞠始延引戌刻被行誓變御祈陰陽  
少名晴家於御所西庭奉仕如法泰山府君祭雜事  
左近大夫將監宗政朝臣沙汰所被奉獻鞍馬一疋  
標馬一疋銀劍一腰也此外手筥二合御雙絁  
皆以上自御所被出之御使常陸前司將軍家出御  
其庭  
十七日 辛亥天晴 將軍家依御惱今日鶴里御  
祭事延引

東鑑五十二

十七

廿五日 己未霽 將軍家若宮御魚味左京兆相  
州以下人々被出仕丑刻佐々目谷燒亡  
廿九日 癸亥霽 陰或小雨今日御息所并若宮  
姬始入御本京地小町御亭是將軍家自明日依二  
所御精進也  
卅日 甲子天晴 將軍家御參鶴里八幡宮還御  
之後被給二所御精進

二月小

一日 乙丑陰 雨降晚沈交雨降希代怪異也粗  
考舊記垂仁天皇十五年丙午星如雨降聖武天  
皇御宇天平十三年辛巳六月戊寅日夜洛中飯下  
同十四年壬午十一月陸奧國丹雪降光仁天皇御

宇寶龜七年丙辰九月廿日石瓦如雨自天降同八  
年雨不降井水斷云此等變異雖上古事時災也而  
泥雨始降於此時言語道斷不可說云  
五日 己巳天晴 二所奉幣御使進發  
九日 癸酉天晴 午起二所奉幣御使歸衆其後  
御息所并若宮自左京兆御亭入御之所彈正少弼  
業時中務權太輔教時候御與寄其外數輩供奉及  
還御之期左京兆被奉御引出物若宮御方御劍彈  
正少弼持祭之御馬左近大夫將監時村伊賀  
左衛門次郎元清又一疋標相摸六郎政賴伊賀左  
衛門三郎朝臣等引之御息所御方砂金南庭等內  
々被進之

東鑑五十二

十八

十日 甲戌雨降 日中屬晴將軍家於鞠御坪御  
馬御覽薩摩七郎左衛門尉祐能伊東刑部左衛門  
尉祐賴波多野兵衛次郎定康等騎之士御門大納  
言八條三位候公卿座一條中將能清中御門少將  
公仲等朝臣左近大夫將監義政彈正少弼業時以  
下候北廣廂

廿日 甲申霽 寅起於御所被行變異等御祈主  
殿助業昌大學助晴長修理亮晴秀晴壽大藏

權太輔泰房晴平大膳權亮仲光等列座南庭勸  
七座泰山府君祭將軍家出御縫殿頭師連奉行之  
去十日十一日有御夢想源亞相同時見夢殊御怖  
畏云

三月六

五日 戊戌天晴 陰小南降。午起雷鳴自南方直  
比降雪大如李其後晴夫西社又雷鳴數聲凡無時  
吉文之趣甚不快云春雷下大兵起五穀不熟人民  
餓死云但戊巳雷鳴有吉文之由有省申之輩  
六日 己亥天晴 今曉木土權頭親家爲内々御  
使上洛又諸人訴論事被止引付沙汰問詰所召怒  
訴陳狀可勘申是非也前々被記申詞之間爲被賦  
九人評定衆所被結番也  
御評定日々奏事結番次第不同。

一番 二日 十三日 九三日

尾張入道見西

越前々司時廣

東鑑五十二

十九

宮内權大輔時秀

伊賀入道々圓

和泉入道行空

二番 六日 十六日 九六日

越後守實時

中務權大輔教時

出羽入道道空

信濃判官入道行一

對馬前司倫長

三番 十日 廿日 廿一日

秋田城介泰盛

縫殿頭師連

少卿入道心蓮

伊勢入道行願

一番 衆 一日 十五日 二番 衆 五日 九一日

三番 衆 十一日 廿五日

政所問注所及執事每日可令衆也且自問注所

每日可令進文士二人也

十一日 甲辰天晴 彈正少卿業時朝臣室北

男子御平座

十三日 丙午天晴 暮雨下今自姫君御五十日

百日之儀也又就諸人訴論事有被定篇自等所謂

御評定日々當衆奏事

兼日可被付名目於勘解由判官

一事書事 御評定之後執事之仁令進草案事書者被加

一見理致無相違者可被付對馬前司也

廿七日 庚申天晴 相模左近大夫將監家政家

務殊無行云

東鑑五十二

二十

廿八日 辛酉 仰放遊之士可被檢過鷹狩之旨

月來有其沙汰所被施行于諸國中護人也其狀云

鷹狩事

右祭之外禁制先畢仍雖備于供祭非其社領縱雖

爲彼社領非其社官者一切不可仕得之由可令相

觸其國中若有違犯筆者從可註申交名之狀依仰

執達如件

文永三年三月廿八日

相模守

本京權太夫

某殿 守護人

廿九日 壬戌天晴 此間刑部卿宗教朝臣就職

朝臣作一卷勘狀將軍家密々被召覽之是去文

應二年正月十日御鞠始之日當職廷尉出羽行有  
上野廣經是利家氏等列其庭廣經家氏上括之間  
此朝臣當日頻傾申之處同八月十九日旬御鞠廣  
經重上之而經年序之訖見其三輩之吉由被數代  
之例證故革之云載于狀之趣者違官仙洞之間之  
供奉臨幸之臣云衆候蹴鞠之輩專札之時無上括  
之儀清和天皇御宇天長元年被始置使廳以降  
天子昇霞九重之迴符動獄舍巡見等依爲楚  
忽之儀上之此外之時上括之輩先規多以非吉事  
所謂後白河法皇御時安元治承之比康賴信房上  
之同意于成親卿之謀教共配流出家壽永元曆之  
比知康光經上之光經者木曾合戰於其場失命和

東鑑五十二 二十一

康者遂坐事出家順德院御時承父之比康元宗仲  
上之同二年後鳥羽法皇熊野山臨幸之時光俊朝  
臣<sub>下時上之</sub>同三年洛中洪滅彼朝臣并康光家仲  
等果出家道世後堀河院御時繁茂行經上之天福  
元年有藥壁門院御事同亡卒餘姑射山崩御四條  
院御宇嘉禎之比光葉上之無程出家早世同仁治  
之比行親行盛上之至事變駕其後行盛依在事  
出家當代知親上之于時實治之曆果然明從境起  
云  
廿日 癸亥天晴 於御所和歌御會二條左兵衛  
督教定宮内卿入道禪惠遠江前司時直越前司  
時廣左馬助清時右馬助時範周防判官忠景若官

大僧正等衆候僧正被獻風流一册

四月小

五日 戊辰天晴 將軍家有御小齋醫師等衆上

御療治事及其沙汰

七日 庚午 朝雨下陰南風烈將軍家御救觸之

間可有蛭蛇之由施藥院使忠茂朝臣申行之而依

三嶋社神事憚否被問陰陽道無御衆社之儀何可

有憚哉之由申之又被尋社司之處同申無憚之由

仍有此御療

八日 辛未天晴 前左兵衛督正三位藤原朝臣

教定率日來所煩瘡也

十五日 戊寅 長門國一宮神人等致殺害沙汰

東鑑五十二 二十二

之由事守護人資平就註申子細有其沙汰并狼藉

事可令奉行由資平雖申之守護沙汰事被定式目

畢而爲守護之身補國檢非違使之條不可然云

廿一日 甲申霽 甲乙人等數十人群集于比企

谷山之麓自未起至酉起向飛礮爾後帶武具起闔

門夜迴等馳向其所生虜張本一兩輩被禁籠之所

殘悉以逃亡關東未有此事事京都飛礮猶以爲狼藉

之基固可加禁遏之由前武州禪室執權之時有其沙

汰被仰六波羅畢況於鎌倉中哉可奇云

廿二日 乙酉天晴 依將軍家御惱事以松殿僧

正爲驗者可有護身之由及御沙汰云

五月小

一日 癸巳陰 自去夜黑雲掩天日蝕不正自街  
祈三位僧都輕榮也祈禱玄應殊依有御感被送遣  
銀劍一腰鞍馬一疋也

北四日 丙辰天晴 依御惱事於廣御所被給行

五大尊合行法若宮太信正卒伴僧八口奉仕之

北五日 丁巳 相州令象御所給云

北六日 戊午 御惱事當于御修法結願之日可  
有御減氣之由大阿闍梨申入之云

六月小

一日 壬戌天晴 依為鬼宿曜御修法結願云御

惱聊御平驗云阿闍梨兼日申狀符合之由及口遊

東鑑五十二

二十三

五日 丙寅天晴 木工權頭親家自京都歸衆自

仙洞内之有御諷諫等云中御所御事云

十九日 庚辰天晴 於相州御所深秘御沙太

相州左京兆越後守實時秋田城介泰盛會合此外

人之不及衆加云今日松殿僧正良基退出御所中

逐電有子細云

北三日 甲申 酉刻御息所并姬宮俄以入御山

内殿若宮入御相州亭仍人々多以馳象彼所凡錄

倉中騾動不知其故云

北四日 乙酉霽 子刻大地震今日左大臣法印

嚴慧遁世晦跡云

北六日 丁亥天晴 近國御家人如蜂競集余屋

滿巷云

七月大

一日 辛卯 雷雨御家人等或破關有奔衆于錄

倉之輩或迴路有密衆之類皆帶兵具隱居邊土民

及酉刻俄騾動群集之輩加小具足帶弓箭然而無

事而暮畢

三日 癸巳天晴 曉木犯五諸喉等三星自今曉

民間不安或破壞家屋或運隱資財是皆怖戰場之

故歟已一縣甲冑軍士揚旗自東自西馳集窺衆相

州門外次於政所南大路相一同時竟其後少卿入

道心蓮信濃判官入道行一筆為相州御使衆御所

律還及兩三度云先如此軍動之時將軍家入御執

東鑑五十二

二十四

權亭又可然人々衆營中養守護之歟今度無其儀

世以恠之朝馴暮老近臣之類皆出周防判官忠景

信濃三郎左衛門尉行章伊東刑部左衛門尉祐賴

鎌田次郎左衛門尉行俊繼谷左衛門次郎清重等

計相殘御所中云

四日 甲午天晴 申刻雨降今日午刻騾動中務

權大輔教時朝臣召具甲冑軍兵數十騎自藥師堂

谷亭至塔上宿所依之其近隣弥々成群動相州以

東卿八郎入道令制中書之行拂給無所于陣謝云

戊戌將軍家入御越後入道勝圓佐介亭被用女房

與可有御歸洛之御出門云

土御門大納言 同中將 同少將 供奉人

木工權頭親家

同子息左衛門大夫景教

女房一條局ツネ子ノミヤコ

別當局

同兵衛藏人長教  
兵衛督局

尼右衛門督局

此外相摸七郎宗頼

大宰權少貳景頼

路次出御自北門亦橋西行經武藏大路於彼橋前

奉向御與於若官方暫有御所念及御詠歌云

供奉人

相摸七郎宗頼

相摸六郎政頼

遠江前司時直

越前々司時廣

鹽正少弼業時

駿河式部大夫通時

尾張四郎篤時

越後六郎實政

東鑑五十二

二十五

周防判官忠景

城彌九郎長景

佐々木壹岐入道生西

河越遠江權守經重

小山四郎

和泉左衛門尉行章

伊東刑部左衛門尉祐頼

和泉藤内左衛門尉

武藤新左衛門尉景泰

甲斐三郎左衛門尉為成

出羽七郎左衛門尉

此外一條局別當局

右衛門督局

民部卿局小宰相局

侍從局

越後加賀

但馬春日

北日庚戌天晴

戊刻前將軍家御入洛著御左

近大夫將監時茂朝臣六波羅亭

新刊吾妻鏡卷第五十二終



土師氏玄同攜其舍弟聊卜來而語余曰方今世之見東鑑者滔滔皆多也而郡鄉村里之號氏族姓尸之字官家僧道之目古今名物之稱方言俗談往往未易讀也况又其間文字紕繆書寫脫略乎見者病之今聊卜點倭訓于其旁其或所未安者乃闕疑而俟後之是正因附削

東鑑跋

刷氏新鏤於梓蓋為此書之一得耶願乞一言以託不朽余始拒之曰豈外求哉子宜自爲之既而復乞之至于再三而不已於是記其所以語余者如是及至其板成則紙貴而益售耶可不謂便於童蒙之見者乎若夫國家之盛衰世道之得失可以鑒戒可以資治者姑待異日之

評遂書以爲跋

寬永甲子之春

羅洞散人

林道春書



寬永三年三月日

管聊卜刊正

東鑑跋

二



百練抄卷第四

冷泉院二年

安和二

圓融院十五年

天祿三

花山院二年

天元五

一條院廿五年

寬和二

三條院五年

永延二

後一條院廿年

長德四

後朱雀院九年

長和五

後冷泉院廿三年

萬壽四

長曆三

治安三

長元九

長久四

天喜五

治曆四

天延三  
貞九二

永祿元  
正曆五  
寬弘八

百練抄卷四

一

冷泉天皇<sup>諱</sup>二年

村上天皇第二子母皇后安子右大臣師輔女也

康保四年五月廿五日踐祚六月廿七日以左大

臣實賴為關白九月一日立守平親王為皇太子

九歲帝十一月十一日即位于紫宸殿十八此殿

同母弟即位始也

安和二<sup>康保五十八十三</sup>

元年十月八日自麗景殿遷御清凉殿先帝於此殿

昇霞今敬燕霞遺跡改土木也改替板敷先例壞

改隨儉約之儀

百練抄卷四

二

二年二月七日右大臣家人與中納言兼家々人鬪

乱彼是家人被殺害

三月十三日大納言在衛卿於栗田山莊設尚齒

會希代勝事也

廿六日左大臣源高明坐事左遷太宰權帥依左

馬助滿仲等密告也中務少輔攝敏延右兵衛佐

連同配流依謀反也

四月一日權帥西宮家燒亡

三日仰玉畿七道追討謀反之黨類

八月十三日讓位於皇太弟

讓位宣命載  
皇太子由

十六日太上皇遷御冷泉院

九月廿四日黃牛入外記廳經結政所即登南築垣上東行落出去畢可謂奇異

圓融天皇十五年

村上天皇第五子母同冷泉院安和二年八月十

三日受禪是日立師貞親王為皇太子二歲九月

廿三日即位十一

天祿三年安和三三廿五改元依即位也

元年四月三日冷泉院燒亡太上皇御朱雀院

廿日天台惣持院燒亡

百練抄卷四

三

五月十八日撰政太政大臣實賴薨七十

廿日以右大臣伊尹為撰政

二年四月廿五日天台座主良源供養惣持院參議

兼通已下泰向

三年正月三日帝元服十四

四月廿日太宰貳外帥源高明歸京

十月廿日諸卿定申太宰府言上高麗國牒送事

宰府可賜封符者

十一月一日太政大臣伊尹薨四十

廿六日天子始覽奏書

廿七日權大納言兼通任內大臣為關白

天延三年天祿四十二改元依天長也

元年二月廿七日藥師寺燒亡

三月十三日北野天神宮燒亡

四月十五日有搜盜事去夜強盜圍源滿仲家放

火之故也

二年六月十六日右少將義孝卒異香滿室顯往生

之瑞相今年天下有飽瘡之患

三年十一月廿八日武德殿燒亡

四月一日南殿母屋柱吠如牛

百練抄卷四

四

六月十五日公家始自今年被獻東遊走馬等祇

園社依去年飽瘡時御願也

廿三日彗星見寅卯方

七月一日日蝕皆虧如墨無光衆星盡見

八月十三日左大臣兼明自祈龜山求水々即涌

出

貞元二年天延四十七三改元依去

元年五月十一日內裏燒亡餘焰不出中重天皇御

職曹司遷御城川院

六月十八日大地震其響如雷宮城諸司已下所

所人家多顛倒埋死者多今日以後每日地震數度凡近日恠異頻示天下不靜

二年二月廿四日掇星見

兼通

三月廿六日行幸太政大臣閑院第賦詩春主

王

四月廿一日以左大臣源兼明為親王叙二品任

中務卿

子左御

七月廿九日天皇自堀川院遷幸新造內裏

十月七日左大臣賴忠為關白是太政大臣辭退

替也

十一日大納言兼家止右大將遷任治部卿

百練抄卷四

五

天元五年

貞元三十四年改元依災變也

元年七月廿三日雷落右近陣

八月十六日於兼香殿有御遊興延喜昌泰以後

久絕

二年三月廿七日行幸石清水宮

三年後三月十六日近江國倭囚等群聚陽明門愁

申阿闍梨念禪弟子乱行倭囚聚期有限任意入

京非無其罪可飯本國之由被仰了

雅信

五月十八日春興宜陽兩殿前虹立又左大臣家

已下人宅十六間同有此事

七月九日大風暴雨羅城門及諸門諸司等顛倒

十五日夜大雨洪水東西南方如大河

九月三日延曆寺座主良源供養根本中堂

十月一日供養天台文殊樓

十日行幸加茂社

十一月廿二日內裏燒亡天皇御職曹司

廿一日遷官廳

四年二月九日采女司炎上

廿日行幸平野社

去年十月以後御官曹司

七月天皇自官廳遷御四條後院太政大臣以私

百練抄卷四

六

家造進為後院也

九月四日藏人式部少丞負孝候殿上之間為鬼

被殺

十月廿七日遷幸新造內裏

去九月遷御職曹司

五年二月十九日皇太子元服

八月廿日乾風吹來談天門顛倒

十一月十七日內裏燒亡天皇御職曹司

十二月遷御堀

殿川

或記云炎上之間累代御物多紛失牙御笏紫

檀御服息玄上等也



今月天台僧齋然入唐詞人錢送

十二月二日左衛門權佐為賴尋出御服息持泰

賜祿

六日玄上從式御曹司東垣付物拔落畢

永觀二年天元六四十五改元依内裏燒亡也

元年三月廿三日供養圓融寺公家御願也准御齋

會

七月一日故太政大臣為元一条家炎上

十月廿五日始行圓融寺般若會准御齋會

同日右大臣兼家供養橫川藥師堂

百練抄卷四

七

十一月廿七日右大臣供養天台惠心院

二年二月十五日右大臣東三条家炎上

六月廿九日安樂寺詫宜子祢宜藤原長子

八月廿七日讓位於皇太子花山太子先自閑院

移堀川院受禪之後入御新造内裏先皇御堀川

院

花山天皇諱師二年

冷泉天皇第一子母贈皇太后藤原懷子太政大

臣伊尹女也永觀二年八月廿七日受禪十七此

日立懷仁親王為皇太子五歲以太政大臣賴忠

為關白十月十日即位

寬和二年永觀三四廿四改元依即位也

元年二月十三日太上皇幸雲林院過子日野遊左

右大臣兼信康已下陪從京洛野邊見物車如雲

廿二日皇太后供養觀音院

三月廿六日上皇御覽臨時祭公卿候御車邊

四月十日平野臨時祭始

五月廿一日信濃國所獻之白雉候藏人所之間

一足折放北山畢

八月廿九日太上皇御出家廿九法名金剛法

百練抄卷四

八

小記云上皇御惱自令稱給曰元方卿靈者所

陳無知又良源僧正之靈有舍怨忿事云々

九月一日院以判官代孝忠遣召播磨性空法師

遂不泰

十九日太上法皇自堀川院遷御圓融院前駐僧

十人僧正覺朝候御車後上達部已下供奉

二年丙戌三月十日右近馬場可改南北之由宣下

廿一日圓融院向東大寺受戒

廿六日皇太子始朝觀七歲

五月廿六日行幸武德殿有臨時小五月會伴殿

五月可達武德殿定云々

天延炎上之後土木始成

六月六日法皇仁和寺覽競馬打球

廿二日夜天皇偷出宮中向花山寺出家法名十九

覺僧嚴久藏人右少辨道兼扈從以左少將道綱

獻劔璽於東宮道兼之謀也中納言義懷左中辨

惟成追泰花山寺同以出家

九月十六日花山法皇令受天台戒給義懷惟成

兩法師同受之

十月三日圓融院去月廿九日參詣石山今日自

百練抄卷四

九

信為勅使泰入有送物延喜御宇亭子院臨幸紀

伊國之間引清和例被奉送了

十四日圓融院幸大井河摸政已下扈從有和歌

管絃大藏卿時中任泰議由於彼席被仰下之

一條天皇仁韓懷廿五年

圓融院第一子母東三茶院太政大臣兼家女寬

和二年六月廿三日踐祚七歲以右大臣兼家為

攝政七月十六日立居貞親王為皇太子同廿三

日即位  
永延二年寬和三四九改  
元依即位也

元年丁亥二月十一日入唐僧齋然歸朝隨身第三

傳釋迦像十六羅漢繪像并摺本一切經到蓮臺

寺大臣公卿已下之車奉拜之

三月十六日諸卿定申賀茂別雷社鳥居側堀出

往古錢七百八十文事可令諸道勘申之由宣下

七月廿一日摸政移徙新造東三條第燒亡之後

九月七日伊勢大神宮神人數十人捧持神泰陽

明門訴申國司清邦

十月二日院泰詣愛太子水尾寺令騎馬給

百練抄卷四

十

十七日院參詣長谷寺笠置寺七大寺

廿七日於諸寺祈可用錢之由云々

十一月一日仰有司制上下不用錢貨事

十七日兵庫寮倉燒亡自神代所傳之戎具悉為

灰燼

今年改造北野寶殿昨日暴風雷雨之間北野天

神於皇太后宮寄託藤典侍

北野宮破損事云々有歌  
二年二月七日大學寮諸司顛倒之後造立仍學生

已下泰入  
三月廿日圓融寺御塔供養

三月廿五日於常寧殿賀撰政六十算

廿六日右大臣為光供養法住寺

四月廿三日齊王御撰政被<sup>雅信</sup>向左府棧敷院三

四兩親王同渡御其儲不可數言各有贈物以撰

政所帶之將繪野劔被<sup>志</sup>送左府

廿六日前泰河守定基朝臣出家

五月十日大和國漆上郡橘山嶺三町余許去山

脚四町許坤方移置草木不動嶺上有倉倉中有

佛像又不動

六月十三日遣武勇者於閑院左大將<sup>賴光</sup>三茶家令

百練抄卷四

十一

追捕保輔朝臣當時中納言頭光卿所住也上下  
嗟嘆

九月十六日於撰政新造京極第有興宴事左右

大臣已下集會釣殿河陽遊女陪其席

十月廿九日圓融院於天台戒壇院受戒灌頂

永祚元年<sup>永延三八改  
元依彗星也</sup>

二月六日諸卿定申尾張國百姓等訴申守藤原

元命非法事

三月九日圓融院於東寺灌頂

廿二日始行幸春日社

六月十九日鴨社御殿前大樹顛倒數星自樹中  
飛指南連去

廿六日太政大臣賴忠薨

六七月之間彗星見東西天

八月三日酉時日三面双出即以混合九近日惟

異多

十三日夜大風宮城殿舍門樓諸司諸社諸寺左

右京人家悉以顛倒拔木類山又有洪水人畜沒

死天下大灾古今未曾有

十月一日以餘慶補天台座主宣命使少納言能

百練抄卷四

十二

遠於坂本為山僧被冤陵破却宣命追返慈覺門  
徒所為也

廿五日僧正寬朝供養遍照寺

正曆五年<sup>永祚二十  
元依去年大風也</sup>

元年正月五日帝元服十一

十一日幸圓融寺朝覲法皇主上令吹御笛給御

笛師右兵衛督高遠叙三位被賞其妙曲也

二月二日西寺燒亡

五月五日太政大臣止撰政為閑白

八日以内大臣道隆為撰政此日太政大臣出家

十日入道太政大臣以二条京極第為佛閣号積善寺法興院同所欽

六月廿八日以後天皇不豫八月平愈

七月二日入道前太政大臣兼家入滅六十

二年二月二日有国卿除名大膳属泰有時殺害之間依為造意

十二月圓融院崩冊二華圓融寺北原

四月二日大皇太后昌子三条第燒亡御式曹司遷東

三條南院火事後造營也

七月法興院供養

百練抄卷四

十三

九月十六日皇太后依御惱於式曹司出家即号

東三條院天皇行幸

十月十五日東三條院自式曹司泰詣長谷寺

今年天下有旱魃之愁

三年二月廿九日東三條院泰詣石山寺内大臣已道東

下扈從

四月廿七日行幸東三條院子時大納言通長止東門第賦詩奏樂

五月一日遍照寺塔供養公卿舞人脱衣賜之

廿八日撰政充大臣已下向右近馬場有競馬事

六月八日中納言保光卿供養松崎寺或云國明寺

八月定考上卿依輕服穩座退出事見右記

九月九日重陽宴有探韻事

十一月廿七日中宮定子遷座新造二条第

十二月安樂寺訖貞信公流可為執政臣事

四年三月廿八日東三條南院拂地燒亡四月廿八日主上詔覽官養

四月廿二日止撰政為關白

六月廿五日關白供養法興院内三昧堂

廿五日管丞相贈左大臣正一位

七月廿日雷落義福門下猛火付柱令燒關白隨身右中將隆家朝臣雜色避暑於此處見付打滅

百練抄卷四

十四

了

閏十月廿日管丞相贈太政大臣依内大臣夢也

小右記云五年二月四日安樂六日小右記云謁寺勅使飯云有詔宣詩云々

内府之次被命云一昨日夢管丞相有可贈太政大臣之夢仍今且申關白余思慮時平大臣贈太

政大臣今欲同彼人欲内府深有感氣十四日觀

修僧都來云近曾東宮更衣右大將濟時女修法猛靈忽

出來我九条丞相靈存生之時或寄佛事或付外

術懇切彼子孫繁昌之思其願成就就中小野宮

大相國子孫可滅亡之願彼時深施外術欲斷彼

子孫所期先六十年其驗已新今依滅他之思受苦極重拔苦無期小野宮子孫產之時吾必向其所妨事依存生心願所期六十年其遺不幾彼時外術今二年許也其後可難迴此妨又此更衣已有懷姙氣仍所來煩也為斷他同胤者今聞此事覺往古事雖云骨肉可有用心欽僧都忽造大威德尊可奉飯依

十一月廿七日行幸大原野社

今年飽瘡流行

五年自正月至十二月天下疫死者尤盛起自鎮西

百練抄卷四

十五

及京師四五六七月之間殊盛死者過半五位已上六十余人也道路置死骸

二月廿日關白供養積善寺准御齋會

三月廿五日發遣諸社奉幣使是去十月十日後

涼殿十七日弘徽殿飛香舍有放火事為顯其人也貞觀八年應天門炎上時例也

十月二日關白於東三条行逆修佛事造圖繪木

等佛像書寫金泥法華經十一部十僧八口僧網二口凡僧

外六十僧以朝衣裝束褻裝束各一襲白玉隱文

帶劔平緒冠等修諷誦劔外皆納管云々

十一月五日天台惣持院炎上

十三日關白遣廷尉令捕義靜阿闍梨阿闍梨待

其告逃去件僧道兼右府祈有咒咀之疑也

十六日關白遷東三条南院去年炎上之後造營

長德四年正曆六改

九年正月九日鴨院燒亡元依疫早也

正月廿六日石清水而夢武內宿祢云天下疫氣

尚未止有行幸此宮者可平也有御卜也

三月七日關白所勞之間官中雜事可觸伊用內大臣

之由宣下

百練抄卷四

十六

四月六日關白道隆依病出家十一日薨

廿日右大臣道兼為關白

五月八日關白右大臣道兼薨

今日左大臣重信同薨歟四五月之間疫疾殊盛

納言已上薨者八人關白道隆道兼左大臣重信

大納言濟時朝光道賴中納言保光伊涉等也又

四位五位侍臣并六十余人至于七月漸散

十一日官中雜事可觸權中納言道長之由宣

下

八月三日右大臣道長隨身為權中納言隆家所從被



殺損後日隆家卿出下手人

成忠

同十日咒咀右大臣之陰陽師法師在高二位法

師家事之魁似內府所為者

同廿一日諸社臨時奉幣大內記以言不仰文戴

宣命極以為奇仍令切除之是定內大臣所為歟

以言其抑付重須經拷而有思食只不可為內

記之由有御氣色

九月六日諸卿定申若狹國唐人事可移越前國

之由定申了廿日同有此定

十六日上人於阿弥陀峯燒身上下雲集見之近

百練抄卷四

十七

年諸國燒身者十一人云々

十月十八日傳太宰大貳佐理以藤原有國任之

依宇佐宮訪道推問使之處無弁申旨故也

二年正月十六日內大臣權中納言隆家於恒德公

一条第奉射華山院子細見榮花物語御童子二人被殺

害取首持去云々

二月五日內大臣家司董宣并同家人右兵衛尉

致元宅養置兵衛佐廷尉令追捕之則捕得泰內

四月廿四日諸陣警固內大臣伊周任太宰權帥

權中納言隆家取出雲權守是依去正月奉射華

山院并咒咀厭物自取云々東三条院私行太元法

事也去二月先是令勅申兩人罪名

小右記云出雲權守於中宮捕得遣配所見者

如雲權帥出雲權守共候中宮不可出仍宣下

擬破夜大殿戶仍不堪其責隆家出來權帥逃

隱愛太子山有司只求得鞍馬歸後日出家歸

本家母氏同車六日記云權帥官符依公家被

改云々

五月一日權帥出雲權守篁中宮御所不赴配所

百練抄卷四

十八

去後日於愛太子山捕之遣配所

今日中宮出家為尼中宮定子依帥事出家六月

廿二日入內人以不甘心

六月八日東三条院燒亡

十月十日前帥偷入京之由有其聞仍仰有司令

伺之處在中宮也仍重令追下遣有司於中宮令

搜出之奏出家之由改官符猶不剃頭令作偽甚

者歟

十一月六日北野社燒亡

三年四月五日前帥出雲權守等可召返之由宣下

去月廿五日依東三條院御惱非常敕可潤恩記  
哉否令諸卿定申遂有恩免也

十七日檢非違使等依勅圍華山院責申去夕監  
行下手人是右衛門督公任宰相中將齊信同車  
自左府出之間於路次花山院人數十人致監行  
之故也

之故也

六月十三日諸卿定申高麗國牒狀事會議不可  
遣返牒可警固要害又牒狀不似高麗國牒是大  
宋國之謀畧歟

宋國之謀畧歟

十月一日旬出御南殿之間太宰府飛驒到來申

百練抄卷四

九

高麗國人虜掠鎮西之由仍止音樂庭立奏事了

令諸卿定申之

十一月十一日令法家勘大宋商客峯朱仁聰罪  
名

名

小右記云若狹守兼陰為大宋國客仁聰等被

陵礫云々然者依此事被勘罪名歟年紀相違

歟

四年戊戌正月廿二日供養圓教寺無行幸

二月太宰府追伐高麗國人

十二月三日強盜入宜耀殿東宮御息所希代事

也  
今年自夏至冬斑瘡流行死亡者多古老未見如  
今年者

長保五年長德五年正十三改  
元依去年疫瘡也

元年三月八日太宰府進雨米一畧令諸道勘申

六月十四日內裏燒亡天皇暫御小安殿

十六日遷御一條院

七月十一日太宰府言上一莖二花蓮開之由

八月廿一日東三條院供養慈德寺准御  
齊會

十二月二日太皇太后昌子崩往生

百練抄卷四

二十

廿七日維衡致賴等罪名定依合戰也即配  
流

二年三月廿日東三條院住吉詣左大臣扈從

四月七日豐樂院松後堂為雷火被燒

廿日奉移河原院大佛於祇陀林僧仁康沙汰也

五月三日北野宮池地獄紫雲立

十月十一日自一條院遷幸新造內裏

十一月六日北野社燒亡

十三日諸卿定申諸道博士勘申詔書草昧不心  
得事

十二月十六日皇后宮定子依產事崩天下心  
喪服

八月洪水

或記云自長  
保年中始祭  
紫野  
天皇疫神祭  
也五月五日  
為式日  
當年權燒失

十九日少將成房於飯室出家

今年疫死甚盛始自鎮西到京師

三年二月四日右中將成信右少將重家發心相伴

向三井寺出家

廿九日右大辨行成供養世尊寺堂件寺故中納言保光卿舊宅也

三月十日行幸八省院被行仁王會寬平九年例也

十月九日於上東門第賀東三條院四十算有行幸

百練抄卷四

二十一

十一月十八日內裏燒亡天皇御職曹司

廿二日遷幸一条院

廿九日諸卿定申造宮殿舍可減其數歟又可減寸法歟事殿舍高大頗可減事也但暗難議定古

殿在嘉祥寺醍醐寺等依彼殿等可被造歟又可減殿舍數事可令諸道勘申之由定申之又上達

部女房等義服可禁事定申之

閏十二月十五日負外帥伊周復本位依東三條院御惱行

幸之後被仰之

廿二日東三條院崩當今母儀也天下諒闇自去

年冬至今年七月天下疫死太盛道路置死骸

四年三月十五日入道前叁河守定基法名上狀向

大宋國巡禮五臺山六月十八日首途天下上下

舉首向聖人房受戒世人云是真仙也

十九日諸卿定申諸道勘申造營減殿數哉否并寸法事不可減殿數不可造高大之由定仰了

六月廿七日諸卿定申高麗國人不堪彼國苛酷引率伴類可住日本國之由言上事

十月十四日右兵衛府燒亡燒子五年八月二日雙六采入第二內親王皇子鼻內僧慶圓

百練抄卷四

二十二

加持之出之給度者

二月八日諸卿定申下總守義行言上平佐良燒

亡府館掠虜官物事

七月廿日諸卿定申大宋商客來著事

九月十九日左大臣泰諸住吉社

十月八日遷幸新造內裏

十日左大臣泰興福寺維摩會上達部扈從云々

十一月廿七日宇佐神人泰洛訴申帥卿苛酷事

離岸之後六箇日著河尻依神感有訛宣云々

今年々穀有年

寬弘八年長保六七十改  
元保災變也

元年三月十三日左大臣於法興院行万燈會

廿四日宇佐宮神人五百餘人泰陽明門外訴大  
宰帥惟仲事去年十一月離岸之後六箇日著河  
屍依神感也云々

廿七日諸卿定申宇佐宮訴事會議之間陣座南  
方有雷電公卿怖畏右大臣并時光俊賢等退出  
之間於掃筍少道趨飛渡上達部首上於宇佐神  
人宿所左近府南門間失疑是大菩薩御變現歟俊賢  
卿獨定申不可遣推問使之由人々尤為奇

百練抄卷四

二十三

廿八日花山院覽山邊花左大臣已下扈從有和

歌

五月十九日左大臣奉為東三條院修八講五卷  
日所々有捧物有舞樂

廿七日華山院幸左大臣上東門第覽競馬

十月廿一日行幸北野天神宮平野同

十二月十一日皮聖供養一茶北邊堂行願寺是  
也

廿八日太宰權帥平惟仲勘罪名傳任依宇佐宮  
訴也二年四月八日  
於西府有薨奏

或記云左大  
臣於佛前出  
打火云々

今年天下有炎旱愁

二年二月八日大歌所大藏省倉等炎上

廿五日前帥伊周可列大臣下大納言上之由宣  
下

三月八日中宮上東行啓大原野具一負舞人左

大臣著赤色據袍

七月七日御書所衆所望輩於弓場殿令作課試

詩叔義露  
作珮文

廿一日前帥伊周初著仗座又聽勅授帶劔

八月十四日寂勝講始去年三月始以五  
箇日為日數也

百練抄卷四

二十四

廿一日諸卿定申大宋商客曾令文來著事

十月十九日左大臣供養木幡淨妙寺准御今日  
齊會

始三昧

十一月二日雷電大雨

十三日前帥伊周可預茶朝議之由宣下未有先

例

十五日內裏燒亡宸儀御職曹司依破壞遷御官

朝所神鏡在灰燼中

十七日神鏡燒損事令諸卿定申之大刀掣同燒

損令諸道勘申

四月東三條  
自明神加階  
行幸賞也

廿七日遷幸東三條

或記云十二月九日奉移神鏡於東三條開旧  
櫛特奉納新調韓櫃之間忽然有下光照耀內  
侍女官等恐驚之

三年三月四日自東三條遷幸一條院出御以前先

有花宴左大臣獻物貢馬十疋又有勸賞

四月東三條角明神加階行幸賞也

大星見巽方

五月十日藏人式部丞定佐打損藏人尤少并廣  
業面定佐除籍

百練抄卷四

二十五

七月三日諸卿於御前定申諸道勅申神鏡可鑄  
改哉否事定間三尺餘蛇自御在所庇落庭中登  
自南殿北階赴西不見可謂神不受非禮

十三日諸卿定申諸道勅申客星事

同日興福寺大衆數千人參左大臣亭有愁申事

先集會八省依宜旨追却

九月廿二日行幸左大臣上東門第有競馬東宮

同泰候

十月五日南院燒亡冷泉院

廿八日左大臣於法興院万燈會有舞樂

十一月五日東宮第一皇子於左大臣枇杷第元

服儲君御此所今日左大臣捧劔舞太平樂

十二月廿六日左大臣供養法性寺五大堂

四年二月十五日故僧正良源餘慶贈謚号良源慈惠餘慶

并知

三月三日左大臣曲水宴

八月二日左大臣參詣金峯山

十二月二日左大臣供養木幡塔

十日內大臣公季供養法性寺三昧堂

五年二月九日華山院崩册一

百練抄卷四

二十六

八月中宮御在所塗籠內犬產

九月十一日中宮於土御門第誕第二皇子後一

條院是也

十月十六日行幸上東門第依皇子降誕也有勸

賞

十二月五日冷泉院移御南院炎上之後新造也

六年二月四日捕兄咀中宮并第二皇子左大臣等

法師圓能勘問兼伏已了造意者伊豫守公行朝

臣妻高階光子民部大輔方理并同妻源子其父

前越後守為文朝臣等被勘罪名

廿日止前帥朝泰依坐<sub>日</sub>咒咀事也<sub>六月廿三日</sub>

五月十七日<sub>日</sub>充大臣供養天名舍利諸卿參入

廿八日諸卿定申自<sub>下</sub>一条院行幸神今食中院間

事可用自<sub>上</sub>冷泉院行幸儀

十月五日皇居一条院燒亡主上御職曹司延喜

天曆二代御記及累代御物等燒亡但神鏡奉取

出了

小右記云主上御年今年卅御壽限之由有夢

而今有<sub>後</sub>火事似已轉御

十九日遷御枇杷殿

百練抄卷四

二十七

十一月廿五日中宮於左大臣上東門第降誕弟

三皇子<sub>後朱</sub>

七年三月十八日於南殿供養釋迦如來七佛藥師

千部法華經為息灾也

十一月廿八日自枇杷第遷幸一条院炎上之後

造畢有<sub>後</sub>本家賞

八年三月十八日公家於南殿供養一切經件御經

可被納天名千光院云々

五月五日雷電

六月十三日讓位於皇太子依御惱也於一条院

有此儀新帝即渡御東三条第<sub>八月十一日</sub>

十九日先皇御出家<sub>法名精進</sub>

廿一日太上皇崩于一条院<sub>卅二</sub>奉葬北長坂野

安置御骨於圓城寺

十月廿四日冷泉院崩于南院<sub>六十二</sub>

三條天皇<sub>諱</sub>五年

冷泉天皇第二子母贈皇太后藤原超子入道太

政大臣兼家三女也寬弘八年六月十三日受禪

是日立敦成親<sub>後</sub>王為皇太子<sub>四歲</sub>一条

日官中文書可觸<sub>道長</sub>左大臣之由宣下十月十六日

百練抄卷四

二十八

即位卅六今年止大嘗會依諒闇也<sub>冷泉院</sub>

長和五年<sub>寬弘九十二年</sub>廿五

元年二月八日設樂神自鎮西上洛今日著舟岳紫

野

五月十五日皇太后宮於枇杷殿修八講五卷日

有捧物盡金銀之義

六月左大臣重病惱去月登山已<sub>登山時山僧有投飛礮事</sub>後有此事或云

山王御崇云々虹立彼里第又多怪異云々

閏十月三日法興院內積善寺燒亡

二年正月十六日東三条燒亡



三月廿三日敦儀敦平兩親王於內裏元服  
六月義濃國異魚出來進其圖

九月十六日行幸左大臣土御門第覽競馬中宮御座  
之後禊子  
內親王

十二月廿六日明敕任權僧正天皇耳目不分明  
仍令明敕行御修法結願夜天皇夢明敕自左右  
耳目共出即入帝左右眼夢覺耳目共明仍抽  
仕之

三年自正月廿七日彗星見

二月九日內裏燒亡天皇御朝所次遷御松下曹

百練抄卷四

二十九

十月廿二日行幸前大相國上東門第有文章生  
試并種々宸遊皇太子泰上

十二月十八日前大相國於京極院自去十四日  
修八講五卷日有捧物今日結願也講師永照依  
振弁戈大相國感之施累代寶劔一柄

三年二月廿三日日花門顛倒又仁壽殿正檐鳴柄  
為奇

三月一日較倉院炎上

廿一日前太政大臣道依胸所勞也出家五十四法名行  
四月十八日諸卿定申太宰府言上新羅賊侵邊

六月十九日故權律師賀靜贈僧正是天皇御目  
不明以心譽加持之間元方卿并賀靜靈顯現賀  
靜可被贈天名座主之由稱之而有議不被贈座  
主被贈僧正也

廿日京人花園邊建立神殿祠疫神依疫神訖宣  
也

今年疫病競起也

廿三日左大臣送書狀於圓通大宋國大師許

廿五日大宋國商客周文商所獻孔雀天覽之後  
於右大臣顯光北南第生卯十一但未化離云々

百練抄卷四

三十

九月廿日自枇杷第遷幸新造內裏

十月廿七日左大臣准橫政可行叙位除目事之  
由宣下依御藥也仍今日除目於直廬行之諸卿  
參彼所

十一月十七日內裏燒亡天皇御松下曹司去九  
月所遷幸也世謂天下滅亡之秋也

十九日行幸枇杷第

五年正月廿九日讓位於皇太子舊主御枇杷第新

東門渡劔壘於太子第  
五月一日太上皇登天台山修七壇法依御目病

也公卿已下着水干裝束

六月二日自上東門第遷幸一條院

七月廿日左大臣上東門第并冷泉院法興院燒亡

九月廿三日批把第燒亡當時太上皇御在所也  
上皇先御高倉第次遷三條院

後一條天皇諱敦成廿年

一條天皇第二子母上東門院入道太政大臣道

長女也長和五年正月廿九日受禪以左大臣為

攝政是日立教明親王為皇太子院第廿三三條二月

百練抄卷四

三十一

七日即位九歲

寬仁四年長和六廿三改元依即位也

元年二月廿七日攝政泰木幡墳墓公卿騎馬上官

為御前

三月一日大安寺燒亡但釋迦像奉昇出之

十六日攝政道長上表以內大臣賴通為攝政

四月廿九日太上皇依御惱出家

五月九日太上皇崩三條院四十

六月廿二日興福寺塔并東金堂為雷火燒亡

八月九日皇太子敦明親王依病辭遁立敦良親

政寬仁三十  
二廿二止  
致為關白

王為皇太弟

廿九日停前春宮坊為小一條院

九月廿二日前攝政泰詣八幡宮具舞人殿上上

官公卿扈從翌日有競馬

廿四日還向之間遊女有纏頭

今年蝗虫間起蝻喰生苗

二年正月三日天皇元服十一於一條院有北儀太政大臣為

能冠攝政內大臣為加冠

四月廿八日遷幸新造內裏

閏四月十二日圓教寺燒亡

百練抄卷四

三十二

十月廿二日行幸前大相國上東門第有文章生

試并種々宸遊皇太子泰上

十二月十八日前大相國於京極院自去十四日

修八講五卷日有捧物今日結願也講師永照依

振弁戈大相國感之施累代寶劍一柄

三年二月廿三日日花門顛倒又仁壽殿正檐鳴柄

為奇

三月一日穀倉院炎上

廿一日前太政大臣道依胸所勞也出家觀後改行寬

四月十八日諸卿定申太宰府言上新羅賊侵邊

境之狀

八月廿八日皇太弟元服十一

九月廿九日入道太政大臣於東大寺受戒

十二月廿三日改攝政為關白帝年十一

四年二月十六日諸卿定申高麗國牒狀事

三月廿二日入道大相國供養無量壽院准御齋會無行

幸

七月廿二日大風宮城所々悉以破損

十月入道大相國天台延曆寺受戒

今年疱瘡流行天子煩之

百練抄卷四

三十三

治安三年寬仁五二二改元依辛酉年也

元年四月五日高松殿燒亡小一條院御在所也

八月一日入道大相國運納一切經於經藏諸卿

參入有音樂

十一月運關寺材木牛為迦葉佛化身之由依人

人夢想欲斃去之日入道大相國并禪定准后率

子息泰向拜之

十二月二日入道從一位源倫子供養西北院

廿三日宇佐宮炎上

二年二月廿四日諸卿定申諸道勘申宇佐宮炎上

事廢朝五ヶ日

五月廿二日關白於賀陽院第競馬右大臣已下

上官泰入有音樂

十月十四日法成寺金堂供養御齋會准

十一月十三日太皇太后供養仁和寺內觀音院

炎上之後重造立倫子

三年十月十三日鷹司殿六十御賀

萬壽四年治安四七十三改元依甲子也

元年六月廿六日入道大相國供養法成寺內藥師

堂准御齋會

百練抄卷四

三十四

九月十九日行幸關白高陽院第有競馬事

三年正月十九日大皇太后出家傳宮号為上東門

院九十

三月廿日法成寺阿弥陀堂改造被真言供養

五月廿一日上東門院御八講五卷日自去十九

日被始行之人々捧物各盡義或人云昔聖武天

皇造東大寺國銅皆盡今太后修八講國銀悉盡

云々

四年正月三日法興院積善寺炎上

二月廿七日右近衛府廳并圖書寮藏燒亡累代

寶物皆為灰燼

八月廿二日法成寺釋迦堂供養

九月八日諸卿定申大宋國商客陳文祐事

十一月廿六日行幸法成寺依入道大相國病也

十二月四日入道太政大臣道長薨于無量壽院

六十

今年入道參河守大江定基法名從宋朝奉書狀

於入道太政大臣

長元九年萬壽五十七廿五  
改元依天變也

元年二月廿一日諸卿定申追討前上總公忠常事

百練抄卷四

三十五

司

三月十二日大宿并內藏寮掃部寮燒亡內藏累

代寶物貴藥等多燒亡

四月九日自松下曹司遷幸枇杷第

五月十六日行幸左大臣上東門第覽競馬騎射

十二月二日光榮與吉平三月移徙相論事

十七日華山院燒亡

四年五月七日入唐僧寂照已下五人戒狀有請卿

遣唐國令能書人以白紙書之近日又大宋國上

人念救來朝有知識事

八月廿一日上東門院供養東北院准卿

十月廿九日關白左大臣供養法成寺塔准卿

十二月廿九日伊賀守光清配流依殺害伊勢神

戶神民也

四年三月十四日式部卿敦平親王被止登務是去

正月叙位以良國王舉申四位而良國非王氏又

先年殺害大隅國管野重忠犯人也改姓名謀計

之故也

四月卅日東三条院燒亡年來造營來七月可移

徙之所也

百練抄卷四

三十六

六月廿六日源賴信相具忠常願入京件追討使

左衛門尉直方無功仍被改賴信了賴信下向日

請降剋而受病死去仍斬首云々

八月五日召問祭主輔親去六月荒祭宮詫宜之

趣申云齋宮頭藤原相通妻宅內作大神宮室殿

詐假神威誑惑愚民其罪已重早可配流者

八日相通配流伊豆國妻比義古曾流隱岐國先

令諸卿定申

十三日出雲國杵築社顛倒

九月廿五日上東門院參石清水并天王寺住吉

公卿侍臣女房詠哥令<sub>レ</sub>左衛門督師房作序  
十月十七日出雲國言上去八月十六日子刻杵  
築社無故顛倒之由

或記云閏十月三日有御卜兵革疫疾者宝殿  
中奉納御正躰菩出頗自宝殿御坐顛倒大殿  
上云々

廿日關白左大臣供養興福寺東金堂并塔准御齋會  
十二月三日京極院燒亡上東門院是也

五年四月廿二日宇佐宮宝殿為風顛倒  
九月廿日出雲守橘俊孝勘罪名配流佐渡國是

百練抄卷四

三十七

杵築社顛倒并有神訛由奏聞仍遣實檢使之處  
皆無實之故也

或記云稱訛宜授官位於人云々

十二月八日法住寺燒亡九条御廐同燒亡

今年關白左大臣送返狀於圓通大師相代先公

相國令報書之月日可勤之

今年自二月至六月大旱但五穀稔也賴通教通

六年十一月廿九日上東門院中宮左大臣内大臣

於高陽院賀母氏從一位源朝臣七十算

七年八月九日大風同永祚宮城殿舍顛倒

元不被行之  
八月十三日  
以後等見  
東方九廿三  
日關白左大  
臣供養一切

九月卅日祭主輔親獻碧珠一顆是去八月於神  
宮祈請之間於宝前松實中所得云々令諸卿定  
申之安置内殿十一月有報賽奉幣輔親叙三品

十月廿七日圓教寺供養  
八年五月十七日關白左大臣歌合以祭主輔親為  
判者

九年正月二日二宮大饗間頭中将俊家朝臣令人  
打頭左中弁經輔

四月十七日天皇崩于清凉殿廿九獻劔璽於皇  
太弟依遺詔秘喪事以如在之禮

百練抄卷四

三十八

廿二日上皇退出上東門院是日權中納言顯基  
出家三十

九月六日中宮威子崩三十八号藤堂中宮  
後朱雀天皇諱教九年

一条院第三皇子母同後一条院長元九年四月  
十七日于時御踐祚廿八左大臣賴通關白如元

七月十日即位

長曆三年長元十四廿一  
改元依即位也

元年四月十二日攝津國能勢郡初獻銅八月件銅  
被分獻諸社有議

正月廿二日  
内宴此後保

閏四月八日諸卿定申石清水別宮神人與但馬守則理關亂事仗議之間雷鳴雹降五月廿日則理并刑部大輔相奉配流

今月大宋商客慕晏誠等漂來

五月十五日遣推問使左衛門權佐於太宰府是去年三月曲水宴時安樂寺與帥實成卿關亂依彼寺訴也

六月二日上東門院供養菩提樹院後一條院御墓所八月十七日立第一親仁後冷泉為皇太子去月二日於南殿元服九月三日衆星亂落四方飛散人莫不驚

長元九年十一月十日自  
神主寺奉遷  
御骨於此院

百鍊抄卷四

三十九

十二月八日諸卿定申法家勘申源則理可會赦哉否可有恩免之由被定之

二年二月十九日諸卿定申法家勘申前帥實成罪名實成卿除名正二位即從源致親配流法家勘文

云帥故殺死罪源致親依搜取寺中雜物以強盜罪論之

三月十七日長谷寺塔并僧房燒亡水尊不燒

五月十四日諸卿定申諸道勘申三合厄運不同

事

九月三日諸卿定申祭主競望之輩散位依國應

其撰事上

或記曰伊勢太神宮御遷宮夜御出之間布衣烏帽子異姓雜人亂上御階上奉戴御躰又正官并相殿御躰動傾欲奉落地之由有其聞

十月十四日宋人慕晏誠等貨物廻却官符

三年正月九日祇陀林燒亡

二月十七八日天台僧三千許人為愁座主事群

泰關白第門下高倉本家以武士相禦之間有監行事三月八日教以三井明尊可被補座主之由有其聞仍所愁申也

百鍊抄卷四

四十

十九日有司召取山僧出雲等院禁獄依監行也三月十三日高陽院炎上

四月卅日伊勢大神宮有訛宣事祭主依國停任勘罪名去年遷宮間監行事

五月廿三日諸卿定申曆博士道平與僧證昭曆論事可用道平曆之由被宣下之

六月廿六日前祭主依國配流伊豆國依神事違例也去廿三日令諸卿定申之以兼與補祭主畢

廿七日内裏燒亡天皇御朝野

七月十三日天皇遷幸京極院



十九日召返前祭主佐國依訖宣也

八月七日祭主兼與遷任若狹守止祭主是又依訖宣也

廿八日中宮嬬子依產崩廿四宇治殿一女

長久四年長曆四十一  
改元依災變也

元年七月廿六日大風伊勢豐受大神宮正殿并東

西宝殿瑞垣悉以顛倒八省舍嘉堂同顛倒延曆

神宮炎上之時神躰懸懸木今度有顛倒之今中但

御躰不動傾奉渡膳殿

八月四日諸卿定申太神宮外官顛倒事主上殊

百練抄卷四

四十一

歎息

六日資房記云有召參御前仰云外官事深心肝無聊更不顧一身之畏只依憶世間也後聞此事等念誦讀經寒心之甚也人君不德世及澆漓之故也歎而有餘迷而不知也吾前行幸太神宮但不知神慮之許否件事已無先跡然而諸社行幸當其時有其例春日御社其程非近是一糸院御時事也如此事只可隨時宜也唯有遠行之煩許也中心所思也未決是非暫不可出言外予不奏左右依重事也

十五日同記云有召參御前外官顛倒事令發遣

奉幣使之間昨日從齋宮示送云去十二日訖宣

云只今神居不穩尤似輕々外人參入奉拜尤可

無便神居復舊之後可有此事者今依此事奉幣

使停止了恐懼還深此後書神筆宣命每夜有御

拜令讀給

九月九日皇居上東門院燒亡主上先御法成寺

東金堂廊內侍所神鏡在灰燼中燒損神鏡在灰

燼中遺藏人頭尤中將資房左少將經季等令求

之僅奉得御躰燒殘五寸許即奉累入折櫃又得一

百練抄卷四

四十二

切十二計三其躰燒損不分明云々次々得二三寸許

各々段々也也又如金玉之物數粒得之隨又奉加

入彼續也

十日內侍所女官二人夢想云一人夢云彼本所

有小蛇頗有惱氣又一人夢云彼本所有人云吾

相離獨身在此所云々仍女官等向彼所奉鑿求

之處如玉金求得二粒即奉入畢有靈驗可感歎

云々已上見資房卿記

九月十二日諸卿於御前定申火事以後雜事又

定申神鏡燒損事任寬弘二年例可被行之由定

申了

十月十二日遷御內大臣二条第

十二月四日菅原院入道中納言燒亡

外記云十月廿二日左大臣室從二位源朝臣

供養三井寺常行堂云々但不見諸家記可勘

之

二年三月四日於皇居二条第有花宴召擬文章生

於前池中島令作試詩歌音不

四月廿日賀茂祭還立於神館檢非違使追捕近

衛使少將信宗依牛童過差也

百練抄卷四

四十三

五月七日宸勝講之次令屬文侍臣分經中一品

賦詩

十一日諸卿定申三井寺申可立戒壇事問諸宗

可有裁定由被定之

八月十六日小一条院御出家

九月十三日天安寺燒亡

十月一日權左中弁義忠於吉野河漂死

十二月十九日自上東門院遷幸新造內裏

三年正月廿四日圖書寮燒亡

八月廿日設詩宴於中殿題琴渥

九月廿一日行幸關白高陽院覽競馬

閏九月三日諸卿定申吉祥院防河事

九日中殿詩宴菊籬更

同廿三日關白左大臣下向有馬溫泉

廿七日遣勅使左衛門權佐泰憲問所勞

十月二日左少將源定季被射殺于車下

十二月八日內裏燒亡天皇御朝所

四年正月元日節會已下於官廳被行之以正廳擬

紫宸

三月廿三日自官朝所遷御一条院

百練抄卷四

四十四

九月九日召文章生佐國已下於弓場殿進試詩

進士題禮義為器七言十韻每句置前漢儒士名學

生題善以為寶七言十韻每句用禮記篇名是秀

才給新等試也

十二月一日皇居一條院燒亡天皇渡御高陽院

廿一日遷御東三条院

寬德二年長久五十一廿四改

元年疫疾尤盛死骸滿道路

七月廿七日諸卿定申但馬國唐人來着事

八月六日以散位中原長國民部丞藤原行任等

皇太子自京  
極院參入  
位對面之後  
退出

任但馬奴掾為存問宋客也

十一日諸卿定申但馬國宋客迴却事

二年正月十六日讓位於皇太子依自去年冬玉躰  
不豫也

同十八日太上天皇落飭入道即刻崩于東三条

院冊七葬高隆寺乾原安御骨於圓教寺

六月十三日新帝自京極院遷幸官朝所八月廿七日還幸

七月四日關白左大臣高倉第燒亡

八月十日諸卿定申但馬國唐人守隆等愁申守

百練抄卷四

四十五

章任朝臣押領雜物事

廿九日諸卿定申法家勘申筑前國住人清原守

武入唐事

十月六日遣右衛門權佐實綱於太宰府為推問

權帥重尹非法也

十二月十六日天皇自京極院遷幸官朝所

廿六日太宰權帥重尹罪名下勘法家不出弁推

問使似有罪科之故也

後冷泉天皇仁詳親廿三年

後朱雀院第一皇子母贈皇太后嬪子入道太政

皇太后嬪  
子後冷泉院  
女御堂女  
子後冷泉院  
女御堂女  
子後冷泉院  
女御堂女

大臣道長女也寬德二年正月十六日受禪廿一左

大臣關白如元是日立尊仁親王為皇太子十二

四月十日即位廿一十九日諸卿定申太宰權帥

重尹罪科即停任

永承七年寬德三十四  
改元依即位也

元年二月十八日太政官朝所燒亡天皇御大膳職

四月三日西院燒亡小一條院御願也

四日天皇自大膳職遷幸內大臣二条第廢勢  
例

七月廿五日諸卿定申貴布祢社為水流損可被

改立他所哉否事松尾社月  
讀社右例

百練抄卷四

四十六

八月四日北野祭改五日為四日依贈后御國忌

也

十月三日唐人來著定可被迴  
却云々

八日自二條第遷幸新造內裏

十二月十九日皇太子元服

廿四日興福寺諸堂僧房拂地燒亡北圓堂不燒

二年七月十八日興福寺上棟關白以下氏  
公卿寮向

十一月太宰府追捕大宋商客宿房放火者禁獄

十二月廿四日渡唐者清原守武配流佐渡國同

類五人可浴徒年之由被宣下件守武太宰府召

或記去此兩  
三年天下  
旱

進之於貨物者納官厨家

三年三月二日供養興福寺准御會

五月二日太宰府進新羅曆與本朝無相違但十

二月大小不同云々

八月十一日以大僧正明尊被補天台座主少納

言永職偷登山讀宣命座主即進辭狀

大宋國商客來朝有議令廻却

十一月二日内裏燒亡天皇御朝野

十日還御京極院

四日五節停否事議定五節非差神事之由被定

百練抄卷四

四十七

父子細見土記

四年二月十八日興福寺北圓堂并唐院傳法院燒

亡

三月十九日肥後國阿蘇社燒亡

四月十七日諸卿定申賀茂社司等被勘罪名之

間以代官可從神事哉若又原其罪可令從神事

哉

六月廿三日閑院燒亡皇后宮東宮御所也

七月十七日賀茂称宜親經茂永等於使廳勘問

是去年六月廿五日神主成貞於社頭為刺客被

去月廿三日  
諸卿定申之  
九月十七日  
仗議奉幣賀

茂

殺害之疑也

十一月九日内裏哥合

五年正月廿五日大和守源賴親配流土佐國依興

福寺訶也先有罪名定

土記云法家勘文身為上請宜待勅處分云是

被優八十也意外記勘申天平宝字年中納

言廣足停任例

三月太宰府言上安樂寺燒亡

十五日關白左大臣親通供養法成寺内新堂安置盧舍那大

常准御

百練抄卷四

四十八

七八日於内裏有臨時舞樂事諸卿參入舞人有

勸賞

六月五日關白左大臣家哥合

七月三日新造冷泉院放火諸國本寺等撲滅之

或記云六月十六日冷泉院石上明神被移立

神殿了

九月宋人張守隆歸化賜安置官符十七日令諸

卿定申一同可安置之由

廿八日諸卿定申曆博士道平大法師證照算博

士為長等勘申朔且論事是增命申云今年閏在

十一月道平造曆可謂訛謬然間大宋曆持來閏  
在十一月仍仰道平證照為長令進勘文道平申  
云延曆以後一章不誤至于兼平六年者曆家之  
失也先例雖有和漢曆之相違公家更不用異朝  
說云々仍被定朔且畢  
十月十三日始行幸東北院是踐祚之後未見而  
仙院年來之間有固辭  
六年正月八日小一条院崩<sub>五十</sub>  
三月廿四日禁裏有鷄合以木造之以造樣勝為  
勝盡其義

百練抄卷四

四十九

四月十六日法成寺五大堂無風顛倒  
五月五日禁裏有根合蓋鷄合後宴也有哥合并  
絃管興主上令吹笛給如龍之咽水中近世無如  
此事人以感歎  
六月五日太宰府弥勒寺燒亡  
七月七日大風  
十日高麗國牒狀定返上日向國安事<sub>ナリ</sub>  
十九日遷御新造冷泉院  
九月九日於冷泉院法皇詩宴  
十七日諸卿定申大宋國商客流來事

今年始入未

十月十日關白尤大臣遊覽大井河覽紅葉  
七年三月十八日藏人玄蕃助隆成於和德門前切  
傷藏人右衛門尉定佐面  
廿八日關白尤大臣供養宇治平等院  
五月廿九日大安寺東寺新造神社行御靈會依  
可止疫疾御示現也世名曰祇衍園社<sub>花</sub>  
六月天皇有御樂事依其療賞和氣相成丹波雅  
忠賜一階  
八月廿五日長谷寺燒亡觀音像為灰燼  
祭主永輔依齋宮寮并大神宮神人訴被推問事

百練抄卷四

五十

永決之間去五月會赦而又會赦者不可從神事  
之由訴申之仍令勘先例  
今年疫病流行天下  
十月十九日於冷泉院釣臺宴遊題云落葉笙哥  
裏  
天喜五年<sub>永義八正十一改</sub>  
元年二月十日住吉社燒亡  
三月四日關白尤大臣供養平等院內阿弥陀堂  
齊會<sub>准御</sub>  
六月十一日從一位源倫子薨<sub>天皇外祖母左大</sub>

廢朝三ヶ日主上著錫紵

八月廿日自冷泉院遷幸高陽院

二年正月八日高陽院燒亡天皇渡御高陽院炎上

前瀧口紀近則放火云々字号小紀太

二月十六日自冷泉院遷御四条宮龍大臣第運渡俊紀宅寢

殿為南殿

八月十一日供養長谷寺

九月廿二日自四条宮行幸京極院

十二月八日皇居京極院燒亡天皇幸氏部卿長家卿家

廿八日遷幸龍大臣四条宮

百練抄卷四

五十一

三年三月十八日犯人籠藏人町藏人右兵衛尉源

齊賴搦得之仍蒙使宜旨即從源初小野幸任同

給官件犯人左少將忠俊雜色也

或記云件犯人拔刀近龍顏欲奉危國家云々

土記云拔刀者走入藏人町云々

四月廿六日貴布祢社為水流損移立他所

六月七日壞冷泉院渡立一条院

八月十一日東寺塔為雷火燒亡

九月廿八日法成寺僧房燒亡

十月廿五日供養圓教寺新堂題号圓衆寺是先

皇御願未遂也准御齊會

四年二月廿一日自四条宮遷幸新造一条院本家

閏三月八日殿下於宇縣被逐修善事以山座主

明決為閑白御導師

八月四日彗星見東方

十二月十七日諸卿定申前陸奥守賴義與俘囚

賴時合戰間事

廿九日源賴義更任陸奥守為征夷也陸奥守良

綱遷任兵部大輔

五年三月十四日上東門院供養法成寺圓堂准御齊會

百練抄卷四

五十二

廿九日四条宮燒亡

四月十四日大極殿鴉尾墮地破損

九月廿三日諸卿定申陸奥守賴義言上俘囚安

倍賴時去七月廿六日合戰之間中矢死去事遣

官使可被實檢實否云々

十月廿六日小野宮燒亡

十一月卅日崇福寺供養去治安二年回祿之後

寺家造營之左中弁定親為勅使泰向

康平七年天喜六八廿九改元依火災也

元年二月廿三日法成寺拂地燒東北院西北院同為灰燼



內裏遷幸後  
未遷幸

廿六日新造內裏并中和院大極殿東西樓朝集  
堂等燒亡去廿三日省試題云偶燭於明人文之  
微也

廿七日於御前被定大極殿燒亡事凡此後所々  
炎上大略以連日

廿八日於御前被定大極殿炎上事以負觀例可  
被行之由諸卿定申之

三月廿五日記云神嘉殿遷都以後未有火事此  
度始燒亡召諸道勘文令諸卿定申之

四月廿五日源齊賴被任出羽守為征夷也

百練抄卷四

五十三

去月以來度  
度有仗儀  
十月諸卿定  
申之被下勘  
法家

六月五日召問祭主永輔朝臣依去年九月神衣  
祭同荒妙社服闕急事也閏十二月廿三日勘罪  
名廿六日被免之但大官司兼任科拔之後可從  
神事之由被宣下也

七月廿五日法琳寺言上太元堂前地長三十餘  
丈弘三丈窪縮事遣實檢使

閏十二月廿七日諸卿定申大隅国流來唐人守  
道利殺害罪名事

二年正月七日節會中間內豎町燒亡

八日皇居一條院燒亡主上渡御上東門院御所

壹切釵為灰燼不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>

二月八日遷幸東宮也大<sub>二</sub>臣三<sub>一</sub>条第以寢殿為御在所

三月八日中宮職寬子供養仁和寺內新堂

四月十三日權大納言信家卿山井家燒亡

七月十二日大風起雲飛揚左近陣廊八間以下

諸司舍屋多顛倒

十月十二日法成寺無量壽院供養五大堂同有

仏閑眼去年失火之後所造立也被免輕犯之者

十二月五日諸卿定申祭主永輔目代散位賴經

殺害大神宮訖宣者事

百練抄卷四

五十四

今年皇居連日放火世以為奇令諸道勘申之由  
見外記々

三年五月廿五日幸白河院賦詩

五月四日興福寺又燒亡東金堂南圓堂免之釈

迦眉間化佛求自灰中不損

六月十一日諸卿定申伊勢守義孝燒亡大神宮

御厨并祭主永輔目代大中臣賴經殺害大神宮

訖宣者守時事去五月廿一日於使廳勘問件賴

經三ヶ年被召置射樣而四年東北院供養會赦

猶暫不被免而遂恩免事

八月二日陣定

神宮託宣者事伊勢守義孝事任罪狀義孝遠流

七日諸卿定申大宋商客林養俊政等來著越前

國事賜糧食可令廻却之由被定畢後日賜安蓋并長德仁聰

例云々

十一日遷幸新造高陽院御忌

十一月廿六日關白賀大僧正明尊九十筭

十二月廿六日諸卿定申伊勢神人隱服假供奉

神衣祭及七月十日御饌事治部卿經仕卿為上卿中納言例

十一日宰相中將俊房被免勅勘依前齋院禊子

強奸事此一兩年籠居

百練抄卷四

五十五

四年七月十一日供養東北院去元年本堂燒亡仍

法成寺北卜泉石地所造立也

八月一日花山院上棟

九月廿二日被始東北院不斷念佛每年式日今

月十日也而燒亡以後以吉日始修

十月廿五日皇后宮供養平等院內塔

十一月廿五日備中國吉備津宮燒亡

廿九日出雲國杵築社顛倒

五年二月十二日諸卿定申出雲大社顛倒并吉備

津宮燒亡事

五月廿二日天皇於高陽院覽競馬騎射

六月廿七日興福寺上棟

十一月三日前陸奥守賴義言上鳥俘囚負任等

之由去九月十七日於厨河掬斬首云々朝家聞

食此由有歎感

十二月廿八日諸卿定申下野守賴資與上野守

惟行合戰事

六年二月十六日源賴義斬俘囚安倍貞任同重任

藤經清等首傳京都

廿七日被行追討貞任之賞源賴義叙正四位下

百練抄卷四

五十六

任伊豫守一男義家任出羽守二男義綱任左衛

門尉散位武則叙一階任鎮守府將軍獻首使藤

原季俊任馬允

三月廿二日豐樂院燒亡

六月廿六日諸卿定申諸道勘申發成務天皇山

陵事

七月三日大臣移徙新造華山院

八月十八日清水寺燒亡取出觀音像

九月廿六日諸卿定申諸道勘申山陵宝物等可

返置議法

去年七月十六日  
配流佐渡

十月十五日諸卿定申諸道勘申發山陵狂人罪名

十七日興福寺僧淨範被流伊豆國依壞山陵也同黨之輩十六人同配流以泰議左大弁經家被

告興福寺

十月廿九日公家供養實相院延曆寺內

十二月十五日看列山陵修復并返納盜取

之寶物廢朝有宣命

十八日前下野守賴資依殘虎上野公惟行令勘

罪名令速流之處一季二度不可行流刑之由法

百練抄卷四

五十七

家中仍延引有仗議

廿四日上東門院供養三井寺一衆院

今年炎旱

七年二月日太宰府言上宮崎宮濱殿顛倒

三月廿九日伊豫守賴義自與列相具所上洛之

降虜宗任等有議不令入京分遣國々宗任家住

遣伊豫良照遣太宰府治曆三宗任等移遣太宰

府依有欲逃歸本國之聞也

十二月十八日諸卿定申太宰府觀世音寺炎上

事

廿四日諸卿定申義宗與國房合戰事

治曆四年康平八二改元依早龜并三合厄也

元年十月十八日供養法成寺金堂樂師堂觀音堂

准御齋會

十二月九日東宮第一皇子元服貞仁白河院

二年三月六日以後彗星見東方

十八日吉祥院新造天神堂奉移尊廟

四月一日彗星又見西方

五月一日大宋商客王滿獻鸚鵡并種々靈藥於

鸚鵡者死去畢

百練抄卷四

五十八

十三日大神宮電雨大如鷄卵

九月八日唐人來著定先年唐人流來賜粮返遣

其母為報申子恩件子重參來貢貨物此事頗非

例事仍令定申之

十月十三日右大臣師實供養平等院五大尊

十一月廿八日公家供養太宰府觀音寺

十二月十七日主殿寮燒亡寮家重宝皆灰燼

三年正月十日吉社燒亡

二月廿五日供養興福寺准御齋會

七月廿七日參河國進國解犢牛繪様相副三頭

八足云々晉大興元年有此例

八月九日主計寮燒亡

十月五日行幸平等院仙駕一日逗留依震遊也

七日還幸被寄封戸三百戸有勸賞離宮明神授

一階

廿二日於清涼殿庭有殿上童舞數曲權中納言

顯房息童舞胡飲酒召御前賜御衣祖父内大臣

起座拜舞

四年二月以後聖跡不豫有御祈等

四月十七日以左大臣教通為關白前太政大臣

百練抄卷四

五十九

讓也

十九日天皇崩于高陽院四十左大臣已下參入

獻劔璽東宮閑院如在禮也

五月五日葬船岳西原置御骨於仁和寺山

六月廿四日肥後國阿蘇山雪降五六寸

廿六日天皇從閑院遷幸三條大宮第御子

九月四日遷幸關白左大臣二条第

十月十日大極殿上棟

此月土佐國言上數年仆木一夜起立出羽國言

上浪井湧出各令諸道勘申

十二月計一日皇居二條第炎上主上遷幸閑院

累代内本卿多以燒失畢

廿八日又遷御大宮第

百練抄卷四

六十止

百練抄卷第五

後三條院四年  
白河院十四年  
堀河院廿一年  
鳥羽院十六年

延久四  
延久殘一  
永保三  
寬治七  
康和五  
天仁二  
元永二  
應德三  
嘉保二  
長治二  
天永三  
保安四  
嘉曆四  
永長一  
嘉永二  
永久五  
泰德二

百練抄卷五

一

後三條天皇諱尊四年

後朱雀院第二皇子母陽明門院諱子三條院皇女也  
治曆四年四月十九日踐祚左大臣關白如元七  
月廿一日即位卅五于太政官廳大極殿未成之  
故也延久四年壬子十二月八日遜位同五年五  
月七日崩年四  
延久五年治曆五年四月十三日改元依即位也  
元年己酉二月十日依當梁年今年不可作內裏之  
由被定之諸道勘申  
廿三日可停止寬德以後新立庄園縱雖彼年以

百練抄卷五

二

往立券不分明於國勢有妨者同停止之由宣下  
閏二月十一日始置記錄所庄園券契所定寄人  
等於官朝所始行之  
三月十五日石清水行幸之間於路頭御輿枋折  
六月五日依此奉幣廿一社  
四月廿八日立第一親王白河貞仁為皇太子  
五月廿九日始行平等院一切經會  
六月廿一日自大宮院遷御高陽院伴院者帝曰  
居也今加造舍屋有遷幸也  
七月廿二日令御厨子所預始令供精進御菜

去應和二年  
二月石清水  
宮中奉移正  
座加修理事

二年正月十三日成務天皇神功皇后等陵兆域內  
狩獵并伐樹之者可令赦哉否令法家勘申  
三月十二日諸卿定申八幡宮寺中御殿修理可  
奉移假殿哉否十六日被行御卜奉移正座無其  
崇者仍令勘申造假殿日時又被問前帥并入道  
大納言前大貳卿等七月七日但記云八幡權別  
當法眼戒信別當法橋清秀預僧等相共開正殿  
可實檢損色之由被宣卜畢件御殿預僧三人之  
外他人不參入而令度有議初所被仰下也依申  
件破損之由去四月被作假殿遷御一定日時之

百練抄卷五

三

後依無遷御之先例日來有其議定所被延引也  
八月九日右辨正宗參向宮寺注損色十八日  
諸卿定申八幡宮修造間事廿八日八幡宮御休  
渡假殿可本殿修理令行御卜彼是相違事未決  
三年三月八日奉幣八幡宮止奉渡假殿可修理  
本殿之由被祈申也同四月九日寅刻奉遷石清  
水宮西第三御躰乍帳奉移東馬道其後始造作  
未時奉渡本所云々  
廿六日天台惣持院燒亡  
五月五日大極殿鷄尾可用本之由宣下

六月廿九日諸卿定申園城寺戒壇事仰諸宗可  
令勘申之由定申之園城寺僧頻言上仍有此沙  
汰也

八月十四日有敕石清水放生會遣上卿已下權

納言隆國參議經  
信權右中弁隆方

十月十四日感神院燒亡御躰燒損

廿日大地震東大寺鐘鈕切落

廿八日諸卿定申祇園社燒亡事此次八幡作  
事同有定

十二月廿六日供養御願圓明寺有行幸三年六  
月三日

改圓明寺  
為圓宗寺

百練抄卷五

四

廿七日加賀國白山御躰燒損以舊躰殘奉籠新  
像哉之由令勘先例三年九月五日依陰陽寮  
申不吉之由定申畢  
三年三月十八日行事以圓明寺之上日可用結  
政上日之由被宣下

廿七日始置修理左右宮城使前日有議定而初  
所被任也准左右坊城使例也

六月廿九日圓宗寺內常行堂灌頂堂供養行幸

七月十二日雲客於御前預詩試道俊澄宗伊家

藏人為房等也

八月三日於四條宮西對有五番相撲一條院例



也

但記云宇治前相國被申云五番相撲是古今秘藏事也仍公卿有其選非職常人輒不見物事也

十五日於一品宮御方和哥並遊興

廿七日有陣定吉祥院水危事義家朝臣救陸奧犯人基通是間事也

廿八日遷幸新造內裏

十月廿五日遷幸大井河道遙飯參於一品宮御方和哥

百練抄卷五

五

十三日大后東庭被裁并欄生

廿九日初行吉日吉社

十二月六日於中殿有詩宴題脩竹雪中舞

四年正月二日皇太子拜禮

廿五日宇治前太政大臣出家

二月十一日牛昇陣座喰損疊

廿日於東庭限三日令拜太神宮給

三月廿三日渡立太政官廳高御座於大極殿

廿六日始行幸稻荷祇園兩社

四月十五日幸大極殿行宴會土木新成之故也

但記云其儀如寬和大嘗會節會後節會於大極殿被行之

廿日多宝塔并御佛等被奉籠圓宗寺經藏

五月十五日諸卿定申祇園御躰燒損可奉造否事權少僧都公範有夢想事

六月十六日大宋國新物御覽

八月十日定沽價法

廿八日供養法成寺內西北院先年灰燼之後宇

治入道相國之玉之

九月之比庖瘡流行

百練抄卷五

六

十月廿五日行幸圓宗寺始□寂勝法花兩會卷五

日又行幸

廿六日但記云今日有夢想主上臨幸宇治前相

國被獻如意宝珠其形如鷄卵頗大黑水精有通

天主上珠御感云々當法華會五卷日令得法華

勝利給歟奉見本記

十二月七日藤原仲季勘罪名配流土佐國於齋

宮邊依射致白專女也

八日讓位於皇太子先帝遷御飛香舍新帝御昭陽舍

十六日上皇自內裏出御關白二条第

後冷泉後三條兩代之間不被行踏哥節會依來  
崔院御忌月也

白河天皇諱貞仁十四年

後三條院第一皇子母贈皇太后藤原茂子贈太  
政大臣能信女也實權中納言公成女天喜元年癸巳六月  
廿九日誕生治曆四年八月十四日為親王延久  
元年四月廿八日為皇太子同四年十二月八日  
受禪年廿是日立實仁親王為皇太弟後三條院第二子  
同廿九日即仁應德三十一廿七遜位大治四已  
酉七七崩年七十七

百練抄卷五

七

延久殘一年

二月廿日太皇陽明門院一品內親王泰石清  
水住吉天王寺給廿二日覽難波浦廿五日覽長  
柄橋於御船有和歌廿七日還御  
四月七日依院御惱行幸仙洞  
廿一日上皇御出家法名金剛行依病急也  
廿七日行幸院被行院司賞  
五月七日太上皇崩于高房朝臣大炊御門亭十四  
葬神樂岡南麓  
今月洪水廿年來未曾有也

九月十一日  
義家為當火  
被燒於人家  
掃墓也

七月廿五日但記云有加茂吉田奉幣太上皇葬  
次為被御社四至內也被解謝申之天曆太后御  
葬之時被申件之申行事左中弁實政失錯也

八月十九日皇后宮擊供養北野御堂

九月十六日遷幸宇治相國高倉第義保九年七月遷御擬華會

十月入唐僧成尋飯朝大宋皇帝被獻金泥法華

經一切經錦二十段

兼保三年延久六年八月廿三日改元依陽九并三合文也

元年正月十八日興福寺大衆切別當賴信房

百練抄卷五

八

二月二日宇治前太政大臣薨八十

七月十六日自凝華舍遷御清涼殿御宇治

十月三日上東門院八十崩于法成寺阿彌陀堂

依此事大嘗會可被行哉否仰諸道勘申

十一月大嘗會於大極殿被行之豐樂院未作之

間於官廳可被行歟之由有議定遂於大極殿所

行之

二年正月十九日依皇子降誕教文行幸中宮御座

東三條御實

廿六日左大臣以下參入大宋國皇帝付入唐閣

梨成尋獻貨物有之

五月廿四日諸卿定申山陵廢置事廢後冷泉院

母后陵置當時贈<sup>子</sup>后陵

六月十三日被始白河御願事件所故宇治大相

國累代別業也左大臣傳領獻公家

八月十四日遷幸賀陽院

廿八日於賀陽院有競馬事<sup>廿七日內</sup>競馬五番

九月廿五日關白前太政大臣教通薨八十

廿六日左大臣<sup>師</sup>內覽宜旨

十月十五日左大臣蒙關白詔

百練抄卷五

九

廿六日諸卿定申諸道勘申大宋皇帝付成尋所獻貨物納否

十一月五日右大臣<sup>師房</sup>仰外記令勘申大宋國貨物

以何物可被贈答哉云々先例

三年四月廿六日行幸賀茂社自今年以御阿禮日

可為式日之由被載宣命<sup>此後為每年事</sup>

六月二日諸卿於殿上定申大宋國返信物事或

云可遣和琴或云可遣金銀類或云可遣細布阿

久也玉先於陣唐人孫忠悟對問事

十三日供養東塔金剛壽院先朝御願也上卿已

下參行

七月二日諸卿定申伊勢內宮造誤造宮使可科

何被哉事

十月廿四日行幸大井河有和哥右大臣<sup>師房</sup>獻

序

十二月十八日關白供養平等院內阿彌陀堂

廿一日遷幸新造六条皇居

兼曆四年<sup>改元保四年十一月十七日</sup>依早冠并赤斑瘡也

元年二月十八日依右大臣薨<sup>中宮</sup>出御哉被尋先

例大外記師平申去天喜元年<sup>鷹司</sup>殿薨其間二

百練抄卷五

十

祭院為后宮御座內裏不出御召明法博士定成

有真等被問中宮服有無兩人共就本生可有服

之由進勘文然而不出御又不著服給

廿八日引見大宋國高客所獻之羊三頭

四月三日諸卿定申去二月五日香推廟燒亡事

可准治安元年宇佐宮例之由被定申十日廢朝

日數并仰諸道勘申七月十七日依諸道勘文諸

卿定申廢朝日數并造營事廢朝五令之由宣下

四月十五日天台勝蓮華院炎上

五月五日請仰大宋國返信官符長季朝臣書黃

紙入螺鈿筥答信物六丈織絹二百匹水銀五千兩也

十月九日遷幸高陽院

十二月十八日供養法勝寺天皇行幸講堂阿彌

陀堂五大堂法華堂同供養

廿八日自高陽院遷御內裏

今年上自后宮大臣下至庶人皆煩赤斑瘡親王

公卿已下逝去者多權右中辨師賢一人免此難

敦賢敦文兩親王依庖瘡瘡

二年正月二日石山寺燒亡觀音尊顏不損貴賤成

百練抄卷五

十一

隨喜

廿七日興福寺塔供養

四月廿日於禁裏有哥合十五番三去三月廿八日依一品宮御出

引家延

五月五日大雨洪水人屋多流損

八月廿七日行幸高陽院廿八日競馬

十月三日始行法勝寺大乘會五卷日行幸

十六日以檢非違使擲召威儀師恩紹泰膳信季

依咒咀事也前遠江守資成下女依咒咀事於使

廳勘問之間奉念熊野權現繩切杖折不加勘問

為奇異

廿五日諸卿定申大宋國貢物事錦唐黃等也此

事已為朝家大事唐朝與日本和親久絕不貢朝

物近日頻有此事人以成狐疑

三年二月二日一条以南中御門以北大路以東洞

院以西通計三十六町燒亡此中土御門右大臣師房

弟燒亡累代文書為灰燼

廿一日伊勢太神宮內宮之外院去十八日燒亡

之由申大神宮言上仍俄有仗議廢朝有無可進

諸道勘文之由被定申之

延曆十年八月內宮神殿燒亡廢朝者無不見之

百練抄卷五

十二

廿五日諸卿定申諸道勘申廢朝事廢朝五ヶ日

天子不視事也

五月廿七日洪水大神宮外院屋宇流漂誤

六月二日山僧千餘人或捧經卷或帶甲冑群奉

感神院依祇園別當懷定讓補事也仍以武士令

防之於社轉經之後無故歸山喚叫之声滿天

七月九日中宮誕第二皇子堀河院

八月二日興福寺食堂顛倒

十七日右兵衛尉源重宗依義濃國合戰事解却

可追討其身之由被仰前下野守義家

十月五日法成寺塔供養可有行幸之由日來有議而治曆元年金堂供養行幸也件年大將軍在東不吉例之由道言申之仍停止畢且又金堂之外諸堂供養之時先例無行幸

十二月廿四日太皇太后宮皇子四條宮燒亡累代御物多燒失

四年二月六日皇居高陽院燒亡天皇入御內裏

十日關白高倉第師實炎上

十四日陽明門院御所三條坊門室町燒亡凡去年十二月以後主上院宮令逢火事給十三所布代事也

百練抄卷五

十三

四月廿三日行幸關白堀河第廿八日還御西洞院內裏先有舞樂皇太子參上有勸賞家主被獻贈物

五月十一日遷幸堀河第以寢殿為南殿

廿七日諸卿定申大宋國進物送文有疑并大貳加和市直遣宋朝事等

六月洪水

閏八月五日諸卿定申高麗國王申醫師事以權左中弁匡房朝臣可令書宰府返牒云々

十三日諸卿定申大宋皇帝付孫忠獻錦綺事不

七月三井寺  
衆徒猶進可  
被先戒壇之  
訴狀

可遣答信物者

十月廿三日關院燒亡

永保三年兼曆五年  
月十日改元

元年三月六日興福寺大衆發向多武峯燒神人家

依少事有爭諍故也多武峰僧奉負大織冠御影

出山上云々

六月九日天台大衆向園城寺燒失寺塔房舍等

拂地為灰燼新羅明神同燒亡去四月日吉祭之

時神供并職掌人等為園城寺僧被抑留之故也

十七日於御前被定三井寺燒亡事

百練抄卷五

十四

八月廿一日皇太弟實仁元服大內

廿八日諸卿定申遠江守基清菊伊勢大神宮神

戶田稻事此外猶有會議  
法家各勘中

九月十四日園城寺僧發向天台合戰

十五日天台僧又向三井寺燒拂所殘之寺塔坊

舍

十月十四日八幡行幸義家朝臣著布衣候鳳輦

近邊其外武士多供奉陣中依大衆事也

十一月十八日春日行幸奉幣之次以日吉社永

被加廿二社議此事

去七月記  
勸寺顛倒有  
御下後造營  
飲可尋

廿日供養宇佐彌勒寺塔

二年十月十七日被勘日時之由見大御記

廿五日諸卿定申大宋國牒狀事

二年正月廿五日中午宮行啓賀茂社具舞人一負

三月十八日殿上賭弓

卅日皇后宮供養北野堂

五月十四日關白於堀河院修八講公家賜慶者

五卷日有捧物又船樂

十日諸卿定申神功皇后山陵樹木燒亡廿一日

被仰廢朝三ヶ日

百練抄卷五

十五

七月十五日左中弁匡房勘問明法博士定成有

真等依遠江守基清罪名勘文紙繆也

廿九日內裏及中院燒亡主上遷幸六条內裏

八月三日遷幸關白堀河院

八日覽大宋高客楊宥所獻之鵲鷁九月十一日送給之

十七日諸卿定申造宮事今年依炎旱可停止云

云

十一月廿一日遣大宋返牒孫思建歸右中弁匡

房朝臣書之

十一月廿二日遠江守源基清停止依新神戶田

入本函以五  
色漆封之出  
金宇之錢錄

勘罪名也

廿四日明法博士有真停止依基清罪名之過失

令勘罪名

廿七日仁和寺北院供養公卿皆參

三年五月二日前下野守師季追位記去年正月射

殺官使被勘罪當流刑

閏六月二日近曾關白家女房欲企哥合而依有

過差聞被停止之

七月三日伊勢太神宮并春日社近邊田畠等永

可奉寄之由宣下關白移徙新造大炊御門第

百練抄卷五

十六

十月一日供養法勝寺塔行幸藥師堂八角堂同

供養

應德三年永保四年二月七日改元依甲子也

元年正月廿四日殿上子日興

二月十一日遷幸三条內裏

四月廿八日高陽院競馬

五月六日供養天台惣持院

九月十六日關白參詣天王寺公卿騎馬扈從

廿二日中宮賢子崩于三条皇居廿八天皇哀傷

尤甚



二年二月廿六日公家供養天台勝樂院

三月四日熊野新宮遷宮日時定也今日神寶御覽也敕使權中納言清盛卿參內給震筆宣命又有御拜被准太神宮例公家御沙汰之時為公家被勘之仙洞御沙汰之時於仙洞被勘之

九日太宰府言上去月廿一日高良宮燒亡之由十日熊野新宮遷宮神寶敕使權中納言清盛藏人治部大輔行隆已下重發云々七月自朔日東西二京諸茶每遷造立宝倉鳥居抄額其銘福德神或長福神或白朱社云々浴中

百練抄卷五

十七

上下群集盃酌無筭可破却之由被仰檢非違使為淫祀有格制之故也

八月廿九日供養法勝寺常行堂

同日奉為前中宮職供養醍醐圓光院件堂佛閣內奉納前中宮御骨

十一月八日皇太弟實仁薨十五後三茶院第二子

十日諸卿定申皇太弟薨去間事

十四日去八月太宰府言上高良社石礎并高座

金花忽生事有御占先令諸道勘申之

三年自去應德元年中宮崩諸節會并相撲節等類

宴會悉傳止于今寂寥

六月十六日供養圓德院資前中宮職菩提

廿六日仰檢非違使前京中作田

十月廿日供養東寺塔件塔去天喜年中為雷火被燒

十一月七日公卿敕使神殿鎖自己刻至申刻不開之

廿六日天皇讓位於善仁親王先為皇太子由戴

宣命

堀河天皇諱善仁廿一年

百練抄卷五

十八

白河院第二皇子女中宮賢子前太政大臣師實

女實方大臣顯房公女也養曆五年七月九日誕生同十一

月三日為親王應德三年十一月廿六日受禪以

關白師實為攝政十二月十九日即位八歲嘉義

二丁亥七月十九日崩年廿九

寬治七年應德四年七月改元依即位也

元年二月五日上皇遷御鳥羽離宮營作甫就之故

也六府供奉於陣有召仰件地本是備前守季綱

朝臣領也去年進上之讚岐守泰仲造進舍屋

四月廿日諸卿定申太宰府言上阿蘇社祝恒富

有養牛無水  
久供五葉

為免敵難奉負御正跡逃脫事

五月十九日太<sup>白河</sup>上皇臨幸平等院廿一日還御有賞

六月二日後三条院第三親王<sup>輔仁</sup>於陽明門院元服

十二月七日諸卿定申越前國唐人事

十六日陸奥守義家言上斬賊徒平武衡之由

二年二月一日諸卿定申宇佐宮神人訴申檢校公則盜取黃金并大貳實政射危正八幡宮神輿事廿二日上皇參詣高野山

百練抄卷五

十九

三月廿日諸卿定申大貳實政卿射危正八幡宮之罪依赦前犯可會赦哉否

五月廿日遣推問使於太宰府實政之犯雖為赦前有議所遣也

八月十七日二條院供養菩提樹院

廿五日諸卿定申實政卿罪名諸道勘申大逆由當不

廿九日供養延曆寺講堂件堂朽損之間座主良真加修補

十月十七日宋人張仲所獻竹豹廻却官符請印

廿六日山階寺東堂六十餘間燒亡

十一月廿九日前大貳實政除名配流伊豆國并緣坐者同流罪依射危正八幡宮神輿也僉議之間攝政直廬有光耀在陣之公卿一兩見鬼物之靈異

十二月廿四日左少弁敦宗解官實政犯真大逆之由諸卿定申之故也又大判事明法博士有實檢非違使義正除名實政罪名依執謬案也

三年正月五日天皇御元服<sup>十一</sup>二月五日山階寺東金堂有火但抄滅了天童御

百練抄卷五

二十

跡願燒損

三月廿六日殿上小弓合

廿九日大皇<sup>實子</sup>太后供養宇治法定院內堂

四月一日若狹守正家朝臣為即從散位惟近被及傷

廿三日法興院并積善寺燒亡<sup>法花院不燒</sup>

五月廿五日上皇於延曆寺被行千僧御讀經去

廿一日御登山七ヶ日令逗留給

卅日上皇六条中院前池虹立可立市之由雖有議公所依無先例被止之上皇渡御他所

六月廿四日諸卿定申阿蘇社祝恒富罪狀

八月十六日諸卿定申石清水社與松尾社相論

事并賀茂社御供事件御供自去應德三年依記

宜供之而於今者社司无力之由言上之故也

廿三日四條宮女房於宇治和哥合

十月四日諸卿定申源隆子薨事右大伴人雖為

當今外祖母前中宮改姓為藤氏仍令諸道勘申

之就所養不可有錫紵但廢朝三日之由被定

了凡為人養子之者本生傍親服不可著之由會

議了

百練抄卷五

二十一

十二日攝政參長谷寺供養四天王像

十九日諸卿定申石清水社司抄開松尾社神殿

諍論事

十二月廿一日太上皇參彥根寺給近日天下貴

賤頭首參詣利生可限歲內云々但為天狗所為

之由世人稱之改年之後無參詣之人去年今年早

四年正月廿二日上皇參詣熊野山參議保實為教

使問旅窓延喜例云々

二月日以紀伊國一个郡田畠百餘町奉寄熊野

山

件黃金聖武  
天皇崇獻納  
壽妙旨云々

三月廿六日自今日始調備賀茂社神膳依記宣

云々有奉幣

四月十九日行幸鳥羽仙居有擬文章生試題殿廷

衣

今日仙蹕留城南主上上皇渡御馬場殿有競馬

騎射馬

廿九日諸卿定申課試詩

五月二日諸卿定申宇佐大宮司公則犯用黃金

件可為御射哉否事

六月廿七日宋人有罪之時被行罪科例事

百練抄卷五

二十二

七月廿三日賀茂上下社被奉不輸田六百餘町

為御供田近日稱有夢想供御膳依神稅不足也

又分置御厨於諸國俗諺曰將亡聽政於神此謂

也

十二月十四日遣表作守行家於宇佐宮為實檢

黃金也

五年正月十二日大風八省西廊顛倒

二月十七日上皇參高野略儀

三月八日清水寺燒亡

十六日師通內大臣於六条水閣行曲水宴

廿六日關白參詣石清水社行競馬

四月十八日停任檢非違使別當俊實是依去三日陵礫檢非違使中原範政也後日付使廳於俊實宅被召下手人

廿一日關白參賀茂行競馬

六月十二日給宜旨於五畿七道停止前陸奥守義家隨兵入京并諸國百姓以田畠公驗好寄義家朝臣事件由緒藤原實清與清原則清相論河內國領所之間義家朝臣與舍弟義綱手權兩方爭威之間欲企攻伐天下之騷動莫大於此

百練抄卷五

二十三

廿一日上皇召公卿議定義家與義綱企合戰事九月六日内裏小鳥合

六年正月十九日博陸供養興福寺北圓堂雖非公家御沙汰有敕使并勸賞

廿三日於御前始有除目儀

二月廿五日諸卿定申去年十二月十三日八幡宮炎上事

六月廿五日高陽院立市依虹蜺立也先令諸道勘申

廿七日諸卿定申本朝高客渡契丹事

江記殿下并北東今入宇治給

廿九日太宰府言上香推廟御殿血散在狀

七月二日上皇御參詣金峯山延喜五年之例也

廿一日供養園城寺講堂

長吏沙汰

八月四日大風太神宮西宝殿豐受宮東西宝殿等顛倒

十七日諸卿定申太神宮宝殿顛倒事

九月廿八日左少弁為房左遷阿波權守依山門訴也

七年六月召返之

七年二月二日祭主親定大宮司公房前宮司國房等自所訴神宮重事六ヶ茶於大膳職對問去年

百練抄卷五

二十四

假殿迂宮延引事國房折豐受宮棟持柱并淹原宮靈木事公房不着實父服事大内人友平稱訖宜陳人々禍福事等也

十九日諸卿定申渡契丹之高客并道言能算等爭論大小月相違十二月神令食不供曉膳内侍已下罪名太神宮祢宜等勘問事

廿日因幡國卧木起立

三月廿四日前大宮司國房依關急假殿迂宮并折豐受宮柱瀧原宮樹令明法博士勘申罪名

四月廿八日於大膳職勘問宇佐前大宮司公則依

江記曰神託  
事先例或用  
之賀茂御供  
是也或不用  
之伊勢友平  
被止神鏡事  
也

犯用黃金也

五月五日都芳門院根合兼日定兩方念人有哥  
合蓋大儀也

八日諸卿定申尾張國大上社卧木起立事并賀  
茂社託宣御馬飼事等

十四日春日山震動

六月五日諸卿定申法家勘申掌侍已下罪名已  
前度々有之

八月六日天台衆徒切座主良真房追却山上

廿六日興福寺大衆率春日神民集會勸學院捧

百練抄卷五

二十五

鋒神木隨身鏡鈴神人所持之鏡於案上放光耀

自然鳴動本宮御笠山上同時有光耀云々是依

訴申近江守為家朝臣陵礫神民事也是日左大臣

臣內大臣師通已下殿上人諸大夫等多關白殿下

被申事之由於院廿七日內大臣已下著仗座

被定近江守高階為家朝臣罪名事依春日神民

訴申事歟廿八日內大臣已下參入被行為家朝

臣罪名事除名配流土佐國又緣坐輩或解却見

任或贖銅大衆等蒙裁許歸去

九月廿日金峯山宝殿燒亡

十月廿八日御笠山上有光耀放其光五个度  
廿九日被立廿二社奉幣使南北衆徒事被載宣  
命

十一月廿一日南京惡僧發向金峯山合戰

嘉保二年寬治八年十二月十五日改元依花養也

元年正月十六日陽明門院崩于鴨院八十二當今曾祖母

三月六日諸卿定申前帥伊房卿遣明範法師於

契丹交易貨物之罪科

八日陸奥守義綱隨身出羽國犯人散位平緒抄

并降人等參洛

百練抄卷五

二十六

九日關白師實辭退以內大臣師通為關白

五月廿五日伊房卿解却降位一等緣坐者多隨

法家勘狀所被行也以前度々有仗議

八月十七日源仲宗并男參河守惟清已下配流

國々依奉咒咀太上天皇也

十九日高陽院哥合哥人清撰經信卿為判者

十月廿四日皇居堀川院燒亡主上迁御大炊殿

卅日諸卿於御前定申可迁御六条殿否并造伊

勢太神宮之間可有造內裏哉否事又節刀間事

有議定件節刀右中將顯實朝臣自灰中撰出太

刀十枚之中有靈劍一也為蘇刀之由被定畢  
十一月十二日正八幡宮燒亡件宮去寬治年中  
有火土木未半分之間也

十五日長谷寺燒亡

二年三月十四日皇太后宮後房供養小野堂

五月十一日左大臣後房上東門第燒亡

六月十八日前太政大臣師實供養土御門京極堂伊

豫守泰仲所造立也依憚洛中不曾瓦不立鐘樓

云々

大記云大方有議雖不被准御齋會人々帶劍

百練抄卷五

二十七

笏雖無行幸任平等院供養例人々帶螺鈿劍

優義事前々如此云々

廿六日上皇并女院初遷御新造開院

八月廿七日冷泉院宮供養京極殿角阿彌陀堂

廿八日於鳥羽有前裁合事

十月廿四日天宮衆徒為訴申義濃守義綱殺害

山僧事相具神輿參陣之間中務丞賴經相禦之

射致神人大衆件事依為赦前犯不被裁許

十一月山僧行五壇法奉兄咀國家之輩注進交

名并日吉神輿可奉迎取本社之由宣下之

大記日吉神  
人等持申文  
參入賴經射  
之今神輿事  
不見

永長元年

嘉保三年十二月十七日改元休天憂也

二月廿二日上皇郁芳門院臨幸前太政大臣京

極第有十種供養事翌日有和哥管絃之興

三月十日熊野本宮燒亡

十八日慈應上人勸進貴賤一日內書寫供養一

切經

六月廿四日前大相國供養法興院堂炎上之後

申請受領功所建立也又被始八講

七月十二日殿上侍臣有田樂事凡近日上下所

々莫不翫田樂禁裏仙洞無他營侍臣儒者至廳

百練抄卷五

二十八

官預此事

八月七日郁芳門院崩廿二太上皇一  
女今上同胞姊

九日上皇御出家依哀傷郁芳門院御事也

九月廿五日興福寺燒亡金堂講堂迴廊三面僧

房為灰炆

十一月廿四日地大震古今無比人皆叫喚主上

御御松

十二月十四日太政官厨家燒亡

廿六日前大相國供養京極堂

義德二年永長二年十一月十七日改元休地震也



元年六月八日三井寺法華院供養元是郁芳門院御願今為一院御願也

八月法皇奉為郁芳門院供養圓光院

九月一日以後彗星見西

十月十一日遷幸高陽院新造清涼殿

十四日以郁芳門院御所改佛閣今日供養

十七日前太政大臣法成寺內新堂供養伴堂宇

治殿永義五年供養而天喜六年三月炎上之後

造立之

十一月廿五日壬辰北政所五十講結願也辰日

百練抄卷五

二十九

被行逆修之奈有沙汰不被憚之

二年二月十一日興福寺上棟博陸已下參向

六月廿五日前大相國大炊御門第燒亡

九月廿日公家供養祇園塔

廿三日太上皇重供養法勝寺塔傾危之後依修

造也

廿六日壞關院殿舍立鳥羽內有遷幸事

康和五年義德三年八月廿八日改元保元地震疾病也

元年正月四日六条院燒亡前郁芳門院師實居今為佛閣

二月十三日前太政大臣參高野山

六月廿八日關白師通薨卅八

八月廿八日官中上下文書觸左大將忠實卿可

奏下之由宣下十月八日為氏長者

十二月十三日京官除目左大臣執筆左大將後房

言著關白座希代例也延喜御宇右大臣先執筆

貞信公大納言候關白座之例也

二年六月七日園城寺大眾燒拂長吏隆明并弟子

房舍

十九日遷幸大內

廿八日市斐守惟信大膳亮仲範可贖銅左近府

百練抄卷五

三十

生秦武惡可禁獄之由宣下是去三月伊勢太神

宮神人於途中遇前大相國師實致無禮之間武忠搦

取神人依神宮訴也

八月十日天台御願仙眼院供養

十六日遷幸高陽院

十月七日中宮御願天台中子掘井供養

三年二月十三日前太政大臣師實薨六十去月十

外祖

三月廿九日法皇供養鳥羽御堂證金

四月廿四日行幸鳥羽翌日以御船渡御上皇御

所覽新御堂

七月七日可追討對馬守源義親之由宣下依模行鎮西寃陵列民

四年三月十八日行幸鳥羽賀法皇五十筭

四月廿七日法勝寺奉賀法皇筭

忠實

五月八日天台衆徒捧神室群參右大臣枇杷第

訴申法勝寺檢校事乱入殿内神人衆徒叫喚蒙

裁許歸山

閏五月十五日行幸鳥羽離宮覽斗番競馬

廿五日內裏覽競馬騎射等蓋康平永曆例也

百練抄卷五

三十一

七月十六日伊勢離宮院官舍放火禍宜宜綱所

為云々

廿一日尊勝寺供養

行幸

八月十八日皇太后歡子崩小野山庄

八十二二茶關白女

後冷泉院

十月廿八日配流前對馬守義親於隱岐國依太

宰府訴也

五年正月七日仁和寺喜多院燒山

傳教大師御具藥師像等燒亡

十六日皇子降誕

鳥羽院是也

于左少弁頭隆五茶宅

母女御茨子大納言實季卿女也

五十日行幸院被行之

大記云東四足晴付程賢本

廿五日女御卒

三月廿六日興福寺大衆參洛訴申祈寺僧繼秀房間延覺狼藉事

四月廿二日大地震廿四日同震五月一日又震

人怖畏太

七月十三日太上天皇於法勝寺供養金泥一切

經希代之大善根也

廿五日興福寺供養

八月十三日神祇權大副輔弘大神宮神主宜綱

及同意之輩配流依離宮放火也令諸卿定申罪

百練抄卷五

三十二

名以前後々有伏藏

鳥羽

十七日立第一親王宗仁為皇太子

一歲去正月降誕

歲立坊清和冷泉二代之例也

九月太神宮神衣祭齋王參向之間有風雨之難

又有託宣事

十月三日公家供養日吉塔

十一月廿五日公家供養高野大塔

長治二年

康和六年二月十日改元依天慶也

元年三月廿四日行幸尊勝寺始行灌頂

七月十三日諸卿定申祭主親定罪名棟持柱打

敘人夫事不言上事并神衣祭闕怠事也

廿日左中弁長忠為敕使參向伊勢齋宮依去年託宣事也

八月一日奉為母后於弘徽殿被行宸筆法華八講五ヶ天曆九年之例也

八日天台大衆伐座主慶朝房其間合戰

十一月廿六日諸卿定申山大衆訴申座主慶朝并負尋僧都濫行事

十二月五日遷幸中宮舊子御所堀川院去八月十一日中宮先移從元是爾白領也被讓遷之

百練抄卷五

三十三

廿七日上皇自土御門第遷御新造大炊御門第件地本是大納言忠宗卿領也伊豫守國明造進之

二年正月一日天台大衆數千人參陣訴三井寺證親探題事蒙裁許歸山

二月十三日仙洞有小弓會

三月五日於中殿始有御遊和哥興後房左大臣獻序

六月二日諸卿定申太宰權帥季仲同意于八幡別當光清射危竈門社神輿致害日吉神人事并

竈門宮可為八幡末社哉否事

六月八日主上自堀川院還御內裏

十四日檢非違使中原範政制止御靈會濫行間神人與隨兵鬪乱神人參內裏訴申

八月廿九日天台大衆神人等參陽明門訴帥卿九月十六日二条院崩章子八十後一條院二女

十月卅日日吉祇園神人延曆寺大衆為先神輿參陽明門訴申季仲卿并檢非違使範政八幡別

當光清等罪科遲々之由又八幡神人等參入待賢門訴申光清不可被行罪科之由十一月一日

季仲範政光清可勘罪名又光清可止整勢之由被仰下仍大衆歸山三日光清不可勘罪名依件

百練抄卷五

三十四

社訴不可止宮寺司之由被仰下且又八幡神民奉昇出神輿於舞殿可入浴之由有其聞之故也

範政傳任十二月二日諸卿定申齋宮察神今食闕怠輩眾

名

十九日尊勝寺阿彌陀堂准脫堂法華堂供養

廿五日右大臣忠實為關白

廿九日前太宰權帥季仲除名配流周防國緣坐

之輩同流罪

嘉承二年長治三年四月九日改元依曆星也

嘉承元年十一月三日竈門宮檢正一位

元年正月四日彗星見于坤方長十許丈卅余日而滅

二月十七日前帥季仲改周防配流常陸謀大逆者可處遠流而依為中流也又息男刑部少輔懷季少納言實明解官大逆者子不可居侍衛官之由人々定申之故也主上御藥之間依有其禁重有沙汰也

廿八日突遣參議宗忠卿於後田邑陵謝申堀損之由去十三日令左衛門權佐實光實檢之覺行親王修遠喜多院之間誤堀損云々任式文可修

百練抄卷五

三十五

固之由宣下

四月十三日賀茂別雷社燒亡御正躰奉移貴布祢社令諸卿定申其間事廢朝有無仰諸道勘申之三々日之由被定云々

九月卅日天台大衆濫責故九条太政大臣信長後家依法眼證仁愁也

十月十二日諸卿定申大衆濫行

十二月廿四日公家供養園城寺金剛頂院

二年三月五日行幸鳥羽離宮數日宴遊八日還御有勸賞

四月一日鴨院炎上東三條東四足同燒五月三日今年朔旦冬至相當日蝕可勘申准捷例之由被仰諸道

廿三日檢非違使等制止京中飛礫自去春此事發起

六月廿一日前太相國京極堂為雷火燒凡雷京中所々多落皇居他

七月十二日散位賴貞配流佐渡國去長治元年押入香推宮射危神輿歟害神人之故也令勘罪名

百練抄卷五

三十六

十九日天皇崩于堀川院廿九即渡劔璽皇太子鳥羽天皇諱宗十六年

堀川院第一皇子母女御茂子權大納言實季卿女也康和五年癸未正月十六日誕生同六月九日親王同八月十七日為皇太子嘉承二年七月

十九日踐祚以關白右大臣忠實為攝政十二月一日即位保安四年正月廿八日遜位保元元

年丙子七月二日崩五十

天仁二年嘉承三年八月三日改元依即位也元年正月廿九日但馬守正盛隨身源義親并即從

四人首參洛廷尉於川原請取義親去年配流隱岐國而留出雲國劫略人民奪取官物仍遣追討使也先之諸卿定申任康平負任之例被行之三月廿三日山大衆為訴灌頂阿闍梨事群下公家遣廷尉武士等不令入京卅日捧神輿下洛蒙裁許歸山

七月七日廢正月四日穩子太后國忌可置同廿五日母儀贈后國忌之由宣下自二年正月始行定九月十二日興福寺大衆燒拂多武峯諸堂僧房

百練抄卷五

三十七

等皆燒失經論聖教為灰燼御影奉取出之十二月廿五日石清水權俗別當賴遠配流佐渡國

二年二月三日夜檢非違使左衛門尉源義忠為郎從被刃傷同五日死去七日遣廷尉等於左大臣第責取致害義忠之嫌疑人源重實十六日仰廷尉源重時令追討義濃守義綱三男義明并前瀧口藤原季方等今夜義綱朝臣替憤起東國即公家遣追討使廿五日為義於近江國甲賀郡尋得義綱義綱於大岡寺出家

廿七日太上天皇供養法性寺曼陀羅堂

廿九日前義濃守義綱勘罪名配流佐渡國背朝憲赴城外之故也令諸卿定申之

六月八日天台大衆群參撰政第訴申清水寺別當定深陵禪祇園神民事

廿九日中宮職供養京極堂

七月一日自大炊御門皇居遷幸內裏是去月廿七日夜御殿天井上鷄入居之故也九月廿一日遷宮

八月十八日太上天皇供養鳥羽御塔十月廿七日法勝寺曼陀羅堂供養

百練抄卷五

三十八

天永三年天仁三年七月十三日改元保元元年正月卅日諸卿定申豐受太神宮心柱顛倒事四月廿一日仰諸道進勘文

或記云三月五日雪下寒氣甚苛改甚之故也五月十一日太上天皇於法勝寺金堂供養金泥一切經是自御在位之時所被始之御願也有御幸十三日彗星見東方長五尺廿三日太宰府言上鏡宮御殿修造之間數百歲不奉勅御躰可奉渡假殿哉否被行御占七月五日供養甘露寺被壞之後加修補云々

卅日諸卿定申僧靜寶并餘黨等罪名即配流奉  
咒咀公家埋壓物于藤社社之故也修理大夫顯  
季卿亭有落書堀出之

十月十日於攝政第議定太一月危可依用節可  
依月建哉否光平泰長相論并太神宮堀出死骸  
穢間事

廿七日諸卿定申豐受太神宮御躰自假殿赴御  
本殿日相當賀茂臨時祭可憚哉否

十一月六日諸卿定申太神宮心柱顛倒并心柱  
可准御正躰哉否事去朔日内宮心柱又顛倒云

百練抄卷五

三九

々

二年三月三日園城寺塔一基燒亡

十一日太上皇供養鳥羽御塔

三年二月十七日公家供養石清水宮御塔

三月十六日天皇行幸小六条賀法皇六十筭

四月廿五日法勝寺御賀

五月十三日皇居高陽院燒亡天皇赴御小六条

或記云御持僧行尊法印取劔入御輿

六月四日攝政過大納言經實門前之間聞乱大

納言侍及傷攝政雜色上皇遣檢非違使責召下

手人後日召進散位源家俊被下左衛門府  
十月九日諸卿定申諸道勘申御忌月御元服並  
音樂事

十三日遷幸大炊殿之由奉幣宣命改大炊御門  
字為洞院炊字從火之上大炊為廢帝諱字之故  
也

十九日自内裏遷幸新造大炊殿是高陽院炎上  
後有議被造之

廿九日鴨川合社中門并東西迴廊燒亡宝殿不  
燒

百練抄卷五

四十

十一月一日賀茂上下社相當延引不省議

廿五日攝政於法勝寺賀法皇六十筭

十二月廿九日太上皇供養鳥羽御堂

永久五年天永四年七月十三日  
改元依共筆并病事也

元年正月一日天皇御元服十一忌月例後漢和帝

也

廿五日公家於轉輪院始行贈后國忌

近日赤斑瘡流布天下

天仁元正廿五大記云母儀贈后国忌也雖論

奏以前任應德例廢勢下御簾止音奏於轉輪



此後三宮輔  
仁開門而永  
久二年御幸  
富家之時依  
御開門御  
覽

院行之

三月廿二日先朝御骨從香隆寺奉移圓融院  
閏三月廿九日天台大衆向清水寺伐損堂舍是  
平日興福寺大衆參浴之時陵礫祇園社人滅亡  
荒町故也

四月廿九日興福寺大衆為遂天台之會誓參浴  
之間所發向之武士等於栗前山合戰山大衆又  
集會祇園為合戰也

九月六日諸卿定申二所太神宮殿舍門垣朽損  
顛倒并依新宮上棟事可被造假殿地事

百練抄卷五

四十一

十一月廿二日諸卿定申阿闍梨仁寬罪名配流  
伊豆國黨類同處流罪是去四日院御所有落書  
仁寬相語勝覺僧都大童子千手丸欲危国家事  
依露顯遣檢非違使盛重所搦取也

十二月廿六日改攝政為關白

二年正月於御前始行除目主上御歲十二  
治安寬治例

二月廿九日於院殿上被定主上外祖母薨逝事  
實奉卿室去任延喜七年天喜元年例錫紵可被  
廿四日薨

行廢朝之由諸卿定申了

寬治隆子之時賢子中宮依改姓無錫紵

八月三日皇居大炊御門燒失天皇遷御長實朝

臣万里小路亭後日遷幸小六条院

九月十六日諸卿定申去朔日豐受太神宮瑞垣  
御門顛倒并千木折事

十一月一日中宮篤子崩于堀川院五十天皇著

錫紵依為繼母也先令諸卿定申上皇同著御錫  
紵

十二月廿九日太土皇供養蓮華藏院有行幸御准

會

三年二月十四日寅尅月蝕正現宿曜與曆道所申

百練抄卷五

四十二

相違上皇又有敕難

五月十四日鷹司洞院東大路地陷觀者如堵

六月一日聖人於北野廟前供養一切經天下貴  
賤結緣

賤結緣

八月廿五日自六条皇居遷御土御門內裏

九月廿一日上皇御幸宇縣富家別業樂山水之  
興遊興絕常篇有勸賞

十一月二日上皇移徙白川阿弥陀堂御所泉

廿六日天皇遷幸新造大炊御門殿後年炎上以

隆造主

四年三月六日關白准御供養春日塔御會

十三日大學助高行配流安藝國於途中又傷參議信通從者之故也

四月廿三日賀茂祭還立太上皇御見物右大臣雅實已下騎馬前駛近年大略為連年事

五月十六日諸卿定申大宋國牒狀并阿蘇社燒山事

六月十八日於關白直廬諸卿議定山大衆訴申僧正事可被加任權僧正之由宗忠基綱等卿定申之廿六日以天台座主仁豪任權僧正

百練抄卷五 四十三

廿日公家供養賀茂上社多宝塔今上懷孕之時御願也但馬守家保造立之

同日四條宮供養宇治池殿堂

八月十七日皇居大炊御門殿燒亡天皇御方大臣土御門第

十月廿八日上皇參詣熊野

五年正月八日法成寺東西塔南大門并中宮京極

御堂提號院證善等燒亡

十三日祇園別宮少將并炎上

五月十二日太上皇供養白川河弥陀堂內新造

塔

廿九日內裏有闔鷄闔草

六月十四日御靈會依院宣公卿已下騎進馬長七月二日關白新造鴨院第初移徙十二日上皇覽此第

九月一日大風拔木發屋

十四日皇后宮御在所今子堀川炎上

十月廿九日公家供養白川御願塔元子塔從二位

十一月六日上皇於熊野山供養御願塔

百練抄卷五 四十四

十日天皇遷幸新造之上御門皇居殿舍大略摸大內但無承明門代件地本是師時朝臣領也讚岐守頭能募重任功造進之云々

元永二年元永久六年四月三日改元依天長并御惱也

元年二月九日大和社燒亡

五月十五日始於春日塔行唯識會

六月八日諸卿定申諸道勘申大宋商客牒可遣返牒并方物哉否

此月旬日以來雨脚頻下近水之人多沒死有涼氣諸人收汗

七月十日上皇御移徙白川北殿越前氣比神  
八月九日京中多餓死者上皇閑御廩賑貧窮  
閏九月廿二日上皇於熊野山供養一切經  
十一月廿九日穀倉院火  
十二月十七日供養寂勝寺有行幸  
二年四月十三日仁和寺燒亡  
五月廿四日中宮皇子誕生皇子崇德  
十月九日上皇於熊野山供養金泥大般若  
十一月一日鴨御祖社寶殿已下燒亡  
二日諸卿定申鴨社卷上事癸卯三ヶ日

百練抄卷五

四十五

廿七日備前守正盛隨身平直澄首參洛  
保安四年元永三年四月十日  
改元依天要御惱也  
元年正月七日法興院燒亡

三月六日高松家燒亡

修理大夫類季女領高  
松大納言仲實旧室  
御所

四月十九日堀川院燒亡

廿九日於上皇御所有大衆定近日天台園城寺  
衆徒依有鬪亂事也三井寺衆斫顛大津東浦比  
敵末社鳥居入寺四至内云々

七月廿一日少將實衡與兵部大輔資信於殿上  
鬪諍實衡以扇打資信資信取御倚子棹追實衡

實衡除籍資信敕勘

八月廿三日興福寺大衆春日神人參洛訴申和  
泉守雅隆陵礫春日神人事轉仕国司  
十一月十三日關白忠實可止内覽之由宣下  
之由  
宣下  
二年正月廿二日内大臣忠通内覽宣下

三月五日以内大臣為關白  
十日能實卿小野宮家燒亡  
廿六日諸卿定申諸道勘申大宋牒事或云可遣  
大宰府返牒或云可送方物

百練抄卷五

四十六

五月廿七日延曆寺衆徒燒拂觀音院一衆寺房  
舍

閏五月三日同衆徒燒拂三井寺々塔僧房

七月卅日橫川妙音院燒亡

九月六日諸卿定申豐受太神宮為洪水流損事

正殿下天平賀流損事

十二月十三日皇后宮令子遷御新造二条堀川

第

三年四月廿三日上皇於法勝寺供養五寸塔三十  
万基有舞樂為希代法會

五月十四日故二品親王白川堂善勝寺前庭有足蛇出來為犬被喰斂上皇仰敦光師遠令勘申子細

六月十四日祇園御靈會神輿過上總次敦俊門前之間神人與彼徒頗鬪諍神人等昇入神輿於彼家中濫行破損舍屋滅亡資財翌日召張本神人禁獄

七月廿二日大學寮廟堂頽壞

八月一日釋奠依廟堂之頽危於南廳座儲其禮大外記師遠勘申和漢准據例

百練抄卷五

四十七

九日天台大衆切座主寬慶房

十月十九日中宮職供養白川御塔尊號勝寺西塔

十二月十五日外記廳侍從所修造以後始有政此日於寂勝寺始行灌頂上皇供養白川御願堂一字安置去四月供養小塔

四年正月十九日上皇白川新御堂供養法勝寺北

廿八日天皇讓位於第一親王顯仁五先為皇太子之由載宣命

二月二日新院鳥羽遷御三茶烏丸御所十三日遷御

白川殿本院相並被坐四分一之屋

四月廿四日愛宕寺炎上

六月七日諸卿定申諸道勘申太宰府所獻之一莖三穗嘉禾可為瑞哉否事十日可納外記局之由宣下

十日新院遷御二茶東洞院新御所法皇御造進

今月以後炎旱殊甚

七月十八日天台衆徒為先神輿欲亂入京中公家遣武士相禦于垣川邊之間奔神輿退散又山僧等籠祇園內仍遣越前守忠盛左衛門尉為義

百練抄卷五

四十八

追却之間互合戰神殿內多損命者後日造改神殿奉移御休

十一月一日前下野守仲正隨身号前對馬守義親者入洛檢非違使等請取之件義親去天仁元年正盛朝臣切首傳京師以件賞任但馬守了其後猶在坂東之由雖有風聞世人不信受今經十六年仲正所擢進也兩院有御見物但非義親之由被定云々

永昌記元永元年二月五日仲正將參關東犯人義親出院陳云々

十日六條院燒亡本郁芳門院御在所今為佛閣  
十二月十五日皇后宮供養堀川第內堂

嘉元二年三月一日以大理卿定房本書寫校合畢

百練抄卷五

四十九止

百練抄卷第六

崇德院十八年

天治二  
長養三

大治五  
保延六

天養一  
永治一

百練抄卷六

一

崇德天皇諱顯仁十八年

璋子

鳥羽院第一皇子母待賢門院大納言公實卿女也元永二年己亥五月廿八日誕生同年六月十九日為親王保安四年正月廿八日受禪五歲同日以關白忠通為攝政二月十九日即位于大極殿永治元年十二月七日遜位長寬二年甲申八月廿六日崩諡岐國四十治養元年七月廿九日謚号云々

天治二年保安五  
元依即位也改

元年二月十日白鳥兩院臨幸白河邊歷覽郊外深雪内

百練抄卷六

二

有仁大臣以下騎馬前駟新院於白河殿騎馬渡御法

勝寺為希代之壯觀

閏二月一日大地震此後至八日有動

雅實忠通

十二日兩院臨幸法勝寺覽春花太政大臣攝政

璋子

以下騎馬前駟内裏中宮女房連車追從男女裝束裁錦繡金銀於白河南殿被講和哥内大臣獻

序

序

五月廿八日中宮於三條第誕皇子太上皇第二  
皇子通仁

六月十五日初有祇園臨時祭

七月十九日膳西上人於雲居寺供養金色八丈



阿彌陀如來像貴賤結緣攝政書額<sub>號證卷</sub>

十月一日覺法法親王供養仁和寺內多宝塔一

基為<sub>鳥</sub>法皇息災也

三日高陽院御厩馬出門

六日中宮供養興福寺內御堂

廿三日上皇御幸高野

二年四月十五日諸卿定申伊勢太神宮祢宜荒木

田忠光可叙三位哉否事<sub>上</sub>

十七日祇陀林寺燒亡

五月廿四日待賢門院誕第三皇子<sub>君仁</sub>

百練抄卷六

三

十二月五日京中炎上公卿及朝士大夫以下家

六十余所為灰燼六角堂始燒亡草創之後歷五

百余歲

廿七日於內裏諸門有鬼氣祭

此年以後敎生禁制殊甚

大治五年<sub>天治三正廿二  
改元依元龜也</sub>

元年二月二日太上法皇遷御三条烏丸新造御所

<sub>播磨寺家  
保造進之</sub>

三月七日太上法皇供養白河三重塔<sub>紀伊寺顯  
長造進之</sub>

六月廿一日紀伊國所進魚網於院御門前燒弃

或記曰此年  
西院有欲參  
大神宮之儀  
云々

此外諸國所進之羅網五千余帖被弃之又除神

領御供之外永停所々網宇治桂鶉皆被弃鷹犬

之類皆以如此此兩三年殊所被禁敎生也

七月一日彗星見北方

八月十日太上法皇渡御新造室町殿<sub>號泉殿頭  
隆卿造進</sub>

之

十月廿一日太上法皇召集洛中籠鳥放奔之

十一月七日阿闍梨承玄并僧妙心還俗配流依

省奉咒咀女院<sub>侍殿</sub>之聞也去四日被追捕之

九日兩院女院參熊野給<sub>上皇女院初度  
欽此後不注</sub>

百練抄卷六

四

十二月八日祭主公長取進伊勢國內神戶庄園

鷹大上皇觀覽切放之

十六日兩院女院幸白川殿覽雪橫政以下騎馬

扈從新院同御騎馬人々裝束盡善盡美

十九日鞍馬寺燒亡

廿七日兩院女院渡御新造春日殿<sub>伊豫寺基  
隆造進之</sub>

今年五穀豐稔野老擊壤世以為殺生禁斷之報

二年正月十二日太上法皇供養白河五重塔<sub>但馬  
守敦</sub>

<sub>兼朝臣  
造進之</sub>

二月十四日園韓神社神祇官以下八神殿并內

或記曰古傳  
云錦標祖式

天皇遷都被  
作遷其左未  
逢火災至今  
年一百三十  
七年  
陰陽寮天曆  
七年癸上

外院門垣勘解由使廳陰陽寮漏刻鐘樓大炊寮  
南門郁芳門宮内省主水司醬院等燒亡陰陽寮  
渾天圖漏刻等具取出之園韓神御正躰同奉取  
出之但後日兼俊宿祢曰八神殿園韓神自元無  
御正躰但園韓神有神室劔梓云々

三月九日東寺寶藏炎上

十二日太上法皇供養白河御堂并百躰愛染王

件堂伊豆守  
盛雅重任功

十九日太上法皇供養白河三重塔伊豫守基  
隆進之

廿日諸卿於撰政直廬定申神祇官燒亡事可有

百練抄卷六

五

廢朝哉否并月次神今食於何所可行哉

五月四日西院女院臨幸鳥羽殿有田殖興

廿六日神崎庄獻鯨珠一顆於院仍令勘和漢之

例

六月十一日月次神今食於中院行之

八月十日釋奠依致生禁斷不供葷腥之類

十四日太皇太后寬子崩于宇治別業九十二宇  
治殿御女

後冷泉  
院后

九月十一日待賢門院誕第四皇子雅仁

十月二日諸卿定申官外記勘申八幡宮奎御筥

或記曰龜御  
堂大鉢高二  
寸許口經一  
尺五分許

破損可被修補哉否以件璽宮為御正体云々  
卅日西院參詣高野

十一月四日太上天皇於高野供養御塔越中守  
公能造

六日自今日修鴨河堤鴨御祖社可有水害之故

也

三年二月十四日祇陀林堂燒亡

三月十三日待賢門院供養圓勝寺天皇行幸  
于御齋會

廿二日太上法皇幸攝津國有馬溫泉

五月十一日西院幸八条大宮水閣有田殖事

百練抄卷六

六

七月廿日太上天皇供養鴨御祖社東御塔御在  
時播磨守家  
保造進之

十九日陽明門恠鳥敦光進勘文

八月二日暴雨大風陽明門顛倒

十五日放生會之次實檢璽御筥損不已為大破

上卿以注文奏聞十月四日於仙院殿上諸卿定

申八幡奎御筥破損事新造筥可被納本筥之由

議定畢九日奉幣宮寺明年放生會之時以新筥

可被入之由被申之

十月廿二日太上法皇於石清水供養一切經御准

惠通七月一日改換政為

會齋

廿八日天台惣持院炎上

十一月十日待賢門院供養圖德院內多宝塔天台

座主仁實

四年正月一日天皇於土御門皇居十一條有

內有此事

三月十六日寂勝寺五大堂炎上

十九日證菩提院供養伴寺故中宮篤子御願也

於近衛京極炎上之後前大相國志實造立東北院東

邊今天台座主仁實奉院宜新壞渡尊勝寺南邊

百練抄卷六

七

也

五月五日午尅法皇被鑄御護劔五午日午尅支

干相生之故也

六月二日於仙院曆道算道相論月大小有議定

七月三日鳥羽殿池一莖二花蓮生

六日祈年穀奉幣之次石清水重御筥新造奉送

之放生會之次可被納本御筥云々

七日太上法皇崩于三条室町第七十

閏七月十日通仁親王薨上皇第二子六歲

廿日待賢門院於家保朝臣三条宅誕第五皇子覺性

仁木

九月七日奉幣石清水被申西宝殿御前壘御宮

破損事

近日自稱義親者從坂東參洛亡命之者度々如

此

十月十四日東山清閑寺炎上

廿一日前太政大臣富家別業拂地燒亡

十一月十二日遣檢非違使於南都追捕已講惠

曉以下惡僧之間佐保殿燒亡云々

十二月十六日太上皇供養尊勝寺內御堂甲斐守範

百練抄卷六

八

經造

廿八日太上皇供養白河御塔備前守忠盛又供

養祇園御塔

五年正月廿九日鴨院燒亡

三月四日天皇自三条京極第家保朝臣遷御土御

門內裏越中守頭長造

六月廿四日上皇奉為白河院供養白河阿彌陀

堂內塔伊豫守家信

七月二日白河院國忌上皇白河阿彌陀堂內建

立九体式六阿彌陀堂供養伊豫守家信朝臣造

十日上皇御所大炊御門万里小路燒亡

八月六日八幡西宝殿坐宮二合被調獻之有奉幣放生會之次可奉入御躰云々

十月四日天台惣持院供養

廿五日待賢門院供養法金剛院播磨守基隆造進之上皇臨幸

十一月八日前齋院慎子土御門第燒亡大相入道

第十二日号義親者於鴨院內為刺客被殺害

或記云件義親去年九月從坂東上洛而依院

御氣色程候大殿仍寄宿鴨院內云々致害事

百練抄卷六

九

檢非違使光信所為云々仍光信配流

十二月廿六日寂勝寺五大堂供養件堂去年三

伊守公重造進之

同日上皇自白河殿遷御三条西殿件御所法皇

御晏駕西對壞渡鳥羽殿為堂宇奉安置追善御

佛等其跡新造御所云々

天養一年大治六正廿九改元依去年炎旱天災也

二月廿二日晝御座御劔紛失白河院新鑄造所

被獻也

三月廿日權大納言宗忠卿於白河山庄行尚齒

會

五月二日於院殿上參議雅兼與修理大夫基隆座次相論事議定

十三日散三位上臈與參議三位下臈署所已下

可勘申先例之由被宣下以散三位可為上臈之

由明法博士勘申之猶以參議下臈可為上臈之由人々定申也

六月十七日奉為白河院於法勝寺供養金泥一

切經依阿波守邦忠夢也

七月三日於法勝寺始行御八講以白河院御国

百練抄卷六

十

忌日為結願

八日鳥羽殿泉殿內九体阿弥陀堂供養件堂白

河院昇霞三条御所西對也御平生所被造立之

九体阿弥陀佛奉安置之

九日白河院御骨自香隆寺奉渡鳥羽殿三重塔

是御平生歡慮也

十月十日待賢門院賀茂下社御塔供養

十一日刑部少輔宗重宗忠男於勘解由小路河原

被致害

廿八日祇園別宮少將井炎上

十一月十七日前太政大臣依呂被參院去保安  
元年十一月魚水之契忽變之後今日始有君臣  
合睦之議

長承三年改元依疾疫也

元年二月廿八日法成寺塔供養

三月十三日得長壽院供養上皇臨幸備前寺忠盛造進之

六月廿三日太宰府言上正八幡宮高四尺弘三

尺厚二尺石二自然出來各有八幡二字銘事

七月廿三日上皇御所三ヶ所焼亡三条烏丸御所及小路室町

御所

百練抄卷六

十一

八月廿五日彗星見北方

九月廿四日上皇幸平等院

十月七日室莊嚴院供養有行幸件御願播磨寺家成造進之

十四日上皇御參高野

今年疾疫突起

二年五月廿八日諸卿定申太宰府言上宗形杜炎

上事

七月九日於關白第待賢門穢事有評定是去比

死人在彼門不知其由齋院半物出入參本院事

八月八日鞍馬寺供養上皇御沙汰也

近日秋雨難晴稼穡多損

十六日日月失明

十二月天皇自土御門皇居遷幸二条殿二条東南洞院

三年二月十七日上皇於法勝寺供養金泥一切經

齋會

六条院焼亡

三月近日京中條里決水夷路別當頭賴卿之新

制也

四月廿五日外記廳結政南所修造之後有晴政

此日待賢門院供養一字金輪白河御堂出雲守為隆募重任功造進之

百練抄卷六

十二

五月近日霖雨洪水京中路頭往反不通七道五

畿有此愁

六月十六日前齋院御名恂子被改統子恂子兩

字似子字之故也

十八日興福寺金堂中尊眉間玉落了

八月廿七日上皇供養園城寺金堂

九月十二日大風殊甚拔樹顛屋諸司官舍京中

人屋一宇不全今年風水火三災並起

十二月廿八日上皇始渡御白河北殿東新御所

造進之

今年以後天下飢饉

保延六年長義四廿七改元依疫疾飢饉也

元年正月廿日待賢門院三茶京極御所炎上

卅日仁和寺二品法親王實本供養堂中殿為上皇息

災也

三月十七日上皇於法勝寺以米千石賑飢饉貧

賤之者

廿五日法金剛院北斗堂供養

廿七日兩院始渡御法金剛院東新造御所周防守憲

進方造

百鍊抄卷六

十三

四月八日諸卿於閑白直廬定申国々海賊事以

備前守忠盛朝臣新定追討使

此間上皇以播磨国別進米三千石賑東西京

貧窮依天下飢饉也世以為無遮之大會

五月十五日上皇供養仁和寺是依被加修理也

六月八日聖子中宮廳前立市依虹見也

七月一日天下飢饉疫疾事仰諸道令進勘文

八月十九日備前守忠盛朝臣搦進海賊卅余人

十月十一日上皇臨幸前大相國宇治別業松号小殿

造新

二年正月七日節會公卿饗無飯

三月四日上皇於熊野本宮供養五重塔越中守頭長造

進

廿三日上皇供養鳥羽勝光明院行幸

此日太神宮麻績機殿燒亡

九月七日上皇於八幡宮供養金泥五部大衆經

翌日有競馬十番

賀茂日吉同有御願

十月十五日待賢門院法金剛院內三重塔并金

泥一坊經供養有行幸御幸

百鍊抄卷六

十四

十二月慈恩寺燒亡此寺者是滋野貞主遣唐使

之間模漢朝慈恩寺建立之

三年二月十日南京大衆七千余人入京著御勸學

院奉隨身春日御躰

今日雖可有仁王會定依大衆事延引

十六日南京大衆販去是以權僧正玄覺被補正

僧正畢先是僧正定海辞申之此間仙院并禁中

被儲武士云々

七月十五日大地震近代無比類十六日度々又

震



九月廿三日天皇行幸法金剛院有十番競馬皇女院同

臨幸

廿五日車駕猶留有絲竹和歌興實行卿獻小序

十月十五日上皇供養鳥羽東殿御堂安樂寺院

十一月十五日諸卿於關白直廬定申伊勢神人

等訴事神人參陣訴申前主殿助平季盛罪科事

仍季盛配流佐渡國

四年二月廿三日鴨社神館并神宮寺社頭西塔燒

亡件塔待賢門院御願也又申冠女院御所西四條

院炎上

百練抄卷六

十五

廿四日內裏燒亡二條東件所故博陸內相府第

也薨去之後度々火事傳為白河院御領故長實

卿造進之為上皇御所天皇元御東三條次行幸

白河北殿依東三條方忌也公卿侍臣直衣帶弓

箭內侍所暫御他所此事如何有議定

大外記隆俊神鏡事准佛像申云々關白被咎仰

但小野右府准乎五臺山文珠議定由事

今日深草卧木自起事顯賴卿奏上皇云々問內

大臣大臣答以漢昭帝元鳳三年上林御樹起立

之例宜帝可立之象也

三月五日京中大燒亡公卿已下家不知其數

十九日雨穀其形如胡麻

廿一日神泉內蝦蟇鬪諍

四月十九日天皇自小六條還御土御門殿伊賀守光

房募遷任之

廿七日天皇行幸法金剛院有十番競馬

廿九日天台大衆為先神與參陣訴申賀茂社領

下司日吉社五月五日馬上事蒙裁許歸山

五月廿五日祭主公長卿依殺害人罪過沙汰之

間停釐勢

百練抄卷六

十六

六月二日園城寺大衆燒拂本寺別當禪仁房舍

仍禪仁遣軍兵搦召張本之間互合戰

廿四日勝光明院池有一莖二花嘉蓮

七月廿日彗星見戌亥方

十月廿九日殿上一種物十物

十一月廿四日皇居土御門殿室町燒亡天皇御

小六條累代御笏象牙繪燒失天皇乘車出

十日待賢門院三條局宰相家被殺害

五年正月十五日陰霧不知人面

二月廿二日上皇供養鳥羽東殿三重御塔右兵衛督

家成卿造進之  
為御萬歲也

自今日始置法華三昧

三月九日興福寺大衆燒拂別當隆覺房

廿二日待賢門院供養仁和寺御堂法金剛院東左衛門權佐

親隆造進之

五月十八日從三位得子誕上皇皇子衛仁進也

六月廿五日清水寺橋供養也

八月十七日立躰仁親王為皇太子太子皇弟六子母從三位

得子美福門院也

十月廿六日成勝寺供養行幸

百練抄卷六

十七

十一月十日仁和寺大教寺御堂炎上故一品聰子內親王建立也

十六日諸卿於關白直廬定申興福寺別當隆覺軍兵與大衆合戰事此後度々有伏議

廿五日待賢門院供養法金剛院御堂為萬歲御願云々

十二月二日檢非違使等向南京請取大衆所擲

留之隆覺軍兵五十人

廿七日今宮雅仁於待賢門院元服十三

六年正月九日左兵衛尉平家弘抽任左衛門尉昌縣

除目以前也

廿三日石清水八幡宮宝殿并廻廊宝藏若宮悉以燒亡貞觀以來無此例至御筥奉取出自餘宝物皆為灰燼

二月廿一日諸卿定申諸道勘申八幡宮火災間事并式部卿敦實親王奉造立御躰可被改造哉否事

三月十三日自朝及夕大陽不現非雲非霧四方似烟有如雨下者其形似露又如胡麻

廿八日日吉二宮十禪師宝殿炎上

百練抄卷六

十八

四月十八日於別當宗能門前檢非違使等破裂關白隨身左近府生武正衣裳御襖日忘制法著義服之故也

五月五日以火取玉寫陽燧供八幡宮常燈件玉上皇令獻給炎上以後令繼常燈也

閏五月十六日法成寺西塔并行願寺塔等同時為雷火被燒

廿五日天台大衆燒拂園城寺永保元六年此保安二國五有此事

六月廿日諸卿定申大宰帥頭賴卿訴申去月五日九國所々大衆神人燒拂宰府已下屋舍數十

家事此中大山香推  
上宮崎為張本

七月十八日諸卿於院定申延曆園城關亂并去

月廿日禁中濫行事港口致  
害事也

十月二日前大相國於平等院出家六十  
三

十五日佐藤右兵衛尉憲清出家年廿三  
西行法師

廿九日上皇供養春日社五重御塔齊會  
御

十一月四日天皇自小六条遷御新造土御門內

裏

十四日被直法勝寺九重塔心柱基土氣二尺許  
朽損之故也

百練抄卷六

十九

廿六日權大納言雅定蒙任大將宣旨件事主上  
有御抑留仍上皇幸近衛烏丸陣口令申請給仍  
被仰下

十二月十二日上皇供養鳥羽殿內炎魔天堂

永治一年保延七七十改元  
依辛酉革命也

正月八日行願寺炎上觀音像奉取出畢

二月廿一日上皇女御得子白河新堂供養上皇  
臨幸

歡喜  
光院

三月十日太上天皇御出家卅九法  
名空覺

五月五日高陽院御出家四十七入道前太政大  
臣女太上天皇為后

七日杵築大社神殿俄顛倒

廿一日法成寺新堂無故崩

七月十日諸卿定申諸道勘申今年辛酉當革命

否事今日即改元

八月四日女御得子无品內親王時子家申請上  
女御家九

皇御處分庄々可免國郡課役事宜下女御家九  
所內親

王家十  
二ヶ所

廿日陰雨不霽洪水無比類永治有二三水  
之微云々

廿五日天下諸神可增一階之由宜下

九月廿五日京中不知名之物交風飛其形如胡

百練抄卷六

二十止

麻

十二月七日天皇讓位於皇太弟于時土以關白  
御門殿

為攝政

嘉元二年二月廿六日書寫校合畢

去保延三年  
獻尊号隨身  
今年二月重  
被獻隨身

百練抄卷第七

近衛院十四年

康治二 天養一 久安六

後白河院三年

仁平三 久壽二

二條院七年

平治一 永曆一 應保二

六條院三年

長寬二 仁安三

百練抄卷七

一

近衛天皇諱體十四年

鳥羽院第六皇子母義福門院稱子權中納言長實女

也永治元年十二月七日受禪以關白忠通為攝

政同廿七日即位三歲

康治二年改元依即位也

元年正月十九日散位源盛行并妻津守嶋子配流

土佐國奉待賢門院仰依奉咒咀因母皇后宮勘

罪名所處流罪也件夫婦祖候彼院者也

二月廿六日待賢門院於仁和寺御堂御出家

三月三日宇治平等院一切經會太上法皇鳥羽有御

或記云廣田  
杜有至名朱  
雀盛行奉待  
賢門院仰令  
妻招寄是祿  
正盛寺  
法皇遣延尉  
於西宮室殿  
分得銀管云

百練抄卷七

二

結緣

十七日園城寺惡僧等偷登天台燒東塔南谷弥

勒堂仍山僧又向三井寺燒拂大津在家小倉微

妙寺合戰之間亡命者多

五月五日法皇并入道大相國於東大寺受戒

十二日於延曆寺重受戒

六月十六日未著座公卿准諸節會參官外記廳

可勤列見定考政之由宣下

廿二日列見未著座公卿八人參著云々

廿九日入道大相國供養宇治新堂法皇高陽院恭子

臨幸

七月三日白河北殿東御堂供養件堂先年民部卿顯賴造進之為御修法所先年供養而今造立迎接木像重所被改供養也

二年正月一日可有日蝕之由曆道奏之實不可有

蝕由竿道申之仍行節會遂不蝕

十四日左少將成雅朝臣解官是去十二日於法皇御所與山城前司賴輔鬪亂成雅拔劔切破賴輔面之故也

三月十六日賀茂神宮寺供養先年炎上之後所

百練抄卷七

三

造立也

此日民部卿顯賴供養九條堂祖父為房卿御堂內也

五月五日洪水禁裏并攝政近衛第如江海

六月廿一日太宰府觀音寺堂塔燒亡此寺天智天皇以後光明皇后以往五代聖主相續草創御願也中尊阿弥陀百濟國之所獻在火中尊容自若

八月六日皇后宮供養金剛勝院准御齋會白河堂齋會

今日民部卿顯賴卿任位次候公卿座俊賢卿之例也前納言候本座人冬緒行平文範俊賢等也

十月十三日因幡堂炎上

十二月八日六角堂炎上

天養一年康治三二廿三改元依甲子革令也

二月十七日甲子定

五月九日法皇仙居白川北殿燒亡

六月十七日園城寺真如院供養

七月一日法勝寺池一莖二花蓮

十月十七日仁和寺孔雀明王堂供養

十二月十一日小野宮燒亡大炊御門室可故師賴卿家

久安六年天養二七廿二改元依彗星變也

百練抄卷七

四

元年正月十日一院高陽院幸宇治

二月十一日列見有園基依舊規也

廿五日家成卿為供養舍利登山親昵人為前駟

其中中將雅通少將公親為前駟

三月廿三日六条右大臣舊第炎上六条北

四月五日彗星出東方此後數日見至六月不消

廿五日依彗星變召德政意見於公卿八人內大

臣辭而不進

六月十一日月次神今食供神物依宣旨後先規

廿八日白河新御願供養伊豫守忠隆造進之兩院有御幸

七月十日權大納言實行卿依宣旨於里亭議定諸社祭幣物相違式文事大博士信俊大外記師安明法博士有隣直講師元左大史師經竿博士行安接其座

八月廿二日待賢門院崩于二茶高倉第卅五奉遷法金剛院北三昧堂

二年三月八日雷落前齋院家忽燒亡故下野守明

国子震死

十九日皇后宮始行啓新造高松第

是月天台延命院一衆房燒亡園城寺惡僧所為

百練抄卷七

五

云々

四月十四日清水寺燒亡依寺僧等合戰也

五月十二日河尾明神社為洪水流失廿九日御幸

十月廿日於法金剛院一切經會兩院御幸

十一月廿八日一院御願大佛頂堂供養白河泉殿南家

成卿進之

十二月一日彗星見坤方高道

十六日太政官於法性寺賀攝政五十算

二年正月十二日彗星見東方

三月廿七日入道前太政大臣於高陽院七十

賀

四月七日天台僧綱以越前白山可為延曆寺末寺之由訴申無裁許五月四日覺宗入滅之後以白山可為延曆寺末寺之由被仰下夏仁平二九覺宗入滅

六月十七日兩院御登山數日歷覽所々廿四日還御

廿八日天台大衆日吉祇園神人等昇神輿下浴訴申中務大輔清盛朝臣於祇園社鬪亂夏法皇遣廷尉御之但蒙裁許飯山

百練抄卷七

六

七月廿四日於院諸卿議法家勘申清盛朝臣罪名罪當贖銅

八月十一日鳥羽新御堂供養

四年正月廿八日左右衛門左右兵衛尉各廿人左右馬允廿五人內舍人六十人永可為負數之由被仰外記

二月十七日炎上及數十町其中法成寺惣社法興院燒失

三月廿九日祇園社燒亡御正錄已令諸卿定申

其間夏依無參議中納言公出之數讀中官外記例



四條殿當太  
白方又火日  
也然而內裏  
燒亡臨幸他  
所更無日次  
沙汰之由有  
院仰

六月廿六日土御門皇居炎上主上遷御四條殿

閏六月五日宇治大相國覽毛龜於法皇先仰師元令勸

山吉

十五日諸卿於殿上定申諸道勘申當地梁年可

有造管哉否并正堂正寢指何物哉夏正堂大極

殿正寢小安殿之由師安勘申而內大臣正堂大

極殿也正寢小安殿之茶無所見之由被申

七月十七日攝政室供養法性寺內新堂行幸

五年三月廿日延勝寺供養行幸

五月十二日高野大塔金堂灌頂堂等為雷火燒

百練抄卷七

七

亡

七月廿三日參議清隆私所建立之東山堂九重

塔准公家御願供養上卿已下參向

八月十八日祈年穀奉幣之次今年正月御元服

依加冠人故障延引夏被申太神宮去年十二月

十四日攝政母儀薨從一位師子

十月六日諸卿定申諸道勘申天子十二冠礼夏

卅日遣右少史惟宗時重實檢聖武天皇陵是去

七月興福寺上座預實堀類陵土運取大殿之故

也

十二月十二日法皇供養天王寺念佛堂昨日臨幸

廿二日軒廊御卜之間陰陽頭憲榮與少外記三

善成重闢諍成重解官

六年正月四日天皇於東三茶皇居元服十二年

依攝政故障延引

十日左大臣實權中納言女入內言公能女

十九日廣隆寺燒亡

二月十七日諸卿定申去年十一月所取置伊勢

太神宮遷宮料心柱顛倒夏廿日重議定可被改

之由議奏了

百練抄卷七

八

三月十一日東大寺合戰上座仁覺與衆徒

四月十五日賀茂祭內大臣棧敷與家成卿棧敷

闘乱

五月十日義福門院於法勝寺金泥一日經供養

法會已始之間兩脚滂沱仍延引

七月近日京土訛言近江義濃兩國山內有奇獸

夜陰群入村間食損兒童俗号之猫狗云々此事

見小野右府記俗言不違也

八月四日大風大學寮廟堂前舍一字顛倒今日

親奠也又大內仁壽殿顛倒

五日興福寺衆徒蜂起數千人春日神民二百餘人捧梓神木入洛件神木甘饒數枚稱春日吹法大明神御正體是先例也螺其声充滿洛中就勸學院于時新院御三糸東洞院第衆徒等渡其御前或乘車而有不下之者頗可謂不義欽左衛門尉源賴方等率隨兵守護一院檢非違使光保守護內裏檢非違使家弘祖候新院各率隨兵奉致警衛興福寺別當未補及多年寺僧等不堪鬱憤所群參也云々

六日於攝政家諸卿參集南京大報訴申興福寺之別當間吏被議定

百練抄卷七

九

九日昨日大衆下向南京今日有任大臣召仰夏十日大衆皆以下向南京但昨日春日大明神奉安置勸學院飯去付置社司等於金峯山御正體者今日令下向給

十五日可被還山階別當哉否被問人々

十六日法印隆寛還補山階寺別當

廿一日今日春日大明神出御勸學院可還御木社依洪水令逗留平等院北門御今日中相構可入御南都欽之由禪定殿下被仰神主時盛正禰祐慶云々

依攝政不參  
非常教詔主  
無之  
五日攝政於  
星奉行也

廿四日奉攝政於法性寺新造堂被行惣社祭新尊崇之

九月廿六日入道大相國取藤氏長者印并朱器大盤渡左大臣此間喧嘩多端

十月二日義福門院於法勝寺供養金泥一切經行

今日太政大臣實行正二位列左大臣上位從一

十一月十三日諸卿定申諸國風水難夏

十二月一日重仁親王於小六糸院元服新院弟一皇子

百練抄卷七

十

仁平三年久安七正廿六改元依去年風水也

元年正月十日左大臣內覽宣旨與攝政相並

五月廿七日任僧綱左大臣與施行之

六月六日皇居洞院糸東燒亡

十三日高陽院供養福勝院

七月四日一院供養河東御所內中嶋御塔

八日洪水近年少類

十二日行願寺已下堂塔多炎上

十四日左衛門督家成卿雜色九人禁獄去十二日依擲取左大臣下部也

八月廿四日付使廳使於伊通卿教長等謹責信濃阿波難掌陵礫齋院下部之下乎人

九月八日左大臣過家成卿門前之間左大臣難人乱入彼卿家致濫行為報先日會誓也

廿四日左大臣送沙金於宋客刘文冲去年進送書籍之故也以万壽三年六月廿四日倒云々

万壽例見資房記彼時宋周良史望我朝爵父宋人母我朝女云々

十月七日定信朝臣於春日社供養自筆一切經十八日皇居小六条院燒亡一年兩度有皇居人

百練抄卷七

十一

十一月二日八条殿炎上新院御幸三条鳥九第件家故長實卿家也義福門院降誕之地也凡此一兩月炎上大略連日也

二年二月九日右大臣中院第燒亡

三月七日太上法皇五十賀昨日行幸鳥羽

六月廿八日諸卿定申明汝已講於仁和寺陵礫使廳下部罪名

八月十六日法勝寺所司賀法皇五十賀有御幸十八日左大臣於東三条行李御讀經益尋舊例也

入唐人先例不及諸卿定云々

廿六日檢非違使為義恐懼為別當公能依致無例也

廿八日入道太政大臣於福勝院賀法皇五十賀九月十日一院高陽院義福門院參詣天王寺左大臣已下扈從

十一月一日為御方違行幸泉殿仍上官不著白重此更可為先例

三年正月七日節會太政大臣兼牛車參陣自腋參上

二月十四日法皇於熊野山供養金泥一切經有

百練抄卷七

十二

賞

三月三日入道太政大臣家女房播磨供養一堂知足院邊

四月十五日燒亡其中因幡堂祇園大政所法家千草文倉為灰燼數万卷書一時滅云々

五月廿一日左大臣於東三条試學問料光範登題禮以行義

六月六日左大臣侍等乱入賀茂社中門內搦取南京僧玄忠之間中門觸穢血氣

七月廿五日奉幣賀茂社依左大臣狼藉可被改

造中門東西迴廊之由被申之

八月二日證金剛院池一葦二花蓮

十日叙真被行賄儀有三省政寬仁以後絕雖無此儀左大臣所申行也

九月近日所令立社壇家々行漢禮停止之由宜下

廿日大雨大風齋宮野宮并西川蘇屋顛倒仍今日群行延引新造土御門內裏南殿顛倒又賀茂社內大樹顛折損御料屋渡殿中門迴廊等

久壽二年仁平四十八改元依先道也

此內裏未達

中宮去年十月普帶而至仍於小路作兼香殿女御顯光女產水也

百練抄卷七

十三

元年二月十九日勸學院修造之後初有詩宴

三月近日京中兒童射的不可勝計

廿九日祇園橋供養

四月近日京中兒女備風流調鼓笛參紫野社世

号之夜須禮有勅禁止

十八日廣隆寺藥師像奉渡新造本堂無供養件

堂武藏守信賴奉院宣造營之

八月九日鳥羽金剛心院供養准會天皇依不豫

不豫

九月九日改直去八月八日詔書被加除神社之

輩也但依日吉訴也

十月三日天台西塔法花常行等堂炎上

廿一日高陽院供養福勝院內三重塔准會

二年二月一日左大臣於途中為左衛門尉信兼被射危咎無禮之間及闢也

廿七日鳥羽安樂壽院中不動堂供養御幸

三月十八日河原院炎上

四月三日源為朝居豐後國騷擾宰府威脅管内

仍可禁遏與力輩之由賜宣旨於太宰府

廿日賀茂祭左中將隆長朝臣衆風流車往及大

或記云建春准御會事不可然歟

百練抄卷七

十四

路

六月近日饑飢同去保延

七月廿三日天皇崩于近衛皇居春秋十七年未御不豫也空

王位一日

八月十五日中宮呈子御出家九条院廿五

廿九日近日風聞云去十六日前帶刀長源義賢

與兄子源義平於武藏国合戰

十二月十六日高陽院崩于土御門第五十一福勝院護

摩

後白河天皇仁雅三年

鳥羽院第四皇子母待賢門院大治二年丁未九月

月十一日誕生同十一月十四日為親王久壽二

年七月廿四日踐祚九年廿關白如元此日止左大

臣內覽九月廿三日立第一親王守仁為皇太子

十三二條院是也先有立十月廿六日即位或記

親王十二月九日元服云外廿九日御機十一月廿三日

大嘗會保元三年八月十一日遜位建久三年壬

子三月十三日崩

保元三年久壽三四廿三改元依即位也

元年正月一日禪定仙院御鳥羽殿金剛心院無拜

百練抄卷七

十五

禮人々不參依充帝御也

三月五日上皇第五內親王高松院妹子母養入太子宮

五月廿二日內大臣德大寺堂勇士乱入放火為

灰燼

六月十二日義福門院御出家

七月二日禪定仙院崩于鳥羽安樂壽院五十四

塔擬山陵也崇德

十一日新院左大臣等有謀反之聞主上渡御東

三条官軍清盛義朝等襲白河仙居前奇院與新

院軍兵合戰院方軍兵為義已下無程敗績院駕

御馬逃去左大臣賴長騎馬脫出之間中流矢白

河仙居燒拂之

十四日左大臣病疵薨華大和国般若野五三昧

後日遣淹口令實檢死骸之實否

廿四日新院自仁和寺寬遍法印房奉配讚岐國

去十二日御出家

廿九日源為義已下被行斬罪嗟哉天皇以降所

不行之刑也信西之謀也

八月三日兼長師長教長等卿已下配流

十月一日皇嘉門院御出家

百練抄卷七

十六

十八日諸卿定中歟且曆論支件支曆道造進曆

而竿博士行康難申仍被下勘諸道也

廿日更置記錄所

廿六日以十月卅日戊辰為十一月朔以冬至置

二日兼又除十二月卅日丁卯以廿九日丙寅可

為晦日宣下事

十一月諸社祭并臨時奉幣料以見物可進瀆之

由被仰諸國

制止京中共伏

二年二月六日公家於禁裏供養尊勝陀羅尼希代例也

此三四年連  
々御禮事度  
於鳥羽有此  
事

四月廿八日於內裏被行直講試被問全經疑十  
ヶ条師尚師直重憲等也師直及弟任之  
五月十四日於內裏供養七寶御塔即又行御懺  
法希代例也殊有歡念所被行也

六月十四日祇園御靈會今年始有馬長如日吉  
九月廿日鳥羽金剛心院內新御堂供養故上皇鳥羽  
奉為母儀女御殿建立一堂可被安置丈六阿弥  
陀佛像之由有御遺言仍教福門院有御沙汰也  
十月八日遷幸新造大內元御高松殿  
十一月十三日西冠被置漏刻器年來斷絕夏也

百練抄卷七

十七

十二月廿三日諸卿定申諸道勘申金神方忌可  
被弃哉否夏件方角永長源河定俊真人依申出三四  
代所忌来也仁安二四廿三為御方違行幸鳥羽  
殿修理大膳職之間為避金神方云々  
廿二日自今以後不可忌避之由宣下

三年正月十日行幸法勝寺修正

廿二日被行內宴後一條長元七年以後歷百廿三年今  
被興行一昨日依雨延引關白并太政大臣已下  
為文人題

二月十三日於弘徽殿壺有鬪鷄夏月卿雲客為

左右念人有勝負舞  
三月近日藏人五位等連署訴申有文狩衣停止  
由仍被許之

四月廿日賀茂祭博陸於町棧敷見物宰相中將  
信賴欲通彼前之間雜人鬪亂打破中將車物見  
廿一日依昨日鬪亂執柄家司少納言信範解官  
和泉守邦綱除籍今賜左馬寮隨身七人賜廷尉  
博陸閉門

廿九日於鳥羽離宮公卿殿上人競馬各著打懸  
十番中納言伊寶頭中宮亮頭長為一番去廿六

百練抄卷七

十八

日有行夏也

五月廿九日覽內教坊舞姬近代斷絕興行之  
六月廿九日相撲節保安以來不被行經卅余年  
所興行也七八月共為御忌月仍今月行之  
八月十一日讓位於皇太子太子參上拜舞退出  
昭陽舍

十七日上皇遜位之後始出御高松第

十月十七日上皇臨幸宇治有勸賞

十二月十日皇后幼子行啓日吉社有一貞

二條天皇諱七年



後白川院第一皇子母贈皇太后宮藤原懿子大納言經實女也康治二年癸亥六月十七日誕生久壽二年九月廿三日為皇太子保元三年八月十一日受禪十六以右大臣基實為關白前太政大臣讓十二月廿日即位永萬元年六月廿五日遜位同七月廿八日崩年廿凡御在位之間天下政勢一向執行不奏上皇被仰合關白許也

平治元年保元四年改元依即位也

正月十二日於清涼殿東庭覽妓女

廿一日內宴妓女奏舞曲如陽臺之窈窕我朝勝

百練抄卷七

十九

更在此更信西八道奉勅令練習其曲

三月廿二日白河千鉢阿弥陀堂供養大炊御門

北讀岐院御所保元戰場為灰燼之跡佛者鳥羽

院令造立給為彼御追福也

五月廿九日太上天皇於高松殿始行五十講六月十八日結願

貴賤咸群

今日有山陵廢置定閏五月十三日山陵廢置論

奏

七月十九日堀河院御八講始置国忌

八月二日陣定寬門宮燒亡並高麗國商人

播磨國伊和社燒亡更

十五日被卷改室釵組

十六日寅刻上皇仙居高松殿炎上

或記云件御所去月十九日如修理有御移徙

九虎日御渡人願申之果有此災本件御所為

羽院仰長門守師行造立之

九月二日橘逸勢祭上皇有御結構餉以金銀錦

繡天下之壯觀也捧持面形為風流人以頌之

十六日延曆園城僧徒群參上皇御所施雜藝

十一月廿六日六条院因幡堂河原院崇親院祇

百練抄卷七

二十

園旅所燒亡五節舞娘一人觸燒亡機仍不昇

十二月九日夜右衛門督信賴卿前下野守義朝

等謀反放火上皇三茶烏丸御所奉移上皇上西

門號子院於一本御書所

十七日少納言入道信西首廷尉於川原請取渡

大路懸西獄門前樹件信西於志加良木山自害

前出雲守光保所尋出也

廿五日夜主上中宮號子偷出御清盛朝臣六波羅亭

上皇渡御仁和寺

廿六日遣官軍於大內追討信賴卿已下輩官等

今散信賴兵衆勝襲來合戰于六条河原信賴取朝等敗北信賴至于仁和寺遣前常陸守經盛召取信賴斬首其外被誅者多

廿九日行幸義福門院八条亭清盛朝臣已下著

甲冑供奉御輿前後

永曆元年平治二正十改  
元依大亂也

正月九日前左馬頭義朝并即從正清等首延尉

請取懸東獄門前樹

二月廿日院仰清盛朝臣擲召權大納言經宗別

當惟方卿於禁裏中

百鍊抄卷七

二十一

廿六日召諸卿於院令定申皇居并日吉社先於八幡加茂可有御幸又四月御熊野詣可有憚哉夏上

三月十一日前大納言經宗入道惟方卿等配流廿五日上皇始參詣日吉社御遜位之後始神社御幸也平治逆亂之時別有御願之故也

四月廿九日内侍所神鏡奉納新造幸櫓去年十月廿六日信賴卿亂逆之間師仲卿破御幸櫓

奉取御鉢於挂辺經一宿其後奉渡清盛朝臣六波羅亭造假御幸櫓奉納自師仲卿姉小路東洞

院家所還御溫明殿也左中將忠親朝臣依長久例候之自今夜三之夜御神樂倉廿八日對馬鳴司言上高麗國金海府禁銅林連房并貢銀採下夏令諸道勘申

五月十五日鎮西賊主通良從類七人首傳京師上皇於御棧敷御見物

近日天台東西兩塔合戰

六月十四日前出雲守光保已下配流遠國依謀反之聞也

廿二日洪水日吉社二宮十禪師室殿自山上大

百鍊抄卷七

二十二

水出來奉埋之小神等皆流失去比件社未俄枯損云々

八月十九日中宮妹子依病出家廿

十月十二日延曆寺大衆捧日吉神輿參洛訴申太宰府竈門宮并大山安樂寺燒亡治部權少輔管原貞衡合戰夏上

十六日奉移熊野御鉢於新造社壇今熊野是也上皇御願也

同日奉移日吉御鉢於東山新宮同上皇御願也十七日管原資成配流貞衡解官

依此奉山僧  
勸勤山僧可  
勸住之公家  
御修法被時  
願被仰諸家  
不詣山僧云

舞月茶以前  
人以傾中之  
高覽正觀者  
御如持堂供  
養之茶以前  
顯類中止之

廿三日上皇始御幸熊野山  
十一月廿三日義福門院崩御四十御骨奉渡高  
野也鳥羽東殿故院令立御塔給為奉納女院御  
骨也然而依御遺言如此云々  
十二月十七日諸卿定中高麗國擲留對馬嶋高  
人更

應保二年永曆二九四改  
元依施瘡也

元年四月七日園城寺別院平等院供養前大僧正  
行慶建立寄進上皇御祈願所仍今朝有御幸此  
更去月可被遂之處天台大衆疑申可被起戒壇

百練抄卷七

二十三

置探題蜂起仍御幸停止今被仰閑子細所被遂  
也

九月十五日右少弁時忠已下解官是彼妹小弁  
建春

殿上西門誕上皇皇子之旨世上教々之說云々  
院女房

廿八日右馬頭伊隆左中將成親已下上皇迎習  
之輩解官

十月十九日內大臣已下於殿上定申受領所望  
宋能

輩更今日即有除  
書被任也

十一月廿三日五節童女御覽也雖當前義福門  
院周忌御正日訪有職卿相猶被行之

十二月十六日以無品內親王時子為八条院  
伊通公申狀

帝玉養母之儀元始自延喜更也所謂溫子九  
也貴為皇太后寬平法皇令申無先例仍不  
可然之由然而不可依例令存母儀給之由被  
仰之女院始自東三条院々々貴於后歟將賤  
歟之由可被問法家小一条院元東宮也而院  
号之後可為三宮下之由被宣下太上天皇者  
別也只院号更不可貴於后位更也  
宗能公

百練抄卷七

二十四

御覽自天曆御宇被始更也召在五節所之童  
御覽仰云無由事々云々此事後代例トナ  
リナント候ケリ然者是臨時之興遊也被止  
何更哉

二年正月一日日蝕曆道竿道相論兼召諸道勘文  
被問公卿大略不可改正朔之由被申之然而依  
正現二日行節會

或記云予問春補之日蝕前七日必有變之何  
更哉答云七星之中有滅光之星此更秘更也  
普通無知此更人故對而所申云々

正月朔蝕 延曆九 昌泰四 延喜八 同

十一 同十八 同十九 同廿 天慶三

長曆四 永義四 康平二 治曆四 永保

三 康治二 仁平三

正月二日蝕 康平 天慶

閏二月一日權僧正覺忠園城寺補天台座主延

曆寺衆徒蜂起仍覺忠進解狀以重愉補之

七日延曆寺衆徒不被召返覺忠宜旨者可燒失

園城寺之由訴之被問人々

三月七日九日等流人經宗卿已下被召返之

百練抄卷七

二十五

廿八日遷幸新造里内押小路南木御坐關白第

土御門南東洞院東号高倉殿

五月八日能登守重家朝臣除籍解官是去比自

院可擲召雅賴邦綱等朝臣之由有詭言依出於

彼人口也

近日多武峯有訛宣延曆興福園城可有大乱云々

六月八日前太政大臣忠通於法性寺出家六十

十八日知足院入道忠實殿八十五入道給

廿三日資賢卿通家朝臣時忠範忠之配流不勤

罪名人頗之是奉咒咀主上於賀茂社之由露頭

之故也

七月廿四日諸卿定申日吉造營之間前司範季

割領公田於社司永可為私領之由訪申支

八月廿四日稻荷祇園行幸也祇園華屋顛倒仍

於殿上有議遂臨幸為謝其恐被行御神樂當社御神

樂今度始之

十月十九日為御方違行幸勘解由小路殿而於

路上藏人敦經申本所有穢物之由仍欲還御之

處頭并雅賴參上非穢物之由申之仍遂行幸

十一月廿七日以安樂寺可為延曆寺末寺之由

百練抄卷七

二十六

天台衆徒訴申欲下洛召諸卿於殿上有群議不

可有裁許之由定申之

長寬二年應保三三廿九改元

元年三月廿九日諸卿定申小朝熊神殿内往代御

鏡二面神室等紛失支此後有改元定

延曆寺訴申園城寺僧可補天台座主者如旧可

受天台戒之由宣下

五月廿二日園城寺僧於延曆寺受戒更園城寺

不進諸文去四月無得度之者仍山門重訴申狀

之來十一月受戒背宣旨狀不登壇者彼寺僧永

七日春日高  
分下廿四  
子男二人  
同日梅小路  
山元女同  
四人

不可從公請之由宣下

廿九日興福寺進奏狀可被止園城寺僧延曆寺受戒更并以延曆寺可為末寺更也覺忠僧正補座主之時延曆寺訴申受戒更之間以東大寺稱小衆以南都稱權宗忿怒其更云々

五月九日不被行最勝講依山僧峰起也

六月九日延曆寺大衆發向園城寺燒拂本堂已下更起覺忠僧正座主更去三日園城寺衆徒追捕大津東浦斬神人首之故也

三井寺燒亡 義保 保安 保延 應保 但改

百練抄卷七

二十七

最寬之後也

已上四個度

廿三日內大臣已下於殿上定申園城寺燒失間更參議隆季卿書定文以紙屋紙書之殿上定書定文希更款

七月廿二日延曆寺衆徒訴申園城寺僧不受天台戒之由訴申時書南都權宗小衆戒之由興福寺訴申仍被下宣旨

十日延曆寺僧徒日吉社神民等京中振入出舉物譴責之輩可擲進之由宣下

廿五日興福寺衆徒放逐別當僧正惠信燒拂住房

九月廿七日被調進八幡御劔袋本袋依鼠食也

古袋有議被埋御殿北方明經博士師元紀傳範兼卿永範朝臣等進勘文云々

十月十日興福寺維摩會依無別當無堅義

廿三日行幸石清水社廿七日行幸賀茂去三月有行幸依每年可幸也而以別御願又有臨幸年中兩度行幸無先例

十一月廿八日奉渡近衛院御骨於鳥羽東殿差

福門院御塔本安置知足院本堂

十二月十三日左馬寮典藥寮中院等燒亡

百練抄卷七

二十八

廿六日延勝寺阿弥陀堂供養以近衛殿寢殿被五延間數安置九体丈六佛

此日皇嘉門院聖子御出家年來令聖給今日被剃頭二年正月廿八日記伊国日前国懸社燒亡於御正

躰者奉出更

二月十九日法性寺入道忠通入滅六十

三月五日諸卿定申諸道勘申日前国懸社火更

廿二日被仰廢朝

四月廿六日上皇御登山廿六日於中堂千僧御讀經

新長保元配  
准資賢有奉  
兄咀圖家聞  
間配流通家  
資賢子也

五月十五日寅月蝕曆道宿曜道相論  
宿曜道云十六日望  
月蝕十七日曉云々

六月廿七日流人師長資賢等卿通家朝臣菅原

資成等被召返

七月廿日八条院供養佛閣有臨

廿二日皇子誕生母儀故馬

八月廿六日讚岐院崩于配所四十太上皇無服

假之儀

九月九日諸卿定申太神宮祢宜俊定申三品夏

廿二日興福寺衆徒於東大寺為公家御祈行万

百練抄卷七

二十九

僧會被准御齋會遣上卿已下

十二月十一日神今食行幸神祇官依中院火夏

也依有先

十七日太上皇供養蓮花王院准御齋會

永萬元年長寬三六

二月十一日故入道關白周忌供養法性寺堂性法

寺大畧西中宮行啓

四月十二日近衛河原辺有異兒胸已上二人跡

也頭二手四也胸已下一人也令諸道勘申和漢

之例

第一宮去年  
夏誕生母故  
馬助元成女

廿七日諸卿定申祭主師親朝臣罪名依去年穢  
中行月次祭也

五月四日諸卿定申天王寺與住吉社相論安倍

野坂夏

祭主師親朝臣解官

六日諸卿定申祭主官司所望輩

六月七日祇園神輿路避皇居用新路主上不豫

八日蓮花王院西砌醴泉涌出兼仕有夢想貴賤

汲之

十三日廣隆寺供養燒亡之後近衛院御宇

百練抄卷七

三十

廿七日於關白第定立太子夏今上第二皇子去

臣實能公女實大藏年誕生母故左大

大輔藤原義盛女繼母中宮育子養為子

廿五日讓位於弟二親王順仁二歲先雖可有立

坊依主上御不豫危急俄有此儀二歲例今度始

之七月廿八日新院崩二條華香隆寺北

八月一日大風會昌門顛倒

九日延曆寺僧下洛燒拂清水寺是二条院御葬

礼夜諸寺念佛僧群參之時興福寺僧打破延曆

寺額板之故云々仁和寺應保騷動之時可離東



大寺末寺之由被仰下了

九月十四日流人時忠召返

廿八日南京大衆依有癸向之聞公家差遣武士於栗小山

十月廿六日興福寺金堂僧追次第可叙僧綱又別當尋範可為御持僧之由宣下此而更衆徒為雪清水寺燒亡之會誓欲癸向仍為散彼鬱也  
廿七日南京衆徒為先神興春日御神木同若宮神布留神渡木津川宿文六堂迎令訴申可被配與等云々流山座主俊圓權律師俊朝之由依難有裁許重有申訴之旨

百練抄卷七

三十一

廿八日武士等飯京衆徒蒙裁許飯南都故也

十二月廿五日上皇若宮憲仁被下親王宣旨五歲

高倉院母故時信女

六條天皇仁三年

二条院第二皇子母中宮育子左大臣實能女也

長寛二年甲申十一月十四日誕生永万元年六月廿五日受禪以關白基實為攝政七月廿六日即位二歲

仁安三年永万二八廿七改元依即位也

元年二月廿六日供養行願寺伴寺去平治元年信

賴卿謀反之時依季實近隣燒亡而漸々造營也

二月廿九日流人師仲惟方歸著

七月近日仁和寺迎女夢云依天下政不法賀茂

大明神弄日本國可令渡他所給云々去月并今

月上旬兩度有此夢仍賀茂社司等參内并攝政

第申之

五日々來天下愁旱魃祈佛神無其驗而禎喜於

神泉修孔雀經御讀經今日雲雷頻起大雨忽下

仍禎喜召院御前叙法印補東寺一長者起一長者任覺

廿五日應天門廊俄顛倒

百練抄卷七

三十二

廿六日攝政基實薨廿四

奉為二条院於香隆寺供養一堂右大臣經末已下參

行

廿七日以左大臣藤原基房朝臣為攝政藤原氏

長者

八月十二日故攝政薨奏贈官贈位

九月廿九日太宰大貳賴盛卿罷申十月二日赴任

十月十日以憲仁親王為皇太子六歲於東三条

第有此夏先上皇奉相具親王御幸供奉人折花

十二月廿二日春宮著袴

主是比師元  
有夢觀東三  
祭還書之所  
也云々

廿四日東宮御在所東三条第燒亡諸君連御所  
細柳土御門

二年正月十九日上皇御移徙法住寺南殿件御所  
元壞渡故信賴卿中御門屋被立之而依狹少周  
防守季盛所造進也

廿日皇太子拜觀上皇行啓法住寺殿先例多朝  
觀行幸同日也而上皇於當今為祖於儲君為父  
殊當東宮之儀也

今日東宮母儀三位滋子蒙女御宣旨

廿八日主上朝觀上皇有行幸

百練抄卷七

三十三

二月三日天台座主快修於院壇所逐電是遂補  
座主之後山門不和東西塔合戰而院御沙汰紀  
科未定之間企此十五日以明  
雲補座主  
十一日太政大臣清盛賜隨身兵仗件公不經大  
將之人也

三月二日興福寺前別當惠信集山黨入寺中欲  
殺別當尋範而房人相禦之間亡命者多禪定院  
大衆院松室等燒亡

十八日諸卿定申太神宮祢宜俊定申三品更

廿一日小野宮炎上

右京大夫  
師光居野

廿三日上皇於法勝寺千僧御讀經上皇臨幸拱  
政已下扈從有惣礼

五月十三日諸卿定申法家勘申前僧正惠信罪  
名

十五日前僧正惠信已下配流

卅日橘逸勢社燒亡

六月十四日春宮殿上人騎進馬長兼被問人々

二茶院青閨御時始有此更云々

十六日上皇供養法勝寺御所內不動堂

十七日去十日紋繼父教母之女切足

百練抄卷七

三十四

廿三日延曆寺所司三綱日吉社司等群參上皇  
御所訴申前座主快修燒拂山上寺之更

七月九日大內軒廊顛倒

閏七月四日祈年穀奉幣宣命被戴宣命更

九月廿七日子尅皇居五条東洞院燒亡主上遷御高

倉第卅日可幸大內當太白玉相方內侍所劔至

己下累代御物皆悉取出之內卯雖在煙中不燒

積燒失了後新造  
納之

十月廿五日太上天皇御幸日吉社准行幸儀有

舞人廿六日競馬廿七日相撲廿八日還御

十一月十四日延勝寺西大門燒亡不及他所  
十六日豐明節會雲客陵礫侍中等  
十八日從三位平盛子故撰政北政所被下准三  
后勅書

十二月十日撰政移徙閑院第二条南西洞院西一町

三年二月十三日人家三千餘宇燒亡千手堂悲田

院京極等為灰燼

十六日依入道太政大臣病被行非常敕清盛

十九日讓位於皇太子東宮行

三日遷幸大内移徙儀

百練抄卷七

三十五

三月廿日女御從三位滋子廿七為皇太后宮元

太后宮去十四日九

廿五日成勝寺鐘樓燒亡

四月十八日賀茂祭也

皇后宮使藏人左衛門權佐兼大進經房

飭馬院同左將曹兼兼國之兼五位給將曹

引馬院同左將曹兼兼國之兼五位給將曹

近衛使左少將兼義濃守脩範朝臣

飭馬院同左將曹兼兼國之兼五位給將曹

引馬院同左將曹兼兼國之兼五位給將曹

正月廿六日  
被仰養

六月三日上皇御登山七ヶ日御參籠

廿九日今上外祖母有贈官位平時宜贈正一位左大臣无位

藤原祐子贈正一位

十月廿二日中宮育子出家

十一月十三日中宮御在所土御門院燒亡

廿一日内大臣忠實被解右大將又師長卿被解大納

言左大將依不參五節帳臺試也

十二月廿一日伊勢太神宮内宮燒亡正殿東西

殿門及内外院殿舍悉為灰燼御鉢奉取出之

廿七日於院殿上被定神宮火災問夏小朝拜有

百練抄卷七

三十六

無并朝觀行幸延否夏

廿九日諸卿定申諸道勘申太神宮火災夏廢務

可為五ヶ日之由定申之

嘉元二年二月卅日以大理定秀卿之本書寫校

合畢

百練抄卷第八

高倉院十二年

嘉應二  
安元二

養安四  
治養四

百練抄卷八

一

高倉天皇諱憲十二年

後白河院第三皇子母建春門院滋子贈左大臣平時

信女也應保元年辛巳九月六日誕生永萬元年

十二月廿五日為親王仁安元年十月十日為皇

太子同三年二月十九日受禪八歲攝政基房如

旧同三月廿日即位治養四年二月廿一日遜位

養和元年辛丑正月十四日崩年廿一

嘉應二年仁安四改  
元依代始也

元年己丑正月十三日自大內遷幸閑院

廿六日戌時天陰風吹大雷電今日依神宮火事  
被發遣公卿敕使

百練抄卷八

二

也日

二月五日橫河中堂燒亡本尊奉出之草創之  
後未建火災云々

七日有伏議諸道勘申太神宮以今年造營可為

正遷宮哉然者外宮造替年限相隨內宮可縮行

哉事也

九日大風折木多子發屋

十三日太皇太后宮行啓日吉杜具舞人六府如

行幸儀

三月十三日太上天皇後白河參詣高野聖廟太政大臣

以下騎馬供奉月卿雲客莫不裁錦繡忌雅

十六日月色大赤

廿三日上皇自入道大相國福原亭還御高野御

歸路入御彼所有千僧供養事為御結緣也

廿六日太皇太后行啓平野社一如日吉社

近日清水寺瀧水枯失去正月自瀧上蛇百許出

來古求之處山崩瀧渴歟云々今亦如此為奇

四月十一日因幡堂供養件堂先年炎上之後壞

渡故志隆卿東山堂造立也

十六日三條河原有異兒無上唇有鼻手足之指

各有六云々

百練抄卷八

三

十八日東大寺大法師能惠於八幡宮供養大般

若件能惠獲生勸進之

廿八日始朝觀于太上天皇天仁

五月十九日遷幸大內

廿八日太上天皇於法勝寺行千僧御讀經

六月十七日太上天皇御出家御年四御戒師前

大僧正覺忠御法名行真自今日被始御逆修

今日太神宮遷宮也炎上以後

廿三日依上皇御逆修初七日被行非常赦并被

召返流人十五人但興福寺前別當惠信長谷寺

前別當宗覺等不被召返依本寺訪也

今日遷幸關院

近日有炎旱愁

七月十七日雷震人

八月八日上皇御逆修結願其次被申上年來御

作善目錄其薰修不遑楚竹

十月二日皇后宮大夫實定卿自西郊飯浴之間

於大炊御門大宮為賊徒被射危希有存命

十三日權律師行禪自害是依所領爭論事被付

使廳使不堪其鬱之故也云々

百練抄卷八

四

十一月十二日幸大內

戌時雷落法勝寺九重塔第三層欲燒損打消之

廿六日內裏女房向宇縣依執柄之芳招也有和

哥會種々遊興

十二月廿三日延曆寺衆徒奉具日吉神輿參大

內是權中納言成親卿知行尾張國目代右衛門

尉政友與神民不慮闕亂事出來為訴申也於院

召公卿議定政友可候獄所之由雖被仰衆徒猶

不義引叫喚

廿四日權中納言成親卿解官配流備中國政友

賜獄所衆徒成悅奉迎神輿飯山

廿五日天台座主明雲被止御持僧是依同意大衆參禁裏也

廿八日權中納言右衛門督時忠別當藏人頭權

右中弁信範等解官配流時忠出雲信範備後是成親卿依

衆徒訢配流之間彼兩人有奏事不實之由有御

咎緣坐輩解官又流人藤原成親卿可召還之由

宣下冊日遷任本官

二年正月四日日吉社有光物其色如虹出大宮正面指南上畢

百練抄卷八

五

十三日延曆寺衆徒猶可發向之由有其聞可警固西坂下不拘制止者任法可射禦之由被仰檢非違使廿二日上皇召公卿議衆徒訢事

廿三日遷幸閑院

廿七日山門僧綱以下群衆院成親卿解官如元可遣配所又時忠信範可召返之由訢申之

二月六日流人時忠信範可召返又權中納言成親卿可解却見任之由宣下各依山門申請也

四月廿日太上法皇於東大寺受戒入道太政大臣同泰入受之又有千僧供養事昨日御幸南都

之間讓政於宇縣有御儲被進御馬念珠等

閏四月三日越前國平泉寺別當光明配流阿波

國依敦害住僧等之罪也

五月十七日二條院御骨自香隆寺本堂渡三昧

堂伴堂以二条皇居崩御殿左大臣渡造之

十九日遷幸大内六月十九日還幸

卅日雨下近日天下愁炎旱權僧正禎喜於神泉

行孔雀經御讀經雨澤忽下依法驗被宣下牛車

并園城寺令置阿闍梨三口七月三日越前守資盛於路頭遇棋政及耻辱櫻

百練抄卷八

六

政賜下手輩於檢非違使

廿一日於院中勢權大輔經家與周防守信章鬪諍及擊擢後日信章解官經家除籍

八月八日大風鳥羽北樓門顛倒

九月廿日上皇御幸福原為覽宋人也

廿七日遷幸大内是閑院被返攝政依可被行大饗也仍本家進御贈物家賞追可申請之由宣下

近日京中櫻梅桃李華

十月十七日新任官吏雜事大弁以下雜色事可停止之由宣下



廿一日依御元服定攝政奏內之間於路頭勇士有狼藉事切前駢等本鳥是先日資盛之會稽也依此事定延引

廿七日西方有赤氣

十一月廿六日今熊野社內法華堂九躰阿彌陀堂炎上元是經敎堂也

皇嘉門院供養九条堂

十二月八日時忠信範等復本位

廿七日四箇条伏議去年神宮炎上之時不奏會神官可有罪科哉否事去年行逆修之時有赦

百練抄卷八

七

令為赦前如何事豐受宮別宮高宮御供奉祢宜等違失事諸道勘申赤氣事明年正朔蝕不正現者可被行節會否事曆道申可有蝕之由宿曜算道兩道申不可現之由事也

兼安四年

嘉應三四廿一改元依災變厄會等也

元年正月三日主上御元服十一歲大內

十九日攝政太政大臣於開院事行大饗

廿二日賭弓

同日南方有赤光其勢如車輪

廿八日遷幸開院攝政營之被返奉之

正月一日不  
現仍節會如  
例

賀茂祭以前

後一条院御  
蓋衣上東門  
院薰物燒發  
如此之物等  
皆燒失云云

四月廿二日檢非違使能盛相具強盜張本佐渡先生光成泰院御所觀覽之後向大理許七月十七日東北院拂地燒亡佛經等取出被渡西北院件院元在法成寺中康平元年二月廿三日燒亡其後移立今地上東門院建立給同年七月廿一日供養之建立以後百十二年廿二日於大膳職太神宮宮司有長祢宜彦章宗房權祢宜等對問外宮瑞垣御門傾事奏狀前後相違事左少弁經房左大史隆職著行之廿三日同問注高宮御裝束違例事

百練抄卷八

八

廿六日入道大相國進羊五頭麝一頭於院廿八日神宮司等問注殿舍屏柱被縮事也卅日東北院木作始八月十五日八幡宮放生會神輿鳳落九月廿一日興福寺衆徒可泰浴之由有其聞仍長者遣家司兼光制止之是前下野守信遠知行坂田庄之間斂害白人神人訴申此事也十月三日故顯長卿八条堀河亭炎上八日上西門院供養法金剛院內小堂太上法皇建春門院御幸宇覓法親王為導師

今日東北院上棟

龔角傍池畔建立一間四面精舍安置丈六阿彌陀像

廿三日太上法皇建春門院御幸入道太政大臣

福原別墅有船遊事遊女賜祿十一月一日御入

浴

近日稱羊病貴賤上下煩病患羊三頭在仙洞人

傳兼曆之比有此事件羊返却之

十一月十二日諸卿定申造宮司有長以舊材木

并堂橋木令造假殿事也

十二月一日弓場始之間立明火燒甘字津保柱

賴政朝臣撲滅之後日依此賞叙正四位下即從

百練抄卷八

九

源守任馬允

二日入道太政大臣<sup>是禮</sup>女為上皇御猶子泰入<sup>今日被定</sup>

入內

十七日八條大宮炎上六條院御堂燒失

二年二月三日建春門院法住寺御願上棟寂勝光

院是也兩院臨幸件地元是故顯長卿母堂之地

也件堂壞渡他所

五日自大內遷幸關院

三月四日攝政泰詣長谷寺蓋寬治之例也公卿

殿上人刷行粧扈從

十五日太上法皇於入道大相國福原亭供養千僧持經者三箇日被行之

十九日於室莊嚴院有和哥尚齒會散位教賴以下為七叟清輔朝臣結構也

廿二日廣隆寺內塔供養

廿九日清水寺供養上皇差遣主典代行之

四月十日諸卿定申法家勘申去嘉應元年伊勢

太神宮炎上之時不參番直祢宜等罪名已為赦

前者可被省霜刑之由定申之

廿七日建春門院相具舞人御幸平野社一負供

百練抄卷八

十

奉

五月三日伊勢齋宮惇子內親王薨于本寮<sup>十日寮頭</sup>

忠重依御惱危急件日先退下寮頭館子尅薨

十二日京中諸人修諷誦於六角堂因幡堂為免

疫疾云々

廿一日近日霖雨洪水河邊人家多流損中宮權

大夫時忠卿已下逢此殃人謂三合之徵

六月五日發遣公卿勅使於伊勢太神宮依齋宮<sup>惇子</sup>

薨也內大臣<sup>兼右將</sup>源朝臣奉仕之無上官御前<sup>雅通</sup>先

例多有之召具一負

十四日祇園御靈會上皇有御見物殊被刷之神  
輿三基師子七頭去四日自院被調建之

十六日或記云今日申刻兩日出現之由有閤卷  
說但司天之輩不見之由申之

十七日自大內還御閑院

七月八日伊賀守源仲綱言上去々年七月比隱  
岐爲鬼狀童出來之由

廿一日上皇并建春門院移徙三条室町御所權  
中納言成親卿不日造營之其勤過差仍今夜叙  
從二位越資賢兼雅等卿

百練抄卷八

十一

廿三日行幸三条殿翌日有雜遊北面下鴈施雜  
藝夕還御

八月十三日天台僧侶數萬人發向祇陀林切別  
當能順房依之路中不閑

廿日天皇俄還幸三条殿去十七日南殿納群集  
無程散失被行御卜之處御慎重云々仍所令立  
避給也十一月廿七日還幸

九月主上有御藥二禁閑院櫻樹花發有御

十月十一日太上法皇令補阿闍梨給前大僧正  
覺忠放解文也被下准親王宣旨

十五日入道太政大臣於播列輪田濱修十壇阿  
弥陀供上皇去十三日臨幸令修法花法給

十一月十七日蓮華王院御佛脇士中正南放光明法印行海修御修法之間也

廿九日亥刻藻壁門并南北築垣卅余間燒亡病  
者於門下失火云々

十二月廿一日興福寺衆徒有訴訟可入洛之由  
有其聞仍長者遣家司光長加制止

廿七日衆徒猶捧神木上洛仍遣武士於道々防  
禦之

百練抄卷八

十二

閏十二月十日申尅有雷鳴二声

近日諸國稱有改元之由公家被誠仰其号泰平

三年三月三日大宋國有貢物入道太政大臣可遣  
返牒之由内々被定仰之左大臣經家計申也永範

卿草之入道教長卿可清書云々

十日西光法師供養木幡堂月卿雲客向訪有舞  
樂世稱過差

十一日檢非違使遠業渡強盜七人上皇於御授

敷御覽今日祈年穀奉幣日也

十二日別當成親卿定下諸衛官人二分三分郎

從負數

十七日珍皇寺內三重塔供養

四月十二日上皇御所法住寺北殿御所燒亡翌

賀茂御幸雖有議不延引依別御定也

廿九日高尾上人文覺賜檢非違使依狂氣也五

月十六日被流伊豆國

五月二日於上皇御所有鴨合事近習月卿雲容

及北面下薦等分左右為念人緯起兼日之儀為

當時之壯觀有勝負舞

六月廿五日與福寺衆徒登向多武峯燒拂堂舍

百練抄卷八

十三

房宇大織冠御影堂并定惠和尚塔婆同燒亡但

御影奉取出畢中寺并經藏一字之外不殘

廿六日上皇召諸卿令定下申興福寺大衆燒失多

武峯事法勝寺已下御八講不可召與福寺僧之

由被仰下

廿九日與福寺別當大僧正尋範解却見任

八月七日釋奠無廟拜宴座依多武峯燒亡也

十五日皇后宮育子薨

九月廿五日上皇并建春門院御行幸覽臺舞

十月五日上皇并建春門院御移徙新御堂御所

九日法眼覺與配流播磨國依多武峯也

十六日檢非違使師高渡強盜十人上皇於御棧

敷御覽之

十七日法住寺新御堂供養習禮

廿一日建春門院御願寂勝光院供養有行幸

十一月三日南京衆徒奉具春日神輿發向宇治

之由興福寺別當覺珍言上依寺領訴訟云々

四日為防南都大衆泰洛遣官兵令曳宇治橋

今日被行除目下名

五日興福寺衆徒奉具春日御柵上洛至宇治與

百練抄卷八

十四

天台衆徒可決雌雄之由稱之長者遣氏院別當

右大弁俊經朝臣雖加制禁不義引公家遣武士

防之

六日南京衆徒向天台山為令合戰企上洛奉具

春日御神木等已在木津河邊云々右大弁俊經

朝臣奉院宣為制止下向之云々

今日春日祭使依衆徒事不下向伴祭以次申日

可遂之旨被仰下

七日春日祭延引希代事也

大衆等昨日到宇治以平等院堂舍人屋等為彼

宿所吉野大衆同心相從公家遣武士於宇治為防大衆入洛也引宇治橋以橋東岸結陣云云天名衆徒使三綱參院申云南京衆徒為企奈洛已在此宇治云々我山衆徒等可罷向者仰云唯可奉往公家御制止也云々  
九日藏人左少辨兼光向宇治為制衆徒入洛也  
十一日十五大寺領可傳廢但於佛聖燈油料者付國司可進濟之由宣下之今日興福寺大衆皈南都  
十二日上皇泰詣熊野山御先達法務覺讚相具

百練抄卷八

十五

綱所綱掌四人鎔取四人綱掌淨衣上着赤袈裟鎔取淨衣着冠  
十八日清水寺燒亡  
十二月十六日關白松殿移徙中御門鳥丸  
廿四日寂勝光院內小御堂供養  
廿六日六波羅密寺炎上  
廿八日權中納言兼雅卿泰入被行流人宣下事僧行珍出雲國隱岐長曉隱岐依為東大寺惡徒也  
四年正月七日節會檢非違使糾雜犯之間中宮侍與右少將隆房朝臣雜色關亂仕雜色又傷宮侍

政友走入南庭大夫尉盛國即從擲取之  
十九日除目於御前始被行之  
廿八日多武峯御影奉遷聖靈院炎上之後造營  
二月五日行幸法住寺殿上皇六七兩日御逗留御所  
有闕鷄咒師猿樂等事  
廿三日八條院仁和寺御堂供養上皇有臨幸  
同日於寂勝光院小御堂被始行理趣三昧  
廿六日皇嘉門院九条御所燒亡  
三月一日右少辨親宗亭有詩合非成業八番各定勝負

百練抄卷八

十六

三日關白於松殿供養等身釋迦像始修自筆八講五卷日人々獻捧物結願日公家賜度緣  
十六日上皇建春門院臨幸安藝嚴嶋四月九日還幸  
廿二日或上人於船中邊欲供養千僧有勅仰使廳令止之  
四月十九日於勸學院有藤花宴題云藤為佳會媒  
廿八日於關白第被行學問料課試題云松臺曉調琴以關為韻  
卅日有伏議前太神宮司有長訴申官司公俊修造間事并泰通朝臣與外官祢宜彦章相論越前

此表白後日  
依勅令進覽  
云云

國泉北御厨事又去年外宮宝殿簀子狂男上事  
等也已上三

五月廿八日寂勝講結願權少僧都澄憲轉大僧  
都是近日有炎旱之愁第二日夕座講師可降雨  
之由表白之間甘澍忽下不堪歡感所被行勸賞  
也今日結願忽着僧都覺長座上世以驚耳目  
六月廿二日雷落泰親朝臣宅  
近日有炎旱之愁

七月五日相撲有召仰  
十五日於船野有身燒上人上下成群

百練抄卷八

十七

十八日蓮華王院内五重御塔立心柱并上棟  
廿日雷落法勝寺九重塔佛像柱等散々破損先  
年有此事云々

廿二日於院御覽相撲

廿七日相撲節大内保元三年以後絕不被行也

八月二日於院有七番相撲是寛治嘉保兩度之

例也天皇去夜行幸院御裝束如朝親行幸儀有

勝負舞并勸賞

十日上皇御移徙七条殿破本舍屋被新造云々

九月一日於太上天法皇御所法住寺有今様合事撰

定堪能輩卅人十五箇夜間每夜一番被決雌雄  
師長資賢卿等為判者

十三日仙洞今様合之次有御遊上皇令歌今様  
給希代之義談也

十月九日行幸大内

十二月廿一日皇嘉門院御移徙九条殿炎上之  
後被造堂

安元二年義安五七廿八改元依  
疱瘡并世上不閑也

元年正月四日朝親大上法皇法住寺有御遊主上令  
吹御笛給其声寥亮御笛師權大納言實國卿叙

百練抄卷八

十八

正二位

三月五日主上御疱瘡近日流行天下被行御祈  
等此日有奇雲天下可有驚事之由泰親朝臣申  
上之

九日從二位平時子入道太政大臣室供養八条朱雀堂

上皇女院臨幸中宮同行啓公家賜度者有勸賞

四月□日賀茂祭也

中宮使少進信廣

龍右將曹泰兼國  
右府生泰賴文少進給將曹之  
茶希代事云々

廿五日故紀二位堂炎上



廿九日皇嘉門院九条堂供養

五月廿七日建春門院百箇日御懺法結願被免輕犯者自去比上皇於蓮花王院百箇日有施行每日米三十石其次有出家之志者各剃頭男女已及百餘人各賜衣一領

六月十六日蓮花王院惣社鎮座八幡已下廿一社其外日前宮勢田嚴嵩氣比等社本地御正躰圖繪像但日前宮勢田御本地無所見仍只被用鏡

七月十五日大理以左衛門尉業俊召取院判官

百練抄卷八

十九

代宣廣依有嫌疑事也

十六日大臣宣下安樂寺巽方嶺銅梓十出來事令諸道勘申

八月廿四日鴨社祢宜祐季解却是延曆寺釋迦堂衆與祐季相論神領間去三日惡僧等乱入祐季宅祢宜搦留彼輩申事由於院則賜延尉張本僧被行流罪祢宜又被解却

廿九日諸卿定申諸道勘申安樂寺巽方嶺銅梓出來事可被行御卜之由定申之

九月十三日丑刻大風宮城并京中舍屋樹木多

雖無行幸公卿取布施有先例等

以顛倒橫川根本楊顛倒

閏九月廿九日前中務少輔為綱親隆卿男也為賊被致害風聞云竈向女家依有疑事既宅歎人等則襲來致害之

十月三日蓮華王院惣社榮公卿侍臣僧綱等騎進馬長有相撲御神樂自今年所被始行也有試樂後宴

五日於內裏有御賀定

廿三日寂勝寺樂師堂供養去嘉應年中為風雨空顛倒其後造營之無行幸又上皇不臨幸

百練抄卷八

二十一

廿六日強盜乱入河合社之內廊壁射立矢小鳥明神前血落去四日入供僧房及及傷重又有此事

十二月四日故紀二位堂清淨院供養炎上之後為上皇御沙汰造營也

二年正月十三日雅實僧都被付使廳使後見僧延濟為綱致害嫌機人之故也延濟為綱愛妾乳母夫也竈通云々

廿三日太上法皇於法住寺御所御覽御賀舞舞人樂人著布衣小舍人雅行舞胡飲酒

二月五日上皇猶覽御賀舞

廿日敦害為綱者僧宴濟召出使廳拷問養伏已畢同類上西門院前藏人平盛方也左中將知盛朝臣召進之依為一族也各養伏畢為綱宴通女房故顯能女也件女宴濟養君也而宴通盛方者件女々弟夫同宴通同意敦害盛方下手配流佐渡國

廿一日御賀試樂聞院小舍人雅行舞胡飲酒賜勅祿之間父定房卿肩祿於廣廂奏一曲聖代之佳猷希代之壯觀也

百練抄卷八

二十一

三月一日雷落法勝寺九重塔第九層下部二人震死御塔無事

四日公家奉賀太上法皇五十筭於法住寺仙居有此事今日行幸

五日仙躡猶留建春門院中宮等女房衆船月卿雲客衆船有管絃興又有蹴鞠

六日御賀後宴主上令吹笛給聞者莫不感歎今日仙駕還宮

九日上皇建春門院御幸有馬温泉

十三日内裏有臨時祭御覽

十九日平盛方配流佐渡國敦害為綱下手人也廿八日上皇覽御賀舞代々賀宴以後覽童舞仁平例後日舞人著襲裝束覽之今度以彼是例同時所覽也

四月二日上皇御所法住寺殿内建立九間三面精舍安置牛一体牛手觀音像被遂供養有免者廿七日上皇為御受戒有登山御幸内大臣以下供奉關白扈從座主權僧正明雲為御戒師六月十三日高松皇子院崩御三十六歲院第五葬香隆寺

百練抄卷八

二十二

十四日祇園御靈會少將井神輿不用前々路自冷泉東行自洞院可北行之由被仰下之内裏觸穢之間難奉勳賢所仍所被改神輿路也依觸穢所々無馬長

十八日被行非常赦依建春門院御腦也

廿三日子尅大雨風如車輪自乾飛翼

卅日建春門院御腦之間贈左大臣特傳有託宣仍為訪彼其十樂院墓所立精舍今日上棟

七月八日建春門院崩御卅五歲天下亮聞上皇御歎息葬新法華堂平生所被造營也但未作事

等臨期終其功

十七日新院崩御御年十三子六條院日來御院

御所而依痢病出御邦綱卿東山亭於件所有此

事

八月十一日主上始令寫妙經給於二間有此事

御本道風筆色々色紙墨字云々料紙紺紙天應

治曆被用紺紙被追彼例

十三日普成佛院王号今天內供養多宝塔上皇遣

院司主典代

十五日上人十一人入水其中稱蓮華淨上人者

百練抄卷八

二十三

為發起

廿五日前建春門院法華堂供養

今日主上令終法華經功給賜御衣一重於座主

明雲其外法服二具綃二十足綿百屯以頭右大

弁長方朝臣送遣之天曆頭右大弁有相之例也

九月十三日上皇御幸天王寺被修七ヶ日逆修

十九日九条院崩御臣女十六九条太政大

十月十七日熊野本宮經藏燒亡

廿三日上皇若宮御室御子入內是依為主上御猶

子也

十一月一日天台座主明雲供養叡山九佛院實

相院法華堂等

三日上皇若宮山座主明雲弟子入內依御猶子也

八日右馬寮廳御廐等燒亡

治承四年安元三改元

元年正月卅日朱雀院鎮守石神明神燒亡

二月廿日關白於春日社供養唐本大般若經限

五箇日被行十六會講

近日庖瘡流行

三月十八日於福原十僧供養上皇去十四日御

百練抄卷八

二十四

幸令結緣給

廿一日天台大眾可泰陣頭之由風聞之間內大

臣已下泰內可差遣武士之由被御下其振元加

賀守師高目代燒拂白山之間彼山大眾相具神

輿向天台訴詔故也

廿七日皇嘉門院九条御所炎上

廿八日院武者所藤原師經加賀國目代配流備

後國依天台訴也

四月六日有炎上火起自二条東洞院太政大臣

亭冷泉東為灰燼件亭本是花園左府亭也次

公卿或著直衣近將又著衣冠別當志親御員白羽供奉

下牛內裏賴家祿為大官右所名字可改之由仰之訓讀雖無輕猶改之

皇太后宮御所冷泉并權中納言實綱卿各燒亡八日法皇御所七条殿內小御堂供養有免物十三日延曆寺衆徒相具七社神輿泰內欲入陣中之間武士相防流矢誤中十禪師神輿未曾有之例也神人宮仕等同中矢亡命然間衆徒并神輿逝去仍召祇園別當隆憲可奉迎神輿之由被仰下臨夕祇園所司神人泰入奉迎之十四日主上駕腰輿行幸院御所武士供奉前後中宮同行啓大衆猶相具殘神輿著甲曾泰內於陣中可亡命之由依有其聞也內侍所雖可渡御

百練抄卷八

二十五

依為城外有議不被奉渡關白已下泰入於院被議定衆徒事十五日還幸內裏十八日未刻暴風其聲如炎上三条大宮人家門多顛倒件風起於神泉苑中云々或云善如龍王去此池云々十九日上皇於長講堂限百箇日被始行法花八講不召綱所廿日加賀守師高配流尾張國射神輿下手人六人禁獄

寺云內裏大消之分難及仍賴政奉念大井之間推三出米飛迎紫雲殿三匹次居南殿樓樹其時吹直火不移云々隆職廣房又書皆燒

堀川左府五系靈方朝臣坊城家重等此時燒

廿八日亥刻火起自樋口雷小路火焰如飛八省大極殿小安殿音龍白虎樓應天會昌朱雀門大學寮神祇官八神殿真言院民部省式部省南門大膳職勸學院等拂地燒亡大內免其難此外公卿家十餘家為灰燼皇居閑院依近主上駕腰輿行幸正親町邦綱卿第九東限富小路東西限朱雀西南限樋口北限二条九百八十餘町此中人家不知幾万家希代火災也近年連々有火事變異果而如此大極殿燒亡例

百練抄卷八

二十六

清和天皇 貞觀十八年四月十日丁巳後冷泉院 天喜六年二月廿六日丁卯延平高倉院 治承元年四月廿八日延久四年此後無造營經百十廿九日還幸閑院被仰廢朝依大極殿火事也卅日陣中有火事中宮強盜所為云々打消畢矢二筋射立右衛門陣四足希代珍事也五月四日天台座主明雲付使廳使被責召山惡

僧并白山張本又遣藏人召返御本尊

五日明雲解却所職

六日中院燒亡六條鳥九

十一日前座主明雲可勘罪名之由宣下又所領可沒官之由同被宣下之去五日解却所職今日以覺快法親王為天台座主

十三日明雲重相副廷尉等譴責山大衆可奪取之由依有其聞為守護被加之僧正使廳使等大畧同座云々天台大衆蜂起奉昇上神輿於講堂仍浴中驚自偏如軍陣

百練抄卷八

二十七

十五日延曆寺僧綱等先集會京極寺次群衆院為大衆使者申狀注折紙其趣明雲沒收所領可被處流罪之由風聞當山座主未聞配流之例何況顯宗棟梁哉又修造堂塔超上古就中公家御經師法皇御受戒和尚也可被優免者仰云更不可有裁許者

今日邦綱卿五条亭燒亡

廿日諸卿定申法家勘申前座主明雲罪名右大弁長方定申明雲謀反之罪露驗者不可遁霜刑歟但以一乘妙經奉授公家以并淨戒奉授法皇

忽令還俗處流刑之条可及豫議歟諸卿同之

廿一日前座主明雲配流伊豆国公卿定文依不叶時議不被下之今夜出本房經迴一切經谷辺云々

廿三日流人前座主明雲進發之間天台大衆等於途中奪取上皇逆鱗雖追遣武士空飯泰後日以僧綱等被尋子細大衆申云更非謀反顯宗棟梁惜而有餘今一度為謁見也云々

六月一日入道大相國召取權大納言成親右近少將成經左衛門尉師光法師法名禁固西八条

百練抄卷八

二十八

亭各上皇恩寵之輩也成親卿已下有密謀之由源行綱告言入道相國云々入夜師光法師被梟首今日天台大衆下洛而聞此由舍悅飯山明雲罪科事師光法師謗奏之故也於成親卿者遣備前國

二日成親卿送備前國七月九日薨彼國

三日入道大相國召取法勝寺執行權少僧都俊寬山城守基兼散位章綱檢非違使左衛門尉惟宗信房平資行同康賴等為謀反同意輩之故云々基兼信房資行康賴等解官後日配流遠國

五日流人明雲可召返之由宣下  
九日流人加賀守師高右衛門尉師親左兵衛尉  
師平等被誅件師高在尾張國入道相國仰彼國  
家人等令追討之相互合戰死者多  
今年于今無暑氣白山神所為之由世以稱之  
十二日行幸八條院暫可為皇居  
十八日成親卿黨類解官  
廿一日皇居八條殿放火即打消畢嫌疑人等舍人  
安利被擄之  
廿二日日吉社神輿自院被造進之河内守光遠

百練抄卷八

二十九

募遷任功造進之  
廿六日於宸勝光院被行前建春門院周關御齋  
會行幸閑院  
七月五日公家於閑院被始行宸筆御八講希代  
御願也五卷日院官已下獻捧物  
七日宸筆御八講五卷諸院官已下進捧物  
十日諒闇畢大枝  
廿九日讚岐院奉号崇德院宇治左府贈官位太政大臣正事宣下天下不靜依有彼怨靈  
八月十日釋奠大學寮炎上之間於官廳被行之

鐘聲事延久  
三年十月九  
日嘉保三年  
十一月十四

五日被問諸卿  
廿二日始於成勝寺被行御八講為崇德院御井  
也  
勸學院上棟  
廿三日被定造大極殿事為備前國所課大約言  
邦綱卿可造進云々  
十月七日東大寺別當敎覺相語軍兵切拂本寺  
內房舍或又及燒失是去月比為衆徒被拂報答  
云々  
八日造八省行事所始

百練抄卷八

三十

廿七日丑刻大地震  
東大寺言上地震之間大佛螺髮二口落觀音前  
又頂上螺髮拔上又大鐘鈞切落大地又印藏丑  
寅角類落是依敎覺之逆罪有怪異者  
十一月十二日自八條殿遷幸閑院本家有賞  
廿三日牙御笏日來紛失今日求出之出納中原  
信仲妻盜取之云々紛失之時被行御上之處始  
終不可失但癖可伺之由申之  
近日有赤氣  
十二月十四日蓮華王院內立五重塔供養有行



幸

二年正月七日寅刻彗星見巽方之由泰親朝臣奏聞又去年十二月廿四日出現云々

二月一日太上法皇於園城寺可令入灌頂大壇給之由被仰下而天台大衆蜂起訴詔仍園城寺沙彌如旧可受天名戒之由被仰下三井寺養伏進請文依之天名和合可被遂御願之由再三雖被仰山門不義引爰向三井寺可燒拂之由結構仍御灌頂可延引之由被仰下也  
七日清水寺々僧於寺内合戰

百練抄卷八

三十一

十五日女房若狹局建春門院嵯峨堂供養上皇齋々御幸

廿六日上皇於法金剛院有御遊

三月廿四日子刻炎上入道俊盛卿修理大夫信隆左京大夫脩範三位中將知盛卿等家并故家保卿七条東洞院堂家成卿家殿号稻荷旅所等燒亡

四月八日延曆寺報徒并鞍馬寺住僧等二百餘人向大谷風早禪師房不知實名切拂房舍追捕

十二日泰議右大弁長方卿與左大弁俊經卿從三位座次相論之間今年未書上月奏仍被問外記之處三位參議下觴可載散三位上之由勘申仍以右大弁可為上觴之由被仰外記

五月十三日於齋宮御在所近邊射致白專女院下北面下觴源競所從所為云々  
廿日今年寂勝講不召延曆寺僧捧山門訪狀訴申之上皇去春於園城寺可有御灌頂之由被仰下之處依山門蜂起不被果遂其事依彼罪科不被召之由有勅答

百練抄卷八

三十二

廿二日園城寺沙弥可受天名戒之由去春進請文而其後無其儀如何之由被尋覓讚僧正而園城寺申云兩門不和之上不可受戒然而如院宜遂灌頂御願兩寺和與者何不受戒哉之由申之畢而其後無和與遂妨御願畢爭可受戒哉云々  
卅日内裏有作文題云詩境御製落句云

豈忘一字勝金德可多脩竹慙白頭把卷師

御侍讀二人永範俊經等卿不堪感淚下南庭拜舞侍座者驚目

春日社今度修造之時改瑞垣可造廻廊之由衆

徒進奏狀依申請被宣下畢而社家依有申旨被行御卜之處官寮共不快之由申之而衆徒申云不可依卜吉凶仍被問諸卿猶祈請本社可有覆推之由定申之遂改瑞垣造廻廊

六月十七日於中殿有詩會題云禁庭有御遊催勝遊

十九日上皇御所角合事天下營只在此事

廿三日東方有鳴動之聲

閏六月五日有伏議去五月十三日於齋宮御在所邊院北面下鴈源競射白專女罪名也

七月六日供養震筆提婆品并釋迦三尊一鋪被

百練抄卷八 三十三

奉資前建春門院御井也

八日自今年始於最勝光院奉為前建春門院限

五ヶ日被始行御八講

十五日白川殿故撰政室書寫金泥一切經奉納春日

社經藏件經知足院入道被書始之今相傳書寫

被終其功

廿二日相摸權守仲賢於五条大宮邊被殺害入

道大相國家人也

十月四日天名學徒與堂衆合戰學徒皆逃去又

多死者恒例佛神事悉以退轉云々

七日賴政朝臣井院邊建立一堂供養

十一月十二日中宮皇子降誕

十二月二日最勝光院御塔內被立心柱

十五日以第一皇子孝德言仁為皇太子

廿三日於院被行阿彌陀講有管絃朗詠今樣等

兼日結構也

三年正月六日春宮五十日於內裏有此儀

十一日伊勢齋王切子依遭母儀喪自野宮退出

廿六日主上於院御所御覽咒師上西八条兩院

御幸去廿四日行幸今日還御

百練抄卷八 三十四

二月廿二日春宮百日

廿四日以安藝國伊都岐嶋社可加廿二社之次

弟并祭祀日事等有其沙汰兼實右大臣以下大外記

賴業師尚等預勅問計申之以二月十一月上申

日可為祭祀式日之由被定仰先議戈卿

廿八日內裏侍臣見大內櫻花事出楚忽賦周詩

自內裏被送和哥

修理大夫信隆卿娘典侍誕皇子後高倉

廿九日京極殿內坤角舍屋二字燒亡

三月二日洛中有光物

卜定所燒亡  
希代事也

淨藏法師所  
立塔也

十八日上皇幸入道大相國亭安藝伊都岐嶋小  
巫譚迴雪之袖為殿覽也

廿日上皇御幸石清水十箇日令泰筆給被修八  
講

廿六日祇陀林寺并初齋院卜定所中御門南燒  
東極西

四月廿三日上皇限十少日御泰筆賀茂社令轉  
讀千部經給又被行御八講

藏人中宮大進基親蒙勅勘是祭使之時被制之  
故也

百練抄卷八

三十五

近日童謡云自五月一日惡虫可降不可見日食

者可大命三百年一度有此事云々無差本文

五月三日左衛門尉源忠清配流佐渡國依所領

相論事致害舍弟左近將監滿實之故也

十四日祇園大眾等發向清水寺又清水寺僧合

戰相互放火堂舍人屋多以炎上此中八坂塔為

灰燼事起清水寺四至內住人差祇園御靈會馬

上之間闖亂出來云々

十六日著鉢政良家子息多依強盜犯著鉢希代  
事也

十九日別當時忠卿切強盜十二人右手懸獄門  
希代事也經成卿廳務之時有此例云々

廿五日於法勝寺被行千僧御讀經上皇有臨幸  
六月三日上皇山科新御所御移徙本是雅寶僧

都領進故建春門院依有飛泉去比被造營  
十日上皇被始行五十日逆修

十七日院判官代源有雅於一条今出川被致害  
廿日從三位平盛子中攝政有贈位去月十七日薨

去今日被仰廢朝  
近日天下上下病惱号之錢病

百練抄卷八

三十六

八月一日入道內大臣重盛公薨入道前太政大

臣嫡子武勇雖軼時輩心操甚穩也去比泰熊野

有祈請

近日主上有御藥

卅日院御逆修結願有免物

今日被下新制三十二條

十月三日延曆寺堂眾追捕近江國三ヶ庄仍可

追討件輩之由被仰下之泰議教盛卿奉之遣

官兵之處堂眾退散構城櫛於橫川仍重差遣官  
軍

十一月二日天台堂衆打入西塔燒拂堂舍五宇房舍三十餘宇

五日依天台衆徒事被召仰御祈於諸社諸寺

七日被發遣七社奉幣使依衆徒事也成刻大地震

十五日世間噉々武士滿洛中入道大相國奉

怨公家率一族可下向鎮西之由風聞上皇以法

印靜賢自今以後万機不可有御口入之由被仰遣之

今日關白前太政大臣并權中納言師家解官以

百練抄卷八

三十七

二位中將基通卿可為關白內大臣氏長者之由宜下不被行節會被任大臣例今度始之未曾有之珍事也

或記云上皇與關白可令滅平家黨類之由有密謀之由有其聞其上師家卿超二位中將任中納言其辭云々

十六日前僧正明雲還補天台座主

十七日被行除目太政大臣師長已下至于檢非

違使信盛卅九人解官多是院中柱候之輩也此

中太相國可追却關外之由被宣下

十八日前關白左遷太宰權帥遣大夫尉康綱令追之即以出門隨身厚景侍四五人在共難人滿途中見之各叫喚前關白於路頭出家云々前相摸守業房配流伊豆國但逐電不逢追使前大納言資賢卿并推賢資時信賢可追却京中之由被仰下也

廿日太上法皇渡御鳥羽殿非尋常議入道大相國押申行之成範脩範等卿法印靜賢女房兩三之外不奏入閉門戶不通人武士奉守護之前越中守盛俊擲強盜渡北陣廷尉兼經請取之

百練抄卷八

三十八

廿一日前大夫判官大江遠業自害縱火於宅備後前司為行上總前司為保被斬首皆是上皇殊召仕之輩也應年預宗家入道相國被擲取之為注御領目六云々

廿二日天台學徒堂衆和哥

廿三日内裏武士宿直不令往反上下

廿八日前關白文書被召置内裏花山院前大相

國進目錄文庫被宿納大内飯京之後返賜之

十二月十四日後院廳始也上皇御座之時先例不置後院

同時被行而  
事無例然而  
有議能行

十六日為御方違行幸入道大相國八条亭以大  
平御覽為御贈物件書本朝流布之始也

廿一日賀茂齋內親王著袴于特御座

四年正月十日遷幸前大納言邦綱卿五条亭中宮

春宮同行啓不用移徙之儀去年土用以前八ヶ

日中新造可謂不日之功

廿日東宮於內裏有臭味著袴事有勸賞

廿七日除目中夜明經道申春秋除目可舉內宮

之由事令諸卿定申或云可有裁許或云新儀也

可有勅定云々

百練抄卷八

三十九

今日左右獄囚人十五人於山科斬首又廿一人  
切手

二月十六日行幸關院

廿一日天皇讓位於皇太子被渡劔璽於新帝御

在所五条南東

三月十六日於海橋立池蝦蟇合戰五决雄雌又

蝦蟇食斂蛇見者如垣賀茂上社同有此事云々

十九日新院御幸安藝國伊都岐嶋脫履之後未

幸他社最前御幸當社人以成奇然而有殊御願

之上入道大相國申行之故也

准大臣之例  
以數員尉為  
健令使

廿三日卯刻地震

四月九日遷幸大內代始被用之移

廿二日天皇即位紫宸殿當時大極殿未被造畢

任治曆之例於太政官廳可被行哉否兼日有某

議被問及卿康保之例雖非規模可被用南殿之

由右大臣被計申也

廿九日辻風起自近衛京極至于錦小路大小人

屋多以顛倒又雹降又雷發一聲即落七条東洞

院人屋

五月十四日法皇自鳥羽殿遷御八條坊門鳥丸

百練抄卷八

四十

俊盛入道亭

十五日法皇第三宮

土佐國依有謀反之聞也檢非違使源兼綱右尉

源光長等奏向御在所追之而右兵衛尉長谷部

信連相禦之間光長即等四人死去宮寮々遁出

令向園城寺給三井衆徒同意有謀反之支度天

名衆徒可與力之由有其聞南都衆徒又同意云

云

廿二日今晚入道三位賴政卿皇子息即從等奏

三条宮白川家自燒拂之依之天皇俄行幸八条

入道太相國第內侍所同渡御之

廿三日法皇山科御所燒亡

廿五日攝政遣有官別當忠成於南都是為制衆徒謀反也而大衆剝取衣裳追出院難色二人切本島

廿六日三條宮率賴政已下武士赴南都官軍追至於平等院合戰宮并賴政法師已下黨類伏誅廿七日於新院與福園城兩寺監行事何樣可被行哉之由有議定

廿八日新院密々幸入道太相國第御覽賴政已

百鍊抄卷八

四十一

下首

卅日被行追討賴政入道已下之勸賞平清宗等

超二階叙從三位

六月二日行幸攝津國福原法皇新院同以臨幸貴賤上下出平安旧城赴攝原新都今日着御寺江頓宮翌日乘御船着御福原世尊号之遷都入道太相國申行之

九日差遣大納言藤原實定奏議源通親左中弁藤原經房左少弁藤行隆左大史小槻隆職右大史小槻國宗等於輪田點定遷都之地左京条里

以明聖為天皇  
三寺別當

不足又無右京云々

十日入道前太政大臣并從三位時子被下准三宮勅畢

十一日於新院殿上被議遷都事左大臣已下奏入以輪田被定其所而條里不足又可被縮宮城歟又平地內無右京當西有山陽伴山被用右京如何山谷相交可有其難人々定申云左京不足右京山谷相交事有何事哉於被縮宮城之条者不可然也

十五日以輪田難被用帝都可為小屋野之由被

百鍊抄卷八

四十二

改仰而又播磨即南野可宜之由有沙汰依無水難叶之者

廿日園城寺末寺庄園等沒收圓惠法親王可停止天王寺別當職并門徒僧綱可解却見任之由被宣下之

廿一日法勝寺池一莖二花蓮生寺家言上之有御卜

七月三日法勝寺御八講不被召興福園城兩寺僧綱

十九日有大流星其光如炬火



廿九日新院御不豫已累月天下政務一向不可聞食之由被仰下

自去五月炎旱涉旬天災競發歟所々水皆絕

八月十二日於新院被定今年大嘗會延否并方忌等事

十六日興福寺僧綱等解官并私領等可沒收之由被宣下

十八日園城寺僧徒被免勅勤

九月三日伊豆國流人源賴朝虜領當國隣國謀反之由風聞

百練抄卷八

四十三

五日源賴朝可追討之由宣下

廿一日新院泰詣安藝伊都岐嶋第二度

廿二日右近權少將平維盛朝臣為追討關東賊徒發向義平天慶之例函玄之間今度就嘉義例

所被行也不給節刀賜驛鈴

十月六日熊野前別當堪增謀反仰彼山常住等可追討之由宣下

七日亥刻有流星變出紀伊國山方入福原東北山大如大土呂渡北斗中舍裡二許丈入山之後

其光不消及一町本朝無此變若可謂天裂歟

大嘗會以前  
五節園融花  
山二条院例  
也

十一月三日東國追討使惟盛朝臣飯京賊徒其數千万依不可敵對空引飯

七日重被下東國追討宣旨

十一日遷幸福原新造內裏入道大相國所造進也

十七日五節於新都被行之大嘗會年不被行之但於新嘗祭者於古京神祇官被行之

廿三日俄立新都自改可還幸舊都今日遷御邦綱卿新造亭兩院同御幸

廿六日若御旧都万民有悅色依東國逆乱忽有

百練抄卷八

四十四

議所飯都也

主上入御五条皇居

卅日於新院召諸卿議定東國逆乱事左大臣以下泰入左大弁長方卿吐善言

十二月一日今日可有改元之由有其沙汰然而

俄傳止踐祚年改元大同之外無其例

伊賀国住人平家次冠者追討近江國逆賊輩

之由言上

二日東國追討使左兵衛督知盛已下發向不給驛鈴節刀自今日禁中警固義平之例也但無召

御

六日前中納言雅賴卿家追捕是彼家人前齋院次官親能與賴朝有由來為召取之

八日法皇自六波羅亭遷御新院御所可有御同宿之故也

十日差遣官軍於園城寺是彼寺衆徒同意于近

江因謀叛輩之由依有其聞也而天台大衆待諸山科邊合戰彼衆徒又同意惡徒之故也

近日陣直官人著甲曹桓侯

十一日淡路守清房追討園城寺堂塔房舍拂底

百練抄卷八

四十五

燒拂金堂一字相殘

十六日那智山千手觀音令摧破給伴像以石岩為佛像行來尚而今日如地震地動件巖摧破自腰上程皆落龍本云々

廿五日為追討南都藏人頭重衡朝臣突向是彼僧徒等偏背朝威巧謀叛之由有其聞之故也

廿八日藏人頭重衡朝臣追討南都是彼衆徒等背朝威謀反之由依有其聞合戰斬首者二百餘人去廿五日起南都

今日東大寺興福寺堂舍僧房不殘一字悉以燒

拂佛法之滅亡偏在此時東大寺者聖武天皇天

平八年始造同十五年造畢孝謙天皇天平勝室

四年四月乙酉大佛開眼造畢以後至于今年瑛

四百三十八年始逢此災興福寺者佛像者大織

冠造立堂宇淡海公建立和銅三年自山科移立

南京之後四百七十一年也永承元年十二月廿

四日燒亡同二年七月上棟同三年三月供養康

平三年五月四日又燒亡金堂觀迦眉間眼小佛自灰中求出之同

五年六月上棟治曆二年二月供養此後歷百五

十年有此災

百練抄卷八

四十六止

百練抄卷第九

安德天皇三年

養和一  
壽永二

百練抄卷九

一

安德天皇諱言三年

高倉院第一皇子母建禮門院入道太政大臣清  
盛公女治養二年戊戌十一月十二日誕生同十  
二月七日為親王同十五日為皇太子同四年二  
月廿一日受禪三以關白基通為攝政同四月廿  
六日即位於紫宸殿大極殿未造立之間六月二  
日行幸檼津國福原壽永元年十月廿一日御襖  
同十一月廿四日大嘗會同二年七月廿五日起  
西海文治元年乙巳三月廿四日崩海中八歲同  
三年四月廿三日諡号安德

百練抄卷九

二

養和一年治養五十四  
改元依代初也

元年辛丑正月一日無小朝拜所々拜禮節會無出  
御止舞樂國柶奏依南都火事也今日武官公卿  
或帶弓箭或無纓帶饒太刀  
四日東大興福兩寺門徒僧綱已下可解却見任  
沒收所領之由宣下  
八日八省御齋會以下南京僧被止公諸仍以延  
曆寺僧可為講師哉又御齋會可延引欺之由被  
問人々以成實論重令勤講師  
近日東海西海北陸已下至五畿内所々有謀反

天曆八年依  
母后御事御  
齋會延引之  
側師而勅中

之聞

今日以前右大將宗盛卿可為五畿內并伊賀伊勢近江丹波等國惣管之由被宣下天平之例云

云

十四日太上天皇崩于六波羅賴盛卿亭御年廿一號高倉奉葬清閑寺後鳥河

院奉葬清閑寺

十七日天下万機法皇如元可聞食之由被仰下

之

廿日於義濃國平氏與源氏合戰通盛維盛等朝臣為大將軍源氏多被打取之

百練抄卷九

三

近日武士乱入人家追捕雜物洛中不靜

二月六日神社佛寺諸家及五畿七道諸國顯不動明王像寫尊勝陀羅尼可供養之由被宣下

九日逆徒義基法師首并生虜等廷尉詰取向獄門

十六日近江義濃賊首傳京師去正月廿日於義濃國所打取也

十七日從三位通子故中殿有准三宮事依可為

帝准母儀也

今日行幸賴盛卿八條室町亭元是顯隆卿

濠橋五之外無其例云々

家顯能相傳之平治比為義福門院御所二条院御在位之間暫為皇居而賴盛卿申請八条院所新造也

閏二月四日入道太政大臣清盛公法名淳海薨年六十四天

下走騷日來有所惱身熱如火世以為燒東大興福之現報八日葬禮寄車之間東方有今樣乱舞

聲許州人以人令見之聞寂勝光院中云々東實

六日於法皇御所議定關東及逆事右大臣以下

泰入先遣院宣可被尋子細之由定申之

今夜故入道大相清盛國八條坊門第炎上

百練抄卷九

四

十五日藏人頭重衡為追討東國發向

廿五日法皇遷幸法住寺御所去年事以後始渡御

卅日晝御座御劔裝束犬咋切

三月三日皇嘉門院御所炎上燒失已三々度也

十日於洲俣合戰源氏軍兵三百九十餘人被打

取大將軍行家逃下關東

廿一日皇嘉門院御所炎上去三日炎上之後假

御右大臣亭

四月十日主上自八條賴盛卿亭遷幸閑院有家

中院之內行幸例永百幸

賞

十四日肥後国住人藤原高直可追討之由宣下  
五月四日春日社第四殿御正躰落令破云々  
廿一日法金剛院御所焼亡前待賢門院御所也  
六月十五日造奥福寺定  
廿五日客星見北極  
廿六日造東大寺定被下知識詔書  
今日法勝寺池一莖二花蓮関有御祈等  
廿八日入道關白書籍被返之  
近日天下飢饉餓死者不知其數僧綱有官之輩

百練抄卷九

五

有其聞

八月四日清水寺住侶可叙法橋之由被仰之  
十四日被下北陸道追討宣旨  
十五日以藤原秀衡任陸奥寺以平助職任越後  
守為追討頼朝也  
十六日無駒引望月牧御馬依關東謀反不忝之  
故也  
九月六日越前守通盛朝臣於越前國與源氏合  
戰官軍敗績之  
十三日金銅鎧被進太神宮依天慶例也件使神

祇少副定隆去五日於途中卒去於鎧者散位大  
中臣在定取進之

廿八日左馬頭行盛薩摩守忠度為追討使發向  
十月三日依逆乱事可有行幸太神宮之由被立  
御願如何之由被仰合撰政左右兩府各無先跡  
輒難計申之由申之

十一日於院書柿葉於心經十卷供養納俵十二  
為被入東海西海也是依資盛朝臣夢想也  
十六日加賀守為盛下向紀伊國為追討熊野山  
凶黨彼山常住等致謀反之故也

百練抄卷九

六

廿一日諸卿定申諸道勘申東大寺火災事

廿二日鴨社遷宮

廿七日法印寬竿於東坂下頓死自去廿一日為  
調伏東賊於日吉社被行五壇法降三世阿闍梨  
也修中有此事以為奇歟

廿八日四勝寺執行法眼任祐於一条町邊為賊  
被斃害

十一月十五日前齋院世尊寺亭炎上  
十二月五日皇嘉門院崩

六十法性寺入道  
長女崇德院后

廿五日被行解陣自去年依東國乱警固雖兵乱

未平有議被解之

壽永二年養和二五廿七改元依  
飢饉共革病事三合也

九年正月二日未時雷鳴

十六日踏哥節會停止依御忌月也

十七日諒闇大枝

近日常兒奔道路死骸滿街衢夜々強盜所々放

火稱諸院藏人之輩多以餓死其以下不知數飢

饑超前代

二月廿一日女御琮子三条高倉第燒亡

廿九日守覺法親王於仁和寺為故五宮供養五

百練抄卷九

七

部大衆經法皇臨幸有勸賞

三月廿日晝御座御劔御帳懸角等紛失

廿六日權中納言實守卿大炊御門高倉亭燒亡

近日常變甚多

四月九日諸卿定申大嘗會雜事五箇条

十五日前權少僧都顯真勸進貴賤上下自去月

十五日三七日一心精進轉讀如法經法皇令列

人數給昨日結願歟於天台三塔法華堂書寫金

泥如法一日經今日於日吉社供養上皇昨日臨

幸有舞樂希代之大善也上下拭隨喜之淚

今年如未藏  
後當二十一  
百廿五年

法皇御登山之間京中謬說風聞洛中騷亂重衡

卿舉軍兵泰御迎仍俄還御

十月二日京中人屋自去夏壞之沾却殆如無人

家御使廳制止之然而猶不拘之

九日群盜入勘解由次官惟基宅惟基蒙疵十一

日死去入道惟方  
卿二男

十七日殺害惟基犯人廷尉盛綱擗取之持泰上

皇門前渡之有御覽召取彼犯人之者可有不次

賞之由先日被仰下之八条院侍二勞不知所為  
實名也

百練抄卷九

八

十一月十一日諸卿定申大嘗會泰河神服使空

飯洛事

廿四日大嘗會也去年空不被行之今年所被遂

行也

十二月四日院女房丹後局淨土寺堂供養

十日入道大納言隆季卿雲居寺供養号金  
山院

二年正月十一日廷尉知康擗群盜渡院御所之後

持向大理亭

九日上皇被始御逆修

入道太政大臣師長  
法名理覺東山妙音堂供養以寢殿

紀後威從引  
僧云今秋家  
例如何



擬道場以伎樂貴之上皇密幸件堂寄進新日吉  
社施入所領五ヶ所可為上皇御祈禱所  
二月廿一日主上始朝觀于法皇春秋六歲度々  
吉例也

三月十三日上皇於法勝寺行千僧御讀經無御幸有

十八日西京上人号番頭上人件上人入滅斷飲食及四十餘日

四月十七日三位中將維盛卿已下為追討使下  
向北陸道其勢十萬騎

百練抄卷九

九

近日京中狼籍多

十九日上皇泰籠新熊野有乱遊公卿殿上人有

田樂

廿七日官兵入越前國追落源氏城二ヶ所

五月十一日於越中國合戰官軍敗北

十九日被鑄始東大寺大佛

近日炎旱涉旬於神泉苑雲

六月六日上皇訪追討之謀於公卿五人左大臣右大臣

內大臣實房長方等卿

十一日上皇於延曆寺囑千僧轉讀樂師經為平

逆徒也藏人右衛門權佐定長奉勅召祭主親俊  
於殿上口仰云兵乱平者可行幸太神宮之由可  
祈請申之由被仰下之此後召官寮令卜申行幸  
太神宮之吉凶

神宮行幸天平十二年十一月行幸伊勢太神  
宮被祈申太宰小貳廣繼謀反事

廿一日發使於山陵被申逆徒事

廿三日諸卿定申伊勢太神宮司祐成與造宮使  
俊宗問注内外宮修造遲怠事

近曾祭主親俊奏法皇云夢想云泰神宮平伏庭

百練抄卷九

十

上父親定并親章卿兩人過在堂上以親定傳仰

云於我者令向天宮給畢禪定法皇御事所令申

付荒祭宮給也可被奉御劔早可進院也又當宮

守護事以泰經可申沙汰也此後夢醒了後朝內

宮一祢宜成長持來御劔蔭虎云可進院之由有

夢想仍自宝殿所取出也請取件劔忽上洛者日定

注可尋

七月八日更有警固召仰依賊徒入近江國中

今日平氏公卿十人前內大臣宗盛以下以連署起請送獻

山准藤氏興福寺以延曆寺為平氏氏寺准春日

社以日吉社為氏社之

九日於院評定神宮訴詔事不及廣人々云於院沙汰神宮事無便也

廿一日新三位中將資盛卿以下為追討使向宇治其勢三十餘騎

廿二日源氏軍兵已著東坂本相率大眾登山云々

上皇召諸卿有議定依賊徒事可有行幸院可憚後日哉賢所渡御城外無先例可憚哉武士猶可守護院御所哉三々條也福原行幸之外無賢所

百練抄卷九

十一

城外之例或云賢所於今度者可奉具雖無例各

別有其恐或云猶可被渡溫明殿

廿四日天皇俄行幸法住寺殿上皇御所內侍所同渡御夜半上皇蜜々出御法住寺殿臨幸叡山院中

男女不知之失度

今日雷落石清水室殿艮角廊內

廿五日平家黨類前內大臣已下學一族出奔西園天皇建礼門院同奉相具內侍所神鏡神璽室劔時簡殿上御倚子玄上鈴鹿皆以相具六波羅已下家同時放火洛中騷動無物于喻賴盛卿一

類留京都主上駕御車基通攝政扈從即遷御六波羅泉亭建禮門院准后駕列車轅攝政自途中廻轅逐電主上六歲

廿七日上皇自叡山還御著御蓮華王院依飯忌日也

廿八日上皇召公卿有議定前內大臣已下奉具幼主赴西海之間神鏡劔璽已下取畢何樣可有沙汰哉事

今日召義仲行家於御前可追討前內大臣已下黨類之由被召仰又下遣御使於賴朝許廳官康

百練抄卷九

十二

貞下向

廿九日六波羅密寺常光寺故正盛炎上朝臣堂

卅日於院有議定賴朝義仲行家等勸賞并關東北陸庄園京中狼藉可被止事也

召官察於仙院令卜申三種室物事民部卿成範

卿奉行之御出家之後官御卜如何之由先日有

議京中追捕自人家及公卿家又及神社云々

八月五日玄上出來大夫尉知康於路頭見甘即

進院踐祚事有御卜

叙奠不供葷腥僅備青菜之類

六日平家黨類解官自權大納言賴盛卿至于諸司三分前内大臣除名

十日於院召三基相議定踐祚間事

於院殿上被行除目義仲任左馬頭兼越後守行家任備後守踐祚以前除目人々頃申之平治勸賞於六波羅亭被行之時五位藏人成賴云々鈴鹿笛筥出來

十六日於院被行除目義仲遷伊豫守行家遷備前守其外可然任官多

十八日於院有議定神鏡劔璽諸道進勘文又踐

百練抄卷九

十三

祚間條々事也

廿日高倉院第四皇子尊成踐祚御年四歲開院左大臣

於太上法皇御所令勘日時奉法皇詔召大内記

光輔仰可令作傳國宣命之由撰政藤原朝臣如

元不傳劔璽踐祚之例今度始之前主出洛城之

後至于今日空王位廿六日

廿一日武士乱入大原野打閱神殿取御躰鏡四

枚并神宝等稻荷社奉取御正体弃之梅宮社同

打閱宝殿云々

九月二日太上法皇癸遣伊勢公卿勅使奏議脩範卿

寬治天養例也御出家已後雖無此例有議被立

之十五日上皇御幸日吉社去七月廿四日御登山

之間有御願之旨云々被奉增神位又有僧侶官賞

今日於撰政直廬議定御即位間事日次事朔且

不出御以前十一月可遂行御即位哉事以紫震

殿高御座可被通用哉事以民部省南門可擬官

南門哉事列見定考於何處可被行哉事也

十八日北陸道若宮故三条宮御子六歲入洛自院被奉迎

百練抄卷九

十四

之

廿日左馬頭義仲為追討平氏下向西國

十月九日前兵衛佐賴朝復本位又紀伊國丹生

高野神奉加一階

十三日雷鳴

十四日大地震

東海東山諸国年貢神社佛寺并王臣家領庄園

如元可隨領家之由被下宜首依賴朝申行也

廿日前大納言賴盛卿偷逃下關東云々

近日天王寺舍利三粒紛失給云々閏十月七日出來給

大刀契鈴印  
自大内被渡  
之

閏十月一日平氏與源氏合戰源氏敗北  
廿二日今年可有改元哉否被問人々可為明年  
之由人々申之

十一月一日朔旦旬也然而不被行叙位今年被  
止豐明節會之故也

朔旦

自長寬二年今年當廿年卒勅雖不叶以一章  
之年數置之例也

八日備前守行家為追討平氏下向於播磨國合  
戰行家兵敗云々或云平家被追出鎮西

百練抄卷九

十五

十日蓮華王院內北斗堂供養

十一日五節停止御即位已前可被行哉否先被  
問諸卿

十八日主上密々乘車臨幸法住寺殿院中被集  
武士仁和寺法親王山座主已下相具武士恭入  
遣主典代景宗於義仲許仰云偏奉背公家致狼  
籍早可罷出京中者

十九日左馬頭義仲率軍兵寄攻院御所法住寺  
南殿

放火官軍敗績法皇駕輿出御北門渡御新日吉  
義仲兵亂入公卿殿上人各逃去園城寺圓惠法

親王法皇  
御子天台座主明雲越前守信行近江守重  
章主水正近業亡命上皇於河原駕車渡御攝政  
五条第主上渡御母儀七条亭云々

廿日院中輩首百十一懸五条河原義仲監臨軍  
呼三度主上登々還御閑院

奏議脩範卿出家人以稱義

廿一日權大納言師家卿年十一入任內大臣可  
道關白子為攝政藤氏長者之由宣下無節會內大臣實定

喪之後未獲任被借召之

廿五日於院有議定天台座主事全言昌  
雲俊亮平家沒

百練抄卷九

十六

官領一向賜義仲可止京中狼籍事大臣可被轉  
任事崇德院宇治左府怨靈可沙汰事等也

廿八日院近習人中納言朝方卿以下數十人解  
官兼雅卿被止出仕所領叔公

十二月二日平家領義仲可惣領之由被下院廳  
下文

十日可追討賴朝之由被成院廳下文是依義仲  
申請也

十九日被行朔旦叙位依無豐明節會今年可被  
付行御即位叙位之由被定之處御即位又延引

仍所被行也

廿五日於鳥羽南樓門外蛙與蛇合戰蛇死去謂  
咎徵

廿九日奉為崇德院并宇治左大臣保元戰場地  
春日可被立仁祠事始也  
河原

嘉元二年四月廿六日以大理定房卿之本書寫  
校合畢亦以權右中辨宣房朝臣之本見合而已

百練抄卷九

十七止

百練抄卷第十

後鳥羽院十五年

元曆一  
建久九

文治五

百練抄卷十

一

後鳥羽院諱尊十五年

高倉院第四皇子御母七条院修理大夫壽永二年八月廿日於閑院受禪春秋四歲同日以攝政基通

更為攝政元曆九年七月廿八日即位同十月廿

五日御楔皇太后同十一月十八日大嘗會建久九

年正月十一日禪位同十九日被奉尊号御隨身

等兼久二年十一月八日辭退尊号兵杖御封等

同三年八月八日於鳥羽殿御出家同十三日奉

配隱岐國

元曆一年壽永三年四月十六日改元依代初也

百練抄卷十

二

正月一日辛卯節會不進腹赤贅依西國賊亂也

又無小朝拜代始為山會日之故也今夜子刻已

後及遲明暴風雷雨將軍墓鳴動

六日丙申叙位也昨日延引依公家并攝政御衰

日也

八日戊戌御齋會始也世間風聞云坂東武士令

越來義濃伊勢等國義仲為相禦差遣軍兵等西

國武士平氏又超來福原邊云々

十一日以伊豫守義仲可為征夷大將軍之由被

下宣旨



廿日庚戌今日辰刻坂東武士源義經等自宇治路入洛伊豫守義仲朝臣下隨兵雖合戰無程敗績於大津邊義仲被討畢餘黨散乱四方坂東武士各追乱云々  
廿二日壬子攝政師家停止氏長者如元以基通可為攝政者  
廿六日丙辰梟伊豫守義仲首去廿日斬之字九郎義經相具之廷尉於六条河原諸取之懸東獄門樹見者如堵此外字根井今井樋口等雖為降人渡路頭

百練抄卷十

三

廿八日戊午諸社祭可停止之由被宣下  
今日攝政被申拜賀  
廿九日己未為討平氏九郎義經下向西国云々  
二月一日庚申春日祭依世間穢延引  
四日癸亥祈年祭延引有大拔  
八日丁卯九郎進飛脚云自昨日寅時至午時合戰攻落大將軍已下多以打取之畢本三位中將重衡為生虜云々  
九日戊辰天下穢限有沙汰諸社祭等停止但祈年祭石清水臨時祭以吉日可被行者

十三日壬申今日平氏等首被渡之云々權中納言家通卿奏入仰下賊首可懸獄門樹之由  
廿三日壬午前馬助季高有被召問事是義仲黨類者也被下院廳畢  
廿四日癸未召彈正大弼資泰朝臣被尋問是又義仲示合雜事之故也  
三月三日壬辰有御燈由後雖天下穢中猶被行之代々例也  
十四日癸卯祈年祭也  
廿三日壬子祈年穀奉幣也

百練抄卷十

四

廿七日丙辰除目入眼也源賴朝叙正四位下從本五位天慶秀卿自六位叙四位之例也日吉并北野神位記諸卿宰相殿和泉殿贈位也日吉神位記行神祇官畢  
四月二日庚申平野祭也  
八日丙寅內裏灌佛停止依御即位以前也  
十五日癸酉賀茂祭也崇德院并宇治左府廟遷官也件事公家不知食院中沙汰也仍不被憚神事日也  
十六日甲戌解陣也又有改元事元曆

五月二日己丑武士追捕松尾神主宅云々  
三日庚寅前大納言賴盛卿下向關東依恩免也  
十一日戊戌權中納言家通卿參入被行搦盜内  
印犯人之賞以藤原孝久任左兵衛尉散位從五  
位下孝實孝久父也一階事追可申請  
廿一日戊申賀茂上社舞殿無風顛倒云々  
六月廿三日庚戌依神鏡并神璽宝劔等御祈被  
立廿二社奉幣使  
七月十七日癸卯被立御即位由伊勢奉幣使攝  
政家泰神祇官被發遣之

百練抄卷十

五

十九日乙巳今日於近江国官軍與伊賀伊勢山  
徒筑後前司貞能兄平田入道已下合戰山徒敗  
績  
廿日丙午御躰御卜奏也式日無龜甲之間延引  
廿八日甲寅御即位也任治曆例於太政官廳始  
行之  
八月十日丙寅大嘗會国郡卜定也近江甲賀郡丹波多紀郡  
今夜出羽守信兼并男左衛門尉兼衡被下解官  
宣旨件信兼子息三人於新廷尉義經宿所自害  
云々

九月二日戊子參河守範賴為追討使下向西国  
九日乙未平座也今日掃部頭安倍季弘朝臣被  
下解官宣旨陰陽權助不解之  
十月九日甲子權中納言忠親卿被行攝政内舍  
人隨身勅書事以權中納言兼房卿被行内印今  
日御即位大奉幣也  
十五日庚午被立大嘗會大奉幣使  
廿五日庚辰大嘗會御禊也  
十一月九日甲午三社奉幣也  
十八日癸卯大嘗會也

百練抄卷十

六

十二月十六日辛未攝政春日詣也大納言定房  
卿已下月卿雲客多以扈從法皇御見物  
廿五日庚辰始臨万機旬權大納言良通卿已下  
泰入  
文治五年元曆二年八月十四日改元依火災地震也  
元年正月一日乙酉節會小朝拜如例  
今夜戌時有變異彗星出現云々或蚩尤旗云々  
十日甲午為追討平氏檢非違使左衛門尉源義  
經發向西海了  
廿日甲辰除目入眼也雖坎日不被憚也

廿一日乙巳法印實宴於日吉社頭被敎害不知何人之所為

二月四日戊午祈年祭延引依大神宮職也

十九日癸酉住吉社司言上云去十六日子刻自

第三神殿流鏑指西方出了者即付使被獻御劔

已下室物了諸社又如

廿日甲戌有內侍所臨時御神樂依追討御祈也

三月廿四日丁未於長門門司關為源軍平氏悉

被責落了前帝外祖母二品奉抱知主沒海中內

大臣父子平大納言時忠卿父子前內藏頭信基

百練抄卷十

七

等生虜也女房建禮門院已下存命云々

廿六日己酉於賀茂社一日大般若經書寫供養

上人之勸進也自院有御結緣云々

四月四日丁巳廣瀨龍田祭也

今日追討平氏之由言上去三月廿四日於長門門司關合戰前內

大臣宗盛已下多生虜之云々

廿二日乙亥攝政賀茂詣也權大納言實房卿已

下公卿十七人扈從

廿五日戊寅戌時神鏡璽自鳥羽入御座朝所權

中納言經房卿參議泰通卿權弁兼忠朝臣已下

次將等供奉大夫判官義經等奉相具若宮御入洛侍從信清相具院御車奉迎云々

廿六日己卯前內大臣宗盛已下入京見物輩成

群云々內府淨衣駕車上簾開右衛門督同車平

大納言連軒著淨衣上車簾開信基朝臣被疵不被

渡大路云々

廿七日庚辰自關院行幸大內內侍所自官朝所

渡御溫明殿自今夜三々日有御神樂事神璽同

奉渡也正四位下源賴朝朝臣依追討賞叙從二

位

百練抄卷十

八

五月七日己丑前內大臣已下生虜等下遣關東

廿日壬寅權大納言兼房卿參入宣下流人等前

大納言時忠卿能登前內藏頭信基備後

六月十二日癸亥源二位狀云謀反之輩所知所

帶改替他人可計置云々

十九日庚午同狀到來而云諸因惣追捕使事平

家追討未斷之間暫雖成置其職於今者可令停

止之由所令下知也云々

廿日辛未法皇御幸日吉社內大臣已下供奉有

舞人又明日於社頭可有競馬被具乘虎十人非

一負御幸乘尾供奉今度始也

廿一日壬申法皇於日吉社競馬

今日因忌廢務也前內大臣并右衛門督清宗於近江國勢多邊斬首云々三位中將重衡於南都

又斬首法華寺鳥居前合戰之時於此所加下知也云々

廿三日甲戌前內大臣并右衛門督清宗等首檢非違使請取之懸獄門樹法皇於三條東洞院御

見物可梟被首哉否事被尋三墓相云云

七月九日庚寅午時地大震其声如雷震動之間已送時刻其後連々不絕宮城瓦垣并京中民屋

百練抄卷十

九

或破損或顛倒一取而不完全就中大內日花門閑院西邊廊顛倒法勝寺阿弥陀堂顛倒九重塔破損三面築垣皆以頽壞南庭儲幄為御所自今日三介日囑三口僧於御殿有大般若御讀經依此御祈也

八月四日甲寅北野祭被付社家地震穢氣之間諸司不供奉也

七日丁巳釋奠延引依世間攝也自去月九日連

日地震于今不絕

十三日癸亥被立九社奉幣使依地震御祈也

十四日甲子有改元依地震也

今日有除目義經兼伊豫守伊豆守源義範相摸守同惟義上總及同義兼信濃守同遠光越後守同義賢

十七日丁卯釋奠也

廿五日乙亥行幸鳥羽殿來廿八日東大寺大佛可有開眼依大將軍遊行方忌也

廿八日戊寅雨降今日東大寺大佛開眼也法皇

自昨日御幸已刻左大臣經宗權大納言宗家卿已下泰入開眼師定遍僧正法皇自令開眼御云々咒

百練抄卷十

十

願權僧正信圓導師權大僧都覺宣今日式左大臣被作進也

九月四日甲申被行非常赦依東大寺大佛開眼也去月廿八日法皇御南京攝政坐宇治無人施

行仍今日行之

十月十五日甲子法皇御幸石清水內大臣已下供奉舞人等如日吉御幸

十七日丙寅今日被下源二品追討宣旨云々延

尉義經雖申行上皇都無御義引而再三申之難

治之間忽有公卿會議經宗宣定左內兩府已下諸卿多泰

入各申云平家義仲等之時事雖不起於叡慮隨彼等申請被下件宜旨了今又如此不可有異儀者仍宜下云々藏人頭右大臣經宗今夜子刻許義經宅六條軍兵等自四方政寄之有夜打之企義經忽合戰襲來之勇士皆悉逃散了此間院中騷動四面門等被閉了義經進使云奇怪之輩追散了不可驚思食者件張本者字土佐房云々

廿八日源二位依申請可令補諸國守護之由被下院宜云々彼代官北条四郎時政上洛

百練抄卷十

十一

四月十一日甲午左大臣已下參入有改元事建久字文章博士光輔朝臣勘申

十四日丁酉賀茂祭也右兵衛督能保卿室去夜於一条室町逝去今日祭路有沙汰隱岐守師尚朝臣申云忠能卿於一条万里小路堂薨之時不致祭路云々仍今日供奉人如例

廿二日乙巳以母儀從三位藤原植子奉号七条院去十九日准后實定

廿六日己酉左大臣已下參入有立后事以女御從三位仕子為中宮

廿八日丁丑右大臣蒙內覽宜旨從關東議奏云云

二年正月一日庚辰院并撰政家無拜禮事

五日甲申叙位停止依內覽事不可行直廬儀之由被申之右府又非撰政不及叙位議之趣被申也兩方泰差空以延引

十六日乙未無踏哥節會依御忌月也

三月十二日庚寅以右大臣可為撰政氏長者之由被仰下

四月十六日被召返流人等前大藏卿泰經卿前刑部卿賴經朝臣

百練抄卷十

十二

五月廿三日庚子初齋宮東河入御左近府

六月二日戊申祈雨廿二社奉幣也

七月十七日壬辰大外記師尚令勘申白鳥例去此白鳥出来云々

閏七月十四日己未祈年穀奉幣也

八月十三日丙戌法皇御幸天王寺三七日薨御也可被修御逆修并万燈會云々

九月廿八日辛未伊勢齋王入御野宮

十月廿一日甲午被立宇佐宮使定康黃金御躰被返納也日來宿納石清水宮云々

十一月一日甲辰義經改名從關東令頒申事云云

十二月一日甲戌天皇御書始也參議兼光卿奉授御注孝經文章博士光輔朝臣為尚儀

同三年正月一日癸卯身夜雪降當新春之初呈豐年之瑞乎後天晴有拜禮等

三日乙巳風雪甚烈橫政家臨時客也

十九日辛酉法皇御幸賀茂社入夜雷鳴

二月廿七日己巳御書所作文也

廿八日庚子始置記錄所弁官已下諸道輩被定

百練抄卷十

十三

寄人

四月九日庚辰春日山鳴動云々

十四日乙酉賀茂祭近衛使右少將信清於御殿

飭馬引馬可被御覽殿下令候給賴武為布衣者

不可入武官奉奏教助可引々馬之由殿下被仰

下而吐惡口不引之間殿下以藏人并親經被申

院仍及黃昏行粧當色已下其姿不詳云云皇后

宮使藏人右衛門權佐兼權大進定經勤仕之共

侍廿餘人左衛門尉能盛已下衛府上日者  
二人雖中諸宮侍依此間停止了

廿三日甲午權大納言實家卿奏入行尊号事先帝

号安徳天皇

六月廿三日壬辰御卜奏也式日依無龜甲延引

廿八日戊戌右大臣已下奏入被定院号皇后宮

為殷富門院

七月廿日己未奉幣七社依宝劔御祈也今日被

遣勅使於長門国且被祈謝為令搜索也神祇大

祐卜部兼衡大藏少輔安倍泰成等為使前安藝

守佐伯景弘去比下向景弘合戰之時在彼国存

知宝劔沈沒之所云々

九月十八日丙辰齋宮群行也天皇行幸官廳

百練抄卷十

十四

十一月七日甲辰石清水行幸也還御之間於鳥

羽殿有朝覲之禮

十四日辛亥賀茂行幸也

十九日丙辰豐明節會也子刻大雨大風雷電人

以驚所也

廿四日辛酉賀茂臨時祭也

今日被行軒廊御卜去十九日雷事也

同四年正月一日丁酉節會依御忌月無出御并音

樂

廿七日癸亥橫政春日詣也明後日興福寺金堂



上棟云々内大臣已下扈從

廿九日乙丑興福寺上棟也

二月十二日戊寅九郎義經在出羽國之由國司言上

言上

四月六日壬申松尾平野祭等依内裏穢延引

八日甲戌於延曆寺被行千僧御讀經

十三日己卯六条西洞院法皇御所燒亡御參籠

今熊野之間也

五月十六日辛亥日吉社祢宜成仲結構九十賀

好士多以行向可然之卿相送和哥云々

百練抄卷十

十五

廿四日己未依臨疾御祈行三所大穢

六月十日甲戌御卜奏延引依本官穢也

七月十一日乙己御卜奏也式日依穢延引

八月一日甲子祈年穀奉幣也

同五年正月一日壬辰節會如例

二月一日辛酉日蝕正現

三月八日戊戌關東二位卿進奏平請文到來義經

在真及之由義伏狀

四月十三日按察朝方并子息侍從兼出雲守朝

經等解官源二位有訪申之旨云々

閏四月五日朝方卿聽出仕同八日朝經任出雲守

六月一日己丑義顯一年卅去四月晦日於奥劔追

討之由言上

十五日癸卯祇園臨時祭也今日可有月蝕之由

曆道勘奏而算博士行衡申不可正現之旨於攝

政家議定遂以不正現云々

廿六日甲寅宝劔未歸坐何様可被行哉之由可

進法家勘文云云

七月廿日戊寅上西門院崩春秋十六

百練抄卷十

十六

十一月十一日丁酉權大納言實家卿奏入奏上

西門院遺令自今日廢朝三日

十二日戊戌討泰衡之由言上去八月二位卿申

請宜旨不經幾程忽得魁首兵謀之至古今無類

者歟

十七日癸卯法皇令脫上西門院御服給

廿九日乙卯春日行幸也

十二月廿二日丁未法務大僧正金玄蒙牛車宣

旨

建久九年

文治六年四月十一日改元依明年三合也

元年正月三日戊午天皇於紫宸殿御元服春秋十一月攝政太政大臣加冠內藏頭範能朝臣理髮

十一日丙寅從三位藤原朝臣任子入內實數攝政月

卿雲客多以扈從

十六日辛未女御宜旨也

廿七日壬午朝觀行幸也

三月四日戊午被補天台座主前僧正依為園城寺門徒山僧不兼伏之云々勅使少納言賴房不

及登山云々

七日辛酉以法印顯真被補座主

百練抄卷十

十七

四月十一日甲午左大臣已下參入有改元事建久字文章博士光輔朝臣勘申

十四日丁酉賀茂祭也右兵衛督能保卿室去夜於一条室町逝去今日祭路有沙汰隱岐守師尚

朝臣申云忠能卿於一条万里小路堂薨之時不

改祭路云々仍今日供奉人如例

廿二日乙巳以母儀從三位藤原植子奉号七条

院去十九日准后實定

廿六日己酉左大臣已下參入有立后事以女御從三位

任子為中宮中宮

五月七日庚申大納言兼房卿參入被定伊勢奉幣日時依太神宮心柱顛倒事也又自今日五箇日廢朝

日廢朝

七月五日丁巳今日未時雷落關白大炊御門第

良角槐上不雨降雷只一声也頗為奇

八月廿日壬寅感神院拜殿內有犬行道事遣御藏小舍人被實檢云々

十月一日壬午法皇於日吉社被行平僧御讀經

權中納言通親卿於仗座被仰敕令事實房兼權

十九日庚子東大寺上棟也攝政并左右大臣已

百練抄卷十

十八

下參入法皇御幸

十一月七日丁巳從二位賴朝卿上洛法皇有御見物事

九日己未權中納言兼光卿參入被行小除日賴朝卿任權大納言即蒙勅授帶劔宜旨

廿四日甲戌中納言通親卿參入以賴朝卿任右大將

十二月一日辛巳右大將拜賀裝束已下自院被調遣左近府生秦兼平為番長同府生播磨貞弘為下臈隨身三日去兩職

十四日甲午下向關東今日無官之輩十人被任  
勲員尉討秦衡之功賞也

同二年正月五日甲寅叙位如例今日山會日也不  
被俾也

二月十五日甲午於攝政直廬被定新制事大納  
言忠親卿已下參入藏人頭大藏卿宗賴朝臣執  
筆

四月一日戊寅前因幡守中原廣元刺任明法博  
士并左衛門大尉蒙使宜首經家之人任廷尉希  
代事也

百練抄卷十

十九

廿六日癸卯天台衆徒奉昇日吉祇園北野等神  
輿秦陣頭訴申字佐々木太郎定綱於江列去比  
敘害神人宮仕等可被處罪科之由也攝政已下  
泰内武士廷尉等參陣邊加制止各奉置神輿神  
人等分散了

廿七日甲辰遣官使於祇園別當御可奉迎神輿  
之由入夜北野神輿飯御又及鷄鳴日吉祇園神  
輿等奉渡祇園社云々

廿八日乙巳右近大將賴實卿可召進定綱之由  
被下宜旨於使廳入山僧綱等登山諷諫衆徒云

云

卅日丁未權中納言泰通卿參入被定流人源定  
綱薩摩同弘綱隱岐同定重對馬同定高土佐定  
綱郎等三人被禁獄云々

五月一日戊申被立三社北日祇奉幣使被祈申神  
輿間事

十六日癸亥神祇權少副親廣泰籠本官可祈雨  
之由被仰下又被行孔雀經法

六月十日丁亥御卜奏也

未刻六条萱御所并上西門院終焉御所等燒亡

百練抄卷十

二十

廿七日癸卯以觀子内親王為宣陽門院又母儀  
高階業子叙從三位自親王院号以八條院例也  
九月十八日甲子天王寺念佛堂并局等燒亡失  
火云々其時為法皇御所仍頭大藏卿宗賴朝臣  
為勅使馳參云々

廿一日丁卯奉幣被献閑院皇居南庭櫻非時花  
開之間御祈也

十月九日甲申七条第朱雀邊有異產事女子三  
人生云

十一月九日甲寅被立八十島祭使侍從三位藤

原保子藏人左衛門尉源仲景

十一日丙辰八十嶋祭也宮主神祇權大祐兼基  
陰陽助濟憲等向祭庭云々

廿二日丁卯新嘗祭也此間齋宮寮穢及神宮云々  
然而新嘗祭依無奉幣被行之其理如何倩案之  
理猶不可然尤可延引歟

十二月八日壬午松尾行幸也

同十三日丁亥北野行幸也

十七日辛卯攝政被上復辟表次有關白詔又被  
下准攝政由宜旨

百練抄卷十

二十一

今日法皇召中原廣元親能等各給銀劔

閏十二月十七日辛酉入道左大臣實定薨年五  
十三

同三年正月十二日乙酉法皇被立伊勢公卿勅使

依御不豫也中納言源通親卿為使

二月四日丁未祈年祭也無白猪云々

十三日丙辰法皇依御不豫御祈被立日吉臨時

祭使右少弁資實草告文三位中將藤原忠經卿

為使舞人已下如賀茂臨時祭

三月十日壬午被發遣一代一度佛舍利使

十三日乙酉寅時法皇崩于六条殿准仁明例可

有亮陰之由被召仰了

十五日丁亥法皇出禮也以御平生之儀奉渡蓮

華王院東法花堂依御遺誠不被憚重日云々

十九日辛卯天皇御倚廬公卿已下給素服

四月一日壬寅無平座事

二日癸卯戌時天皇還御本殿可停止諸社祭之

由被宣下了

五月五日丙子皇居開院舊院六条曾菖蒲依嘉

兼例也

六月十三日癸丑今日於三条室町小屋引千僧

百練抄卷十

二十二

供之時定惠法親王為行路山下法師等有狼藉  
事云々

廿七日丁卯被閱蓮華王院宝藏御書自公家始

有御沙汰

七月十二日壬午今日天神御筆自蓮華王院被

返納外記局

八月一日辛丑北野御輿迎也仍奉昇出神輿之

處自三王子御輿蛇出來遷正殿御輿云々大炊

頭師尚勘申天仁二年八月一日御輿迎日黑蛇

死御輿中事及曉天令還御云々

十月十日己酉白河東光寺邊火事餘燭付法勝寺五大堂即抄消了

十一月廿日己丑五節停止依諒闇也

十六日甲寅依臨苑御祈被行三所大赦

同四年正月一日己巳依諒闇無小朝拜主上自一昨日御不豫苑瘡云々

二月廿九日丙寅藏人忠綱與外記清光兼業於陣口有喧嘩事依互無禮也而藏人以吉上令擊外記仍兩局五位以下參關白家訴申之忠綱除籍清光兼業被召籠畢

百練抄卷十

二十三

三月十三日丙辰故院御忌日也於六条殿被修

易茶羅供權僧正勝賢為阿闍梨讀衆卅口

十五日壬午諒闇終由大赦也主上又有御襖

廿五日壬辰今夜右獄囚十四人切破獄逃出云云

四月十二日戊申内大臣<sup>志親</sup>仰云前隱岐守中原師

尚第博士三善行衡左大史小槻隆職大外記中

原師直河内守小槻廣房大外記清原良業散位

中原国業明法博士明基等宜為伊勢二所太神

宮雜務評定寄人者

十三日己酉於太神宮上卿内大臣第寄人等評定神宮事

廿日丙辰御賀茂詣也

六月廿五日庚申被立春日一社奉幣使鹿島社

遷宮去年空延引事被謝申也

八月三日丁酉釋奠延引依太政官廳五体不具

穢也以中丁可行之由被宣下

<sup>四日從被宣下</sup>民部卿經房氏長者以後初入寺扈從人左

大弁宰相定長權右中弁定經朝臣藏人左京權

大夫光綱藏人右衛門權佐長房勘解由次官清

百練抄卷十

二十四

長前駟六人共侍卅余輩右佐隨兵二騎

十五日己酉放生會也神輿令下於極樂寺御之

間一日之中被修理御殿於木作者兼日用意之

木工寮修理職等二十八人檜皮二百余人各給

淨衣云々

九月十一日甲戌例幣延引依牛斃穢也

十四日丁丑例幣也

十月十一日甲辰日吉行幸也

十二月七日庚子六角堂燒亡件寺去康治二年

十二月燒亡之後久不逢此災觀音靈像寺僧奉

出之

十三日丙午被發遣宇佐使左馬權頭藤原範實

廿二日丙辰於延曆寺被行千僧御讀經藥師經

同五年二月十四日丙午今夜四條坊門油小路賀

茂社燒亡

三月九日庚午石清水臨時祭也今月者後白河

院登遐之月也臨時祭射禮賭弓可有憚歟之由

有沙汰去比被問官外記并前隱岐守中原師尚

朝臣等申狀不一同其中今月可被行之由師尚

被申有仗議遂今月被行之

百練抄卷十

二十五

十六日丁丑中宮行啓大原野社大臣已下供奉

東遊已下如行幸儀

廿六日丁亥夜半入道基房白第燒亡

四月十七日戊申申之時以後雨降關白賀茂詣也

大納言實宗卿已下扈從息男若君良輔騎馬前

駟

十八日賀茂祭也

中宮使藏人頭右大弁兼亮宗朝朝臣御扈從被賜之

車袖三八葉中小八葉例細代也

大弁為藏人頭勤仕諸宮使永兼經家卿為

龍

皇后宮權亮勤之彼時車無風流

飭馬右將曹中臣近武

引馬武殿下左府生下野武志

馬副八人龍口二薦景

褐衣濃打衣等如例自殿下給之

同調度懸八人上平禮檉花

件裝束調度等貫首給之各四人二重

馬八匹置黑鞍水豹切甘泥障縫物來敷紺地

藏人頭馬副龍口勤仕已足格也云々但頭

百練抄卷十

二十六

弁召具例永兼經家卿于時右大弁已後更

以無所見頭中將仁平伊實卿于時中以後

四十餘年已絕今度繼絕召具但難波淹口

六人被下馬部遂以勤仕云々

官掌二人職直為直東帶件裝束

御藏小舍人二人延久兼康布

弁侍二人康貞維利同布

雜色八人

藤上下面花田裏青山吹衣長治大藏卿殿

春宮使之時色也云々付掛子此風流忠隆



卿奉仕皇后宮使之時故九条戶部被相管  
之禪門意見云々

取物舍人四人黃朽葉上下付扇九崩  
黃朽此色長治例云々

管笠赤色御  
綾引物  
路頭行列黃昏之間處暗夜錦云々可謂無念歟  
近衛使右少將師經

餉馬籠

右大將番長下野敦近衛敦秀番長勤仕  
此役今度初例云々

雜色八人朽葉不付花  
似兼忘歟

百練抄卷十

二十七

使不向列見自西洞院抄出希代也黃昏之後不  
取松明見物者不知其色云々

五月十五日乙亥左大臣以下參入被定申賀茂  
神人與鞍馬寺住僧關諍事今夕史遲泰之間外  
記可勤掌燈之由上卿仰之而背上宣之間外記  
倫直被召籠了

六月十三日壬寅六角堂上棟也貴賤拳首結緣  
云々

七月五日甲子入唐上人采西在京上人能忍等  
令建立達磨宗之由風聞可被停止之旨天台宗

僧徒奏聞云々可從停止之趣被宣下云々

十九日戌寅權中納言卿通資參入被發遣祈雨兩

社奉幣使藏人為使被引獻東遊十列等也又神  
祇少副大中臣定輔朝臣參篋本官可祈雨之由  
被仰下

廿日己卯終日雨降農夫悅豫

廿三日壬午被立後白河院御廟山陵使彼御廟

去月廿日依鳴動支

廿八日丁亥民部卿經房卿被行御卜廣田社鳴  
動事也

百練抄卷十

二十八

八月十一日己亥禁裏中宮御方有和哥會關白  
并左大臣已下參入式部大輔光範獻題秋月契中

納言通親卿獻序代  
十七日乙巳八条東洞院八條院御所燒亡

廿四日辛巳關白下向南都為歷覽興福寺作事  
也又可被築南圓堂壇云々

九月九日丙申雷聲殊甚落所云々

今日法成寺惣社祭也

廿一日戊申關白春日詣也依興福寺供養也

廿二日己酉興福寺供養被准御齋會關白并太

政大臣<sup>兼房實方兼知</sup>左右大臣以下參向大僧正宗慶為<sup>三</sup>咒願權僧正覺憲為導師

十二月二日戊午稻荷祇園兩社行幸也

同六年正月二日戊子關白家臨時客也左大臣為尊者

二月廿五日北野御忌日彼宮寺本社卅日織出來也住所女一人死云々

廿九日乙酉行幸大内已時行幸神祇官被<sup>三</sup>立伊勢公卿勅使權大納言左近大將良經卿被<sup>三</sup>祈申東大寺供養事也

百鍊抄卷十

二十九

三月一日丙戌日蝕也

四日己丑前右大將賴朝卿自關東上洛見物輩貴賤成<sup>三</sup>群云々

十日乙未東大寺供養習禮也丑時行幸東大寺右大將賴實卿已下供奉

十一日丙申申時着御頓宮御所

十二日丁酉東大寺供養也導師權僧正覺憲咒願前權僧正勝賢關白并左大臣已下別惣禮未時大雨降雖為法會之寂中天地和合之徵也行事官以下有賞

十三日戊戌還御

廿八日癸丑於關白九条第被行學問料試題云庭柳拂哥席試衆九人<sup>信綱經衛淳高成宗忠資資高長倫宗賢棟房并</sup>兩翰林評判

廿九日甲寅惟明親王為七條院御猶子於彼御所元服左府為加冠左中將親範朝臣為理髮藏人左少將公定為勅使泰向被<sup>三</sup>叙三品

四月十七日壬申關白賀茂詣也左大將<sup>長經</sup>已下公卿十四人扈從

百鍊抄卷十

三十

頭事於殿上被議定云々

六月一日甲寅殿上人十五人依不仕被除籍九日辛卯被<sup>三</sup>發遣十三社奉幣使依中宮御產御祈也

八月十二日甲子中宮御產氣云々仍月卿雲客叅集

十三日乙丑雨降辰時中宮御平產<sup>皇女</sup>十五日丁卯放生會也中納言親信卿參議實明等叅向權中納言親宗卿叅陣被<sup>三</sup>立内藏寮掃部助有負給宣命

十月十三日甲子中宮御產以後始入內姬宮同入內

卅日辛巳關白於春日社有競馬十番有音樂勝負舞等

同七年二月四日甲寅祈年祭也兼日於記錄所殊有沙汰召諸司諸国沙汰人被誠仰幣物如法被注行也

廿三日癸酉嵯峨釋迦堂修葺之後遂供養

四月十四日賀茂祭也

中宮使右衛門權佐兼大進宗方

百練抄卷十

三十一

龍

飭馬殿下左府生下野忠武同右府生秦賴武

引馬殿下左番長秦清弘景同府生秦行弘

近衛使左中將親能朝臣

龍左將曹中臣近武右將曹下野武安

引馬左大將府生中臣武友同番長秦賴次

典侍光子別當光雅女

十五日甲子吉田祭也今日本宮權大進藤原仲賴被下左衛門弓場是去比於左兵衛督高能卿家陵辱筑後前司景良之故也先被下解官宜貴

廿三日壬申御賀茂詣也

六月廿六日甲戌被行定惠法親王薨奏廢朝三

今日着御錫紵云々

七月八日乙酉雷落宮城二条西大坂上

廿一日戊戌朱雀藻壁偉鑒等門上棟也

八月十七日甲子雷雨殊太亥時中納言隆房卿

八条堀川堂為雷火燒亡

十月廿五日庚午行幸石清水宮

十一月二日丁丑後白河院法華堂僧房燒亡

五日庚辰行幸賀茂社

百練抄卷十

三十二

廿五日庚子停關白前太政大臣職以前攝政藤

原朝臣可為氏長者并關白之由被宣下

廿九日甲辰被立宇佐使安藝守宗行

十二月廿五日庚午四宗寺法花會終也又春日

社正遷宮也右中弁宗隆朝臣為行事

同八年四月廿二日乙丑朝覲行幸也

廿七日庚午兼仁法親王薨

五月四日丁丑兼仁法親王薨奏也廢朝三今日

主上着御錫紵云々

閏六月廿五日丁酉雨降雷落所々又依暴風東

大寺廻廊百十三間顛倒

十月廿日己丑關白春日詣也

十二月十八日丙戌被立廿一社奉幣使依明年

正朔日蝕也

同九年正月一日己亥依日蝕不被行節會也

二日庚子今日被行節會也右大臣為內弁先是

有小朝拜

九日丁未天皇遷幸大炊殿內侍所同渡御

十一日己酉讓位於第一皇子春秋四歲無親王御名為仁

宜肯立坊事先是渡御閑院戌時被渡劔璽關白

百練抄卷十

三十三

以下步儀警固固關如常改關白為攝政璽劔渡

御之間見物車濟々焉無先規事歟

四月十八日賀茂祭也

皇后宮使亮公賴

駕院御馬馬副張口

引馬

龍

院左府生秦兼直同右番長中臣近春近衛使左少將雅親朝臣忽被聽禁色父為納言其例稀也

龍

飭馬

院左將曹中臣近武同右將曹秦賴澄

引馬院右府生秦賴秀同類次

十一月十八日天晴新大納言經房拜賀儀先一

家人々廿四人少將成實宣朝臣已下也

次諸大夫六人邦範朝臣已下內院諸女院殿上人

次參議實經駕車扈從葉室入道大納言不具一

家前駟諸大夫六人偷以拜賀當時按察使白晝

一家前駟十八人公卿扈從仍折中兩度例相具

一家前駟伴公卿一人屬夜景泰廻云々

百練抄卷十

三十四

以下步儀警固固關如常改關白為攝政璽劔渡

百練抄卷第十一

土御門院十二年

正治二  
建永一

建仁三  
養元四

元久二

百練抄卷十一

一

土御門院諱為仁十二年

後鳥羽院第一皇子御母兼明門院太子內大臣源通親公女實能

國法建久九年正月十一日受禪四歲同日以攝政

基通更為攝政同三月三日於官廳即位同十月廿七日御襖同十一月廿二日大嘗會養元四年十月廿五日讓位兼久三年閏十月十日奉還

土佐國廿同十四日奉還阿波國

正治二年建久十年四月廿七日為正治元年依代始也

元年己未正月一日雨降申時雷鳴今日可有日蝕

之由曆道載御曆而算道行衡長衡等申不可正

百練抄卷十一

二

現之由兩道申狀真偽難決隨蝕之現否可節會之由被仰下之處終日雨降入夜天晴有節會

五日攝政依所勞不出仕仍於伏座被行叙位儀

十三日前右大將賴朝卿薨年十五依所勞去十一

日出家

十八日蓮華王院修正依賴朝卿事無御幸被止

咒師猿樂等

廿五日故賴朝卿家人隨右近中將賴家可奉仕

諸國守護之由宣下

廿六日被行軒廊御卜天智天皇山陵去十九日

鳴動事也

卅日被行軒廊御卜關東穢觸來否事也觸穢之由卜申之間來月諸社祭次支干行之祈年祭以吉日可行之由被宣下

二月二日寅時石清水山上新迦堂西三條堂院御大塔小塔院御待賢門報恩寺鐘樓等燒失

六日雷鳴

十四日武士等相具左衛門尉中原政經藤原基清小野義賢泰院御所是件三人可亂世間之由有其聞之故也各預賜武士

百練抄卷十一

三

三月十九日文覺上人配流佐渡國

四月廿七日有改元事改建久十年為正治元年五月廿一日被行流人事源隆保朝臣遣土佐國僧有慶遣淡路國

六月十三日天皇行幸大內

十八日右大將通親卿被蒙任大臣兼宣旨

卅日於神泉苑被行孔雀經御讀經

七月廿五日有伏議伊勢太神宮末社小朝熊社岩上御鏡紛失事也

八月三日於神泉苑被始孔雀經御讀經依祈雨

也

四日大納言經房後初入寺扈從人新宰相定經宮內少輔能元同車右中弁長房朝臣藏人勘解由次官清長左衛門權佐光親參河守資經八人後騎左兵衛尉重繼共侍三十二人左佐隨兵三騎

十六日被發遣公卿敕使權大納言通資卿勸之九月廿日被立十社奉幣使依霖雨御祈也廿三日被行除目并僧事

廿六日限三十日於東大興福延曆等寺可讀仁

百練抄卷十一

四

王經之由被仰下是霖雨御祈也

十月廿六日於南殿以六十僧被始行大般若御讀經明年三合御祈也

十一月十七日上皇御幸日吉祇園北野

廿七日天皇為朝觀行幸上皇御在所二条殿廿九日於八条院一品宮有御著袴事

十二月十三日從三位源在子母儀有准后事

十六日被下親王宣旨長仁

二年庚申二月十日長仁親王御著袴

十三日上皇御幸石清水北野賀茂等



十四日御幸日吉祇園稻荷等社

十六日內大臣室通親供養押小路京極堂上皇密々

有御幸御馬一匹御牛一頭被引導導師云々

三月十五日石清水臨時祭延引是自去十二日

依有院御所五休不具穢也

廿日七条院雅子令入熊野精進屋給

廿一日上皇御幸南京

廿二日御幸春日社

四月十五日有順德太子之事

廿五日五条天神被奉授二階

百練抄卷十一

五

五月十日被發遣廿二社奉幣使世間不靜御祈也

廿六日初齋宮肅子入御諸司

六月十日東宮初行啓

廿五日流人有宣下事左衛門尉藤能宗

七月十九日於神泉苑被始行孔雀經御讀經依

祈雨也

八月廿九日三々日廢朝是依從三位範子去四

日薨也

九月十一日修明二位殿御產皇子

十月十七日殷富門院安井御所御堂供養上皇并宣陽門院御幸觀子

廿八日宜秋門院御幸始修子

十一月□日於宣陽門院御所有雅成今宮御五十日

事

廿一日有東宮御著袴事

廿二日上皇入御熊野御精進屋廿八日同御進

發

十二月廿一日今宮有御百日事上皇御幸

廿五日有一代一度大神宝事

百練抄卷十一

六

建仁三年正治三年二月十三日為建仁元年依幸旨也

元年正月廿三日天皇為朝觀行幸上皇御在所今

夜越後國住人城四郎平長茂自關東馳上申賜

宣旨可征伐將軍賴家之由上皇偷御幸他所無

返答人仍逃脫不知行方

二月廿五日城四郎長茂首并即從首生虜五人

給獄所於生虜五人者召出被梟首

廿六日道法法親王牛車宣旨依孔雀經法勸賞

也

四月十九日今日鳥羽南殿御移徙也

廿一日上皇鳥羽北殿御移徙也

六月廿七日於法勝寺被行千僧御讀經

九月九日齋宮齋子群行也仍天皇行幸太政官廳

廿日天王寺塔供養也上皇有御幸

廿一日於渡邊東大寺上人行道講上皇有御幸

廿九日今夜市屋廳并近邊小屋等燒亡

十月五日上皇御熊野詣也

廿六日上皇自熊野御還向

十一月三日寅時雷鳴

廿七日今日上皇第二皇子長仁為仁和寺御室御弟

百鍊抄卷十一

七

子初入御

十二月四日被癸遣公卿敕使內大臣通親勤仕之

十八日今日春宮行啓安并殿是依殿富門院御

猶子儀也

十九日今日春宮還御二条殿

廿七日被行軒廊御卜是依齋宮御不豫事

二年正月九日上皇被進神馬於十七社

十五日院号定以源在子為義明門院今上母儀

廿七日義明門院々号之後初御入內有勸賞

二月二日今日義明門院殿上始也

廿六日太上天皇臨幸石清水宮諸衛一負并舞人等供奉於宮寺有競馬事勅使奏議右中將家經卿奏向被行勸賞

廿八日太上天皇臨幸賀茂社同石清水儀

四月廿八日今宮於六条殿有御魚味事仍上皇臨幸

六月十六日今夕天皇行幸閑院內侍所同以渡

御

七月十三日以法印實全被補天台座主

八月廿八日御書所作文

百鍊抄卷十一

八

廿五日上皇被進神馬於十社

十月十九日上皇御移徙京極殿

廿日上皇自京極殿始御幸七条院御在所三条殿

廿一日內大臣通親薨去

廿六日內大臣薨奏

閏十月十六日任大臣召仰事大納言藤原隆忠

卿

廿日任大臣節會

十一月一日朔且冬至旬也

十九日被行朔旦冬至叙位

十二月四日被發遣宇佐使兵部權少輔平棟基

廿五日權中納言兼忠卿參議公定朝臣參陣有  
良註左大臣攝政詔書事

三年正月四日上皇臨幸七条院御在所三条殿二

条殿同渡御別御車也

十二日上皇御幸法勝寺依修正也

十七日今日上皇御幸水無瀬殿暫可為御所云

廿六日云今日風雨雷鳴

百練抄卷十一

九

二月四日依內裏五体不具穢祈年祭并大原野

祭延引

十三日攝政子息道家於宜秋門院御在所九条殿加

元服被下禁色宣旨叙正五位下

十九日今晚上皇御幸日吉社

三月十日上皇御進祭南山

十二日今日聖護院宮御入威

十五日今晚月蝕

十九日是日上皇可有熊野御奉幣之處於瀧尻  
乍聞召宮御事御參著本宮過廿今日之後來月

五日御奉幣

四月一日日蝕

五月十日上皇渡御水無瀬殿

廿五日自水無瀬殿還御

廿七日上皇於法勝寺有八万四千基塔供養事

大僧正慈圓為導師有舞樂勸賞事上皇臨幸寺

門之間御隨身近春落馬卒去

廿八日權中納言定輔卿參入被行流人事是破

上宮太子御墓犯用御齒之僧侶二人淨戒遠備

違周伴軍可處遠流而東大寺上人申請配知行

百練抄卷十一

十

國

六月廿三日依霖雨被立六社奉幣被行御卜之

處當成崇方角神社也

廿五日前左馬頭隆保復本位

七月九日上皇御進祭熊野御山

十六日攝政參詣春日社

十八日自春日御還向

十月廿九日未時許自六条坊門高倉邊燒亡出

來及河原院并鎌倉前右大將賴朝卿亭

十一月十日上皇二条殿移徙御幸也

十一日上皇始御幸七条院御在所三条殿  
十八日被立山陵使是依東大寺供養御祈也  
廿五日中納言公房卿奏入被發遣石清水東大  
寺鎮守八幡別宮日吉社奉幣使是石清水并八  
幡宮別宮者依東大寺供養御祈被立之日吉社  
者依謝申八王子三宮等燒亡也今日上皇三社  
御幸試樂号御馬御覽也又於鳥羽殿有競馬事  
廿六日上皇御幸南都  
廿七日上皇御幸春日社  
廿八日於春日社有競馬事

百鍊抄卷十一

十一

卅日被供養東大寺仍上皇御幸  
十二月二日丑時上皇御在所二条東洞院有燒  
亡事  
四日上皇御移徙宇治新御所  
十四日上皇御幸梶井御所  
十五日上皇御幸日吉社十六日還御  
廿二日上皇御幸北野宮  
元久二年<sub>建仁四年二月廿</sub>  
元年甲子正月五日上皇御幸八条院  
九日今日上皇皇子被下親王宣旨<sub>御名於宣陽</sub>

門院御所有御著袴事上皇御幸攝政右大臣已  
下參入有御遊  
十八日上皇御幸行願寺以御太刀一腰被修御  
誦經  
廿六日兼明門院有御入内  
二月十二日上皇御幸行願寺御誦經師別當大  
法師道誓可叙法橋之由被仰下之  
十六日大納言忠良卿奏陣被行軒廊御卜<sub>依伊勢事</sub>  
是日於上皇御在所京極殿被始修仁王經法仁

百鍊抄卷十一

十二

和寺法親王為大阿闍梨  
廿七日今宮侍并廳始也  
卅日有革令并改元定改建仁四年為元久元年  
三月廿九日内大臣以下諸卿奏陣有仗議是日  
吉杜八王子三宮等御休燒失可被造否事也  
今日東大寺御塔亥始日時又被行造寺官除目  
四月一日攝政子息從五位上藤原教家今日加  
元服  
二日<sub>修明</sub>二位殿御產皇子降誕  
五日東大寺御塔事始也

十一日日吉社御輿被奉送之院司藏人頭在中  
辨長房朝臣

同日八王子三宮等遷宮也造國司藏人木二頭  
源兼定

六月廿三日有初齋院卜定事先被下親王宣旨

子禮

七月十七日於土皇御在所大炊御門京極殿有

今宮御百日事

廿九日上皇新御所五辻殿御裝束始之又被始  
修安鎮法

百練抄卷十一

十三

八月八日今日上皇新御所五辻殿御移徙御幸  
也

十二日上皇自新御所始御幸七条院御在所三  
条殿

廿三日被發遣公卿勅使權大納言公房卿

九月十六日月蝕皆虧

十七日上皇御熊野詣也

十月十五日女房卿三位供養白川中山新堂依

為院御祈願所上皇并七条院有御幸

廿七日於攝政直廬有御元服定事

十一月三日今日天皇行幸石清水宮  
七日上皇御幸行願寺

十三日天皇行幸賀茂社

十二月十一日殷富門院三々日御逆修結願也

十四日有任大臣節會權大納言兼良卿

廿二日今日被勅御元服日時

廿六日今日朱雀門被懸額又是日被立倚子於  
官外記廳

廿七日今日天皇遷幸大内内侍所同渡御被行  
造營行事賞

百練抄卷十一

十四

二年正月三日主上御元服

四日御元服後宴也

十九日主上為朝覲行幸上皇御在所京極殿

二月八日宣陽門院御幸日吉社

十一日今夕主上行幸中院第内侍所同渡御

三月一日有宣下以無位藤原麗子謀別叙從三位

十二日上皇御幸石清水賀茂

十三日今日宣陽門院有御出家戒師仁和寺御

室

十五日今夜月蝕

十九日於行願寺有一切經會事

廿六日春宮自押小路第行啓上皇御在所

四月三日主上行幸大内

七日女御有入内事

十三日今日女御有露顯事主上渡御女御御方

又被下女御宣旨政所并侍始

十七日主上行幸中院第

廿八日初齋院入御諸司

六月廿九日今夕主上行幸大炊殿

七月十三日於神泉苑被始行祈雨孔雀經御讀

百練抄卷十一 十五

經東寺三長者隆遍為大阿闍梨

廿日中宮<sup>陰明</sup>立后之後有御入内

廿二日是日依祈雨於東寺被始修孔雀經法大

僧正延景為大阿闍梨

閏七月三日宇治上皇御所燒亡

七日依祈雨被始修孔雀經御修法

十四日被行孔雀經法勸賞事

廿六日被追討右衛門督源朝雅

八月十三日上皇水無瀬殿御所御移徙也

十五日石清水放生會依京中穢延引

十六日月蝕

廿八日今日天皇遷幸閑院

廿九日被去八十島祭使御乳母典侍前大納言

隆房卿娘上皇於鳥羽殿有御見物

九月十五日石清水放生會

十月二日今日午時叡山有炎上講堂文殊樓已

下燒亡

廿六日被立日吉杜奉幣使依被謝申叡山火事

也

十一月三日今日攝政於新第有作文和哥遊事

百練抄卷十一 十六

八日七条院有御出家事仍上皇御幸

十六日中宮御入内

廿四日有任大臣節會權大納言兼良卿為内弁

新任内大臣不泰陣

十二月二日上皇高陽院殿御移徙也

三日上皇自高陽院始御幸七条院御在所三条

殿

八日被立宇佐使少納言源信定為使

建永元年

<sup>元久三年四月廿七日改元依赤斑磨也</sup>

正月十七日今日上皇御幸攝政中御門京極新



第

廿二日被發遣十二社奉幣使依庖瘡御祈也

二月一日日蝕

三月七日今晚攝政俄薨去八十

十日被下攝政詔

十六日有任大臣召仰事大納言忠經卿

十九日今日上皇御幸賀茂吉田社

廿二日今日上皇御幸北野宮并嵯峨法輪寺

廿八日任大臣節會也

四月十三日天台座主有拜堂事

百練抄卷十一

十七

十九日初齋院入御紫野院

廿七日有改元事為建永三年

五月四日被發遣廿二社奉幣使依庖瘡御祈也

廿六日被下皇太弟傳牛車宜首

廿八日被下攝政一座宜首

六月廿二日被行軒廊御卜是依齋院御不豫事

也即被立賀茂社奉幣使依同御祈也

八月三日上皇鳥羽殿新御所御移徙也

廿一日御靈祭也上皇中御門西洞院御棧鋪有

御見物

九月二日有院号定皇后宮職為坊門院

廿六日被立一代一度佛舍利使

十月七日被行請印政天台山造管文殊樓勸進

七道諸國官符也

八日被渡山堂衆黨類忌部五郎山伏一人上皇

有御見物

十七日仁和寺宮有御出家事仍上皇御幸喜多

院

廿六日仁和寺宮行啓南都是為御受戒也上皇

有御見物事

百練抄卷十一

十八

十一月二日今日於院御所有千度御被依上皇

御目不豫也

廿六日前攝政息被加首服名字

十二月五日被宣下皇太弟傳兵仗事

八日被下攝政為關白詔書

養元四年建永二年十月廿五

元年正月二日主上為朝覲行幸上皇御所高陽院

三日上皇御幸七条院

十六日月蝕

二月十日任大臣節會

三月一日前攝政并關白被渡宇治

七日今日上皇御幸賀茂社於上下和哥御會

十一日長講堂御八講五卷也上皇密々有御幸

廿二日上皇御幸高野山

四月廿七日上皇御幸新日吉社

六月七日有院号定有准后勅書事從二位藤原

親子号修明門院

十七日修明門院殿上始也

廿二日今日修明門院御幸始也自上皇御在所

高陽院御幸七条院御在所三条殿

百鍊抄卷十一

十九

七月十四日月蝕

十九日上皇御幸日吉社今夜御宿梶井

廿九日上皇自新御所始御幸七条院御在所三

条殿

八月十三日上皇御幸賀茂吉田等社

廿一日今日平野社假殿遷宮也

卅日定考主上依御庖瘡事被止舞樂

九月七日被發遣臨時廿二社奉幣使依庖瘡御

祈也

十四日今日上皇御幸清水寺於室前一日被轉

讀万卷觀音經

廿日二條町邊燒亡中宮御所并前太政大臣第

女房卿二位家等同時燒失

十月一日今晚上皇熊野御進發

廿四日上皇并七条院自南山還御

廿五日今日有改元定為建永元年

十一月廿三日最勝四天王院供養習禮仍上皇

御幸

廿七日上皇新御堂御所御移徙也

十二月十九日今日上皇御幸賀茂社於上下社

百鍊抄卷十一

二十

有御遊上皇御琵琶

二年正月三日上皇御幸七条院

廿九日中宮行啓春日社

二月九日上皇御幸最勝四天王院依修二月也

三月十日上皇御幸長講堂依御八講也

廿五日被發遣廿二社奉幣使依三合御祈也

今日最勝四天王院藥師堂奉居御佛

廿八日最勝四天王院內藥師堂供養也仍上皇

御幸七条院修明門院同渡御

四月廿七日被行軒廊御卜是依吉田社御裝束

鼠喰損事

閏四月四日守護國界陀羅尼咒經結願也有勸賞被引御馬二匹

八日被行軒廊御卜是依七月廿七日稻荷社御與宿屋無風顛倒也

十一日於南殿六十口僧被行大般若御讀經依三合御祈也

五月十二日被立多武峯使是為被謝申去二月燒亡事

十五日午時俄雷鳴雨降雷落法勝寺九重塔燒

百練抄卷十一

二十一

失仍上皇御幸寺門執行法印章玄見炎上於金

堂前絕入飯住房入滅

十六日院最勝講始也

今日長講堂供花也依六条殿燒失於土御門東

洞院御所被始之

廿日院寂勝講結願也

六月三日上皇御熊野詣

七月二日今日有任大臣召仰權大納言良輔卿

五日上皇自熊野御入洛

九日有任大臣節會

十九日今日上皇御幸新造巽崎御所移徙一夜之禮云々修明門院御同車

廿日是日上皇御幸始也

同日修明門院御幸始也

八月二日皇子被下親王宜省即於高陽院有御

着袴事有御遊上皇御琵琶關白笙前太政大臣

和琴左大臣笛右大臣箏右大將公繼卿拍子從

三位定季卿筆藏人頭右中將有雅朝臣付哥

今日一品宮行啓上皇御在所高陽院有立后定

云々

百練抄卷十一

二十二

八日立后節會也以昇子內親王為皇后宮

九月七日上皇交野御堂供養上皇密々有御幸

十八日五辻前齋院薨御年六十四

十九日被焚遣伊勢公卿勅使權中納言右衛門

督隆衡卿

廿七日今夜朱雀門燒亡

十月七日皇子被下親王宣旨御名朝仁

十四日皇后宮行啓京極第有勸賞事是日朝仁

親王始行啓七条院御所

今日朱雀門事始也院廳沙汰云々法勝寺九重

塔事始同前

廿四日前大僧正慈圓吉水大懺法院供養上皇  
密々<sup>有御幸</sup>

廿八日上皇於高陽院有御作文

十一月八日長講堂并御所等上棟

十四日上皇於高陽院今宮有御書始事

十五日上皇御幸賀茂社

廿七日閑院皇居燒亡仍主上行幸大內

十二月一日天皇行幸大炊殿

廿二日天皇行幸八条殿

百練抄卷十一

二十三

廿三日天皇行幸大內內侍所同渡御

是日春宮自高陽院行啓大內

同日中宮自冷泉院町御所行啓大內

廿五日有<sup>順德</sup>春宮御元服事即春宮行啓高陽院為

拜觀上皇也有御遊上皇琵琶關白笙

廿九日主上行幸大炊殿

三年正月四日上皇御幸七条院

十一日今日皇后宮行啓八条院

廿一日太政大臣上表

三月六日上皇御幸南都有春日社御奉幣

七日上皇御幸長谷寺并宇多郡內大野召仰

八日上皇還御奈良興福寺東大寺有御誦經事

九日上皇還御高陽院

十六日今日持明院宮<sup>尊良</sup>第一若宮為御受戒

有登山

十八日上皇被始行最勝講

廿三日春宮御息所入宮事

四月一日中宮行啓召仰入夜中宮自中山第行

啓冷泉亭

今日有任大臣兼宜旨<sup>右大將公繼卿</sup>

百練抄卷十一

二十四

九日今日有炎上行願寺誓願寺燒亡

十日任大臣節會

十七日今日春宮行啓京極殿

廿五日皇后宮自八条殿行啓京極殿

今日皇后宮有院号事為春花門院

六月九日今日於石清水宮有七番競馬仍上皇

御幸

十日今日上皇臨幸賀茂社有御神樂

十三日上皇御幸日吉社有競馬七番

十八日朱雀門柱等顛倒

七月十一日主上行幸權中納言隆衡卿冷泉万里小路第

廿一日朱雀門上棟

八月三日上皇渡御入道民部卿範光亭

廿二日有仗議太神宮穢氣也

廿三日今日被發遣七社奉幣使是依霖雨御祈也

九月八日被發遣太神宮御遷宮神宝已下金物

等

十一月十日主上遷幸大炊殿步儀也

百練抄卷十一

二十五

廿五日關白春日詣也三条中納言長兼卿乘車左扈從

卅日長兼卿記云春宮權大夫資實談予云春日

詣之時汝乘車左方人疑之云々予答曰車右可

為上之由見何書哉答曰御前弁別右此事太公

望乘車之右之心右為上之歟予答曰車以左為

上之条迎候羸之時史記注分明也太公望乘右

者以令同車為上也以右非上歟獨乘車為誰可

望左哉權大夫又不答春日詣翌日前權中納言

親送書狀云追候羸之跡乘左玆重之由示之戈

人猶可貴云々不知與旨之人謬難歟可嘆云々

十二月五日上皇御幸仁和寺依舍利會也

十七日被立石清水一社奉幣使依獻太刀袋也

廿日上皇高陽院御移徙御幸也

廿二日今日上皇御幸始也

四年正月廿日上皇渡御水無瀨殿先御幸祇園并八幡宮

八幡宮

廿六日關白被渡御新造土御門西洞院第

二月四日祈年祭依神宮卅日穢延引

廿三日長兼記云季長易塵相傳系圖善相公授

百練抄卷十一

二十六

舍弟日藏僧都日藏授仁海僧正僧正授茂範僧

都僧都授仁寬何闇梨阿闇梨授心也号弁心也

授少納言入道信西信西授季親季親授季長也

又一流善相公淨藏攝安忠允彦殆文替尋實少

納言入道入道受兩

廿九日上皇御所高陽院馬場殿屋燒失

三月二日皇子被下親王宣旨御名字

今日被供養六条殿內長講堂仍上皇有御幸

五日修明門院御幸春日社內大臣已下供奉

十九日今日有院慶子于定中宮為陰明門院

廿二日白川泉殿御所内屋一宇燒失

四月十二日坊門院崩御御年卅四

五月四日奏坊門院遺令

三日院最勝講始

六日強盜六十三人放火者少々被遣關東於二

条河原武士請取之上皇有御覽

七日於院御所高陽院被書寫供養一日法華經

十二日修明門院自南山御入洛

廿二日上皇有御熊野詣事

六月十四日上皇自南山御入洛

百鍊抄卷十一

二十七

七月十六日被立法勝寺九重塔心柱仍上皇御

幸寺門

八月八日被發遣春日行幸御祈廿二社奉幣使

廿日主上行幸春日社上皇有御見物

廿五日上皇皇子始渡御城東寺法印坊

今日上皇御幸水無瀬殿

九月四日上皇自水無瀬殿白地還御

五日上皇渡御水無瀬殿

十月三日去夜彗星出現坤方之由司天奏之云

云

五日二皇被獻神馬於伊勢内外宮八幡賀茂社是依天變御祈也

十三日天皇行幸大内内侍所同渡御

十四日上皇御熊野詣主上行幸大炊殿

十五日於南殿被始行大般若御讀經

十一月廿五日有御讓位事

十二月一日日蝕

五日御讓位以後政始也

今日被下上天皇尊号詔書

十日天皇行幸神祇官被立御即位由伊勢奉幣

百鍊抄卷十一

二十八

使

十二日於御前被行坊官除目

廿日天皇行幸大内

廿六日被行御即位叙位

廿八日於太政官廳有御即位事

廿九日被下女御宣旨後三位藤立子



百練抄卷第十二

佐渡院十一年  
不建之

建曆二  
建保六  
治八十日

兼久三年四月廿日受禪四歲

百練抄卷十二

一

佐渡院成諱十一年

後鳥羽院第二皇子御母脩明門院重子贈左大臣兼  
元四年十一月廿五日受禪同日以攝政家實為  
關白同年十二月一日御即位建曆元年十月廿  
二日御禊同年十一月八日春花門院昇子崩仍大嘗  
會延引同二年十月廿八日又御禊同年十一月  
十三日大嘗會兼久三年四月廿日讓位廿五同  
廿三日太上天皇尊号同年七月廿日渡御佐渡

建曆二年改元依御即位也  
兼久五年三月九日

百練抄卷十二

二

元年正月一日節會無出御是為御衰日之上未被  
行万機旬之故也

十九日朝覲行幸

廿二日有立后事以藤原主子為中宮

今日脩明門院有御入内

廿八日主上行幸大炊殿

閏正月五日終日甚雪降一尺二寸

卅日上皇御熊野詣後鳥羽

二月四日祈年祭延引依太神宮穢也

三月九日改元改建曆元年

廿日被立法勝寺九重塔第六重柱

廿一日上皇自水無瀬殿御幸石清水宮

廿二日上皇御幸石清水宮

廿三日上皇御幸石清水宮

今日殷富門院有御入内

四月七日上皇御幸賀茂社三ヶ日

十六日月蝕皆虧

十九日被立齋宮無子飯京之由伊勢奉幣使

廿三日上皇於寂勝四天王院一日被書寫供養

一切經仍昨日御幸此御所

百練抄卷十二

三

廿八日被立大奉幣使

五月八日被立伊勢奉幣使是被謝申去二月初

年祭并祈年穀奉幣等神宮雜穢之間數日不奉

納事也

十四日被始行院寂勝講

廿六日有贈官位事範季少納言源頭平持宣命

并位記等行向彼墓所

六月十一日月次神今食等依太神宮穢延引

廿一日依炎旱被行五龍祭

廿六日八条院崩御

七月十三日被始行孔雀經御修法

八月四日甚雨大風

十一日卜定大嘗會國郡近江丹波

十八日大嘗會行事所始

廿日於院殿上有群議是叡山學者與同堂衆相

論事

九月四日被發遣宇佐和氣使

七日山堂衆四百人許為院廳沙汰被居北山妙

見堂是為令勤行公家御所也年來蒙勅勘隱居

所々今蒙寬宥

百練抄卷十二

四

九日被發遣伊勢豐受太神宮御遷宮神宝已下

金物等使

今日上皇御幸東坂本掘井御所

十日上皇御幸日吉社

廿一日奏前八条院遺令

廿二日左大臣被上辞表有許容

廿五日有任大臣召仰事權大納言信清卿

十月四日任大臣節會也

十九日主上行幸大内中宮同行啓

廿二日大嘗會御楔行幸大炊御上皇御見物七門末

祭院并春花門院同渡御主上還御衆輿入御待賢門之間朱雀門額落善無風雨又非朽損万人奇之

十一月八日春花門院<sup>昇子</sup>崩御日來御邪氣云々

九日諸卿祭院御所被議定大禮間事

十一日關白以下泰集院御所大禮延引

十六日被奏前春花門院遺令今夕主上著御錫

紵被宣下諸社祭可停止之由同大嘗會被停止

今夜故春花門院御葬禮其所為羽殿云々

十七日五節停止

百練抄卷十二

五

廿三日主上遷幸三条殿仍女院渡御押小路殿

院御

卅日上皇熊野御進發也

十二月四日被立三社<sup>伊勢石清水賀茂</sup>奉幣使大嘗會

延引也

十三日被行万機旬

同二年二月三日上皇渡御水無瀬殿

五日修明門院御熊野詣御進發

廿五日行願寺供養

廿七日今夜盜人等燒切蓮花王院室倉戶犯取

御劔已下物等

三月五日自内裏被渡大學孔子御影為書寫也

廿二日被下新制廿一條宣旨

廿四日上皇御幸大内有白馬節會習禮事上皇

假為大臣大將令勤内并御

廿六日上皇自今日七ヶ日御參筆賀茂社<sup>下社</sup>

<sup>四ヶ日</sup>社

廿八日上皇於賀茂上下社有競馬事各五番

四月一日日蝕

十五日月蝕

百練抄卷十二

六

五月八日今夕上皇自水無瀬殿入御

九日新日吉小五月會上皇御幸

十一日於禁裏被合詩哥

十二日上皇渡御水無瀬殿

十四日被立止雨二社奉幣使

廿日大嘗會行事所始

今日上皇自水無瀬殿出御

廿三日被行流人事<sup>右衛門尉遣周防国法橋道範遣佐渡国</sup>

廿六日大嘗會卜合行事所始

廿九日於院御所被議定大嘗會御楔女御代有

無并播磨守忠細為重服身修造朱雀門事

六月五日至上行幸大內內侍所同渡御

廿日有任大臣兼宣旨權大納言  
道家卿

廿七日有詔書覆奏事是去年冬一切經供養并贈左大臣詔書等也

今日有免者事上皇御祈七佛藥師法結願也

廿九日有任大臣節會

卅日被行大嘗會悠紀主基官符

七月六日上皇御幸法勝寺依御八講也

八日已時四條室町有燒亡仍關白并內大臣道家以

百鍊抄卷十二

七

下馳參內裏

八月六日上皇御幸日吉社

廿四日上皇御熊野詣

九月四日賀茂齋內親王禮子依御不例火急令退下

給

十一日例幣延引之由有大綬是依太神宮穢也

廿八日被立賀茂社奉幣使是依被告申齋內親

王退下之由也

十月十六日月蝕

廿三日天皇上皇行幸御幸高陽院

廿五日主上行幸大內

廿八日天皇依大嘗會御禊行幸三條末河原上

皇有御見物七條院修明門院同渡御

十一月一日被改定大嘗會由三社奉幣日時使等

十三日大嘗會仍天皇行幸廻立殿

十二月廿二日被行親王叙品位記請印今日於

上皇御所高陽院有御元服事

建保六年建曆三年十二月  
月六日改元

元年正月四日上皇御幸七條院

百鍊抄卷十二

八

十一日被宣下天台座主事

廿一日上皇渡御水無瀬殿

二月廿三日被發遣遷幸閑院御祈八社奉幣使

廿七日天皇自三條皇居遷幸閑院新造被仰造

國司并行事賞賢所同渡御中宮行啓

三月十日主上行幸石清水宮上皇於鳥羽殿有

御見物主上還御之次於鳥羽殿有朝觀之禮

十三日主上還御閑院

十五日主上行幸賀茂社

十七日上皇御幸法勝寺

廿六日上皇御幸鴨祢宜資綱泉家  
卅日上皇自今日七日御幸龜鴨社

四月九日主上行幸高陽院殿

十四日賀茂祭上皇於高倉御棧敷有御見物

中宮使亮長李朝臣

馬副張口

舍人院御舍人

引馬院御舍人  
武利  
舍人左大將殿舍人云々長李朝臣被召院有

御勘發左大將舍人召合院御既舍人之条無

其謂仍武利御勘當云々

百練抄卷十二

九

近衛使右少將雅平朝臣

隴院右府生  
同右府生  
引馬院右府生  
同右府生  
典侍院右府生  
同右府生

參內儀院右府生  
同右府生  
次侍院右府生  
同右府生  
兩院右府生  
同右府生

民部少輔資賴院右府生  
同右府生  
出立院右府生  
同右府生

出立所儀新宰相院右府生  
同右府生  
藏人民部少輔資賴藏

藏人民部少輔資賴藏

藏人民部少輔資賴藏

藏人民部少輔資賴藏

藏人民部少輔資賴藏

人勘解由次官棟基不著座左衛門權佐資經

中宮權大進經兼義作守光時著座次居饗立

著及三獻髮上若狹入來賜祿藏人五次女官

持來御衣賜祿藏人五次女官

岐守仲家入來寄出車出衣大膳權大夫資元

朝臣於南面簀子修板光俊陪膳次資元奉仕

反閑資經資賴寄典侍車

廿日法勝寺御塔供養習禮

廿五日今夕上皇并七条院修明門院御幸法勝

寺

百練抄卷十二

十

廿六日被供養法勝寺九重塔主上行幸今日被

行赦令

廿七日上主上遷幸高陽院步儀也

廿九日上皇皇子号於南都御受戒受

五月三日榮西上人大師号有沙汰

八日今日披露云去二三兩日關東有合戰事是

御浦輪田左衛門義盛等所為云々

九日新日吉小五月會上皇渡御

十六日今日關東飛脚等到來合戰之後戰場無

為云々

廿四日主上還御閑院內侍所同渡御中宮自中御殿行啓閑院

廿五日上皇渡御水無瀬殿

六月十三日主上行幸高陽院

十五日主上行幸高陽院步儀也

十六日主上行幸水無瀬殿

今夕主上還御閑院

七月五日上皇御幸法勝寺依御八講也

十六日主上行幸三条坊門殿

十八日主上還御閑院

百練抄卷十二

十一

廿五日被發遣公卿敕使權大納言藤原師經卿

八月一日被立祈雨二社奉幣使

今日於神泉苑被行孔雀經御讀經

三日延曆寺衆徒百余人集會長樂寺為令燒拂

清水寺云々是去比清閑寺領內清水寺住僧為

迎講結構娑婆屋自山門依令燒件屋清水寺令

謝申而被責召衆徒張本之間下洛不拘院之御

制止遣武士并西面輩被追散之間又傷斂害之

者兩方數多云々

八日被宣下云自去三日洛中卅日穢仍放生會

延引

九日被下解官宣旨左衛門尉中原尚綱藤原景

家同文季左兵衛尉藤原實貞平直宗藤原忠村

佐伯正任等也是去三日於長樂寺致狼籍之輩

也

廿一日上皇自押小路殿還御高陽院

廿五日上主上行幸高陽院

九月八日上皇皇子一条宮薨

十五日石清水放生會

十六日上皇御幸蓮花王院為御覽寶藏御佛等

百練抄卷十二

十二

也

十七日巳時大地震有聲

閏九月十六日主上自高陽院行幸閑院

十月廿六日主上行幸高陽院

十一月六日依南都衆徒蜂起事春日祭延引

十日主上行幸高陽院

十三日依新嘗祭主上自高陽院行幸神祇官步

儀也

十八日南都衆徒猶以蜂起仍春日祭又延引

今日日吉祭也被發遣殿上使去八月於長樂寺



山門衆徒為官兵有事彼時以後御願也自今以後每年冬祭日可被立殿上使云々又被發遣三社春日大原奉幣使依南都衆徒事也

十二月六日有改元改建曆三年

同二年正月三日主上為朝觀行幸高陽院

廿二日上皇渡御水無瀬殿先御幸祇園稻荷石清水宮等

二月十四日七条院御堂供養被准御齋會仍上皇并脩明門院前齋院禮子自昨日渡御今日主上行幸

百練抄卷十二

十三

十五日月蝕

廿四日主上行幸高陽院

三月十二日被行軒廊御卜依豐受大神宮事也

十三日長講堂御八講上皇御幸六条殿

廿六日主上行幸春日社

四月三日今夜亥時地大震

八日陰明門院覽子御參詣南山卿二位局同道

九日有宣下事是關白息家通被加首服

十五日今日山門衆徒向大津東浦令燒長者已下家歸路令燒西浦在家之間園城寺衆徒蜂起

合戰云々

十六日今晚山門衆徒令燒園城寺金堂已下塔堂坊舍等

廿日主上自高陽院行幸閑院

今日上皇御幸稻荷祇園社

廿一日上皇御幸龍賀茂社日七ヶ

五月二日於院被議定依三井寺事寂勝講延否事

七日被宣下云延曆寺六月會可令准御齋會九日新日吉小五月會也上皇有御見物

百練抄卷十二

十四

十六日被立日吉社奉幣使被申日吉祭日神人

狼藉又山門僧燒失三井寺事准永保之例四位為使

廿五日於天台座主吉水房有如法經十種供養

是奉為高倉院御菩提上皇殊於厭慮為彼僧正

之沙汰先院御陵以下天台所々可被安置云

々仍上皇御幸彼房

廿七日延曆寺六月會勅使權右中弁平經高朝

臣登山而園城寺火災之後南都衆徒同心之殊

可打止此會之由齎訴仍申事由相具廷尉能直以下武士又衆徒來迎西坂下以興登山云々

六月十日有院号定以無品礼子内親王号嘉陽門院

廿二日以僧正義圓被補天台座主慈圓辞退晉

廿四日天皇行幸大内内侍所同渡御

七月三日法勝寺御八講依僧徒違乱延引

四日被發遣三社奉幣使依南都衆徒事也

七日今年不被行法勝寺御八講只被供養御經也

十一日今晚主上行幸上皇御所高陽院

十二日今夕於主上御前有種種御會遊事等上

百練抄卷十二

十五

皇同御覽之舞女并猿樂等應其召云々

十三日主上還御閑院

今晚中宮行啓内大臣一条第

十七日上皇於賀茂上下社有七番競馬五番流

鑄馬仍去夜御幸

廿三日七条院御脚氣逆上仍上皇俄御幸聊御

落居之後還御

廿六日天台座主還補之後初被參社寺

八月二日於院御所記錄所勘申清水清閑兩寺

堰相論事

七日武士等多向宇治并淀勢多等為相防南都大衆入洛也去四日春日御柝奉移云々

十日天陰雨降大風吹洛中舍屋破損顛倒不可

勝計尊勝寺南大門顛倒

十三日被宣下贈僧正事是以法相宗故權少僧

都藏俊可為贈僧正之宣命也

十五日月蝕

廿日上皇渡御水無瀨殿

九月一日日蝕

十一日今日上皇自水無瀨殿還御

百練抄卷十二

十六

廿日上皇御進發南山

十月十八日被始行最勝講去五月依南北衆徒

事延引

廿三日上皇渡御水無瀨殿

十一月十三日故左衛門督源賴家卿息僧於一

条被擲取之時合戰云々

十九日神祇官東院有卅日穢兩院同可觸穢否

事

廿一日午時二条猪熊燒亡冷泉院内中山明神

在其内餘炎及高陽院東門并中門御車宿等仍

上皇并女院渡御押小路烏丸御所有議即還御  
高陽院

廿二日今日熊野新宮宝殿以下拂地焼亡云々  
今夕仁和寺御室道法親王御入滅即上皇有御  
著陵御服事

卅日今夜新院御所大炊御門京極殿焼亡不出郭外

新院渡御表明門  
院御所土御門殿

十二月十日上皇第三親王寬成御出家仍上皇

并女院御幸白川房

十三日上皇渡御新造大炊御門殿

百練抄卷十二

十七

廿五日被發遣住吉社神宝使

同三年正月三日上皇御幸七条院

六日於殿上有作文事

十日主上為御方違行幸烏羽殿

十七日今晚主上行幸大炊殿

廿二日今朝上皇渡御水無瀬殿

二月二日大原野祭延引依内裏犬死穢

三月三日關白殿被渡宇治依一切經會也

十日主上行幸高陽院步儀也

十三日長講堂御八講終仍上皇御幸六条殿

十四日被卜定伊勢齋宮先被下親王宣旨御名  
字照子

十六日山座主并僧綱等奏入院御所訪申園城  
寺衆徒昨日行向東坂本令燒兵士屋并在家等  
事

廿三日石清水臨時祭也

今日上皇御幸石清水宮七ヶ日御参笔

四月二日被發遣齋宮卜定之由伊勢奉幣使

五日被發遣兩社行幸御祈九社奉幣使

廿三日主上行幸平野社

百練抄卷十二

十八

廿六日主上行幸大原野社

五月二日被立祈雨二社奉幣使同於清瀧龍穴

被始祈雨御讀經

五日於神泉苑被始祈雨御讀經

七日上皇自水無瀬殿還御岡崎殿

廿四日上皇於高陽院被始御逆修善被限三七  
ヶ日

ヶ日

廿七日被行軒廊御卜依炎旱也

自今日院御逆修人々有引物等

六月三日被發遣七社奉幣使依炎旱御祈也

六日於神泉苑被始修請雨經法

十二日申尅大雨降請雨經法結願也又陰陽

宣平朝臣日來於神泉行五龍祭云々

十四日主上行幸高陽院

十五日被發遣廿二社奉幣使依祈雨也

廿八日修明門院御幸石清水宮七ヶ日御泰筆

七月上皇御幸法勝寺依御八講也

五日上皇御幸法勝寺依御八講也

六日修明門院自石清水宮遷御宮寺司有勸賞

八月一日被主祈雨二社奉幣使

百練抄卷十二

十九

十四日月蝕

十六日上皇御幸賀茂稻荷祇園等社

九月十一日上皇御幸水無瀬殿暫可為御所云

云

十六日上皇自水無瀬殿還御

廿一日初齋宮榎東河入御右近府

廿六日今日熊野新宮御遷宮也仍院中為御神

事

十月八日今晚上皇御幸熊野御山

十一月廿日有任大臣召仰事大納言公房卿

廿六日上皇渡御水無瀬殿

十二月十日任大臣節會

廿五日有仗議是延曆寺訴申賀茂大田社神主

清平致害白山神人間事也

廿七日齋宮御左近府之間人々多參入上皇御

幸

同四年正月二日上皇御幸始

九日御幸鴨祢宜祐綱泉家為御方違也件所近

御所云々

十五日上皇御幸七条院御在所三条殿今夕新

百練抄卷十二

二十

院御幸上皇御在所高陽院

廿八日前太政大臣於中山堂出家年來之素懷

云々

二月一日日蝕不正現

五日上皇於水無瀬殿令供養御自筆瑜珈論給

十六日月蝕時々雨下不正現

廿三日主上被發遣伊勢公卿勅使按察使權中

納言光親卿令勤仕之云々

三月十日上皇御幸石清水宮修明門院同御幸

女院自今日七ヶ日可有御泰筆云々

十四日今夜入道内大臣信清公薨去  
十五日上皇依入道内大臣事俄自石清水宮還  
御女院猶令泰籬給又七条院去此限百々日令  
泰籬稻荷社給俄有御退出云々

四月二日殷富門院崩

十四日賀茂祭上皇以御車有御覽

十八日東寺舍利盜人六人被渡檢非違使上皇  
有御見物

廿一日院寂勝講初也

廿六日上皇渡御水無瀬殿先御泰祇園北野社

百練抄卷十二

二十一

廿九日東寺舍利盜人已下強盜等廿四人被遣  
關東武士左衛門尉廣綱請取之

五月九日新日吉小五月會上皇渡御

六月廿日一代一度大仁王會也

今日上皇宮為受戒有御登山

廿七日於清涼殿觀覽舞樂

閏六月十三日修明門院御幸春日社七々日可

有御參籠

十五日上皇御幸日吉社

七月五日上皇御幸法勝寺御八講也

十六日上皇御幸女房卿二位嵯峨堂兩三日可  
有御逗留云々

十七日被行軒廊御卜是齋宮野宮造營上棟之  
日棟木落事

八月十二日上皇令始熊野御精進給仍御幸七

条殿修明門院同前

十三日被定卜初齋宮入御野宮御楔事

十六日今晚上皇并修明門院同令進發南山給

十九日被行軒廊御卜是依尾張國勢田社御戶

不開并燒亡之間事也

百練抄卷十二

二十二

廿八日被立止雨二社奉幣使

今日大風堂塔舍屋多以破損樹木顛倒外記廳

櫻樹被吹倒官廳南門大炊寮門等顛倒

九月廿日初齋宮入御野宮御楔也

十一月廿日中宮自中山殿行啓一条殿

同五年正月四日上皇御幸七条院御所今日修明

門院同御幸

十日上皇御移徙水無瀬殿新御所是本御所去

年大風洪水之時顛倒流失之間更點他所所被

造營也

十二日自水無瀨殿還御

十七日新院御幸上皇御所高陽院

二月十三日上皇於城南御所有庚申御會仁和親王令勤其事給

廿三日自今日上皇并女院御參籠石清水宮

卅日自石清水宮還御

三月一日於中宮御所一條殿被轉讀一日大般

若經是御產御祈也

廿二日被行免者<sup>廿五</sup>人<sup>五</sup>事依中宮御產御祈也

廿四日上皇御幸春日社

百練抄卷十二

二十三

廿五日主上還御閑院

四月廿一日右大臣<sup>道家</sup>息加首服即叙從五位上被

下禁色宣旨

廿六日上皇渡御水無瀨殿

五月八日上皇自城南還御

九日新日吉小五月會上皇御幸

十日上皇渡御水無瀨殿

六月四日未時月犯大白云々

九日上皇自城南還御

十四日今日院御庚申座主弟子宮令勤給

七月一日日蝕

十日今日上皇有御風氣

十五日北野一夜松無風雨而折倒

十七日被行非常敕令依上皇御不豫御祈也

十九日自今日上皇有御護身權律師成嚴為御

驗者

廿一日被行軒廊御卜依諸社恠異也

今日上皇御發心地令落給仍御驗者阿闍梨道

範賜御劔御馬御衣等任權少僧都先被任律師

云々

百練抄卷十二

二十四

今日大北斗法結願也左大臣<sup>良輔</sup>參入被仰勸賞

廿二日上皇又令發給仍有內外御祈等不可勝

計自今日前僧正實全被召御驗者

廿六日法印良尊自今日被候院御驗者聊時刻

下移令輕發給云々

廿七日上皇御發心地令落御殿慮令顛倒給仍

良尊被任權僧正以大納言公經卿被賜御劔又

被引御馬二匹七条院修明門院賜御衣等

八月二日自院被立山陵使<sup>後鳥羽殿安樂壽院是</sup>

被申御不豫事



四日上皇御不豫平愈之後初御沐浴云々  
十四日上皇并女院渡御水無瀬殿  
廿四日行内文請印是齋宮群行官符等也  
九月二日被行齋宮十二司除目  
三日雨降大風朱雀門并左近府南門顛倒  
今日七条院渡御水無瀬殿  
五日七条院自水無瀬殿還御二条殿  
七日上皇自城南還御  
十四日有齋宮群行親王仍天皇行幸太政官  
廳

百練抄卷十二

二十五

卅日上皇并修明門院御進發南山  
十月廿六日上皇女院自南山御入洛  
十一月五日上皇并女院渡御水無瀬殿  
十七日上皇御幸祇園稻荷等社石清水宮即還  
御水無瀬殿  
廿五日被發遣兩社行幸御祈九社奉幣使  
十二月一日主上行幸松尾社  
八日天皇行幸北野宮  
同六年正月十五日被下親王宣旨尊圓法親王是  
也

廿七日上皇女院御幸祇園稻荷石清水宮渡御  
水無瀬殿  
二月十四日齋内親王有准后事  
廿七日被發遣日吉行幸御祈廿二社奉幣使  
三月十一日主上行幸日吉社  
卅日上皇御幸鴨社祢宜祐綱二座梶谷之東西  
此間渡御所邊土令尋勝地給云々  
四月二日關白二男加首服名字家輔  
七日上皇御幸寂勝寺御鞠興關東武士等伺見  
云云

百練抄卷十二

二十六

十四日被行女叙位是關東故右大將賴朝卿後  
家尼叙三位  
廿三日脩明門院御幸春日社有舞人  
廿五日於禁裏有童舞天台座主相具被泰内云  
云  
廿六日上皇并女院御幸菟籠稻荷社可為七ヶ日  
云云  
五月九日新日吉小五月會上皇渡御御機敷其  
後御幸日吉社  
六月三日於禁裏有白氏文集論義六番云々

十六日主上乘御船浮池上有管絃之興

七月十三日天名惣持院供養也

廿二日天台座主相具舞臺奏入有獻覽於清涼

殿東庭舞曲

八月被定免者事是依七条院御逆修善御法事

十三日於中殿有和哥御會題池月久明右大臣道家

被献之先御遊主上御琵琶右大臣献序又有宣

下事後五位上兼輔定輔卿御琵琶師賞讓

廿日關白家女房卒去云々

九月廿日被行軒廊御卜是依祇園室殿音遷事

百練抄卷十二

二十七

廿一日山大衆等奉振日吉神輿三基十禪師八王子客人

祇園神輿三基大政所波梨女少將并京極寺神輿一基於

皇居閑院左衛門陣即奉振北野神輿二基天神

三所於右衛門陣武士相防之間衆徒等分散有

及傷斂害者等

十月六日被<sub>遣</sub>七杜奉幣使

九日被行任大臣節會懷成

十日中宮御產皇子降誕云云

十一日皇子御湯始也

十三日今晚日來奉安祇園日吉神輿三基被奉

送山門也

十七日上皇臨時御祈五壇法結願也每壇有勸賞

廿三日今晚上皇御幸熊野御山

今日與佛法性法成等寺僧奏賀中宮御產

十一月十日左大臣薨依良輔疱瘡所勞也

廿一日今夜中宮奉伴皇子御入内次有親王宣

下事御名字懷成

廿五日今宮始渡御上皇御在所大炊御門殿明

日於此御所為有立太子事也

百練抄卷十二

二十八

廿六日被行立太子節會

今夜上皇渡御高陽院

廿九日上皇御幸七条院御所三条殿入夜修明

門院同渡御

十二月二日被始樂所是日被行任大臣節會臣家通

七日今日於高陽院有春宮御五十日事仍行

啓

十七日上皇御幸石清水宮有二隻舞人神室神

馬等

廿日上皇御幸賀茂社

廿一日今晚上皇御幸祇園日吉等社御淨衣云

廿六日被發遣立太子由山陵使

兼久三年建保七年四月十二日改元依天變早臨三合等也

元年正月十五日壬午今夜行幸上皇御在所高陽

院頗被擬朝覲之禮歟除目任人今日可被定之由風聞

廿一日戊子今晚春宮行啓高陽院有御百日事二月二日巳亥未時關東飛脚到來天下物忌也

百練抄卷十二

二十九

右府將軍實朝公去月廿七日為拜賀欲泰八幡若宮之間於社壇故賴家卿息若宮別當企謀叛云々源文章博士仲章朝臣大舍畢都鄙騷動言語道斷

六日癸卯大原野祭如例關東穢及洛中哉否事可有御卜之由有沙汰然而仙洞丙穢也不可及洛下之間被御下云々上皇自水無瀬殿還御依關東事也

九日丙午新大納言忠信自關東入洛是右府拜賀之時為扈從被下向也左衛門督實氏卿宰相

中將国通卿平三品光盛卿刑部卿宗長卿已下雲客濟々各追々可被飯洛云々

或人云熊野山惡徒等乱入志摩国嶋々有狼

籍事伊勢太神宮別宮伊雜宮御在所有其恐

可奉渡御昧於本宮之由有豫議云々

閏二月十五日辛巳長谷寺拂地燒亡靈佛為灰

燼頂上佛於灰中不損給靈異至也天慶永義嘉

保等有此事云々

道家

三月十八日癸丑左大臣泰入被定公卿勅使日時

百練抄卷十二

三十一

今日行願寺內塔供養也道俗成群有舞樂云々廿六日辛酉被發遣公卿敕使內大臣右大將通光公也大臣為使希代事也

廿九日甲子宇治橋供養也去建仁之比類破之後上人唱初終於其功云々

四月一日丙寅今晚尊勝寺塔燒失云々

二日丁卯午刻近衛町辺火事出来雖及出雲路東出川原禪定大閤鷹司室町亭家實關白土御門亭

已下公卿大夫之家多以燒亡法成寺堂舍五宇東西門東塔惣社南大門左右脇門祇陀林圓勝

寺塔三基鐘樓西面門金剛勝院等燒亡天下之火災也

十二日丁丑有改元事改建保為兼久依炎旱火災也

十五日庚辰日吉社神輿七基被調進以押小路殿為行事所院廳沙汰也諸女院被調進云々去年奉振陣中之間有所穢之疑被新造也

十六日辛巳自今曉雨脚快沢万人悅豫請雨經法結願也可謂法驗

五月十四日戊申有軒廊御卜日前國懸兩社司

百練抄卷十二

三十一

申去四月十六日國懸宮御戸不慮外令閑御事

廿一日乙卯寂勝講初日也

今日關白家以告文被献木幡是去四月依御堂火事也

廿七日辛酉晝星見諸人驚自是太白經天也兵革徵云々

六月七日庚午被灾遣廿二社奉幣使天下疾疫夏被祈謝也

今日三条堀川边在小井飲此水者可免疫云云仍男女競汲云々

廿五日戊子今日左府息童二歲下向關東是為將軍可被居住鎌倉云々仍武士等多以扈從

七月十三日丙午申刻洛中武士馳走是依院宣被追討右馬權頭源賴茂朝臣也彼朝臣守護大

內之間勇敢之輩數輩閑諸門只閑兼明門合戰官軍多手負賴茂懸火於殿舍燒死云々宜陽殿

校書殿塗篋累代御物等皆為灰燼

十四日丁未自今日廢朝三ヶ月依大内火事也

十九日壬子寂勝四天王院自白川被渡五辻殿事始也

百練抄卷十二

三十二

斯日嵯峨寂迦堂上棟

廿一日甲寅自辰刻大風神祇官南廳右近馬場之屋顛倒了

廿七日庚申禁裏有百番哥合大内火事之後如此事如何

八月四日丁卯寂奠北野祭延引依天下穢氣也十七日庚辰今夜法成寺惣社遷宮也御躰日来

御座金堂内

十月五日丁卯行幸稻荷祇園社

十六日戊寅上皇并七条院御熊野詣

十一月三日乙未主上御覽舞樂左右各五曲

十九日辛亥左大臣以下泰入諸道勘申當榷年造內裏事上

廿七日己未己時白川板殿邊燒亡及數丁延勝寺塔并金堂成勝寺寂勝寺塔三基金堂證并院等燒亡是時靱負廳燒亡放火云々

廿九日有御幸日吉社舞人陪從等供奉之

十二月二日上皇於日吉社被行御八講關白被泰云々

五日丁卯被焚遺宇佐勅使中務少輔源重房

百練抄卷十二

三十三

九日辛未有軒廊御卜大原野社神殿去月一日燒亡事

十日壬申有同御卜安樂寺申去八月御祭之間於榎本頓宮神輿振動事

十八日庚辰今日陰陽寮連署申請云天地契柱及當契年不可憚宮室營造之由可被定下者

同二年三月三日癸巳天下男女向河濱修解除相當上已希代事也

廿六日丙辰亥尅清水寺本堂并塔釈迦堂等燒亡放火云々觀音堂免餘焰靈異他之至也

四月十三日壬申丑刻祇園社燒亡御殿并東南廊南大門藥師堂已下皆為灰燼

廿日己卯中宮侍典參日吉社有田樂并競馬事競馬五番也

廿七日丙戌中御門町燒亡陽明門并左近府左兵衛府門同燒亡

五月廿一日庚戌嘉陽門院禮子御出家御年廿一

廿四日癸丑於天台山被行千僧御讀經左中并資經朝臣右少史信兼等行事

廿九日戊午主上御校書殿西面覽舞樂前權大

百練抄卷十二

三十四

納言定輔卿已下候御前座

七月一日戊子祇園神殿已下迴廊大門等上棟也貴賤成群云々

八月十五日壬申天晴月明於中殿有詩哥御會九月廿八日甲寅民部卿入道親範卿薨年八十四

十月十八日甲戌大內殿舍門廊等立柱上棟仍權大納言通具卿參議公賴卿右中并賴資朝臣

右少弁光俊已下著行事所云々

今日寂勝四天王院上棟云々

十一月五日癸卯春宮於高陽院有御著袴事三

公已下多以泰入

八日甲午上皇御隨身御辭退

廿七日癸丑被<sub>按察使光</sub>癸遣八十嶋祭使典侍藤原滿子親卿女藏人文章生宗範內宮主已下參向事

十二月十六日壬申新大夫史公尚於床子座絕入風病云々除目清書之間也諸司者等合力僅令棄軍云々

廿五日辛巳祇園遷宮

同三年正月十七日壬寅辰刻天皇行幸上皇御在所<sub>高陽步儀也雖非朝覲之礼有此事大納言良</sub>

百練抄卷十二

三十五

平卿已下供奉之入夜泰宮

二月十日乙丑今夜子刻三条烏丸七条院御所燒亡

三月十日乙未近衛京極邊火事東風頻吹及西洞院宗昶社燒亡

十五日庚子行幸石清水<sub>家道</sub>右大臣已下供奉關白令車御後

廿日乙巳行幸賀茂社舞人侍從伊成於下社落馬云々

廿六日辛亥今日被獻佛舍利於五十七社藏人

并光俊被行之

四月二日丙辰被立三社奉幣使宣命趣世人成不審歟

八日壬戌內裏已下御灌佛也及晚洛中物忌也重事已相定云々

十八日壬申室莊嚴院內堂舍燒亡

廿日甲戌今日有御讓位事申刻內大臣以下參入<sub>天皇大</sub>皇太子懷成御閑院被渡<sub>通光</sub>劔室新<sub>道家</sub>拱政

已下諸卿相從之

今夜拱政被申拜賀於里亭有吉書

百練抄卷十二

三十六

廿二日丙子吉田祭長者未補之間社頭饗被付諸司了

廿六日庚辰被<sub>事更被申拜賀</sub>仰拱政氏長者并一座牛車兵杖

今夕新院初御幸高陽院右大將以下供奉拱政隨身馬沛艾蹴北面衛府召其身被下院御<sub>公經</sub>既云

五月一日甲申日蝕正現

九日壬辰新日吉小五月會一院無御見物新院有御幸



十五日戊戌未刻自一院遣官兵被討大夫尉光季是陸奥守義時朝臣背勅命乱天下政可被追討之由有議依為緣者先被誅光季々々住高辻北京極西角宅午刻合戰放火宿館企自害餘焰及數丁天下物恣也土御門院新院宮々同時渡御高陽院殿即義時朝臣追討宜下被下五畿十九日壬寅內大臣參陣被行固關警固事被准天慶將門之時刻云々  
六月六日己未右大臣叅入被定申追討御祈十一社奉幣使

百練抄卷十二

三十七

是日於法勝寺被行百座仁王誦  
七日庚申追討御祈十一社奉幣也  
八日辛酉一院土御門院新院六条冷泉兩宮御登山洛中貴賤東西馳走  
九日壬戌三院兩宮還御云々  
十日癸亥有御卜奏  
十一日甲子月次祭神今食如例云々  
十三日丙寅自宇治武士欲乱入洛都之間官兵相防合戰云々  
十四日丁卯祇園御靈會如無威儀但馬長只一

騎云々申時許關東武士打破宇治路入洛雖引橋勇敢之輩弄身命渡真木嶋奪取兵糧乘勝云云  
十五日戊辰武士等皆以乱入官兵等各放火宿館逃隱  
十六日己巳武士入洛已著六波羅京中追捕以外狼籍也凡雖靈社靈佛不恐之不憚之  
今日以大夫史国宗為御使可鎮狼籍之由被仰武士行向六条河原義時朝臣已下還任本官可召返追討宜旨由被仰下云々

百練抄卷十二

三十八

右中弁資經朝臣為殿下御使向泰時許平等院經藏寶藏內宝物併武士追捕取累代御物摸錄宝物等只在此御倉一々被沙汰返兼又法成寺同追捕寶藏御物等一々可令沙汰返又吉田社氏三社之其一也不可有狼籍之由所被思召也可著進守護人云々  
十七日自殿下以左中弁為御使条々被仰武士云々  
十九日壬申一院御幸四辻殿武士奉圍遶新院還御大炊殿兩宮渡御本所云々

今日秀康已下殘黨早可令追討之由被宣下之  
廿日癸酉主上還御閑院

武士狼籍可停止之由令尋沙汰云々

今日北陸道予式部丞知時入洛云々

廿四日丁丑按察光親卿前中納言宗行卿以下  
向戰場之人々被渡武家了

廿五日戊寅坊門大納言忠信卿被向武家了

七月三日乙酉內大臣通光上辞表

七日己丑關東使參洛天下又以物忌也可有重  
事等云々

百練抄卷十二 三十九

百練抄卷十二

三十九

八日庚寅權大納言通具卿泰入左大臣止攝政  
前關白可為攝政氏長者之由被下詔書

今日一院并修明門院於鳥羽殿御出家云々主  
上密々渡御九条殿云々

九日辛卯持明院入道宮御子後堀河御年十歲有御踐祚事  
關東申行之

十三日乙未一院自鳥羽殿遷御隱岐國云々

廿日壬寅不可出仕之人々武士注進之自殿下  
被下云々

今日新院御幸岡崎亭

廿一日癸卯新院遷御佐渡國云々  
廿四日丙午六条宮遷御但馬國云々

廿五日丁未冷泉宮遷御備前小嶋云々

八月十六日戊辰持明院宮有尊号事右大臣參  
仗座宣下之

廿三日乙亥院御幸始公卿右大臣已下廿人供  
奉之

九月三日乙酉被止御燈依日次不宜云々

院殿

九日辛卯丑刻院御所殿有炎上即御幸高陽

百練抄卷十二 四十

百練抄卷十二

四十

十五日丁酉被行八幡放生會上卿源大納言已  
下泰行之

十七日己亥尊長法印以下可擲取之由被宣下  
之

十月一日癸丑有炎上殿下御所土御門右大將  
亭町一条同時兩所放火云々

十三日乙丑權僧正尊性權少僧都道深宣為禪  
定仙院親王之由藤大納言師經被宣下之

廿三日乙亥御即位定事了又於院殿上被行御  
元服定

元服定

元服定

元服定

元服定

廿九日丁巳祈年穀奉幣也依御物忌於石灰壇  
有御拜云々

閏十月十日壬辰右大將公經卿任內大臣

十一月一日壬午有朔且冬至賀表

十二月一日癸未以無品內親王為皇后宮

廿日壬寅殿下令任太政大臣給於六条殿宣陽門

御被行大饗

廿七日戊申被行万機旬

喜元二年五月十日以權右中辨宣房朝臣本書

百練抄卷十二

四十一

寫校合畢

百練抄卷第十三

後堀河院十一年

貞應二  
安久二

元仁一  
寛喜三

嘉祿二  
貞永一至十月

百練抄卷十三

一

後堀河天皇仁十一年

高倉院御孫後高倉院御子母儀北陳子白川院入道

權中納言基家卿女也兼久三年七月九日踐祚

以關白家實為攝政十二月一日即位于太政官

廳十歲貞應元年正月三日於閑院御元服同十

月廿三日御櫻同十一月廿三日大嘗會

貞應二年

元年正月三日天皇御元服十一歲

廿日朝覲行幸步儀

二月廿三日今日嵯峨清凉寺供養也後高倉院法皇御幸

百練抄卷十三

二

雲客為堂童子先年回祿之後往生院念佛房所造營也

廿六日能隆卿還補祭主息男隆宗朝臣在任之

間父子違背申事由奪補也未曾有事也

四月六日宣陽門院御所六條西院燒失自長講堂

出来失火云々

十三日當今御母儀有准后事御名字

五月二日今夜土御門万里小路源大納言定通

卿亭燒亡放火云々

廿九日松尾社竈神殿并供御所室藏等燒亡御

蘇俄奉渡御塔火消之後還御正殿云々

卅日斯日於嵯峨清凉寺詩人才士講奉讚嘆釈迦如來之詩是依大字頭孝範朝臣勸進也散位經範書都序

六月五日今夜神祇官八神殿遷宮

七月二日今夜子刻兼明門院御所土御門萬燒里小路燒亡放火云々

十一日准后有院号北白川院云々

八月一日自今夜彗星見乾方

九月六日今夜子刻關白亭冷泉燒亡放火云々

百練抄卷十三

三

十一月五日今夜左大弁宰相資經拜賀也

駕毛車車副平禮白襖上下白襖牛車廟木上下薄色袖

前駟二人民部大夫光尚式部大夫忠康

雜色七八輩平礼

皇后宮權大進為經扈從侍二人左衛門尉兼色二人在共

大藏卿殿坊城殿令任泰議給之時子息并親昵

人々為前駟然而大納言殿御例具也

廿三日大嘗會也迴立殿御湯殿之間中將公資

朝臣於主基御湯殿俄絶入召藏人兵部權大輔

賴隆令奉仕云々

十七日今夜從三位藤原有子前相國入内公房女

二年正月十二日御幸法勝寺依修正也留宇之間高陽院有放火事數字殿舍一時燒亡放火之由有其聞法皇御幸一条相國亭

三月十三日東大寺七重御塔被懸九輪也

五月八日行幸一条殿院御不豫有危急之聞

聞

十四日太上法皇崩御奉号後高倉院葬北白川

天下亮聞

七月十七日今夜瀧口光保於大炊御門油小路

百練抄卷十三

四

被切本鳥云々傍官一人相伴不知誰人之所為

於衆一人者逐電遁其災云々後日有沙汰一勞

以元所行也被召出使廳云々

九月廿一日軒廊御卜也宇佐宮假殿簀萱上第

八本出事

十月三日子刻群盜乱入鴨御社搜取神服等仍

有御更衣式日延引神服等為群盜被奪取之故也

十六日法輪寺橋供養也

十一月十一日園并韓神社遷宮也

十三日大原野社遷宮也重日之例有其沙汰云

十九日熊野那智山燒亡於本宮大事度々有例當宮先規不詳云々

元仁元年復應三十一改  
元依天妻冬早也

二月廿三日長講堂供養導師已下有勸賞

三月廿六日竊盜等打破大學寮廟倉放取御影裏絹云々御影等多破

四月十一日或人云去五月比越後國白石浦異國船被吹寄其長十餘丈船中攝作泉衆人四人

百練抄卷十三

五

僅存命近日上洛經迴六角堂辺万人見物云々彼國人以銀如瓦石用諸物云々仰武家被追洛中了

十三日有軒廊御卜住吉末社座摩社門并荒垣等去年十二月廿七日燒亡事

近日天下小兒赤斑瘡多有其聞

五月四日於法勝寺被行後高倉院周忌御齋會

八日寅尅大地震却時又震動

十八日自今日於神泉苑親嚴僧正奉始祈雨御讀經仰諸僧有水天供云々又炎旱涉旬何崇哉

之由被行御卜云々

廿四日諒闇終大枝也

廿五日雨澤快降可謂甘澍歟親嚴僧正可有祈雨賞之由被仰下云々

六月十七日前陸奥守後四位下義時朝臣去十二日頓病翌日死去之由風聞洛中物忌車馬馳騷

近日有炎旱之愁

八月一日寅卯刻可有日蝕之由曆注天暗雲收日輪出現敢未令蝕及于上可謂道之陵遲歟

百練抄卷十三

六

十月五日參議左中將實雅卿被配越前國但不及官符武士沙汰也一昨日被解官了

六日或人云土佐國一宮去八月十八日以後至廿二日大風大水等顛倒也皆神殿已下不殘一字顛倒云々

廿九日紀伊國造宜康於玉垣內被射斃云々依之大神祭癸遣延引

十二月二日前太政大臣公經供養北山堂号西園寺

北白川院安嘉門院有子臨幸右府公繼已下諸卿群參仁和寺宮為導師



嘉祿二年元仁二四

元年正月十日以武士被遣園城寺是彼寺中北兩

院徒衆相論南院末寺北藏微妙寺近松自去年三院共

結意趣六月會已下恒例佛事退轉云々爰中北

院修正之時南院兇等企見物之處而院之輩追

却南院兇之刻互及鬭諍可企令戰之由有其聞

為防禦雖遣官軍彼等見其勢不遂本意云々仍

武士空飯洛

十八日箕面寺燒亡建立以後無此災云々

廿一日於御前始被行除目

百練抄卷十三

七

二月廿七日去夜為盜人被放取神祇官御厨子

鎖件厨子者昔伴大納言之遺物于今見在太政

官與神祇官兩所相傳之物也今夜蘭林坊盜人

乱入搜取雜物云々

三月十一日少將井室殿燒亡

十二日晝方電降今日葦節也

十三日去夜關東飛脚到來洛中貴賤馳走故賴

朝卿後家二品入滅云々

十八日今夜左大臣結仁和寺第燒亡

八月廿二日日吉杜宮仕法師已下數百人乱入

冷泉鳥丸出羽前司友冬宅企狼籍或破損衆車

或登堂上乱行是按察使之雜掌也

九月二日延曆寺內阿弥陀院燒亡佛像等為灰

燼

十月三日今夜七条院御所仁和寺殿群盜乱入法成

寺南大門被立金剛力士像云々

十日鴨社祢宜祐賴於社頭為敵人被致害事

廿七日今夜廣田社神殿燒亡無跡以來事御躰

燒損云々

百練抄卷十三

八

十二月十七日園城寺大師御影為長吏覺實僧

正之沙汰奉渡御室戶本寺堂舍閉門戶斷絶恒

例佛事了依天王寺別當之訴也又東大寺大佛

亦閉門戶同停止恒例佛事是又依東南院院主

事也

廿七日二条堀川源大納言亭燒亡放火云々神

宮上卿之文書等紛失云々

今年宇佐宮卅三年一度遷宮延引了庄々勤不

合期之故也

二年正月廿八日天陰雷鳴如盛夏雷落日吉八王

子蹴裂樹木云々

二月十三日午時稻荷上中兩社旅所八条坊燒門猪熊

亡是大行事則正族所被改易之間則正愁望之

餘參毫下殿燒死云々御舂同燒失云々

三月廿七日高雄寺供養也白河院御沙汰差遣

院司云々神護寺是也

六月四日今夜寂勝光院堂舍拂地燒亡竊盜之

所為云々

十九日關白女子實司院入内依之中宮去三月退出

七月七日所々展宴席七夕相當庚申

百練抄卷十三

九

貞觀元年 延喜十六年 永觀元年 寬弘

六年 長久元年 長承二年是也

十五日今夜月蝕皆虧如法如暗夜

八月六日吉野勝手子盛而社神輿神官已下數

百人己著御宇縣云々為防禦馳向了是藏玉堂

放火之者為高野山結攝之由群訴云々

十七日吉野神輿御座平等院門之間關白家下

家司尚能男傳仰旨神人等以木大陵礫云々

十八日今夜梅小路堀川故宗隆卿文庫燒亡和

漢文書多為灰燼

十九日吉野神輿歸御云々

廿七日去夜官文殿五間燒亡累代文書皆為灰

燼經數百歲未燒之所也御齋會本尊者自百濟

國奉渡已燒失了末代之極歟

九月七日有御卜日吉社十禪師御正休木作牛

舂地藏去月比動搖給事

十一日盜人切穿民部省文庫盜取文書等了諸

國圖帳少々紛失

十月廿二日長谷寺供養也天下道俗拳首參詣

前年回祿之後新造終功忽有供養之儀

百練抄卷十三

十

十二月十二日盜人切開大學寮廟倉放取御影

裏絹一年盜人之後新調絹裏等也及度々尤可

仰

安貞二年嘉祿三十二年

元年正月五日御齋會本尊佛今日被供養云々去

年官文殿燒失之間本佛為灰燼仍仰佛師院徽

被新造白檀也柏木親迎三尊一捕二十輩云々

三月三日寂勝光院上棟

九日臨時祭調樂之間陪從叅集之帷近習雲客

見物之刻押倒帷帷各如懸網之臭或落冠云々

仍各訴申雲客兩三被召籠云々

十一日安嘉門院院号之後始八幡御幸

廿四日松尾證月上人供養多宝塔導師明惠上人百僧供養云々

近日内藏寮庫倉<sup>二</sup>盜人等乱入搜取累代御物云々目錄不分明之間紛失物不知其真云々

閏三月十九日尊勝寺金堂顛倒佛像無跡形云々佛法破滅之世也泰籠之人火亡云々

四月廿二日今日<sup>利子</sup>齋宮楔東河可入御左近府也然間未尅有火土御門町辺也東風頻吹火延及

大内兼久回祿之後僅新立之殿舍菅檜皮敷捧屋皆以為灰燼外記廳雖免餘焰結政南所已燒了遷都以後未燒之所也大内雖半作炎上之後可有廢朝哉否有豫義

六月七日於土御門油小路搜出尊長法印武士克滿金自害云々兼久以後七々年隱居

廿四日山門所司已下群集大谷辺被破却法然上人墓所是專修念佛事近日有山門之訴於彼墳墓興盛之故云々但於遺骨者門弟等偷掘出渡他所云々

百練抄卷十三

十一

七月七日專修念佛者配流官符諸印

隆寬律師<sup>還俗名</sup>山達里<sup>名</sup>配陸奥<sup>後日被改</sup>空阿弥陀佛

改<sup>名</sup>原薩摩成覺<sup>改<sup>名</sup>重</sup>壹岐嶋

七日未時東寺食堂丈六千手觀音像顛倒了後

日有軒廊御卜

廿一日於關白直廬有議定事左大臣已下参入

去年對馬国惡徒等向高麗国全羅列奪取人物

侵陵住民事可報由緒之由牒送太宰少貳資賴

不經上奏於高麗国使前捕惡徒九十人斬首偷

送返牒云々我朝之耻也牒狀無禮云々

百練抄卷十三

十二

二年正月九日大刀契紛失之由有沙汰

十四日藏人頭治部卿親長朝臣参向內侍所求

大刀有鐵室握之物求出之如天曆御記者已為

大刀歟

廿四日於殿上有群議左大臣已下参入大刀間

事

二月八日奉納大刀契左中弁有親朝臣左中將

資季朝臣参內侍所

三月二日關白被入宇縣<sup>舊馬場院</sup>中宮女房為見物被参

臨被刷云々は依

六日今日寅刻雷落賀茂社壇云々

四月五日日吉大宮遷宮也近江国司清兼造進  
神殿云々近曾多武峯構城郭是興福寺雜人向  
峯近新葛之間自峯敎害彼輩於其場殆及合戰  
云々

廿三日南都惡徒等突向多武峯企合戰燒拂峯  
僧房六十餘宇云々聖靈院僅免其難然間天台  
衆徒可燒清水寺之由風聞

廿七日右中弁親俊朝臣為關白使下向南都是  
去比興福寺衆徒令燒拂多武峯堂舍僧房又猶

百練抄卷十三

十三

可突向之由有其聞云々

五月四日雨澤快降甘澍也日來炎旱之間定豪  
僧正奉仕神泉御讀經

六日興福寺別當實尊被停止寺務依多武峯火

事也珍喜法印被解却權大僧都一日比役夫工  
神部等於彼房催促造宮米之間蹂躪神部等之  
故也於下午人者被禁固了

七日依多武峯事山僧等蜂起南都知行之江別  
庄園稱沒収之由無是非成寺牒令抑留之間興  
福寺衆徒弥以忿怒洛中物忘也

八日關白家奉幣氏三社被謝申此闕諍事而春  
日使彈正大弼保綱朝臣自光明山返被追返仍  
告文與幣物相副下文付送神主許云々

十一日春日御神木奉渡移殿是衆徒奉具可參  
洛故也

十四日諸卿於殿上被議定南北衆徒蜂起事

廿七日衆徒閑春日社興福寺門戶隱居但所召  
之張本各參之由進請文云々

廿八日南都大衆等昨日群議之後南圓堂已下  
四面門戶皆以扃付僧徒離散佛事等退轉云々

百練抄卷十三

十四

六月一日今日未刻日蝕可出現之由權少外記  
清原教隆以欽天曆之後令勘申以件狀被下問  
曆道當日天暗不決是非雖然散曆道申狀不及  
沙汰云々

六日山門惡徒去夜奉捧日吉神輿於中堂只今  
被下京之由風聞仰武士被防之是依多武峯燒  
亡也

三日南都衆徒令閉七大寺或運積藁為放火云  
云

九日神輿還御本社武士各歸洛云々

十九日醍醐住僧二百人許發向勸修寺伐客房燒拂在家三字云々是兩寺童部理趣三昧之間企相撲聊及口論之故也

七月六日有軒廊御卜安樂寺言上去嘉祿元年五月比豐後國津江山住人等於彼峯作畠之間掘出金銅銚二枚也

七日法勝寺御八講之間南京僧侶無恩請依多武峯事也治兼例也

十九日南都衆徒間事被仰關東

廿日風吹雨沢洪水泛溢四糸五條等末橋流了

百練抄卷十三

十五

漂没之輩數輩云々

廿一日甚雨日吉八王子二宮大行事社等為洪水有其危奉渡御躰於大宮又賀茂社瑞垣流損貴布祢社拜殿令流失云々

八月十三日南都衆徒和平閑諸堂賢木歸座本社云々

九月十六日七条院崩御當今并齋宮御祖母也十九日齋宮群行依七条院御事可有行幸哉否被問才卿申狀不同無行幸關白奏官聽為發遣也

廿九日今曉法勝寺正廳宝藏盜人令燒失云々十月七日朝間東風吹雨降及未尅坤風猛也折樹木破舍屋法勝寺九重塔九輪北方傍珍皇寺塔顛倒平野社中門一宇神祇官御幣殿真言院四足等顛倒了

廿二日自今日被始行家勝講去五月南都衆徒蜂起之間于今延引

廿四日日吉社聖真子八王子客人十禪師三宮等可奉授一階之由被宜下

十一月五日關寺龍華會櫻井僧正被結構弥勒

百練抄卷十三

十六

像万躰供養云々

十二月廿四日前按政道家被下關白詔即為氏長者

寬喜三年安貞三三五改元  
依去年大風也

元年二月廿七日仁和寺宮櫻樹一株被移殖閑院南殿前左中將資季朝臣仰本府被沙汰云々

三月廿五日今曉獻山文殊樓燒亡於師子并佛像者奉取出云々

四月十一日二宮十禪師大行事等遷宮也去年洪水以後暫御座大宮御殿備前國司造營之華

義過例也

五月三日於殿上有議定事祭主能隆卿衰老之間可讓補子息隆通事也

七月十六日造外宮役夫二神部等向祇園執行勝圓法服房譴責越中國堀江庄課役之間令及傷神部等遽切損祇園神室之由訴申仰使應被實檢云々

八月廿五日御方違行幸也還御之間於錦小路大宮辺御輿鳳落地後日有沙汰裝束司進怠狀云々

百練抄卷十三

十七

十一月十六日關白長女入内關白前太政大臣實家去月賜已下扈後御名字躰子

廿七日夜備後吉比津宮燒亡御躰已下為灰燼二年閏正月十三日關白於春日社被供養大般若經七僧之外六十僧隨此事

今日於禁省被覽盡咒師

廿一日鹿走入法成寺中

二月十五日今曉蓮光院内堂舍塔廟拂地燒亡僅所殘本堂而已

今日申尅珍皇寺塔燒亡先年火事之後適新造

之間又以燒亡

三月二日今夜盜人燒穿法成寺阿弥陀堂塗薙盜取銀御佛云々

十日祇陀林供養也先年火事後在地人等合力堂一宇終切四足

廿九日内大臣兼經已下奏入有伏議祭主能隆可辭退以何輩可被補哉事

五月今曉四糸壬生嘉陽門院御所燒亡

六月十日那智遷宮也神室已下自院廳被調進也

百練抄卷十三

十八

或人云去八日義濃国生津庄内雪降委地二寸計云々

廿四日以錢一貫文可被直米一石之由被下宜旨

七月十六日園城寺南院衆徒與中北院住侶各構城郭爭雄雄欠亡之輩有其負云々

廿三日右大臣已下奏入廣田千栗西社御躰燒亡更有群議

八月五日或法師号倉阿弥陀佛東大寺上人弟子去正治元年紛失小朝熊神鏡者所奏取隱也始埋木幡次埋



大極殿次奉埋稻荷社之由自首云々

十日園城寺中北兩院惡徒發向南院舍戰燒拂房舍了其後南院衆徒并三別所惡徒向中北兩院又燒房舍了僅所殘者唐院金堂等也

九月十二日可停止諸国新立庄之由被宣下

八日終日雨降入夜大風天下損亡過半云々

十月四日不登之歲被行事召外記勘文云々諸

国失損事普有其聞久雨不止風災過法云々

廿九日自昨夜客星出見養和元年以後無此

變歟

百練抄卷十三

十九

十一月廿日被行非常赦依客星御祈云々

十二月六日左少升時兼朝臣為開東大寺勅封

倉下向南都去月比盜人穿被宝藏之間御物等

為檢知也

廿六日小朝熊神鏡相共神宮權祢宜盛康等下

向勢列年來之間倉阿弥陀佛奉埋稻荷山被尋

出之

廿八日中山入道關白於木幡別庄入藏春秋八十六

三年正月廿九日清水寺有狼藉事彈衆等有訴訟

可拂別當基圓法師之由結構率軍兵攻寄執行

房衆徒相禦之間及合戰事

卅日中宮御產御祈十三社奉幣也

二月十五日中宮誕皇子万壽以降絶而無此事

衆慶悅

三月十六日或童一人入內裏盜取畫御座御

劍經鬼間出自殿上小板敷藏人判官繁茂擲留

之

廿五日於比叡坂下字義濃堅者觀泥嘔十僧轉

讀一切經口別施米五斗云々

四月九日一宮御五十日也於仁壽殿代有此儀

百練抄卷十三

二十

諸卿奏入有御遊

十一日若宮立親王御名字秀仁

廿五日亥尅大炊御門堀川有火東風頻吹都芳

門燒亡大炊以後無此災額燒失了

十七日依天下異損痛由今日可有改元之由被

仰下諸卿已下日未進勘文大内記公良草進詔

書諸卿奏入之間五月改元不快之由忽衆儀出

來延引

廿四日若宮御百日也今日出仕人々据寸法事

内々為頭中宮亮資賴朝臣奉行被仰下大臣八

尺大納言七尺中納言六尺參議三位五尺四位上下四尺云々

六月十四日御吳會延引依本社穢云々神輿更無御逗留例

十七日御隨身久清為梟宿願於北野競馬

自去春天下飢饉此夏死骸滿道治承以後未有如此之飢饉

七月五日關白上表以左府教實為關白即渡長者印

十二日祇園御靈會也本社穢昨日滿世日了所

百練抄卷十三

二十一

所殿上人馬長事殊有沙汰及卅騎云々

八月一日終日風吹丑刻法勝寺西方在家火事餘炎及尊勝寺五重塔拂地燒失

九月十九日近日壞取小屋成新賣買事可停止之由仰武士并使廳被糾斷云々

十月九日被發遣公卿勅使權大納言震筆宣命如法勅草也延久以後此例猶布

十二日土御門院崩御配所阿波國御

十四日前關白下向南都為維摩會聽聞也長保

五年例云々

廿日天王寺別當二品親王被甲勇士等被責召惡徒惡徒合戰之間欠亡輩有數云々彼輩自去年比一向背法親王仰寺領等寺家使張行追出沙汰人了今及此狼籍天下之勝事也

廿八日今上第一親王為皇太子秀仁

十二月十七日今日園城寺衆徒蜂起圓宗寺寂勝寺之間公請出仕之輩令制止云々是天王寺別當事訴申故也

貞永一年寬喜四四二改元依去年飢饉也

正月一日節會不奏冰樣去年不寒之間冰室等

百練抄卷十三

二十二

無其實云々

廿二日主上始令受法華經給綾小路宮令參給密宗之人頗不使之由世以言之

廿三日申時畫御座御劔紛失云々

二月一日子時夜御殿御鏡一面又紛失云々

二日己刻東大寺并元興寺塔春日社塔雷火出來一時之間三所火匪直事也各令撲滅云々

三月廿一日天台山文殊樓供養云々又伊豆守

信光供養渡部橋云々件橋彼信光所營作也

四月一日夜伴感應寺燒亡是久三年四月二日

大炎上之時有此災大略同日與及曉更猶不滅云々

五月十三日鴨正祝光繼逝去七旬有餘者也紫雲尊室有往生之瑞存生時常我二ヶ度奉載大明神了全不可有三惡之恐於不信之輩者雖為正祝還宮之期必有障云々

六月一日今夜盜人乱入尊勝寺宝藏搜取雜物畢放火之間二字倉燒亡

十二日法成寺京極西門北方俄顛倒

十三日召權中納言定家於殿上可撰進郎會和

百練抄卷十三

二十三

哥之由被仰下

廿五日中宮有和哥會兩殿下內府已下參入先

御遊次講和哥會題云鶴契避年

九月三日中宮誕皇女

六日前攝政師家於天王寺出家

閏九月八日彗星見東方長二丈餘

十一日平相公經高卿家有狼藉事武士相伴傾城

過彼門前之間息男勘解由次官經氏奪留之仍

引率數多勇士及追捕青侍一兩及耻終頭乱入

寢殿之刻相公出對乱請益所及夜陰有叫喚之

声未代之勝事也

十月二日於前關白里第被定讓位事依應德例也權中納言定家注出寛平国史今度依可追彼例云々

四日有讓位事依彗星之變為攘也十月之例無先規歟今度始也上皇猶御禁裏

十四日今夜上皇自禁省御幸冷泉富小路亭大臣已下供奉中宮同以行啓

嘉元二年五月十日以權右中辨宜房朝臣本書

百練抄卷十三

二十四

寫校合畢

百練抄卷第十四

四條院十一年

貞永一  
曆仁一

天福一  
延應一

文曆一  
仁治三  
至九月  
嘉禎三

四條院仁壽十一年

後堀河院第一皇子母藻壁門院入道關白

皇子

元年十月四日於閑院受禪二歲同日以關白實教

為攝政同十二月五日於官廳即位嘉禎元年十月廿日御禊同十一月廿日大嘗會仁治元年正月五日御元服

貞永一年寬喜四年四月二日改元

十月廿七日癸卯藏人頭內藏頭有範朝臣被尋

神祇權大副兼直宿祢云石灰壇御拜已前始有平野祭御禊事如何又賀茂臨時祭相當御表日

百練抄卷十四

一

百練抄卷十四

二

之上御即位已前也兩條可計申者兼直申云雖石灰壇御拜以前有本社祭者御禊難默止歟但初度御禊坎日也仁安三年三月御燈御禊憚日次不被行也即位以前臨時祭之時兼久三年十一月廿四日御即位十一月一日可有時議之由申之

廿八日甲辰上皇有尊号報書事

十一月二日戊申平野春日等祭也依為坎日無御禊權中納言定家卿召侍從能定於殿上給宣命發遣平野社

九日乙卯上皇御幸始也廂御車

御直衣

右大將家嗣

以下供奉攝政扈從

十九日己丑五節舞姫参入御即位以前五節安和保元等例也永觀壽永被止之云々

廿四日庚午當今同胞妹親王宜育也御名字睦子式部大輔為長卿擇申

廿六日壬申新大納言高實被立伊勢奉幣使被告申御即位也

廿八日甲戌前關白給兵仗被申拜賀

十二月五日庚辰於太政官聽即位儀也

百練抄卷十四

三

廿七日壬寅前關白北政所有准三宮

天福一年四月十五日改元依代始也

正月一日丙午攝政率諸卿以下上官等被泰前關白家有拜禮權右中辨光俊朝臣申次也

二日丁未攝政家有臨時客尊者實氏內府

廿二日丁卯右少弁信盛官掌為繼等下向勢列為奉迎刺子齋王也

二月五日庚辰齋王入洛

十日乙酉率川祭

今夜子刻一条町前關白家燒亡放火云々

十五日庚寅月蝕不正現法驗之至也

三月七日辛亥今夜群盜乱入鳥羽安樂壽院法華堂搜取銀御塔并種々宝物云々鳥羽院御自令獻給常燈消畢

廿九日癸酉晝有風吹入夜猛也法成寺藥師堂迴廊等顛倒又藻壁門顛倒畢今曉前關白被参春日社保延例云々大風之間奉幣遲引御神樂及曉更春日山樹木等多以顛倒万人驚遽云々四月三日丁丑中宮職有院号藻壁門院云々五日己卯御即位由天神地祇大奉幣也

百練抄卷十四

四

六日庚辰因幡堂供養云々

十六日庚寅大嘗會因郡卜定也近江坂田丹波水上

檢校權大納言通方權中納言伊平参議權尚主基左右中弁光俊朝臣

行事基左右中弁光俊朝臣十七日辛卯稻荷祭也神主清方依馬上事自院

蒙勘責以權祢宜重長忽被改補了

今夜宇佐勅使發遣也女醫博士有式奉仕也

廿日甲午宇佐使自豐鳴驛家歸洛雜事不合期難遂前途數日住京云々未曾有事也

廿三日丁酉賀茂祭也上皇召攝政車御見物御

同事也保延二年例云々

廿七日辛丑今日被分進宸勝王經一部於神社  
去年為天下平安於禁省被供養

去夜群盜亂入兵部卿成實治部卿親長家云々  
天下狼藉也

五月九日癸丑新日吉社小五月會也先是有豫  
議

今月御忌月也競馬事可有憚哉御脫屣之後無  
神社御幸初臨幸之条如何被問諸卿云々御忌  
月有朝觀行幸至孝之禮與敬神之義可被准據

百練抄卷十四

五

又非御物詣之儀御見物之兩条不可憚之由人  
々被量申仍有御幸競馬已下如例  
十七日辛酉大嘗會行事所始也悠記左近府主  
基陰陽寮也

廿二日丙寅同行事所移也

廿九日癸酉普賢寺入道被政薨<sup>基通</sup>年終焉之時  
各不可有面謁中陰之中不可修佛事之由兼被  
相定云々

六月十四日丁亥祇園御靈會也少將井神輿自  
東洞院北行經大炊御門令向列見給昨今内裏

御物忌之間無行幸故歎

十六日己丑前齋宮御發心地令落給御驗者良  
能律師任少僧都大嘗會以前僧事宜下如何

十七日庚寅有軒廊御卜近日炎旱事也自今日  
真惠僧正被勤孔雀經御讀經

廿日癸巳前齋宮於持明院殿有立后事是准母  
后儀也

廿六日己亥炎旱之愁都鄙頻聞神泉御讀經真  
惠僧正今日結願及九ヶ日了

廿七日庚子申刻雲膚忽起雨脚快降入夜雷鳴

百練抄卷十四

六

親嚴僧正愛染王法今日及六ヶ日施靈驗貴賤  
感歎云々仁和寺宮同被修此法云々

廿九日壬寅為攘灾成功之輩悉可被相任之由  
有沙汰被行大除目任人及三百人世以驚目

七月十七日今日相国吉田水閣仙院臨幸藻壁  
門院同臨幸御輿

八月五日丁丑被政初被入宇縣自九条第被整  
行粧

廿一日癸巳万機旬也右大臣以下參入

九月三日甲辰無御燈之御懷大嘗會年長元以



後度々被行之今度任上古例被止歟

十二日癸丑自去夜女院御產氣云々来月御當月也人以驚云々

十八日己未御產氣日来連々今晚殊物忌之間

寅刻皇子降誕万人悅豫之處皇子有御事云々

及畫有女院崩御云々御年廿五上下悲歎言語難及

云僧侶云陰陽耻辱此秋也卜筮筭勘以下皆以

相違諸道陵夷何事如之

十九日庚申大掌會延引了

廿四日乙丑右中弁光俊朝臣為遺令使參陣固

百練抄卷十四

七

關警固事被宣下又諒闇儀也但主上錫紵事有豫議嘉義之度即位以前御別殿當今已成人之禮也仍可召錫紵者

廿九日庚午上皇御幸冷泉油小路亭去十八日

遷幸近衛富小路聊有子細幸彼亭云々

世日幸未主上三歲召錫紵遷御別殿以弘御所北面為其

所幼主七歲以前無倚廬儀又不召錫紵也然而

依憚永萬養和例聊被相違也

今夜藻壁門院山禮也大掌會檢校行事并弁奉

之祭神慮難測歟

十月四日乙亥盜人等燒穿法勝寺圓堂搜取御

佛等云々白川院勅封之後人以不知事也後日

檢非違使俊親搦進嫌疑入然而重犯者不見云

云

九日庚辰左中弁為經朝臣為行維摩會事下向

南都穢中被遣勅使例外記不勘申歟應德賢子

中宮御事之時李仲朝臣為勅使參行例云々但

別殿之間何可有勅使哉之由有頑申人云々

十二日癸未主上除錫紵自別殿遷御本殿宮主

兼躬奉仕御揆

百練抄卷十四

八

十九日庚寅上皇奉為故女院被修五七日御佛

事来廿二日次不快仍今修之

廿七日戊戌公家於法成寺被行御齋會依故女

院御事也

今日法勝寺圓堂盜人事被告申安樂壽院御墓

所可為告文歟可為御書歟兼有豫議修理大夫

資賴朝臣為使被進御書云々長倫卿作之

廿九日庚子藏人宮內權大輔兼高被尋兼直宿

祢云忌火御飯事外記例雖穢中供之中陰之間

被止事無所見本官所存之肯可注申者兼直申

云穢中供之雖有先規於諒闇時者五旬之間不可供歟且貞應二年有沙汰六月止之自十一月供之者

十一月一日辛丑今日不供忌火御飯

今日故公修法印可為贈僧正之由被宣下上卿

權中納言盛兼卿仰右少弁經光

七日丁未故女院御忌日也仍不被立春日祭使

依應德例當日不被立主者

八日戊申春日祭使下向云々平野祭如例杜本

當宗祭延引午日立使為五旬內之故也

百練抄卷十四

九

九日己酉梅宮祭也當宗祭可用次支干云々

十三日癸丑園井韓神祭也五節被停止了依諒

闇也

十二月十一日辛巳月次神今食延引依本官雜

穢也

廿四日甲午今夜西寺塔燒亡件塔破壞之後遙

送年序不知修營事云々

廿八日戊戌行幸今出川殿依御方違也幼主據

闕腋先規不分明云々然而嘉義記據由有所見

云々仍被用歟

文曆一年十一月五日改元

正月一日庚子依諒闇無節會小朝拜院攝政無

拜禮事上皇元日御藥於諒闇御裝束也御隨身

著吉服參仕之永萬例也

主上御藥間據御袍上召生氣御衣云々

二月十四日癸未今日未刻北野宮神殿禮殿小

社廻廊拂地燒亡火本北方在家也於神輿并御

正躰等者奉取出朝日寺同燒亡御輿暫御座林

中入夜奉安寶藏云々餘焰及結政外記廳等然

而打消了

百練抄卷十四

十

十六日乙酉於院殿上有北野火事定云々

十七日丙戌於軒廊被下北野火事造假殿可奉

請歟云々吉廻廊間數字舊跡可滅歟云々吉

造營事管代長者大藏卿為長卿給長門因可致

其沙汰之由被仰下了

廿一日庚寅今夜亥刻北野假殿遷宮云々

三月二日庚子今日於前関白家一条一条有一切經

供養事唐本又等身軀迦像一躰奉関眼七僧法會

六十僧云々

四月八日丙子天王寺執行明順為敵人圓順前執

行被誅云々圓順者長吏官前度寺務之時致狼籍有其怨者也彼時明順依長吏之訴被處遠流不隨勅命不赴配所誇張之處長吏還補之後忽被原免被補執行今及此事末代之法也五月四日故女院旧院不被薨薨蒲世俗之說終焉御所不薨云々但建久六条殿薨之嘉義堀川院薨之治義高倉舊院不薨云々廿日戊午廢帝崩御云々は佐渡院御子御母儀東一条院也兼久乱逆之後御同所于女院九条殿御心勞之外無他御年十七未及御首服也

百練抄卷十四

土

六月二日乙巳於天王寺有合戰事故明順縁者字士生藏人率二百餘騎襲圓順圓順引籠御寺兩方合戰或被疵或失命云云四日辛未北野宮御殿以下上棟也七日甲戌祇園神輿入御如例少將并御殿在地人等結構殊加修營今度引入北方云々七月二日己亥花山院侍後入道故中納言家經称念佛上人舊頃城之類被行過法仍令却離件法師處遠流餘黨等可追却於洛外之由被下宜旨

五日壬寅大嘗會行事所始也上皇御幸法勝寺諒闇御直衣公卿已下供奉人皆著諒闇服永万之度用吉服今度如此人々不甘心十五日壬子上皇御不豫事世以驚之自去五日御脚氣不快近日六借御云々十八日乙卯今日院御所大炊御門上棟也前相国以上佐国被造營御不豫之間不被憚此事如何廿九日丙寅院御壇所燒亡云々自昨日被始五

百練抄卷十四

土

壇法又神宮已下有御祈事八月二日戊辰洛中物念也関東貴女御号去月廿七日夭亡依難産也在京武士悉以馳下了四日庚午北野祭事有觸穢去一日渡御旅所而天下穢氣出来付宮寺可被行之由被仰下云々六日壬申院御所法花供結願也座主宮為大阿闍梨諸卿群參被引御馬云々然間畫方仙洞物念或云去夜御絶入今朝又有此支及酉刻已御事切給春秋廿三性裏寬仁政無苛酷女院諒闇事一暮未滿万人含悲

十一日丁丑入夜雨降故院山禮也主上召錫紵御別殿

十五日辛巳放生會被付宮寺了

廿二日戊子故女院周忌御法夏也

今夜主上除御錫紵還御本殿

九月三日己亥無御燈御楔依諒闇也

十日丙午故院五七日御佛事北白川院御沙汰也

今日御隨身左近將監久清奉為先院於法華堂修小善諸卿參會大藏卿為長卿書御願之旨趣

百練抄卷十四

十三

其狀非御願文非諷誦更無先規事也

今日八幡宮御殿鳴動云々

十一日丁未例幣延引大嘗會又以延引於建禮門前被行大後

十六日壬子寅刻大地震万人驚遽古文不輕兵草大喪云々

今日前藻壁門院周忌御佛事也又於土御門舊院後堀延臣有結緣經供養事其次被供養故院震筆御經是奉為女院御菩提被染勅筆也此次供養人以不甘心云々

十七日癸丑公家於法勝寺被修御齋會依故院御法事也

十八日甲寅故女院御正日也

廿四日庚申故院七々御佛事也繁茂法師調新車十二兩令引御前僧云々

十月一日丙寅今日所々山伏等數百人群集法成寺辺群參摸政家有訴訟事是大和国住人父遺財相論寄付金峯山之故云々曉夕吹法螺衆庶驚耳目尤奇恠事也

入夜禁裏有物恣事主上自昨日御不豫今夕御

百練抄卷十四

十四

邪氣殊相加給云々或人云去八月以後春日山廉好突損人法花會堅義者被突損之間及期達乱云々

七日壬申客星出現云々但司天輩不見之維範朝臣子息家氏見之云々

十五日庚辰卯時東方虹司天輩申白虹之由維範朝臣申不然之由

廿六日辛卯今夕戌刻當巽方有鳴動事或疑雷聲或將軍塚鳴之由後日宇治殿御墓所震動之由申上云々

十一月五日庚子有改元事天福字自始世人不  
受諒闇相續為其徵之由口遊但諒闇中共例希  
云々

九日甲辰中納言入道定家於前關白家披覽新  
勅撰先院御時兩殿下監臨有用捨事被切并百

首云々又有被入之人云々

十六日辛亥別當參議右兵衛督基氏出家年廿  
忠臣不事二君之謂歟

十二月十二日丙子內大臣已下參入有伏議小  
朝熊社神鏡事也

百練抄卷十四

十五

廿八日壬辰住吉社遷宮神室使發遣明後日可  
省遷宮者

嘉禎三年文曆二年九月十九日改元

元年二月九日壬申春日祭左中弁兼左少將實雄  
朝臣為上卿代被參行如法辰刻進發弁侍隨身  
前駟諸大夫前行直衣柏夾紫奴袴帶劔去四日  
下禁色宜肯見物之輩濟々焉

十日癸酉武者小路高倉邊燒亡藏人右佐高嗣  
宿所同燒畢延尉遣此難先例希云々

十一日甲戌軒廊御卜醍醐御陵鳴動事去年十

一月廿八日同廿九日云々  
十七日庚戌公家於石清水宮被供養大般若經  
長曆義保寬治等例云々

三月五日戊戌聖寬法印入滅年六十九

廿七日庚申已刻許洛中物忌也攝政自去月下  
旬不例雖有祈療治無効驗氣集燭之程危急及

曉更薨去年廿六

廿八日辛酉前關白被還補攝政云々希代例也  
四月三日乙丑故攝政山禮也祭以前有此事先  
例如何

百練抄卷十四

十六

八日庚午關東五大堂鎮守神室御裝束為神祇  
權大副兼直宿祢沙汰調出發遣了或人云去月  
廿日以下大和國高市郡天武天皇御陵為群盜被  
穿鑿搜取重宝云々多是金銀之類云々

廿一日癸未今日藏人右佐高嗣神祇權大副兼  
直宿祢大夫史李繼等於攝政家沙汰諸社幣物  
事

五月四日丙申雷鳴雹降其勢如梅子辺土作物  
皆以折損云々

十二日甲辰奉幣日前宮使先例神祇官人也今

度被用紀氏者造督遲引之由被謝申之

六月三日甲子武士多發向八幡方是南都領大住庄與石清水領薪庄水相論遣實檢使可被裁許之由被御下之處南都惡徒等可燒拂八幡領之由風聞之間為防禦遣勇士也官軍以前衆徒燒拂八幡領薪園畢在家六十余衆也其上殺害神人了官兵又生捕大住庄官等云々南都弥腹立奉行人可放氏之由結構不當支也  
十一日壬申月次神今食延引依本官職也  
十九日庚辰今日被始行大嘗會事

百練抄卷十四

十七

廿五日丙戌大嘗會行事所始也

廿九日庚寅畫御座上遺犬矢事於藏人所被行

御卜

閏六月三日甲午於藏人所造日前宮國司被行

御卜日來度々被決云々其趣相違國司不遂土

木仍今度被決龜卜官卜云一二共不快三吉

依官卜家清朝臣奉造營事云々

十九日庚戌大夫史李繼為御使參向八幡之間

為神人被追歸了

廿日辛亥洛中馳走八幡神輿已下御宿院明日

可有御入洛云々左少弁兼高為御使馳向了神人等訴訟六ヶ条也

廿一日壬子伊賀國大内庄所當三百余石為散神人怨被寄進八幡宮畢

廿三日甲寅兩源大納言定通為御使被參八幡

宮神人等猶不義伏云々神輿震動之由風聞

今日民部權少輔親嗣與義濃守惟長有鬭諍事

互以挈攬乱本鳥云々於攝政家有此事末代狼

籍也

廿七日戊午今日八幡神輿可歸座之由有沙汰

百練抄卷十四

十八

可被寄附因幡國云々自去廿日數日御座宿院

希代支也還御儀如放生會云々

今日平中納言範輔卿出家自去春有憔悴之氣

逐日無力之間遂素懷了

廿八日己未神輿歸坐云々公家御衰日也如何

七月三日甲子八幡宮權別當宗清被補正負了

但幸清存生之間寺務不可相違之由被御下了

五日丙寅八幡前別當幸清入滅年七十九寺務十五

年當職卅三年背有腫物訴訟之間若不叶神

慮歟



廿三日甲申日吉神輿已以入洛仰武士被相禦之間為飛礮官兵多被打損任法懸合之刻於近衛院法成寺宮仕法師多被疵或被切伏了各奔神輿於衆徒者自河原逃散洛中之騷動也江別守護人信綱法師息左衛門尉高信於高嶋郡及傷神人之間任建久例可被行死罪之由山門訴申之故也八王子神輿觸穢血氣多懸云々

廿四日乙酉今晚神輿二基奉渡祇園於八王子御輿者有死穢疑奉安置于祇陀林佛前道俗成群參拜云々

百練抄卷十四

十九

廿五日丙戌山門閉柵道々引逆母木云々

廿七日戊子左衛門尉高信可被處速流之由被仰下山門頗落居歟

今夜春日賢木奉遷移殿衆徒訴訟與盛云々此一兩月春日山木二千四百余本枯損云々尤有其恐歟

八月四日甲午北野祭延引依山門訪也

五日乙未隆義法印為御使登山仰合子細之間衆徒一揆諸堂開戶神輿自山上歸座本社云々八日戊戌高信配豐後國奉禦神輿之先陣武士

右衛門尉遠政配備後國了

十日庚子北野祭也

十二日壬寅諒闇終大拔也

十五日乙巳放生會如例

十七日丁未寅刻入道大相國今出川亭拂地燒已

十八日戊申今日祭主隆通朝臣使等於官廳與

前左府下家司等有問注事依為重事大井已下

著座是前左大臣家使道平為祭主使被殺害畢

九月七日丁卯大嘗會大奉幣也

百練抄卷十四

二十

十三日癸酉被定大嘗會御襖次第了

十九日己卯有改元事嘉禎

十月十四日癸卯行幸官廳來廿日御襖之間為出御所也

今日祭主隆通朝臣輕服事可被改補哉否有群議

廿日己酉大嘗會御襖也婦小節下右大臣實氏

女御代右大將家嗣女祭主代神祇權少副仲宣

朝臣宮主兼躬修御襖

十一月十一日庚午三社奉幣依大嘗會御祈也

攝政有身憚母后可行給之趣被載宣命辭別  
十五日甲戌西方有拔穗使入洛有大掌宮點地  
事

十七日丙子殿下登覽齋場所

廿日己卯天晴月明今夜大掌會也母后同與神  
樂事幼主如成人攝政依輕服事不被參入於昭  
訓門廊代恆被行之長元例也但有別勅被參迴  
立殿云々

廿一日庚辰神祇權大副隆繼朝臣奏天神壽詞  
祭主隆通朝臣輕服之間隆繼奉仕此役未曾有

百練抄卷十四

三十一

事也

十二月廿一日己酉南都蜂起春日御賢木著御  
木津去夏大住庄與新庄相論事聊令落居之處  
去比八幡使向大住庄之刻又及闖亂殺害春日  
神人之故云々

廿四日壬子日前國懸遷宮無為被遂行了

依春日御賢木著御宇縣京官除目定考今年不  
被行尤不快也平治治養有此例云々

廿五日春日社御神木依渡御宇治武士等引橋  
堅護之藏人頭左大弁為經朝臣為御使參向云

云

同二年正月一日己未依春日御事藤氏公卿不出  
仕節會無出御被垂御簾內并土御門大納言  
被止音樂又無拜禮衆徒等奉并御神木神室於  
宇治北門退散神人少々奉付平等院備神供云

五日癸亥無叙位依御神木事也

七日乙丑節會無出御被止舞樂依同事也攝政  
無御參內

八日丙寅御齋會始也南京僧不參講師闕如道

百練抄卷十四

三十二

室法服東大寺俄參仕元曆成室參仕例云々

十四日御齋會終無內論義并右近陣事

二月七日甲午公卿勅使神室行事所始也

九日春日祭依南都衆徒蜂起事可為次申日之  
由被宣下

十日親奠無宴座并堅義依南都事也

十一日戊戌列見無宴穩座依同事也

十九日丙午春日社與福寺東大寺已下扉等皆  
閑之衆徒訴訟落居之故也

廿一日戊申春日御神木自宇治還御本杜々司

神人等少々扈從衆徒不供奉

關東有嚴密之命衆徒成恐怖之思歟

後日或人云昨日亥刻熊野新宮證誠殿之龜黃

金光廣一尺長五尺差天照白砂云々

廿七日甲寅權大納言家良卿參入被立三社奉幣

使春日大原依春日神木御歸座事也殿上侍臣

為使

三月三日庚申春日祭也去月依御神木事延引

了

十六日癸酉公卿勅使祭遣權大納言實基卿

百練抄卷十四

二十三

廿二日己卯勅使參宮日也內宮廡五縣不具穢

出來延引

廿三日庚辰沒日參宮甚雨之間上下紙鼻云々

未曾有事也

廿四日辛巳今日大原野前座主兼圖於日吉社

被供養百部如法經金泥建一文余石塔被奉納

其內故中山入道基房關白七宝塔同被安置此內天

下貴賤攀首參集云々

四月八日甲午暴風雷雨未刻雹降其大如母子

萬人驚目

十四日庚子寅刻春日社假殿遷宮也神宮預中

臣祐隆奉抱御縣云々正預能基須依其役也而

代々祐隆一族參仕之由訴申云々

十五日辛丑為實檢天武天皇御陵被遣勅使參

議左大弁為經諸陵頭惟宗盛能舉察下部參內

稱康平之例不及穢氣沙汰歟

六月五日庚寅六角堂供養也

廿日乙巳雷落平野社東林蹴裂招樹了

廿四日己酉中山觀音堂辺稱行基菩薩遺骨細

懸安置之參詣之輩自由取出之如粉物云々又

百練抄卷十四

二十四

以鹿宗集置六角西洞院武士号之宗市群集飽

食洛中不淨只在此事三条西洞院為攝政家之

間可被制止云々

廿七日壬子春日社正遷宮也

七月廿八日癸未春日神木入洛與福寺金堂南

都自去年以來與八幡宮訴訟未達宿意為世不

便歟

八月七日辛卯山門衆徒打付諸堂日吉神與奉

迎山上云々

十月六日庚寅被法華會停止依南都訴也

十日甲午依報徒事不被始行維摩會事奉幣三社被<sub>三</sub>告申

十六日庚子大仁王會也維摩會停止延曆廿年以後無此例云々入夜寺中衆徒退散神木猶座與福寺云々

十一月二日乙卯今夜春日神木歸座了關東之下知嚴密之間雖無指裁許如此

三日丙辰權大納言為家卿參入被立春日社奉幣先被<sub>二</sub>定日時使

廿九日壬午祈年穀奉幣也春日社今日以後可

百練抄卷十四

二十五

用公卿之由被仰下依御神木事也參議從三位宗平卿為使

十二月六日己丑宜旨春日若宮祭宜令奉官幣前日令發遣使

七日庚寅佐渡院姬宮諦子內親王准后宜旨云云

八日辛卯被行維摩會左少弁李賴為勅使

廿一日甲辰諦子內親王院号为明義門院

廿六日己酉左大臣已下參入有仗議小朝熊神

鏡犯人罪科事也

同三年正月一日癸巳今日節會也然而無行幸三日乙卯撰政家臨時客也

十四日丙寅撰政姬君被渡左府亭庇車前駛入人出車三兩殿上人五人扈從每事新儀也

廿六日戊寅左府露頭之儀也令向一条亭給庇車直衣前駛六人雲客三人有引出物皇后宮權

大夫實持卿取銀作劔授左少將資俊朝臣云々三月八日己未八幡行幸點地也

今日加前大僧正慈圓有謚号事<sub>号慈鎮和尚</sub>九日庚申兩社行幸延引

百練抄卷十四

二十六

十日辛酉今日撰政上表長和例也被讓補左府被<sub>下</sub>撰政詔給兵仗

四月九日庚寅今日從二位藤原家隆卿薨和哥仙也臨終正念<sub>十年八</sub>

廿三日甲辰石清水行幸也皇后同輿撰政騎馬廿四日乙巳有片舞事有勸賞

廿七日戊申今日栗田宮遷座東方地本所近河邊依有洪水之恐所奉遷也

六月一日庚辰卯刻大地震万人驚恐之元曆以後無如此事

卅日己酉仰五畿七道國々司及民部卿藤原朝臣即從等可令搦進山門惡徒由被下宜下  
七月十七日丙寅今夜鷹司院御入內養母儀也  
源大納言已下諸卿十余輩供奉宜陽門院御同車

十二日左大弁宰相為經迎按察使定高卿女親母雅卿遣車侍三人於彼九条第

八月五日癸未於天王寺有合戰寺中死骸充滿其機定及洛中歟是前執行明順矢亡後彼惡黨等百余人乱入寺中可有放火之企之由普以風

百練抄卷十四

二十七

聞渡辺惣官遮以襲寄誅惡徒云々

十月二日庚辰宜秋門院東一条院前通家關白并准

后右府已下露々被參諸天王寺京出夜中各被

刷之應德京極大閣被參例云々

廿八日丙午今夜六波羅地藏堂燒亡清水坂南

方在家堂舍以為灰燼

十一月十一日戊午賀茂行幸也

十四日辛酉行幸北山西園寺明日一日御逗留儀也

十六日癸亥還御大理公基卿叙正三位奉家賞

也

廿四日辛未伊勢齋宮卜定後堀川院皇女御上卿內大臣其儀如常

十二月一日戊寅日蝕不正現自去夜雨降定蒙僧正奉仕御祈法驗至也

十三日庚寅前內府通光於石清水宮被供養大般若一部自筆圓玄僧正為導師

廿九日丙午主上七歲御書始也侍讀刑部卿菅原淳高卿坊時學士也雖不遇踐祚去職猶依位次被召之前坊學士長倫卿頗有鬱胸之氣尚供

百練抄卷十四

二十八

右大弁藤原信盛朝臣參仕之

曆仁一年嘉禎四年十一月十八日改元

正月一日戊申小朝拜前關白被列云々

七日甲寅節會之間新大納言高實卿於仗座邪氣更突万人属目云々

廿三日庚午按察使定高卿薨四十

二月六日壬午大納言實經任左大將於一条第

被設饗兩太閣會合希代事也

七日癸未中大夫判官友景相具犯人天武山陵

參大理門前見物之車塞路壯觀也明日春日祭

也此事如何

十一日丁亥遷幸閑院自去年秋比為修理以帥卿冷泉万里小路亭為皇居帥卿隆親土木之効微々仍自去正月前大相國被奉作事知宜法師不日終功人以感歎先被行本家賞遷幸之後有造營賞

十七日癸巳關東將軍上洛類經 家實通家兼經良平西太閤攝政相國於機數被見物天下貴賤群集人不得顧車不得迴修理大夫時房朝臣已下可然之大名一人不遍參洛云々

百練抄卷十四

二十九

廿三日乙亥將軍初泰內直衣綱代車鸛文今日被還任權中納言兼右衛門督

廿六日壬寅將軍被補檢非違使別當

廿八日甲辰大理拜賀也

閏二月十六日壬戌鞍馬寺燒亡毗沙門靈像奉取出云々大治元年以後無此支歟

十八日甲子今日被盜取畫御座御劔云々

卅日丙寅大風法成寺步廊顛倒了

三月九日甲申禪定殿下道末姬君号香御前令入入野精進屋給左大弁宰相為經同時參詣之間奉

相伴公卿尤大弁宰相殿上人民部權少輔高經諸大夫三人義濃守惟長醫師權侍醫和侍三人前大隅守成季伊勢守大夫判女房二人宜旨局官行範左衛門尉中原季有宗房卿後室今一人下

廿五日庚子姬君御前令泰著熊野給廿八日癸卯行幸春日社翌日片舞之間木工察屋忽以顛倒雖然人以無誤公卿起座之後有此事之故也

四月三日戊申姬君御前御還向十日乙卯道末余太閤法助若君為仁和寺宮御弟子非皇胤

百練抄卷十四

三十

之人無此儀之由人以不審唐庇車大閤同車公卿扈從

十四日癸未按察定高卿後室入滅

十九日甲子吉田祭也近衛大閤家實被獻金銀幣相

具白妙幣平文宮四令置納言初度三社祭如法近例也

廿五日庚申一条太閤於法性寺別庄被落飭年

來之素懷云々戒師飯室前大僧正良快行年四十六法名行惠保延例云々

六月五日戊申將軍被參春日社布衣輩世人隨

兵百騎云々被行御神樂云々



十五日戊午祇園臨時祭使兵部權大輔季盛依  
無御湯殿不被行御禊也

廿三日丙寅禪定太閤若君於仁和寺宮出家法良實實經

助法良實實經右府左幕下被相具云々

七月九日壬午撰政宇治入也人々見物云々近  
日一条大路大宮等大路要害所立兵士屋簷火  
是為防禦群盜也諸人安堵之計也

十三日丙戌法成寺內法花堂顛倒

廿五日戊戌今夕禪定太閤初被參內緇素前駢  
各四人僧綱扈從云々

百練抄卷十四

三十一

廿六日己亥今夜於六角堂紀伊前司資繼被殺  
害了不知誰人之所為

八月二日甲辰將軍於春日社被供養一切經大  
藏卿為長卿作願文百僧供養也

廿五日丁卯將軍被參詣吉田社被引神馬白妙  
幣如例

九月八日庚辰初齋宮禊東河未冷泉入御左近府

十三日乙酉天晴月明於法性寺一音院有作文

題云山家夜月題中又有三首和哥

廿二日甲午初齋宮禊東河未一条入御野宮月中

兩度禊天祿例也

十月三日庚申鞍馬寺上棟也

北白川院陳子崩御御年十六

十三日甲寅將軍下向關東

廿三日甲子北白川院被奏遺令主上召錫紵廢  
朝警固如例

十一月十八日己丑被止五節依北白川院御事  
也

廿三日甲午有改元事為曆仁元年依天變也

十二月五日丙午七佛藥師法於山上被結願依

百練抄卷十四

三十二

天變御祈也僧正慈源七佛藥師法賞置阿闍梨三口之  
由宣下神今食以前此事如何

延應一年二月七日改元

正月七日戊寅於北陣亂彈雜犯之間使廳下部

搦捕油賣一人稱左府既飼口被奪返之上奉行  
官人大志景種被解却見任了

二月七日丁未有改元更曆仁世俗云略人有憚

且上下多有矢亡之聞仍被改延應了但猶依變

災改元之由被仰詔書

十一日辛亥今日己時有暈司天輩或奏文暈之

由或申白虹之由

廿二日壬戌隱岐法皇崩御春秋去義久三年以後已及十九年天下貴賤誰不傷哀哉

廿三日癸亥今夜宜陽殿代塗籠為竊盜被穿開

行幸御裝束等被搜取了仍裝束司史生官掌并

調云々

三月十九日巳丑禪定太閤并准后被泰長谷寺

七日可有御參籠云々

四月一日庚子平座之次長谷寺住僧叙法橋可

置阿闍梨三口之由被宣下

百練抄卷十四

三十三

二日辛丑主上聊有御不豫事被行五龍祭等

九日戊申平野祭內裏依無御湯殿不被行御禊

使侍從伊長

廿七日丙寅行幸法性寺依御方違也禪定太閤

有參拜右中弁高嗣朝臣兼松明有勸賞等

卅日巳巳吉田社假殿遷宮也

五月十六日乙酉隱岐法皇御骨左衛門尉能茂

法師奉懸今日奉渡大原籠禪院云々

廿九日戊戌侍從中納言為家參者召大外記師

兼仰云以隱岐院可奉号顯德院者依治義崇德

院例無勅書只外記兼存許也件謚号字式部大

輔為長卿勘申

七月五日壬申被行僧事園城寺實藏院被置有

職三口禪定太閤御所天名花臺院同置三口同

祈懺盛无法賞今日法成寺咒師參入吉田社施曲五手也依太

閤御祈也

十日丁亥禪定太閤奉幣五社石加稻春日被祈申東

福寺上棟事來月五日

廿七日甲午今日准后辭封戶被讓申仁和寺阿

百練抄卷十四

三十四

閤梨法助即被下勅書了

八月五日壬寅東福寺上棟也左大臣巳下上達

部十人參入藤中納言資賴作進式云々

十七日甲寅加賀国白山社燒亡新造室殿已終

其功及金物沙汰假殿燒亡尤有恐事也

十九日丙辰齋宮群行定九月十六日又寮官并次第

使裝束司等除目也

九月三日巳巳二品親王尊性天王薨年四十六

於遺跡領者太政僧都尊惠相兼云々

十六日壬午齋宮群行也行幸太政官廳被行此

事攝政被著齋王額梯云云

廿日丙戌武士馳走天王寺別當猶可被付山門之由衆徒訪申日吉神輿座中堂已可奉振洛中之由風聞仍為警固也

十月四日庚子禪定太閤參詣春日社被供養金泥大般若經一部又被行十六會講七ヶ日也藏人次官頭嗣奉行也

十二日戊申日吉神輿去夜歸座本社天王寺別當事衆徒蜂起關東可加懲肅之由被下知之間落居欵

百練抄卷十四

三五

廿二日戊午二品親王尊性薨奏也主上召錫紘

宮主兼躬奉仕御被廢朝三ヶ日云々

十一月二日丁卯祭主隆通朝臣叙從三位臨時

上階代々不吉事也為世不便欵

十二日丁丑皇后宮院号御惱危急之間御出家

云々為式乾門院

十五日庚辰吉田社遷宮也

廿四日巳丑禪定太閤明日為受戒下向南都

仁治三年延應二年七月十六日改元依早龜也

元年正月四日巳巳成刻彗星見坤方光芒三丈許

万人驚目五六日天陰之間彗星不見八日又出見芒氣著東方二丈餘或時一丈余也

十五日庚辰御節供也吉田社第三神殿御戸不被開元日七日安平被開了今日澁固有其恐事也

廿一日丙戌祇園西大門之小屋火事余焰付西大門打消了

廿三日戊子修理大夫時房朝臣逝去

二月七日壬寅於攝政直廬有群議變災之間可被行德政事也

百練抄卷十四

三六

三月九日癸酉公卿勅使召仰也尚侍鈴子被申

三位拜賀左府已下扈從云々寬弘天慶等例云々

十五日巳卯公卿勅使進奏權大納言供奉人等

行粧裁錦繡威超々

十七日辛巳入道太政大臣良平於播列薨年五

十七

四月三日癸酉梅宮祭也入夜於攝政直廬有群

議高麗國牒狀事也

廿一日乙卯親王宜旨暉子內親王後堀川能子

內親王後高倉院御子

廿六日庚申禪定太閣被參詣春日社去月入道相國良平有御輕服之沙汰然而不被憚歟

五月十八日辛巳安嘉式乾兩女院御幸有馬溫泉云々

六月九日壬寅祇陀林內新造塔供養也有舞樂云々此四五年之間勸進上人道心唱知識終其切

十六日己酉賀茂社御塔供養也是永久聖主經始之後年月多積攔楯漸頽爰有上人勸進之已終其切上卿已下參入云々

百練抄卷十四

三十七

廿八日辛酉有軒廊御卜去月五日未時許熊野山湯殿谷火出来庵室十分之九燒失之間御殿移火參詣之人打消了御躰出河原其夜御座禮殿事也

七月三日乙丑被行五龍祭依炎旱也

十四日丙子奉幣十一社為祈雨也又室生龍穴

被奉官幣使大中臣氏人

十六日戊寅有改元事依炎旱也為仁治元年

廿日壬午入道相國於北山被始逆修

八月十一日壬寅入道相國逆修結願也禪定道蒙殿

兼趕良實下撰政左府已下諸卿廿余人著座云々

十一月一日庚寅朔且冬至也御曆案權曆博士定昌已下昇之安倍氏不可昇之由賀茂氏群訴之故也

廿三日壬子大原野祭也於假殿被行之未曾有事也他社有其例被准據云々

廿七日丙辰文章博士經範朝臣被聽昇殿上薦翰林光兼被超了

十二月六日被發遣伊勢奉幣使依明年御元服也

百練抄卷十四

三十八

八日丁卯今日關白前太政大臣可被任太政大臣之由有勅使於一条第有定事

十四日癸酉任太政大臣節會也神宮飛脚到来云内院外院御輿宿荒壇二間去十一日子刻燒

亡奉出御躰於河原火消之後還御神室等散云々

廿二日辛巳神宮外院火事之間奉勅御躰御元服之間音樂如何之由被問諸道云々

廿四日癸未左大弁忠高卿為勅使參向神宮依火事御訪也今度震筆宣命自今日癸朝五ヶ日

也  
卅日己丑伏議依神宮火事御元服音樂有無支也

同二年正月一日庚寅朝間時々雨降節會内并左

大臣勤仕云々

五日甲午主上

十一歲

御元服也加冠攝政太政太

臣理御鬢左大臣

良實

理髮内藏頭賴氏朝臣已刻渡

御北廂事了有御遊相當御忌月可止音樂歟之

由有豫儀召諸道勘文遂不被止之

七日丙申御元服後宴也上壽權大納言雅親卿

百練抄卷十四

三十九

年六十二

十七日丙午獻策也文章博士經範朝臣問秀才

高正大學頭正光朝臣問秀才在氏

天台座主慈賢辞退仍以慈源僧正還補宣命上

卿吉田中納言為經少納言高經即高經賜宣命

登山

二月四日壬戌祈年祭也本官東廳去比有卅日

穢稱<sub>穢</sub>滯中門於西院被行神事伊勢幣自北門

退出未曾有事也

五日癸亥天晴安嘉門院御幸八幡宮寺被用御

車公卿前内大臣<sub>家嗣</sub>公前駢<sub>三</sub>吉田中納言<sub>為</sub>  
神各駕車殿上人八人北面一人侍四人<sub>已上著</sub>  
出車二兩<sub>各出</sub>前駢在之<sub>淨衣</sub>

十一日己巳日晴鷹司河原橋供養也導師宗源

法印自去々年入道兵庫頭重房勸進之云々

十二日去比鹿寫社燒亡無跡以後無此災但不

開之御殿不燒云々社司不參會於御躰者供僧

等奉取出云々

十五日癸酉南都常樂會入道相國被參被進會

料米百石云々

百練抄卷十四

四十

三月三日辛卯前座主慈賢他畧云々

十二日庚子攝政家奉幣春日社被申鹿嶋火事

十八日丙午石清水臨時祭也使大炊御門少將

行通朝臣勤仕之

廿五日癸丑法勝寺禪定殿下一身阿闍梨官符

請印上卿吉田中納言為經少納言高經也

廿七日乙卯奉幣三社<sub>春原</sub>被祈謝鹿嶋火事

四月三日辛酉攝政家奉幣大原野吉田等被祈

謝鹿嶋社火事

九日丁卯稻荷祭依觸穢可延引之由被仰下

十五日癸酉賀茂祭也迎衛使少將經李朝臣勤仕云々

十六日甲戌禪定太閤於東寺有灌頂行遍僧正為大阿闍梨諸卿多以參集後朝被仰勸賞云々去八日令補阿闍梨給只奉書禪定太閤不載御名字

十七日乙亥兼平任大臣節會也內弁大宮大納言公相卿勤仕云々

六月八日甲子熊野新宮燒亡

十八日甲戌天下貴賤今日持八戒各淨食也南

百練抄卷十四

四十一

都僧有夢想云々

廿二日戊寅於官廳推問神宮祢宜等左大弁經光朝臣頭弁定嗣朝臣大夫史李繼等參著去年外院火事条々也

七月廿日丙午甚雨之間平野行幸延引

廿二日戊申天晴行幸平野社神馬可留社家之由被仰下社家稱無例返上云々

廿六日壬子大原野行幸也神馬依仰社家給預云々

八月四日己未勸修寺八講結願也頭左中弁定嗣朝

臣入寺舟波守高雅扈從侍十人所衆六人瀧口七人召具云々

七日壬戌今夜丑刻櫟谷宗形兩社燒亡御躰同燒失了是松尾末社也

十四日己巳八幡放生會上卿吉田中納言為經白河下々向其儀駕毛車前駟三人侍五人雜色四人召具云々

九月六日辛卯於川合社前河氏人等取魚之間檢非違使為李祢殺生禁斷之由無是非擲取不被斷罪者氏人五十余人不可隨神事之由書起

百練抄卷十四

四十二

請文仍為季被配阿波国云々

十四日己亥左大臣已下於仗座被定申神宮火事之間布衣輩參入正殿事

十月十七日辛未被發遣鹿島香取兩社奉幣使神祇權少副大中臣行輔被謝申火事也

廿六日庚辰撰政春日詣也御前上官右方大外記明兼少納言高經左方左大史李繼宿右中弁時高朝臣扈從公卿新大納言實持卿已下八人殿上人定嗣朝臣已下十七人諸

大夫十四人各布著御社頭之間及深更有動搖事万人周章暫令起座給



十一月四日丁亥右大將實基拜賀也殿上人八人前駟八人番長佐伯光文云々

十三日丙申終日大風吉田祭也南都大炎上一乘院已下諸坊舍多以燒亡奥福寺西宝藏燒失本寺僅免余燭

廿二日乙巳陰明門院密々御幸日吉社七ヶ日御參籠殿上人前中將賴基朝臣已下三人北面四人侍二人供奉權中納言冬志柳原中將基平朝臣泰會云々

廿四日丁未天晴陰明門院御參籠日吉社之間

百練抄卷十四

四十三

今日被供養大般若經御導師隆永法印題名僧十口公卿坊門大納言公雅權中納言冬忠殿上人頭基平範保等朝臣高經取御布施事了還御之後御宮廻之次被奉納大般若於十禪師宝前廿八日辛亥近衛太閤出家家實年六十三於戒師前大僧正良快法名圓信此七八ヶ日御依風氣忽有此御事云々

廿九日壬子天晴早且陰明門院御宮廻大宮十禪師許也其後還御先著御近衛富小路殿御忌日也明日可有還御坊城殿云々

卅日癸丑被行非常敕依禪定太閤所惱也雖非外戚執政之故異他之故也

十二月一日甲寅被定女御入内事御名字被叙後三位事

十三日丙寅今夜女御入内也實仁故接政御女母儀為猶子行同三相府已下扈從

同三年正月七日庚寅主上御不豫之間節會無出御昨日於渡殿御顛倒云々

九日壬辰自夜半天下物忌諸社被進御誦經及曉更御絶入云々有十三社奉幣雖伊勢幣帛被

百練抄卷十四

四十四

召御驗者天下暗然如失日月光如夢如幻以飛脚被仰關東云々非言語之所及

十日癸巳劔璽暫奉渡別殿近將奉守護内侍所不奉渡他所數日御同所有其恐者歟

八省御齋會昨日已後無沙汰天曆年中母后御事之時延引後日被行之也此外都無先規云々

十一日甲午伊勢齋王皇子聞此御事退下御擲筭殿云々

十二日乙未禁裏不議定云々被待關東左右之間每事有若亡可哀云々

數日空位未聞先規上古兩三年有此事不似今  
度儀其主互相讓不受神器之間神宮火事之時  
御躰出御川原如此之徵歟祠官違失其咎及國  
家非先格之所載哉

十九日壬寅今夕關東飛脚參洛々中馳走不弁  
是非或云土御門院宮座兼明門院在子御母儀故宰  
相中將通宗朝臣女也明日可有踐祚儀者  
今日先帝諡号為四條院云々

嘉元二年五月十日以權右中弁宜房朝臣本書

百練抄卷十四

四十五止

寫校合畢

百練抄卷第十五

後嵯峨院四年

仁治三年正月廿日以後寬元四

百練抄卷十五

一

後嵯峨院仁四年

土御門院皇子御母藤原泰議左近衛中將通宗卿女通子

贈皇仁治三年正月廿日踐祚廿三今日先御元

服同日以攝政兼經更曰攝政同年三月十八日

於太政官廳即位同十月廿一日御襖同十一月

十三日大嘗會寬元四年正月廿九日讓位

仁治三年正月廿日踐祚御年廿三今月九日以後空位

十二日被待關東飛脚之間也當日於兼明門

院御元服加冠左大臣兼實理髮藏人頭左中弁定嗣

朝臣其儀畢召攝政庇車渡御冷泉亭權大納言隆親卿家

百練抄卷十五

二

諸卿群泰大行皇帝御在所關院率三種宝物被

泰新帝御所步行聊雖降雨不及衣濕仍晴儀也

即被下關白詔

廿三日丙午今日被覽兼經吉書關白宿侍

廿五日戊申長實四條院凶禮也自關院西門北方出

御糸毛車左右大臣以下供奉如在之儀也前內

大臣家嗣權中納言為經權右中弁顯朝朝臣前

佐渡守元国等奉行三条西洞院右大將實基亭

為華家右京大夫時兼卿計申次第事云々

二月二日甲寅被奏四條院遺詔

三日乙卯大原野祭可用下卯之由被宣下  
四日丙辰祈年祭延引於建禮門被行大赦

五日丁巳叙奠被停止之

九日辛酉率川祭停止

十三日乙丑園并韓神祭停止

今夜於關白直廬御即位間事年中公事用途事

諸卿群議

十四日丙寅四條院五七日法事式乾門院被修

之

今日政始也

百練抄卷十五

三

十八日庚午今夜月色赤如蝕無光秀薄蝕毀

廿五日丁丑陰陽師等召禁裏有評定事此皇居

冷泉萬御連宿來月五日滿四十五日而十八日

里小路御連宿來月五日滿四十五日而十八日

御即位之間官廳可為御所相當御忌方鬼吏可

省憚哉否事也頭忠尚朝臣天文博士家武朝臣

等申云官廳非指清涼殿諸司屋也不可憚之權

助良光朝臣等申云始御宿猶可有憚嘉義皇居

大炊殿大掌會間大極殿依相當大將軍方不滿

一氣暫遷幸小六條之由申上云々

廿七日乙卯大原野祭也

三月一日癸未被定御即位日時等今夜行幸今  
出川亭依御方違也

三日乙酉有御燈御襖

五日丁亥除目始也左大臣被候執筆今夜戌刻

行願寺燒亡僅所殘者兩方門惣社計也住僧等

所為放火云々

七日己丑除目入眼也今夜成功輩一切停止被

略難任又女官除目也

八日庚寅禮服御覽天子御冠破損無其形仍可

被新調云々

百練抄卷十五

四

九日辛卯行幸神祇官被發遣伊勢奉幣被告申

御即位之由也

十日壬辰今日天台座主慈源可為天王寺別當

之由被宣下伊勢幣後齋如何

十二日甲午祈年祭也當日被勘日時

十五日丁酉神祇權大副隆雅朝臣候本官可祈

申御即位事之由被仰下

今日叙位也

十八日庚子已刻行幸太政官廳依御即位也內

弁右大臣禮服公卿大納言隆親卿中納言顯定

親宰相侍從資季左官方左方左中弁時尚朝臣  
右方權左少弁親賴藏人方左衛門權佐經俊奉  
行

今夜月色無光如去月

廿二日甲辰左大臣內覽事來廿五日可被宣下  
之由披露日來詔哥說已以符合

廿四日丙午石清水臨時祭也使大宮三位中將  
公持卿

廿五日丁未兼經關白上表良實於一條亭覽吉書被  
渡朱器云々

百練抄卷十五

五

四月二日甲寅今日關白良實殿直衣始也毛車隨身

楊冠前駟布袴殿上人五人扈從

今日前右大臣實氏以藏人左衛門權佐經俊大宮院女子入

內可為來六月三日之由奏聞

三日乙卯行幸官廳暫可為皇君

今日冷泉亭西地被立舍屋七間三面寢殿五間

直下卿六月可有女御入內之故也

十四日丙寅今日被行御即位女叙位主上出御

畫御座御引關白著圓座右大臣勤仕執筆

十五日丁卯當今同腹御兄法親王宣下御名仁

助圓滿院僧正圓靜弟子

廿五日丁丑前關白兼經兵仗辭退

今日被發遣御即位由山陵使上卿右大將實基

參行

廿六日戊寅大嘗會國郡卜定也近江野洲備中

下道

廿七日於鬼間公事用途事有議定良實關白前右大

臣久我前內大臣通光土御門前內大臣定通帥中納言資

吉田中納言為經二條中納言忠高民部卿經高

大藏卿為長左大弁宰相經光新宰相定嗣等參

百練抄卷十五

六

仕云々

今日有關白詔書覆奏上卿万里小路大納言公基

參行

今日殿下二位殿令受位記給去十四日御即位

使右少將資平持泰位記左宰相中將實基相逢

請取位記即賜祿女裝

廿八日庚辰今日前右府娘君入內定也御名字

姑子大藏卿為長朝臣撰申之今日被叙後三位

右少弁時繼書定文

五月二日癸未終日雨降大風明禪法印入滅七年

十天台碩德也臨終正念云々

十二日癸巳關東飛脚去夜到來泰時朝臣所惱危急之間出家云々仍武士猥雜

十四日乙未天王寺別當被辭申云々園城寺鬱

陶事關東不甘心仍暫被付寺務於寺家云々

六波羅兩國司重時々盛依泰時所勞事俄下向關東

十五日丙申將軍家被行太神宮臨時祭舞人裝束以下移鞍寺被調下云々

十七日今日座主被進天王寺解狀

百練抄卷十五

七

廿一日癸卯大掌會行事所始也

六月三日甲寅終日雨降入夜弥滂沱今夜女御前右大臣女母按入内也公卿右大將實基卿已

下十人殿上人二十六人諸大夫廿人後騎隆行朝臣出車十兩也

九日庚申右大將泰入被行御卜外宮正殿狂人昇居事也先日被行御卜今度龜地不成仍重被

卜也

十日今日露頭也渡御三位殿御方關白前右大臣右大將實基大宮大納言公相左大將忠家候

御共還御之後右大將著伏座頭中將通行朝臣宜下女御事

十一日壬戌月次神今食延引畢禪定大閤一条第犬死穢觸及之故也

十四日乙丑祇園御靈會也藏人佐經俊馬長舍人男於祇園園諍被及傷之間拜殿砌血氣散云々下手人社家之下部也被禁囚云々

十六日女御殿侍大寄也彼職事少納言高經奉行云々

十九日庚午及深更關東飛脚上洛泰時朝臣去

百練抄卷十五

八

十五日事切畢云々都鄙貴賤如喪考妣於遺跡者嫡孫右近大夫將監經時無相違云々天下世日穢也

廿六日丁丑入夜入道殿下有御參内前駢一人右馬權坊官二人親寬法眼取松明僧綱一人殿頭兼康泰舞法眼

上人一人經定在御共衛府長兼友被召具之廿九日庚辰節折如例雖天下穢中任例不憚之

近日大掌會用途事宛召諸国庄公事雖穢中藏人方被賦御教書云々理不可然歟

七月一日辛巳申刻鳥羽勝光明院燒亡於御佛



者奉取出保延年中供養之後初有此災

二日壬午洛下貴賤攀首參詣廣隆寺有夢告云

云

八日戊子被立山陵使隱岐法皇改頭德院為後

鳥羽院依御遺誠不被置山陵因忌之由被申畢

十日庚寅相摸守重時入洛如本可為洛中守護也

十一日辛卯南圓堂御佛頂上佛落地云々於關

白家被行御卜

今日故參議通宗朝臣贈左大臣正一位母儀源

氏贈皇后被定山陵因忌云々

百練抄卷十五

九

十三日癸巳今日申刻高野傳法院并僧房等為

興院惡徒被燒拂云々仍武士等馳向是去年七

月傳法院法華三昧之間為興院惡黨被破損道

場件下手三人或遣配所或禁獄舍去正月興院

遣軍兵入大塔供僧百四十口內傳法院衆廿

口自由令除名帳畢依此事兩方構城郭遣官使

雖被制止還及此災法滅之期歟為之如何

廿六日丙午今夜鴨社假殿遷宮也

廿七日丁未廣瀨龍田祭也

女御殿依可有立后御退出公卿堀川大納言

具實

卿已下十一人供奉

八月二日壬子大嘗會上旬大拔也

今日於關白家有御卜去月廿五日申時春日社

若宮瑞籬良角虹立事也

四日甲寅今日前右大臣以頭中將通行朝臣可

有立后之由奏聞云々

七日女御殿退出以後被獻御書勅使左中將頭

良朝臣御書被裏紅薄樣御哥關白殿令詠給同

有御清書

今夜內侍所渡御西中門廊是陣座修理之間暫

百練抄卷十五

十

移御也近衛次將供奉云々

九日己未以女御從三位姑子為中宮內弁源大

納言具實於本宮有御遊云々

十三日立后以後初被獻御書於中宮勅使右中

將雅家朝臣勤仕云々中宮氏寺參賀次啓將佐

還祿次八社奉幣并行啓定云々

十四日甲子內侍所還御云々

十六日丙寅中宮與福寺參賀也別當僧正已下

列立南庭賜祿

兼平

十七日丁卯內大臣奏入被定一代一度大奉幣

并宇佐使日時幣今月十九日大奉廿二日宇佐

今日中宮職八社奉幣也

十九日己巳大奉幣等官符請印其後於神祇官被發遣

今日中宮結立后以後初有御入内公卿万里小路大納言已下八人供奉權大進高經奉行藏人方左衛門權佐經俊申沙汰之

廿二日壬申宇佐和氣使史藥大夫被發遣

廿三日癸酉大嘗會荒見河被也

廿五日乙亥右大臣實經已下參入有仗議先條事定

百練抄卷十五

十一

次太神宮狂人間事次十月相當御忌月大嘗會御禊可如何哉支諸道勘文左大弁經光卿讀之諸卿一同不可憚之由議定畢

廿七日丁丑大嘗會下旬大被也又鴨社正近宮也當社廿年一度於別雷社者以破壞為其期定例也

九月三日有御燈御禊中宮御方不被行之後朱雀長曆

例初度憚九月自春被修之故也

四日癸未大嘗會大奉幣也

十日己丑大嘗會御禊定也

十七日丙申今日大嘗會主基使等下向備中國畢

廿日己亥悠紀使令發近江国了

今夜有仗議太神宮御舩代干透鼠出入有其恐可被造替哉支也

廿二日辛丑御禊行事所始也

廿五日甲辰法性寺禪定太閤灌頂堂供養也導

師行遍僧正讚衆廿口關白已下著座

廿七日神宮假殿過宮延引官下御衾文箱相達之間本宮申子細云々

百練抄卷十五

十二

十月一日中宮御方更衣也但長元十年四月依相當忌日延引二日被改了久安惡日仍雖延引任式日今度猶被始之

七日丙辰佐渡院順德去月十二日於彼国崩御之由披露云々御年四十六大禮之間人々成不審雖然遠所御事先例公家無被行事之由沙汰切云云

九日戊午今夜内膳御電神渡御新造内膳云々

不相觸宮主又上卿不供奉未曾有事也

十二日辛酉御禊點地也三条末

十三日壬戌召明法博士等可有御錫紵哉否夏被尋問崇德長寬安德文治共無沙汰之由云々十五日甲子悠紀拔穗使上洛訴申齋郡狼藉支仰武家有沙汰

今日御襖幄涯分也

廿一日庚午天晴風靜大嘗會御襖也節下右大臣祭主依參篋神宮神祇權大副隆繼朝臣進御麻宮主兼任奉仕御被女御代花山院大納言定雅女

廿四日關白殿有御著陣公卿四條大納言隆親

百練抄卷十五

十三

帥中納言資賴二条中納言忠高侍從宰相資季尤大弁宰相經光殿上人五人扈從

廿七日關白殿有初度御上表於一條殿被行之中使頭中將通行朝臣泰仕云々

十一月四日壬午国司除目也

五日中午宮被立春日祭使權大進俊兼勤仕之被聽內裏昇殿可勤仕之由所望之間被聽之

六日天晴平野祭也大屬安倍資高勤仕之陰明門院后位御時闕如之間兼元々年平野梅宮祭

使權少屬安倍資近勤仕之今度依及闕如就彼

例屬所勤也

兩方被穗使入洛也悠紀方人馬懈怠之間及深更泰著齋場所及曉天被行大嘗會點地

七日乙酉三社奉幣也

八日丙戌關白家拍子合也

九日丁亥八衢祭并八神六神祭如例令勤行畢十日戊子悠紀奉行史範俊母有事有兼俄奉行云々

云々

十一日己丑五節舞姬參入也帥中納言資賴左衛門督頭親中宮大夫實藤國伊賀三條中納言

百練抄卷十五

十四

公親長門大藏卿為長卿等也

關白引率諸卿被歷覽北野齋場所

十二日中午宮御方五節淵醉也上達部右大將基以下九人頭中將通行朝臣頭亮時高朝臣權亮

頭良朝臣等著座

十三日辛卯天晴月明大嘗會祭也主基標損輪修理之間暫遲々入夜臨幸龍尾道東階事今西

方神殿儀次第不違每事神妙前內大臣著小忌被昵近終夜座沙上被檢知之

十四日壬辰祭主隆通奏壽詞

十五日癸巳御神樂也

廿二日庚子今日兵衛內侍故藏人木工誕生皇室

子先朝女房也可謂幸人

十二月十三日辛酉賀茂臨時祭也使侍從宰相

資季卿

十六日甲子万機旬也

廿二日今日有弓馬始又右大臣實經候官奏

廿四日壬申今夜粟田口遍火夏十禪師社燒亡

廿七日乙亥猪隈禪閣家實薨去十六

寬元四年仁治四年二月廿六日改元

百練抄卷十五

十五

元年正月四日辛巳去夜祇園西大門前大路在家

南北兩面拂地燒亡西及橋凡東至今小路南限

綾小路末及數百家

十日丁亥良實關白息童昇殿先朝御時有此事名字道良

來十三日可被加首服云々

十一日中宮印字樣助教師為持泰宮侍所依公賴大

夫計權大進高經請取之先啓御所次下大屬資

高內匠寮可鑄進之由下知件用途先例以諸司

納功下寮鑄進而近代不合期之間內々本宮沙

汰之今度猶請取官廳可沙汰之由前右府被

下知仍廳令申領狀畢印字樣永治久安付職事

奏下之云々

十二日己丑有僧夏

十三日庚寅時々雪降今夜關白道長息元服也於一

條亭被行此儀加冠右大將實基理髮頭中將師繼朝

臣被叙正五位下又被聽禁色

十六日癸巳海住山民道家部卿長房入道入滅十七

十九日丙申東山禪定道家大閤被參菴春日社飯室

僧正良快去年十二月入滅稱出家人不被憚輕服歟

百練抄卷十五

十六

廿二日己亥典藥頭基成朝臣平十六

廿三日庚子天晴中宮御著帶令當十五關白被進

御帶權大進俊兼相具之向常住院今月給僧正坊被加

持其後著御主上令結緣給權大夫實藤卿被問

吉時陰陽博士在盛朝臣參上次有大被宮主卜

部兼躬修之其後陰陽師又奉仕御被

卅日春日祭使堀川少將賴俊朝臣勤仕之

二月一日戊申春日祭中宮依御著帶無御奉幣

被行由御被

三日安嘉門御子院式乾門御院齋々御幸天王寺北面

繁俊已下四人侍實負已下五人供奉之公卿前  
內大臣家嗣吉田中納言為經兩人泰會天王寺  
殿上人光成朝臣高經等泰會鳥羽日渡申供奉  
云々

四日辛亥祈年祭也近江国司不進白猪不當事  
也

六日兩女院自天王寺御幸温泉殿上人已下供  
奉之前內大臣鳥帽子直衣自小屋野供奉云々

十日丁巳叙奠有宴座

廿一日兩女院自有馬温泉還御

百練抄卷十五

十七

廿二日己巳後鳥羽院御忌日有免者云々

廿三日庚午以從三位藤原彦子四條院女御為宣仁  
門院

門院

廿四日辛未祈年穀奉幣儀延引春日社有五躰  
不具織云々

不具織云々

廿六日癸酉有改元事依代始也改仁治四年為  
寬元々年

寬元々年

廿七日甲戌行願寺皮堂上棟也

三月一日丁丑日蝕正現

二日戊寅中宮有御燈被明日日次不快之故也

四日庚辰祈年穀奉幣也前齊有御燈齋內如何  
十二日戊子戌時六波羅炎魔堂燒亡

廿日壬申豐受宮臨時近宮御裝束金物等進發  
畢權弁定朝朝臣奉行

廿七日癸卯自今日公家被始尊星王法七少圓  
滿院僧正圓靜為阿闍梨但結願日可相當神支  
之間於本坊被修之

廿九日乙巳源大納言具實泰入被定兩社石賀  
行幸日時

行幸日時

明義門院諸子頓崩御云々世以為奇大學頭忠倫朝

百練抄卷十五

十八

臣同頓死云々

四月一日宮法印證覺可任僧正之由被宣下  
三日己酉梅宮祭也

三日己酉梅宮祭也

尊星王法賞可被置阿闍梨三口於圓滿院之由  
頭中將師繼朝臣為勅使被仰下云々神事日如

何

八日甲寅入夜中宮御退出今出令相當八ヶ月

給也

給也

十五日辛酉賀茂祭也近衛使左中將公藤朝臣  
勤仕之中宮使御著帶已後也仍不被立之

十六日壬戌行幸行事所有穢物云々仍被行御  
卜一二吉凶事也

十九日乙丑行幸御祈七社奉幣也

廿日丙寅兩社行幸俄延引是明義門院穢觸及  
禁裏之由沙汰出來其外有子細云々

廿一日中宮御產御調度御覽自內裏被獻畢公  
卿大夫公相已下五六輩著座

廿七日癸酉覓子內親王准后宜下是當今御姊  
也

廿八日甲戌佐渡院御骨康光法師奉懸首渡御

百練抄卷十五

十九

大原云々

五月十日為御方違行幸中宮御所御產所今出  
弟擬畫御座敷滿上庇御簾五ヶ間就永保二年  
所見臺盤所令置破子御贖物事有其沙汰不被  
進之

十三日佐渡院御骨今日奉納大原御墓所於岡

崎殿被始中陰御佛事世人稱三十ヶ日穢

十八日癸巳河東雹降人以驚遽云々

十九日甲午奉幣兩社石賀被謝申行幸延引事

近日庖瘡滋蔓小兒等有此事云々

廿三日關白殿第二度御上表也

廿九日甲辰今日雷落圓滿院僧正岡崎坊云々  
御產御祈阿闍梨也定為佳瑞歟

卅日己巳寂勝講終也有僧事陰陽權助兼權天  
文博士李尚朝臣逝去疫疾云々年五

六月二日丁未中宮御產御祈諸社被進神馬是  
前實氏右府內々沙汰也

四日己酉源大納言具實參入癸遣十三社奉幣  
使依御產御祈也

十日乙卯坎日時々雨降自去夜有中宮御產氣

百練抄卷十五

二十

也宮主陰陽師等勤御板諸社有御誦經又被進

神馬午後皇子降誕禁裏無御混合儀櫻井宮仁寬  
王常住院僧正良尊被引御馬醫師施藥院使經  
長朝臣賜御衣云々入夜左衛門督頭親被行御  
卜奏

十一日丙辰月次神今食等如例

十二日丁巳皇子御湯殿始也文章博士光兼朝

臣右衛門權佐資定大中宮權新大外記師光奉仕  
讀書

十四日己未祇園御靈會也於三条京極兵士家



前武士與宮仕法師有鬭諍<sub>支</sub>神氏等企狼籍武士訴申之間解其職給六波羅云々

中宮五夜養產前右府沙汰云々

十六日辛酉七夜儀禁裏御沙汰有御遊云々

十八日癸亥九夜事兼明門院御沙汰也

廿日乙丑御產御初大法賞等被行僧事

廿三日與福寺僧綱為奉賀皇子降誕參賀也別

當僧正已下列立中門內權亮頭良朝臣啓事由

僧正祿權大夫取之自餘僧綱凡僧等官司殿上

人取之五師三綱等祿御簡衆取之云々

百練抄卷十五

二十一

宣仁門院院号以後始御幸式乾門院云々

廿六日辛未覺子內親王院号为正親町院云々

廿八日今日今宮親王宜旨也御名字久仁式部

大輔為長卿撰申

卅日乙亥節打如例中宮御方同被行之

七月一日今日殿中將殿有御拜賀事

九日以秦兼友可補召次之由被仰後院別當前

右大臣

十日三位中將殿被申拜賀

十五日為御方違有行幸兼明門院是明日中可

被造營今宮御方屋之故也入道相國造進之

十六日今日今宮侍始也公卿堀川大納言已下

十人參仕

十七日可被定立太子雜事之所并御所支可為

內裏哉否支以藏人左衛門權佐經俊被問諸卿

廿四日愷子內親王被宣下准后事

廿七日關白殿初入御宇治三位中將殿扈從殿

上人地下君達前駟等皆著衣冠供奉

廿八日中宮奉具今宮有御入內

閏七月一日帥中納言資賴著仗座中宮御產以

百練抄卷十五

二十二

後初度入內賞以公持卿可叙正三位之由被宣

下云云

二日今宮御五十日也主上渡御彼御方殿下右

大臣堀川大納言具實中宮大夫公相右大將家

殿三位中將通良扈從又有御遊

廿三日立坊之時壺切御劔紛失被新造可何樣

哉之由被尋仰公卿等

廿七日自今日依天變御初被始行熾盛光法座

主勤仕之

八月一日九条唐橋大堂上人蓮舜奉祝八幡宗

廬依社家訪神人等破却云々

二日於中宮御方被定立儲君難更其所更兼日被仰合人々大進時繼書定文公卿大夫已下參仕云々

四日今日熾盛光法結願又被修北斗法圓滿院僧正勤修之自今日依立太子御祈修五壇法六日今日立坊御所御裝束始也又被行仁王講八日頭中將師繼朝臣參向大右大臣亭召仰立太子事

十日今上第一皇子久仁有立太子事中刻被始

百練抄卷十五

二十三

行節會々々畢於御前被行坊官除目坊官等於弓場申慶又泰本宮申慶公卿相引參本宮事畢自內裏被獻御劔壺坊紛失之間被渡他御劔勅使頭中將師繼朝臣賜祿再拜退出

十四日今日被仰春宮陣頭侍者啓內舍人事又被宣下頒給察御馬內膳屋宮主等事大夫泰陣奉行云々

今日於春宮殿上被定御百日雜事傳已下泰仕定文如例文被用兼曆御百日定文權大進高雅書定文

十五日春宮御湯始并御祈始河臨御敕云々

廿二日已亥今日法性寺成就宮東福寺被始行祭禮禪定殿道家下右大臣殿左大臣殿准后尚侍兩御方內々御泰南廻廊各被啓幣帛前越前守以良朝臣奉行之殿下并右大臣殿右大臣殿三所御隨身為舞人馳御馬先是有東遊次神樂陪從召人已下有祿神供用途被支配庄々社司以下祿物兼被奉送社家

九月四日丁未春宮御百日儀也主上渡御中宮御方被奉舍之關白殿依五躰不具穢無御參右大臣已下諸卿泰入有御遊事

百練抄卷十五

二十四

九日壬子有除目其次被補東宮々司學士光兼進光國兼少連平成俊

十六日己未今日准后院号延引可為廿七日云

十八日辛酉今日未刻陰明門院御年五崩御自去春令煩不食給之上近日遍身令腫給云々仁助滿院宮主上御門院御子可令繼其跡給云々

十月廿日八幡賀茂兩社行幸定

廿一日關白第三度御表  
廿四日正親町院殿上始云々

今日五節儉約<sub>レ</sub>更爲<sub>レ</sub>頭左中弁時高朝臣奉行被<sub>レ</sub>御下五節所云々

一風流櫛不可交金銀銅饒珠玉之類事

一薄樣以數重不可進累事薄如形可散以常下品可爲上品也枚數不可過七枚

一童女扇可被停止金銅珠玉風流更

一出火桶可停止金銀銅饒等風流事

一男女房裝束兩日之間不可改著事

一殿上人非禁色之人掛不可用綾事擣衣唐物之類非制限

百練抄卷十五

二十五

廿五日戌戌京官除目也

廿七日庚子當今御弟宮令渡三条宮給御出家公卿扈從雲客騎馬

十一月一日癸卯今夜東宮初度行啓也前右府

富小路亭中宮御同宿也

二日甲辰下名也

五日丁未今朝深雪盈尺豐年呈瑞去養元五年以後無<sub>レ</sub>如此之雪云々

九日辛亥源大納言具實參入被<sub>レ</sub>勘兩社行幸日

時等

十一日癸丑五節舞姫參入唐橋大納言<sub>雅親</sub>左宰相中將<sub>實任</sub>伯耆吉田中納言<sub>爲經</sub>和泉二条

中納言<sub>忠高</sub>

十三日乙卯新嘗祭也上卿不參々議左大弁經光卿

十七日己未源大納言參入被<sub>レ</sub>發遣七社奉幣使依行幸御祈也

十八日庚申日吉臨時祭使前讚岐守兼教朝臣

廿一日癸亥故大納言通方卿女子奉<sub>レ</sub>生皇子々々有御事云々

百練抄卷十五

二十六

十二月一日癸酉終日天陰雨不降今日石清水行幸也少納言基時於陣頭落馬前渡時自閉路泰社頭云々祠官等緇素有賞云々

五日丁丑賀茂行幸也行事官有賞

六日戊寅仁和寺准后有御灌頂事禪定殿下并

關白右大臣准后自明日渡御西郊

十日壬午御卜奏如<sub>レ</sub>例法勝寺大衆會自今日被<sub>レ</sub>始行於僧名者去月被<sub>レ</sub>定歟雖爲散所佛事神今

食祭中不可然歟

十一日癸未神今食也

十四日丙戌持明院姬宮院号为室町院云々

十八日庚寅珍皇寺供養云々

廿二日甲午今夜鷹司町筑後前司行貞宅焼亡放火云々甚雨之間不移他所

廿四日丙申陰陽頭安倍忠尚<sup>平年</sup>五時行云々

廿七日己亥日吉社八王子迂宮也權右中弁定頼朝臣奉行

廿九日辛巳追儺之次有除目

今日刑部卿淳高卿文章博士經範朝臣可為御侍讀之由被仰下云々

百練抄卷十五

二十七

同二年正月十六日丁巳月蝕正現踏哥節會復末

以後被行之但無御出云々

廿二日癸亥或人云去比前右京亮安倍業氏朝

臣<sup>故季尚</sup>為權漏刻博士泰純朝臣有謀殺事造

意之趣露頭召下畢云々

廿八日己巳土御門若宮立親王宣旨也御名字宗

尊式部大輔為長卿擇申之御母儀兵衛内侍也

卅日今夕被立春日祭使近衛使左少將教高朝

臣中宮使權大進高經春宮使字士光兼朝臣云云

二月六日丁丑園韓神祭也今度有三丑猶被用上丑也

十一日壬午殿下若君御元服名字教良被叙正五位下即禁色被仰下

十九日後鳥羽院御八講自今年為公家御沙汰於安樂心院被仰下

三月一日辛丑公卿勅使行事所去月廿三日於神祇官始之而鳥喰穢物落庭歟仍被改他所官廳

五日乙巳勅使召仰也

百練抄卷十五

二十八

九日己酉震筆宣命御清書云々

今日六条殿御八講初也大理參入有免者事

來十三日御忌日為御神事中此事日來有豫儀被問人々各申狀不同歟

十一日辛亥天晴申刻以後天陰及晚小雨降右

大臣參入被發遣公卿勅使<sup>土御門中納</sup>精進屋

土御門高倉也及黄昏行列殿上人頭中將師繼

朝臣己下十一人前驅六人侍十人

十八日戊午石清水臨時祭也今夜被始御書所

別當文章博士經範朝臣覆勘修理權大夫在章

朝臣開闔大内記在宗等也

廿四日甲子御書所作文也題云詩情不限年題中也

廿六日丙寅被行軒廊御卜松尾社司注進云去正月廿七日辰時近邊山類落大井河塞潰之間未社宗像社鏡石類落畢

四月十五日乙酉賀茂祭也近衛使左中將公直朝臣依使節轉任中宮使右少弁兼大進時繼春宮使

右中將兼權亮公泰朝臣  
廿八日戊戌有小除目征夷大將軍藤原賴嗣正三

百練抄卷十五

二十九

位藤原去廿一日御元服云々即任右近少將被叙從五位上

五月六日主上御不豫近日天下貴賤兩三日病腦一人不漏之世以号内竹房

廿日己未中宮大夫隆親參入有減服御常膳之詔

廿五日甲子今日備中前司宗範朝臣於畱小路前右府第頓死年四十五云々

六月十一日庚辰禁裏有犬產穢月次神今食可付諸司之由被下宜旨而上卿已下不參被行希

代夏也後日被謝申云々

十三日壬午任大臣節會也被任内大臣左大將於一条亭被儲饗云々

自今日於神泉苑被始祈雨御讀經云々  
廿六日乙未實賢僧正被修請雨經法去比仁惠僧正孔雀經二七日無驗被逐電畢

廿七日丙申小雨時々降入夜滂沱甘澍也今夜有山陵廢置定云々

廿八日丁酉有小僧事權僧正勝尊實賢請雨經法賞即被任僧正云々

百練抄卷十五

三十

七月二日庚子辰時地震有聲萬人遠恐之龍神動云々旱魃之徵也  
五日癸卯戌時黑雲起丑才長八丈許且坤兵革之徵云々

十八日丙辰今日贈皇后国忌於東寺被始行云

云  
廿日戊午奉幣伊勢已下八社被告申開院遷幸

來廿六日  
廿六日甲子天陰晴今夜遷幸開院中宮同行啓去仁治三年四余院御事之後壞弄清凉殿代更

以新造為關東之沙汰所令造進也上卿吉田中

納言為經官方權右中弁定賴朝臣藏人方勘解由次官頭雅奉行今夜行事官無勸賞

八月三日春宮御入內遷幸以後初度儀也公卿堀川大納言以下十二人供奉云々

九日丁丑在京武士馳向南都彼寺衆徒老少相爭各搗城塙為制止被差遣云々但老徒黨無程退散云々

十四日壬午八幡神人致害事相當放生會之時群訴之間賀茂神人解其職被禁獄云々

廿六日甲午今晚有天變月犯軒轅女主星二寸

百練抄卷十五

三十一

熒惑犯大微右執法星五寸云々

廿九日今日刻入道太政大臣公經公法名薨去日來煩痢病云々

九月一日中宮旬御膳以平盤供之為御輕服入依道相因又春宮御同宿也至于三日可為御神事

仍其間中宮可有入御對屋無畫御座儀平盤且有先例之由大夫示之

廿七日今日寅刻左大史小槻季繼宿祢死去今年九十

十月四日被行除目左大史小槻凉方筑前守小

槻為景季繼本知行國也

十一日戊寅天晴今日土御門院御八講始也自年被於坊城被行之左大臣以下參入也權大納言通忠卿參入先被定僧名有免者

十三日庚辰天晴今日被行軒廊御上神宮事今日五節定也頭中將師繼朝臣奉行也今夜小除目也新中納言公光卿參入也

十四日辛巳仗儀也去一日八幡俗別當兼盛與權俗別當光次於宝前鬪諍及流血之間件所可被造改哉否事也右大臣以下參入也

百練抄卷十五

三十二

十六日癸未天陰雨降或人云八幡宝殿中流血事被遣實檢使被見之處御橋聊血落懸云々

十七日甲申天陰霽雪散今日被行軒廊御上石水流堀川源大納言具實已下參入云々

十九日丙戌御方達行幸兼明門院土御門殿廿三日庚寅天晴季御讀經始也右大臣已下參入先被定御前僧闕請

廿五日壬辰霽陰軒廊御上賀茂社新中納言公光卿已下參入也

廿六日癸巳左大臣著陣也



今夕中宮御除服也依入道太政大臣公經薨也曰例先著御後日令除給而近例同時著除云々

今夜戌刻黑雲亘天東西云々

十一月一日戌戌石清水一社奉幣也使權中納言顯親卿被謝申血穢事云々且穢氣相觸御階

可被造改日時定也右大臣已下參入也

七日甲辰大雪於內裏有御作文事

十日丁未內侍所臨時御神樂也遷幸初度

十一日戊申春日祭也中宮御輕服之間不被參

便云々

百練抄卷十五 三十三

十四日辛亥今日御書所作文出題也

十六日癸丑五節舞姫參入公卿中宮大夫隆親卿侍從宰相資

李國權大納言定雅卿紀伊國左中弁頭朝臣甲斐國

十八日乙卯新嘗祭也俄神祇官觸穢事出來仍

於宮內省被行之依貞觀例也被尋下先例於外

記新中納言公光卿以下參入

廿日丁巳今日仗議也八幡俗別當兼盛罪名事右大臣以下

參仕之

廿一日戊午御書所作文也

廿四日辛酉賀茂臨時祭也而依本社犬死穢延

引

今夜典藥頭清成朝臣死去云々

廿五日壬戌復任除目也

廿七日甲子有吉書云々左大臣參入之

十二月一日丁卯天霽政也

四日庚午天晴陰賀茂臨時祭也去月延引使右

中將雅繼朝臣令勤仕之左大臣以下參入

今日政也民部大輔兼教朝臣勘發公文符一条中納言公持卿

參入云々

八日甲戌神今食行幸召仰也左大臣於里第養

百練抄卷十五 三十四

十一日丁丑依神今食行幸神祇官

十四日庚辰今日東宮御魚味也

十六日壬午今日齋宮卜定也當今御妹御名字議

子式部大輔撰申之以六条中將忠俊宅押小路

京極為卜定所云々先被下親王宣旨畢

十七日癸未京官除目也有切過定業教筑後勘

濟云々

廿一日丁亥下名并宮城使除目也前中納言盛

兼卿依病出家云々

廿四日庚寅齋宮卜定之由伊勢奉幣依神祇官  
織延引畢

廿五日辛卯正親町院入内也院号之後  
初度也

廿六日壬辰左大臣辭兵仗即著陣也

有官奏事不堪

廿九日乙未為御方違行幸法性寺殿

同三年正月一日天晴風靜關白家拜禮如恒又兼

明門院拜禮也源大納言通忠卿以下列之小朝

拜并節會等儀如例

今日春宮御戴餅也大夫公相卿奉抱之傳持蓋

百練抄卷十五

三十五

御所近々之間無御劔役人云々

五日辛巳今日入道中納言盛兼入滅

十一日丁未天陰雨降雷電甚雨雷落所々

今日政始依雨延引

今夜縣召除目始也執筆左大臣

十二日戊申今夜除目中夜也執筆源大納言通

忠卿依左大臣  
所勞也

十五日辛亥今夜月蝕也正現云々

十七日癸丑天晴陰雨下今日射禮也春宮權大

夫顯親卿以下參仕近衛不參云々

今日日吉八王子三宮遷宮日時定也春宮權大  
夫顯親卿已下參入

十九日乙卯今日齋宮卜定由伊勢一社奉幣也

吉田中納言為經卿參行之當日定也

廿六日壬戌天晴今晚客星出現云々司天之輩

奏云々

廿七日癸亥今日辛始政始也權中納言冬忠卿

已下參入

二月三日戊辰自今晚客星不見云々

九日甲戌天晴官奏也吉書

百練抄卷十五

三十六

今夜為御方違行幸兼明門院土御先二位中納言良教卿

言良教卿着仗座有召仰事又左衛門尉藤長村

可為檢非違使之由被宣下

十日乙亥天晴今夜於鬼間被議定德政事依客  
星變

也關白左大臣前内大臣以下參之

十五日庚寅今日被行軒廊御卜神宮事  
八幡事

十六日辛巳被發遣初年穀奉幣使右大臣參仕

云々

十七日天晴殿下被發遣五社奉幣使

十八日癸未自今日於内裏被始行孔雀經御修

法七依客星御祈也

廿一日丙戌被行軒廊御卜賀茂社事

廿二日丁亥今夜有炎上中御門雷小路云々

廿五日庚寅今日孔雀經結願也仍被仰勸賞云

云阿闍梨五口置仁和尚寺北院御又被行免者經藏云々又傳細一人可中請云々

近日被行種々御祈內法等依客星御祈也

廿八日癸巳春宮令垂御髮給云々

今日法勝寺尊勝陀羅尼供養也權大納言公基

卿以下參仕先於陣被定日時僧名

三月一日丙申天晴今曉彗星見東方司天之輩

百練抄卷十五

三十七

一同奏云々

五日庚子酉始許日無光芒云々或依紅霞引覆

如此云々或薄色歟云々

六日辛丑自今曉彗星不見

七日壬寅天晴自今日於內裏被修熾盛光法座

主慈源參勤行云々依天變御祈也

八日癸卯被行內外文請印鹿鳴使一條權中納

言公持卿已下參行云々

有吉書奏左大臣被候之

今夜有小除目事上卿公持卿參仕

九日甲辰午時地震

大藏卿管原為長卿刑部卿同淳高卿等可撰進

年号字之由被宣下

十二日丁未依天變御祈被獻宸筆御書於山陵

云々後白河院御陵蓮華王院後鳥羽院御陵大原土御門院御陵金原

十四日己酉仁助法親王被申牛車慶云々

今日熾盛光法結願也被仰勸賞自今日於內裏

被始行五壇法依天變御祈也

十五日唯識會初也

廿日乙卯御方違行幸也兼明先被行尊勝寺灌

百練抄卷十五

三十八

頂定云々

廿二日丁巳日吉三宮正遷宮并稻荷社假殿遷

宮日時定并軒廊御卜也稻荷社事吉田中納言

為經卿已下參入

今日中將氏道朝臣卒去

廿三日戊午石清水臨時祭也右大臣以下參仕

小野宮中將輔通朝臣為使

廿五日庚申依天變可被召封事云々

四月五日己巳戌越地震

七日辛未子刻地震

八日壬申祭除目也先被<sub>レ</sub>定造丹生社日時云々  
九日癸酉被<sub>レ</sub>發遣廿二社奉幣使<sub>三合并天</sub>右大  
臣以下參入先被<sub>レ</sub>定日時使等云々

今日日吉三宮遷宮也

十一日乙亥自關東飛脚到來今月六日遠江守

平朝時入道死去云々

十二日丙子賀茂祭使唐橋少將雅世朝臣依輕

服<sub>朝時入道</sub>仍俄侍從公寬任少將可勤仕之由

被<sub>御下之</sub>

十三日丁丑今日於殿下被<sub>行御卜</sub>平等院阿弥

百練抄卷十五

三十九

給事

今日於記錄所被<sub>勘定</sub>一年中公事用途錢貨等

事云々

十四日戊寅今日伏議也<sub>八幡俗別當兼盛罪名間事重被<sub>議定</sub></sub>

左大臣已下參陣

十五日巳卯小除目也侍從公寬任右少將依可

勤仕祭使也

廿一日乙酉賀茂祭也近衛使右少將公寬春宮

使藏人左衛門權佐兼大進經俊

龍殿<sub>下左府生久負</sub>同右府生賴峯

中宮使頭右中弁兼亮時高朝臣

廿五日己丑今日封事詔也左大臣以下參入

廿六日庚寅初齋宮諸司入御日時定也吉田中

納言為經卿已下參仕也

廿八日壬辰已刻地震

廿九日癸巳今日詔書覆奏也<sub>封事</sub>春宮大夫公

相卿已下參仕

五月三日丙申今日御方違行幸也<sub>兼明門院御所</sub>

八日辛丑戌時地震

九日壬寅被<sub>行小除目</sub>此次被<sub>行僧事</sub>吉田中納

百練抄卷十五

四十

言為經卿已下參給云々

十一日甲辰左大臣兼仰召大外記師光於里第

被<sub>宣下</sub>云兼盛罪名事左衛門尉中原章宗同章

職左衛門尉章国等可勘申云々

十二日乙巳祈雨奉幣也權中納言冬忠卿已下

參入

十四日丁未宸勝講始也關白已下參入

十六日己酉同第三日也是日賑給定也左大臣

已下參仕

十七日庚戌使廳政也右衛門權佐資定已下參

仕

廿三日乙卯入道左大臣公隆忠薨十一歲

廿六日庚申巳刻殊地震

廿九日壬戌被行軒廊御卜吉田社權中納言公

光卿以下參行之

六月二日乙丑入道家衡卿入滅年六近日祇園

社室殿前死人骨納箇置之由風聞

八日辛未神今食行幸召仰也左大臣兼仰召大

外記師兼於里第行之此日松尾社假殿遷宮也

十一日甲戌神今食也天皇自閑院有行幸云々

百練抄卷十五

四十一

十二日乙亥春宮行啓中宮大夫隆親亭被仰輦

車之後被輦輦云々

十三日丙子主上行幸兼明門院御所内侍所同

渡御云々

今夕中宮行啓大夫隆親卿亭春宮自明日御宮

云々明日少將并令迴陣中給之故也

十四日丁丑行幸還御春宮御方還御次中宮同

還御不進日時勘文無不同三十日中還御無之

云々

廿日癸未祈雨奉幣也

廿二日乙酉軒廊御卜也春日社木權中納言

公持卿已下參入

廿六日巳丑小除目也新中納言公光卿已下參

仕

廿八日辛卯今夜仗議也八幡俗別當破明法博

士章久景行等勘文以此家之輩景宗章等別勘

文被議定云々左大臣已下參入此日頭左中弁

頭朝朝臣從事吉田中納言為經卿參入即申拜

賀今夕被行女叙位從二位藤近子中納言為經

百練抄卷十五

四十二

七月一日癸巳雷鳴雨降日蝕也依雨不現之日

蝕御祈御讀經定也春宮權大夫頭親卿參行之

五日丁酉前大納言賴經卿出家云々法名行智

九日辛丑祈雨奉幣也被用殿上使又有十列云

云吉田中納言為經卿參行之

今日清瀧龍穴御讀經日時定也自明日可被始

間不被

今日八幡俗別當兼盛罪名事於鬼間被議定關

自己下參入之任法家別勘文可為遠流之由被

定畢

十三日乙巳今日被行僧事實賢任僧正畢去一日日蝕御祈勸賞也

十六日戊申月蝕也正現

今日圓滿院宮仁助法親王金剛童子法結願畢自內

裏令退出給

廿日壬子造野宮木作始日時定也吉田中納言為經卿參行也

今日三位中將師繼卿拜賀并著陣也

廿一日癸丑主上為御方違行幸六条殿

廿三日乙卯祈年穀奉幣也右大臣以下參入上

百練抄卷十五

四十三

皇依御蚊觸事無御拜云々

廿五日丁巳齋宮入御諸司日時定也中納言為經卿參行之

廿七日戊午今夜丑尅大地震此日流人宜下也

石清水前俗別當兼盛被配流伊豆國權中納言公光卿已下參入

之寧和改

同日結政請印也二位中將頭平卿參行之

今夕主上為御方違行幸土御門殿今夕乍置公

卿將二人頭治部卿雅具俊劔璽云々比與云

卅日壬戌復任除目也春宮大夫公相卿已下參入也

八月三日乙丑止雨奉幣也土御門大納言顯定

卿參行之

五日丁卯同奉幣也中納言良教卿參行也次被

行小除目

七日己巳今日造野宮次第日時定也中納言為

經卿參行之

九日辛卯軒廊御卜也伊勢事賀茂權大納言顯定卿

以下參行之

百練抄卷十五

四十四

十一日癸酉造野宮上棟日時定也權中納言公

光卿參行也被行小除目上卿同人此日有地震

十三日乙亥初齋宮東河御禊了入御諸司左近

吉田中納言為經卿參行之

十七日己卯此日軒廊御卜也鴨社佐權中納言

公光卿參行之

廿一日癸未被發遣八幡一社奉幣使兼盛事被謝中云々

內大臣已下參入也

同日春宮所宛也

廿七日己丑天名座主書寫如法經被奉納北野



宮云々

廿八日庚寅被定初齋宮東河御襖次第司并迂御野宮日時二位中納言良教卿參行之

廿九日辛卯小除目也

九月七日己亥齋宮御襖點地也河原一条直物也左大臣已下參之

八日庚子前上總次重隆朝臣死去

十二日甲辰小除目也權中納言冬忠卿參入云

云

十三日乙己主上為御方違行幸土御門殿

百練抄卷十五

四十五

十七日己酉齋宮遷座野宮御襖也

廿日壬子蘭林坊三間內東二間顛倒云々

廿四日丙辰能子內親王薨故後高倉院皇女御年四十六

廿七日己未秋季御讀經結願也被行僧夏權中

納言冬忠卿參入云々

十月一日壬戌自今日於內裏被始行七佛藥師

法依天變天名座主慈源為大阿闍梨

八日己巳七佛藥師法結願也被仰勸賞法印尊證阿闍梨三口被

寄社被行免者事

同日大神宝行事所始日時定也堀川大納言具

實卿參行之

十日辛未春宮御著袴定也左大臣參行之

十一日壬申武者小路富小路邊有炎上

十二日癸酉權中納言實藤卿著陣也重服之後

十三日甲戌今日春宮御著袴也於閑院內裏有

此儀關白左大臣傳以下參入也

廿四日乙酉今日天皇為御方違行幸土御門殿

十一月三日甲午左大臣殿令通前內大臣娘院女給御代給

五日丙申大神宝癸遣并當日大拔日時定也大

百練抄卷十五

四十六

納言具實卿以下參入云云

十一日壬寅春宮初令剃御髮給

十三日甲辰一代一度大神宝癸遣也

十八日己酉權中納言公光卿參著仗座被行軒

廊御卜神宝

十九日庚戌土御門西洞院有炎上

廿二日癸丑五節參入也公卿權大納言通忠

國權中納言公持卿和泉右中弁定賴朝臣

廿四日乙卯新嘗祭也依兩儀於東門內被行之

一条中納言公持卿參行之

廿六日丁巳東宮鎮魂祭也於宮內省行之

廿九日庚申稻荷上社燒亡

十二月二日癸亥今日兩所炎上

五条東洞院姊小路

五日丙寅今日御書所作文出題也

六日丁卯主上為御方違行幸土御門殿兼明門院御所

春日行幸御祈奉幣定也中宮大夫隆親卿參行也

八日己巳今日被行臨時除目

十日辛未春日行幸御祈奉幣也

十三日甲戌此日內裏宜陽殿上有天火更抄消

百練抄卷十五

四十七

云々

十四日乙亥芸閣作文也

十六日丁丑宣陽門院令供養土御門東洞院長

講堂給又有曼陀羅供養事御導師行遍僧正女

院有御幸右大臣已下參入

十七日戊寅有官奏事不堪左大臣被候云々

廿二日癸未一代一度大仁王會也右大臣以下

參入先被定闕詣

廿四日乙酉直物也右大臣參仕之

同日松尾社正殿遷宮日時定也權大納言顯定

卿參入云々

同日春日行幸路次點地也并已下向之

廿八日己丑被行軒廊御卜松尾神主相致重服也迂宮之間可被改

補也土御門大納言顯定卿參行之

廿九日庚寅被發遣稻荷一社奉幣使又被行軒

廊御卜同社燒亡事

同四年正月一日辛卯可有日蝕之由陰陽等奏之

算博士雅衡不可有日蝕之由申之終日遂不正

現雅衡所申符合尤珍重也仍被行勸賞日沒以

後被行小朝拜節會等如恒

百練抄卷十五

四十八

三日癸巳左大臣殿令參殿下給有奏拜儀

六日丙申申剌大地震

七日丁酉雨晴雨降仍今日節會被用雨儀畢內

弁左大臣

八日戊戌春日行幸路次巡見也

九日己亥東宮并中宮行啓冷泉殿今日春日行

幸試樂也

十一日辛丑天皇為立春御方違行幸六条殿內

大臣已下供奉

十三日癸卯有僧事

同日春日行幸試樂也今日同大板也

十五日乙巳中宮大夫隆親卿參入被行除目次被奏春日行幸宣命草次被發遣止雨一社奉幣使

今日春日行幸神室御覽也

十七日丁未主上行幸春日社內大臣已下供奉射礼延引畢依行幸也

十八日戊申主上還御閑院中宮大夫隆頭卿著仗座被行々事官賞云々一條室町辺有炎上一條室町

百練抄卷十五

四十九

廿三日壬子今日於鬼間御讓位事被議定關白已下參入

主上行幸新造万里小路殿中宮同行啓內大臣

已下供奉於万里小路殿有吉書

今日北小路万里小路邊有炎上

廿五日乙卯東宮御座御所冷泉前右改棟門被

立四足

今日兩所有炎上八條坊門町唐橋油小路

廿六日丙辰關白可有上表之由風聞之

廿七日丁巳射禮也

中宮行啓冷泉殿東宮御座此亭

廿八日戊午關白御上表也有勅答事次左大臣可為關白之由被仰下之權中納言公親卿參行之

今夜關白殿御拜賀也權中納言冬忠新中納言

光等扈從殿上人前駟等供奉之

廿九日已未有御讓位事東宮御有上皇尊号事

二月一日辛酉關白直衣始也殿上人右中將定

平朝臣已下五人前駟廿人供奉之

院御湯殿始也

百練抄卷十五

五十

五日乙丑御即位定并同由伊勢奉幣定也

七日丁卯大原野祭也辰時同社釜吹其声送聞云々

今日親奠也權中納言公光卿參入依當大原野

祭上卿無廟拜云々松尾正殿遷宮日時定也

九日已巳今日閑院遷幸日時定也同日遷幸行

事所始云々御即位料內藏寮禮服御覽也攝政

以下參之

十日庚午今日中宮自院御所行啓冷泉皇居來

十三日閑院遷幸依可同輿也

十一日辛未今日御即位之由被<sub>レ</sub>發遣伊勢奉幣使權大納言公相卿參行之同奉幣大<sub>レ</sub>敘也

十三日癸酉御讓位已後政始也權大納言實雄卿參行云々

今日官廳修造日時定也被<sub>レ</sub>寄讚岐國可被<sub>レ</sub>作云

云御讓位已後始行幸閑院<sub>遷幸一其儀先被<sub>レ</sub>仰</sub>

召仰事次本家賞<sub>從四位下藤原實村次主上出</sub>

御御座攝政右大臣實季卿等著簀子座前右

大臣<sub>實氏</sub>內々<sub>桓</sub>候御贈物先御馬六疋近衛次

將院御隨身等引之於中門馬部等取之次御書

百練抄卷十五

五十一

物大宮大納言公相取之頭中將雅家朝臣請取

之次御琵琶万里小路大納言公基取之藏人左

衛門權佐經俊請取之次主上入御次奉仕御裝

束之後出御殿下令奉抱給次寄御輿中宮御同

輿也攝政已下供奉之中宮宮司權大進高經供

奉出車系毛金作櫛等十兩<sub>今二兩也</sub>

院尊号被宣下上卿右大將實基卿參行之

十四日甲戌中宮自閑院行啓院御所公卿大夫

以下五人宮司權大進高經啓將少將相保供奉

之出車系毛金作櫛等十兩

十六日丙子今日上皇御尊号後始御幸<sub>義明門</sub>

院<sub>土御公卿攝政以下廿三人殿上人定平已下</sub>

卅三人後騎大宮大納言御後官人長村等也

院御直衣始也

十九日已卯宇治平等院阿彌陀佛御汗垂給云

云

廿一日辛巳縣召除目始也於攝政直廬被<sub>レ</sub>行之

廿三日癸未稻荷上下社御遷宮日時定也權中

納言公光卿以下參入云々

百練抄卷十五

五十二

參入

廿八日今日任太政大臣兼宜旨也頭左中弁頭

朝朝臣向前右大臣<sub>實氏</sub>里第御之

綾小路大宮邊有炎上

三月二日辛卯遷幸已後政始也吉田中納言為

經卿參行也

上皇御幸六条殿

四日癸巳宇治一切經會也昨日依雨延引

今日任太政大臣節會也<sub>前右大內弁中宮大夫</sub>

隆親卿本所無饗云々

五日甲午御即位大將代宣下也

今日太政大臣兵仗宣下也上卿權中納言公光卿即拜賀也公卿右大將實基已下十人殿上人廿許輩前駟廿人於院被召以前給御馬取綱二拜云々

八日丁酉御即位叙位也攝政直廬被行之

近日於院御所可有公事論義御即位已後可被定日次云々

十日己亥小除目也吉田中納言為經卿參行之十一日庚子主上御即位也于時自開院行幸官

百練抄卷十五

五十三

廳中宮御同輿儀也公卿右大將實基已下十二人供奉之

十二日辛丑僧正良尊入滅

廿一日己酉於仙洞被供養尊勝陀羅尼御導師聖護院僧正靜忠題名僧三十人公卿前內大臣

已下十三人殿上人廿余人參仕云々

攝政一位御拜賀也公卿權中納言實雄已下五人殿上人八条中將實清朝臣已下八人前駟廿人供奉

廿二日女叙位也權中納言公光卿參行之

廿五日甲寅主上行幸冷泉殿中宮御同輿先被行小除目中宮大夫隆親卿參行之

廿七日丙辰攝政氏院參賀也

廿八日丁巳大藏卿管原為長卿率去年十九

今日被主開關使權中納言公光卿參行之

廿九日戊午石清水臨時祭也去十七日雖為式日依當國忌日延

引使土御門宰相中將通行卿也

四月二日辛酉北小路边炎上地震兩三声

今日尊覺法親王薨

七日丙寅霜降霰散可謂奇異歟

百練抄卷十五

五十四

十日己巳被癸遣止雨二社奉幣使次被定檢宮社修造日時次被行小除目以上公卿權中納言公光卿云々

十四日癸酉賀茂祭也上皇於一条室町御棧敷御見物件棧敷年來故今出川入道相國今也今度為相國沙汰被修造進云々

近衛使左中將源雅世朝臣中宮使左少將源顯方朝臣也

十五日甲戌今日被行小除目中納言為經卿參入

十六日乙亥右大臣令蒙一上宜旨給後著陣也  
今日若宮御著袴定也

十九日戊寅院文殿始也頭左中弁顯朝朝臣已  
下參入

廿日己卯被<sub>發</sub>遣山陵使依御祈也中納言為經  
卿參行也

今日鷹司院御出家也

廿三日壬午大嘗會因郡卜定也<sub>近丹波</sub>右大臣已  
下參入

若宮<sub>侍衛</sub>內御著袴也自院被獻御裝束又自兼

百練抄卷十五

五十五

明門院同被獻之公卿殿下已下十六人參仕有  
御遊云々

廿六日乙酉上皇御幸八幡宮內大臣以下供奉

廿九日戊子上皇御幸賀茂社內大臣已下供奉

閏四月一日己丑關東前武藏守經時所勞遂以

死去云々仍京中卅日觸穢之由後日被定也

二日庚寅自三條坊門堀川邊燒亡出來內裏<sub>院</sub>

近々間攝政已下群參天皇行幸冷泉亭火已雖

移內裏忽打消畢

中宮御入內今度被<sub>用</sub>院御車<sub>唐庇</sub>上達部大夫

隆親已下供奉步儀也出車二兩<sub>也細代</sub>

三日辛卯刻主上還幸內裏中宮御同輿辰刻

中宮還御院御所

五日癸巳山門衆徒兩門跡合戰

五月八日乙丑大嘗會行事所始也

十三日庚午主上為御方違行幸冷泉亭中宮御

同輿

十六日癸酉月蝕也仍被定御祈御讀經僧名云

々權中納言公持卿參入被定之

廿八日乙酉被<sub>行</sub>小除日上卿權中納言公光卿

百練抄卷十五

五十六

左大弁經光卿書下名云々

六月四日辛卯右大臣參入一代一度大奉幣使

被<sub>發</sub>遣之被<sub>發</sub>遣祈雨奉幣使權中納言公光卿

參行之

今日攝政家文殿始也別當藏人民部大輔光國

云々

六日癸巳有炎上事起四條坊門町及五條坊門

邊此內六角堂因幡堂祇園旅所等燒亡了

七日甲午今日建仁寺二階堂等燒亡

祇園御輿迎延引依旅所燒亡也



八日乙未關東騷動事風聞明日飛脚參洛入道將軍被<sub>レ</sub>發叛逆間事也

九日丙申達智門内在家等焼失

十四日辛丑軒廊御卜并室生龍穴御讀經醍醐清瀧御讀經祈雨奉幣等也權中納言公光卿參行云々

同日祇園御靈會延引依大焼亡穢也

十九日丙午被<sub>レ</sub>定神泉苑御讀經僧名已下即自今日始之大阿闍梨僧正行遍

廿一日戊申祇園御輿迎也

百練抄卷十五

五十七

廿二日己酉被<sub>レ</sub>發遣祈雨七社奉幣使<sub>神方角也勢伊</sub>

已權大納言通忠卿參行之丹生貴布祢被<sub>レ</sub>用<sub>殿</sub>上使

廿七日為<sub>レ</sub>避祇園御靈會神輿路行幸大相国第中宮御同輿也

廿八日乙卯祇園御靈會如<sub>レ</sub>例被<sub>レ</sub>定諸社御讀經日時僧名依<sub>レ</sub>炎旱御祈也權大納言實雄卿參入被<sub>レ</sub>行之

七月四日庚申北野一夜松此四五日烟立給云云

八日甲子被<sub>レ</sub>定伊勢太神宮内宮上棟日時權大納言公相卿參行之

十三日己巳刑部大輔知仲死去

十五日辛未坊城殿御八講始也<sub>當院御母儀贈皇太后自今年</sub>

被<sub>レ</sub>始攝政已下被<sub>レ</sub>參之<sub>山陵夏并梅宮權中</sub>

廿三日己卯被<sub>レ</sub>行軒廊御卜

納言公光卿參入

廿七日癸未關東前將軍入道大納言賴經被<sub>レ</sub>上洛依<sub>レ</sub>謀反事被<sub>レ</sub>追上云々

百練抄卷十五

五十八

中宮大夫隆親卿參入

秋奠學生見參依<sub>レ</sub>廢務日無<sub>レ</sub>之

六日壬辰室町院御出家也

十五日辛丑前齋宮皇子内親王薨

九月十日乙丑大嘗會御禊日時定次第司除目也右大臣已下參入

内大臣殿兵仗後拜賀著陣也

廿二日戊寅御禊行幸御前五位以上侍從代并

諸衛督代裝束司定也右大臣已下參入

廿四日己卯大嘗會御禊裝束司行事所始也<sub>從</sub>

應東方為其所中納言為經卿已下參著之

被發遣大奉幣使一向本官沙汰也

廿八日癸未御楔行幸行事所始點地日時定也

吉田中納言為經卿已下參之

十月一日丙戌今曉寅時受惑與填星歲星相犯云々

七日壬辰前兵部卿經賢卿薨

十日乙未地震

十二日丁酉御楔行幸次第司著座日時定也中納言資賴卿已下參仕之

百練抄卷十五

五十九

攝政初度上表也有勅答事

十五日庚子被定太神宮外宮假殿日時次被行

小除目上卿權大納言公相卿

今日攝政殿內舍人隨身御拜賀也

廿日乙巳被立止兩奉幣使為御楔日也次被行

小除目左大將道良御拜賀也

卯時歲星填星太白三星相犯云々

廿二日丁未有御楔行幸召仰事

主上依明後日御楔可有行幸官廳之處御咳氣

仍無其儀准長和例自閑院可有出御云々

廿四日己酉大嘗會御楔行幸也自閑院殿出節

下右大臣女御代右大將實基卿女

十一月六日辛酉被定三社奉幣使并日時上卿

中納言良教卿參入

九日甲子被行大嘗會司除目權大納言公相卿參入

十一日丙寅於院御所大嘗會清暑堂御神樂拍子合也

十六日辛未被發遣三社奉幣使

十八日癸酉於攝政家有清暑堂御神樂拍子合

百練抄卷十五

六十

事

廿一日乙亥主上行幸官廳

廿二日丁丑五節舞姫參入中納言良教國上總

大臣沙汰丹後權大納言實基卿如賀民部卿經高卿沙汰

廿三日戊寅大嘗會叙位也

廿四日己卯大嘗會也悠紀行事左少弁時繼主

基行事權右中弁親賴卿已下供奉迴立殿行幸

也先行右大臣

廿五日庚辰節會也內弁內大臣外弁堀川源大

納言具實卿

廿六日辛巳節會也內弁右大臣外弁土御門大納言通忠卿今夜清暑堂御神樂也

廿七日壬午節會也內弁右大臣外弁同上

廿八日癸未主上還幸閑院殿

十二月四日己丑被行女叙位事中納言良教卿参仕

五日庚寅大地震

九日甲午太政大臣上表也大納言具實卿参入行勅答事

今日吉書奏也於攝政直廬被行之

百練抄卷十五

六十一

十四日己亥太政大臣召仰也頭中將雅家朝臣向前內大臣通光第仰之

今日攝政殿被上表左大臣任內大臣召仰也右大將實基卿兼之

廿一日丙午檢非違使章澄渡強盜劫入中宮大下御服以上皇有御見物云々夫亭盜取主

主上為御方違行幸官廳中宮御同輿也

廿二日丁未左大將殿道良著陣也大將

廿四日己酉任大臣節會也太政大臣通光內弁

花山院大納言定雅云々

廿六日辛亥左大臣著陣也右大臣著陣也今夕中宮為御方違行啓富小路第

廿七日壬子万機旬也攝政已下参入

廿八日癸丑官奏也施米不左大臣参入堪田

廿九日甲寅一条中納言公持卿参入被行追儼事参議弁少納言不参云々

嘉元二年五月一日以權右中弁宣房朝臣本書寫校合畢

百練抄卷十五

六十二止

百練抄卷第十六

後深草本院十三年

室治二 建長七 康元一  
正嘉三 正元一

百練抄卷十六

一

院上自室治五

後嵯峨院第一皇子御母大宮院結子入道太政大寬

元元年六月十日御誕生同廿八日立親王同四

年正月廿九日受禪同三月十日於官廳御即位

同十月廿四日御禊同中宮同十一月廿四日大嘗

會建長三年十二月八日御書始正元元年十一

月廿六日禪位

室治元年正月一日乙卯攝政家拜禮也又院并中

宮拜禮也小朝拜節會如恒

三日丁巳上皇始御幸義明門在子土御門殿

百練抄卷十六

二

五日巳未叙位議也雖為御表日依式日被行之

十二日丙寅今夕雪降上皇御幸法勝寺實基依修正

也公卿內大臣已下十九人殿上人定平朝臣已

下三十四人北面友景已下十一人供奉

此間風聞云伊豆國長十二町弘八町自十余町

行去其跡如湖水云々

十三日丁卯午時地震

久我大相通光直衣始也中院大納言通忠中院三

位中將雅光通光扈從資平通持等連通忠於院御所里

小路相国牛童不動九子童與三位中將牛童太

即九子童等喧嘩其間令殺害不動九子各父著狩衣召具之件太郎九子者三位中將共侍左衛門尉忠景召取之後同太郎九父子遣官人景国許云々

十五日己巳政始也大夫史淳方遷參之間通樋下泰入之

十六日庚午踏哥節會也左大臣以下參之時々兼平

雖降雨不雨儀云々

十七日辛未射禮也中納言良教卿以下泰仕之右近右衛門不泰用代雨儀也勸盃一獻云々

百練抄卷十六

三

今日關東若宮神前蟻蛭數十萬充滿亥子時人々見付之翌朝失畢之由後日風聞

十九日癸酉前關白兼經蒙攝政詔即被仰氏長者并兵仗事等關東計申之云々

廿二日丙子御室御熊野詣云々

廿五日己卯入夜大雨雷鳴北野辺大蛇出現云々

廿六日庚辰稻荷社正遷宮日時定也二位中納言良教卿泰之

今日攝政拜賀也左大臣以下扈從云々

廿七日辛巳内匠頭知成朝臣率去

廿八日攝政直衣始也  
今日上皇若宮宗尊親王令入持明院殿給御猶子之儀也

二月四日戊子稻荷社遷宮也丑刻云々

六日庚寅院尊勝陀羅尼供養也

九日癸巳上皇令參詣石清水宮給七ヶ日御參

簞云々可有百万反御念佛之故也

十日甲午被兼遣祈年穀奉幣使也先定日時使

左大臣參仕云々

今日中宮結子御入内也

百練抄卷十六

四

十六日庚子上皇自八幡還御即御幸賀茂北野等社

廿五日己酉順德院皇子生年廿六御元服也加冠前基朝臣

大臣基朝臣理髮基朝臣忘家

廿八日壬子余亥定也右大臣以下參仕云々

今日改元定也左大臣以下參仕之改寬元五年

為寶治元年文章博士種範朝臣撰申云々

三月一日甲寅改元以後政始也近衛中納言公

光卿以下參之

四日丁巳縣召除目始也於攝政直廬被行之

六日己未除目入眼也權中納言冬忠卿行清書

夏  
八日辛酉下名延引依為攝政衰日也

十二日乙丑戌刻許有光物其体如大流星云々  
乱飛之耀不異燃火自東入西天之後鳴動万人  
驚耳目古今希類云々

十三日丙寅今夜有鳴動地震

十六日己巳季御讀經日時僧名定也堀川大納  
言具實卿已下參仕之

今日除目下名也一条中納言公持卿已下參仕

百練抄卷十六

五

今日尊勝寺灌頂并因宗寺寂勝會日時僧名定  
也

廿日癸酉院文殿作文也於弘御所有此儀攝政  
已下參仕之題者式部大輔淳高卿此事寃治天  
治兼元之外先規希也云々

廿三日丙子攝政詔書覆奏也大宮大納言公相  
卿已下參仕云々

結政定也上卿已下同前季御讀經始也

廿四日丁丑尊勝寺灌頂也

廿五日戊寅天台座主宣下

無品道覺法親王  
慈源僧正緯退替一

余中納言公持卿已下參仕云々

廿七日庚辰攝政氏寺參賀也

廿九日壬午石清水臨時祭也左大臣已下參仕

左中將實高朝臣為使

四月二日於仙洞有蹴鞠左大臣始令候給於北  
對撤下袴著大口無冠懸自御所被下錦草襪殿  
下令候簀子給云々

八日辛卯灌佛也依當神夏公家上皇無之諸院

宮被行歟但御出家  
女院有之

中宮御著帶御帶自前相國實氏許被進之因滿院僧

百練抄卷十六

六

正日靜令加持給權大進資宜為御使奉渡御衣  
上皇令結御帶給云々陰陽師内匠頭在盛朝臣  
醫師典藥頭長忠朝臣參仕亮顯朝朝臣奉行也  
相國作次第給之院司勘解由次官高雅奉行也  
十四日丁酉賀茂祭也院御幸一条室町御棧敷  
權大納言實雄堀川中將基具朝臣中宮權亮顯  
方朝臣一条少將公藤朝臣等供奉

近衛使左中將隆兼朝臣

龍本府武方  
同父隆

中宮御著帶之間不被立使也延曆寺法花會探



題祐性僧都雖監望以經海僧都被宣下了

十七日庚子大納言二品局被供養北野塔也中

院大納言通忠卿已下參向之

十八日辛巳於攝政家被供養大般若經即可被

奉納春日社云々

廿日今日文殿作文也題云水樹伴遐年題中四初度

刑部卿淳高卿出進之其儀如初度御作文公卿

新中納言公光大藏卿定嗣新宰相通行殿上人

頭中將已下十余輩地下俊實朝臣已下也公卿

臨期吉田中納言為經已下故障之間無人序者

百練抄卷十六

七

文章博士公良朝臣依此支聽讀師文章博士

經範朝臣講師式部少輔茂範

廿五日戊申軒廊御卜煙出支殿

廿七日仗議也左大臣已下參仕文章得業生在

匡與同公長秀戈座次相論支也大藏卿定嗣讀

諸道勘文翌日可晉上定文云々

五月四日今夜為御方違行幸記錄所殿下御參

自清涼殿廂敷掃部寮筵道許秉燭之後主上出

御殿下令奉抱給之後大宮大納言公相奉抱之

曉鐘已後即還御也

五日丁巳於殿下直廬有寂勝講僧名定頭左中

弁頭朝朝臣書之

七日櫻井宮牛車事為經俊奉行被宣下云々

九日辛酉新日吉小五月會也院御脫屣以後今

年為初度午刻御幸八葉殿上人朝臣氏朝臣雅忠

頭方朝臣供奉也攝政令侯簾中給公卿左大

臣直衣土御門前內大臣直衣堀川大納言具實

中宮大夫隆親布中院大納言通忠花山院大納

言定雅大宮大納言公相權大納言實雄土御門

大納言顯定吉田中納言為經土御門中納言顯

百練抄卷十六

八

別當通成茶大藏卿定嗣中院三位中將雅光土御

門三位中將顯良大貳雅忠已頭中將東家候實

子奉行院司左少弁時繼左右奉行次將家定朝

臣定平朝臣

十三日乙丑關東將軍左少將賴嗣朝臣室家他

界云々

十四日熊野新宮遷宮沙汰折節宮御方御乳人

產廿三日已後參院可如何樣哉被尋申檢校宮

之處其身參者廿五日以前熊野詣輩不可參院

其身即退出者行事官立庭申沙汰之余不可有

憚雖混合參內不可有苦之旨折中相計之由以經俊被申之仍御乳人者被出云々

十五日丁卯月蝕支諸道論申云々於蝕者明曉一定之由雅樂頭在清朝臣申之仍今夜被罷禁裏仙洞已下陰陽助在尚朝臣雅樂頭在清朝臣博士在盛朝臣圖書頭在直朝臣等被召仙洞尋之在清申狀符合云々

十六日戊辰今晚寅刻月蝕云々

十七日己巳被行臨時除目在清朝臣依月蝕符合被叙正四位下

百練抄卷十六

九

十八日庚午寂勝講初日也公卿左大臣內大臣已下七八輩參云々

關東飛脚去夜到來將軍妻室

故泰時朝臣女去十三日逝去云々

六波羅觸穢否有其沙汰熊野遷宮延否未定也

十九日辛未依關東將軍室家他界支天下觸穢

可至來月十三日之由被仰下云々

廿日壬申賑給定也左大臣已下參仕

關東觸穢六波羅混合哉否前相國被尋武家之處將軍御前并時賴母子同宿也彼使自其所上

洛混合之条即勿論也六波羅乙穢也件使泰所所觸穢可為廿日歟之由前相國被申云々

廿二日甲戌寂勝講結願也公卿攝政左大臣已下參仕支終人々退出之後興福寺權別當覺遍

僧正與顯雲阿闍梨前內大臣定通有闔乱支山僧也

僧惡黨等帶甲胃弓箭寄覺遍宿所陣中狼藉以外次第也兩方被敦害之輩兩三人為奈良法師

山僧一人被生取被渡武家云々

廿三日覺遍僧正與顯雲阿闍梨喧叱支於院前右府前內府評定云々

百練抄卷十六

十

廿六日戊寅神泉苑御讀經始也關東穢支時賴不混合之由泰村令申之令為其儀者不可及京中穢歟云々

廿七日穢中支猶不定但於御靈會者寬治六年

雖穢中猶被行之由外記雖申之件度月次神今

食延引畢今度於御靈會者可為穢限已後於御

輿迎者雖穢中可准寬治例歟猶可為式日之由

被仰下

廿八日明日五竜御祭文經俊於鬼間清書目錄料紙殿下令加御諱字給於里亭令加支先例不

詳久安於里第加御書不快也不足證據之由殿下被仰云々

廿九日洛中穢事猶未定也任正治例被行軒廊御上卿新中納言公光參陣穢事為經俊奉行關東穢可及洛中哉否令卜之官寮不可為穢之由令申之間其由被仰下之

六月一日可為穢之由猶依被定仰月次神今食可延引之由為經俊奉行被宣下

三日土御門中納言顯親生去夜於山聰法印坊出家去夜及深更年廿六候院人敢以不知之今朝始

百練抄卷十六

十一

聞出云々

七日戊子祇園御輿迎也雖為穢中依有先例也  
八日己丑秀戈在匡與公長座次相論支在匡可為上薦之由被宣下也

九日庚寅自關東飛脚到來去五日若狹前司泰村能登前司光村森入道等依有謀反之企已被誅罰之云々

依炎旱御祈被修請雨經法僧正實賢於神泉苑始修之被定東寺興福寺延曆寺轉讀仁王經初兩日時三條中納言公親卿已下參之

十日辛卯辰刻地震有聲御躰御卜奏延引穢限以後可被行之由兼日宜下云々

依關東合戰穢氣可及來月五日御靈會行幸穢中令奉勅內侍所之条可為何樣哉臨時祭又可延引歟之由有其沙汰御靈會行幸內侍所不渡御例常支云々今度賢所渡御不可有之十三日夕行幸十四日夕可有還御云々馬長并本田樂者可停止於會者可付本社之由被仰下日來依將軍女房支為穢之由被定畢而准寬治例雖為

百練抄卷十六

十二

穢中於御輿迎者被遂畢於會者可為穢限已後之處今又此穢引來仍如此有其沙汰熊野遷宮同可延引之由被仰下云々

十一日壬辰月次神今食依穢延引

十二日中宮御入內也明日行幸同輿料也大夫已下供奉云々

十三日甲午主上行幸前太政大臣富小路亭中宮同輿之儀也內侍所不渡御依今月五日關東穢不渡御云々

明日御靈少將并依令通陣中給也  
十四日乙未祇園御靈會依為穢中被付社家馬

長本田樂被止之主上還幸公卿中宮大夫已下  
六人供奉云々中宮還御無召仰先例不同之由  
大外記師兼等示之云々

關東飛脚到來去九日上總从秀胤被誅罰云々

十五日丙申祇園臨時祭依穢延引

十七日戊戌依炎旱御祈被始行水天供僧正仁

惠以下奉之入夜雨降無程止畢

十九日庚子午刻地震

廿日辛丑今夜冷泉猪隈辺炎上依為陣中攝政

已下馳参云々

百練抄卷十六

十三

廿三日甲辰大宮大納言公相泰仕被發遣山陵

使先被行定使二位中納言良教弁親賴朝臣也

去比天智天皇御陵依鳴動也云々

關東飛脚去夜到來重時朝臣谷可下向之由示

送云々勲功賞已下夏未及其沙汰可示合之由

風聞云々

請雨經法今日正申延七々日實賢僧結願也實賢僧

正前々雖施其驗今度不雨降頗為遺恨歟及晚

小雨降終夜大風雨脚聊灑水天供今朝為結願

云々

廿四日陣中狼籍張本因幡守弘盛頭雲乳被遣  
武家云々

廿六日法勝寺御八講御幸重時朝臣下向關東

折節世間不落居之間寄夏於炎旱令止給云々

無故御幸停止之例有其沙汰吉田中納言為經

卿被勘先例

廿九日自今日以東寺一長者被修孔雀經法是

祈雨御祈也

卅日院六月被也奉仕御裝束陪膳頭中將雅家

朝臣役送經俊御隨身五人立明役之陰陽師雅

百練抄卷十六

十四

樂頭在清朝臣奉仕御被

七月一日甲寅午刻許雨降頗濕地孔雀經法効

驗歟

三日雨降孔雀經日五々被結願藏人大輔光国向

東寺仰勸賞前權僧正道衆可任正僧正今一夏

追可申請之由被仰下之昨日被感仰了云々

同日法勝寺御八講始也

八日己未夜明有赤氣北方

十一日今日被始熊野新宮遷宮行夏所是穢已

後也院司藏人左衛門權佐經俊泰向陰陽師大

藏權少輔俊宗朝臣奉仕御技以大麻撫物神宝  
已下廳官役之被行月次神今食月次祭上卿大  
宮大納言分公相本弁權右中弁親賴朝臣本官使  
長氏神今食上卿二位中納言良教左大弁宰相  
經光乙親賴朝臣乙下少納言長氏丙合上卿弁  
觸織已後所被行也次上卿已下參向神祇官使  
癸遣以後主上出御南殿大宮大納言公相奉抱  
攝政令扈從給頭中將雅家朝臣取御劔先行雅  
家朝臣獻御笏次御拜攝政令扶持給職事祖候  
十二日癸亥御躰御卜奏也

百練抄卷十六

十五

十三日甲子被癸遣初年穀奉幣使左大臣已下  
泰社之先被行定也  
十六日辰刻經俊於院以陰陽權助在尚朝臣令  
勘熊野新宮遷宮日時入宮以吉田中納言為經  
奏聞可為御精進之返給下主典代重俊云々  
十七日丁卯神宮御裝束行夏所始也  
十八日巳巳坊城殿御八講也上皇御幸之攝政  
初度上表也  
十九日熊野新宮遷宮奉行院司藏人左衛門權  
佐經俊入精進屋陰陽師大藏大輔俊宗朝臣行

夏官等同令入之

廿三日甲戌晴政也一条中納言公持卿已下參  
行雖為弁二人有申文  
廿四日乙亥中宮行啓今出川亭太政大臣亭依  
可為御產所也於院殿上被行同御產定  
廿五日熊野新宮神宝院司經俊行夏官奉相具  
進癸  
廿六日丁丑御產御調度御覽也  
八月七日丁亥被行伊勢太神宮外宮御遷宮假  
殿日時定源大納言雅親卿已下參入之

百練抄卷十六

十六

親奠延引依觸織也可為中丁云々  
八日戊子攝政第二度上表也  
熊野新宮遷宮也院司藏人左衛門權佐經俊泰  
向也  
十五日乙未石清水放生會也  
十七日丁酉親奠也  
廿八日戊申法勝寺阿弥陀堂燒亡兼仕預等博  
奕之間出火云々件兼仕被下御後官人盛長云  
云  
熊野新宮遷宮奉行院司經俊行夏官等還向云々

廿九日己酉上皇御幸法勝寺為被御覽阿弥陀堂火夏也

九月五日乙卯被發遣伊勢太神宮遷宮神宝金物使云々

十一日辛酉被改勘伊勢太神宮遷宮御鎮祭日時万里小路大納言公基卿已下參入之例幣也上卿内大臣直參本官内侍發遣之後主上出御南殿攝政令奉抱給於年中行夏障子辺万里小路大納言相代奉抱之職夏扈從御拜如常十七日丙寅攝政第三度上表也

百練抄卷十六

十七

廿八日戊寅前内大臣定通公薨六十

十月五日甲申被定祇園社修造木作始日時万里小路大納言公基已下參入云々

九日戊子中宮御產也姫宮也

十一日庚寅坊城殿御八講始也上皇御幸

廿一日庚子不勘田奏也左大臣已下參入之

十一月一日立親王宣下綜子式部太輔淳左大臣已下參仕之

臣已下參仕之

八日官奏也荒奏右大臣參仕之同内親王侍始也次同御五十日夏被定之

十五日甲子月蝕也

十六日乙丑五節參入也

廿四日癸酉賀茂臨時祭也使右少將伊長朝臣廿六日乙亥中宮御產之後入御院御所姫宮同渡御云々

廿八日丁丑姫宮御五十日也

廿九日戊寅辰時地震

十二月八日丁亥京官除目也

廿一日庚子於院殿上有姫宮御百日定東一条院主子崩御云々

百練抄卷十六

十八

廿四日癸卯被發遣宇佐和氣使四条大納言隆親卿已下參之

列見也去比依東一条院崩御有宴穩座停止之沙汰然而依例有云々

廿五日甲辰被行流人宣下夏大宮大納言公相卿參之

卿參之

廿九日戊申軒廊御卜神宮

同二年正月一日庚戌四方拜小朝拜節會院攝政

家拜禮等如常

六日乙卯叙位儀也



上皇御幸兼明門院門土御內大臣已下供奉之  
十三日壬戌上皇御幸法勝寺依修正也中宮同行啓

十四日癸亥法親王法住寺宮被宣下也權中納言冬忠卿已下參之

十七日丙寅仙洞有和哥御會攝政已下參仕之序前內大臣題云松色春光薨去

十八日丁卯太政大臣通光薨去

廿日己巳少將源俊定出家

廿一日庚午縣召除目始也於直廬被行之

百練抄卷十六

十九

廿七日丙子女叙位也

二月三日辛巳上皇御幸八幡七ヶ日間可有御參箋云々

九日丁亥叙奠也泰議通行卿依輕服不庶拜

十六日甲午八幡權別當法印教清被渡武家

上皇若宮令入室町院給父子御約契云々

廿一日己亥攝政入御宇治

廿四日壬寅鞍馬寺供養也燒失之後勸進造云々

卅日戊申於攝政家被行御春日社御車宿顛倒事也

三月四日壬子上皇御幸日吉社

十九日丁卯伊勢外宮假殿遷宮日時定也

廣隆寺法花會也有童舞等式日去十一日延引

此七八年之間中絶今年被興行

廿一日己巳入道大納言公雅卿入滅

廿二日庚子石清水臨時祭也左大臣已下參仕

之右少將經忠朝臣為使

廿三日辛未上皇姬宮親王令入安嘉門院依

御猶子之儀也

四月五日壬午二品賴氏卿卒去

百練抄卷十六

二十

廿日丁酉賀茂祭也近衛使左中將藤伊長朝臣

卅日丁未新日吉祭也師子舞與院御廐舍人居

飼等有鬪諍豈

五月二日己酉院寂勝講始也後鳥羽院御時被與行之後絶久無

沙汰

九日丙辰新日吉小五月會也

十五日壬戌今曉可有月蝕之由曆家勘申之宿

曜竿道等申不可蝕之由遂以無蝕云々

廿三日庚午寂勝講始也攝政左大臣已下參仕

之有賑給定

廿六日癸酉前奏議源顯平卿卒

廿七日甲戌右大將通忠卿與故久我相通光國之後

室有遺跡相論更

廿八日乙亥別當定嗣卿於東山邊供養結緣經

六月九日乙酉中宮御入内也

十五日辛卯於直廬被議定八幡宮更内大臣已

下奏之

十六日壬辰上皇始御覽相撲十五番云々

十八日甲午院号定也改中宮職左大臣已下參仕之

百練抄卷十六

二十一

廿三日己亥於攝政直廬被行吉書奏

廿五日辛丑攝政若君魚味也

廿七日癸卯大宮院々号之後初入内内大臣已

下供奉云々内大臣於路次馬上被差扇於面

廿九日乙巳自南都奉咒咀上皇已下張本入洛

云々

七月一日丙午咒咀之張本被渡武士畢

五日庚戌天文博士安倍家氏卒去

六日辛亥上皇御幸法勝寺依御八講也

廿二日丁卯官奏也

廿四日己巳上皇兼明門院大宮院御幸前太政大臣宇治真木嶋山庄

廿九日甲戌不堪田定也左大臣已下奏之

八月五日己卯上皇御幸稻荷祇園社

七日辛巳軒廊御卜伊勢鴨社更也

八日壬午立后節會也伊勢鴨社更也左大臣已下奏之

十日甲申被發遣祈年穀奉幣使定也

十三日丁亥被發遣同使依仰武士等數百騎向

南都此間大衆等可合戰之由有聞為制止也

百練抄卷十六

二十二

廿三日丁酉軒廊御卜也神宮官奏也左近府燒

已

廿五日己亥皇后宮初入内也

廿九日癸卯上皇大宮院御幸鳥羽殿修造之後

始也

九月八日壬子大風雨洪水過法云々春日社鳥

居顛倒云々

十九日癸亥軒廊御卜也伊勢

十月廿一日甲午上皇御幸宇治平等院堀川大

納言具實卿已下供奉之攝政左大臣自兼日下

向云々

廿二日乙未內膳屋燒亡御竈神燒損給云々

廿四日丁酉季御讀經始也近日御竈神燒損可

鑄改哉否夏被問諸卿云々

十一月十六日己未月蝕正現云々

十九日壬戌軒廊御卜內膳竈燒內大臣行之次損夏也

於直廬被議定同夏

廿二日乙丑五節參入也

卅日癸酉賀茂臨時祭也

十二月十二日乙酉內侍所御神樂也

百練抄卷十六

二十三

十七日庚寅可被造立內膳屋離夏日時被定云

云

廿五日戊戌宗尊親王御書始也於仙洞有此儀

閏十二月三日丙午院御佛名

十六日己未有天文夏天文博士晴繼朝臣申白虹

貫日權天文博士良光朝臣主計助清基朝臣等

有呬雲之由奏之大膳權大夫維範朝臣不見及

之如聞者日晷歟之由申之

廿二日乙丑被定內膳御竈可鑄改日時定來日廿

云依天夏被始御祈等

近日大炊寮釜破離云々仍奏聞夏由任例召土產國云々

建長元年正月一日癸酉四方拜小朝拜節會院攝

政家拜禮等又如例

四日丙子上皇始幸養明門院土御門殿

六日戊寅於日吉十禪師御室前有及傷斃害之

輩

七日己卯白馬節會雖降雨被用晴儀云々

十日壬午上皇臨幸法勝寺依修正也

十五日丁亥道助法親王薨五十

百練抄卷十六

二十四

十八日庚寅上皇臨幸蓮花王院依修正也

廿二日於攝政直廬被始行縣召除目

廿八日庚子上皇若宮令入山滿院宮給御弟子之

儀也即今夜御出家四助

二月一日癸卯子刻閑院內裏灸上拂地云々主

上行幸大相國冷泉富小路亭

二日甲辰祈年祭春日祭祝奠等可延引之由宣

下也

十五日丁巳法親王宣下也

十八日庚申被癸遣八社奉幣使先被定日時使

等源大納言雅親卿已下參之

三月九日辛巳右大將通忠卿拜賀也

十六日戊子被發遣祈年穀奉幣使先被定日時

使等四條大納言隆親卿已下參云々

十八日庚寅改元定也改元治內大臣已下參陣

十九日辛卯當梁年內裏造宮支配問諸道云々

廿二日甲午攝政殿御拜賀也

石清水臨時祭也前左衛門佐藤資能朝臣為使

為役夫二神部等少將忠繼朝臣青侍一人被陵

礫云々

百練抄卷十六

二十五

廿三日乙未午刻許炎上起婦小路室町子時風

吹散四方煙充滿九重三条以南八条以北西洞

院以東京極以西五条以南及河原餘焰遙飛甘蓮花王

院御堂以下此日悉燒亡又大外記師兼文書令

燒失云々

廿四日丙申於攝政家炎上更有評定又於院御

前被行御占

四月一日壬寅日蝕正現仍平座延引

二日癸卯平座見參也

三日甲辰改元以後政始也

綜子內親王御臭味也於院御所有此儀

四日乙巳軒廊御卜播磨國一宮燒亡更

關東飛脚到來可造進閑院殿由申之

十三日甲寅大宮院御幸今出川殿依可為產所

也於院殿上有御產定

廿三日甲子上皇被獻震筆御書於山陵

廿八日巳巳內大臣上表云々

五月十二日癸未院寂勝講始

廿二日癸巳內裏寂勝講始也

廿三日甲午被行服御常膳詔各更

百練抄卷十六

二十六

廿四日乙未賑給定也

廿七日戊戌大宮院御產皇子

廿八日巳亥皇子御湯殿始也

六月廿二日壬戌仗議也播磨一宮伊和社炎上更

七月三日壬申軒廊御卜鴨社金

五日甲戌上皇御幸法勝寺依御八講也被宣下

伊和社炎上更可勘申諸道之由

六日乙亥天皇痢病御惱云々

七日丙子被發遣八社奉幣使依主上

十一日庚辰今宮御行始也

廿日己丑被行佐渡院追号<sub>順德</sub>也

廿四日癸巳今宮御五十日也

廿八日丁酉道深法親王薨<sub>御室也</sub>

八月四日壬寅諸道勘申當梁年造内裏<sub>定也</sub>

諸卿參被行云々

九日丁未秋奠被止宴穩座依道深法親王<sub>也</sub>

十四日壬子今宮親王<sub>恒仁</sub>宜下也

近日山門衆徒蜂起訴申天王寺別當可被付山

又一品親王可被置山之由云々

十五日癸丑石清水放生會延引去十一日宿院

百練抄卷十六

二十七

極樂寺禮堂板敷上死人手足出来穢也来月十

五日可被行云々

十九日丁巳入道太政大臣公房公薨

廿四日壬戌軒廊御卜也<sub>東大寺</sub>

九月四日壬申軒廊御卜也<sub>吉田社鳥</sub>

六日甲戌有宣下等<sub>以尊覺親王為天名座主</sub>

別當

七日乙亥伊勢外宮遷宮神宝發遣<sub>也</sub>

十二日庚辰攝政被獻告文於吉田社<sub>鳥居顛</sub>

十四日壬午今宮御百日也

十五日癸未石清水放生會也

十七日乙酉伊勢豐受太神宮御遷宮延引

廿日戊子被勘改伊勢外宮御遷宮日時

軒廊御卜也<sub>同宮遷宮</sub>

於院被議定同遷宮延引<sub>也</sub>

廿一日己丑軒廊御卜也

廿五日癸巳伊勢一社奉幣也

廿六日甲午伊勢豐受太神宮遷宮也

十月八日乙巳於記錄所被定沽價法<sub>也</sub>

十七日甲寅軒廊御卜也<sub>伊勢宮</sub>

百練抄卷十六

二十八

前内大臣<sub>公家</sub>嗣出家

廿一日戊午上皇女院御幸春日社先入御平等

院攝政被結攝御儲云々

廿二日己未春日社御宮迴也上皇御束帶云々

廿六日癸亥軒廊御卜也<sub>神宮御</sub>

内大臣<sub>實基</sub>辞各被返下云々<sub>不被開變</sub>

廿七日甲子秋季御讀經始也

十一月十五日壬午天皇行幸上皇御所<sub>可為皇</sub>

居云内侍所同渡御

廿二日己丑五節舞姫參入公卿<sub>權大納言公基</sub>

國備中左大將沙汰也出雲權右中弁時繼朝臣沙汰也

卅日丁酉賀茂臨時祭也

十二月四日辛巳源大納言雅親卿薨<sub>七十</sub>

同二年正月一日丁卯四方拜小朝拜節會院攝政<sub>兼經</sub>

家拜禮等如常

五日辛未上皇御幸始也

十一日丁丑縣召除目始也

二月六日壬子官奏也左大臣已下參云々

廿三日己未右大臣參入被定公卿勅使<sub>志家</sub>即有

百練抄卷十六

二十九

召仰

廿六日壬戌被發遣祈年穀奉幣左大臣已下參

之

廿八日甲子於院殿上被議定去年伊勢外宮遷

宮時所取落之安宮瑠璃壺<sub>下</sub>並西室殿血氣<sub>上</sub>並

攝政已下參之

卅日丙寅召伊勢外宮祢宜等於仙洞有被尋下

事等<sub>上</sub>

三月一日丁卯軒廊御卜<sub>外宮瑠璃壺內大臣已</sub>

下參云々

四日庚午被發遣公卿勅使<sub>通成卿</sub>權中納言右大臣已下參之被<sub>實氏</sub>獻宸筆宣命

十一日丁丑上皇御進發熊野山也前太政大臣

已下參之金峯山藏玉堂一切經會也為結緣參

詣之輩二百余人俄頓死滅亡云々未曾有之次

弟也

十三日己卯軒廊御卜也<sub>賀茂別當社御</sub>姊小路

中納言<sub>顯朝</sub>已下參云々

十六日壬午石清水臨時祭也治部卿行家朝臣

為使

百練抄卷十六

三十

四月五日庚子上皇自熊野還御

十四日己酉賀茂祭也

廿九日甲子任大臣召仰堀川源大納言具實卿

也

卅日乙丑軒廊御卜<sub>吉田社御裝束</sub>食損<sub>並</sub>權

中納言顯朝卿已下參之

五月十七日壬午任大臣節會也<sub>大納言具實卿</sub>三

条大納言公親卿已下參之

廿日乙酉內大臣拜賀

廿三日戊子寂勝講始也



廿四日己丑刑部卿淳高卿薨<sup>七十</sup>

廿七日壬辰宸勝講結願也左大臣已下參仕之  
有賑給定公卿分配等以大納言通忠卿可為淳  
和院別當由被宣下

六月三日丁酉上皇御幸大相国山在宇縣真木  
鳴

四日戊戌於真木鳴有五番競馬公卿殿上人隨  
身等衆之

十日甲辰軒廊御卜<sup>霖雨</sup>土御門中納言通行卿  
已下參之

百練抄卷十六 三十一

十三日丁未大理召商人等被下知沽價法云々  
十五日乙酉為女房大納言二品沙汰被鑄比野  
鐘樓鐘云々

十六日庚戌被發遣十社奉幣使<sup>依霖雨也</sup>左大臣已  
下參之

廿七日辛酉仙洞御作文攝政已下參之  
内大臣著陣

七月五日己巳軒廊御卜<sup>伊世中納言師繼卿已</sup>  
下參之

十三日丁丑閑院造營次第日時定也中納言資

季卿已下參之

於仙洞被行詩試弁官所望之輩等也

廿日甲申官奏也左大臣參之

廿七日辛卯鳥羽北殿御移徙也<sup>上皇御幸也</sup>

八月一日甲午官奏也左大臣已下參之

五日戊戌軒廊御卜<sup>伊勢外宮土御門中納言通行</sup>

卿已下參之

十日癸卯春日神人三百余人蜂起發向吉田中

納言<sup>為經亭依和泉国三外米訴訟</sup>夏也

十四日丁未前藤中納言定嗣於葉室山庄出家

百練抄卷十六 三十二

四十三法  
名定然

十月五日丁酉軒廊御卜<sup>伊勢</sup>權中納言資季卿  
以下參之

十二日甲辰大炊頭師為出家<sup>卅一</sup>

十三日乙巳朝覲行幸<sup>鳥羽</sup>

十一月十六日丁丑五節參入公卿<sup>花山院宰相</sup>

国<sup>阿波守前大納言實持卿沙汰之因</sup>

廿四日乙酉賀茂臨時祭也左馬頭長氏朝臣為

使<sup>紀伊堀川前中納言親俊卿沙汰之</sup>

大納言右大將通忠薨<sup>三十</sup>

前泰議公賴卿薨

十二月九日庚子造閑院上棟已下日時定權大

納言公相卿參入之

若宮<sup>皇太子</sup>御臭味也<sup>於院御所</sup>有<sup>此儀</sup>內大臣<sup>道良公</sup>已下參之

十五日丙午任大臣節會也

廿日辛亥內大臣拜賀也

廿四日乙卯京官除目也藤宰相信盛卿為執筆

廿六日戊午右大將公相卿拜賀也

廿八日己未軒廊御卜<sup>鴨社</sup>惟<sup>異</sup>權中納言通行卿參入之

百練抄卷十六

三十三

同三年正月一日壬戌四方拜小朝拜節會院<sup>兼經</sup>攝政

家拜禮如常

二日癸亥式乾門<sup>判子</sup>院崩<sup>五十</sup>

三日甲子御幸始<sup>院</sup>明<sup>所</sup>門

五日丙寅左大將定雅卿拜賀叙位儀也雖為御

衰日被行之明日依為減日也

十日辛未造閑院殿上棟也

十二日癸酉左大將定雅卿著陣

十九日庚辰地震兩度

廿日辛巳縣召除目始也宰相中將通雅卿為執筆

廿一日壬午右大將公相卿著陣

廿七日戊子親王宣下<sup>上皇弟二皇子省仁</sup>右大臣已下參

之

二月七日丁酉親奠如例被止宴穩座<sup>依式乾門院御奠也</sup>

十日庚子新大納言實藤卿拜賀也

十三日癸卯上皇御幸稻荷祇園社<sup>儀也</sup>

十四日甲辰別當權中納言通行卿拜賀也又著

陣權中納言通雅卿泰議惟忠卿等拜賀也

十七日丁未為御方違行幸今出川殿

廿日庚戌省仁親王御著袴也於院御所有此

百練抄卷十六

三十四

儀

廿四日<sup>三</sup>壬子一条中納言公持卿行軒廊御卜<sup>鴨社</sup>

廿六日丙辰省仁親王<sup>上皇弟二皇子御母</sup>為<sup>三</sup>条前太政大臣公房

如令入仁和寺給可為御室御弟子故也

廿七日丁巳戌刻熊野本宮燒已

廿九日己未左大臣泰入被發遣祈年穀奉幣使

定當日

三月四日甲子前內大臣具實出家<sup>法名依所勞</sup>

也

六日丙寅權大納言師繼卿行軒廊御卜<sup>伊勢事廣田社</sup>

事

十五日乙亥月蝕也

十六日丙子直物也

十九日巳卯內大臣著陣

廿二日壬午石清水臨時祭也使右兵衛督教定

朝臣

廿七日丁亥院号定也以皇右宮職子左右大臣為仙華門院

已下泰之

廿八日戊子御方違行幸也

四月十日庚子上皇御幸賀茂社七少日可有御

百練抄卷十六

三十五

泰筆云々

十九日巳酉賀茂祭也使右少將實冬

廿二日壬子仙華門院々号之後御入內也

廿七日丙辰權中納言通雅卿行軒廊御卜霖雨也

五月二日辛酉於院殿上被議定伊勢豐受太神

宮造宮使致不法之間可被斷罪歟之由神宮訴

申更撰政已下泰之

五日二条中納言資季卿泰入被發遣六社奉幣

使依霖雨也於丹生貴布祢者被用殿上使

十二日辛未為御方違行幸四條大納言隆親卿

亭

十五日甲戌權中納言通雅卿被行軒廊御卜社鴨羽蟻出未更

十六日乙亥院寂勝講始也

十九日戊寅入夜甚雨夜半大風民屋多破損

左大臣參入被發遣止雨八社奉幣使

廿二日辛巳寂勝講始也

廿三日壬午大納言隆親卿被定閑院遷幸御祈

御讀經日時

廿四日癸未自今日為止雨御祈被始不動供

百練抄卷十六

三十六

廿六日乙酉寂勝講結願左大臣被行賑給定

六月五日甲午酉時計赤雲見南方瑞雲

閑院遷幸御祈八社奉幣也四條大納言隆親卿

已下泰之

十三日壬寅自今日於新造閑院被始行御讀經

三少

十六日天晴前太政大臣實氏發心地已數日也

公賢法師為驗者雖及晚無其氣之間自院以御

隨身賴隆被引御馬黑栗召砌下給禄生衣一領

取先被引祈被下之御馬次大官院以高經遣

御衣女郎花浮織且賜公賢法師次准后衣一領  
權大納言卿實雄取之次本所牛馬引之右大將相公  
牛万里小路大納言公基權大納言實雄新大納  
言實教道勝僧正牛各本所侍次勅使藏人勘解  
由次官成俊進公賢法印座上仰勸賞僧正權次公  
賢肩御衣等退其間親昵人々來集前左大將實  
志水谷大納言實相民部卿為家右大將公相万  
里小路大納言公基權大納言實雄新大納言實  
新宰相為氏等也

廿七日丙辰閑院遷幸儀也自關東造進畢記錄所始也

百練抄卷十六

三十七

七月三日辛酉法勝寺御八講始也

十五日入道太宰大貳資經自去春比病惱遂以

薨生年臨終為正念

廿四日壬午法勝寺阿弥陀堂并蓮花王院等御

佛奉作始之於法勝寺上皇臨幸寺門

八月二日庚寅中納言資季卿行軒廊御卜平野社中

死人骨

三日辛卯法勝寺阿弥陀堂上棟也上皇臨幸云

云

十日戊戌蓮華王院上棟也上皇御幸也

前奏議入道長朝卿薨

十九日丁未姫宮上皇御百日也於仙洞有此儀

廿八日丙辰右大臣皇女泰入被發遣祈年穀奉幣使

九月九日丙寅仗議也伊勢造宮使知經造宮不

法間更也右大臣已下泰入云々

十三日庚午天滿宮祭也而可停止飛礫之由兼

別當宣使廳下部等制止之間弄置彼神輿於大

理門中退散之

十五日壬申月蝕也

十七日甲戌午刻地震

百練抄卷十六

三十八

廿三日庚辰季御讀經始也

閏九月二日巳丑權中納言公光卿泰入行軒廊

御卜伊勢

十七日甲辰上皇御幸吹田殿大宮院同御幸七

十日可被召湯山御湯云々

十月一日丁巳平座如常

二日戊午權大納言良教卿行大神宝日時定

十六日壬申大舍人頭清基朝臣令申白虹之由

更

十一月二日丁亥内親王宣下也順德院皇女

御名穰子四

茶大納言隆親卿已下泰之

十三日戊戌左大將定雅卿已下泰入被行院号

定以襪子内親王為永安門院

十四日准后從一位藤原淑子法性寺禪定太閤北政所入道太政

大臣公薨經公女薨

十六日辛丑五節參入也公卿權中納言師純卿泰議有資卿同基

具伊勢前左卿大臣知行

廿一日丙午權大納言良教卿泰入被發遣大神

寶并宇佐使以宮内大輔藤氏先為使

熊野本宮遷宮也院司藏人氏部大輔光国參向

百練抄卷十六

三十九

十二月四日己未權中納言師繼卿被行軒廊御

卜吉田社惟異支

九日甲子天皇御各始也左大臣已下參入之文

章博士長成朝臣為侍讀

十三日戊辰左大臣參入被發遣荷前使

十九日甲戌立親王親王内右大將公相卿已下

泰社之

廿二日丁丑於攝政直廬被行京官除目

同四年正月一日丙戌四方拜小朝拜節會院并攝義經

政家拜禮如例

三日戊子上皇臨幸六条殿

五日庚寅叙位儀也

八日癸巳親王宗尊御元服也加冠左大臣叙三

品給

九日甲午親王御元服之後令入養明門院御所

即還御

十一日丙申於攝政直廬被始行縣召除目

廿二日丁未於直廬被行女叙位

廿六日辛亥於直廬被行吉各奏

二月一日乙卯日蝕正現大原野祭延引

百練抄卷十六

四十

五日己未石清水賀茂行幸日時定也左大將定

雅卿已下參之

中納言資季卿被行軒廊御卜外宮遷宮間支

八日壬戌兩社行幸延引之由被御下也

十三日丁卯左大臣泰入被發遣祈年穀奉幣使

先被行定

十六日庚午月蝕

廿一日法勝寺禪定殿下薨道宗生年六十

廿七日辛巳左大臣泰入被行公卿分配支

卅日甲申關東飛脚到來三品親王宗尊為征夷

將軍可有御下向云々

三月十八日壬寅左大臣泰入被宣下三品宗尊親王帶劔夏

十九日癸卯三品親王宗尊令下向關東給為征夷大將軍

廿二日丙午石清水臨時祭也中務權大輔家盛為使

四月一日甲寅左大臣泰入被宣下征夷將軍夏三品親王宗尊

十八日辛未前將軍三位中將賴嗣卿并若宮已

百練抄卷十六

四十一

下自關東上洛

廿日癸酉賀茂祭也

五月一日甲申中納言資季卿被行軒廊御卜外宮鳥居間夏

二日乙酉被始修水天供等依近日早魃過法也又祈雨奉幣度々也

九日壬辰新日吉小五月會如常

十五日戊戌雨降洪水水天供二七日畢

左大臣泰入被定一代一度大仁王會日時僧名

十六日己亥上皇御幸八幡七ヶ日御泰篋云々

十八日辛丑權中納言公光卿被行軒廊御卜伊勢外宮御裝束已下為氣喰損夏

廿二日乙巳寂勝講始也

廿四日丁未左大臣泰入被定賑給使

六月四日丙辰一条中納言公持卿泰入被奏大

仁王會咒願草

八日庚申宜陽門院崩御自去月此渡御伏見

十三日乙丑主上行幸相國富小路亭內侍所同

渡御

十四日丙寅祇園御靈會如例同日還幸閑院

百練抄卷十六

四十二

十九日辛未一代一度仁王會也權大納言冬忠卿已下參之

七月五日丁亥上皇臨幸法勝寺依御八講也

左大將定雅卿任大臣兼宜旨也

十七日己亥權大納言冬忠卿參入被發遣祈年

穀奉幣使先定也

廿日壬寅任大臣節會內大臣定雅

廿八日庚戌權中納言通雅卿被行軒廊御卜伊勢夏

八月一日癸丑中納言資季卿被行軒廊御卜平野



杜蛇出  
現之夏

二日甲寅內大臣拜賀也

七日巳未內大臣直衣始也

十三日乙丑內大臣著陣也

十四日丙寅月蝕依兩不正現

十九日辛未上皇御幸賀茂社七ヶ日御泰筆云

云

廿五日丁丑右大臣拜賀

廿八日庚辰有宣下夏以權大僧都專中納言資

季卿泰之

百練抄卷十六

四十三

九月十三日甲午上皇御幸吹田殿為可有御湯  
治夏也

十六日丁酉大夫史小槻淳方卒五十

十月三日甲寅攝政上表也兼註權大納言冬忠卿已

下泰之被行勅答夏攝政攝政宣下也以左大臣攝政

拜賀也

八日巳未左大史有家拜賀也

十三日甲子被宣下攝政兵仗夏權中納言師繼

卿已下泰之攝政兵仗御拜賀也

十五日丙寅於院殿上被定御元服夏攝政已下參之

攝政直衣始也

廿日辛未季卿讀經始也

被宣下大殿兵仗事中納言資季卿已下泰之

廿六日丁丑攝政左大臣著陣也無申文有留御

前

廿七日戊寅攝政初度上表也

廿九日庚辰攝政第二度上表也

十一月一日辛巳攝政第三度上表也

三日癸未任大臣太政大臣兼平公兼宜旨也

八日戊子賀茂太田社壇鹿斃山鹿氏人於大田

百練抄卷十六

四十四

社傳龜東事被問外記官無先規之由申之被尋法  
家之處可為五ヶ日穢之由申之仍朝夕御供為  
鳥居外供之

十日庚寅攝政詔各等復奏也中納言資季卿泰

入

十三日癸巳任大臣節會也万里小路大納言公

基卿已下泰之次太政大臣攝政大饗也於近衛

儀新任內大臣為尊者次內大臣大饗也權大納

言公基卿為尊者

十八日戊戌內大臣拜賀也

同日卯時許北野早取社後自芝上火出来炎高  
五許丈登摺捐即其間及雷鳴

廿日庚子左大臣着陣也

廿一日辛丑五節參入公卿權大納言實雅卿權  
中納言顯朝卿泰議

廿四日甲辰於攝政直廬松光被勘可被立太政

大臣倚子於官外記廳日時

豈明節會也內弁左大臣

廿五日乙巳太政大臣倚子被立外記官廳等

廿八日戊申中納言資季卿泰入被行軒廊御上

百練抄卷十六

四十五

伊勢

左大臣參入被定御元服之由伊勢幣日時定

廿九日己酉賀茂臨時祭也

十二月一日辛亥左大臣參入被定遣御元服之

由伊勢幣使

四日甲寅於攝政直廬被行京官除目權大納言

實雄卿已下泰云々

外宮假殿遷宮日時定也權大納言冬忠卿泰云

云

權大納言通成卿拜賀泰議公泰卿拜賀普陣也

正三  
位後

九日己未万里小路大納言公基卿參入被定石

清水賀茂兩社行幸日時等

十五日乙丑右大臣定雅着陣

十六日丙寅內大臣公相着陣

左大臣泰入被定御元服日時

主上御冠寸法并造始也

十七日丁卯御躰御上奏也去十日  
延引

廿二日壬申內大臣參入被定御元服由山陵使

先被定日時

百練抄卷十六

四十六

廿三日攝政息七歲着袴也

廿八日戊寅御元服習禮也

同五年正月一日庚辰四方拜小朝拜如常節會拜

禮等如例

二日辛巳上皇御幸始也兼明門院土御門

三日壬午主上御元服儀也御年十一加冠攝政太政

大臣兼平理鬢左大臣道長理髮內藏頭資平朝臣

四日癸未御元服後宴也

五日甲申叙位儀也於攝政直廬被行云々

六日乙酉石清水賀茂兩社行幸御祈七社奉幣

日時使等定也

七日丙戌御元服賀表并白馬節會也内弁左大臣

十日己丑兩社行幸御祈七社奉幣也權大納言公基卿已下參之

十一日庚寅縣召除目始也於攝政直廬被行之廿日己亥石清水行幸巡檢也大納言藤公基卿已下向之騎馬儀也

廿四日癸卯上皇臨幸鳥羽殿明後日行幸可有御見物之故也

百練抄卷十六

四十七

廿六日乙巳石清水行幸也大殿攝政右大臣已下供奉之

廿七日丙午大殿已下諸卿奏集頓宮有片舞事還御鳥羽殿

大外記師兼依所勞出家五十

廿八日丁未於鳥羽殿有朝觀禮大殿殿下左大臣已下參之

二月一日己酉日蝕不正現依雨也

三日辛亥賀茂行幸也供奉人大略如八幡還宮後被仰行吏官賞夏

廿一日己巳上皇御幸石清水宮七夕日御卷簾云々

今夜戌刻有光物流星歟云々

廿四日壬申被發遣祈年穀奉幣使當日右大臣泰之

廿五日癸酉八幡大塔供養也

廿八日丙子上皇自八幡宮御還向御幸賀茂北野等社

三月十三日辛卯上皇并大宮院御幸天王寺初度也

百練抄卷十六

四十八

十六日甲午石清水臨時祭也右大臣已下奏入左中將雅平朝臣為使

四月十四日辛酉賀茂祭也使右少將隆茂十七日甲子内大臣公相着陣轉左大將

廿日丁卯於院殿上被議定宇佐正八幡宮炎上間夏攝政已下參陣

廿一日戊辰於仙洞被評議沽價法夏

廿五日壬申大殿春日詣也

廿六日癸酉右大將公基卿拜賀也廿八日乙亥右大將公基卿着陣也

卅日丁丑軒廊御卜正八幡宮交上內大臣已下參入之

五月四日辛巳院寂勝講始也攝政已下參之

六日癸未寂勝講中日也前太政大臣相具子息左右大將被參之

八日乙酉石清水一社奉幣也依大隅國正八幡宮交上左

大臣已下參入之

九日丙戌新日吉小五月會也

十三日庚寅祈雨二社奉幣也

十四日辛卯室生龍穴御讀經定也

百練抄卷十六

四十九

十六日癸巳依炎旱御祈自今日被始水天供七

廿日丁酉清滝御讀經定也

今日御方違行幸也殿四條

廿二日己亥神泉御讀經定也

今日寂勝講始也攝政已下參之

左大臣被行賑給定

廿五日壬寅兩下仙洞作文御會也

六月四日辛亥依天愛御祈被發遣廿二社奉幣使大納言隆親卿已下參之先被行定

十三日庚申天皇行幸院御所明日祇園神輿可令通陣頭給之由兼日有沙汰內侍所不渡御

廿日丁卯參議實尚卿著陣後居

廿一日戊辰於仙洞有意見評定更

廿四日辛未於仙洞重有意見評定更

七月十二日戊子宣下新制十八ヶ条

廿三日己亥御方違行幸殿四條

廿六日壬寅攝政殿入御宇治

廿七日癸卯嵯峨聖信上人入藏

八月七日癸丑軒廊御卜伊勢權中納言通雅卿

百練抄卷十六

五十

奏之軒廊御卜賀茂社中納言資季卿參之

十一日止兩奉幣也

十三日己未一代一度佛舍利日時定也

十五日辛酉石清水放生會也權大納言通成卿已下參之

十九日乙丑祈年穀奉幣發遣也右大臣已下參之

廿一日丁卯賀茂一社奉幣也資布社中納言

資季卿已下參之先定也

廿七日癸酉殿上所宛也左大臣已下參之

九月六日辛巳御方違行幸也

十四日己丑平野社假殿遷宮日時定也

十七日壬辰戌刻許地震

廿三日戊戌臨時仁王會闕請定并咒願草奏也

中納言資季卿已下奏之

廿四日己亥臨時仁王會也中納言資季卿已下

奏之

廿六日辛丑仗議也造豐受大神宮使神祇權大

等生引罪名吏主御門大納言顯忠卿已下奏仕

十月二日丁未被勅平野社假殿遷宮日時中納

百練抄卷十六

五十一

言藤資季卿已下奏之

十日乙卯大隅國正八幡宮造營枳入并亥始日

時定也中納言資季卿已下奏之

十三日戊午軒廊御卜豐受大神宮惟吳花山院中納言

通雅卿奏之

廿一日丙寅軒廊御卜豐受大神宮一內大臣奏

之

今日御方違行幸也川今殿出

廿九日甲戌太政大臣初度上表儀也

今日若宮御着袴也於院御所有此儀攝政已下

奏之

十一月三日戊寅太政大臣第二度上表也

今日軒廊御卜伊勢而弓場殿南方死人頭出来

依為穢儀延引

四日己卯大宮院御奏菴春日社七ヶ日也

八日癸未太政大臣第三度上表也

今日前內大臣實基蒙太政大臣兼宣旨

十四日己丑五節舞姫奏入公卿大納言良教師

國伊豫內大臣知行淡路

廿二日丁酉賀茂臨時祭也前義濃守邦經朝臣

百練抄卷十六

五十二

為使

廿四日己亥任太政大臣實基節會也內弁右大

將公基卿

廿五日庚子春季御讀經始也右大臣已下參入

廿八日癸卯太政大臣拜賀也

十二月一日乙巳省試也式部大輔經範卿已下

奏之

五日己酉京官除目於攝政直廬被行之奏議左

衛門督雅忠卿執筆大納言良教卿已下奏之

七日辛亥下名加任也權中納言師繼卿已下奏

之

十日甲寅法勝寺阿弥陀堂供養習禮也院司公

卿右大臣已下叅寺門

十五日叅議藤原隆行卿著陣兼修理大夫後

十六日庚申度緣請印

廿日甲子上皇大宮院御同御幸法勝寺明後日

可有阿弥陀堂供養之故也明日依當太白方今

日御幸

廿二日丙寅法勝寺阿弥陀堂四余大納言隆親卿給備中國造進

也供養也天皇臨幸寺門攝政內大臣已下供奉

百練抄卷十六

五十一止

也右大臣已下叅會寺門

嘉元二年五月十五日以權右中弁宜房朝臣本書寫校合畢



百練抄卷第十七

院下

百練抄卷十七

一

院下自建長六至正元

建長六年正月一日乙亥兼平攝政家大閤拜禮如常院後醍醐

女院太皇拜禮如常小朝拜節會如例

四日戊寅上皇御幸始兼明門院御所土御門殿內大臣已下

供奉之同日大宮院御入內也

五日己卯叙位議也於直廬被行之執筆奏議實

尚卿勤仕之大納言良教卿已下奏之

七日辛巳白馬節會左道良大臣已下奏之

九日癸未主上為御方違節分行幸北山第內大

臣已下供奉之

百練抄卷十七

二

十一日乙酉縣召除目始也於攝政直廬被行之執筆奏議實尚卿勤之權大納言顯定卿已下奏

之

十三日丁亥上皇臨幸法勝寺依修正也內大臣

以下供奉之

十六日庚寅踏哥節會左大臣以下奏之

同日下名加任也花山院中納言通雅卿已下奏

之

十九日癸巳女叙位中納言資季卿以下奏之

廿六日庚子大宮女院御着帶

左大弁經俊朝臣拜賀也

廿八日壬寅近衛前關白基平息基平於仙洞御元服

即叙正五位下被仰禁色事

廿九日癸卯中納言資季卿奏入行軒廊御卜神

宮心柱

二月二日乙巳官奏

三日丙午上皇御幸八幡宮七夕日可有御泰菴

云々

是日侍從基平拜賀

是日太政大臣實基被上表

百練抄卷十七

三

十四日丁巳釋奠也上丁依當初年權大納言良

教卿以下奏之

十七日庚申主上為御方違行幸內大臣今出川

第右大將公基卿已下供奉

十九日壬戌午刻許法成寺炎上

同日戌刻地震

廿三日丙寅上皇御幸祇園北野廣隆寺嵯峨等

廿六日己巳被奏遣祈年穀奉幣使先左大臣被

定申日時使等

三月七日庚辰上皇若宮免勅當掌侍入道女始令入聖

護院僧正給先於仙洞密々有御著禱事

九日壬午石清水臨時祭也內大臣已下奏之右

少將長定朝臣為使

同日長講堂御八講上皇有臨幸

十七日庚寅院尊勝陀羅尼供養也

廿一日甲午稻荷社御輿迎延引依使相論也

廿四日丁酉法成寺金堂御佛事始

廿六日乙亥被宣下攝政牛車事

從二位平府高卿薨

廿九日壬寅為御方違行幸記錄所

百練抄卷十七

四

四月十一日癸丑軒廊御卜霖雨

十三日乙卯依三合御祈被發遣廿二社奉幣使

內大臣以下奏之先被定日時使等

十九日辛酉賀茂祭也左近中將隆顯朝臣為使

廿四日丙寅大宮院御幸今出川第可為御產所

也

廿五日丁卯軒廊御卜神宮中納言資季卿參之

五月二日癸酉院寂勝講初日也攝政以下奏之

九日庚辰新日吉小五月會

廿二日癸巳寂勝講始也攝政以下奏之

廿六日丁酉同結願也左大臣參入被行公卿分配并賑給定等

廿九日庚子左大臣參入被行官奏不堪田定事閏五月廿日辛酉官奏也左大臣已下參之

廿六日丁卯為御方違行幸記錄所

廿八日己巳刻大宮院御產皇子降誕

六月一日辛未皇子御浴殿儀也攝政并內大臣已下參之同日御產三夜儀也

二日壬申皇子御浴殿如昨日

三日癸酉皇子御浴殿如初同日御產五夜儀也

百練抄卷十七

五

四日甲戌御浴殿如先

五日乙亥御浴殿如先同日御產七夜也

七日丁丑御產九夜

十二日壬午賀茂神主久繼卒

若宮御母儀吉田中納言為經卿可奉養君之由

自仙洞被御下之間彼室為御迎前駟一人侍四人召吳之泰兼明門院

十三日癸未主上行幸今出川殿明日祇園會少

將井通陣中給之故也

十四日甲申主上還御閑院

十六日丙戌月蝕

廿九日己亥官奏右大臣以下參入

七月三日癸卯法勝寺御八講始也上皇臨幸寺門

門

五日乙巳權右中弁資定朝臣下向南都為實檢

東大寺寶藏戶燒損也去比為雷火令燒損云々

十九日己未今宮御行始也自御產所今出川殿

右大將公基卿以下供奉

廿三日癸亥今夕為御方違行幸今出川第內大臣已下供奉

百練抄卷十七

六

廿五日乙丑今宮御五十日儀也於上皇御所

此儀攝政以下參入之

廿六日丙寅准后從一位藤原貞子當今御宣下

也二条中納言資季卿參入李御讀經始也權中

納言公泰卿已下參之

八月三日癸酉立親王今度降誕皇宣下也右大

臣已下參之

五日乙亥中納言藤原資季卿參入被行軒廊御上

鴨并祇園社

十三日癸未別當頭朝卿拜賀并聽始也

十四日甲申中納言資季卿被行軒廊御卜太神宮御

裝束破損事

十七日丁亥内大臣參入被<sub>レ</sub>發遣祈年穀奉幣使先被<sub>レ</sub>定日時使等

十九日己丑上皇御<sub>レ</sub>泰八幡宮

廿九日己亥中納言資季卿泰入被<sub>レ</sub>行軒廊御卜

神宮御裝束為鼠被喰損惟異

九月十日己酉今宮御百日也於仙洞有此儀攝政已下泰之

十九日戊午上皇石清水賀茂兩社御幸定并行

百練抄卷十七

七

事所始也

廿日己未中納言資季卿參入被<sub>レ</sub>行軒廊御卜神宮御

惟異

十月九日戊寅權中納言通雅卿泰入被<sub>レ</sub>行軒廊

御卜賀茂惟異

廿日己丑中納言資季卿泰陣被<sub>レ</sub>行來廿二日上

皇石清水御幸召仰事

廿二日辛卯上皇臨幸石清水宮被<sub>レ</sub>召具舞人一

負等右大臣以下供奉

廿三日壬辰於八幡有片舞事右大將公基卿已

下列之今日上皇還御

廿八日丁酉上皇臨幸賀茂社之儀如八幡

廿九日戊戌中納言資季卿泰入被<sub>レ</sub>定申平野社正遷宮日時事次被<sub>レ</sub>行軒廊御卜廣田社同卿行

之

十一月十四日癸丑五節泰内中納言雅忠泰議隆行等卿和泉前中納言常陸大納言隆親卿等獻之

十七日丙辰豐明節會也内弁内大臣先被<sub>レ</sub>着陣辭大將之後

廿一日庚申日吉臨時祭也右京權大夫忠長朝

百練抄卷十七

八

臣為使

廿二日辛酉賀茂臨時祭也右少將守資朝臣為使

廿五日甲子内大臣參陣被<sub>レ</sub>定仁王會日時僧名等

廿六日乙丑仁王會咒願草奏闕請定也

廿七日丙寅臨時仁王會也

十二月二日庚午攝政後辟表事權大納言良教卿泰入被<sub>レ</sub>行勅答并改攝政為閑白詔書事次被<sub>レ</sub>行准攝政事

十五日癸未月蝕也然而不正現

十七日乙酉於關白直廬被行京官除目奏議實  
尚卿為執筆今夜除目以前右大將公基卿奏陳  
奉任大臣兼宣旨

十八日丙戌入道大納言隆衡卿薨年八十三

廿日戊子節分御方違行幸也冷泉

廿五日癸巳任大臣節會也右近大將權大納言公基卿任內大臣

新任權大納言通行卿為內弁

廿六日甲午被癸遣宇佐使大內記右大臣著陣也轉任之後

百練抄卷十七

九

同七年正月一日四方拜小朝拜等如例節會如常  
內弁土御門權大納言顯定卿勤仕之院并大宮  
院拜禮等如常關白依禁忌無出仕三公又輕服  
無出仕

二日庚子上皇御幸兼明門院土御門殿

四日壬寅權大納言通行卿大納言之後著陣

五日癸卯叙位議也關白依禁忌不被奏內之間

任正治例於仗座被仰之中納言資季卿以下奏

之

七日乙巳白馬節會也內弁土御門權大納言顯

定卿勤仕有加叙

十三日辛亥上皇御幸法勝寺依修正也

十六日甲寅踏哥節會也權大納言顯定卿為內  
弁

廿八日丙寅可被行縣召除目之處召仰之後俄  
延引依關白所勞也

二月二日己巳上皇御幸八幡宮七ヶ日可有御  
奏筆云々

十日丁丑伍馬宮雅成親王為皇子於配所伍馬令入  
滅給

百練抄卷十七

十

十一日戊寅縣召除目始也於關白直廬被行之  
奏議實尚卿勤執筆

十五日壬午上皇御幸大理頭朝卿嵯峨山庄有  
種々御儲等

廿一日戊子依大宮院去年閏五月御產御祈院  
御隨身等於八幡賀茂上下社北野社可有五番

競馬立願仍今日於賀茂上下在之

廿三日庚寅權中納言顯朝卿奏入被癸遣止兩

奉幣便是日院尊勝陀羅尼供養也

廿四日辛卯院御隨身等於北野社有五番競馬

廿六日癸巳祈年穀奉幣也權大納言顯定卿奏  
入行事先被定申日時使等

卅日丁酉中納言資季卿奏入被定申藤崎社假  
殿近宮日時

三月八日乙巳太上皇并大宮院南山御進發也  
九日丙午石清水臨時祭也使右近中將能基朝

臣勤仕

四月一日丁卯上皇自熊野御還向依御輕服去

月比六条不令泰稻荷社給給

十三日己卯今晚權大納言顯定卿出家

百練抄卷十七

十一

十九日乙酉賀茂祭也使右近少將實隆勤之

廿四日庚寅於神泉苑有雨諸事

廿八日甲午權中納言基具卿奏入被行軒廊御

卜鳴八幡御山  
勤事

五月二日丁酉右大將公親卿拜賀

九日甲辰新日吉小五月會也上皇御幸云々

十五日庚戌院宸勝講始也

廿二日丁巳宸勝講始也

廿六日辛酉同結願也左大臣泰陣被定申賑給

使事先左大臣着陣輕服

六月五日院御幸吉田泉殿々上人御隨身等有  
五番競馬云々

八日癸酉中納言中將基平卿御拜賀也

十三日戊寅主上行幸前大相國富小路第依明

日祇園會少將并神輿可融陣中給也

廿日乙酉中納言資季卿奏入軒廊御卜神宮  
惟異

廿五日庚寅中納言中將基平卿御着陣也同日

右大將公親卿着陣也

廿八日癸巳權大納言師繼卿拜賀

七月四日戊戌上皇御幸法勝寺依御八講也

百練抄卷十七

十二

十八日壬子慈源僧正入滅

廿日甲寅內大臣公基着陣也

八月一日乙丑勸修寺八講初日也大理顯朝卿

入寺令具一負

三日丁卯權中納言通雅卿奏入被行軒廊御卜

神宮  
事

十日甲戌上皇御幸伏見殿御傳領之後初度也

十一日乙亥權中納言公泰卿奏入被宣下右大

臣隨身兵仗事

十五日己卯石清水放生會也



十六日庚辰上皇御幸賀茂社七日可有御泰籠云々

廿三日丁亥右大臣兵仗拜賀

廿五日己丑右大臣兵仗之後着陣

廿七日辛卯初年穀奉幣登遣也權中納言基平卿參之

廿八日壬辰雷落懸法勝寺九重塔上雷火出来

然而打消之

九月十九日壬子季御讀經始也

廿三日丙辰春日行幸定也右大將公親卿參之

百練抄卷十七

十三

以官朝所為行事所也

廿六日癸亥結政恠異地死被行御祈仁王講事

廿七日庚申春日行幸點地

十月十日癸酉於仙洞有嵯峨御所龜山御移徙

定事別當隆顯卿申拜賀

十三日丙子春日行幸御祈奉幣登遣右大將公

親卿參之

十六日己卯春日行幸大校

十七日庚寅春日行幸巡檢也左中弁宗雅朝臣

以下參之春日行幸神室御覽

十八日辛巳上皇御幸鳥羽殿為明日行幸御見物也今日右大將公親卿被行春日行幸召仰事被奏宣命草御馬御覽也

二条前中納言資賴卿薨

十九日壬午主上行幸春日社右大臣内大臣以下供奉關白雖為輕服日數内依兼保例供奉之

廿日癸未於春日社有片舞事

廿一日甲申主上還幸内大臣以下供奉之權中納言公泰卿參陣被行行事官勸賞事

廿七日庚寅上皇嵯峨殿御所龜山御移徙儀也

百練抄卷十七

十四

申刻御幸大閣關白已下供奉

廿八日辛卯上皇自嵯峨殿還御大炊御門殿御幸始儀也

十一月一日甲午權中納言通雅卿被行軒廊御

卜神宮

四日丁酉宰相中將實尚卿輕服之後着陣

十日癸卯前中納言公光卿薨廿三去夜出家同

日大宮院御着帶

十一日甲辰中納言資季卿被行軒廊御卜神宮

所望  
業事

十七日庚戌宰相中將長雅卿拜賀著陣也

廿日癸丑五節舞姫參入公卿參議時起國因

右大臣石見前太政大臣實基

廿三日丙辰豐明節會內并內大臣令勤之

廿四日丁巳權大納言良教卿參入被定申臨時

仁王會日時僧名

廿五日戊午臨時仁王會也

廿八日辛酉賀茂臨時祭使右近中將伊嗣朝臣

勤仕

十二月四日丁卯內大臣上表左大將

百練抄卷十七

十五

十三日丙子京官除目於關白直廬被行之藤宰相盛卿勤執筆

十四日丁丑月蝕正現

十六日己卯頭左大弁經俊朝臣從事

十七日庚辰上皇第三親王恒仁有御書始事注御

孝右中弁光國朝臣為侍讀內大臣經大將後著

陣左大將基平卿御拜賀

廿日癸未於上皇御所殿有除目御習禮事三

夕日云々

廿七日庚寅左大將基平卿御著陣

康元元年正月一日癸巳四方拜如例小朝拜院關

白家拜禮如例節會如例左大臣勤內并同日天

皇行幸御直廬依節分御方違也

二日甲午太上皇御幸兼明門院門上殿御

同日大宮院御入內

六日戊戌叙位議昨日御衰日於關白直廬被行

之藤宰相盛卿勤仕執筆

七日己亥白馬節會左大臣勤仕內并有小叙位

八日庚子女叙位於關白直廬被行之泰議實尚

卿為執筆

百練抄卷十七

十六

十日壬寅太上皇御幸法勝寺依修正也

十一日辛卯關白息元服儀也名字基忠加冠大

閣理髮頭左大弁經俊朝臣

十三日乙巳吉書奏御前右大臣公相泰候之

十六日戊申踏哥節會左大臣為內弁

十九日辛亥縣召除目始也御前右大臣候執筆

廿日壬子一条前實經攝政息名字元服儀也加冠前

殿理髮頭中將通世朝臣

廿六日戊午左大將基平卿御著陣也正三位

同日上皇御幸八幡宮七夕日可有御泰筆云々

二月六日戊辰內親王後堀河院皇女御名宣下也中御

門大納言通行卿已下泰之以體子內親王左大臣已下泰

七日己巳院号定為神仙門院

之先有准后宣下事先有條事定

同日少將基忠關白御拜賀

十六日戊寅院尊勝陀羅尼供養

十八日庚辰祈年穀奉幣使發遣右大臣已下參

之先被行定

廿日壬午侍從家經一條前殿御拜賀

百練抄卷十七 十七

卜神宮

廿九日辛卯氏部卿為家卿出家

大判事中原章行率

三月十一日壬寅神仙門院院号以後御幸始也

十五日丙午石清水臨時祭也左少將資邦為使

十八日己酉八幡小塔待賢門院御願去正治元

進之力忽終造當勿供養也院廳沙汰之院司土御門大納

言通行卿已下參行之

廿三日甲寅流人宣下檢非違使章國依北野中

納言資季卿泰之

廿五日丙辰權中納言雅忠卿泰陣被行軒廊御

卜伊勢

廿七日戊午稻荷御輿迎延引

四月六日丁卯大宮院御產御祈大法等被始之

九日庚午北野一社奉幣也神宝破損中納言資

季卿以下參之

十日辛未大宮院御產皇子大閤已下參之

十四日乙亥皇子御浴殿始也

十八日己卯前大僧正田淨入藏八十

百練抄卷十七 十八

廿七日戊子於院殿上被定今宮御五十日事

廿九日庚寅右大臣泰陣被行直物

五月三日癸巳院寂勝講始也權大納言公持卿

已下泰之

九日己亥新日吉社小五月會也上皇有御幸入

道前權大納言實持卿薨

十二日壬寅中院中納言雅忠卿泰陣被行軒廊

御卜北野

十四日甲辰上皇御幸賀茂社七日可有御泰

箋云々

廿一日辛亥內裏宸勝講始也關白內大臣以下

參之  
廿二日壬子前中納言為經卿出家依所旁也

廿五日乙卯宸勝講竟也左大臣參仗座被行賑給使定

廿七日丁巳權中納言雅忠卿被行軒廊御卜伊勢

六月七日丙寅院御所嵯峨殿御持仁堂供養也女房一品堂云々而為勅願之儀

八日丁卯今宮為御行始入御上皇御所即有御

百練抄卷十七

十九

五十日事於院殿上被定大宮殿御移徙事

九日戊辰入道中納言為經卿薨四十

十三日壬申主上為御方違行幸前太政大臣冷

泉第明日祇園御靈會少將井神輿依可令通陣

中給也右大將公親卿以下供奉內侍所同渡御

十四日癸酉今夕天皇還御閑院

是日八幡寶殿鳴動午刻自樓門上似白幡物立

上飛行之由經奏聞云々

七月三日辛卯中納言資季卿參入被行太上皇

大宮殿御移徙御幸召仰事上皇御移徙五條大

宮新造御所也大宮院御同車被召具一負

五日癸巳上皇御移徙已後御幸始儀也右大臣以下供奉之

廿八日丙辰權中納言雅忠卿被行軒廊御卜杜惟異

八月一日勸修寺八講初日也氏長者後民部卿

忠始入寺勸解由次官高俊二千石高朝扈從前

十六人侍  
十一人  
十日戊辰入道前權大納言賴經卿薨

百練抄卷十七

二十

卜鴨川合社盜人

十五日癸酉石清水放生會如常

十七日己亥栗田宮燒亡

廿日戊寅春李御讀經始權大納言良教卿以下

參入云云

前太政大臣天王寺安井實氏建立一堂被遂供養

今年相當故入道太政大臣經十三年遠忌之故也

廿七日乙酉上皇御幸花山院前右大臣定雅山庄栗

田口第

近日赤斑瘡流布上下病惱

九月五日壬辰天皇令煩赤斑瘡御

十四日辛丑祈年穀奉幣使發遣也內大臣以下

參之先被行定

十七日甲辰赤斑瘡御祈等繁多

廿四日辛亥中納言資季卿參入被行軒廊御卜

伊勢事鳴杜事平野社

廿五日壬子被立栗田宮奉幣使中納言資季卿

參之

主上赤斑瘡御惱御落居之後始御沐浴云々

同日雅尊親王院皇子女薨依赤斑瘡也

百練抄卷十七

二十一

同日三位中將賴嗣卿薨依赤斑瘡也

同日寂守僧正入滅

十月五日壬戌改元改建長為康元權大納言良教卿以

下參之依赤斑瘡也

廿五日壬午上皇御所嵯峨殿御堂澤金剛院供養也

上皇臨幸云々

是日前參議忠定卿薨

十一月七日甲午上皇御幸五條殿於殿上育女

御入內定關白已下參仕之

十四日辛丑五節參內公卿權大納言公國近江親參議親賴

納言顯實長門前左大將實有

十七日甲辰豐明節會內弁右大臣

同日女御從三位社子後改公子前太政大臣惠女入內儀也

廿三日庚戌女御露頭也右大臣著伏座被宣下

女御事

廿四日辛亥檢非違使章澄渡強盜

廿七日甲寅仁王會也

十二月十三日庚午京官除目也左大臣為執筆

廿七日甲申前右大臣定雅公出家

廿九日丙戌流人檢非違使章國官府請印也

百練抄卷十七

二十二

正嘉元年正月一日丁亥四方拜小朝拜如例院關

白家拜禮等如例節會內弁左大臣道長勤仕之

四日庚寅上皇御幸兼明門院土御門殿

六日壬辰叙位議執筆左大臣也

七日癸巳白馬節會內弁右大臣勤仕之

十六日壬寅踏哥節會外納言寶雄卿勤內弁

廿日丙午縣召除目始也左大臣候執筆

廿一日丁未女御退出可有立后之故也

廿九日乙卯立后節會也以女御藤公為中宮左大臣為

內弁

二月三日己未中宮八社奉幣也

七日癸亥中宮立后以後始御入内也

三位中将基忠卿御拜賀

十日丙寅太政官廳炎上朝所之外皆悉燒失

十七日癸酉於仙洞被議定官廳炎上之間事

廿六日壬午土御門新大納言通行卿被行軒廊

御上事

廿八日甲申被立官廳炎上之由山陵使

同日午刻炎上五条大宮殿院御所同炎上

三月二日戊子官廳木作始也四条大納言隆親

百練抄卷十七

二十三

給安木國造之

三日己丑二品大納言局親子故内大臣出家

七日癸巳被立初年穀奉幣使左大臣參入行事

先被行定

八日甲午边衛大閣有御出家事法名

十四日庚子改元定依官廳已下左大臣以下泰

仕之可為正嘉之由被定

廿日丙午石清水臨時祭使左少將基輔朝臣令

勤仕舞人左近將監家棟參宮之間於義津边被

殺害云々

廿九日乙卯直物也左大臣泰入行事

閏三月二日丁巳檢非違使章繼渡強盜二人部

御門關梨家子二人即等十人召具之

三日戊午上皇御幸賀茂社七ヶ日可有御參覽

四月三日戊子於院殿止被定三条坊門殿御移

徙事

十三日戊戌上皇新造三条坊門殿御移徙之儀也

十四日己亥月蝕依雨不正現

廿四日賀茂祭使右少將隆保朝臣上皇御見物

云々

百練抄卷十七

二十四

五月一日乙卯日蝕依雨不正見

三日丁巳花山院中納言通雅卿被行軒廊御卜

伊勢

廿八日壬午内大臣泰入被定申賑給使事

六月十三日丙申主上行幸院御在所三条坊門

殿内侍所不渡御

七月五日丁巳義明門院崩御八十

六日戊午同御葬禮

廿日壬午依義明門院御事被仰廢朝事先被奏

遺令固關警固如例



八月一日時々雨降勸修寺御八講初日也頭左大弁經俊朝臣入寺儀先御藏小舍人右弁侍左二行次官掌二行次車次藏人所左龍口右二行次侍十人也

十五日丁酉石清水放生會如例花山院中納言通雅卿已下泰向之

廿七日己酉祈年穀奉幣使發遣大納言師繼卿泰入行事

九月八日己未左大臣拜賀一位後九月九日庚申檢非違使中原章澄渡犯人臨時祭葬敘去三月

百練抄卷十七

二十五

人家棟左近大夫長繼已下

十九日庚午花山院中納言通雅卿泰入被立春

日一杜奉幣使神木御座之後被謝申

廿日辛未右大臣著陣從一位之後

廿七日戊寅檢非違使章澄擲犯人散位長繼勸賞宣下之叙留

十月二日癸未宸勝講始也

十三日甲午省仁親王院皇子入御仁和寺即今日

御出家上皇御幸也

十六日丁酉土御門中納言頭長卿參入被定月

蝕御讀經夏月蝕正見

十九日庚子親王宣下貞良親王上皇御子義大子內親王先帝御子納言實雄卿已下泰之

廿二日癸卯貞良親王御魚味也於仙洞有此儀

廿四日乙巳左大臣著陣從一位之後

廿八日己酉土御門大納言通行卿著陣除服之後

十一月五日丙辰淨金剛院惣社遷宮也

八日己未右大臣上表

十日辛酉京官除目右大臣為執筆任大臣兼宣旨也大納言實雄卿奉之

百練抄卷十七

二十六

十四日乙丑五節舞姫參入公卿權大納言基平卿泰議伊賴

國阿波左中將公薩朝臣石見勘解由次官經藤

十五日丙寅新大納言基平卿拜賀

十七日戊辰豐明節會內大臣為內弁

廿一日壬申賀茂臨時祭也使右中將茂通朝臣勤仕之

廿六日丁丑任大臣內大臣實雄節會也新任大納言

通雅卿為內弁

十二月二日壬午被發遣宇佐使藤氏部大輔

九日己丑關白春日詣也大納言良教卿以下扈

從之

十四日甲午內大臣拜賀

十五日乙未權中納言基具卿被行野廊御卜鴨杜

異休

廿一日辛丑仁王會也

廿二日壬寅權中納言基平卿御着陣

廿五日乙巳御書所作文也御元服以題禁庭脩後初度也

廿六日丙午右大臣轉任之後着陣內大臣着陣兼平

同二年正月一日辛亥四方拜小朝廷院關白家等

拜禮如例節會左大臣道良勤內弁

百練抄卷十七

二十七

三日癸丑上皇御幸前太政大臣實氏冷泉畱小路第

大宮院御同車右大臣公基已下供奉之步儀

五日乙卯叙位議左大臣為執筆

七日丁巳白馬節會內弁左大臣勤之勤之

八日戊午有加叙女叙位左大臣勤執筆勤執筆

十一日辛酉縣召除目如也左大臣執筆

十三日縣召除目入眼也參議源定實右少弁藤

忠方越職事三人資宣高廷尉佐二人經藤中宮

亮藤高經從三位藤資定被召所帶右從四位下中弁叙之

藤高經以顯長卿例參議親賴卿依条々不調就

父卿訴申被召所職可云不便歟

十六日丙寅踏哥節會左大臣為內弁

十九日己巳上皇御幸八幡宮七ヶ日可有御參

筆

廿日庚午上皇於八幡宮被供養一切經被准御

齋會內大臣以下參之

二月二日壬午大納言基平卿御着陣從二位後歟

十一日辛卯祈年穀奉幣使定也大原野祭也

十三日癸巳被立同奉幣使內大臣實雄泰陣

仁和寺宮御出家以後初今泰院給僧綱三人有

百練抄卷十七

二十八

職前駟四人中童子二人大童子七人內三人下結

十七日丁酉上皇御所龜山殿內御持仙堂供養

也

廿一日辛丑大閣禪門於天台山受戒

廿四日甲辰仁王會也

廿七日丁未季御讀經如也內大臣以下泰之

三月四日中宮行啓畱小路第上達部右大將以

下九人供奉

九日主上行幸中宮御所畱小路殿

十日主上御逗留院御所有御鞠會今夜還御也

十四日中宮還御

廿日庚午石清水臨時祭左近中將俊具朝臣勤  
使是日上皇臨幸高野山前右大臣以下供奉之  
四月十日百也子落書良善僧都被渡六波羅官  
人章種章澄相具向之

十三日院御所大炊御門殿燒失

十七日丙申今晚卯刻天台衆徒奉昇日吉神輿  
三基八王子十禪師客人是園城寺申戒壇事可被宣下之  
故云々

十八日丁酉賀茂祭也

百練抄卷十七

二十九

左近中將具忠朝臣為使

龍院左府生久賴  
同右府生賴隆

中宮使亮高經朝臣

龍本府泰武速  
同兼勝

上皇依山門事無御見物

十九日戊戌祇園北野已下日吉米社等悉打付  
之

五月一日庚戌日吉神輿三基御歸座本社戒壇

事不可被宣下之由再三被仰下之間奉入之

二日辛亥院寂勝講始也內府權大納言花山院

大納言左大將殿二条中納言土御門宰相中將

四条宰相中將參之平宰相時繼卿奉行也

十日己未花山院大納言通雅卿奏入被立三社  
奉幣

十二日上皇御幸賀茂社七々日可有御參龜

十四日癸亥大宮院御參籠春日社

十八日丁卯今晚寅刻山門衆徒等奉切破日吉  
神輿二基二宮八是入洛之間悉可被造替之由  
為訴申也

廿日己巳寂勝講始也右大臣以下參入

百練抄卷十七

三十

廿四日癸酉寂勝講竟有僧事左大臣參陣被行  
賑給定并公卿分配

六月十三日辛卯主上行幸三条坊門殿祇園御  
靈會少將并神輿依可令通陣中給也

十四日御靈會馬長於仙洞御覽右府以下候黃  
子

十五日癸巳堀川中納言基具卿被行軒廊御卜  
霖雨

廿日戊戌檢非違使別當實材卿廳始并拜賀也

七月七日甲寅法勝寺御八講竟也上皇臨幸寺

門內大臣已下供奉之

九日丙辰直物左大臣泰之

十日丁巳被立祈年穀奉幣使權大納言基平卿

已下泰之先被行定

廿二日己巳於院殿上省立坊定內大臣以下泰

入

八月一日丁丑雨降大風所々顛倒破壞不可勝

計安嘉門顛倒云々

七日癸未立坊儀也院第二親王左大臣為內弁

十五日辛卯石清水放生會如例土御門中納言

百練抄卷十七

三十一

雅家卿已下泰向之

廿一日丁酉東宮行啓始也自富小路殿入右大

臣以下供奉之

廿七日癸卯吉祥院上棟

九月七日中宮行啓北山第公卿權大夫以下六

人供奉之

十月四日中宮還御也公卿權大夫以下四人供

奉

十六日辛卯月蝕皆虧正見

廿二日丁酉被立立太子之由山陵使土御門大

納言通行卿以下參入之

左大臣上表任大臣召仰也權大納言基平卿

廿五日庚子中納言中將基忠卿御着陣

十一月一日任大臣節會也基平卿任頭左大弁

經俊朝臣奉行之內弁春宮大夫通成卿勤仕之經

俊朝臣仰宣命趣於內弁退下直廬着改裝束下

裾延五寸兼官除目以後申拜賀向饗所出自直

廬立弓場第二間以藏人申慶次參院御所以下

申之次近衛殿

毛車黃金物榻相儲陣邊

百練抄卷十七

三十二

車副一人平禮白

牛飼薄色袴生裾

前駟二人前大隅寺重而

雜色四人平礼各召儲之

經俊朝臣任參議兼大丞兄弟為大弁宰相例希

代也故大納言經房先長卿定長卿等許也朝隆

卿者雖為末子為八座大丞一門此外無先例歟

四日左大弁宰相經俊直衣始也直衣白綾衣白

袴色非濃駕綱代車大八榻黑金牛指繩牛童車

副雜色如拜賀之時但車副雜色不到礼先秦院

雜色木也  
い前追之

六日辛亥右大臣拜賀實雄

八日癸丑正三位藤基雅卿出家

入道前權中納言藤親俊卿薨

十二日丁巳權中納言基忠卿拜賀

十五日庚申日吉祭也

十七日壬戌右大臣着陣轉任

廿日乙丑五節舞姫奏内公卿權大納言基忠權中納言實材參議

親加賀權大納言通成卿

廿三日戊辰豐明節會右大臣為内弁

百練抄卷十七

三十三

廿五日庚午權中納言為氏卿被行軒廊御卜伊勢

十二月九条前右大臣忠家若君御元服也名字即任忠教

侍從

正元元年正月五日今夕大宮院御入内也

上皇為節分御方違御幸北山第主上行幸押小路殿

六日庚戌叙位也左大臣道良為執筆

七日辛亥白馬節會也左大臣勤仕内弁

安嘉門院御幸始也御車寄前右大臣公基御共殿

上人實冬基光俊具高經朝臣出車二兩也

九日癸丑天皇臨幸法勝寺依修正也院御見物

後白川院御時保元三年以後無例云々

十一日乙卯參議左大臣經俊卿着陣三位殿大納言拜賀也

十五日乙未入道右大臣師經公薨

十六日庚申踏哥節會左大臣為内弁

十九日癸亥縣召除目始也右大臣為執筆

廿一日除目入眼也四条中納言隆行去納言任

都督三位中將家經卿任中納言

百練抄卷十七

三十四

廿三日丁卯上皇御幸八幡宮七ヶ日可有御參

龜公卿右大臣已下七人殿上人頭中將忠繼朝

臣以下十三人供奉權大納言基忠著陣歎

廿九日上皇御幸賀茂北野也

二月八日壬午被癸遣祈年穀奉幣使權大納言

基忠卿以下參仕之

廿日殿中納言中將家經御拜賀也殿上人三人

前駟十人衛府長一人并隈殿御例云々

廿八日壬寅五條坊門坊城地藏堂供養

廿九日癸卯西園寺一切經供養習禮也

三月一日乙巳園城寺內唐院食堂等燒失衆徒放火云々

二日中宮行啓前太政大臣北山第是來五日為大宮院御願可被供養一切經仍兼有行啓御車音系毛來五日新四條大納言為御分國使新調之上達部大夫公持已下六人宮司啓將已下供奉之

三日丁未西園寺一切經供養可准御齋會之由仰下之

四日上皇大宮院唐院御車御幸北山第御車寄左大臣參會公卿左大臣以下七人直衣殿上人

百練抄卷十七

三十五

忠經朝臣已下十五人供奉之

五日今日於西園寺為被供養一切經早且中宮行啓先御車音系毛新調也次公卿兩大夫藤宰相頭雅次宮司亮高經各着淺沓行列御車後上略一負啓將御後殿例之由兼被仰下之先入御之後出車五兩各前令立直池乾砌午刻許上皇御車御幸御堂左大臣候御車寄公卿左大臣今出川前右大臣京極前右大臣以下十一人殿上人忠經朝臣以下十五人前行自御堂四足欲入御之間樂人等參向中門內暫抑御車之後入御此後大宮院同御幸京

極前右大臣候御車寄公卿前右府已下七人殿上人資氏朝臣以下九人後院御幸之歸參同前行次至上行幸直自御堂四足入御公卿內大臣以下十三人近衛次將十五人職事諸司諸衛供奉之入御刻限仰樂屋乱声即止樂人等參向左右行事左具房朝臣相副之龍頭鷄首各於池上奏樂御輿入給之間花山院大納言通雅奉事由之後於中門內下御未刻許春宮系毛御車傳右大臣實雄公候御車後行啓御堂公卿大夫以下五人宮司殿上人以下供奉之一切經供養御導師與福寺別當僧正咒願法務僧正

百練抄卷十七

三十六

慈源其儀嚴重希代之事也

六日庚戌今日於北山第一切經供養翌日儀御遊和哥御會等也主上春宮御所作等

七日朝間雨降今日後宴儀依雨俄延引屬晚甚雨

八日一切經後宴於北山第南庭舞樂其間庭樹落花珠以飛紛滿庭催與院御隨身等立垣代之處自申刻許深雨之間被停舞樂了尤以可云無念歟

九日朝間時々雨降院還御於一條室町邊被立



御車有御見物先春宮次行幸供奉人如前

十一日中宮北山第還御

十二日丙辰上御門大納言通成卿參陣被<sub>祭遣</sub>石清水一社奉幣使

十四日戊午石清水臨時祭使宮內卿宗經朝臣

廿五日己巳仁王會也權中納言家經卿御着陣

廿六日庚午權大納言師繼卿參入被<sub>宣下</sub>天台

座主事無品尊助改元定也為正大納言良教卿

已下泰之

四月十一日甲申日吉社炎上

百練抄卷十七

三十七

十五日戊子月蝕依雨不見

十八日辛卯官吏生一人泰向日吉社實檢卷上

間事

廿日癸巳大納言資季卿拜賀

廿四日丁酉賀茂祭使右少將資朝臣上皇御

見物云々

廿七日庚子依飢饉疫疾等御祈被<sub>祭遣</sub>臨時廿

二社奉幣使去十一日依日大納言資季卿以下

參之

自今日依疫疾御祈於諸社七ヶ日被<sub>修仁王經</sub>

御讀經

卅日癸卯自今日於仙洞被<sub>修仁王經</sub>依疫疾御

祈

五月四日丁未近衛入道東經關白薨

少將源師行朝臣卒去

五日戊申近日十三四許小尼於一条壬生破食

死人云々未曾有事歟

七日庚戌自今日於禁裏被<sub>修如法北斗法</sub>依疾

疫御祈也

九日壬子紫野今宮祭也自院廳被騎獻馬長此

百練抄卷十七

三十八

事中絕年尚今年被<sub>具行依疫疾</sub>御祈也

十日癸丑珍皇寺堂塔炎上

廿二日乙丑子時許閑院皇居炎上主上駕腰輿

行幸三条坊門殿

廿二日丙寅於三條坊門殿被<sub>議定皇居</sub>炎上間

事

廿七日庚午上皇於嵯峨殿被<sub>奉供養宸筆般若</sub>

心經為被<sub>攘疾疫之灾</sub>依弘仁例也

廿八日辛未東宮騎射也

同日主上遷御富小路殿

六月三日乙亥東宮自富小路行啓大炊御門殿  
十四日祇園御靈會馬長於院御覽四條大納言  
以下候御前  
十五日於院御覽十列今出川前右大臣候之御  
隨身久則以下衆之  
廿六日為大納言二品於仙音寺被始行八講有  
御幸  
七月二日除目也資平朝臣任藏人頭去右兵衛  
督仍為教朝臣任之叙後三位被召貫首了  
七日直講清原隆尚卒

百練抄卷十七

三十九

八日二條大納言資李卿參入被立日吉一社奉  
幣使被謝申本社炎上事  
中宮御除服四條大納言妹  
去比逝去云々  
十日壬子祈年穀奉幣使大納言冬忠卿以下參  
之先被行定  
十六日戊午右大臣泰入被定東宮御元服日時  
於本宮被定次第事  
廿日壬戌權中納言為氏卿被定申造東宮御倚  
子日時  
廿四日丙寅正親町院被供養今原新造御堂

八月四日乙亥於仙洞有東宮御元服習礼事右  
大臣以下參之  
十一日壬午上皇御幸五條新造御所御徙移之  
儀大宮院御車也  
十五日丙戌石清水放生會權大納言資李卿已  
下參向之  
十六日丁亥三位中將信嗣卿拜賀也  
十七日戊子上皇自大宮殿御幸冷泉殿御移徙  
之後御幸始之儀也  
廿二日癸巳主上行幸五條大宮新造御所依可

百練抄卷十七

四十

有來廿八日東宮御元服儀也  
廿六日丁酉東宮行啓大宮殿當時  
皇居依可有御元  
服也  
廿七日戊戌於大宮殿有東宮御元服習禮事  
廿八日己亥東宮御元服儀也於皇居大宮  
殿有此儀加冠  
右大  
臣傳  
理髮  
言基具  
卿儀了  
東宮  
行啓上  
皇御所  
炊大  
御門有拜觀之儀  
卅日辛丑主上自五條殿還御富小路殿  
九月十五日丙辰直物右大臣泰入也  
廿四日乙丑李卿讀經始也權大納言資李卿以

下泰之

廿六日丁卯大宮院御參春日社七少日可有御  
泰筭云々

十月一日辛未權大納言資季卿被定申日吉社  
正遷宮日時

二日壬申主上被獻宸筆御書於山陵是為被申  
天愛并御惱事等

三日持明院前中納言基保卿出家法名保空生  
五日乙亥自今日主上御湯治被召有馬溫泉湯  
廿日春宮行啓富小路殿

百練抄卷十七

四十一

廿一日辛卯上皇一品二条亭新造之後移徙之  
儀也上皇一品御同車云々

廿七日丁酉大宮院御着帶宗經朝臣奉行之  
廿八日久我宰相中將慶申也

廿九日己亥頭宮內卿資季卿資平卿泰左大臣  
里第朔旦賀表以式部大輔光兼卿可令草進之  
由仰之

閏十月丁未左中將實康朝臣出家依目所勞

十三日壬子僧正尊惠入滅卅七

廿五日申子權大納言資季卿參入被定申日吉

社正遷宮日時次被定賑給使

廿七日丙寅式部大輔光兼卿獻朔旦賀表草於  
左大臣

廿九日戊辰左大臣召大外記師先被下朔旦賀  
表草右中弁成俊朝臣可令清書之由被仰之

十一月朔日己巳朔旦冬至旬儀也右大臣以下  
參入之

三日辛未日吉社正殿遷宮也

五日癸酉權中納言家經御拜賀也從三位  
八日丙子左大臣道良薨生年廿七今朝上辭狀遂出家

百練抄卷十七

四十二

九日丁丑天名座主尊助法親王拜堂僧經二人  
堂上一人前駟等供奉之

十一日己卯御即位禮服實檢也  
同日天名受戒也

十二日庚辰任大臣召仰也前右大臣頭宮內卿  
資平朝臣向里亭仰之

十四日壬午任大臣左大臣公相公節會也權大納言資  
季卿為內弁

十五日癸未主上自富小路殿行幸万里小路殿  
內侍所同渡御中宮同行啓儀為步公卿土御門新

中納言已下六人供奉之

十七日乙酉東宮行啓冷泉殿來廿六日可有御讓位之故也

廿一日己丑五節舞姫參內公卿經後國卿資平朝臣權中納言定實卿泰議左大弁

朔旦叙位也右大弁為執筆

廿四日壬辰豐明節會右大臣為內弁

廿五日癸巳日吉社小五月會也

廿六日甲午御讓位也右大臣已下參入之

十二月二日庚子踐祚以後政始土御門中納言

百練抄卷十七

四十三

定實卿已下參之大納言良教卿泰陣被定申御即位之由伊勢奉幣并大被日時事次同卿被奏新院尊号詔書新院廳始也

四日壬寅左大臣公相拜賀着陣也扈從上達部

中宮大夫卿公持權中納言為氏冷泉中納言實材

平宰相卿時繼大炊御門三位中將公宗殿上人信

家朝臣已下也次被定申御即位并同行事所始

可被立高御座日時等次被定擬侍從已下事

御即位行事所始也

被渡東宮坊官於外記局

花山院中將家長朝臣拜賀也

五日癸卯新日吉小五月會也

同日開關解陣也土御門大納言通成卿以下參

之

御即位禮服御覽也

左中將實兼朝臣拜賀也

八日丙午是日被發遣御即位由伊勢奉幣仍主

上幸神祇官大納言良教卿以下參之

新院隨身所始也

十日戊申日吉臨時祭也右少將藤基兼為使

百練抄卷十七

四十四

十二日庚戌左大臣直衣始也

德大寺少將公孝朝臣拜賀也

十三日辛亥新院始御幸一院御所關白左大臣

以下供奉之

坊官賞除目也左大臣勤執筆

十七日乙卯賀茂臨時祭也別當隆頭卿勤之

中宮自富小路殿行啓三条坊門殿

十九日丁巳院号定改中宮為左大臣公相右大

臣實雄新大納言定實右宰相中將伊賴中宮大

夫公持權中納言師繼土御門中納言定實左大

弁宰相經俊新宰相高定陣事畢奏本所新院被  
獻尊号御報書

廿日戊午自禁裏壺切御劔被返進一院云々

廿五日癸亥御即位叙位左大臣為執筆  
御即位官廳巡檢也

廿八日丙寅御即位也春秋早且臨幸官廳左大  
臣勲内弁

嘉元二年正月十五日以大理定房本書寫校合  
畢

百練抄卷十七

四十五止

右百練抄十四冊以紅葉山 御文庫并學  
問所古本水戸殿秘本及間宮筑前守信好  
内山七兵衛永恭本校正之畢

享和三年十月 日 檢校保已一





文科大學史誌叢書

愚管記

明治三十九年三月刊行

緒言

一愚管記ハ關白近衛道嗣の日記にして北朝文和二年三月  
より起り永徳三年正月より訖る即南北分立時代の事實を係  
り其間九三十一年より及ぶ但記載完からず月日も斷續多  
く其首尾を詳する能はず世に傳ふる所の抄本少から  
ずと雖亦頗異同あり今公卿近衛氏の秘藏本を據り參互  
校訂して刻す付に

一道嗣ハ後深心院と號し故に後深心院記まゝハ關白道嗣  
公記といひへり原本ハ二十六卷を分ち修史局本ハ合せ  
て十六冊と云ふ今改めて二十六卷十二冊とに其便に従

愚管記 諸家傳

ふかり

一本書校訂の際文義の通し難く若くハ缺損ありて更ニ考  
索すへうらさるの類ハ敢て臆断せし姑く疑を闕く其或  
ハ誤書脱字の如き確然紕繆と信するものハ間之を改る  
りあり其他缺字空白ありて填補し難き者ハ仍□を以て  
之を標識す

諸家傳

近衛道嗣後深心院關白基嗣公男母參議嗣實女正慶元年壬申誕

生建武四年八月廿五日元服六歲同日正五位下聽禁色昇殿同

年十月八日右權少將同年十二月廿四日從四位下同五年正

月五日正四位下七歲同月十日右權少將如故同年十月十九

日從三位同日轉右權中將曆應二年正月十三日播磨權守八歲

同四年十二月廿二日權中納言十歲同康永二年正月五日正

三位十二歲同三年七月廿一日權大納言十三歲貞和二年十月十

六日兼右近衛大將十五歲同年十二月五日從二位同三年九月

十六日內大臣十六歲同月十九日右大將如元同四年四月十二

愚管記 諸家傳

日正二位十七歲同月廿八日轉左近衛大將同年八月十二日辭

大將同年十月三日聽帶劔同月廿七日皇太子傳同五年九月

十三日右大臣十八歲傳如舊觀應三年閏二月廿日止傳廿一歲東宮

也文和三年四月八日服解父同年六月廿日復任同四年八月

十三日從一位廿四歲延文四年三月十三日爲一上同五年九月

卅日左大臣廿九歲康安元年十一月九日關白氏長者卅歲同日隨

身兵仗牛車等宣下同二年九月廿三日與奪一上於右大臣貞

治元年十月四日上表辭左大臣卅一歲同二年六月十六日辭關

白卅二歲同六年十月五日服解母應安四年閏三月廿九日內覽

如舊四十歲至德四年三月十七日薨五十六歲葬送

愚管記第一

文學博士坪井九馬三 校訂

日下 寬

文和二年

三月

三日 是日詩會也入夜冬内子時人未參集數刻後基盤  
所整而出門相待閑白奈中由有伴入所之後返徘徊議定  
所方此間閑白奈之先有門對面其後出門議定所余并閑白  
東帶以下諸所者座中名與座閑白在端座文人公卿日野大  
納言別當式部大輔兵部卿治部卿土御門三位新宰相隆廣

愚管記第一

朝臣等也殿上人而藏人預以下十餘輩也又基園座以下次  
第於系如例次諸卿進置懷餘了次讀師日野大納言予伺所  
相進進若因座誨師藏人左少弁後任讀師品秀長朝臣今重  
懷舉講項人式部大輔兵部卿治部卿土御門三位等也殿上  
人懷舉五六人披講之官予早出依上氣不扶也後聞所裝讀  
師日野大納言等並誨師兵部卿等直衣誨師頌聲之退以  
後事相尋日野大納言所記也  
准后被獻懷舉之准之官良基ト書之  
此書板本審り勘  
若只今要此

余詩如此

三月三日賦桃花貢所

園一首 以春為韻

從一位道嗣

桃紅占得貴園春元已  
芳辰風景新陪宴英  
雄皆吐玉蘭亭莫辨

賈魚真

父和二年八月十五日 晴所會

今夜和歌所會也 子刻許余冬内閑白係被儀臺所中於  
此所湯湯陸其後又於黑戶湯准后侍從中納言二條三位等  
在此座人談和歌事整而事始出門議定所每事如例先有

愚管記第一

當座讀歌年有人分取短冊中四首詠之聊換事之官披  
講以早出  
今夜參仕歌仙

公卿

准后 予 博陸 卿子左中納言 侍從中納言  
兵部卿 左大弁宰相 二條三位

殿上人

資康朝臣 親雅朝臣 基明朝臣

父和二年九月十三日

雨降入夜月明今夜和歌所會也亥刻冬内係臺所所有整出

所、言談被所覽余懷寧頻頻感入所、及徘徊所、方見  
明月侍從中納之來、此不難談、久之出所、黑戸人、次乃名座  
今夜程代歌仙、公卿余所、子左中納、之侍從中納、兵部卿二  
條三位殿上人資康朝臣親雅朝臣基明朝臣實信朝臣資教  
等也、准后獻懷寧、奉、今夜先有續歌、二十所、子左中納、  
書題其儀、如例、短冊、至殿上人、分取、余、首、詠、人、之、詠、  
為遠卿、重短冊、此、同、文、墨、圓、座、殿上人六位、持、之、至、  
讀所、所、子左中納、余、何、所、多、色、示、為遠卿、名、因、座、取、懷寧  
次、乃、立、置、座、傍、不、右、下、讀所、定、存、先、親、雅、海師、資、教、海、頌、侍、從  
中納、之、二、條、三、位、二、人、也、讀所、之、重、海、頌、之、中、余、又、何、所、氣、色

愚管記 第一

三

不、之、披、海、如、例、事、了、人、退、出、于、時、天、明、也

文和三年三月四日

雨降、和歌所、會、始、也、題、云、松、千、春、友、之、  
入、夜、來、肉、依、在、冬、基、盤、不、元、來、有、出、所、九、條、大、岡、被、程、代、直、本、  
兵、仗、已、後、不、及、程、代、遠、久、不、來、會、之、中、被、會、釋、入、所、之、後、准、后、又  
賀、令、程、始、出、現、此、遠、久、不、來、會、之、中、被、會、釋、入、所、之、後、准、后、又  
持、奉、之、乃、資、教、持、奉、殿、上人、懷、寧、至、公、卿、自、下、龍、卷、進、至  
之、如、例、准、后、一、人、不、置、懷、寧、下、座、之、後、侍、讀、所、之、中、於、事、被  
表、宣、化、之、程、代、於、先、親、者、頗、不、審、也、今、夜、讀、所、按、察、下、讀、所、為、敦  
朝、臣、海、師、資、教、海、頌、氏、部、卿、所、子、左、中、納、之、左、大、弁、掌、二、條  
三、位、等、也、披、海、來、終、之、乃、余、子、出、不、見、後、事

愚管記 第一

四

今夜冬仕公卿

准后 大岡 余 博陸 按察今夜初 民部卿  
所子左中納言 兵部卿 左大弁 二條三位

殿上人

資康朝臣 仲光朝臣 為敦朝臣

資教 雅氏 雅家朝臣子今夜初事也

愚詠如此

こふとこふとやうとこふとへてふとこふと  
もふとこふとやうとこふとへてふとこふと

瑞作以下等、お同仍ふ記、

五日 癸未 晴 齋食受戒如例

頭右大弁資康朝臣奉有 勅問事大嘗會大奉幣米事也

入夜御子左中納言奉手相達

裏 作詞如此

大嘗會大奉幣米事於宮中洛中諸神者為公方被付別料  
是者主沙汰玉諸國大少社者近代被成官符於神祇官  
許於隨石去年終不及發者儀卦經又推遷其官以諸國  
正統之交易之趣被載友符之趣今為大嘗會米一國平  
均充催之案所不審之官被尋官并伯二位業定主資方相  
臣清文等如此之上事之御松之有沙汰乎

愚管記第一

五

六日 甲申 晴夕陰

昨日勅問事忘之戶所存之官以弁奉之官今日付戶詞於以  
弁了作詞并了句  
注表

申詞如此

大嘗會大奉幣米事之用諸國正統之中被裁官符之上業  
定之資方朝臣等清文之官業議就之被諸國平均之沙汰  
者乎於發者有奉者被尋官之被經御沙汰乎

七日 乙酉 小雨

八日 丙戌 小雨 齋食受戒如例

除日記

右大臣正二位藤原朝臣 年次三

愚管記第一

六

文和三年三月廿六日 天晴

是日縣召除目始也予初奉仕執筆

申刻許大外記師茂奉文書見了返給此次持來關官帳留

文返給官如例以前右衛門佐行知給硯墨筆不硯紫石搦以

高檀紙二枚裏之入鹿首也筆二管墨一延筆ハ白管毛本ニ

ハ以檀紙裏下以紙搦以同檀紙二枚裏之給之給ニ裏ヲ不置物

給之入夜奉束帶給細地平結各文帶冬内先奉市所方藝

而余奉陣給細地平結各文帶上建部等同奉者頭右大辨俊孝初奉余座下

方云自今日之被行除目召作詔司其詞如此余小辨次移為外座令

呈執即召大外記師茂奉束帶裁余作召作事職事次召辨右



中并任方朔長來職在作同外記次更召外記問文書具否其  
文書申供中退去移書藏人來召下官小揖召外記作云官文  
供外記稱唯退去六位外記四人持書文列立小座余起座  
諸卿同列立弓場代余主事名門代東掖西面南相立一大  
官文列立了余揖諸卿離別入自各名門代各殿上閣自自  
本立此座則閣自起座參所前座余同冬上次納言以下至官  
父了各座不取言文公卿亦悉退去次博陸依在奉為內座  
依天氣閣自召余小揖微音稱唯不開後退是揖下長押子贊  
子東行昇當同長押先左跪才二國座後先實膝行之度許  
着國座深揖引字依重召着執筆座遷座之時不揖膝行  
七

愚管記第一

更深揖次余奏罪官帳

其儀之上令引所差給小揖並易於左膝下以左手取在弟一  
書七奏文書并四所勞帳文章生歷名肉令人勞帳以上有諸道  
年舉各籤付等移入第二書有籤之文ハ見於閣官帳二卷者  
不移入之則取閣官帳一卷端為三枚披見之如奉卷之返入  
官令一卷又如此正左權右次以左手取上閣官書以右手押  
視官於閣友官話置我友書於前閣友帳二卷又披見之  
少見返入次揖易視官以下遠押下以左右手取閣官書同閣  
白氣色陳行先左就簾下取迴書左并以左手露所簾以右  
手指入書進行先右因座而拔易磐折供閣官帳所覽了返給

燈臺閣白  
男丁之也

以書令押忌指易膝約如初就簾下以左手露所簾以右手引  
出書取直進約後座置書於前按易直是並易直是並易引書  
視以九手五上形更書以右手引書視書於中所置閣官書於  
本所他書亦以九次才引書書蓋ハ以易次取四所勞帳返  
入閣友言用九此次四所次第並置內校大他父不返入之正易  
供

次緣大問

其儀引所簾之後小揖並易五上在視書之大問用九置視  
官右以右手引按表是紙細是入視書下方板下次飛持大問逃  
是居尚良緣置大問二尺五寸許先引帳與三四枚許緣  
上下端良角方向書以

愚管記第一

八

而持上與緣取之披見如奉卷之大問下中考軸代緣  
大問了直是向所方正易供

次摺墨深筆

其儀令引所簾之後小揖並易水懸入水於視水水仍石  
以九手五上形更書以右手引書視書於中所置閣官書於  
見摺口又百及許次取筆深筆二管深今夜用ハ八筆  
摺見摺口墨墨下方不為筆蓋置之  
次任四所先任內堅頭伊勢撮

其儀深筆了不同所氣以九手五上形更書以右手引書視書於  
持向座下披押合持迴前方更披讀中文其詞內堅以其姓  
押合同了之後作披並視東主在視書之閣官書物卷書法

圖攝目見宅開官卷合呈前披大間漆筆以九手取上大間書

付之呈筆主上書付所讀申不讀引掩大間次取芳帳并筆

任人懸句不注任國芳帳一枚折返之由任之駝押是置硯右

取寄物任國所、打點置前

次任内堅散位其儀同外但讀申付内堅所不讀只散位芳

位姓尸名、讀申也

次任内堅天曆籍其儀同散位芳

次任院官所申文

其儀取易奏曰院官所申文勅許主上令引所了後召參議其

詞奏議藤原朝臣先問在座之參議於傍人可召之而長頭所

愚管記 第一

九

參余座後余作云院官所申文願座下長頭卿退去

次任内堅所成殘其儀如初奏時喚内堅等也

次任授書殿其儀同任内堅所頭執事等也

此間長頭卿持參院官所申文

其儀進余座後余持易以九手取所申文長頭卿申云自余

從是余取授書殿芳帳入一書之後同閑白氣色許返之後押

旁硯書以下於座下取所申文於易院官所申文之通也仍

易據仍就座下呈易於九手塞所座以右手指入所申文

以文下方取易運行敬折儀所覽了封紙紙通於一通中被返

下令押張參進賜之如先持之進行復座呈所申文於座前呈

易硯以下喜次第引寄本所

次任授書殿殘其儀如前

次大舍人三人任之番長散位

次進物所二人任之膳部執事右任了返入二書

次院官所申文引裏紙呈硯右

其儀取所申文一通披以右手奏取裏紙所申文呈前卷裏紙

入牙二書次呈所申文置硯右次才如此呈置之延明門院系

官未結申文相交此内仍取之入第一書令取依ふり任也

此間閑白被撰授申文諸當年結公所二合更任申文等也

其儀呈易取之於當年結老撰出呈硯右二合并更任申文

愚管記 第一

十

加袖書所申實後卿ハ二合次取易召參議長頭卿參進如

院官申文之時余取下勅文授之作云四通アルナリ明夜の勅

上右參議退

代始所前初處除目名國替おし申文或被停止之或被任

之今處之為何極哉之中有中沙治任仁治例之被任之也

治之了然之依申文不任之

次任諸當年結

其儀先呈内結所申文任之如四所

讀申云内結位姓名望法圖攝一通、五人載之每任一人取

上申文點勾名字傍注任國國并正權寄物、打點每友如此志

任筆卷中入開官書五人内二分代申内舍人仍中  
上打墨亮躬任仍付臨也  
次任院官公卿等當年結

讀中書付大開儀同前隨任筆要勾注任國入開官書成文成  
之通之時院官中書裏紙向座下破四角二切置紙殘  
卷之返入次取上破紙檢子レテ懷中九自右神取紙檢二筋  
自中用一筋入成文書今一筋成文下指入結次身指加也  
也也

次任上召使

其儀如例取立硯書中入任筆要勾注任所加成柄

今夜之任之者任筆卷大開奏年起居

愚管記第一

十一

其儀云易同天氣引直大間取出軸代堅卷呈前様出立硯  
表紙卷加大間上取紙檢結其中央結以真小刀切端之次漆  
結同引墨入成文書

先之取開官寄物卷之返納硯書

次取成文置前片結次才按取細筆指加以本結諸國

結以真小刀切端之引墨入加大間大間取立件大間官帳

二卷入才二宮次硯書大間大間書大間如奏開官之時指易取大

間書味仍就座下奏之書為所余按易後座直文書揖起

座出殿上自小板處退出

火横 衝重 勸五 其期忘却

今夜奏仕上連部

洞院大納言實夏所

二條中納言實夏所

四條中納言隆持所

樂室宰相長顯所  
已上取書文

廿七日 晴 除月中夜也入夜奏内先奏所方諸卿參集

後余奏陣直今置軾如例石外記問文書具在小時藏人

末召即石外記作書文事六位外記亦持書文列立小庭次中

以下起居列立弓場至書文列立之後余奏殿上每事如去

夜仍不要記問白奏若所前座余同之書文至之奏問白若因

座余依召奏若因座同今夜直  
若執事座

次下賜大間書

愚管記第一

十二

其儀以書令押張所卷結余益易押硯以下於座下取易錄仍

先就座下揖易以左手案所卷以右手賜書取迴以書下向我

迴之送仍右邊座置書於座前按易直置之右手取上大間

見結同見了次成束同見結同其儀如次以左手持大間書

以右手引上硯於其後以大間書夾置硯之一書之間引書次之書

正易儀

次依作漆大間如去作法今夜折目二尺三寸許也

次摩墨漆筆依作其儀又如去此後不同所書色次才任之也

次任内舍人外國三人

其儀先取立二書之内舍人勞帳并文章生歷名帳移置第一

其取出肉令人勞帳而座下披推合讀申但同任四所籍

三人任事勞帳懸勾不任運入二書更披大間取三人開

次任文章外國三人任儀同內舍人

此間奉儀長顯卿持券下勘文外記奏重申之洞院大納言更

任申文名字差四條中納言二合申文有落字仍為通折為

之中中手立之並視右之書物見其罪任之置視右取書物

見其罪任之讀中大間勾申文應書物中入成文書如例

成文及三通之時取第四書申文破紙與如去夜為紙檢如例

中取出之自懷不歸去夜束結加今夜成文之通於其上之儀

如去夜

愚管記第一

十三

次顯官舉

其儀同白撰出顯官申文亦付短冊被授余之五年前後

兄年同洞院大納言之起座余金座後賜之復座次才見下

之令急儀書之在列撰定申文返上之互相取之進束收余之

不披見奉國白之取之各所

次召於任顯官宿官勘文

其儀余取易奏事中以男廿名藏人頭後才相長奏進余作之

顯國轉任宿官勘文頭返

勘文持券之間任諸道年舉申文立男一

其儀取出一結解短冊並並視右任之申文懸勾注任所拍成

束如例

此間後才相居持券勘文為顯勘文有札舉

余取之不披見奉國白之見了返結札舉被余之轉任宿官

勘文入成文書取顯國勘文讀申並視傷次見書物被大間任

之付書字但諸道得業生如此皆任事是勘文奉國白次任

宿官其儀立宿官勘文讀申設置視右取書物見開任之勾

勘文括加束

開白公卿二合進進申文一通被授余加袖書次延明門院

末官未給所申文同加袖書二通下勘之奏議為使如例今夜

可勘上之中作之雙不勘上之奏議持券余取之二合申文任

愚管記第一

十四

之儀如例內官未結所申文取之入成文書明夜之任之也

次任內儀以下之卿等臨時外任

其儀同白撰賜申文余取之撤短冊任之儀同南在儀皆悉任了

次卷大間加表紙以去夜端考與取紙檢結之併如去夜入成

文書先是顯官書物返納視書次取束束結之去夜成束此內

相加之結之也以小刀切端之引墨入加大間視之一書取皆

之又如去夜拍易推視以下於座下取大同書錄行就座下奏

之書書為所余按易復座引直視以下直文書拊起座直出

殿上自小板處退出

火橫 衝重 勸盛亦如例其期忘却

今夜泰仕上達部

洞院大納言實夏卿

松殿中納言忠嗣卿

二條中納言資惠卿

右衛門督忠孝卿

兼室宰相長顯卿

廿八日 雨降及晚雨脚止

除目入眼也

入夜參内諸卿未集仍先集所方良久余差陣

直令並載

諸卿同集余召外記問文書具否昭藏人未召即召外記

作書文々列立小座次余以下參多場代余看殿上関白起

愚管記第一

十五

大問如去次條大問唐墨澤等此官官白賜外關申文云云

並分次任内舍人主儀按取立成束内信任々如例二分代内

任々

成文成之通々時結々如去夜

次任諸道内官舉

其儀取立身二覽書申文解經冊入小板下申文三通

明經明法

并次第並立視右先取明經申文讀中並視右立字物見合關

任々讀中任人無勾於申文加成束自余同々

此同関白被撰投諸束官申文并抄舉々後関白被退出余取

不披見々經冊許次方分並折紙懷中々内信以下時結

并諸司所々奏等並座前次方任々府奏替清々並視々一書

々同武官終頭々々任々加也

次召瀧口所衆勞帳

其儀余取勞奏之次召男官召藏人頭後々相臣參進余作云

瀧口所衆勞帳後々朝臣退

次任轉任者

其儀去夜所召勘文自大問官撰出並視右任々如例無勾加

成束

後々相臣持參瀧口勞帳 所衆近年々其仁云々

愚管記第一

十六

余取々卷々題串入三官任々勾勞帳拍成束

此次大問入日

次難々束官等任折紙次方任

次受領舉

余取勞儀氣色々後願座下作洞院大納言云云更仍舉上達部

右記座中出抄參見定々後取立小板下大

間表卷紙更卷返々書案々被任國一巡書々次分所任人

名不書書彼國下書也 次被並視傍次被大問任々安然

於案案加成文

此同洞院大納言右出々諸束束宰相左大弁等就余座後進

舉了後座余正持易於右手自座下取之為取摺了推硯以下

於座下謂自座下之時取到舉於易就座下奏如說言所申文

後座舉也

次奏大問

取易候天氣大問東西要引直之奏之入一管不加在彼管成

束取出整管外下方先是空拍拍加成束

次奏大問

如去夜立替管拍易取管律行進屬下奏之按易送行候因

座方 天曉了返結忌拍易奏賜之後座引直管等

次封成束

愚管記第一

十七

初夜中夜束今成束不立紙檢上固結之片鑑有申文亦少

按五之細奏拍之次結固其取刀為夜之結緒一之切之引板

入硯小板下結目之引易取成束入加大問大同左右成束立九

次余取大問管起座

大問成束并次之管納物亦為調之了揮易大問管揖送行

九廻經貴子玉殿上御侍子前跪授清書上所洞院大納言板

易自小板處返下

火積 衝重 勸益等其期忘却

今夜奉仕上達部

洞院大納言實夏卿 松殿中納言志嗣卿

右衛門督志季卿

兼家宰相長顯卿以上取

左大弁仲房卿

廿九日 晴 未刺許外記師與大問成文硯要等持來之

入管以前右出門佐行知之伊美之返結管如例

愚管記第一

十八

愚管記第一



愚管記第二

文學博士坪井九馬三校訂

日下 寛

延文元年

文和五年春

歲次丙申

三月廿八日改文和五年

為延文元年

三節會内弁右大將源通相

從一位行右大臣藤原朝臣源通相

愚管記第二

文和五年 丙申

正月大

一日壬午 晴申刻以後雨降

寅刻拜天地四方箇圓如例節會内弁右大將源通相卿

出御帳中被垂御簾御膳自振供之、小朝拜停止、依神

木遷座也

二日癸未 晴陰不定

見鏡服藥

三日甲申 晴

鏡藥如例 藏人右少辨信兼覽政所吉書

四日乙酉 自早旦天陰申時以後雨雪降

年宵初有沐浴事

五日丙戌 晴陰不定

六日丁亥 晴 今日被行叙位執掌權大納言實夏卿

晚榮感凌犯大江才三才四星

七日戊子 陰晴不定

節會内弁右大將出所儀如去一日

有勅問事 所蒙令延事

八日己丑 晴

九日庚寅 晴今晚暴風雷雨

愚管記第二

有祈婚事

十日辛卯 晴 月犯五車星

十一日壬辰 晴

十二日癸巳 晴

十三日甲午 及晚雨下

今日審、始出行向新殿姫君許奈御影迄前

今晚神木御功座

十四日乙未 雨降

十五日丙申 晴

十六日丁酉 晴 月蝕皆既寅五刻 後未辰七刻

三日月不立  
早秋前水  
寄信也

節會始出所 内升右大將外升六七許輩

十七日戊戌 晴

十八日己亥 晴入夜雨午冬小野社

十九日庚子 晴

廿日辛丑 雨下及晚屬晴

廿一日壬寅 晴

廿二日癸卯 晴

自禁裏被下御書東州日女叙位吉書奏陣定おの系仕に中  
被作下ふ名知ふ中ふ了前奉行職事おね解了

廿三日甲辰 天陰雨降雪霰相交

愚管記 第二

三

廿四日乙巳 朝同雨降

同今日三ヶ日合誦 毎月奉也

廿五日丙午 晴

詩歌如例 奉樂聖廟也 及晚奉小野社

廿六日丁未 晴

自今日縣呂除目執茅洞院大納言實夏卿

申年結申文付以兵部督殿光朝臣 召外記結公卿結

申文此以  
從七位上橘朝臣安國

望諸國據

右當年結二合所請如件

文和五年正月廿六日從一位行右大臣藤原朝臣道嗣

年結申文獻之了後 奏聞了狀如件

三月廿六日

右大臣判

以左兵部督殿

廿七日戊申 陰入夜雨下

廿八日己酉 陰

除目入眼に 教光經方お朝臣任參議元藏人以

左中將陸家左中升時光等朝臣補藏人以

廿九日庚戌 雨下

明日伏儀延引に

愚管記 第二

四

廿日辛亥

天陰是日女叙位也入能若朝臣 詩給細細地平結 泰内先奉

御所方事未具に此間及教訓依召奉御前及晚降被始行

余美殿上藏人右少升位兼末召余經殿上に戸急進若御前

園座 養ふ也里内狹 關白極極依余伺天氣召男共 二者 位並

集を伴ふ現後御即持事に余取に置前伺天氣取後第一に

又し播磨に取ら頗向座下膝置に是進進に依伴播磨深掌

同加階人教於圓白書從五位下圓白取法申文 先藏人中女

れ并空勸文被授ふに取藏人中女叙之 押合被讀申任に儀次

余取為奏院宮中女に召に中次召男共召近衛司左中將公

村相在來進作云院宮御申文云村相在還歸此間掌付命婦

等敘云村相在持老院宮御申文云云押硯以下於座下

來進御前奏御覽了返結後座叙儀如例內教坊采女所

女官等次方敘云叙後五位下軍階叙了傳奏賜膳入

內一加階勘文云云中以男共后升位進余作云輪轉入

內一加階勘文云云即持來入內一加階云云輪轉

勘文許也云云就開白云見了結返與物將當東墜子

也云云仲申文叙成殘申文等并宣勘文輪轉勘文等返云

開白皆悉云云後書年号月日放串與加成文是叙位云云

勘至撤在御膳物云云以下西有威敘位於柳蓆云云

愚管記第二

五

奏云返結後座硯以下云直云今夜入眼上柳蓆云云仍請中延

引云云仍以放殘串一枚為札帝切同紙端封引墨取副敘

位於旁出殿上端座以藏人云外記六位外記云云仍云叙位

結云起座退出云云儀如見次方成文等仍不具記

二月六

一日壬子 雨降

二日癸丑 陰晴不定

午刻許女房平座 女子

三日甲寅 晴

四日乙卯 雨降

五日丙辰 雨降

今日壬辰也云云相召念誦

六日丁巳 晴

七日戊午 陰

慎日也相問念誦

八日己未 雨降

先云御忘日也作善云云例

九日庚申 雨降

春日祭延引次云云云

十日辛酉 晴

愚管記第二

六

十一日壬戌 晴

小兒有沐浴事 自今日之十日也

十二日癸亥 晴

沐浴如昨日

十三日甲子 陰 沐浴如一日昨日

藏人左少辨志光相催云付收於神宮仗儀并改元定云云

十九日者依是所勞申降

十四日乙丑 雨降風吹

十五日丙寅 雨降

十六日丁卯 陰終日小雨下

今日大原野祭也余奉幣中後也 今親女教位入眼上卿四  
案中納言隆持卿云

十七日戊辰 法自英帝向降雷雨時七八度都云降

自今日念誦云云也

十八日己巳 晴入相而降

申刻春日神主經負申云今晚宮刺無福寺自出烟火事出某  
同東金寺并子水屋念金燒失云凡恐欲いふ事他處有尋  
使者云雷火先落元無寺東大寺即打消云於此無福寺云  
人不知云自出烟火出東金寺并子水屋社一字燒失云於  
南園寺若神人奉集打消云

愚管記第二

七

入夜四條中納言隆持卿奉教刻面湯

十九日庚午 小雨下時云日景

使議延引云

廿日辛未 晴

明日春日祭也仍今日奉幣中後也

廿一日壬申 晴

春日祭也 上卿不奉并急向云使云并記

廿二日癸酉 天顏快晴

廿三日甲戌 晴

廿四日乙亥 晴

向新殿奉御影御前每月事也御奉云次孫尼同奉侍奉之  
廿五日丙子 晴

侍秋例

自禁裏被下御書仗議云延引ふ云然云為某廿八日相  
令奉仕者是所勞難快得殊恐存云云云云

廿六日丁丑 晴

某廿日有御氣云奉仕云中藏人辨忠先為奉行被お催  
稱所勞申降云

題云宸遊契万春 便字 松有佳色

廿七日戊寅 霽

愚管記第二

八

廿八日己卯 陰時見日景新殿浮屋被降

春日神主就他事云是使老事云次お語云今云炎上有  
事有云事お云云云云注云云云作經負云

表云秋夢感累星二星合云中奉尚相長云云

廿九日庚辰 雨降及晚見日景

明日禁裏侍秋例今不奉云條云念云被思念於懷中者  
進云中以忠先侍御云云詠出者云進云云云云率不願作

天也

卅日辛巳 晴 侍秋懷紙付忠先云云 書換注表

春日同賦宸遊軒萬壽

一首 使用春  
字

右大臣藤原通嗣

草木文章付玉宸太平

天子萬年春花迎鉅珮

禁門靜靜德千官

興又新

春日因詠松有佳色

和詩

右大臣藤原通嗣

君示多免以月出と

愚管記第二

あふの色はくぬすけ

くふと海のこゝろち

文とて

三月小

一日壬午 白日高晴春風緩扇

二日癸未 陰小雨

講詩題云桃花唯勸醉以春為治部卿行先相后所出也文士

八九人先有連句興此會明日可令張弓中存禁裏所

會云仍今日也

三日甲申 陰晴不定

詩歌短冊二十首付与一為筆詠

禁裏詩卿會并中連句有之

四日乙酉 或晴或陰

五日丙戌 晴風頗吹今春大略連日如此

六日丁亥 霽 今晚星星英惑二星合

七日戊子 霽

八日己丑 雨降 先王御忌日念誦寫經如例

九日庚寅 雨降

先日禁裏侍舍一座申出

来十六日射礼次将云村朝后の来に申列を作試に申

愚管記第二

十

禁裏被仰り台作試に散状に申

十日辛卯 晴風吹

十一日壬辰 陰入夜雨下御舍一座退進

十二日癸巳 或晴或陰風吹

十三日甲午 雷鳴雨降時屬晴

射礼次将事云村朝后の申出に細く台此中付事に入

十四日乙未 晴 自今日之夕日念誦今月也

十五日丙申 晴

十六日丁酉 霽

十七日戊戌 晴

自大乘院傷心許以使者有法不令之有所存之極之返矣  
十八日己亥 陰入夜雨

前相國相傳大納言波束女房先被對面次余湯之動小儀之  
孟酌事不及曉更被傳

束井五日石清水臨時祭庭產事之中以中侍稱所勞父  
大納言以之狀相福中傳

十九日庚子 雨降

廿日辛丑 晴

以中侍降家為勅使束云石清水臨時祭當即代為初夜如五  
獻轉盃之儀不出仕者難行必之仕者余云尤之令

愚管記 第二

十一

出仕之令所勞中以廿五日以前難扶得之中申之

廿一日壬寅 未刻許書信雨降即屬晴

泰新殿御影

廿二日癸卯 晴 風吹 今晚月陵犯葵感云

廿三日甲辰 霧

廿四日乙巳 晴入夜雨降

廿五日丙午 雨降 詩歌如例

廿六日丁未 晴

泰和野社依時之基雨今日系訪也

廿七日戊申 晴

廿八日己酉 朝召時自申科涉自

陣定也 林官事 余為上卿委細在別記

今日射礼也次將上村相王云也

今日伊勢幣使新道用吾事并改元定事也入夜着束帶

將伶叔細地平依 冬内儀基盤所有出所良之決卿冬集余

着陣與右大將 通相卿 西園寺大納言實俊卿三條中納言

卿左大辨宰相 通卿 等束着座余亦與座召官人云數載

次以官人召外記大外記師茂相長冬着就余問云被冬人云

只且就外記中暗奏之由余目之外記稱准退次藏人左少弁志

光束余座後下文書 社解一通官外記例各一通 余取一通結申忠光

愚管記 第二

十二

作之宅申之由退余一見了如幸甚 不下 授文書於右大將

諸卿次第見下至大弁前次予亦讀中云大弁讀了 先

解次准授例也友例繁多時刻之 讀了可也 中作之諸卿自下

福次第定申左大弁三條中納言逃是定申於納言者不逃是

常儀也 西園寺亞相右大將亦不取條 宅申中由余云條

詞如此伊勢幣使之用新道 次作大弁令置硯大弁召官硯 云

官硯紛失之仍召外記硯之此召官外記聊有相諭事也

外記大外記師茂相臣 師茂中云神官使儀被用官硯 余為流

史在大史量實亦程儀 例但被用外記硯一條又有主例於今儀者就官硯紛失被召

外將又就為端之例被召而局硯此為之問承存之進中



官外記勅中伊勢太神宮幣使發遣本路依不通可被  
用新道否事

愚管記 第二

十三

右近衛大將源賴定申云 宗廟之祭祀者 皇家之所至

也近年位敵徒行路之墮塞各帑使奉宮之帑而得起自  
獻心專再興神祀爰見兩局勘錄之趣多神宮准的之例且寬  
平治曆之般離職出未之時祭使以下非奉路徑他道之中見神  
宮難記然者云宮庭之儀式云奉宮之祭奠其儀然多抵牾者  
帑使惟用新踏豈有協議乎准據例惟勿論猶任先紀被使  
兆占款

權大納言藤原朝臣定中云就官外記勘奏之趣訪伊勢帝

權中納言藤原朝臣定中云官外記勘文已改准按例凡祭  
 也皆于誠信與其忠敬奉古典之所載也明神享信与德  
 不辭薄物而况依本銘不通被開幣使費造一條神慮難測  
 殊專 獻信用新道被舊造何事有以此上宜在時宜矣  
 左大辨藤原朝臣定中云宗廟祭祀者奕世不易恒紀每  
 年有限之礼奠也而頃年之間注古驛家徒依凶賊觀觀被

愚管記 第二

十四

閱有日之費造之條冥鑒之不而恐倩披為局之勸錄其  
替教箇之舊貫造宮之料材改神道山採用他山例起自嘉  
元之盤觚已資後昆之准的移彼所山於他山與改此帶  
使道於新道以擬之乎而不承其就中為所吏局勸載之  
曆應造宮使就忠仰解狀其江山為凶徒羣集之幽谷  
被移所山於料木合期之圖之就之或決羣議或任官占  
遂被移他山乎今又祭之忠直相合奏狀之趣山與驛家  
雖似渾異軍卒應塞彼是相同其為可為於之為時則從  
是古典之所載也就之思之縱為新儀新道猶以式月式日必  
被奉就之條之協物宜其但神慮猶區測獻心若有疑者

被決占ト一有左右凡克賜爾教信被儀如左之礼者逆徒之野情怒傳相憲幣使新道孟復應蹤跡清靡神不崇之故也此上宜在

聖裁乎

文和五年三月廿八日

次藏人弁忠先來余座下勸文四通卷第一余取一通結中作詞如先次一披見又如先次見下云大弁前余又作大弁と讀之任位次之讀之れ之由問之余作云自博士可讀中也者讀了之後作之定申之由左大弁延文三條中納言延文西園寺大納言正長右大將延文下官嘉慶次招職事奏此趣忠先

愚管記第二

十五

物出作云一同之云者諸卿議定之職事間之也而右大弁加于難之一味之間文安延文而舉申上者以爲号先之奏れ之由余亦人若之然之由仍文安延文之由之故用之且人難之由具奏之得云猶一味之由之後又評之更不一決群像未了之由西園寺大納言更漏將曙仍多之間於不一決人難申之由此宜在勸定之由重奏之望而忠先出作云政文和五年爲延文元年依永久之例詔書之由余極端座右大將三條中納言大内記詔書之趣次内記持素草依原紙起座退出爲内記詔書之趣次内記持素草依原紙披見之由内記讀之次以職事奏聞今觀内記不盡不内記之趣賜之清書之由入書了内記持素之進之揚奏之依原紙陽殿

第一件大返賜見所盡有各次延着陣内記並書於余座前退次余召外記問之中務補儀外記申云補不奉丞侍余作之召之中丞參進余賜詔書入書次以弁侍作叙事依原紙此今夜忠先之次官方吉書左少弁忠先覽之見了奏聞返結申下同弁次内藏寮請奏以中將隆家朝臣下之余結申下左少弁忠先次余起座退出之時辰半刻也

正長

文和政元之時有正長沙汰劉正長遣天下大荒云

文安

余難云誅后尊文安漢社稷之權不載勸文連文不快呂氏之乱者漢書之安先立此時之有正長云

愚管記第二

十六

建安

後漢獻帝年号深魏之時号也人之難之

元寶

元ハ始也寶ハ位也即位之案有之悖之由左大弁難之由難不覺悟但先之事務云

嘉慶

延文

右大將難云延字近延元不快文字於下用之澤家本朝各字例人々陳云延字延曆延本聖代之表據於下之延用之字者吉山不可有不交文字於下之用之字減難各字例於下不可用之字又不可有之且新字有被用之時況字上下少事之有

諸卿疑難陳着端性不覺悟遠漏甚多大概注之

詔書如此 作者大内記菅原秀長

詔詔革隨時裁木垂八卦之象建元扇風卯金遠六代之初前備斯然遵來尚矣朕謬以疎薄紹茲寶運遙隔德馨於數華

之跡難於雍熙桑葉之塵日慎一日勉已之畏惟深年及五年  
御俗之化未施玄象之誠示愛丹情之襟名聊何況兵革存動  
人庶不靜德之惟薄未知所裁須改聖曆以易民聽其改文  
和五年為延文元年大赦天下今日味爽以前大辟以下罪名  
輕重已發覺未發覺已結正未結正咸皆赦除但犯八虐故  
致謀殺松鑄錢偽竊二盜常赦所不免者不在赦限又後天下  
今年半強老人及僧尼年百歲以上賜穀四斛九十以上三斛  
八十已上二斛七十已上一斛庶懷餘殃於一天之下將期太平於  
四海之中普告遐邇俾知朕意之者施行

延文元年三月廿八日 三字御書也

愚管記第二

十七

勅申年弔事

貞德

周易注疏曰亨之典貞其德持行若元之利

文安

晉書曰尊文安漢社稷

右依 宣旨勅申如件

造東大寺長官奉議大藏卿兼左大辨阿波權守藤原朝兼綱

勅申年弔事

長萬

周易正義曰行善道以長萬物

嘉慶

毛詩曰有嘉慶禎祥先見也

正長

毛詩曰游人君子正箋正長也

右依 宣旨勅申如件

勅申

年弔事

正吉

周易曰貞吉養正則吉也

愚管記第二

十八

文安

晉書曰尊文安漢社稷

建安

晉書曰建久安於萬歲垂長世於無窮

右依 宣旨勅申如件

文和五年二月廿七日正四位下納言兼侍從父事博士藤原菅原長經

勅申年弔事

延文

漢書曰延文學儒者數百人

元寶

三元布經曰感以自然寶錦囊封以三元寶神一章

右依 宣旨勘申如件

藏人防鴨河使左少辨兼文章博士越中介藤原朝忠光

廿九日庚戌 晴

四月大

一日辛亥 晴

平座上卿 松殿中納言 并 時光相名

悉議少納言不奉之

二日壬子 雨降

自今日至八日引時祓儀之男女亦結番也予番午時也

愚管記第二

十九

三日癸丑 晴

神宮仗儀文書并諸卿申詞今日自左大辨祓送結之奏聞也

四日甲寅 雨降

昨日文書申詞亦付忠光奏申

五日乙卯 或晴或陰

六日丙辰 陰晴不定

自今日以一念偈之候別時覺堂上人相具偈來本日以後始也

七日丁巳 晴

八日戊子 朝同霽夕雨降

先公第三迴所忌也佛經供養事以覺堂上人為導師阿弥

陀繪像并木像法華經一部 主具 經 龜先公所手跡表手自所書

也其外一日願寫法華經一部 幸部旁 之供養之始若達祿后

有副供養事各以衣一領為布施予并祿后亦之供養之布

施並之送達了此外阿弥陀像一鋪於梅尾供養之以衣一領為

布施自二日所始引時并言三教別時至今日之役始也

九日己未 陰

太白辰星二星合之

十日庚申 晴

今晚歲星犯牛宿同時熒惑犯尖星才一星

十一日辛酉 陰

愚管記第二

二十

十二日壬戌 陰

十三日癸亥 晴

十四日甲子 陰 吉田祭延引之

十五日乙丑 陰

十六日丙寅 陰

十七日丁卯 雨降自申刻漸雖見日景雲霧猶不散

今月分念誦自今日之始

十八日戊辰 晴

十九日己巳 晴及晚陰入夜降雨

廿日庚午 雨降

廿一日辛未 陰

左大將被借清唐鞍近衛使料之於陣被行小除目之屋  
跡并進片

廿二日壬申 陰

賀茂社司お進葵

廿三日癸酉 小雨霽

賀茂祭也近衛使左少將長秀女使大納言典侍殿宗光相在  
官人左大尉坂上明宗只一人息女

廿四日甲戌 晴

先云所稱号より故室也此間新相國并勅修了前大納言

愚管記第二

二十一

お相誘し終終ふる就是所お誅也此高三并尚就憚意今  
不存宅

廿五日乙亥 雨降 侍哥如例

泰聖廟并新殿所影

廿六日丙子 晴

吉田祭也余奉幣中後也

廿七日丁丑 天新快晴

過或山寺終白岡郭云

廿八日戊寅 雨降

廿九日己卯 晴

婦宮 余妹 被向新殿自今日之終生何也

廿日庚辰 晴

五月小

一日辛巳 晴

二日壬午 晴

三日癸未 雨降

四日甲申 雨降

五日乙酉 晴

有和歌興寄座五十有歌歌也

六日丙戌 晴

愚管記第二

二十二

審し有化女事題云仙境採葛蒲 影中鳥嗣相占所出也昨  
日依禁裏御令今日誨之先有連句無五十約

七日丁亥 晴

依呂進鞠 付新冠本 於禁裏

八日戊子 雨降

作善如例

九日己丑 雨降

今晚刻地震天之所動云

十日庚寅 雨降不宅

十一日辛卯 晴

未刻地震水神動

十二日壬辰 晴

十三日癸巳 雨澤

有和澤連句與

十四日甲午 陰

十五日乙未 雨澤

十六日丙申 晴

十七日丁酉 晴

有連句與 五初 文士七八人

十八日戊戌 晴

愚管記 第二

十九日己亥 雨陰或晴

橫賀茂尾屋有鞠與賀茂軍少、系吉松樹古東名木也

殊有之無及晚神家

廿日庚子 晴

今夜被行佛事津土寺慈傳法師持住檀信正聰驗法中

居程代 同持任

廿一日辛丑 晴 此為三日暑氣甚

廿二日壬寅 晴

廿三日癸卯 相召雨澤

自今日三ヶ日念誦水例

廿四日甲辰 陰

廿五日乙巳 雨澤

詩歌水例 參聖廟并新殿神歌

廿六日丙午 相問雨澤

廿七日丁未 相召雨

廿八日戊申 陰

廿九日己酉 陰

善賢寺殿佛事佛經供養水例年 於和格有等、女年事也

六月小

一日庚戌 霽

愚管記 第二

二日辛亥 或晴或陰中刻夕立

三日壬子 晴

四日癸丑 晴

玄觀成刻在自渡祀軒轅宮女之星<sub>四寸</sub> 同時月祀女之星<sub>五寸</sub>

所月祀太白<sub>六寸</sub> 所<sub>三寸</sub> 於天文博士泰尚相召申<sub>三寸</sub> 同時

星之變<sub>三寸</sub> 之情

五日甲寅 晴

有和歌之興者座五十音讀亦也 每月今日之讀行也 歌仙

不及廣

六日乙卯 晴



七日丙辰 晴

八日丁巳 晴 化善如例

九日戊午 晴

十日己未 晴

十一日庚申 小雨 晴

十二日辛酉 雨 晴

十三日壬戌 晴

婦君始移來移住新殿之後始移來也

十四日癸亥 雨 晴

勅撰事去十一日移作處大納言入道之仍今日賀志之殊

愚管記 第二

二十五

祝祭之申返着也

今日之慎日也朝名念誦

十五日甲子 晴

自今日詠日次方每日一首也

十六日乙丑 晴

入夜四條中納言來余對面數刻言談

十七日丙寅 晴

十八日丁卯 晴

十九日戊辰 晴

津妙音殿御忌日御佛事如例

廿一日己巳 自夜雨下

廿一日庚午 終日雨下

自今日辰時七日止夜始春日御時奉為最榮羅程供男女

結番也讀經移名御事任意也或人依有夢夢中自今日

三ノ日念誦如例

今夜禁裏和歌御言之讀史南庭御經冊之千首之

廿二日辛未 朝名雨下夕晴

今夜禁裏和歌御言之讀史南庭御經冊之千首之

廿三日壬申 晴

廿四日癸酉 晴

愚管記 第二

二十六

廿五日甲戌 晴

讀歌如例

廿六日乙亥 相同雨降午刻屬書

廿七日丙子 晴

桑木野社

廿八日丁丑 晴

廿九日戊寅 晴

六月被如例 陪膳左中將公村朝臣役送散位匡光陰陽師

權天文博士春為朝臣

延文元年

右大臣 源

七月大

一日己卯 晴 立秋 朔幸甚

朝有念彌依為の慎り也

二日庚辰 陰晴不定

三日辛巳 晴 丑時地震

四日壬午 晴入夜雨津 丑刻暴雨雷鳴

五日癸未 晴 有和奇無短冊三十首

六日甲申 晴

令實吳法中仍拜供是宿曜の秘察之今年余依為太一

愚管記第二

二十七

定分之厄也今月之儀日也 名香布抱お送り

七日乙酉 晴

有乞乃祭事以事職事前左馬助宗範所司左衛門尉望

良

八日丙戌 雨津 作善如例

九日丁亥 雨濤

十日戊子 晴 自今日之夕日念彌今日并十言慎り也

十一日己丑 陰晴不宅宮刻地震為度勤撫之間良久之

春日神主經負馳申云今朝 子刻依寺祈禱料理移殿之

去夜亥時太白犯大微宮東蕃上相星 寸許 同時月犯箕

宿才一才二星

十二日庚寅 晴

十三日辛卯

經負馳申云去夜子刻 神木遷坐興福寺金堂之越前國

坪井川口為座依之遷連机也之今年正月自福殿歸坐今

月又遷坐年中為度御勅坐之恐之歎

十四日壬辰 晴

十五日癸巳 晴 月能正現皆既之

十六日甲午 雨津

十七日乙未 雨津

愚管記第二

二十八

十八日丙申 晴

今晚東大寺神興入洛奉振五榮東洞院式内明神御正躰

奉振弄宇和中將之伊賀國人致害神官之及此祈

詔之

十九日丁酉 晴

勅修前大納言東數刻談世事

及晚春日神主經負申云東井四神木之入洛坐治宅之

恐歎之如余他

廿日戊戌 雨津 去夜太白犯左角星 寸許 坐春為朝臣之

廿一日己亥 晴 陰氣二十首之為之筆詠之

今夜以右近大將通相卿被任内大臣并會公卿洞院大納言  
万里小路中納言左大弁宰相

廿二日庚子 晴 雨澤

堀河故關自息本程依南方為付向宵去月廿六日 雨 管領

家門家親之申稱有武家之命被連宛所之旨有武家之

家之旨依之然者無意知之里可賜一行之中此旨中所存之

家令之被一行到來仁木左京大夫賴章令執達之如文章

云委細之奏殊所開眉也

廿三日辛丑 陰晴不定

神木遷御事武家者有省之旨入洛之儀近引武家者有

愚管記 第二

二十九

使於越前國

廿四日壬寅 晴 入夜四條中納言來余對面

廿五日癸卯 晴 訪親水所

廿六日甲辰 晴

神木之入洛之儀向之申今日お福之有所有事持得去

必之素向之中春

廿七日乙巳 陰晴不定 小雨瀟

廿八日丙午 或晴或陰 侍同今日和祈以始

廿九日丁未 晴

卅日戊申 晴

八月小

一日己酉 晴

任世俗之風者一種於所之御鞠二詩冊三部進禁裏則被

下所返 打枝葛 被納薰物

二日庚戌 陰

三日辛亥 小雨瀟

四日壬子 晴

五日癸丑 雨澤

六日甲寅 晴

七日乙卯 晴 入夜雨澤即屬晴

愚管記 第二

三十

八日丙辰 晴 作善如例

九日丁巳 雨瀟

十日戊午 晴

十一日己未 雨澤

十二日庚申 雨澤 午刻地震

十三日辛酉 春為朝臣中云昨日之地震水津所動去夜月

犯彗惑

十四日壬戌 終日雨澤 夕晚大風起

十五日癸亥 晴 明月珠絲之有而番詩歌合致生今延引

十六日甲子 晴

十七日乙丑 雨降

右衛門將

小倉前軍中中將 二条三位

十八日丙寅 雨降

鎌倉軍中中將

時光朝臣 為秀朝臣

十九日丁卯 雨降

為重

為遠

廿日戊辰 雨降

仁和寺二品親王

青蓮院二品親王 梶井三品親王

廿一日己巳 雨降

聖護院各品親王

賢俊僧正

廿二日庚午 雨降

進子内親王

公宗卿女

實明卿女

廿三日辛未 雨降

徽安門院一案

廿四日壬申 雲霧收

九月小

廿五日癸酉 晴 請歌如例

一日戌寅 晴

廿六日甲戌 晴

二日己卯 雨降

愚管記 第二

三十一

愚管記 第二

三十二

廿七日乙亥 晴

三日庚辰 雨降

廿八日丙子 晴

四日辛巳 晴

廿九日丁丑 晴 為秋并晴先朝臣有万有和歌之進進之

五日壬午 晴 去月月犯太白并心中中央星 稱天子星 太白犯

史記作多 題有之 奉十一月中之詠進之 申狀狀 佛

心中中央并前星本相之倒康保以奉十月度許之 殊重慶之

万有人教尋問注付表也

權天文博士安倍泰為朝臣東申之

御万有人教

六日美未 晴

御白

前太政大臣

下官

七日甲申 未時以後雨降

前内大臣

鎌倉前大納言

勅修了前大納言

八日乙酉 自今晚風雨未時以後休 今夜月凌犯歲星之

洞院大納言

按察大納言

西園寺大納言

化善如例

御万有人教入道

正親町大納言入道

六条前中納言

九日丙戌 晴

平座松殿中納言 奏議不奉之

十日丁亥 晴

十一日戌子 陰晴不定 今夜月凌犯箕感

十二日己丑 晴

十三日庚寅 晴

十四日辛卯 晴

十五日壬辰 晴陰不定 今日卯刻地震

十六日癸巳 晴今夜太白犯天江才四星

十七日甲午 晴

十八日乙未 晴

愚管記 第二

三十三

十九日丙申 晴

廿日丁酉 雨降

廿一日戊戌 晴陰不定

廿二日己亥 晴

廿三日庚子 晴

廿四日辛丑 晴陰不定 晨黑以後雨降

廿五日壬寅 晴詩歌如例 奉聖殿次向新殿奉祈影御前

廿六日癸卯 晴 去晚月犯軒轅宮女三星

廿七日甲辰 晴 去夜入道二品親王尊圓入滅 遣使於

座主尊道親王仲昂

廿八日乙巳 晴

廿九日丙午 晴

十月大

一日丁未 雨降

平座如例 上卿五里小碓中納言 奏議不奉之

二日戊申 晴朝另少雨降

三日己酉 晴

四日庚戌 晴

五日辛亥 晴

六日壬子 晴陰不定 以後雨降

愚管記 第二

三十四

七日癸丑 雨降 巳時以後雨降

八日甲寅 晴作善如例 今日午後晨法新經 一日經造豐堂 奉祈海

上人房供養衣布施奉 去此夢有兒先公 仍今日有此夢

九日乙卯 朝雨小雨 今夜太白犯南斗才五星 日月犯箕感

十日丙辰 晴今夜月凌犯箕感

十一日丁巳 晴

十二日戊午 晴

十三日己未 晴未時以後雨降

十四日庚申 晴

十五日辛酉 晴及晚雨降

十六日壬戌 雨降

十七日癸亥 晴

十八日甲子 晴

參聖廟并新殿中影

十九日乙丑 陰

廿日丙寅 晴

廿一日丁卯 晴

廿二日戊辰 雨降

廿三日己巳 晴 見日景

廿四日庚午 晴

愚管記 第二

三十五

廿五日辛未 晴 詩歌如例

今朝惠詠五十首 撰者許為撰集所望也 日來所詠並之和

歌也 料紙鳥子 不打以同第 二枚裏に置柳苔

廿六日壬申 晴

廿七日癸酉 晴

廿八日甲戌 晴

廿九日乙亥 晴

卅日丙子 晴

十一月

一日丁丑 晴

吉田神主無豐宿祿來國史に内省有る事等

二日戌寅 晴

三日己卯 雨降

四日庚辰 晴

五日辛巳 晴

六日壬午 雨降

七日癸未 晴 陰小定

八日甲申 晴 作善如月

春日祭遷座に間不波月

九日乙酉 晴

愚管記 第二

三十六

十日丙戌 雨下

十一日丁亥 早旦少雨申時以後見日景

十二日戊子 晴

十三日己丑 晴

十四日庚寅 晴

十五日辛卯 雨下

十六日壬辰 晴 陰小定晴 小雨下

豐明帝會禮行平庭上卿檢中納言實音卿

十七日癸巳 陰晴不定

深心院殿以來玉先云四代御詠者百首生撰者許書



料幣以同紙裏之蓋柳莖四星左中將之村親為使畏結  
之重返序之

十八日甲午 白雲散亂

十九日乙未 陰 桑田原次向新殿桑田新市前

廿日 丙申 雨降

吉田祭也余在幣中後也

廿一日丁酉 陰

廿二日戊戌 晴

廿三日己亥 晴

板長經法師誦經為今度勸捐老宗匠許相別書狀也之畏

愚管記第二

三十七

結之申返序之

廿四日庚子 晴

大原野祭今日石段行重禮為日次之被行之有例之去廿

日吉田祭同山社行之被行日次之有例之去廿

間路之今神事之

廿五日辛丑 晴 晴如例

廿六日壬寅 晴

廿七日癸卯 雨降

廿八日甲辰 雨降

廿九日乙巳 晴

今日大原野祭之予奉幣之例申後也  
廿日丙午 晴

十二月小

一日丁未 晴

二日戊申 晴

三日己酉 相台少雨

三歲小兒有魚味事

四日庚戌 晴 桑田野社

五日辛亥 晴 及晚雨下

佛伊日吉田及竹臺東西竹枯了之去年中吉竹臺竹枯

愚管記第二

三十八

了行禮之旨復奉之今度又得神樂不致沙汰之可恐之

今日吉田祭神事之例於奉幣之先日被進了之有被行之

有之例之

六日壬子 晴

七日癸丑 陰

八日甲寅 陰 仍舊如例

九日乙卯 晴

十日丙辰 晴

十一日丁巳 晴 霰降

十二日戊午 晴

十三日己未 晴

十四日庚申 陰

十五日辛酉 晴

十六日壬戌 晴

十七日癸亥 小雨

十八日甲子 陰

十九日乙丑 陰

廿日 丙寅 陰

廿一日丁卯 雪降

廿二日戊辰 晴 入夜以苑人右少弁位並有勅之事

子細注表

愚管記 第二

三十九

勅問人、開白 新左政大臣 左大臣 下官

表 申詞如此

臨時祭庭座召出所有各事

神樂入活并祓木勅座年々引勅先例之祭出御事各

子細此上事宜在時宜矣

廿三日己巳 陰 及晚雨

昨日勅問事 今日注申詞付信事

廿四日庚午 陰

廿五日辛未 晴 雪下 詩歌如例

今夜祓行除目

愚管記 第二

廿六日壬申 陰 今夜臨時祭御馬出覽之

去夜除書外來 奏儀為明御拜任 前内大臣 上諸

一位 一条大納言 内翻 叙正二位此外昇進各殊事

廿七日癸酉 晴

賀茂臨時祭使左大辨掌和舞人十人内四位之人

庭座公卿按察大納言實继中納言忠嗣權中納言仲房

大官三位中將實為卿也

傳沙 出御庭御倚子如常

廿八日甲戌 晴

廿九日乙亥 雨降

愚管記 第二

四十

愚管記第三

文學博士坪井九馬三 校訂

日下 寬

今年三月以來不記

右大臣 

延文二年丁酉

正月大

一日丙子 天晴

四方拜冬聊有歡樂 手水節代略 神木遷座同見鏡服

藥山例 入夜右大弁宰相經方卿來為拜賀也二拜後

愚管記第三

盛對面則 未肉之

後聞小朝拜冬之 節會內辨中納言忠朝卿外弁公卿

權中納言仲房卿右大弁宰相經方卿并以弁 次將右

長具朝臣勸少納言代之

無出御國極立樂停止之

二日丁丑 天晴 鏡藥山例

三日戊寅 及晚天晴 鏡藥山例

左大史量實來入夜以中將陸家朝臣來云踏歌節會奉

吾外弁者依有朝事難參之 中若之

遣使去於武家為不為賀新春

四日己卯 晴 年首沐浴如例

五日庚辰 陰 敘位儀停止之

六日辛巳 晴

七日壬午 雪降雖小雨交降雪猶積地

白馬節會內弁松殿中納言 外弁三條中納言乃里小路中

納言左大弁宰相宣命使 右大弁宰相入 垂河簾出

御帳中國極歌笛立樂坊家奏停止

八日癸未 晴

今夜為方違立車於門外近衛町 聞曉後室町 均家

九日甲申 晴

愚管記第三

十日乙酉 晴 大外記師成朝臣來白麻十帖後 如例

藏人右少弁信實院政所吉書

今夜初詣也河原後泰為朝臣行之

十一日丙戌 陰

十二日丁亥 雨澤

十三日戊子 陰

十四日己丑 陰

十五日庚寅 天晴風頗吹

十六日辛卯 天陰入夜雪降子終目能西見之

能後被行節會之 內弁松殿中納言外弁三條中納言乃

里小路中納言左大辨宰相宣命使右大弁宰相酒部使大宮

三位中将小入主

少卿會掃南庭深雪被用晴儀之儀各出所不修

所膳國極主樂侍心

內弁宣命奏詞之後不取宣命堂上更下殿宣命昇

殿不足之凡彼黃門之節各內弁一身勤仕頓傍

長年人外不便

十七日壬辰 晴 銚子橋通庭

十八日癸巳 陰 廿利許地處

十九日甲午 晴 未利以後法

愚管記第三

三

廿日乙未 朝日晴午後陰及晚白雲覆

廿一日丙申 晴

廿二日丁酉 晴

廿三日戊戌 陰

廿四日己亥 晴

廿五日庚子 雨降

聖廟奉樂侍飲如例

及晚更有火事師小路東洞院

廿六日辛丑 晴

廿七日壬寅 晴

廿八日癸卯 陰午上見日景

廿九日甲辰 陰晴亦定春日神主經負中云為社前門前穴一

出現儀口一尺五寸 猿澤池水未變候是元日常儀也

卅日乙巳 晴

二月大

一日丙午 天陰及晚雪為飛

二日丁未 晴

明日為日祭也而社本遷座之旨之令傳心之也藏人勅解也

次官行知令宣下

釋奠延引之為中丁

愚管記第三

四

三日戊申 晴

四日己酉 晴 祈奉祭區

五日庚戌 晴

續歌云十首詠之 每月今日之法也

六日辛亥 晴

勅修之新大納言東之入對面即今案內

今日雜訴所沙汰

七日壬子 雨降

八日癸丑 陰

先公御忌日也心中念酒持蘇文戒等如例

奉專使於前博陸許亞相事訪申之爾迷惑是非分年他

金襴通者

法室近口可有御出諸王風聞御近軍久已奏向爲  
事實者天下大業中能左右之

十八日亥刻 雨降

十九日甲子 晴

仙夢玄夜子刻許法皇新院若御伏見殿之天下大慶  
不能左右之

石能左右之

還幸事殊重く殊長存し中入禁裏

戊日乙丑  
雨澤

## 六

至幸事中人伏見殿法皇御方ハ御座座各左右人ト云ク

參入之仍不及中入之新院有門西事諸子出對面之時

之被作之被作下女院御返事被悦思食之種種之有御所

心中誠實也

廿一日丙寅 天晴

廿二日丁卯陰

今日大原野祭也余奉幣中後也

春日神主經負申云金峯西廂廊内今月十四日穴出現又十

九日同重中門西脇出現マニ玉手今イマノ度タビ一ヒト刻キョク

廿五日戊辰晴

廿四日己巳 天龍快晴

廿五日庚午 朝向晴申刻而陰入夜風雨甚

詩歌如例 奉北野社々々々々々々々々々々

廿六日辛未 晴入夜雨

廿七日壬申 晴

廿八日癸酉 晴

抄子三人  
許

石首和歌付以并奏之書島子 不打以同旁為無帶加封  
之在龍書狀礼紙 去年八月比來十一月中之進進之中  
催由多今今極急人々大略未詠進之時付以并奏稱  
出方之台々々々々々

愚管記第三

狀跡如此

百首和歌詠進之時 奏聞之狀如件

八月廿七日 右大臣判

以左中務殿

廿九日甲戌 雨降

卅日乙亥 天晴風吹

有連句興 五十初 右大辨宰相也儒中一五招引依人ふ

満る韻

三月小

一日丙子 天晴

傳聞一案大綱之能隱進之儀被奉南方之上者此中父公被

奏聞之

二日丁丑 雨降

三日戊寅 晴

有詩歌興短冊三十首之間有和漢是句無

四日己卯 雨降

五日庚辰 晴

去夜 丑刻 神木御歸座之

愚管記第三

八

愚管記 第三

愚管記 第四

延文三年 春 夏

正月

一日 節會内并事

七日 節會内并事

十六日 節會内并事

三月

廿八日 縣召除日執筆事 入眼

愚管記 第四

文學博士坪井九馬三

日下 寬 校訂

延文三年 戌 成

正月大

一日庚子 天陰乃春之初幸甚

服屠蕚白散如例年 今日節會余為内辨

天陰入夜著朝衣

細地平緒有文帶 付惠袋如例

節會事：逢之由傳聞

之間及深更奈内

駕轎柳毛車前馳之人殿上人左中將公村朝臣雜 色長下毛野裡次立共車制四人平礼着下袴牛童雜色

手如木 如忙

依名冬臺盤所整而有出所之言談之後入泐次供御藥

奉行職事藏人佐嗣房事了余着陣西園寺大納了實俊卿

乃里小路中納言仲房卿右大弁宰相徑方卿等來着藏人辨信菰

來余座下内并事余移着瑞座台大外記師茂相長問諸司

愚管記 第四

二

右大臣 年廿七

如例召外任奏即持案余見了付職事奏之返給結申職事

作云國極殘秋心留立樂停心

是東大寺神興 在治之故也

次余召外記賜外任

奏此次作省略事其詞如職事次諸卿出外并余起座押易低進

立中門邊近仗引陣了余着宜陽元子内侍臨欄余謝座如例

了昇殿次開門次團司次舍召舍人少納言信家着版作云大夫

君連石七諸卿参列之後作敷尹諸卿謝座謝酒了昇殿次余

讓内辨於西園寺大納了退出

今年小朝拜不被行之依神輿事各出所之故也

二日辛丑

晴 鏡藥如昨日



晴見鏡服染頸左中辨晴光朝左左大史量實等來

丑刻西方有火事 後開天龍寺回福云々

今夜填星入輿鬼中迫犯積尸氣

五日甲辰晴  
叙位儀延引依為九炊日也

万里小江中纳言 仲房 相伴子息藏人佐嗣房来

六日乙巳 晴  
叙位議余做執筆

是日叙位議也 呂大外記師裁判在給硯墨筆亦此次持來叙  
位文書見了返給入夜夢內良久事始余着陣松殿大納千万里

## 159

小疏中納之。右大弁亦未差。次余移居端座。令敷職。如例。以升時  
光。仍占未。賦省。召作事。次余召升左少弁。志光朝臣。為賦。余作詞。  
同職事。次召大外記。師翁相。召作之。文書。一可。潤具。令作之。更。又召  
外記。問云。文書。何勢。申。作之。中。區。頃之。職人。藤原。懷國。奉召。余揖之。  
次召外記。作之。舊文。撰之。次舊文。外記。亦列立。小庭。次余以下。起座。列立。  
弓場代。至。舊文。列立。了。余揖。離。列入。自。吾。名。門。代。着。殿。上。關。白。元。奉。  
在此。座。即。起。座。社。老。所。前。座。余。因。之。次。之。所。取。舊文。為。座。次。關。白。依。  
召。奉。若。因。座。關。白。依。天氣。召。余。之。奉。若。因。座。  
十年。勞。  
如。恒。涉。覽。了。返。給。渡。座。次。依。作。召。續。帝。令。藏。人。次。官。仍。  
知。召。即。持。卷。之。余。取。之。蓋。前。依。作。招。墨。滌。筆。書。從。立。位。下。  
加。防。人。

次叙省奏今夜武次奏事由左右大臣院官衙申文次叙

三王氏藏人年一十藤氏爵尋申開白叙之源氏橘氏共年一十

右大升持素院官御申文余取之關白可傳奏之云禮示之金獻所

申文開白奏了被追授余取卿申文叙聖三通也次開白被撰持

小抄紙并勘文於申文者の叙者を去く<sup>三</sup>次余被勘文諸司外衛

等叙之次叙府奏左近許也次奏中召入內一加階勅文并皆早出仍五位藏

名則持卷之入内巻余取之献開白く見了返信之余叙之此後書之

年  
端  
月  
日  
協  
寶  
次  
釵  
加  
階  
低  
叙  
低  
叙  
皆  
悉  
叙  
了  
返  
進  
勘  
文  
於  
開  
白  
次

卷叙位加覆勳了奏聞上天覽了返給次硯并宮中物亦直呈上

了取副叙位於蜀深揖起危出殿上之衆清書上卿損事區出只

45

今石の集と仍在外記  
權少外記  
師典  
於殿上小庭  
余為殿上  
拂座也  
預呈叙位簿

退出時翌日已斜也

火積衝重  
動盪其期忘却

牛刻許六位外記積素硯令人取之外記相語云入眼上卿遂不

老仍諸司空退出今夕節會以前之禮行之不成就事

七日丙午晴 白馬節會余為內辨

白馬節會也 先被行叙位入眼之仍及深更參内並着仗座

略之松殿大納言万里小路中納言右大辨木暮義藏人勘解由次

官行知某座下作云内并次余移若端座今教行知更出作

加叙事<sub>レ</sub>紙<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>余作<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>懷<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>

去次余自右大辨一起座移居座上余又目之右大弁起座進來  
余取下名并折紙尋故右大弁立後座右觀書余此間右外記  
問諸司法司國樞密司左右馬頭石余中之便可持外任奏

之代官申八早可申中外記起持外任奏余見了置  
前右大辨書了持來起後座後余披見入加外任奏管令  
行知奏此所奏付內侍所中奏之又此間外記中代官余作詞也

例次行知返下外任奏余結申作詞也例行知又作所奏事同  
余左右馬代左近中將隆家親右近中將家尹親右又  
作依東大寺神興在洛國極立樂舞非停心余目之右外記  
下外任奏作詞并省略奏作也併同職事作詞外記稱唯返次余起

愚管記 第四

五

座於陣腰着執押旁欲入自宣仁門代經陣中庭出自東門進  
中門邊內侍持下名進居西階邊余進立階下持旁屏階取下  
名下立本所拔旁取副下名於旁着宜陽殿元子次余右內監二者  
內監進名武兵着有例二者以殿上位傍國列立余名武兵給  
下名如例二者返于起座返立中門邊近仗引陣 天皇出所帳中  
被無所着 余着元子內侍持盤余謝座屏殿開門圍司亦催倒  
于下殿立西階下南面以常人內記叙位宣命之符亦傳傳也  
內記揮宣命於杖持旁余持旁於左腕見宣命見了持杖  
持旁取杖系上經東座元子後到御屏風下付內侍奏返給下  
殿返給杖於內記五副宣命於旁屏殿着座次右內監一者

余右二省一者列先右武部輔代賜位記著而系中作也依  
有上階武之合也二合結右兵部後管二省並着於庭中業上返

次余舍人大舍人稱唯少納言着版余作云乃稱也次諸卿奉到作  
數尹諸卿謝座謝酒了屏殿着座叙列進仍作右大弁催叙  
人到立余正易右宣命使先出在懷中仲房卿進立余後給宣  
命後座余以下列左仗右以宣命使着版宣制兩版群臣共再拜  
次二省右叙人給位記叙人拜舞了返余作右大弁令撤位記案次  
親族按余以下殿舞舞諸卿屏殿後座次余下殿見白鳥奏取加  
兩杖奏上付內侍奏後座作右大弁令取版位標次余起座  
返立余今整之位也中職事作下仍後座白鳥渡次

愚管記 第四

六

仍所膳膳腰自東階付諸卿不立仍余作右大弁余進  
能着大弁仍着也余進大弁仍着也余進大弁仍着也  
次仍所飯作大弁之並臣下飯計大辨申上余又仍着也  
着下次一獻臣下應次余讓肉耕於方里小治中納言返出  
今日用樂淡平緒

八日丁未 雨降 女叙位余仍執掌

是日女叙位也入夜考肉仍殿上藏人右少辨信着余經  
上戶考仍前因座今親里向不仍天氣令仍重仍觀續紙持着  
次余考進結御觀蓋申文等後座次依作奏返續申招着

深草書從五位下藏人齊多（夜加防也）仍先叙掌侍之後在院官所申  
文持奏（付奏）如例返給座大東申文不撰出（此如防）次第叙（叙）  
從五位下（便書年號）月日次第叙上五位（此如防）皆如叙  
奏聞（返賜）後更至大東申文不撰出（此如防）後封叙  
位立並現以下立別叙位於易出殿上於所侍子前投入眼上卿  
里小詔中納言退出

九日戊申 晴今日新始也

頭中將隆家親任（付書狀於）相催云踏歌節會（奉仕者申改）

障中

十日己酉 晴入夜雨降

愚管記 第四

七

十一日庚戌 或晴或陰微霰降

十二日辛亥 陰晴不宅 右大辨宰相來

踏歌節會相構（奉仕者）以勅書於作下猶申子細（為）

恐（奉仕者）月犯填星（云）

十三日壬子 晴

入夜四條前中納言隆持卿（付書狀於）少將隆仲親來

十四日癸丑 晴 奉山野社 被下勅書（會猶奉仕者）也重

你有（奉仕者）向（傳試）由令（入）小兒亦有戴餅事

十五日甲寅 蒼天快晴

十六日乙卯 雨降入夜晴 踏歌節會余為肉辨

女踏歌宴會也入夜刷朝衣（付地平緒飾鈕）參內教刻供盤不

事具之後余名陣諸卿同來署頭中將隆家親（奉仕者）肉弁

事余奉（後移座）令教載（如例）次召大外記師發朝（奉仕者）載余同

云諸司從申（由又問云）國柵造酒正從申（由又問云）外任奏

從申（由又問云）持奏（禮）師發稱唯返持奏之余披見如例了

招以中將奏（返給）余結申（由又問云）國柵立樂傳（由余目）

以中將退去次余石外記下外任奏師發結申（余作云列）從

又作省略事外記退次諸卿出外弁余起座於陣腰（看觀）

令押易弟經小庭并立都東夷進立中門遙近仗引陣天皇

所帳中（奉仕者）余若宜陽元子內侍臨欄余謝座（昇殿）

愚管記 第四

八

座次開門次園司（催如例）次余召余人大舍人稱唯少納言（看觀）

余作云大夫君達（云）諸卿參列之後余作云數尹諸卿謝座謝

酒（昇殿）座次供所膳膳腹甘自東階（付之）諸卿不主來

女告（付）中次余作大辨令置座下粉熟置（大弁申）著余作

天氣所著下（下）應（次）供所飯（付）中次余作大辨令置座下粉熟置（大弁申）著余作

次召下飯汁（作大弁）所著下（下）同（次）供所酒（次）供一獻

次召下一獻次入所諸卿立座前（入所）後次二獻所酒勅使（教）先

卿作（次）三獻次余起座於軒廊見舞（收奏）右中將家尹（如）

初奏奏杖余見（奉射場）付頭中將奏（付杖）所經本

踏到軒廊此（次）令取權相承昇殿次作大弁催舞（次）數還道

次舞姫出廻り庭之匣丁還入次群臣舞姫拜余不立此好直向  
津見宣命見参々相伴外記就弓場令以中将奏聞返信初西  
階下取宣命見参々舞姫次右大弁經方卿賜宣命見参祿  
法寺一奉賜宣命使并祿所之也經方卿渡座次余以下今度也  
列立右仗南頭宣命使着版宣制一版着后再拜又一版着后  
拜舞經方卿就祿所余以下還舞立就祿所賜祿止出  
今日参仕上建部

西園寺大納言實俊卿

松殿大納言忠嗣卿

三條中納言實音卿

万里小路中納言仲房卿

右大辨宰相經方卿

日野宰相教光卿

愚管記第四

九

十七日丙辰

寒風吹白雲散陰晴不定

十八日丁巳 陰

十九日戌午 天氣快晴

被下勅書陰日間事也

廿日己未 終日小雨下

今日又被下所書吉書奏公卿分配可被行也可未動也被

傳下申領狀

廿一日庚申 雨降

自今日三々日念誦

廿二日辛酉 晴

廿三日壬戌 陰

廿四日癸亥 晴時々雪散

廿五日甲子 晴 詩歌如例

廿六日乙丑 晴 今晚地震 月後犯熒惑云々

廿七日丙寅 晴

廿八日丁卯 晴

新殿雖君達被勅小饗今年初被事也

廿九日戊辰 自曉更雨降已刻屬晴

卅日己巳 相天雪夕雨降

愚管記第四

十

二月小

一日庚午 晴戌刻許北方有火事前相國藤原家僕宿云々

車魯使左衛門尉為繼也

二日辛未 晴 今晚地震

三日壬申 晴 春日然延引云々

山門神典今有入浴之中有主少嗽訴五ヶ条云々武家

雖令成敗近江守護對冠事為平意云々猶及嗽訴云々然

猶稱被割心云々 妻 月犯太白云々

四日癸酉 晴 初年祭延引云々幣料事被作武家云々

以家難沙出云々申云々仍被延引云々

五日甲戌 晴

六日乙亥 雨降

七日丙子 陰夕雨降

今日向新殿雅君許今年初所向也故設小饗

八日丁丑 晴未刻風雨須臾屬霽

釋奠於心宮座

今夜太白昇星月犯井宿才一星

九日戊寅 晴

造太神宮遷宮年限事有祭之去年就勅問申所存了而

注色申詞中今自以并許不送之仍注申詞也子卯要注

愚管記第四

十一

造太神宮遷宮廿年一度被安置武年了而康永二年遷宮

當年一年是國中不移遷之故而今度遷宮遷康永

二年以來年限有甚涉法既將又計移置是年限有甚

涉法既下之皇親主親世相也且天平仁和相南十

九年有遷宮是和銅并貞觀遷宮兩度有南平一年

故也勸例相創

余申詞如此注折紙

造太神宮遷宮年限事遷康永二年以來年限有涉

法之奈何事有甚但神宮注進勸例天平仁和被縮年紀

就之為局所見了持尋問食既且又神宮遷宮天下重

事也神慮臣測兩箇子細猶課官占可有左右乎

十日己卯 晴 月犯填星

大原野祭也余奉幣由彼也

十一日庚辰 晴 辰刻地震

今程前關白子息元服名字房經敎品而下五位禁色事

同被宣下上卿万里小路中納言昇殿事後日宣下

生年十四歲或十二加冠主人被着衣冠先例勸

十二日辛巳 晴

故入道左兵衛督直義有贈位事曉鐘以後上卿万里路

中納言着陣行今日為重法問及曉更武家儀中

愚管記第四

十二

行之不知其故贈位記內被武家年勅許亦有大

事大宿民屋敷石問為及爐

十三日壬午 晴

征夷將軍為征伐可令進發西園中有其間奉難奉

或又四日世上有種港流

十四日癸未 雨降

十五日甲申 晴

自今日三箇日念誦南都教其間奉難奉

十六日乙酉 白日腫脹紅霞泛濫

斜陽新月其光輝為薄蝕變中法司天

十七日丙戌 陰小雨

十八日丁亥 晴 四案前中納言來

十九日戊子 晴 有和漢聯句興顯承日

廿日己丑 及晚小雨

廿一日庚寅 晴 烟雲騰騰

今日天龍寺造營事始<sub>三</sub>左少辨志光初臣為勅使行向<sub>三</sub>

廿二日辛卯 霽

廿三日壬辰 雲雨祁<sub>三</sub>

廿四日癸巳 自夜前大風終日不休陰晴不定時<sub>三</sub>雨降

廿五日甲午 晴 詩歌如例 奉聖廟

愚管記 第四

十三

廿六日乙未 終日雨降

廿七日丙申 陰相間見日景

廿八日丁酉 晴

西園寺大納言母儀去<sub>三</sub>廿三日他界<sub>三</sub>今日以爲使吊<sub>三</sub>此間日次

不快<sub>三</sub>今日不吊<sub>三</sub>

今夜被行傷事<sub>三</sub>

廿九日戊戌 晴夕陰

天龍寺立柱<sub>三</sub>武家各人行向<sub>三</sub>

三月大

一日己亥 未時以後陰

子初點南方有火事及丑<sub>三</sub>起火消了火起自高辻西洞院<sub>三</sub>

三案坊門東<sub>三</sub>四案茶洞院<sub>三</sub>并<sub>三</sub>燒失<sub>三</sub>

二日庚子 晴

今日少首不被告撰者<sub>三</sub>以紙拾結<sub>三</sub>入弘蓋納長積<sub>三</sub>

以和歌所寄人先之相<sub>三</sub>以<sub>三</sub>託記<sub>三</sub>

三日辛丑 晴

今日不賞辰遺憾也

四日壬寅 晴

向實相院見花落花<sub>三</sub>行省<sub>三</sub>舞

五日癸卯 晴

愚管記 第四

十四

來子<sub>三</sub>仙洞<sub>三</sub>有<sub>三</sub>所<sub>三</sub>幸<sub>三</sub>六條殿懸<sub>三</sub>所<sub>三</sub>牛<sub>三</sub>引<sub>三</sub>進<sub>三</sub>中<sub>三</sub>待<sub>三</sub>作<sub>三</sub>下<sub>三</sub>將<sub>三</sub>

相長付狀<sub>三</sub>申<sub>三</sub>中<sub>三</sub>當<sub>三</sub>時<sub>三</sub>所<sub>三</sub>生<sub>三</sub>伏<sub>三</sub>見<sub>三</sub>也<sub>三</sub>儲<sub>三</sub>深<sub>三</sub>草<sub>三</sub>地<sub>三</sub>藏<sub>三</sub>堂<sub>三</sub>

六日甲辰 晴

臨川寺長老<sub>三</sub>祖<sub>三</sub>景<sub>三</sub>來<sub>三</sub>余<sub>三</sub>於<sub>三</sub>此<sub>三</sub>和<sub>三</sub>為<sub>三</sub>者<sub>三</sub>只<sub>三</sub>能<sub>三</sub>宗<sub>三</sub>門<sub>三</sub>學<sub>三</sub>外<sub>三</sub>典<sub>三</sub>又

博覽也<sub>三</sub>語<sub>三</sub>談<sub>三</sub>話<sub>三</sub>之<sub>三</sub>後<sub>三</sub>神<sub>三</sub>華<sub>三</sub>

七日乙巳 晴

八日丙午 未起以前天晴自晚陰終夜陰雨

征夷將軍進發今日延引<sub>三</sub>為<sub>三</sub>奉<sub>三</sub>廿一日<sub>三</sub>中<sub>三</sub>有<sub>三</sub>生<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>

九日丁未 終日降雨

十日戊申 晴

武將進發不可不儀之相公羽林監為也

十一日己酉 霽

十二日庚戌 霽

十三日辛亥 晴

仙洞所事六條殿有御經信長事所導所澄後法不題名信

五口之事了法所事亭所送留之於一條邊整之伺見名次

所并細小若垂殿上人不被名具之北面四人此内五位一人所事

客公卿不見為

十五日美丑 小雨降

十六日甲寅 自晚更雨降未時以後雨脚休

愚管記 第四

十五

十七日乙卯 晴今晚地甚

今物武士摩動之相尋子細之江州守渡判官入道崇永

誅伐同國住人高山并外質之彼等事八年來為凶徒去年以

來雖降參猶有所心之中粗風聞之適在末之可誅伐之

因之蒙武命之世聞如此

十八日丙辰 霽

十九日丁巳 晴

被下勅書自來未六日可被行除目執事之令系勅中起接試

うへに入らるる

仙洞空所伏見殿依在為生也

東 向新殿祿后許庭前松上藤盛也殊勝之乃晚晦

除目執事亭中領狀

廿一日己未 晴

廿二日庚申 晴朝名小雨即休

廿三日辛酉 晴

廿四日壬戌 晴

明後日除目延引自廿八日可被給引之奉引乃并來觸差

之存知之申了外記申春日般申之台延引之

廿五日癸亥 晴 諸君如例

愚管記 第四

十六

廿六日甲子 晴

今夜禁裏庭有得所會之

廿七日乙丑 晴

廿八日丙寅

天晴 縣石除目始先和秋所會之仍及曉更未肉即着陣

無 按察大納言松殿大納言右大弁小末系余移端座頭左中弁

時光相居作在作事余在外記作之作文書其具 又右辨作之更右

外記問文書具否頃之藏人未名余在外記作書文事書文列立

小庭余以下起座列立射場至書文列立之金揖離列入各名門

代着殿上 關白松 關白并余着所前座按察卿以下並書文者



座公卿不足仍右大升 次開白依召參差因座開白依天氣召余卷

着所前因座 先着召二因座依 依作奏開官帳返給渡座次緒大

間摩墨澤筆任四所籍任內堅之人後伺天氣召院官所中

文右大升掌 次任四所籍右大升持卷院官所中文余卷進奏

返給渡座此間開白被撰授中文余加神書下勅 右大升次任內

信以下諸着年給成文及通之時拾紙拾結 如例悉任 任上

召使次余伏天氣召大間封 入成文舊次取出成文結 入官間

路返之時已刻也火橫衝重勅並如恒主切忘却

申刻許大外記師我相在持未文書見了返給院書學亦給了

愚管記 第四

十七

此次持集十年芳為文延結舊如例

廿九日丁卯

自夕雨降 陰月中夜也入夜參內依召基盤所出河頭而金美津

直端 諸卿因之 今夜言文之卿之介不奉被同例不外記 今夜言文之卿之介不奉被同例不外記

余召外記問文書具居藏人未召余又召外記作舊文事 舊文

列立 兩儀 余以下起座列主中門下依降雨也 余南面大納中東面參張

至舊文列立了余卷上 今夜言文之卿之介不奉被同例不外記

言右大升取舊文以并取今舊文 今夜言文之卿之介不奉被同例不外記

下大間給渡座即給出大束申文又奉進給 是替舊 如先 給大

間摩墨澤筆今夜任中文亦撰出自大束至現右右大升持未去

夜下勅文改身任了名替國替申文手勅 勅上之時任了次任內

舍人外國文章生等 次顯官舉此官任諸通舉 取右中文撰完

後諸卿持集了余卷 就屬下奏 召所 次召國將任宿右

勅文持集了之時重國 次任宿官次是大間次結成束次奏大間

返下之時及天明也

火橫 衝重 勅並 牙期忘却

廿日戌辰

晴陰不定入夜晴陰月入眼也入夜參內頃 議始降并時場候

如例開白并余着所亦座次參召因座如例下給大間次緒大間摩墨

愚管記 第四

十八

深草當年後有通東申文官前任了次任諸道舉次事官任了

次召瀧口所聚芳帳持集 昨夜言文之卿之介不奉被同例不外記

官任折參任了次文領舉且書案任了如例將任勅文不任之 任也

皆集任了 惟天氣召大間奏開 依如例返給渡座結成文入加舊文

大間舊澤撰起座出殿工技清書上所控大納中參觀所返出

今夜言文人數如昨夜

火橫衝重勅並其期忘却

四月大

一日巳巳 晴

平座上所乃里小路中納言仲房卿

未刻許權少外記師與弟集除自大同并成文令人云

二日庚午 晴

今朝徽安門院蘭所<sup>母宣光門院</sup>花園院第<sup>二</sup>女法皇北院并介上唯

母也春秋四十一<sup>三</sup>自去廿四日所達例而風病<sup>三</sup>自去<sup>三</sup>年入宗門

令弟大友治所生蘇原殿也

三日辛未 晴

女院所事醫所<sup>三</sup>中入禁裏仙洞<sup>三</sup>禮歡宴中并有<sup>三</sup>返事

四日壬申 晴 已刻地震

女院所事訪中<sup>三</sup>宣光門院并前坊<sup>三</sup>

五日癸酉 未刻雷鳴降雨雹交降

愚管記 第四

十九

伯二位資繼卿未近衛使沙汰立<sup>三</sup>唐鞍并馬<sup>三</sup>清<sup>三</sup>示之

二日辛未 晴

六日甲戌 晴夕雷降

七日乙亥 未時<sup>三</sup>天降<sup>三</sup>及晚<sup>三</sup>也

八日丙子 陰晴<sup>三</sup>及晚<sup>三</sup>雷降

先公御月忌也於覺堂上人本房有佛經修善事如例年自昨

日<sup>三</sup>中至今日晨朝修別時一念信<sup>三</sup>等勤<sup>三</sup>力<sup>三</sup>系<sup>三</sup>行<sup>三</sup>向<sup>三</sup>祈<sup>三</sup>少<sup>三</sup>祈

敬<sup>三</sup>君<sup>三</sup>達<sup>三</sup>并<sup>三</sup>老<sup>三</sup>母<sup>三</sup>福<sup>三</sup>后<sup>三</sup>有<sup>三</sup>例<sup>三</sup>供<sup>三</sup>養<sup>三</sup>事

九日丁丑 晴

十日戊寅 晴

十一日己卯 朝有小雨夕刻以後屬雪

十二日庚辰 晴及晚陰入夜雨降

唐鞍遣伯卿許

十三日辛巳 陰入夜雨降

十四日壬午 晴 已刻地震

十五日癸未 陰入夜月明

被<sup>三</sup>行<sup>三</sup>小<sup>三</sup>隊<sup>三</sup>目<sup>三</sup>上<sup>三</sup>卿<sup>三</sup>權<sup>三</sup>中<sup>三</sup>納<sup>三</sup>仲<sup>三</sup>房<sup>三</sup>卿<sup>三</sup>右<sup>三</sup>掌<sup>三</sup>左<sup>三</sup>辨<sup>三</sup>志<sup>三</sup>光<sup>三</sup>相<sup>三</sup>占<sup>三</sup>

擊<sup>三</sup>圓<sup>三</sup>上<sup>三</sup>卿<sup>三</sup>同<sup>三</sup>人<sup>三</sup>

親<sup>三</sup>尹<sup>三</sup>相<sup>三</sup>后<sup>三</sup>任<sup>三</sup>兵<sup>三</sup>部<sup>三</sup>權<sup>三</sup>少<sup>三</sup>輔<sup>三</sup>諸<sup>三</sup>家<sup>三</sup>諸<sup>三</sup>大夫<sup>三</sup>任<sup>三</sup>此<sup>三</sup>官<sup>三</sup>頗<sup>三</sup>近<sup>三</sup>此<sup>三</sup>件

男<sup>三</sup>德<sup>三</sup>大<sup>三</sup>寺<sup>三</sup>諸<sup>三</sup>大夫<sup>三</sup>也<sup>三</sup>向<sup>三</sup>省<sup>三</sup>而<sup>三</sup>子<sup>三</sup>息<sup>三</sup>懷<sup>三</sup>國<sup>三</sup>為<sup>三</sup>藏<sup>三</sup>人<sup>三</sup>於<sup>三</sup>仕<sup>三</sup>其

愚管記 第四

二十

身<sup>三</sup>去<sup>三</sup>年<sup>三</sup>將<sup>三</sup>許<sup>三</sup>四<sup>三</sup>品<sup>三</sup>今<sup>三</sup>年<sup>三</sup>又<sup>三</sup>任<sup>三</sup>此<sup>三</sup>官<sup>三</sup>隨<sup>三</sup>不<sup>三</sup>抽<sup>三</sup>資<sup>三</sup>在

十七日乙酉 雨降申刻以後屬雪

資<sup>三</sup>繼<sup>三</sup>卿<sup>三</sup>近<sup>三</sup>衛<sup>三</sup>使<sup>三</sup>左<sup>三</sup>少<sup>三</sup>將<sup>三</sup>資<sup>三</sup>方<sup>三</sup>內<sup>三</sup>藏<sup>三</sup>寮<sup>三</sup>權<sup>三</sup>助<sup>三</sup>令<sup>三</sup>繼<sup>三</sup>山<sup>三</sup>城<sup>三</sup>介<sup>三</sup>重<sup>三</sup>親

馬<sup>三</sup>寮<sup>三</sup>允<sup>三</sup>源<sup>三</sup>為<sup>三</sup>世<sup>三</sup>典<sup>三</sup>侍<sup>三</sup>為<sup>三</sup>子<sup>三</sup>命<sup>三</sup>婦<sup>三</sup>賀<sup>三</sup>茂<sup>三</sup>信<sup>三</sup>子<sup>三</sup>藏<sup>三</sup>人<sup>三</sup>賀<sup>三</sup>茂<sup>三</sup>貞<sup>三</sup>子<sup>三</sup>官

人<sup>三</sup>幸<sup>三</sup>賴<sup>三</sup>信<sup>三</sup>論<sup>三</sup>大<sup>三</sup>石<sup>三</sup>親<sup>三</sup>弘

十八日丙戌 露

十九日丁亥 晴申刻許卿方有大事未刻許良方又有大事皇居

近<sup>三</sup>之<sup>三</sup>依<sup>三</sup>所<sup>三</sup>房<sup>三</sup>少<sup>三</sup>北<sup>三</sup>集<sup>三</sup>恐<sup>三</sup>中<sup>三</sup>入<sup>三</sup>

廿日戊子 晴

吉田參也余奉幣中夜也

廿一日己丑 晴

廿二日庚寅 晴

鐘倉大納言另有腫物事自明有增氣云

廿三日辛卯時雨降

大樹紋觸事以手使訪之畏承中有返者

廿四日壬辰或晴或陰

廿五日癸巳晴 請奇如例

今夜石清水臨時登定并調樂云梨廿九日

廿六日甲午晴

春日神主經負申云今月廿一日未刻當社神祇金花開云一所

愚管記 第四

二十一

融五本二三年三二年四云此奉春宮御殿奉元決三年

六月十三日親在元年八月十七日如此云可然可怪

大樹紋觸事今日又相尋云各品同解云

廿七日乙未晴

亥刻許西方有火事

廿八日丙申 陰時見日景

臨時祭河馬神覽云

廿九日丁酉 陰

石清水臨時祭也當御代初春云使白川云位資美卿庭座

云所相殿正相百里小路黃門口所宰相云余弟維家催子細

大樹建例事今日おろし系御少減云天下大木五壇

法自今能修云如法泰山府君祭云

卅日戌戌 雨降

鐘倉前大納言 尊氏 今夜亥刻覺去年五十四云及曉更所少

及也

五月小

一日己亥 陰 難賓云朝艾安云世事甚云

今夜相尋使者於相公羽林并母儀許吊云迷惑是相公

返者

二日庚子 晴

愚管記 第四

二十二

今晚大樹奠礼云於真如寺有此事一回禪宗沙汰云相公羽林仍向

三日辛丑 晴

四日壬寅 自夕雨降

五日癸卯 雨降 浴蘭湯

六日甲辰 晴

大樹初七日佛事於寺待寺行云禪侶沙汰觀音懺法云

相中將自去二日坐此寺云云句云有住寺云

七日乙巳 自夜雨降已刻屬露

入夜四索黃門來

八日丙午 晴自夕降雨終夜不休

作善如月

九日丁未 小雨

十日戊申 晴

十一日己酉 晴

十二日庚戌 晴

十三日辛亥 今晚降雨雷鳴為之聲天晴以夜屬晴

等持寺佛事如初七日之今日者二十七也

十四日壬子 晴雨降雷鳴七八度

十五日癸丑 陰

十六日甲寅 晴日出之間日遠成輪之色如虹或疑殆之

愚管記 第四

二十三

後日司天基云暈之此愛頗遲遲去年十月廿六日有以愛之

十七日乙卯 晴

三聖寺長老利沙來

十八日丙辰 雨降

十九日丁巳 雨降

廿日戊午 陰晴不定

等持寺佛事每七日前之

廿一日己未 陰

廿二日庚申 雨降

廿三日辛酉 陰

廿四日壬戌 陰午刻地震水神動之頗有聲

廿五日癸亥 晴詩所如例

女房有違例之氣召孟賴景朝臣如良藥沙治之及晚御立之沐之

廿六日甲子 晴

女房違例參殊事

今夜前徽安門院被奏遣令使在右親自上卿松殿大納言之次

有御錫行儀次所換之在內職事右少辨信重

廿七日乙丑 晴未刻許少雨即晴傳聞所或電降之

等持寺佛事如例之

廿八日丙寅 晴

愚管記 第四

二十四

廿九日丁卯 晴善賢寺敘佛事如例

傳聞今日故大樹月忌佛事於等持寺宗門之沙汰之

六月大

一日戊辰 雨降日蝕不正現之

二日己巳 陰晴不定時降雨

南刻地震有聲龍神動之

三日庚午 晴陰未定時降雨雷鳴

丑刻女房平產男

四日辛未 晴

去夜鎌倉大納言贈官贈位事於宣下之左大臣從一位之上卿

權大納言忠嗣卿大内記秀長作宣命位記等少納言信家持  
向位記宣命等於持寺於位配前讀宣命宣命以下注右  
詔書如此

詔德高者餘芳永傳功大者遺烈遠覃舊史之彝範斯著景聖之格言聿宣故征夷大將軍正二位源朝臣信同金石操比松筠扶鴻化而立賢行久脩朝（羽）翼掌帟旅而振兵威專爲國之介牙是以辨三隊玷軼雲臺（四）將之薦躅（提）六軍忽鎮押管一万里之風塵思其徽猷益加褒章故可贈左大臣從一位庶錦官階之崇弼武昭泉壤之幽冥普告遐迩俾知朕意主者施行

延文三年六月

愚管記 第四

二十五

宣命如此

天皇我詔旨良万故征夷大將軍正二位源朝臣本詔信勅命止

乎聞食<sup>止</sup>宣頃間身勞<sup>止</sup>所聞者行<sup>天</sup>何日何時<sup>加</sup>病平<sup>止</sup>无

暮尔待賜問尔我朝廷乎弃天他國乃不知處尔罷返止出聞食

天  
驚賜<sub>比</sub>悲給<sub>比</sub>大坐<sub>須</sub>大命坐<sub>久</sub>詔<sub>久</sub>是以左大臣<sub>乃</sub>官一位

乃冠手贈給以崇賜市天皇大命遠聞食止宣

延文三年六月三日

位記如此

中務念功惟深懷德即舊征四夷而威略之聲著方外焉撫萬民而具瞻之仁被遠邇矣追聞徽音彌增哀慟宜添瑩渙於逝

水式加寵光於幽泉可依前件之主者施行

延文三年六月三日

中務卿

從五位下守中務大輔臣菅原朝臣富長宣  
中務少輔從五位上臣藤原朝臣匡範奉行

正二位行權大納言臣 長光

正二位行權大納言臣 公忠

正二位行權大納言兼左近衛大將臣冬通

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言藤原出羽按察使臣實繼

愚管記 第四

二十六

正二位行權大納言臣 良冬

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣 忠嗣

從二位行權大納言臣

正二位行中納言臣家信

正三位行權中納言兼左衛門督臣公直

正三位行權中納言兼左近衛權中將臣師良

正三位行權中納言臣 兼定

正三位行權中納言臣 實春

權中納言從三位臣 長顯

權中納言從三位臣 公定

權中納言從三位臣 仲房

權中納言從三位臣 實時等言

制書如右請奉

制附外施行謹言

延文三年六月三日

制可

月日辰時正四位下行大炊頭兼大外記中原相臣師茂

左中弁時光

關白從一位朝臣

愚管記 第四

二十七

從一位行左大臣相臣

從一位行右大臣相臣

式部卿 國

正三位行式部大輔兼左河掾守家倫

造東大寺長官參議從三位行大藏卿兼左大辨阿波掾兼兼綱

皆贈從一位源朝臣尊氏奉

制書如右符到奉行

從五位上行式部少輔豐長

大錄

少錄

少錄

延文三年六月三日夜

五日壬申晴 等持寺五七佛事云々

六日庚酉晴

春日神主經負死玄替權社主成家祔補云々仍勿并日孟神  
供牧務事云々今奉行云々所作付也元經負事云々云々大略付  
神主奉行云々注必云々然也

七日甲戌晴

八日乙亥 晴 作善如例

九日丙子 晴 申剋許小雨不及濕地

愚管記 第四

二十八

十日丁丑 陰時々見日景入夜而陰

十一日戊寅 晴

今日於等持院暑陀羅供云々導師三寶院僧正光濟云々大  
方禪居云々修云々

十二日己卯 晴

等持寺佛事當六七日

是日參狀於關東左馬頭并畠山修理權大夫入道許狀辨注事

大樹師事醫入繼殊更以使者云々仍他事初後信云々

六月十三日

右大臣 判

左馬頭殿

十九日丙戌晴 深更地震  
淨明寺殿所佛事於年

牛一頭引進座主官先日休有牛命也東安寺可有被逐好養之

生料也

丹日丁亥 陰晴不定

廿一日戌子晴

廿二日己丑晴

廿三日庚寅 夕立

後淨妙善教佛事法事讚如例在於覺空上人本房行

愚管記 第四

余若聽聞所行向也

今夜尾張左衛門佐入道心勝爲武家使者參向弟鈍龜駕ハ

葉東牛童者騎衣雜色三人各具一若堂上人直垂袴馬之大

樹贈官贈位事畏中之為奔疑敢仁之名被呂黑之仰德

有出所即退出

廿五日壬辰晴詩歌如例

廿六日 癸巳 陰

今日議定開內勤修寺前大納寺經顯中門前中納寺宣明

等祀儀主<sub>主</sub>板大樹<sub>五</sub>旬<sub>一</sub>間被<sub>一</sub>園<sub>一</sub>凡今年初度

廿七日甲午 小雨



廿八日乙未 陰

廿九日丙申 陰

卅日丁酉 晴及晚雨降

六月後如例 陪膳藏人勘解由次官行知

彼陪膳在年羽林一向勤之陸不之能九家月勤仕不能之右勿

論之且嘉禎三年六月後陪膳前筑後守仲國相臣勤之

延文三年

七月小

一日戌戌 晴之雨降

二日己亥 風吹雨降入龍珠基

愚管記 第四

三十一

三日庚子 雨降

四日辛丑 陰

五日壬寅 陰晴不宅 牛一頭引進梳井二品親王休有甚勤也

六日癸卯 陰晴不宅 小雨降

七日甲辰 晴 乞巧真如例年

禁裏有侍所會弄給愛之舞之

八日乙巳 晴 給口仙善如例

月犯心中央星 天子星 七寸許之

九日丙午 晴

十日丁未 晴

十一日戌申 晴

十二日己酉 晴

十三日庚戌 自曉更雨甚降已刻見日景

十四日辛亥 晴

十五日壬子 晴 未刻許地震

亥刻月有暈三重之其色赤黃白目天所示也

十六日癸丑 小雨雷鳴

十七日甲寅 晴之見日景及晚雨降

十八日乙卯 陰晴不宅及晚小雨

十九日丙辰 雨降夕雷入夜又降雨

愚管記 第四

三十二

廿日丁巳 晴 戌刻暴雨雷降

廿一日戊午 陰晴之小雨

廿二日己未 晴

丑刻許下迄武士羣動之於尋子細之亦仁本右衛大夫義

長之土岐入道大膳大夫賴康於私會合有口論事多方致用

者之然而喜跡之落居之

廿三日庚申 晴

午刻日有暈同日太白經天之由案司天所示也日月暈今

年及五之及九可恐之信然如無度依降雨消了神妙之

廿五日壬戌 風吹雨降 晴如例

廿六日庚辰 雲霧漸收天氣屬晴  
廿七日甲子 晴今曉月犯太白一尺七寸同時月犯填星度六寸  
廿八日乙丑 陰  
廿九日丙寅 陰

八月大

一日丁卯 陰 例重寶等卷所之御鞠五進禁裏及晚法下  
御鞠五進禁裏三付和沙之先所也  
御進之先所也

二日戊辰 雨降

三日己巳 晴

四日庚午 少雨

愚管記 第四

三十三

先母禮左角今日玉明後日素龍如野社

五日辛未 晴 向新殿冬御影中有一

六日壬申 陰 戌刻月犯心宿中央星天子星一二寸許寅刻太

白填星二星合三

七日癸酉 晴

八日甲戌 晴 作善如例

今日於菩提寺有十種供養事三日素於太子堂所書如法經  
三導師房仙傳正俗人誦曲三相公羽林有聽聞三

九日乙亥 陰入夜降雨

武家奉名贈左相新七僧法會三於菩提寺有此奉僧名小

傳名注日於寺  
注名

進之紀美座云御和殿大納言日野守如殿上人責首以下  
七八人向三當日自武家相催三  
七僧法會僧名

左方

講師 前僧正房仙

三礼 法印權大僧都俊豪

散花 法印權大僧都房聰

題名僧

法印權大僧都心榮 志明 教祐 隆昭

權大僧都聰親 慈俊 權少僧都性快 大法師憲尋 長聖

愚管記 第四

三十四

右方

咒願 權僧正慈能

讀師 法印權大僧都澄俊

唄 法印權大僧都隆曉

堂達 大法師房深

題名僧

法印權大僧都顯猷 尋惠 聰海 權大僧都長驗 靜威

長玄 權少僧都兼覺 大法師良俊 賢清

十日丙子 降雨午刻止

武家今日向菩提院為修佛事凡歸路處亦所見也彼百

相當明日而為相公羽林表日之間佛事不今日結願

十一日丁丑 晴

今日釋奠波心宮座上卿權大納言忠嗣卿

後開松殿大納言織所芳之男外能奉向權并親顯相后大外

記師茂親后不奉向難敷初相待通以不奉未明祭初獻助友

師國執行的依奉行懈怠釋奠延引之皇師茂助之

奉行孩可之說記

十二日戌寅 陰入夜雨降

今夜被行除目之任人記表

先之鑑倉宰相中將義詮卿左馬次基氏復任上卿万里小

愚管記 第四

三十五

路中納言仲房以辨忠光朝后

去曉太白犯右民角星

除目任人

權中納言藤原兼綱

奏議孫時光

左大弁孫經方

左中弁孫保光

右中弁孫忠光

文章博士茂時親

宮内卿平惟清

藤隆家

右大弁孫時光

權左中弁平親顯

左少弁平行時

左近中將孫房經

右兵衛督孫隆家

自余難任等略

從一位藤原經顯

從二位孫家倫

正三位藤隆宗

藤親長

從三位菅馬羽

四五品略

資英王

藤師良

十三日己卯 晴

愚管記 第四

三十六

今夜左少弁行時朝后奉中慶 勸修寺大納言一不事以使老奴

i

十四日庚辰 小雨降

十五日辛巳 陰入夜月明

放生會上卿不奉 奏議右兵衛督隆家朝后左少辨行時朝后

等參行 次將右少將親忠

月犯彗星 中司天產不

十六日壬午 陰及晚房雪

駒牽延引之國之河馬閑急之故之在年公事於中如此尤

可嘆鄭名乎

十七日美未 申越以後降雨

十八日甲申 終日雨不休

十九日乙酉 晴

廿日丙戌 晴 今晚太白犯軒轅宮女主星 二十四日

廿一日丁亥 晴

廿二日戊子 陰 終夜雨降

或人云四案前亞お 陸薩被召加議定衆云

廿三日己丑 雨降

鎌倉守お中將愛物去夜有產事男子云彼女性ハ幡法

師息女云去年生一子 今年又如此珍重云云使老老云

愚管記 第四

廿四日庚寅 晴

去十九日前相國息 お種中納言 前左馬門督實世卿 年五十一於南宮 年

年來從南山也女房雅為殿親先年社來此亭云時依お圓云

命云為大納言 實夏子云被納云云仍種服云後也

廿五日辛卯 未刻以後陰 詩哥如例

傳聞り果由貴首お福後領云中風少云就上首被作親顯

朝右林宮事志先朝長云云云云且云正和年中親時資

名お卿由貴首時親時所為上首後領資名云云云

廿六日壬辰 晴 或人云前右父并守お俊孝朝長云有 勅免云武家執奏云

今晚月犯填星并右氏角星云

廿七日美巳 雨降

今晚月犯太白云云

廿八日甲午 相召雨降

廿九日乙未 陰

卅日丙申 晴

向船檣殿拾庭前栗

九月小

一日丁酉 陰

為藏人以來右お湯為人共着端線後衣袴駕小八葉車右中

愚管記 第四

廿二日戊戌 晴

廿三日己亥 晴

伏見殿明旦云有所事西郊懸牛云儲法金剛院邊云云為

四條大納言云云被作下云云被召云云云

四日庚子 晴

今晚寅刻地震龍神動云云

傳聞法皇御煩憂御云云仍有御事凡當時御坐暖帳小倉

也被御坐所云云不入御云云云臨幸近邊所有被被呼食云

進上松茸於禁裏納小長積二合自先云御時每年被召云云

又每秋進一

五日辛丑 朝陽降雨午後局霧

四條黃門送書狀云法皇自去月廿七日連例以來一向昨日仙  
洞御幸推野山進焉云實ハ近邊比丘尼庵ニ法皇御  
御事令以知申入禁裏了乃晚前右大臣宰相俊成朝臣  
東余お陽

六日壬寅 陰

法皇御幸可成存之頃以時朝臣中入西郊仙洞御幸林  
寺ニ便軍中若くは多中小倉ニ法皇ハ御心神憫然と  
不及申入新法皇以乃御同宿之仍中入之乃御使宅西奉主

愚管記 第四

三十九

此亦有振宅名免東存之凡多うらふ被作侍者僧ニ彼  
僧云自去月廿七日御連例自升乃乃御溫氣以外出此所病氣  
又重御之乃如醫師多良某ニ云自去夜御之乃神出表ニ  
神ニ

七日美卯 陰

今夜少房之除服事不細見云廿四日記

八日甲辰 秋東微雨今朝局晴

明日仙洞自西郊之有御幸東亭御熱牛うし御北野伏  
拜之御被作中御被之今日於三福寺修持事讚為故宮  
如政而進善每在事也余為聽聞所行向也

仙洞御幸  
事ニ

九日乙巳 夕雨降

平座上卿松殿大納言亮朝臣泰儀右兵衛督陸家朝臣少納  
言秀長并行時朝臣勅命云就ニ初獻ニ秀長勅命二、  
行時朝臣勅命ニ以初時朝臣ノ流記ニ

十日丙午 晴

桃林一頭引遠一品許連ノ所望ニ後也初時朝臣書札云凡不  
連尋常大納言ノ禮也名家ノ傍軍所存受他ノ禮ニ  
院別當事被作一品今日在古書冬仙洞 萬事ニ後以  
推升ニ凡名家軍居此職事尤進也元洞院大納言在  
生仁一品老元執權也於今老執權未至生仁凡

愚管記 第四

四十

十一日丁未 雨

御幸不及被作催料且聞急ニ云ニ相家兼解ニ神ノ

新ノ

十二日戊申 雨降

今夜武家奏同南部同事生次大名事同執奏ニ依有在  
名今度不可出微言

十三日己酉 雨降 終夜多和源聯句興

十四日庚戌 雨滴不休

十五日辛亥 晴 今夜月乳黃盛ニハ許ニ

十六日壬子 晴

大藏問事有種々説子細難參予獨

十七日癸丑 晴 今晚填星犯軒轅宮女主星 七寸許因時

太白凌犯太微宮右執法星 五寸許 中司大星所系也

十八日甲寅 晴

十九日乙卯 晴

子刻許乾方有火事法蘭安居院邊

廿日丙辰 晴

今晚太白又犯左執法星

廿一日丁巳 晴

廿二日戊午 晴

愚管記 第四

四十一

廿三日己未 晴 自今日三箇日念誦

廿四日庚申 晴 今晚太白犯太微宮東蕃上相星 七寸許因

時月犯軒轅宮女主星并填星 三寸許又受火以成連續之惑

廿五日辛酉 雨降 東北野社

清歌如例

廿六日壬戌 雨降 被行難訴

廿七日癸亥 小雨 胡弓見日景

廿八日甲子 時雨

陰靜法師與崇宣上人論事文書云一品許為病意見也

自仙洞以四葉前中納之禮作云小倉殿奉月二日所湯也

醫師祿馬一文之引之自被作下今中生之引之也

今日改略之上所奉中納中納中仲原卿

廿九日乙丑 晴

有傷湯是勾與

十月大

一日丙寅 晴及晚時雨降

平座公卿右兵衛督陸家親后一人行之明日祿馬自今

之引進中納作下之引即引進中

二日丁卯 晴時雨降

法皇御惱之後始雨湯

愚管記 第四

四十二

三日戊辰 晴

仙洞今日密之所奉西芳寺之所懸之引之也

被作下令中五五之引

四日己巳 晴

五日庚午 晴

傳聞今日內府奉肉之着衣冠駕六葉車造牛飼前駢二

人隨着不召具之雲客一五尾從次奉勸之之行糖之俸為

左先取卦太不被甘之拜賀以出仕能錄事志猶懷何事

六日辛未 晴

例念誦自今日三箇日始之

七日壬申 陰 及晚小雨終夜不休  
八日癸酉 晴

本幡僧徒某有真言傳文事受了獻小布施即被淨令夜  
夕被宿者也

九日甲戌 晴

本幡僧令知又被某勅時并茶了被酒

十日乙亥 陰

武家管帳 事之為相模源清氏之昨日以信源判  
官入道導興作之 日來有程之浮沈

十一日丙子 陰 入夜月明

愚管記 第四

四十三

十二日丁丑 晴

深心院法為事一品之為延給文書被狀云法為事之被  
見所陳之 四條大納言之 依為隆靜法下緣者申子細

另云庭所沙汰被 中宗室上人 之 然者被隆靜一品  
外為祖父隆康卿兄弟也 之 為延給之 外限何 及延給所存

延給文書於云庭所詔為同篇者一事 為被沙汰而之 然之可  
被相待被落居於被也 之 尤之 然之

入教四條大納言之 東面法之 後沙汰

十三日戊寅 晴

深心院法為事之 光明寺之 各別之 被沙汰之 庭被

經沙汰上者落居以前為私成殿難治之 中作所人等

十四日己卯 晴時 時有雨

十五日庚辰 晴

十六日辛巳 雨降

去夜被沙汰之 之 関書之 之 大僧以下被任之

十七日壬午 雨降

向新殿禮之 許參御影中前

十八日癸未 晴

十九日甲申 晴

廿日 乙酉 晴

愚管記 第四

四十四

西谷法為事之 先日成敗之 被殊更被載所 及書之 給之 中

隆靜法之 之 仍之 書之 之 中 作行事之

廿一日丙戌 陰 晴 亦也

廿二日丁亥 晴

左近權為大將奉行令之 被極替之 之 先之 當府年領事之

之 而彼年領為服假之 曾大將作廳以 大石親之 之 櫻一案前

関白亭本之

後關大將付檣樹被奏和歌之所 延事之

富家殿内 多田卿山守 保人連 之 先之 惡作供僧之

亦件事 猶不為 其 為 恐之 自供僧中 為 使者法之



實賢來相攝之身法作會

廿三日戊子 未刻已後小雨

向寶相院培仁修正房為見紅事也被勅小盃酌台及晚歸家

今夜造太神宮山口木下祭日時乞一上柳万里小路中納一

從四位下安部朝臣有陸被任信陽一年一尤一治太早一

廿四日己丑 晴

廿五日庚寅 陰晴一乞一祈雨如例

春山聖社

廿六日辛卯 晴

廿七日壬辰 晴

愚管記 第四

四十五

廿八日癸巳 晴

廿九日甲子 晴

卅日乙未 晴 時寒雪慘淡

十一月小

一日丙申 晴 春日祭迎引一

二日丁酉 晴

三日戊戌 晴乃停雪雨即休

四日己亥 晴

五日庚子 晴乃晚陰

六日辛丑 晴未斜陽霞占雨交降

執柄可有禪通一中有風雨

七日壬寅 晴

少將者遂相召被宣下中將一賀老父大納言入道許一等

自慶一中有凶冬

八日癸卯 晴

每月今日齋食也請我比丘丈八齋戒自今以後每月一有

事送種德布施廟風情也

九日甲辰 晴 一昨款一成刻

月犯歲星一天八九一寸許一去夜又月凌犯

星一天八九一寸許一月行一度為相續頗多中司天卷一不可忍

之慎歲星余南年星也

愚管記 第四

四十六

十日乙巳 晴

十一日丙午 晴

仿守春日祭修心一此二五年一而冬法祚為難測一影

十二日丁未 相間晴一後晴陰

十三日戊申 陰晴一乞一小雨

吉田祭今日迎引一不知其意

十四日己酉 陰

大藏事所出微望也一願吹舉一由今日令武家一亦別

事當於常時藏人并信蓋為使付身一有共沙法一也

廿六日辛酉 晴

仙洞今日甚所伏見殿之依呂車并懸牛進之

廿七日壬戌 陰晴不定及晚雪散

今日小女有魚味事諸膳右少將羽長相召役送宗範 匡

先手長侍以景行方 女房於簾中取侍每事如恒事の家

司信也

廿八日美天 雪降

廿九日甲子 陰晴不定時雪散

今日大原野祭也余奉幣中後也

十二月大

愚管記第四

四八

一日乙丑 晴 日陰正現五六分

二日丙寅 自軍更雨甚降終日不休

三日丁卯 晴

是日武家評定始之相模守清氏管領以後初也如一献

珍用者以外大替之

四日戊辰 晴

吉澤惠仁上人來聊談宗室清土宗人也

五日己巳 晴

六日庚午 晴 自今日之十日忘讀今月分

七日辛未 晴

十五日庚戌 晴 月不正現代物之餘飲

禁裏被始句所樂每句五日之今夜被始之頃乃被造樂所

常不分清濁之方子之不能令記

十六日辛亥 自未斜天陰及晚少雪降

十七日壬子 陰

大原野祭延引次支干之如在之禮奠一向雪沙法隆寺代不

可能之也

十八日美丑 陰 成刻地震

十九日甲寅 雨降 自軍更之向雪降散

仙洞御幸梅津之依呂八葉車進之於道駿國師建立之

愚管記第四

四十七

寺邊社立陽福門院之內塔中御事件所歟

廿日乙卯 或晴或陰入夜雪降

廿一日丙辰 陰及晴時見日景

廿二日丁巳 早旦微雨午後天晴

今夜於南寺被行法事後上皇令彈琵琶給之陽福門

院所佛事之所正廿八日也

廿三日戊午

廿四日己未 自夜雪降積地五六寸許

廿五日庚申 雪降

今日吉田祭也余奉幣中後也 待飲如例

八日壬申 晴 持高武成寺如去月

今夜鍾倉宮中將位忠亮大將軍除目云除書注意

刑部權少輔藤原懷衡

大膳亮藤原行景

大中臣敏志

侍醫和氣邦成

征夷大將軍源義隆

隱岐守藤原廣忠

肥後守賀茂重友

左衛門尉藤原助義

源景成

紀久國

愚管記第四

左兵衛尉 源康武

右兵衛尉藤原時貞

延文三年十二月八日

九日癸酉 晴

十日甲戌 晴

遣專使於武家賀大樹拜仁事

十一日乙亥 陰乃曉降而入夜雷雨

泰北野社

十二日丙子 陰晴不定

十三日丁丑 晴

十四日戊寅 晴

十五日己卯 雨降

十六日庚辰 陰晴不定时雨濕

十七日辛巳 陰時見日景

十八日壬午 晴

十九日癸未 晴

廿日甲申 晴

以今寒氣殊甚

廿一日乙酉 晴 假當年吉書奏

是日吉書奏也 入夜以權并親顯相來作可佐奏中余相逢

愚管記第四

五十

承之 能一上專而直 下日時勘文 以勘文者不可 余結申之使下件

并親顯相在退余即泰内經床子座余右中并忠先朝右左

大史量實在此座余向忠先相揖過其前者陣與座右大弁宮

相時光朝臣同者座大辨同氣也余目許大弁即起座就床子

見文 此間余起座移者介座令官人裁執如例先有陣申文代

始初者吉書奏之時或有此事仁治例又如此云大辨者座申云

奏余目大弁左顧史捧奏杖入宣仁門代跪小座余目史

稱唯起束就執奉文余目易左按取文 用左右 置前史揖作

持杖微拭次余披見文先解結緒二倍引折置文右方 ワナノ方

次開札紙延張右方 先上 推遣文於札帛右端延張左方 次一 見

之通礼帝左端之通次牙如此之礼帝结文中

端文下方史置杖元文披礼帝取一通披之中曰儀一之文之板

余不居史余不居史奏文取加杖退出史欲起一問次大升更起座就床子

見文之通礼帝先史又奏文余披見作法等併如先仍不更記

史退去之後余同直辨於大升其同直一升大升中云右中升供余以

官人召升升潤右中升志光朝臣奏職余作云内覽并肉覽了歸來

余之奏中便以併升奏儀奏之由升潤奏頌而升還來作中余會

之升返次余起座左迴經小庭并立都東參進弓場代各名門亦

左迴史跪余右方奉奏杖余拾笏執杖左迴各名門代

右迴昇自青櫨門代直東行玉所殿右迴南行玉所殿又東

愚管記 第四

五十一

行考南面西居簀子先左膝深揖頌起揚名敬折曰龍顏天皇

目給余深屈唯起揚左足東進自内座西間中央漸屈

行次升經因座長押之間當所前跪先左三度許昇長

押先左居定先居定取迴杖就奏文杖南主

進行兩三度升居左迴向乾起先左西行先左初到内座西間西柱東

程左迴更東行跪因座西南取先左取先左深揖

乍持杖不直主上御覽了置文於内座端給余置杖不

於因座右本儀鳥口向所前縱置而里内簀子不揖返不起先攬

合神座經因座西上如初儀昇長押先左更儀先左

合神座經因座西上如初儀昇長押先左更儀先左

始少進寄老押上居定龍居少乃元文左右子進行長押上下左迴

若因座儀如初但今置文於座前脚刷衣衫解結緒下

結引延天其上開表老參展張押表文一通於表老參展張

一通頌向座下方開押合向御前更披讀申曰其國中志

猛々ハリテ不勅ノ倉ヒラキカユト申セル事次又押合儀天

氣主上目給余御音稱唯音年老文更無勞左方一通結中

了如年老無紙結中有下結以左手元文以右手元杖加文上深揖

起座左左迴經本路初自青櫨門代下先跪當殿上以杖

出各名門代出門為三少左迴立本所各名門代史進來跪余右方

余返給杖并文以右子按笏各名門代經本路歸着陣史來

愚管記 第四

五十二

直就職奉文如初余取之置座前解結緒置右如初次元礼帝

以左右子延之置板表端西史置板取無勞置職前次余元

文一通小披見如元老之下賜史以左子史元之開儀氣余作

云申ノニ史稱唯老文一通皆如此賜了後史更披文一枚

申云成り了文三枚余不居史不稱唯出召余元勿次元出扇十

枚許ヲ開テ攬老紙檢於板表端史取紙檢結文云云

次有公卿分配事余以官人召外記大外記師茂朝臣老若裁

作云云卿分配例文祝持表老外記稱唯退外持表老舊分配一老今

老分配書折紙等入舊六位外記置硯分配書大於泰議座余令

大升書分配書大大升書分配書大老礼紙持表與余見了元出存書

文書等並與方入新分配於此書以職事內覽奏聞返結次余等即記  
師我相名者我全加入文書等於此書給外記作告迎之  
記云舊稱准區次六位外記撤殿次大升起座余起座出後宣仁  
門退出

廿二日丙戌 晴

廿三日丁亥 晴 有瘴氣

廿四日戊子 晴

依候氣京官除目執事雖系之冬迄事ハ豫事ハ

馬一之引送德大寺中納言許先日有系方外別書狀云候之中有

返報

愚管記 第四

五十三

廿五日己丑 朔日雨降而自午起屬晴

侍從如例

廿六日庚寅 陰申起許屬晴

執柄事今夜武家執事三今夜臨時起坐并中馬所記三

廿七日辛卯 晴

今夜前相國東内之當所代初夜出現

賀茂然三先日難蒙催申中細

廿八日壬辰 雨降

廿九日癸巳 晴

今夜大内臣經教之蒙開白詔之新前儀也并多ハ豫事以右

中并之亦如此所注送也

廿九日晴今日開白詔宣下也并上卿松殿大納言志朝卿着仗  
座與志先宣下曰以左大臣為開白今作詔書以開白左大臣為  
藤氏長者官中難事先觸開白左大臣今奉行次上卿移座  
作大内記秀長今作詔書就右場奏聞並清書主替之略儀  
有所畫如例次上卿御陣召中務依不系以少外記師興侍賜  
次召并志先參進承藤氏長者并内覽事於床子座作太史  
量實次召大外記師我相召作開白并氏長者事次志先又作  
云開白左大臣以左右近東府生各一人近衛各四人為隨身兵仗  
開白左大臣乘牛車今出入官中次上卿召大内記今作勅書

愚管記 第四

五十四

單清書奏聞之後召着陣召六位外記如先侍賜之召大外記  
作多豫事次志先作上卿曰從一位藤原朝臣如元石機内覽  
之從一位藤原朝臣隨身兵仗如元次上卿召并作之志先宣下大  
夫史召大外記作兵仗予被彈大納宣下元德例之并内覽事  
或別不及宣下牛車兵仗事後日被作之先例若不同凡而云々  
體同之時宣下之宣並内之自開白飯衣給之今夜以傳正桓景被  
任天台座主同日傳文先之新有少傳元文保等利花院殿詔宣  
下同時被行傳事三

卅日甲午 陰

愚管記 第四

愚管記第五

文學博士坪井九馬三校訂

日下寬

延文四年己亥

從一位右大臣 年廿八

正月小

一日乙未 天晴

未刻有園園事 自舊年有歡樂之氣 問四方祥年亦等略之

頭右中弁未

傳聞節會內辨洞院大納言實夏卿之新博陸今夜被奏慶

之殿上人二人連軒尾從右大弁宰相相伴之

愚管記第五

二日丙申 天晴

園園如昨日 遣專使於武家賀新年 子刻許南方有火事

大炊御門町邊之

三日丁酉 晴 鏡藥如例 左大史實實來

四日戌戌 自夜前雨降已刻見日景

年首沐浴如例年

五日己亥 晴 敘位議執筆洞院大納言之 外記持來十年勞

留文也信管如例

大外記師茂相長春結白麻十帖

六日庚子 晴

七日辛丑 雪津微雨惡風如矢

白鳥節會內弁松殿大納言外弁三人之 垂御簾出御帳中  
省略條之 同去年之 後同所膳以前入御之不担任事凡

八日壬寅 晴 今日寺持齋受戒等事

入夜增仁僧正來余對面

九日癸卯 天晴風和有春之氣色

十日甲辰 晴頗有和暖之氣

自中更雨降雷鳴數聲

十一日乙巳 午後風雷

今年始出御向新殿祿臣同車左馬門尉為繼立若今夜初

愚管記第五

始也上院陽以有隆相召行河原祭

十二日丙午 晴

藏人弁信並覽政所吉書

十三日丁未 晴 小兒等有戴餅事

右大弁室お取右中弁小未

十四日戊申 天頗快晴

十五日己酉 陰入夜雷鳴雨降其後於夜大風

十六日庚戌 陰晴不常風猶不休踏哥節會內弁開白先者

外弁內大臣以下七八人 簾中出御省略條之 如去年開白先者

陣之 內府今夜拜賀也余等見物殿上前致五人 以下六位 地下

六人各庵從公卿

傳聞開白着陣儀座上與端座一同放開白座開白自與座未

被着座即起座命會吏着端座或於直廬問諸司具否

此諸卿皆上後開白讓內升於洞院大納言退去內大呂 早出

以行並行知之說記之

執政人奉仕節會內辨例

貞信公小時務政左大臣

承平二年正月一日

同三年正月七日

同四年正月一日七日

愚管記第五

同五年正月一日

知通院禪院小時務政左大臣

天仁元年十一月廿二日大嘗會辰日

後光明寺攝政小時務政左大臣

文永十二年正月七日

茶院利義院開白小時開白內大臣

文保三年正月十六日

一條前開白小時開白內大臣

曆應二年正月七日

十七日辛亥 陰及晚雨雪交降

十八日壬子 天晴風吹

十九日癸丑 晴

今日密有作文事云卿文人新中納言並經卿

右大弁宮和時光卿東極三位行光卿刑部卿長經卿殿上人

以右中弁忠光卿占以下六人先有連句與次誦詩題云榮樂

乃春久心字 絕句也題東極之位所出也讀師新中納言誦師少

納言信家也

廿日甲寅 雨雪霽

廿一日乙卯 陰晴不常時雨澆

廿二日丙辰 晴

愚管記第五

四條前中納言外付少將隆仲外付末

廿三日丁巳 晴

洞院大納言信兼於女房方勸小孟酌入新詩降

今夕議定始云四條前大納言隆茂初參云

廿四日戊午 終日雨澤

廿五日己未 申刻以後屬霽

詩哥如例 參聖廟

廿六日庚申

自半夜降雨今刻止終日晴陰不常

傳聞禁裏密詩中會云



廿七日辛酉 暮天高晴

新殿始君達禮奉勅小膳如例年

廿八日壬戌 陰及晚小雨

廿九日癸亥 陰

禁裏初祭所會云々

二月大

一日甲子 小雨降

二日乙丑 雨降

三日丙寅 晴

四日丁卯 雨降

愚管記第五

五

初年大原野祭也延引云々

五日戊辰 朔間降雨自未刻雲雷漸收日光初見

近日洞院大納言之被出幕下所望狀云々彼等案令察

被見之競望云々詔尤有主謂此但屏達之留時宜尤難測者乎

六日己巳 晴 有掛勾與子勾始也

七日庚午 晴 乃晚雪飛散

八日辛未 晴 齋食更戒如例

今日禁裏有史記御決義云々東極之位讀云々

九日壬申 自夜前降雨已刻止未起屋雪

春日祭延引云々

十日癸酉 暖日融云々

十一日甲戌 晴

十二日乙亥 晴

有掛勾與子勾肉也

十三日丙子 陰

十四日丁丑 陰

今日釋奠云々被正宴座依神樂事也右大弁等相左中辨也

奉向云々今夜禁裏詩所會云々所見云々

十五日戊寅 陰

十六日己卯 晴

愚管記第五

六

大原野祭也余等如例

十七日庚辰 晴未時以後陰入夜雨降

十八日辛巳 雨降

傳聞左馬以基氏相后被任在兵衛督云々去月廿六日宣下奉

行以右中弁上卿洞院大納言鎌倉宰相中將兼任武藏守

去三日宣下在り同人上卿按察以右家武家申請

十九日壬午 雨降

廿日癸未 陰

廿一日甲申 晴

廿二日乙酉 晴 自今日之間日會禰如例

廿三日丙戌 陰

相持于清氏祖母去夜他界之老藏人次官行知市之珠畏  
存之他國者之

廿四日丁亥 雨澤

老母移居自今日五箇日被去龍小野社奉來敬信實化者也

廿五日戊子 晴

詩歌如例 泰小野社

廿六日己丑 晴

有聯句與之句内

廿七日庚寅 晴

愚管記第五

七

未刻已後陰 仲父八幡護國寺奉尊之舞流汗之自社家  
注達公家武家之去廿二日清水寺御帳中より汗流出開  
見之雲門正舞三面落之古今事多倒之之忘之

廿八日辛卯 雨澤

老母移居自聖廟在向

廿九日壬辰 雨澤

自禁裏被下所去四書集成玉屑之校御覽之中被作下而部共

進之

卅日癸巳 晴

葉大納之長光卿今秋申慶之雲客不來也

三月小

一日甲午 晴 去夜成刻榮感犯鉞星六寸許之

二日乙未 陰 成刻榮感犯東井五里七寸許之

有聯句與之句内

三日丙申 晴

禁裏詩所會之今甚且之有所沙汰之此亦所談義所連句

等被定日之誠可謂文通之中無乎

四日丁酉 晴

五日戊戌 雨澤

六日己亥 晴

愚管記第五

八

本幡傳信來即被向葉家之

七日庚子 晴

八日辛丑 雨澤 文戒如例

九日壬寅 陰 今日天龍寺上極之

向實相院僧正房見花有蹴鞠之興右大弁言ねん右中弁小

東會者孟酌事及晚酌事

十日癸卯 晴

洞流大納之來於花前有所歌也

自禁裏被下所書之春中鞠中事也

十一日甲辰 晴

十二日乙巳 晴

仙洞所事六條殿依召進門懸

十三日丙午 晴

有聯句無 千句丙午仙洞主所伏見殿如明之達淨態

今日又被下 勅書

十四日丁未 雨降

十五日戊申 晴

十六日己酉 晴 未別地震

以并來云一上事之有所不知中開白之巨者答承之中事

今日并并行時知在之間之須知進也

愚管記第五

九

十七日庚戌 晴

十八日辛亥 雨降

十九日壬子 晴晴不定及晚雨降

廿日癸丑 晴

廿一日甲寅 晴

廿二日乙卯 晴

有聯句與 不句丙

廿三日丙辰 晴及晚小雨

自今日被始行縣召徐目執掌肉大臣之申判評大外記師

茂朝自來給召卿結勘文

余年給申文付召行殘事 以推并親承召在

廿四日丁巳 雨降 除日中夜也

廿五日戊午 雨降 除日入眼之

海詩題云林園春漸深 右字 先有連句無 三十初 每月詩歌

如例

任人如此

推大納言藤原家信 同師良

推中納言藤原基隆 同俊冬

同經方

泰議 藤 實尚量

愚管記第五

十

左大弁藤 時光重 右大弁藤保光

左中弁平 親顯 推右中弁平行時

左少弁藤 資定

自余難任略之

辭退

推大納言良冬 推中納言惠經

余年給申文如此

從七位上大中臣親良正次

望諸國掾

右當年給二合所請如件

延文四年三月廿三日 從一位行右大臣藤原朝臣道嗣

廿六日己未 雨降申刻屬晴

廿七日庚申 晴

廿八日辛酉 雨降

廿九日壬戌 晴

向新殿為見藤花蓋也頗多此類也及晚而暮

四月大

一日癸亥 晴

平座公卿 右兵衛督隆家卿一人乘入

二日甲子 晴 有鴛句無千句內

愚管記第五

三日乙丑 晴 今日又有鴛句無千句內也

四日丙寅 晴 新中納言俊孝卿來

五日丁卯 陰 夕雨降

六日戊辰 晴

七日己巳 晴

八日庚午 晴

先公所忌日也於之福寺佛經供養一夜別時等如例年

食受戒如月

九日辛未 晴

據右中升行時相占申吉書見了返給作之奏聞之申在奏奏

聞以後直下之略儀也

後思一上以後未通者降下吉書之奏之於此可尋

十日壬申 晴

賀茂祭女使料牛之請之申之位局承之令許源卿

十一日癸酉 晴

十二日甲戌 晴

今日據東御親也依並日作申刻許參內直衣上給八葉車也

牛飼前詔由之衣冠上給殿上人左少將季村衣冠上給雜色兵種

次等立給

先於黑戶接見奉即被給御親於東向御座有此奏之御國中

愚管記第五

納言基隆以左大升宮時先以難波之位宗清以殿上人以右中

升忠光朝臣權右中升行時即左藏人并位黃也賀茂殿之

敏久吉平鴨祐泰祐村大炊御門諸大夫感孝被召加之除有

其與所所能今日始得見九珠珠之依召每為照列人數於座

各極事又於黑戶接見奉奏燭之時退出御家

十三日乙亥 晴

十四日丙子 晴

吉田祭也余幸幣由後也

十五日丁丑 小雨

前太政大臣今日出家之北指所芳名佛少法名空元

十六日戊寅 終日天陰相召雨降

遣使者於入道右圖并丞相許

入夜難波三位宗清以來談蹴鞠事

十七日己卯 雨降

十八日庚辰 陰

十九日辛巳 晴

廿日壬午 晴

廿一日癸未 雨降

於津被行除目 任人亦大概注意

權大納言公直

權中納言忠基 中將如九

愚管記 第五

十三

左大弁 保光

右大弁 親顯

左中弁 忠光

右中弁 行時

權右中弁賢定

左少弁 信兼

右少弁 行知

右衛門督時光

檢非違使別當

正二位 忠孝 賢重

隆持

從二位 龜定

從三位 教言

房經 中將如元

自余任官敘位難之略之

辭退 權大納言忠嗣

唐鞍依申清是伯二品許仁忠使之料也

廿二日甲申 晴

入藏藏人右少弁行知奉申慶

廿三日乙酉 晴

賀茂祭使 左少將資方自余可尋記

廿四日丙戌 雨降

自今日武家八幡之板贈左府一廻返善迎卿相雲客亦為者

座仍向之之得紀

廿五日丁亥 陰相召雨 詩哥加例 冬小野社

廿六日戊子 晴 雨降

廿七日己丑 或晴或陰

愚管記 第五

十四

廿八日庚寅 雨降

是日勅撰奏覽也為見邂逅之儀入於冬内頃白中將為遠朝

臣系先申中將慶 中門下休了參看殿上即赴座徘徊下付經

殿上後緣并樂所亦系達六位藏人懷國持撰集著於從於

年中仍事淳子也為達相召取之持參於基盤所御妻戶

前跪立直苦付内侍即經奔路退出次余依召參座盤前有

出御被作撰集余依御前集被御覽之後入御余退出

集名新千載舊時繪 繪文有組緒金物料紙打鳥子 軸

本カイヲ 表帛羅 裏後毛吉 以金泥書銘四季六卷許也

押法皇御製入申之作云重有沙汰不可入申之重治宅了不

愚管記卷五

思識事也。勅撰箱先。住吉神。調進流例也。而俄教障。  
之。武邊沙汰出來。仍為武家沙汰。而撰了。漢氏。而撰了。  
今夜。主上。之。侍。更。是。祓。曲。給。惟。秋。父。子。祓。儀。也。

廿九日辛卯 雨降

武家八幡。時。結。於。今日。結。緣。瀧。頂。大。阿。闍。梨。大。傍。官。覺。雄。  
未。始。撰。升。來。中。古。書。和。奏。慶。入。夜。以。右。大。御。來。中。奉。

卅日壬辰 天晴

今日武家。老。修。佛。事。向。等。持。院。

五月小

一日癸巳 晴。自。未。刻。陰。入。夜。局。晴。

愚管記第五

十五

傳聞。勅。撰。時。村。返。者。撰。者。許。先。例。皆。如。此。六。位。懷。圖。  
持。向。之。

二日甲午 晴

梶井二品親王。尊。胤。入。滅。年。五。十。四。夕。院。外。刻。

三日乙未 晴

四日丙申 晴

五日丁酉 晴。有。龍。勾。無。子。勾。肉。

六日戊戌 晴。自。申。刻。陰。

七日己亥 晴

八日庚子 晴。森。倉。文。武。例。

愚管記 卷五

九日辛丑 陰。時。見。日。景。雨。又。繼。而。濕。地。

紫。運。法。事。津。井。來。短。冊。二十。首。詠。

十日壬寅 晴

有。聯。句。與。今日。終。午。句。功。唐。極。之。神。也。無。味。深。唐。人。之。聯。句。  
韓。昌。黎。之。公。遂。近。其。

十一日癸卯 陰

十二日甲辰 雨降

十三日乙巳 雨降。入。夜。月。明。

十四日丙午 或晴或陰

今日禁裏。所。會。之。事。中。御。自。身。作。中。在。降。中。

愚管記第五

十六

十五日丁未 晴。乃。晚。雨。降。丑。半。刻。月。能。正。見。

自。武。家。密。之。遂。後。未。一。合。之。見。中。命。之。鎌。倉。右。幕。下。正。成。  
泰。衡。之。繪。也。此。繪。室。初。朝。之。事。給。中。先。年。以。故。賢。俊。傍。正。被。  
亦。同。仁。等。書。進。了。仍。出。來。之。言。前。被。見。中。被。命。之。殊。之。其。

無。進。之。遂。之。中。返。屋。中。

十六日戊申 陰。入。夜。雨。

十七日己酉 陰

被。下。勅。書。來。廿。二。日。御。鞠。之。事。之。趣。也。申。之。撰。試。之。中。中。

十八日庚戌 晴。向。新。殿。

入。夜。坊。城。中。納。之。後。老。卿。不。令。中。中。之。

十九日辛亥 晴

廿日壬子 晴

廿一日癸丑 晴

廿二日甲寅 晴

今日禁表句所鞠也先日依崇作申刻表自先依台系所前

頃而事始及夏燭區出

廿三日乙卯 陰

被下勅書昨日所鞠事之種之作

廿四日丙辰 雨降

愚管記 第五

十七

今依此會於其  
向後不之此  
事

禁裏詩所會也連日崇作之自入夜春角之卿甘露寺前中

納之 藤長所 万里小路中納言仲房以坊城中納言後金之 系極

三位行先所 刑部卿長綱所 殿上人頭右中弁忠光初台以下七

八人奉仍置人懷旁之後金者讀師座台海師 授弁資定相

次召諸頭人系極三位刑部以次弁大學以在胤初台也下讀

師以弁海之師連句執掌少納言秀長年額也及曉鐘區

出堅固密之儀也

余作如此

夏日同賊夏知泉石  
德一青 以心為

右大臣藤原道嗣

避暑新排泉石地水晶

官裏洗塵心玉坪導渭

濺朱檻繡閣彩床空

碧岑青狀更令孫楚歎

飛流猶入謫仙吟聖之

清處有誰會一片涼風

滿一襟

廿五日丁巳 雨降 詩歌如例

廿六日戊午 雨降

愚管記 第五

十八

廿七日己未 朔間陰未刻已後晴入夜風雨雷電

廿八日庚申 雨降

廿九日辛酉 雨降

六月大

一日壬戌 陰入夜雨降

自禁裏有所書所聯句一座被下之付金之金被作下雖難活者

極匠進又中之之金之金之金之間懸付墨進之金之金之金

二日癸亥 雨降自申刻已之系或又降

三日甲子 天顏快晴入夜法小雨已刻地震金翻之動之

今ヨリ之箇日念誦



四日乙丑 晴時陰

五日丙寅 晴

六日丁卯 晴

明後日有御幸六條殿并之入道中校作下夜先心事云々  
付行重如例

用意中

七日戊辰 晴

八日己巳 相召迄未刻局書

齊食更威如例 今有御幸延引云々

九日庚午 晴

夜半自禁裏有御書七言御歌句被下云々付進呈云々御下

愚管記 第五

十九

御務員云々任事付進呈云々為云々

十日辛未 晴

十一日壬申 晴

十二日癸酉 晴

十三日甲戌 雨降

十四日乙亥 陰晴不定

十五日丙子 晴

十六日丁丑 陰

十七日戊寅 陰

十八日己卯 初召而津自申刻天晴

十九日庚辰 晴

廿日辛巳 晴

梳井殿二品親王退修願文云々清書云々自承胤法親王被

命云々舊好不淺云々台深等云々

廿一日壬午 晴

廿二日癸未 夕立

廿三日甲申 晴

廿四日乙酉 晴

祖公御忌日於之福寺修持云々談如例奉余齋云々聽云々

早旦泰北野社

愚管記 第五

二十

廿五日丙戌 夕立 詩歌如例

廿六日丁亥 晴時雷鳴雨濕云々及濕地

廿七日戊子 晴

廿八日己丑 晴

廿九日庚寅 晴

為見泉石向津玉寺傳心房終日納涼探題和歌云々與云々

盃酌數巡及晚有就線與秉燭云々為泉

卅日辛卯 晴

六月後如例陪膳右中宿平行時初上

延文四年歲次己亥

終

七月小

一日壬辰 天晴

二日癸巳 晴 參詣水野社

三日甲午 晴

四日乙未 晴

五日丙申 陰

六日丁酉 晴

七日戊戌 晴

乞巧奠如例年 自今日被始行法勝寺御八海三近年較  
行三官山門及祈社仍行三

愚管記第三

二十一

八日己亥 晴 心中作善如例

九日庚子 晴

十日辛丑 晴

去夜戌刻月犯心宿天子星五十六寸  
計三

自禁裏有所書能拍事

十一日壬寅 晴

入款參仙洞 為奉 介度還幸洛陽三後始接見系不拜龍顏

已十十年也良久許言談及史更退出

法勝寺御八海結三

十二日癸卯 晴 未別許兩漢三及濕地

十三日甲辰 晴 民間有災旱三愁三

十四日乙巳 晴

十五日丙午 晴

自二案前開自書狀玉屑三借信三教也即也三彼是風月三  
年來更不及沙汰於連升者按羣三世以詆欺而禁裏和淨三  
句時三沙汰三為供此處被稽古連句三中此官風分果今有  
以命順三謂老學三不足三也

十六日丁未 晴 有清涼三氣

今日被行祈雨奉幣上卿乃里小路中納三并取左中并三

十七日戊申 晴

愚管記第五

二十二

十八日己酉 晴

十九日庚戌 晴

廿日辛亥 雨三及濕地屬晴

廿一日壬子 晴

廿二日癸丑 陰 入款而降

今日令知南廣義門院中三廻給三於仙洞三於仙洞三於仙洞三  
漢三高座覺堂上人引率一念偈尔勒行三四案前中細三  
陰晴令為幸三中沙汰三

廿三日甲寅 風吹及晚雨降入款風雨殊甚

廿四日乙卯 晴

四日甲子 陰時雨漲不及濕地

以并左少升平の如く次將之善記

十六日丙子 晴 以香品承胤法親王為天王寺別當今日宣  
下之 元園滿院二品親王 尊修也

十七日丁丑 陰晴不定

釋奠上卿不參 奏議右兵部將隆家卿并權并資定朝占  
本寺月不被行宮座之休東大寺神興立洛朝廷之禮儀  
於事省略頗凌遲之甚云云是之不允事之訴詔之類  
如令者各之知也

十八日戊寅 初間小雨終日之陰入夜又雨降

十九日己卯 晴 雨降

廿日庚辰 天氣如昨日

愚管記 第五

二十五

廿一日辛巳 終日天陰入夜雨降

廿二日壬午 天陰入夜雨降雷鳴

廿三日癸未 陰晴 是日景入夜雨降

自今日三ヶ日念誦

廿四日甲申 晴 自禁裏有御書被下御願句一座之付進呈

之御書被下此事之及度之不才之身宅招傍人之嘲弄也為

之御書

今日吉田社奉安置四所神神令奉就御裝束之去文和四年

山門皇居之御軍勢打入社以打破四所神殿奉進補之今年四

月以近江國矢橋庄為被料所被奉吉田社之

執事今幸神師  
關元閣總持師  
為京北方壽寺  
第廿二代塔口  
寶泉基

以神之靈豐宿於之院記之被料所神主為  
知所沙汰也

廿五日乙酉 晴 詩歌如例

冬小野社

廿六日丙戌 晴 去夕太向祀、宿身一星 如云云許所

廿七日丁亥 陰 淨土寺僧正被奉被賜為小兒 大樹惠 加持被向武家之

廿八日戊子 晴 雨降

廿九日己丑 晴

今日又勅書并御願句一座被下之付進呈

增仁僧正准后所望事書送結之自是之付進呈以右中并許

愚管記 第五

二十六

之御書被下此事之及度之不才之身宅招傍人之嘲弄也為

廿日庚寅 晴

今晚填星犯在氏角星 如云云所

九月大

一日辛卯 雨降

二日壬辰 蒼天快晴

三日癸巳 晴

頭花中并忠光朝臣以書狀付事領 申云元亨釋書事令淨歟

狀如此為之振之沙汰之被計中者進之申所存也彼書者

本朝高僧傳也如東福寺席開上人 師錄者作書也後醍醐院

并法皇御代正慶、此後上人入大藏、被り天下に申す、未  
及所沙汰上人又圓寂、而為彼中子因通寺住持、今降又遊先  
師、志を執申、彼上人事先公御所依ふ、後仍彼邊、才ふ又子細  
變化、同此書事、殊加詞、入、中相、存、也  
自今日三ヶ日念誦

五日乙未 晴及晚雨降

元亨釋書事注進中詞

元亨釋書可被施行天下、我否事

漢家雖有三代、傳古來、未見釋門

通史、處適有傑出、手力貽將來

愚管記 第五

二十七

規範尤、庶幾、若、被、入、大藏、案何

事之有乎、此上事宜在時宜矣

七日丁酉 晴 今夕太白犯房宿、二星、一寸許

八日戊戌 陰 警戒高、食、如例

是日故宮、如、政所、正忌也、於、之、福、寺、修、法、之、讚、如、例、身、余、記、也

九日己亥 晴有強句無

平座、上、御、坊、域、中、納、主、後、方、各、議、後、小、路、宮、如、殿、有、少、納、也

平棟、有、并、右、中、并、行、時、朝、名、右、少、并、行、如、手、集、入、也

十日庚子 晴

十一日辛丑 晴 向、如、橋、拾、果

十二日壬寅 終日陰、申、刻、雨、降、即、止

十三日癸卯 陰及晴、雨、降、不及、濕地

十四日甲辰 雨降

先母、移、石、自、介、日、三、ヶ、日、參、籠、山、野、社

十五日乙巳 自、新、前、雨、降、已、刻、以後、屬、晴

今夜、太白、凌、犯、心、宿、中、央、星、一寸許、也

十六日丙午 晴

移、石、被、至、向、從、山、野、社

十七日丁未 晴

十八日戊申 晴

愚管記 第五

二十八

自禁裏、被、下、所、書、來、廿二日、所、鞠、之、事、仕、中、也、之、存、知、也

了

十九日己酉 朝、來、雨、今、初、休、終、日、陰、晴、又、雨

廿日庚戌 晴

廿一日辛亥 晴、自、少、雨、降、雨

廿二日壬子 終日雨降

廿三日癸丑 及晚、屬、霽

所、鞠、昨日、依、雨、延、引、之、為、今日、之、電、被、仰、下、之、方、俄、來、之、凡、降、雪

人、終、日、所、沙、汰、更、煩、之、時、分、退、也

廿四日甲寅 晴、今夜、太白、犯、天、江、星、一寸許、也

自禁裏有御書明後日又奉<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>下申<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>降<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>常

廿五日乙卯 晴 待哥加例

廿六日丙辰 晴

造太神宮内宮正殿寸法元亨康永為案營作寸法超過本式

主<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>案<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本式<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本例<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>役

夫<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>不足<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>并<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>勅

問<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>

廿七日丁巳 申刻以後陰

造宮事今日注進申<sub>レ</sub>詞如此

遷太神宮正殿寸法事元亨康永加增<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>頗<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>連<sub>レ</sub>儀<sub>レ</sub>武<sub>レ</sub>帳

愚管記第五

二十九

太神宮事有增<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>主<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>增<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>決<sub>レ</sub>官

占<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>不足<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>均<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub>配<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>勅

裁<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>蹤<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>記

任<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>裁<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>互<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>矣

廿八日戊午 晴 冬小野社

廿九日己未 雨降

卅日庚申 陰晴不定風頗吹

十月小

一日辛酉 晴陰不定時<sub>レ</sub>陰<sub>レ</sub>為

平<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>坊<sub>レ</sub>域<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>納<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>束<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>隆<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>納<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>棟<sub>レ</sub>有

左少辨付<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>主<sub>レ</sub>

二日壬戌 晴

難<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>位<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>息<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>童<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>庭<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>裸<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>賀<sub>レ</sub>茂<sub>レ</sub>敏<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>音<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>等

東<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>也

三日癸亥 晴

四日甲子 陰及晚小雨降終夜不休

五日乙丑 晴 今夜太白<sub>レ</sub>龍<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>斗<sub>レ</sub>星<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>

六日丙寅 陰

七日丁卯 晴

梅尾道辨上人<sub>山本房</sub>左大將連枝 來余相<sub>レ</sub>謁

愚管記第五

三十

四箇<sub>注宅院</sub>勝<sub>宅院</sub>持<sub>校事</sub>申<sub>付</sub>增<sub>仁</sub>僧<sub>正</sub>了<sub>事</sub>願<sub>以</sub>狀<sub>申</sub>送<sub>之</sub>

八日戊辰 晴

府<sub>食</sub>受<sub>戒</sub>真<sub>言</sub>念<sub>佛</sub>等<sub>加</sub>例

仲<sub>我</sub>法<sub>印</sub>東<sub>金</sub>對<sub>面</sub>東<sub>寺</sub>學<sub>以</sub>隨<sub>分</sub>願<sub>夢</sub>也

九日己巳 陰日雨降

禪<sub>尼</sub>被<sub>奉</sub>新<sub>殿</sub>今<sub>夜</sub>被<sub>宿</sub>

十日庚午 陰

禪<sub>尼</sub>被<sub>宿</sub>

十一日辛未 陰日冬雨降之隙

十二日壬申 雨降

十三日庚酉 天陰屬雷

今程仁本居京大夫入道死去

十四日甲戌 晴入霜雨降

十五日乙亥 雨降自申刻見日景

十六日丙子 晴

十七日丁丑 晴

十八日戌寅 晴

泰山聖社陽詔之次進入寺本見紅糸頗有光與

子刺地震有聲

十九日己卯 晴

愚管記第五

廿日庚辰 晴

廿一日辛巳 晴朝日雨灑風頗吹

廿二日壬午 晴

廿三日癸未 晴 自今日之十日會福

廿四日甲申 晴

廿五日乙酉 晴 詩歌如例

廿六日丙戌 晴

廿七日丁亥 雨降

廿八日戊子 晴

廿九日己丑 終日天陰時小雨灑

十一月大

一日庚寅 陰

所曆奏上卿不冬付内侍所之司馬行知院記

早旦泰山野社 今歲祥侶誨韓愈文集

二日辛卯 晴

三日壬辰 陰及晚雨

四日癸巳 晴

五日甲午 雨晴

泰山修理權大夫入道俗名國清為征伐南方引率東國大勢上洛

近日入洛之徒六十年間集仕南方月卿之客大略之陽洛

愚管記第五

三十二

之前源大納言通冬卿已入幕

六日乙未 相間雨降及晴見日景

今日泰山入洛直向將軍亭

七日丙申 晴

自禁裏社下卿書京官除目執筆之令未動之也今入洛

之申 為恐

八日丁酉 陰相間雨及晚雨

所食更裁如例 今武家南方征伐得宅

九日戊戌 陰 為使者於泰山上洛臨重中仰也



十日己亥 雨澤

十一日庚子 晴 韓文談載

十二日辛丑 晴

十三日壬寅 晴

十四日癸卯 晴

十五日甲辰 漲入夜雨降月能不正現

十六日乙巳 雨澤

增仁僧正來余對面先向富山許中後語

十七日丙午 陰

入夜四條中納金來余對面

愚管記第五

三十三

十八日丁未 晴

十九日戊申 晴相問陰

吉田然也余奉幣中後也

廿日己酉 晴

韓文海談中後賦一絕題燈火也

廿一日庚戌 雨澤

廿二日辛亥 晴相召白雲飛友

京官除日來廿八日<sub>三</sub>執事西園寺大納言<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>就<sub>二</sub>洞院大納言<sub>一</sub>種<sub>二</sub>有<sub>一</sub>被命名不甘<sub>二</sub>趣也<sub>一</sub>西園寺<sub>二</sub>父入道<sub>一</sub>國<sub>二</sub>說<sub>一</sub>就<sub>二</sub>其除<sub>一</sub>不<sub>二</sub>被賜<sub>一</sub>所<sub>二</sub>詮<sub>一</sub>故父子不快<sub>二</sub>台<sub>一</sub>於事

如此<sub>二</sub>就<sub>一</sub>等<sub>二</sub>就<sub>一</sub>其除<sub>二</sub>不<sub>一</sub>被賜<sub>二</sub>所<sub>一</sub>詮<sub>二</sub>故<sub>一</sub>父子不快<sub>二</sub>台<sub>一</sub>於事

廿三日壬子 初向小雨未起局晴

大原野祭奉幣如例

今夜太白犯災星<sub>二</sub>五ヶ大夏一也<sub>一</sub>情ノ

廿四日癸丑 晴

自入道相國許除目問事種<sub>二</sub>有<sub>一</sub>其命西園寺大納言<sub>二</sub>執事<sub>一</sub>勤仕甚<sub>二</sub>不<sub>一</sub>當<sub>二</sub>雖<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>之<sub>一</sub>更<sub>二</sub>中<sub>一</sub>流<sub>二</sub>金<sub>一</sub>于<sub>二</sub>今<sub>一</sub>多<sub>二</sub>沙<sub>一</sub>決<sub>二</sub>動<sub>一</sub>在<sub>二</sub>信<sub>一</sub>思業<sub>二</sub>之<sub>一</sub>為<sub>二</sub>公<sub>一</sub>事<sub>二</sub>凌<sub>一</sub>進<sub>二</sub>扭<sub>一</sub>梅<sub>二</sub>參<sub>一</sub>其<sub>二</sub>執<sub>一</sub>也<sub>二</sub>廻<sub>一</sub>里<sub>二</sub>業<sub>一</sub>隨<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>神<sub>二</sub>可<sub>一</sub>據<sub>二</sub>試<sub>一</sub>

愚管記第五

三十四

中<sub>二</sub>返<sub>一</sub>者

廿五日甲寅 晴 詩歌如例

廿六日乙卯 晴

小兒有魚味事依舊左少將季村役送<sub>宗範</sub>長侍<sub>為俊</sub>經<sub>重</sub>女房<sub>於</sub>庵中<sub>傳</sub>余<sub>余</sub>卿<sub>之</sub>每事<sub>如</sub>恒

廿七日丙辰 晴

今夜大理卿申慶先廳始<sub>二</sub>冬<sub>一</sub>禁裏仙洞并<sub>二</sub>開<sub>一</sub>白亭<sub>二</sub>

廿八日丁巳 晴

廿九日戊午 晴

卅日己未 晴

十二月小

一日庚申 晴

韓文講談

二日辛酉 陰入霜雨降

三日壬戌 雨降

四日癸亥 朝間雨止即晴

五日甲子 陰

今日武將并東園勢之進發南方之由也風之亦延引之

六日乙丑 霜來雨今外屬晴

七日丙寅 晴

愚管記 第五

三十五

自西園寺大納言平以先時繪叙在文部外侍借之即卷之  
了除月明後白之

八日丁卯 晴陰不宅

高倉如例傳不來之旨也或幸也

九日戊辰 晴

東宮除目一款儀也執事西園寺大納言實俊卿後關二條外  
関白祓儀於鬼間被内使申文之先祝之勸入殿六位外記  
抄基關官依而文迄結著

十日己巳 晴陰不宅

去夜除書到未披見之書有不吉事也

十一日庚午 陰自曉更雪降積地亦盈寸

自西園寺御帶不返賜之

十二日辛未 陰入款晴陰不宅時雨降

終款有和淨連句興

十三日壬申 陰

十四日癸酉 自款前雨降

十五日甲戌 陰

十六日乙亥 晴 自今日之夕日愈福

十七日丙子 晴

十八日丁丑 晴

愚管記 第五

三十六

十九日戊寅 陰

今日正夷大將軍率大軍發向南方之今先進發東

寺一あり進為之

廿日己卯 陰晴不定微雪密發交降

廿一日庚辰 陰 今款武家引進貢之

廿二日辛巳 晴陰不宅時白雪飛散

廿三日壬午 陰

六条小堂有若袴子家略儀也今武將自東寺進發攝

抄尾評之

廿四日癸未 晴陰不宅

廿五日甲申晴

詩歌加例 今秋勅撰返納為遠外各持系之、後中愚詠  
云有被撰入之

廿六日乙酉晴

廿七日丙戌晴

廿八日丁亥 陰晴不定时、雪散

酉刻軋方有火事、お局、雪、梶井、お坊、以、知、訪、中、了

廿九日戊子晴

愚管記第五

三十七

愚管記 第五

愚管記 第六

文學博士坪井九馬三

校訂

日下 寛

延文五年 庚子

六月七日元亨釋書施行事

年廿九

延文五年 庚子

正月大

一日己丑 雨降

自舊年依有歡樂氣四方拜水亦冬齒園如例

愚管記 第六

一

節會内并西園寺大納外并万里小路坊城為中納右兵衛督  
今日開白ふ被出仕不知其故

傳聞事遲問及天明被行節會先被宣下警國事

兵革之事先記如此但舊年尤有沙汰事也相當年始

頗不快也元日節會以前被行公事案先規頗遲延

警國事職事伴詞如此

依兵革三開警國令付國司

二日庚寅 晴

齒園如例 頭左中并來

三日辛卯 陰

齒園如例 左大史等實來

四日壬辰 晴 年宵沐浴如例

自禁裏被下御書白馬節會之冬仕次將又一人之沙汰迄

中被作下出仕事自舊年氣亦中供次將事之伴作季村中

令中常

五日癸巳 雨降

大外記師茂相居來給白麻十帖如例年

自禁裏又被下御書節會參仕事猶申子細次將季村中

日之梅香之令中

六日甲午 晴

愚管記 第六

二

敘位儀傳心兵革之事先記我如此

七日乙未 陰

白馬節會内辨万里小路中納之仲房卿外并坊城中納之後

賓卿別當時先卿右兵衛督隆家卿等參入

八日丙申 晴

女敘位不及沙汰

九日丁酉 晴入敷雨降

萩半許下邊之火事法問信渡右官入道之參宿所

十日戊戌 陰

今日祈始也信防以安信有隆相右行河原被如例

禁裏より被下御書 子細注表

勅書云踏哥以前赤大寺神興阿生より同春寺家より系已  
中領状より然者帝會立樂如例より被行より但於國中程より  
以略れより計より七力盤園中被略より系程より宜程より中平若  
會出仕より又被作下程より子細

十一日己亥 晴

藏人左少辨信基覽政所吉書 立車方違如例

十二日庚子 晴

容より始出向新殿如例多

十三日辛丑 晴

愚管記 第六

三

十四日壬寅 晴 小兒小女亦有裁餅事多より裁

十五日癸卯 晴

十六日甲辰 寒風積白雪散

踏歌宴會内并控中納言基隆外并控中納言仲房俊冬

宰相中將實尚右兵衛督隆家所より三節共被毒累座

出門帳中省暇乗り如去年より

十七日乙巳 陰

今日卷書狀於大樹陣以左忠門尉長重為使お模守仁本中

務少補土岐大膳大夫入道お許右所吉行也

去秋成利月犯填星 一尺六寸 三々填星余當年星也より情

十八日丙午 晴 信ふ定時より雪散

十九日丁未 晴 参小野社 韓文誨談

廿日戊申 晴

廿一日己酉 小雨降

長重油洛大樹省返報お州以下吉行所より畏存より中道者より

廿二日庚戌 細雪雨降除自申刻屬雪

廿三日辛亥 晴

莊子談載自今日始より

入款四條前中納言東

廿四日壬子 或晴或陰

愚管記 第六

四

自今日三箇日念誦今月分所作也

今曉寅刻月犯心宿天子星より寸所より

廿五日癸丑 白日歇より 詩歌如例

廿六日甲寅 雨降

廿七日乙卯 陰

廿八日丙辰 陰 莊子談載

廿九日丁巳 晴 信ふ定時より雪散降

卅日戊午 晴

或者語云南方合騎事於陣中程より有沙汰より但猶穩密れ  
此事觀應以来度より惟有沙汰無慮不仁更不より事行事れ

為事實考天下錫龜諸家象跡不能左右事以莫之

二月小

一日己未 晴 申刻地震

二日庚申 陰入款雨澤

春日祭延引次支平

三日辛酉 陰時見日景 莊子談義

四日壬戌 陰

初年祭依幣料開如先延引大略難被行近近年公事每

年如此

五日癸亥 雨澤

愚管記第六

六日甲子 晴

七日乙丑 自曉更雪降即房書報半許地震

八日丙寅 蒼天快雪 高衣更威如例

九日丁卯 相問晴夕小雨

大原野祭延引次支平 釋奠延引中

韓文海談

有勅問事注意

春日祭奉向并忠光初名華日申領狀

例之系為局注進准持例如此

申詞如此

輕服并奉向春日祭奉為局注進雖有准被於南社各

生例上考尤之役用他并凡但依此一事及祭奠違乱七

就為局注進被准被之案不可有違此宜立時議

十日戊辰 相召小雨自申刻入款晴後雨定

十一日己巳 晴陰不食

十二日庚午 晴

十三日辛未 雨澤

明日為祭也

增仁信正自今夜於禁中被勸金對音之法

十四日壬申 雨澤

愚管記第六

春日祭上卿万里小路中納中仲房卿并控并資定相右近衛

使左中將隆右親長

十五日癸酉 雨澤 自今念誦外

十六日甲戌 晴

賴阿法師奉令勅撰

勅末代教考也

七兄之有子無子

十七日乙亥 晴 自曉陰入款雨澤

十八日丙子 雨澤 莊子談義

十九日丁丑 雨澤

卿子左大納言入通所勞煩盡之申付及之旨以使者訪之恐誤之  
中迄着之

廿日戌寅 晴陰小定時之雨雪交降

左傳談談

廿一日己卯 晴

大原野祭奉幣如例

廿二日庚辰 蒼天快晴

左大史量實奉召前宣談於談云今度勅撰匡達宿祿詠  
再社撰加之繼吉今經境之福氣臨重之

廿三日辛巳 晴 莊子談義

愚管記第六

廿四日壬午 晴入夜雨降 左傳談義

承胤法親王 梳井自今夜於禁中被勅七佛宗師法之兵

華之取此

廿五日癸未 晴

訪乳如例 歌仙一五奉召召所也續歌五十首詠之

泰山聖社

廿六日甲申 晴

廿七日乙酉 晴 風吹

廿八日丙戌 陰時之見日景 莊子談義

以左中并忠光朝臣來談云勅撰乞為終功之案據目出之

所被恩念也且奉末主胎中物忌之旨此間一部有 殿記之  
頗不恥古語此殊非妙之申被仰也仍只今為使臣向撰者  
許之申話之

廿九日丁亥 或晴或陰

韓文談談

今日議定始二條前開白四條大納言有人社供之議定永二  
人永仁年中有生例之

三月小

一日戊子 晴陰小定風吹雪發

二日己丑 晴

愚管記第六

八

今日七佛宗師法結於晴儀之 左傳談義

三日庚寅 蒼天高雲終日多片雪

四日辛卯 晴 左傳談義

五日壬辰 雨降

六日癸巳 陰 坂中許南方有火事大炊所門町邊之

七日甲午 晴

八日乙未 晴申刻已後多雲

高衣更戒如例

庚十三日之有雨幸六條殿牛車之進之申為四條前中納言

有行社仰下之用意之申付之



九日丙申 晴

十日丁酉 雨澤

十一日戊戌 法相半許雨陰

十二日己亥 雨澤

十三日庚子 陰

仙洞御幸六條殿依召進牛車

十四日辛丑 晴

去夜被行小除日久我三位中将具通御任權中納言基隆之其

外等跡昇進任人之少

自今夕念通三々日如例

愚管記第六

九

十五日壬寅 晴

御子左大納言入道去程化界三改差使者於為遠朝旨許吊

之侍從中納言同吊三去程義經召不通三中書侍從是

平康門出達上快同中書侍從懷自今夕移化所三中書門

前三太不穩便事此盪筋中事也

十六日癸卯 晴

宿見實相院花中無多少傷正自去此春龍中社三自是

今日東大寺八幡宮等坐供在公卿新黃門人三

十七日甲辰 晴 左傳談義

十八日乙巳 晴 莊子談義

十九日丙午 晴 韓文談義

廿日丁未 晴

廿一日戊申 陰 坊城中納言來

廿二日己酉 陰 自夕雨澤

廿三日庚戌 自來刻房晴 莊子談義

廿四日辛亥 晴

廿五日壬子 晴 詩歌如例 左傳談義

廿六日癸丑 陰 自夕雨澤

廿七日甲寅 自夜前雨甚降及晡屬晴天

廿八日乙卯 陰

愚管記第六

十

入道相國自去此病惱黃疸 近日猶增氣頗危急三

廿九日丙辰 陰

續歌五十首詠三是損阿法師許三合點

今日村社三

傳聞今夜造太神宮正殿寸法事社行封廟御卜三官寮共

之終式文三余吉三中勸三上卿新中納言具通卿三此

事去奉勸同人三子細見其日記

四月大

一日丁巳 晴

平康門御權中納言後中卿一人三

二日戊午 晴

及晚女房窓に被向洞院入被被入道お園芳に件凡々所  
受に

自今日書始五部大乘經為先公追修報恩也

三日己未 大晴 寫經如昨日

四日庚申 陰 寫經

五日辛酉 或書或陰 寫經

六日壬戌 晴午時許小雨即止 寫經

七日癸亥 晴

去夕入道お園薨春秋七十三以專使相吊並和了

愚管記第六

十一

寫經如り

八日甲子 雨降

先公七廻所忌り也佛經供養一夜別時お例在所書五部  
大乘經先一卷隨出來今日令供養了自去二日五今日光明  
去之念佛寫經お毎日沙汰し今日又齋食受戒お例 雌君  
達光母程お有別供養可

或者云頭左中親お光親お為勅使向洞院大納言亭文  
庫加粒村に更ふ知子細未代に武於事能思量し所及可  
慎ら忍莫にく日來彼父子分敷敷し前大納言實中卿  
と大納言お甘美親にし為被つて有や用被親お以來程供

南山去年出落也

九日己丑 晴

十日丙寅 晴 玄夜月犯填星庚子年七月 望司天臺本に

十一日丁卯 晴 韓文海談

十二日戊辰 雨降

十三日己巳 雨脚不暫休

十四日庚午 晴

女房有陰服事依入道お園事也

十五日辛未 晴 有寫經事

伯二位依申請唐鞍並し近衛使に料に

愚管記第六

十二

十六日壬申 朝官晴及晚雨降

今夜社門小陰目し人注裏

權大納言藤原兼定 權中納言藤原保元元前未議

泰議平親顯元藏人右大弁

自餘雜任不能注し

從一位源 宗明

藤原師良

正三位藤原實名

同 定宗

同 隆卿

正二位源 重資

從二位藤原忠基

同 為明

從三位藤原實興

四品以下略

藏人頭 左近中将藤原隆右

群 近 權大納言藤原家信

十七日丑酉 雨降及晚属晴

賀茂祭也手束使左少將資方朝占

十八日甲戌 晴

傳關内大臣辭退大将

十九日乙亥 晴

廿日丙子 陰

吉田祭也余奉幣申被也

愚管記 第六

十三

廿一日丁丑 雨降

廿二日戌寅 晴 左傳談義

廿三日己卯 朝日晴及晚陰

莊子談義

廿四日庚辰 雨降

自今日迄日愈涌如例此次寫經 自今日於等持院行八海

三武家雖不上洛每事如去年三武家所以下之每記

廿五日辛巳 雨降 詩經如例寫經如時

廿六日壬午 陰 聊之上氣

廿七日癸未 晴

廿八日甲申 晴 韓文講談

武家八海今日結願三施主依金上洛子省略者座三卿

女房有者事

廿九日乙酉 晴

女房有者事

卅日丙戌 陰

閏四月小

一日丁亥 雨降 日出不正現

二日戊子 晴

新千載集 奏覽御本今日申出以流布本雖寫為考校合

愚管記 第六

十四

也

三日己丑 雨降 莊子談義

四日庚寅 小雨

五日辛卯 終日雨降

六日壬辰 晴 新千載集付頭并令返進記讀歌五十首詠

七日癸巳 晴

八日甲午 陰 齋食受戒如例 寫經 兼奏經方四

九日乙未 晴

十日丙申 晴

十一日丁酉 晴

十二日戊戌 晴

紀州凶徒志沒官軍乘勝之天下大慶也

十三日己亥 晴 莊子談義

十四日庚子 晴 相間有字經事不記大衆經

十五日辛丑 雨降 今相又字經六高日之書

十六日壬寅 陰 月蝕不正現化物能見

十七日癸卯 晴 自今三之日念誦如例

十八日甲辰 陰

十九日乙巳 晴

廿日丙午 晴

愚管記 第六

十五

廿一日丁未 雨降

入夜四條前中納言來

廿二日戊申 晴陰不記

今日紫野令官祐政申位記正一位元從三位頭弁志光朝臣奉

仍中院中納言具通所為上卿之依之下病事之此事也

廿三日己酉 晴 寫經如例

廿四日庚戌 晴

頭弁志光朝臣為勅使來云云日民間有疾疫者之令之申事也

改元事之沙汰將又武家陣中合戰未決雌雄之時元攝

沙汰有之斟酌外之計申者 余申云 注表

依疾疫改元先例不能左右但武家在陣合戰未決雌雄之時  
被改元攝之案於之有猶豫於此上事宜在時宜乎

廿五日辛亥 晴 訪經如例

廿六日壬子 雨降

廿七日癸丑 晴

廿八日甲寅 晴

廿九日乙卯 晴 韓文談義

五月大

一日丙辰 晴

河州凶徒城三之所責落之天下大慶也於今之桶本未坂城

愚管記 第六

十六

二日丁巳 終日雨降

長講堂掃除人夫十五人召進之四條前中納言為事自

仙洞被作下

三日戊午 晴 人六十人召又召進之 莊子談義

四日己未 晴及晚陰

今日遣專使於大樹陣賀河州靜謐事之次相模守 畠山

出役因賀作也右以之狀作之使在東一尉為佐 為重子息

五日庚申 雨降 雷鳴

續考無於仙光之朝臣慶運法事等也

六日辛酉 雨降

依天下病事未十日之禮月四角四塚祭一座分三沙汰之申以  
四角前大納言被作下之申知申之事之儀一座分料是之申之

七日壬戌 雨降

八日癸亥 雨降雷鳴

齋食受戒如例寫經又加例

九日甲子 陰時雨降

明日四角四界祭延引之祭料不足之處也

十日乙丑 時雨降

愚管記 第六

楠木赤坂城沒落之

十一日丙寅 雨降

十二日丁卯 終日雨降

雨中徒然之餘此言雨初起之時有書進之卷頓阿法師許

合點五十首丙午不首合點頗多被任用者也

十三日戊辰 雨降

十四日己巳 晴入夜雨甚降

四角四塚祭之為明後日申沙汰之為在方分申四角大納言不送之

十五日庚午 晴 莊子談義

十六日辛未 晴 依天下疾疫禮月四角四塚鬼氣祭

四角 良前左未權大夫在實朝右

四塚 會政 權屠博士清國

祭料沙汰人、執柄 余

忠光朝臣右一座為座内之沙汰之

今日五條天神被授申位記之

從二位之 元正四位下

職事頭并 上卿 按察大納言之

十七日壬申 陰

洞院家門事已終下勅裁於前大納言實之之左馬寮丹後

國より為大納言實處分之但未治宅之

愚管記 第六

十八日癸酉 晴陰不宅

十九日甲戌 晴 一時曉太白彗星二星合之申月天彗本之

廿日乙亥 晴

廿一日丙子 陰

廿二日丁丑 雨降雷鳴 續前五十首詠之

廿三日戊寅 晴雨降

廿四日己卯 晴

廿五日庚辰 晴 詩歌如例

自今日三箇日念誦如例

廿六日辛巳 雨降雷鳴

吳前陰陽以定秀朝臣

神權天文博士有世朝臣

龍華宮内權少輔俊忠

山崎曆博士在弘

四角大納言 別當

十八

廿七日壬午 相間雨降即屬雪

今日武家立居時明日入洛之 入夜河亞相實良入京

有被書談事

廿八日癸未 陰晴不定

武將入洛近引之風聞之雪及晚以今夜入洛必定之

中少仍予留之於之東河院是日見武將華甲曾相模

清氏初自巳午お役軍清一

廿九日甲申 晴

差使者於武家入洛各為珍重之申賀之相模守并土岐大儀

大夫入道許同作此記

愚管記第六

卅日乙酉 晴 續哥三十首探題詠

六月

一日丙戌 雨降雪停

二日丁亥 晴

傳聞前内大臣公清公出家之日來水徑所勞危急之狀也

三日戊子 晴

四日己丑 晴

五日庚寅 晴

六日辛卯 晴

今夜開開 解陣 上卿權中納言仲房卿唐冬武將進發

七日壬辰 晴

元亨釋書院之事今被作之

宣旨案

獻上

宣旨

平安城廣脇圓通禪寺

住持臣僧令濟等申請特

蒙 天裁准擬本朝支那

軌獨席開先師所編元亨

愚管記第六

揮書入大藏可流傳天下旨

頒賜官府揚國家美華

發諸宗幽光事

作依請

右 宣旨早可令下知給之狀如件

六月七日 左中辨忠光奉

進上 按察大納言殿

八日癸巳 晴 文成并字經如例

九日甲午 晴

德大寺入道内府亮春秋四十九昨日午刻之卷子使於中納

十餘日

十日乙未 雨降

十一日丙申 陰入夜雨降 寅刻許近街町邊有火事云々作

天々各程消

十二日丁酉 陰小雨 有續考與五十首

十三日戌戌 晴

十四日己亥 陰

十五日庚子 陰

十六日辛丑 陰

十七日壬寅 晴

愚管記 第六

十八日癸卯 晴

十九日甲辰 雨降 淨妙寺殿內忌日也佛經供養於尋津

眼房行也供料送云々

廿日乙巳 晴

廿一日丙午 雨降即屬晴天

廿二日丁未 晴未刻許雨降即晴

入款增仁僧正末考加持令招引也近日諸人病惱之官為撓災也

廿三日戊申 晴

今夜余有除服事云々十七日老母祿后婦入滅云々也

廿四日己酉 晴

故左大臣殿御忌日於三福寺法事續如例余為聽聞行向也

廿五日庚戌 雨降 晴如例

傳聞左馬寮丹後國等名字云々被下勅裁於西大納言

廿六日辛亥 晴

為藏人佐嗣房奉行吉田社御位記事社務云々云々御位外

云々計申老任社家中請被授申祚位云々案云々有子細云々計

中

廿七日壬子 晴

禁裏泉殿出來云々以并沙汰進供御二案前聞白當開白以下

程供云々

愚管記 第六

廿八日癸丑 晴

廿九日甲寅 晴 寫經如例

卅日乙卯 晴 朝官寫經

六月後如例

入款勘<sup>〇</sup>少強町邊有火事 官列

延文五年 秋分 九月卅日轉左大臣

延文五年

七月小

一日丙辰 雨降



二日丁巳 陰

一昨日吉田社被奉授正一位、職事藏人佐翊房申以法、  
上卿按察大納言下知、

三日戊午 晴

河州凶徒出現、中有其少

四日己未 晴 坊城申納言奉

五日庚申 陰

六日辛酉 雨降

お授吉清氏桐右今日進發河州、お伴官軍濟、馬、

七日壬戌 雨降

愚管記 第六

二十三

乞巧奠如例、雨、時設中門下、此等年主礼、間以雨御

之陳如所記、

法勝寺所八講式日延引自今日被始行、

八日癸亥 陰 作善如例

松林院僧正懷雅來為所八講證義上洛、中語、

九日甲子 晴

今晚焚藏奉星二合星<sup>二天五守</sup>之由司天卷本、可慎、

十日乙丑 晴

十一日丙寅 陰入秋小雨

十二日丁卯 小雨下

十三日戊辰 陰

世上事有種、説子細難述、事端所詮南方背向、軍有要  
議、此中有生聞、為尋、子細判官入道導譽、為使去

今朝午向、

十四日己巳 晴

今夜武家邊、分衆動、然、而、其、殊、事、分、區、故、併、天、魔、所

為、

十五日庚午 晴

自晚陰、武邊又物忌、

十六日辛未 陰入秋雨降

愚管記 第六

二十四

武邊、群動時、變化、係、魔、所、為、

十七日壬申 雨降

今日武邊殊火急、然、又、區、故、是、保、仁、本、右、京、大、義、長

省、限、種、被、相、省、

十八日癸酉 晴

自古、夕、不、有、殊、事、中、風、吹、今日武邊靜謐、中、聞、及、

自、夷、燭、之、程、以、外、衆、動、散、半、許、仁、本、一、類、皆、沒、落、故、宿、而、

四、五、之、所、同、時、尖、上、武、將、潛、逃、出、赴、化、所、中、風、聞、

十九日甲戌 雨降

今朝武將、其、具、お授吉清以下、軍、在、任、本、屯、

廿日乙亥 雨降

廿一日丙子 晴

廿二日丁丑 晴

廿三日戊寅 陰入夜風雨甚

廿四日己卯 陰晴少雲入夜又雨降

廿五日庚辰 晴 詩哥如例

廿六日辛巳 晴

廿七日壬午 晴 七晚宮列女房平產男子

廿八日癸未 雨降

廿九日甲申 晴夜半雨降

愚管記 第六

八月大

一日乙酉 朔日雨降即屬吉

告朔之風俗如例年

二日丙戌 陰 自禁裏 仙洞被下沙返

三日丁亥 雨降

四日戊子 陰入夜雨降

五日己丑 陰日雨降

六日庚寅 雨降不整休 終日不寧經事

七日辛卯 雨降

愚管記 卷六

持齋如例係不來之官不更我光明未之念佛如如何

九日癸巳 晴

十日甲午 陰

十一日乙未 陰

十二日丙申 雨降

十三日丁酉 朔日雨降自是科屬吉

十四日戊戌 晴

今晚彗或犯東井才五星二寸并鉞星四寸彗或彗星二星各

自古此相續休降雨甚消之象今晚猶犯二人許之同

愚管記 第六

二十六

主之思之情之

十五日己亥 雨降

放生會上卿不冬泰議親顯初在左少辨信苗朝臣今度

事下以下雖系向祚人依訴訟團難之官宜隨海之

十六日庚子 雲

十七日辛丑 晴 今晚彗星犯鉞星之

十八日壬寅 晴 先途事之以事書利之狀今中家武事之

十九日癸卯 晴

廿日甲辰 晴

惠詠五十首卷額阿波師令合點他行方第廿五

廿一日己巳 晴

今晚月凌犯金星九寸所同犯火星二寸所同犯水星五寸所先後

相善八々衆夏重也之規頗趣近尤之恐

廿二日丙午 晴 坊城中納之衆

廿三日丁未 晴

廿四日戌申 晴

廿五日己酉 晴 諸君如例

廿六日庚戌 晴 坊城中納之衆

廿七日辛亥 晴 入夜雨降

惠管記第六

二十七

廿八日壬子 雨降

廿九日癸丑 晴 今秋社行傳事

廿日甲寅 晴

九月大

一日乙卯 晴 日野宮在來

二日丙辰 雨降

三日丁巳 雨降

四日戊午 晴 陰不定時小雨漢

五日己未 晴 子刻許札方有火事

六日庚申 雨降

昨日宣光門院崩御年六十四

七日辛酉 或晴或陰

八日壬戌 晴

作善如例 本幡僧社來受戒就小布施

九日癸亥 晴 有耕句與

續歌五十首第廿一人之詠

十日甲子 晴

十一日乙丑 晴

十二日丙寅 晴 晴小定時小雨漢

十三日丁卯 晴

惠管記第六

二十八

有詩音與短冊五十首為貴臣辰也

傳竹洞院大納言實夏卿之為家勢之中一時武家執奏

子細書之尋記

十四日戊辰 晴

十五日己巳 晴 入夜暴風雷雨

十六日庚午 晴 陰不定

十七日辛未 晴 陰不定

十八日壬申 晴 泰聖廟

十九日癸酉 晴

廿日甲戌 晴

四九七

十七日庚午

今夜任大將除目也左洞院大納言實夏卿右西園寺大納言實俊卿權中納言時光持能連使別面此外一向雜任並叙位滿島

廿四日丁丑

以藤原為勅問事改元事申詞後日注也

十二月小

三日丙戌 入殿左大將居來被着不直衣白服假紫束也

六日己丑 禁裏卿氣由日東風吹此官始發卿以吹喉邊成

腫

愚管記第六

三十一

愚管記第六

三十二

廿二日乙巳 今日有勅令事卿上氣未冬卿更命以官年始公

事示有出卿小桐拜後集殿上洞醉叙位不有也之為

卿振外賀茂臨時祭而之有卿撰儀束赴庭座小陣小何

振有有沙汰外計十者以左中為勅使

廿四日丁未 申詞今日付以并多原表被の人一一一一条お実

白二条前開白開白下官右大臣

申詞如此

一少桐拜事奉出卿去不被停心哉

一卿集事之為同外此

一殿上洞醉事為興赴上被省略之案有卿事外

一敘位事本年不被り一條先有沙汰外能奉出卿之女房屬中下文例就此先記有沙汰乎  
一頃茂臨時祭事束赴小陣不被省略外此上宜立時儀矣

愚管記第六

日本漢文史  
籍叢刊

第二輯

編年體

[General Information]

□ □ =14664036

SS□ =14664036